

運命を覆す伐刀者

蒼空の魔導書

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【魔力】・・・それは千人に一人が生まれながらにして宿し、その総量は決められていて増えることは無くその人間の持つ運命の総量とも言われている。

高い魔力を持つ伐刀者は運命に立ち向かうチカラがある、では低い魔力の伐刀者は運命に打ちのめされるしかないのか？

今、ここに運命を覆そうと進み続ける少年の物語が幕を開ける！

目次

学内選抜戦編

運命が変わる戦いの幕開け	1
真田幸斗の実力	11
七星剣武祭に懸ける想いと決着	24
あの頃の悪夢と延期された試合の再開	42
風間重勝(序列一位)と東堂刀華(序列二位)の関係	56
如月兄弟との邂逅と重勝の裏切りの理由	65
ステラ・ヴァーミリオンの憂鬱	214
選抜戦第十戦目開幕!	76
Aランクとは?	104
佐野涼花の絶対的価値観(アイデンティティ)	118
一流の戦術家の条件は!	131
友の為に誓った決意	142
翻弄される紅の淑女	159
空中戦	171
行き着いた答えと終焉の光	189
死闘の終結、未来(さき)へと向けて	214
ライバル、それは・・・【強敵】と書いて	

て【とも】と読む!	229
紅蓮の皇女VS蒼雷龍	242
伊達政和の伐刀絶技	257
政和の頼み事と第十六戦目の対戦相手	269
契約と突き進み続ける意志	290
殲滅鬼VS深海の魔女	308
氷獣群	321
真の強者	343
雨の中の決着	361
蒼穹の激闘	374
月花の錬金術師VS雷切	386
佐野涼花の体技、東堂刀華の一年間	

402	戦場の叫び(ウォークライ)
	抜き放たれる【雷切】、限界ギリギリの
	一秒間
	【最弱】の邂逅
	強さの源泉と自分だけの剣
	傭兵団西風壊滅事件の真相
	刀華の独白、明かされる想い
	堕ちた記憶とダチの拳(こぶし)
524	
	動き出す者達
	始まる悪意渦巻く騒乱
	黒鉄一輝の夢
591	
568	
551	
422	
439	
459	
473	
501	
513	

反撃の狼煙

608

重勝、禁忌（タブー）を犯す？選抜戦第

戦鬼の叫び（オーガクライ）発動！真なる攻撃力EX!!

737

十九戦目開幕！

620

【知らない】という苦痛

761

土竜の手（モール・ザ・ハンド）

幸斗と重勝の邂逅秘話・・・そして遂に

634

決まった、選抜戦最後の対戦カード！

【二撃】の戦い、殲滅鬼VS空間土竜

780

649

未来の保証

807

幸斗絶体絶命、最速の如月瞬煌流体術

鳥は何故空を飛ぶのか？

830

天空より振り下ろされた凶爪、幸斗敗

空戦騎士の反逆譚（トリーズナリイ）その1

849

北か!?

696

空戦騎士の反逆譚（トリーズナリイ）その2

862

届けられたダチからのメッセージ！幸

の2

862

斗、今こそ本気を出す時だ!!

708

空戦騎士の反逆譚（トリーズナリイ）その

708

の 4	空戦騎士の反逆譚(トリーズナリイ)	の 3
898	そ	876

学内選抜戦編

運命が変わる戦いの幕開け

《伐刀者（ブレイザー）》、自身の魂を武装《固有霊装（デバイス）》として顕現させ、魔力を用いて異能のチカラを操る千人に一人の異能力者であり、最高クラスならば時間の流れを意のままに操り、最低クラスでも身体能力を超人の域に底上げできる。

とはいえ大きなチカラには相応の責任が伴う。その一つが《魔導騎士制度》である。

魔導騎士制度とは国際機関《国際魔導騎士連盟》の認可を受けた伐刀者の専門学校を卒業した者にのみ免許として《魔導騎士》という社会的立場を与え能力の使用を認めるというものだ。

この日本にはその伐刀者の専門学校は七つ存在する、九州沖縄地方の《文曲学園》、中国四国地方の《廉貞学園》、近畿中部地方の《武曲学園》、北海道の《禄存学園》、東北地方の《巨門学園》、北関東の《貪狼学園》、そしてここ南関東の《破軍学園》である。

「僕の勝ち、だね」

「……」

『き、決まったあああ！あつけなく決まってしまったあああ！学園【序列第五位】の《速度中毒（ランナーズハイ）》をもあつさりとして黒鉄選手は土つかずの九連勝！いよいよ史上初のEランク以下での七星剣武祭代表抜擢が現実味を帯びてきました！』

現在ここ破軍学園の第五訓練場では年一回開催される最強の学生魔導騎士を決める武闘大会《七星剣武祭》の代表選手六名を決める為の《学内選抜戦》の真つ最中であり、たった今黒髪の男子生徒——《黒鉄一輝（くろがね いつき）》がバトルフィールド上の石板の地面に叩き付けられて仰向けに倒れているナックルダスター型の霊装を装備したブルマ姿の女子生徒《兎丸恋々（とまる れんれん）》の喉元に自身の黒い日本刀型

の靈装《陰鉄》の切っ先を突き付けて試合を決していたところだった。

実は破軍学園は昨年まで代表選手の選抜は「能力値」で選抜をする「能力値選抜」だったのだが、今年新しく就任した理事長の「完全実力主義」の方針により能力値選抜は廃止となりこのような戦闘力がはつきりと出る学内選抜戦をする事となり、破軍の学生の誰もが七星剣武祭に出場するチャンスが与えられたのである。

その為、極稀に低ランクの学生から一輝のような能力値だけでは計れない隠れた実力者が頭角を現すこともあるのだった。

そして今また一人、運命を覆し得るであろう低ランク伐刀者が頭角を現す――

「よっ！姫ツチ、団が潰れて以来だな」

観客スタンド最上階にて手摺りに両手を置いて無言で観戦をしているピンクブロードのショートボブの髪で身長は平均より低めだがスタイルがまあまあ良く何故か左腕に多数の手拭いを巻いて身に着けている不機嫌そうな雰囲気的女子生徒《佐野涼花（さの りょうか）》に長身瘦躯の黒髪で鼻筋に横一本の傷痕がある男子生徒《風間重勝（かざま しげかつ）》が歩み寄って来て気さくに声をかけた。

「久しぶりね《漆黒の剣聖》・・・いや、それともこの学園で付けられた《裏切り者の序列一位（エース・オブ・ビトレイアー）》と呼んだ方がいい？」

「ハハハハハッ！まったく随分と不名誉な二つ名を付けられつちまったもんだな、おかげで俺は序列一位なのに学園中の嫌われ者だぜ、ハハハハハッ！」

「去年の七星剣武祭を無断でサボったって聞いたわよ、学園中の期待を責任感も無く裏切ったんだから嫌われて当然ね」

「ハハハハ、手厳しいな」

二人はどうやら知り合いのようだ、涼花が今年入学したばかりの一年生で重勝が三年生ということや今の会話から破軍に来る前からの知り合いのようである。

「それよりも次の試合、【幸斗】の番だろ？相手はあの《紅蓮の皇女》サマみてーじゃねーか」

「そうね・・・まあ、幸斗なら問題ないわね」

「Aランクが相手だというのに即答だな・・・」

「《落第騎士（ワーストワン）》との模擬戦の動画を見たのよ、あれなら幸斗の敵じゃないわ、幸斗は油断はできないって言っているけれどね」

伐刀者の最高ランクはAランクだ、このクラスはもう十年に一人の天才と呼ばれ歴史に必ず名を遺す英雄になるという規格外なランクで今重勝が言った紅蓮の皇女《ステラ・ヴァーミリオン》は保有する魔力が通常の三十倍でしかも使った先からすぐに魔力が回復するという怪物伐刀者だ。

そんな相手に対して涼花は「問題ない」と即答したのだ、つまりそれほど幸斗という伐刀者の実力を涼花は評価しているということだ。

「・・・まあ、アイツは落第騎士よりもランク詐欺と言ってもいいくらい人間やめているとしか思えない奴だから・・・この数年間でどれだけ実力をつけたかお手並み拝見とさせてもらうぜ、幸斗」

「本当に調べなくていいのステラ？」

「いいの、結局のところ、この戦いも、そして七星剣武祭も、全てアタシ達が強い魔導騎士となるための訓練のようなものでしょ？テロリストの伐刀者と相對したとき敵の能力がわかっていることなんて事ほぼあり得ない、だから相手がどんな能力を持っているかと戦えるようにならないと駄目なのよ」

フィールドから引き上げた一輝を青ゲート前で出迎えた鮮やかな赤髪の少女ステラが次の試合の為にバトルフィールドに向かおうとした時に一輝にそう尋ねられるがステラは拒否し一輝は心配そうな表情で黙った。

「心配しなくても大丈夫よイツキ、相手は「Eランク」、もうランクで相手を侮るような事はしないけれどそうそう負ける相手じゃないわ」

ステラは以前一輝との模擬戦の際に「FランクがAランクに勝てる訳がない」と一輝を侮り結果敗北した為に二度とランクの低さで油断をするようなことはなくなったが、それでもランクを基準にしてしまうのだろうかという目の前の落第騎士のような常識外の存

在がポンポンと現れる事などないだろうとも思っているのだろう。

「アタシは絶対に七星剣武祭に出場して貴方との約束を果たすわ、だから絶対に勝つ」
「ステラ・・・」

この二人、実は一ヶ月前に恋人同士になり七星剣武祭の決勝でもう一度戦おうと約束をしていたのだ、ステラはそれに向かって勝ち続けると意気込んでいた。

「それじゃあ行ってくるねイツキ！」

そしていつも通りの自信に溢れる声でそう言い、バトルフィールドに歩き出して行った。

—— やっぱり凄いよステラは・・・でも今回はなんだか胸騒ぎがする、何でだ？

バトルフィールドに向かって行くステラを心配そうに見つめる一輝、ステラの実力を信頼している一輝はいつもなら特に心配もせず笑顔で見送るのだが、剣士としての感か何故か嫌な予感がしていた。

『さあ興奮さめやらぬなか続いて本日の第八試合開始だ！燃えるような髪を揺らしてリングに現れたのは破軍学園唯一のAランク騎士！紅蓮の皇女ステラ・ヴァーミリオン選手だあああ！ルームメイトの落第騎士と同じくヴァーミリオン選手もここまで八戦八勝無敗！無傷どころかまともに試合すらせず威圧だけで勝ち抜いてきた脅威の超新星（スーパールーキー）だ！』

青ゲートから歩いて来たステラが毅然とバトルフィールド上に立った。

そして、赤ゲートから運命を覆す為に進み続ける男が姿を現す――

!!? ……何、この身体を吹き飛ばされたかのような感覚!?

ステラは現れた男子生徒と目が合った瞬間、自分が巨大な鬼の一撃によりカツ消される幻覚を見た。

170cmと少しくらいのあまり高くない身長で燃えるような夕焼け色の髪で前髪

に朱色のメツシユが入っていて両頬に二重三角を模したタトウが彫られていて日本人としてはかなり異質な外見で燃えるような灼熱色の瞳は燃え尽きる事の無い意志を感じさせた。

『続いて灼熱色の眼差しでリングに現れたのはEランク騎士《真田幸斗（さなだ ゆきと）》選手だあああ！真田選手はヴァーミリオン選手と同じく一年生にしてここまで八戦八勝無敗！しかもいままでの試合全てで《伐刀絶技（ノウブルアーツ）》を使わずに一撃で相手をKOしてきて未だに能力は謎のまま！果たして今回その能力の全貌が明らかとなるのか!?期待が高まります！』

赤ゲートから歩いて来た幸斗がステラの20 m前に立ちお互いに睨み合う。

「少しはやりそうねアンタ、今回はまともに試合ができそうじゃない」

幸斗が現れた時は一瞬動揺したステラだったが彼女は一流の伐刀者、向かい合うとすぐに気を引き締めていて今はむしろ目の前の伐刀者に期待をしていた、今までの試合全てで相手の棄権して勝ってきたためにステラは疼いていたのだ強敵との戦いというやつに。

「へっ！そう言うアンタこそガツカリさせないでくれよ・・・そして勝つのはオレだっ!!」

それに対して幸斗は不敵な笑みで自信たっぷりにそう言い返し――

「運命を切り拓け!! 《鬼童丸（きどうまる）》!!!」

自身の霊装である朱い太刀を顕現させてそれを下段に構えた。

「臨むところよ！ 傅きなさい！！ 《妃竜の罪剣（レーヴァティン）》！！」

そしてステラも自身の霊装である炎を纏う大剣を顕現させて構えた、これで両者戦闘準備は万端だ。

『さあ、両選手霊装を出して睨み合う！ それでは… LET' s GO AHEAD（試合開始）！！』

そして試合開始の宣言がされた——この日、運命は変わる！

真田幸斗の実力

試合開始と同時にステラは燃えさかる火炎をドレスのように身に纏い彼女を中心に炎の海がバトルフィールドに広がった。

ステラの伐刀絶技《妃竜の息吹（ドラゴンブレス）》は撰氏三千度という馬鹿げた炎を操る能力で今までの対戦相手は全てその桁外れのエネルギーの威圧感に怖気づいてしまい降参している。当たり前だ、こんなのに挑む事は自ら焼身自殺するようなものである、利口な人間ならば無謀なこととはせずに降参するだろう。

・・・だが、この真田幸斗という男は・・・バカだった。

「うおおおおおおおおおっ!!」

「ええっ!?!」

『おおっと！真田選手試合開始と同時に正面から突っ込んだああっ！』

——アタシ（Aランク）相手になんの魔力強化もしていない生身の突進だなんて・・・やっぱり期待外れだったわね。

ステラは心の底で失望した、どんな凄いやつがでるのかと期待したのだがやってきたのはバカのように何も考えずに突撃、EランクがAランクにチカラ押しで勝てるわけ

がないのに無策で正面から攻撃を仕掛けに来る幸斗を今までの対戦相手の誰よりも愚か者だとステラは思った。

「……いいわ……。叩き潰してあげる！」

「はああああああつ!!」

ステラは妃童の罪剣を振り上げ迫る幸斗を叩き伏せるべくチカラいっぱい振り下ろす、同時に幸斗もステラに接近すると振り下ろされてくる大剣と正面衝突させるように鬼童丸を下段から振り上げ、衝突と同時に第五訓練場そのものが激震し二人を中心に大爆発が起きた。

『試合開始早々大爆発（エクスプロージョン）!!チカラとチカラの正面衝突だあああつ!!』

「ふう……。随分と早く決着がつかましたねお兄様」

「そうだね、あれは完全に正面からぶつかった、ああなったら完全に攻撃力の勝負だ、流

石にステラ相手にEランクが攻撃力で勝てる筈がないしね」

観客スタンドで観戦をしている一輝の隣の席で一緒に観戦をしていた短い銀髪で淡い翡翠色の瞳の美少女で一輝の妹である《黒鉄珠雫（くろがね しずく）》がつまらなそうに一輝にそう言い、それに同意する一輝。

——あの不安はやっぱり気のせいだったのかな？・・・まあなんにせよこれで決まっただろう、流石ステラだ。

不安が消し飛び心の中でステラを絶賛する一輝、どうやら自分の心配は杞憂に終わりそうだと安堵した・・・だが——

「ねえ一輝、珠雫、あれって・・・」

珠雫の反対側の隣の席で観戦していた眉目秀麗な長身で女性口調で話す男子生徒《有栖院風（ありすいん なぎ）》が大爆発によって煙が充満しているバトルフィールドの奥の青ゲートの上を指さした。

「どうかしたn・・・えっ!？」

「まさか?」

一輝と珠雫が有栖院が指さしたところに目を凝らすとそこには青ゲートの上にクレーターができていてその中心に人が大の字でめり込んでいたのが見えた——

——めり込んでいたのは……ステラだった……。

「なっ?!?ステラッ!!」

「嘘……」

あまりにも信じられない光景に声を上げる一輝に絶句する珠雫と有栖院、皆の予想を裏切った結果に会場はどよめいていた。

『あああつとこれは予想外つ!!ヴァーミリオン選手がふっ飛ばされて壁に叩き付けられています!一体何が起きたというんだ!?!』

「一体どうして……まさか一ヶ月前のテロリストのような能力じゃ!」

一輝達は一ヶ月前のある休日にテロリスト——《解放軍(リベリオン)》のビショウという伐刀者と戦闘をしていた、ビショウはあらゆる有害を【罪】として吸収しそのチカラを【罰】という魔力に変えて敵に撃ち返すことができるという能力を持っていて、そのときに戦ったステラの一撃がそれによつて防がれてカウンターをくらいステラは敗北したという事があつた。

ひよつとしたら幸斗の能力はそのようなカウンター系の《概念干渉系》の能力なのかもしれないと一輝は思い《生徒手帳》を開いてディスプレイを操作して幸斗のデータを調べる。

破軍学園の学生証は身分証明から財布に携帯電話にインターネット端末となんにでも使える優れものでありそれを使つて幸斗のデータを調べてディスプレイに表示して一輝はそれを見る。

「!!? ……何、このステイタス……」

「クッ！・・・嘘でしょ？・・・」

青ゲートの真上の壁に叩き付けられてめり込み意識が飛びそうになっているステラが呻いた。

———今の一撃は何か能力を使った感じはしなかったわ・・・つまり———

「純粋な攻撃力で負けたっていうの？冗談じゃないわ！」

ステラはそう言って後ろに魔力を放出して壁を爆破するように砕いてその反動を利用して飛び出しバトルフィールド上へと着地する。

すでに煙は晴れていてバトルフィールド中央にいる幸斗は「どうだっ！」と言っているかのような不敵な笑みで太刀を構えてステラを睨んでいた。

「・・・イラッ！とくるわ・・・」

ステラはそれが気に入らなかつた、今まで負けたことは少ないながらもあつたが攻撃力で負けたのは生まれて初めてだったからだ、自分の一番の長所で負けて気にしない人間などそう多くはない。

「この程度じゃねえだろアンタ？早く掛かってこいよ！」
「ツ!!・・・嘗めんなっ!!」

幸斗の挑発を受けてステラは激怒し特攻する。

『ヴァーミリオン選手猛攻っ!!しかし真田選手はそれをいとも簡単に弾き返し続けヴァーミリオン選手は一撃毎にふらついてまるでアクシヨンゲームのプレイヤーが破壊不能オブジェクトに攻撃し続けて弾かれ続けるかのようだ!』

「はああああああっ!!」

「いっ!?!」

斬り合う最中に鏑迫り合いの体勢になった瞬間に幸斗がステラを押し込みながら前に走り出し完全にチカラ負けをしているステラは何度も身体を浮き上がらせながらバトルフィールド端まで押し込まれ――

「おらあっ!!」

幸斗の太刀のによるフルスイングによって上斜め四十五度の角度でふっ飛ばされて青ゲート側の観客スタンドの階段に叩き付けられあまりの威力だった為その勢いそのまま階段を跳ね上がり最上階でまた吹っ飛び壁に激突してその壁すらブチ破り場外に吹っ飛んで行った。

『ヴァーミリオン選手壁を突き抜けて場外までブツ飛ばされたあああっ!!真田選手なん

という膂力！彼は本当に私達と同じ人間なのでしょわか!?!」

「ステラアアツ!!」

「信じられない・・・あのステラさんがこうも簡単に・・・」

「・・・一体何者かしらあの子?」

あまりにも常識破りの光景にどよめく第五訓練場内、当然だ、EランクがAランクを相手に圧倒・・・しかも正面からの真つ向勝負で圧倒しているのだから目を疑うだろう。

『一体ヴァーミリオン選手はどこまで吹っ飛んだのか!?!これはもう勝負はk「まだ終わってたまるもんですかあああああつ!!」と思つたら天井を突き破って上から舞い戻ってきたあああつ!!ヴァーミリオン選手凄まじい執念だああつ!!』

もう勝負は決したと思われたその時にステラが天井の一部を爆破して上から飛び降りてバトルフィールド上の幸斗にその勢いのまま炎を纏った妃竜の罪剣を叩き付けるが鬼童丸の一振りであっさりと弾き飛ばされて幸斗の50m前方のバトルフィールド上にスタイリツシユに着地した。

——ステラ、よかった・・・。

観客スタンドで顔を青くしていた一輝が胸を撫で下ろしてホツとする、この第五訓練場の中で一番驚愕に思ったのは間違いなく彼だろう、それほどステラ・ヴァーミリオンという伐刀者の実力を評価しているのだ無理はない。

「・・・煮え滾ってきたわ・・・」

再び睨み合った幸斗に対して身体から火の粉を巻き上げながらステラが口を開く。
「アンタの攻撃力は確かにアタシより上よ、悔しいけど認めるわ・・・けれどそれはあくまで物理攻撃の話」

話しながら妃竜の罪剣に摂氏三千度の炎を纏わせて真上に振り上げるステラ。

「Eランクのアンタにこの炎は破れないわ！覚悟しなさいっ!!」

その瞬間に炎は光の柱に変わり――

「蒼天を穿て、煉獄の焰」

光の柱が伸びて天井を溶かして貫き百メートルを優に超える光の刃となった。

『出た！ヴァーミリオン選手の《天壤焼き焦がす竜王の焰（カルサリティオ・サラマンドラ）》だっ!!』

破壊の限りを尽くす光の刃を幸斗に向かって振り下ろすステラ、だがその時ステラは信じられない光景を見た。

「なっ!!何をしているの!?!早く逃げなさい!!消し炭になるわよ!!」

なんと幸斗は逃げずに片手で鬼童丸を振り上げて光の刃が迫るのを迎え撃とうとしているのが見えた。

「・・・勝手にかなわないと決めつけんじゃねえええっ!!!」

「っ!!?」

この瞬間に観客スタンドで観戦を続ける一輝だけが幸斗の振り上げた片腕に一瞬だけ纏った青色の焰の様な光が見えた。

——あれは……《二刀修羅》の光？

真田幸斗 十五歳 破軍学園一年生

伐刀者ランク E

各ステータス

防御力 F

魔力制御 F

運 D

身体能力 A

魔力量 F |

攻撃力 EX (測定不能)

次の瞬間に幸斗は太刀をチカラいっぱい振り下ろし、その瞬間に振り下ろされた太刀の先から巨大な光の波が発生して天壤焼き焦がす竜王の焰を呑み込んでステラの真横を通過して後方の壁を突き破って行った。

「……は!?」

ステラは嘔然として第五訓練場内も絶句した、試合が始まってから今までも信じられない光景の連続だったがそのどれもが霞む程の想像を絶する光景だった。

『な!? なななんとこの事だあつ!! ヴァーミリオン選手の放った天壤焼き焦がす竜王の焰が真田選手の放った閃光に打ち破られたあああつ!! 一体何なんだ今のは!? これが真田選手の伐刀絶技なのか!?!』

「ちよ!? ちよつと待ちなさいよアンタ!」

ステラが声を荒げて幸斗に抗議する。

「今の伐刀絶技明らかにEランクの放つ威力じゃないわ！アンタランクを偽っていたのね!!」

幸斗に指をビシツとさして言い放つステラ、Aランクの伐刀絶技を正面から打ち負かす伐刀絶技を放つような奴がEランクなわけが無いと。

しかし幸斗はステラをその灼熱の眼で真っ直ぐ見据えて答えた。

「オレはれっきとしたEランクだ、測定器にもそう出たしな、それに何言ってるんだアンタ？今のは伐刀絶技じゃねえ——

【剣圧】だ

驚愕の一言を放った。

「ダハハハハハッ!!そりゃ驚くよな姫ツチ?」

観客スタンド最上階で爆笑しながら涼花に同意を求める重勝、やはり彼等はこのことを知っていたのだ。

「そうね、本来なら『落第騎士』と同じFランクが付けられるのが普通だけれどそのあまりにも規格外な攻撃力の為にEランクとなった異質な伐刀者、それが真田幸斗という伐刀者なのよ」

一輝ですら魔力量は平均の十分の一だ、それを大きく下回る魔力しか持たない幸斗は霊装を顕現させるだけで魔力がほぼゼロになってしまふ為に伐刀絶技が使えない、これでは伐刀者というより霊装を持ったただの剣士だ、普通それでは伐刀者としてはやっていけない筈。

「もちろん今まで幸斗を侮蔑や嘲笑する輩は多かつたわ、けれどもアイツは自分は強くなれると信じて進み続けた」

「それは「落第騎士」も同じだろうが、奴は「弱者のまま強者に勝つ戦い方」だ、幸斗はそれとは対照的に「生まれながらの弱者が強者になることを諦めずに挑戦し続けた結果」ああなつたわけだな、絶対的価値観（アイデンティティー）と考え方の違いが出ているのがわかるぜ」

一輝の戦い方は自分を弱者と認め相手をリスpektとしてその上で自分と相手の戦力差を分析して勝機を掴むというものだが、幸斗は自分が弱者のままであることを容認せず強者になろうと努力し続けた、誰が無理だと侮蔑しても、つまり――
「要するに黒鉄一輝は利口で幸斗はバカだつてこと」

「身も蓋もないな姫ツチ……でもアイツこの後はどうするつもりなんだかな？ Bランク以下ならともかくAランクであるあの皇女サマには今のままじゃ決定打は与えられないぜ」

そう、どんなに攻撃力の高い物理攻撃でも魔力を纏う伐刀者は基本的に同じ魔力を纏った攻撃でなければ倒せない、魔力がバリアの役割を果たすからだ、現にステラはあれだけ派手にやられているのに大した傷は負っていない。

《総魔力（オーラ）量》、つまり伐刀者としての異能を用いるための精神エネルギー総量は努力云々で伸ばせるものではない、これはその人間が生まれ持った運命の重さに比例すると言われている。大成する人間は大成すべくして大成する、全ては運命、生まれな

がらに定められた抗えぬ絶対序列、これが才能の差というものだ。

・・・だが、もし物理攻撃でその運命を覆すとしたら――

「それはもう人類最強の近代兵器である核兵器を上回るエネルギー（例を挙げるとプルトニウム爆弾（長崎原爆）が爆発した時に発生するエネルギー（84TJ（テラジュール））を大きく上回る一撃を叩き込まないといけないのだから・・・わかってんでしょ？」

「・・・アイツ【アレ】をやるつもりか・・・避難する準備しといた方がいいな・・・」
伐刀者に近代兵器は通用しない、つまり少なくともその最強より大きな威力の一撃を叩き込まなければAランク（ステラ）は倒せない、だが幸斗にはそれができるといいうのだ、それを知っている重勝は顔を青くしていつでも避難できるようにした。

「・・・アタシはもうランクの低さで無駄なんて言うつもりはなかった・・・」

ステラはそう呟いて表情を強張らせる。

「でもさすがに伐刀絶技が使えない奴にアタシは倒せない！もう無駄なことはやめて降参しなさい！」

ステラは幸斗にそう言い放つ、すると観客スタンドから次々と野次が飛ぶ。

「そうだ！とつとと降参しろ詐欺師ヤロー!!」

「伐刀絶技も使えない奴が魔導騎士になろうとしているんじゃないわよ！」

「お前なんか伐刀者じゃねえ！とつとと出て行け!!」

「ここは伐刀者が魔導騎士になるための学園だ！才能が無い奴が来る所じゃないんだよ!!」

「引つ込め無能野郎!!」

幸斗に浴びせられる数々のブーイング、それを聞いた幸斗は――

「テメエ等黙りやがれえええええええええええええええ!!」

右脚を前に思いつき踏みつけて吼えた。

するとその右脚を中心にバトルフィールドが陥没して爆発し第五訓練場・・・いや、破軍学園全体が大きく縦に激震し、それが収まって爆発によって発生した煙が晴れるとなんと伐刀者専用に使われたバトルフィールドがまるで隕石が落ちた跡のような

クレーターになつていた。

あまりにも非常識な光景に観客は唾然として押し黙った。

「さつきも言ったが勝手に決めつけてんじやねえっ！オレはアンタにぜってー勝つ!!」

「いい加減にしなさい！アタシはもう才能が低い伐刀者に対して無駄とは言わないけれど、伐刀絶技が使えないアンタは伐刀者ですらないわ！そんな奴がアタシに勝つだなんて身の程知らずにも程があるわ!!」

「身の程なんて知ったこっちやねえっ!!才能云々なんかでオレは止まる気はねえっ!!」

「アタシはアンタの為を思つて言つてるの！現にアンタの攻撃でアタシは大したダメージを受けていないわ！アンタのチカラがどんなに人外でも魔力が無い攻撃なんかじゃとてm「もういい！」

口論を続ける幸斗とステラだったが幸斗の次の言葉でそれも終わる。

「いいぜ、魔力がなければAランクに勝てないのが運命だつて言うんなら——

——その運命を、覆してやるっ!!」

『ああつと真田選手ここで特攻！クレーターの端にいるヴァーミリオン選手に向かって行く為に坂を猛スピードで駆け上がる！速い!!』

「なら後悔しなさい！喰らい尽くせ！《妃竜の大顎（ドラゴンファング）》!!」

向かって来る幸斗に対してステラは蛇のように長い身体を持つ竜の形の巨大な炎を二発撃ち放って右に走り出した。

一発は正面から、もう一発は幸斗の後ろに回り込んで挟み撃ちにする、妃竜の大顎はただの火炎の砲撃ではない、あらゆる物を融解させる牙で敵を食い千切るまでどこまでも追いつがる追尾攻撃だ、故に逃れることは不可能、だが幸斗には逃れる必要が無い。「ハアツ！ラアツ！」

前、後ろ、といった順番で太刀を振るい、剣圧で二発の妃竜の大顎をカツ消す幸斗。

——本当に規格外な奴ね！だけど・・・!!?

ステラは跳び上がった瞬間に幸斗に後ろから右肩を掴まれた。
「逃がすかよ」

——クッ！速い！

次の瞬間幸斗はステラの右腕を掴んで下に投げ飛ばした。

「グッ!!」

坂になっていている地面に叩き付けられたステラは坂を転がり落ちていきクレーターの中心で仰向けの体勢で停止する、そのときに真上から幸斗が墜ちてきて鬼童丸を上段から思いっきり叩き付けるようにステラ目掛けて振り下ろして来た。

「くうっただけ散れっ!!」

「クッ!」

ステラはそれを左に転がることで回避するが——

「きゃああああっ!?!」

幸斗のあまりにも規格外な威力の振り下ろしによつて太刀が地面に振り下ろされた瞬間に地面が爆砕しその衝撃によつてステラはふっ飛ばされる、だがステラは空中で体勢を立て直して坂に着地してその勢いを利用して幸斗に飛ぶように突撃して大剣を振るが幸斗はすかさず太刀をぶつけて罅迫り合い状態になる。

「おらあつ!!」

チカラで勝る幸斗がアツパースイングの要領でステラを真上にブツ飛ばし、ステラは天井に足をつけて炎を纏わせた妃竜の罪剣を構えて真下にいる幸斗目掛けて飛ぶためにチカラいっぱい天井を蹴った。

「アタシはイツキと七星の頂きをかけた戦いでもう一度戦う約束を果たす為にも、こんなところでアンタに負けるわけにはいかないのよっ!!」

ステラは己の想いと魂をかけて身体中に竜の形をした炎を纏って真下にいる幸斗目掛けて特攻する。

「これで最後よ!! 妃竜の落撃（ドラゴンダイブ）!!!」

強き想いを抱ける目標は人を強くする、ステラは一輝との約束の為にこの一撃に全てを懸けていた。

・・・しかし、それは彼女だけではなかった。

「・・・オレだって・・・」

真上から強大なエネルギーを纏って落ちて来るステラを迎え撃つ為に幸斗は試合が始まってから今まで片手で振るっていた鬼童丸を両手持ちにして構えていた・・・そして――

「オレだって七星剣武祭でぶっ倒すと誓った【龍】がいるんだあああつ!!こんなところでテメエに負けている暇はねえんだよ!!ステラ・ヴァーミリオンツ!!!」

文字通りの全力で鬼童丸を振るった。

「プルトニウム爆弾（長崎原爆）二百発分じゃねえか!! 幸斗が初めて龍殺剣を放った八歳の時は8・25PJ（広島原爆百五十発分）だったのによっ!!」

「それも十分馬鹿みたいいな数値ね、本当にバカなんじゃないかと思うわ!!」

衝撃波に耐えながら龍殺剣の恐るべき威力を語る涼花、それは戦略破壊兵器の威力を遙かに超えていた。

そして数秒後、光の柱は徐々に小さくなり消えた。

第五訓練場の天井は完全に消滅していてここから見える範囲の空には雲がなくなり蒼穹だけが広がっていて、第五訓練場内も衝撃波の影響でまるで大型のハリケーンが通り過ぎたかの様に壊滅状態だった・・・そして――

「っ!!ステラッ!!」

上空から生まれたままの姿になっていて気絶しているステラが落下して来てうつ伏せに地面に落ちた。

「ステラ・ヴァーミリオン、戦闘不能! 勝者、真田幸斗!!」

レフェリーにより幸斗の勝利が宣言されて――

「グラッツェー! 楽しいバトルだったぜ!!」

と幸斗がウインクしながら倒れ伏すステラに向かって指さしながらそう言い放った。

『き、決まったあああああっ!!! Y O ★ S O ★ U ★ G A Y !! なんと勝利したのはアラ

ンクのヴァーミリオン選手ではなく、ほぼFランクと言っても過言ではないEランク騎士！真田幸斗選手だあああああつ!!とんでもないことになりました!【落第騎士】．．．いや《無冠の剣王（アナザーワン）》に次ぐダークホースが現れた!【紅蓮の皇女】ステラ・ヴァーミリオン選手まさかの黒星!!これでヴァーミリオン選手の七星剣武祭の代表入りは絶望的となりました!!』

「マジかよ．．．」

「あの紅蓮の皇女が．．．」

「何だよ?今の砲撃．．．」

「バケモンだ．．．」

まさかの結果と龍殺剣の恐るべき威力に一同の動揺の声が半壊した第五訓練場内に木霊していた。

「ステラが．．．負けた?．．．」

一輝は呆然とした、自分の恋人が、七星の頂きを懸けてもう一度剣を交えようと約束した最強のライバルが、負けてしまった．．．。

一輝の心にもあるのは驚愕とやりきれない思いと担架で医務室に運ばれて行ったステラの身の心配と悲壮感だけだった。

「おおっ！すっげえっ！派手にぶっ壊れてんじゃん！」

「ぐほっ！」

「西京先生!？」

「まったく加減というもの知らんのかあの小僧は？」

「理事長まで・・・」

「急に後ろからのしかかっくてくんよ！」

「つれない事言うねえ重坊、同じ【重力】を操る能力者同士じゃあないか」

観客スタンド最上階の出口付近でほぼ全壊したバトルフィールドを見下ろしていた涼花と重勝の後ろの出口から突然着物姿の小柄な女性と煙草をくわえたスーツ姿の麗人がやって来て小柄な女性が重勝の背中に飛び乗ってじゃれつき重勝は鬱陶しそうに

する。

小柄な女性の名は《西京寧音（さいきよう ねね）》、《夜叉姫》の二つ名で知られるKOK（King Of Knights）A級リーグ世界ランキング三位の現役選手で破軍学園の臨時教師だ。

スーツ姿の麗人の名は《新宮寺黒乃（しんぐうじ くろの）》、この人こそが「能力主義」だった破軍学園の方針を「完全実力主義」に変えた理事長にして《世界時計（ワールドクロック）》の二つ名を持つ元KOKのA級リーグ三位だった人物だ。

「学内の試合で《禁技指定》級の一撃を使うとはな・・・はあ、入学試験の時は真田だけ特例で奥多摩の合宿場で行い、私が直々に試験官を務めた時に龍殺剣の使用を禁止すべきだったな、真田が選抜戦で使うと予想しなかった私が馬鹿だった」

「まあ、幸斗はバカですから」

第五訓練場内の悲惨な惨状を見て過去の自分の過ちを後悔した黒乃は自分の蟀谷に掌を当てて溜息を吐き、涼花はそれを弁護するようにさりげなく幸斗を卑下にした。

「しかし黒坊達以外にもとんでもねえのがいたもんだあね、日本全国で活動していた世界最強クラスの傭兵団《西風》の残党が三人もこの学園に入学していたなんてさ」

重勝にじゃれついていた寧音がやっと重勝から離れ、涼花と重勝をそれぞれ眺めた。

「傭兵団【西風】の団長《傭兵王》《風間星流（かざま せいりゅう）》の息子にして西風

の若き戦術教官【漆黒の剣聖】【風間重勝】に男所帯の西風のなかで唯一の女である為に団員から【姫】と呼ばれる戦術・戦略に長けた隠密機動員《鉄の乙女（アイアンメイデー）》【佐野涼花】、そして西風の特攻隊のエース《子破王》【真田幸斗】、んんく実に面白いメンツさね」

「私は問題児が増えて頭が痛いだけだがな・・・はあ、まったく誰が後始末を思うっているんだ」

「ハハハ・・・」

これから半壊した第五訓練場の【復元】と人工衛星を破壊した事による国への謝罪をしなければならぬ黒乃に対して苦笑いをするしかない涼花と重勝であった。

こうして波乱の【紅蓮の皇女】ステラ・ヴァーミリオンVS異質のEランク真田幸斗の試合は幸斗の勝利で幕を閉じた。

この試合はネットの動画サイトにもアップされて世界中に大きな驚愕と衝撃をもたらし、真田幸斗の名は多くの伐刀者に知られることとなり幸斗には《殲滅鬼（デストラクター）》の二つ名が付けられることとなった。当然だ、真田幸斗は七星剣武祭代表最有

力候補の一角、それも世界最高峰の魔力を持つAランク伐刀者を落とすのだから。

あの中の悪夢と延期された試合の再開

……北九州の北西に位置する死神が住むと言われている島《死絶島》、この島の最南端の岸の目の前の場所の後方の船の上で負傷した大勢の伐刀者が見守る中で世界最強クラスの魔導騎士二人が対峙していた。

「私に深手を負わせるとは……確かに貴方は私が剣を交えた者の中でも最も強い騎士でした……ですがもうおやめなさい、もはや貴方に勝ち目はありません」

一人は純白の騎士、神聖さすら感じさせる純白の装いに翼を思わせる一対の剣。強すぎるあまり捕らえることを放棄された世界最悪の犯罪者にして世界最強の剣士《比翼》の《エーデルワイス》が肌がむき出しになっている部分である腹部に剣で斬られた深い大きな斜め傷があり、そこからの出血により腰に着けた純白の防具を緋色に染めながらも顔色一つ変えずに悠然と立ち、目の前の敵に告げる。

「へっ！なに勝った気でいやがる！後ろにいるは護るべきガキ共！前にいるは世界最強！一歩も引けぬこの大一番で！ここで引いたら男が廃るつてもんだ!!」

「……団長……」

対するは満身創痍の重症ながらも目の前の世界最強に対して一歩も引かずに毅然と

対峙する太陽の様な熱気を感じさせる長身の伐刀者、実年齢四十代であるにも関わらず二十代にしか見えないがっしりとした身体つきの男が上半身裸でその上に袖に腕を通さずに肩にかけただけの背中に大きく縦書きで「不撓不屈」と書かれたロングコートをマントのように風ではためかせダボダボの長いズボンを身体中の剣傷から流れる流血で朱く染めながらも右手に持った電動刃が付いた太刀の霊装《紅蓮疾風（ぐれんはやて）》の切っ先を目の前の世界最強に向けて警告を拒否する。

「どうしても引かないと言うのですね・・・」

「当たり前だ！俺を誰だと思つてやがる！！西より吹き荒れる猛き熱風、天下無敵の傭兵団【西風】団長、不撓不屈の疾風（かせ）の【傭兵王】【風間星流】様だぜつ！！」

熱き魂を燃え上がらせて世界最強相手にそう言い放つ星流、二人が発する強大なチカラの奔流により島中の地中から火山が噴火したかのようにマグマが噴出し大地を煉獄のような死の大地に変える中、星流は後ろの船の上にいる西風の戦闘服である黒いライダージャケットを着た少年達に大声で告げる。

「いいかガキ共！どんな理不尽が自分（テメエ）に降りかかろうが自分（テメエ）を信じて進み続けろ！！魔力量が運命を決めるのが道理？そんなのはクソくらえだ！！道理を叩き潰して運命をブツ飛ばす！！それが西風だ！！これから先もそれを忘れずに突き進めつ！！」

「「「「「団長っ!!」」」」」

そして・・・エーデルワイスの後方数メートル先の地中から轟音と共にマグマが噴出した瞬間に星流はエーデルワイスに向かって行きマグマが星流と船の間に落ちて二人はその中に消えて行った。

「・・・あばよ・・・ガキ共!!」

——こっから先は、テメエ等の時代だっ!!——
これが傭兵王の最後の言葉だった・・・。

「团长っ!!」

学内選抜戦で【紅蓮の皇女】ステラ・ヴァーミリオンを破った三日後、幸斗は破軍学園の第一学生寮の自室の二段ベッドの上段で悪夢から覚めて大声で叫びながら飛び起きて――

「痛ってえーっ!?!」

天井に頭をぶつけて痛みを感じて頭を抱えた。

「何やってんの?」

二段ベッドの下段で寝ていたルームメイトで同じ組織に所属していた腐れ縁である涼花が幸斗の叫び声の所為で起きてしまった。

「……またあの日の夢を見ていたの?」

「……ああ、なかなか割り切れない出来事だったからな……」

「……そう……」

大切な人を失った日の事に悲観な想いを馳せる二人、しかし立ち止まっただけは何も始まらない、時計を見るともう朝の六時だ、二人はベッドから降りて起きる事にした。

「……さて、今日は誰かさんが試合会場を壊してくれたおかげで延期になってたわたしの試合ね」

「……………悪かったな」

あの試合の後に涼花の出る試合も含めて何試合かあったのだが、幸斗とステラが……主に幸斗が放った龍殺剣（ドラゴンスレイヤー）の余波が試合会場である第五訓練場を半壊させた所為で延期になったのだ。

「気にすることはないわ、戦略を練る時間が増えて万全な態勢が整えられたし」

圧倒的な攻撃力で圧倒する幸斗とは違い、涼花の戦闘スタイルは戦術・戦略を駆使して戦うスタイルなので時間が空いたのはむしろ都合がよかったと言える。今日、涼花が戦う相手は学内選抜戦の一試合目で一輝に敗北した《狩人》の二つ名で知られ、完全ステルスの伐刀絶技《狩人の森（エリア・インビジブル）》で相手を一方的にいたぶる戦い方をするＣランク伐刀者《桐原静矢（きりはら しずや）》だ、厄介な能力を持つ相手なので対策が必要なのだ。

「それで？勝てるのか？」

幸斗は不敵な笑みを浮かべながら涼花に勝算があるのかを聞く、そんな表情なのは

返ってくる答えがわかってるからだ、それに対して当然涼花は――

「万全な態勢が整ったって言ったでしょ？勝ってみせるわよ」

と自信に満ちた表情でそう答えた。

「見てなさい幸斗、戦闘はなにも攻撃力やランクだけじゃ決まらないわ、本当に勝てる戦士というのは「面白い事をする者」が勝つのよ」

選抜戦は一度負けると代表入りは絶望的と言われている、それは選抜戦が進むにつれて無敗の生徒が多数いるからだ、一敗した者が代表入りするためには試合で無敗の生徒と当たった時にその生徒達を一人でも多く倒して最終的に無敗の生徒を五人以下にするのが絶対条件だった。

「フハハ、アハハハハッ！どうしたんだい？無様に逃げ回るだけなのお？アハハハハッ！！やっぱり低ランクはこうあるべきだよねえ、天才であるボクに勝ってはいけないんだよ！アハハハハッ！！」

「……………」

『佐野選手桐原選手の【狩人の森】の前に成す術が無いのか!?!リング中を縦横無尽に逃げ回っています!!』

ここはこの前幸斗とステラの試合で半壊していた第五訓練場、この場所は先日理事長であり【世界時計】の二つ名を持つ魔導騎士である黒乃の時を操る能力によってク○イジーダイヤモン：：第五訓練場の時を遡らせることによって復元させた事で今ではすっかり元通りになり、延期していた試合を再開した。

鉄の指貫グローブを両手に装着し鉄の小太刀を両手に一本ずつ持ってバトルフィールド上を【満遍無く】駆け回る涼花、そしてその対戦相手である桐原静矢の姿はバトルフィールド上のどこにも見当たらない……いや見えないのだ、静矢の伐刀絶技である【狩人の森】によって彼の情報は他の人間に完全に遮断されて知覚する事ができなくなっているからである、音も気配も匂いも姿すらも全てを敵から隠してしまう完全ステルスを相手にするのに有効なのは広範囲攻撃だ、しかし涼花にはその手段を持っていない。

涼花は幸斗と同じEランク伐刀者だ、そして彼女の伐刀絶技である《鉄化（エンダーンアイゼン）》は彼女の霊装である鉄の指貫グロブ《鉄の伯爵（アイゼングラフ）》で「触れた生物以外の物を鉄に変える」能力である、幸斗ならば火力の剣圧でバトルフィールド全体を派手に蹂躪してしまえばいいのだが涼花にはそれができない、彼女が今できる事はどこから来るのかわからない静矢の弓の形をした霊装《朧月（おぼろづき）》から放たれる見えない矢から逃れる為に逃げ回るしかない。

「ホラホラ！もつと早く逃げないとその綺麗な身体に穴が空いちやうよお！アハハハッ！！」

下品な笑い声を響かせながらバトルフィールド上のどこからか遊ぶ様に矢を涼花に放ち続ける静矢、彼の戦術はこの狩人の森で敵から身を隠し絶対安全な場所から敵をいたぶるように矢で射貫いて狩猟する、故に静矢は「狩人」と呼ばれている。

「……フツ、わたしよりランクが低い【落第騎士】に負けた癖になに言ってるんだか」
「……何か言ったかい？」

逃げ回っていた涼花が突然バトルフィールドの端で振り返って止まり静矢を挑発するような事を言い、それを聞いた静矢はそれが気に障って矢を放つのを止め涼花に冷たい声でそう尋ねる。

「随分焦っているようね狩人、そんなに自分が黒鉄一輝に負けた事が認められない？そ

んな風に他の低ランク伐刀者に八つ当たりしてまるで駄々を捏ねるガキみたいね……」

「……少し黙ってくれないかな？」

更に挑発する涼花に少しずつ態度を変える静矢、彼は才能が低い奴を見下して優越感に浸る傲慢な男で言い換えれば自分の才能に対して非常に高いプライドを持っているということである、一ヶ月前の試合で今まで馬鹿にしてきた一輝と試合に当たりその試合の途中までは今までのように一輝をいたぶるように追い詰めたのだが、そのときに一輝が異常と言える洞察力で相手の思考・行動・意識・発言……全ての相手のあらゆる【理（ことわり）】を暴き出して掌握する《完全掌握（パーフェクトヴィジョン）》という神技によつて反撃された静矢は泣き喚くなどの無様な醜態を晒しながら敗北した為に今まで注目と信頼を浴び続けてきた静矢は誰からも見向きもされなくなってしまったのだ。

故に涼花の発言が癪に障った、そして涼花は挑発を続ける。

「それってつまりアンタは才能があるにも関わらずちよつとしたことで勝てなくなる真の弱者って事よね？」「黙って」ふーんそうなんだ、そういえばその落第騎士との試合見たけれどみつともない負け方だったわね泣き喚いて「黙れ」去年の七星剣武祭も相手が自分よりも強者だったから逃げたって聞いたけどその反応を見ると実力差を弁えて引いたんじゃなくて臆病風に吹かれて逃げたって事が丸わかりね「黙れ」つまりアンタは

「ああっ!!」

———「そ、そんな筈は!?まさかまた!?

「ふ・ふ・ふぎけるなああああっ!!」

怒り狂いながら矢を乱射する静矢、目の前のEランク伐刀者にまたしても見破られたと思つたのだろう、余程一ヶ月前の一輝との試合はトラウマになったのだろう。

———「別にわたしは【無冠の剣王】の完全掌握みたいなイカレた事はできないわよ

涼花は最小限の動きで飛んで来る見えない矢を身体中に掠り傷を作りながら躲し続ける。

———「【狩人の森】は完全ステルスと言つてもわたしの五感が消えるわけじゃない、それなら矢が服や肌をめり込む瞬間を感じ取つて・・・・・躲せる!

「なっ!!何で当たらないんだよ!!ふぎけるな!低ランクは低ランクらしくボクにひれ伏していればいいんだよ!何で天才であるこのボクがこんな惨めにならなければいけないんだ!あの落ちこぼれの所為でボクはガールフレンド達に幻滅されるし誰から見向きもされなくなつたんだ!!あいつの所為で!あいつの所為で!!あいつの所為で!!あいつの所為で!!あいつの所為で!!あいつの所為で!!あいつの所為で!!あいつの所為で!!あいつの所為で!!」

喚きながら矢を放ち続けるも一向に涼花に当たらない……そして――

「……悪いけどアンタの居場所はもうわかってるの」

涼花は躲し続けながら左腕に無数に巻き付けてある手拭いのうちの一枚を右手で取ってその片端だけを持ってオーバースローの体勢にはいり――

「そして次にアンタは『そんなわけがあるかあああああつ!!』と言うわ」

そう宣言して手拭いが『く』の字になった瞬間、涼花は自分の《因果干渉系》の伐刀絶技【鉄化】を使い手拭いを鉄のブーメランに変えてそれを投げた。

「そんなわけがあるかあああああつ!!……ハッ!？」

涼花の宣言通りのセリフを叫んだ知覚できない筈の静矢にブーメランが迫る。

「なああつ?!?何んでだよちくしよおおおおおつ!!!」

静矢は泣き叫びながらブーメランを朧月で防御しようとするが――

「のあつ!？」

突然静矢の眼前でブーメランが手拭いに戻り静矢の顔面に覆い被さった。

「お似合いの姿ね桐原静矢……もう捉えたわ!」

「んぷーっ!んぷーっ!!」

何も無い空中に浮いているように見える手拭い、つまり静矢はそこにいる。

「フイーネ（終わり）よ」

涼花は両手に持った玩具の剣を鉄化させて造った鉄の小太刀を持って両腕を交差させるように構えた。

「……《絶影（ぜつえい）》」

そして残像ができる程の速度で一瞬にして宙に浮く手拭いの許に近づいてそのまま両腕を勢いよく横に開くように小太刀を横に振るい撫で斬りを放った。

「ばたりという音と共に宙に浮いていた手拭いが地面に落ちてそこには一人の軽薄そうな少年が目を開いて白目を向いたまま気絶して倒れていた。

「わかった？勝つのは高ランクや強い能力を持った奴じゃない、一番【面白い事をした者】が勝つのよ」

この少年こそが【狩人】桐原静矢だ、つまり今の一撃で意識を刈り取られて狩人の森が消えたのだ。

「桐原静矢、戦闘不能！勝者、佐野涼花!!」

レフェリーが勝者の名前を告げて第五訓練場内が歓声に沸いた。

『決着うとうとうっ!!佐野涼花選手！これで無傷の九連勝目だああああっ!!しかしどうやって桐原選手の狩人の森を見破ったんだ？……ん？……こ、これは!?!』

バトルフィールド上をよく見てみるとバトルフィールド全体に無数の足跡があった。

『足跡です！これは砂？．．．いや、【砂鉄】だあああつ！！佐野選手はいつの間にかリング全体に砂鉄をばら蒔いていたああ！先程までリング中を逃げ回っていたのはこのためだったああああ！！』

そう、涼花は成す術がなく逃げ回っていたわけでは無い、走りながら手拭いを小太刀で細かく切り刻んで鉄化させてバトルフィールド全体にばら蒔いていたのだ、【狩人の森】は姿は隠せても存在が消えたわけではない、故にばら蒔かれた砂鉄によって足跡ができていたのだ、涼花はなにも特別な事はしていない、ただ足跡を辿っただけなのだ。

つまり涼花の作戦勝ちだった。色々と工夫をして相手を追い詰める戦略的な戦い方、これが佐野涼花の真骨頂なのだった。

風間重勝（序列一位）と東堂刀華（序列二位）の関係

試合を終えた涼花は幸斗と合流して破軍学園の敷地内にある林の休憩所で重勝と待ち合わせをしたので二人は休憩所にあるベンチに座って重勝が来るのを待っていた。

「んまんま」

幸斗はベンチに座りながら「一本サテイスフアクションバー」という棒付きアイスを食べていた。

このアイスはよくある棒に当たりはずれがあるアイスであり、棒に「まだだっ！俺はまだ満足しちゃあいない!!」と書かれていたら当たりでもう一本もらうことができ「こんなんじや全然満足できねえぜ!!」と書かれていたら大当たりでもう五本もらうことができるというごく普通のサービスだ。

「・・・なにも書いてない・・・クソ・・・こんなんじや全然満足できねえぜ・・・」

「馬鹿じゃないの」

結果はハズレだったようでありガツカリして項垂れる幸斗を見て隣に座っている涼花は呆れた。

「ちよっとしたこと落ち込むなよ幸斗、そんなんじや先の長い人生やっていけねーぞ

「？」

「シゲ？」

「遅いわよ重勝」

幸斗が頂垂れていると何故か上から声が聞こえてきて二人はそれが重勝の声だと気づき上を見上げた。

突然だが同じ「重力」の能力を使う伐刀者である西京寧音と風間重勝の違いについて話をしよう、Aランク伐刀者である寧音はその強大な魔力量で超強力な引力を操ることができ、その効果範囲も規格外であり大気圏外に存在するスペースデブリを重力のチカラで引つ張ってきて第二宇宙速度で敵に叩き付けるといふ「禁技指定」にされている《霸道天星（はどうてんせい）》という伐刀絶技を使う事が出来る程の規格外な魔導騎士だ。

対してBランク伐刀者である重勝の伐刀絶技《零か無限（ゼロ・オア・インフィニティ）》は寧音ほど効果範囲が広いわけではない為、隕石を落とすなんて神技はできないが重勝にできて寧音にはできない事がある、重勝は重力を重くしたり軽くしたりするだけではなく「無重力」にすることができなのだ。

この能力の応用法として一つ例を挙げると自分に掛かっている重力を無重力にして身体を浮かせ更に魔力を放出しその時に発生する推進力を利用してそのまま自由自在に三次元移動ができる。

つまり、幼稚園児にもわかるように簡単に説明すると風間重勝は「空を飛べる」のだ。今言ったように重勝は空に浮遊して幸斗と涼花を見下ろしていた、そして二人の前に着地して来たが二人の眼はジト目になっていた。

「重勝・・・学園内での能力の使用は許可がない限り使用禁止の筈よね?・・・」
「シゲ、許可は取ったのか?」

ジト目のまま重勝にそう言う二人。

「ハハハハ！なに、ばれなきやいーんだよ」

「やっぱり・・・」

「魔力を感じしづらいエリアから飛んで来たんだ、ばれてはいないはZ——」

その時、重勝の生徒手帳が鳴った、メールが届いたのである。

『三年一組風間重勝、能力の無断使用によりペナルティーとして学園内のトイレ掃除をさせるので、放課後理事長室に来るように。 新宮寺黒乃』

届いたメールを見てみるとそう書かれていた・・・。

「・・・・・・・・」

「バレてんじゃない」

「うるせー!」

声をハモらせて指摘する幸斗と涼花になにも言い返せない重勝であった。

その時、そんな自業自得な重勝の後方から誰かが近づいて来て声をかけてきた。

「・・・相も変わらず責任感がないのですね」

「ん？」

「誰？」

重勝はそれを聞いて後方を振り返る、するとそこには栗色の長い髪を靡かせて眼鏡をかけた女子生徒と銀色の癖毛の髪で幼稚園児にすら見える程小柄な男子生徒が重勝を睨んでいた。

女子生徒の方は射貫くような眼光の鋭さで重勝を睨んでいて重勝との険悪な雰囲気を感じられ、男子生徒の方に至ってはまるで親の仇を見るような憎悪が籠った眼で重勝を睨んでいた。

「・・・なんか用か？東堂、御祓」

「東堂ってまさか!？」

「・・・破軍学園【序列二位】にして生徒会長、《雷切（らいきり）》《東堂刀華（とうどう）とうか》、それと副会長、《観測不能（ファイフティ／ファイフティ）》《御祓泡沫（みそぎ うたかた）》、学園の有名人が何故こんなところに？」

重勝の発言で幸斗と涼花が二人の正体に気づき涼花が疑問を言うと、重勝に対して険悪な雰囲気を出していた刀華が急に表情を緩めて幸斗と涼花の前に来て二人に笑顔

向けた。

「二年生の真田幸斗君と佐野涼花さんですね？はじめまして、破軍学園の生徒会長を務めています、東堂刀華です、よろしくお願いします」

「え？・・・あ、どうも・・・」

「よろしく、生徒会長さん」

「・・・で？何か用か東堂？」

先程の重勝に対する険悪な表情がまるでなかったかのような屈託の無い笑顔で自己紹介をする刀華に戸惑いながら返事をする幸斗と普通に返事をする涼花、しかし重勝が面倒臭そうに刀華に用件を聞くと刀華はまた敵意を向けるような鋭い眼で重勝を睨んで話し出す。

「風間さん貴方の無責任な行動が後輩達に悪影響を与えているのがわからないのですか？後輩の前で風紀を乱すような行いは慎んでください」

「・・・わざわざそれを言いに来たのか？心配すんな、こいつ等は俺の知り合いだ、だが俺のような半端な奴等じゃねえよ」

「彼等だけじゃありません、後輩達の模倣となるべき上級生がそのような無責任な行動をしていては後輩達に示しが付かないから言っているんです！誰かが貴方の真似をしたらどうするんですか!？」

「やりたい奴はやらせとけばいいだろ？もう《元服》してんだ、なんかあつたらそいつ等の責任だろうが」

「……貴方って人は」

刀華達は責任感も感じずに校則違反をする重勝を注意しに来たようであり刀華の話を聞いているとどうやら重勝は校則違反の常習犯のようでありいくら注意しても全く聞く耳を持たない重勝に対して刀華は怒りを感じていた。

……だが、東堂刀華という人物は誰にでも寛大でありそれを考えるとこの程度のことまでこの間の険悪は抱かない、一体二人の間に何があつたというのか？

「いいですよ風間さん、貴方とは選抜戦か七星剣武祭でかはわかりませんが、必ず貴方を倒して更生させてみせます！」

「へっ！やってみろよ【序列二位】、楽しみにしてるぜ」

刀華は真つ直ぐな眼差しで重勝と目を合わせて見てそう宣言をして重勝は不敵な笑みを浮かべてそう言い返した。

「臨むところ！……では私達はこれで失礼します、真田君、佐野さん、見苦しいところを見せてすいませんでした……うた君、行こう」

幸斗と涼花に一礼をしてこの場を跡にする刀華だったが、その後について行こうとしていた泡沫が急に振り向いて重勝を憎悪の眼で睨んだ。

「調子に乗るなよ風間重勝、刀華は今度こそお前を倒す！」

「へえ、それは楽しみだな」

「・・・認めない・・・お前みたいな背負う事の重みを蔑ろにする奴が【序列一位（刀華より上）】だなんてボクは認めない!!」

泡沫はそう言い放つてから刀華の後を追って去って行った。

「・・・なあシゲ？会長さんかなり怒ってたけど何かしたのか？」

二人の険悪な雰囲気になった幸斗は重勝にそう尋ねるが重勝は目をつぶって昔の出来事を断片的に思い出していた。

一年前の七星剣武祭を無断でサボって刀華に抗議された時の事を――

『貴方は何をしたかわかっていますか!?破軍学園の生徒全員を裏切ったんですよ!?何故そんなに何でもないような顔をしているんですか!!』

『気が乗らなかつたんだから仕方ねーだろ、それに七星剣武祭って個人で戦うものだろ？勝手に学園の期待だとか責任だとかを背負えって言われてもはつきり言って迷惑なだけで』

それに対して怒りを抱いた刀華が決闘の名目で摸擬戦を挑んできて、それを無傷で完勝した時に泡沫に憎しみの言葉をぶつけられた時の事を――

『なんでだよっ!?なんで大勢の人達の想いを背負った刀華が負けて、何の覚悟も無いお前が勝っているんだ!?答えろよ風間重勝!!』

『とんだロマンティストだな御祓、別に難しい事じゃねーだろ?ただ単純に俺が東堂より実力が上だったってだけだろうが、大勢の想いを背負っている奴が勝つとは限らねーんだよ』

そして、学園の裏切り者として大勢の生徒達から罵倒の言葉を浴びせられた時の事を

『ふざけんな!この裏切り者めっ!!』

『そうだそうだ!東堂会長に謝れっ!!』

『私達はお前なんか認めない!!』

『いい気になってんじゃねえよ屑野郎!!』

『とつとつこの学園から出て行けよ!お前が居るだけで皆が不機嫌になるんだよ!!』

「……いや、お前等が気にする事じゃねーよ、それよりもさ——」

この事に幸斗と涼花を巻き込むわけにはいかならないと思つた重勝は二人に気にするなと言つて無理矢理話題を変えた。

「お前等今度の休み空いてるか？」

「?……空いてるけれどそれがどうかした?」

「お前等に会わせたい奴がいるんだ、俺と東堂に次ぐ【序列三位】、破軍学園で三番目に強い男にな!」

こうして幸斗達の今度の休みの日の予定が決まった……。

如月兄弟との邂逅と重勝の裏切りの理由

一ヶ月前に破軍学園の近くにある大型のショッピングモールでテロリスト「解放軍（リベリオン）」による襲撃事件があり、この事件は一輝達の活躍によって解決していて、この休日の夕方に幸斗達は重勝の数少ない友人である「序列三位」で《空間土竜（ディメンシヨナルモール）》と呼ばれているＢランク伐刀者《如月烈（きささらぎ れつ）》を誘ってこの場所の三階にある定食屋で夕食を取っていた。

「・・・・・・・・・・」

「ん？どうしたんだいおふたりさん？そんなふうに分悪そうな表情で見つめられると食べ辛いつてリユウなんだけど」

「そりゃあそうだろ・・・」

自分の黒髪のアホ毛を弄りながら自分が注文したサンマ定食のライス・味噌汁・サンマの全てに自分がいつも携帯している「MY焼肉のタレ」を満遍なくかけるといふ悍ましい行為をしている烈を気持ち悪そうに見つめている幸斗と涼花、烈はかなりの変食家のようなのだ。

「マヨラーとかなら聞いたことがあるが何なんだよそれ？」

「じゃ〇だが」

「そういうこと聞いてんじゃねーよ、それが変だっつってんだよ」

「変じゃないぞ、じゃ〇は何にでも合うように作られているってリユウだ」

なんでもかんでも焼肉のタレをかけて食べることを変だと重勝は言うが烈はそれを否定する。まあ、好みは人それぞれなので三人はこれ以上なにも言わずに食事を始めて雑談をする。

「ところで真田、あの【紅蓮の皇女】を倒したそうだな、メツチャ話題になっっているから気になってたんだが皇女様の事はどう思った？」

「ん？はい、かなり強かったと思うがオレには七星剣武祭でブツ倒したい奴がいるんだ、ヴァーミリオンにはク〇ーバー王国から遙々留学して来てんに悪いけどオレだって譲れなかったんでな」

「ヴァーミリオン皇国よお馬鹿、確かにブ〇ツクク〇ーバーのあの兄弟も紅蓮で炎で王族でヴァーミリオンだけぞ」

「・・・そういえばお前倒したい【龍】って言うていたけれどひよつとして巨門学園の大型新人（スーパールキー）の《蒼雷龍（ブルーライトニングドラゴン）》か？」

「!!・・・知ってるんですか!?! アイツの事」

「ああ、模擬戦で《氷の冷笑》を瞬殺したって噂を聞いたってリユウだ」

「アイツ・・・へっ！上等だぜ！」

「やる気になるのはいいがドカドカ龍殺劍ブツ放すなよ幸斗、命がいくつあつてもたりねーしな」

「ああ、あれとんでもなかったな、あの皇女様じゃなかったら塵になつてたつてリユウミたいだしな」

「それだけでもAランクが規格外だつて事がわかるわねホント」

「そうだな・・・ところで佐野、お前この前の狩人との試合の影響で《月花の錬金術師》つて二つ名が付いたりリユウなのは知っているのか？」

「・・・何よその二つ名・・・」

「俺も聞いたなそれ、確かに姫ツチは「鉄化（エンダーンアイゼン）」で手拭いを鉄化してそこらの火で焙つて一瞬で色んな武器作つたりするから錬金術師っぽいな、ハハハハハ！」

こんな感じで雑談をして盛り上がっていた。

「ついでに思つたんだが姫ツチ、お前その格好寒くないのか？」

「動きやすい格好で来たんだけれどね、まあ問題ないわ」

幸斗達は学園が休みなので今日は私服で来ている、涼花の今の服装はピンク色のノースリーブタンクトップと青いホットパンツ姿だ（当然左腕には無数の手拭いを巻いてい

る)、現在は五月であり少しずつ暖かくなってきてはいるものの涼花の服装は真夏にする格好であった為に重勝は心配していたが涼花は気にしていない。

「目のやり場の問題なんだがな……スマン、ちよつと便所行つてくる」

重勝は席を立ってトイレに行つた。すると幸斗と涼花はアイコンタクトで意思疎通をしてから烈に尋ねた。

「なあ烈先輩、聞きたい事があるんだけど」

「ん、何？」

「この前シゲと生徒会長さんがもめていたんだ、だからなにながあつたのか教えてほしい」
真剣な表情で烈に頼む幸斗、彼が言つたのはこの前の重勝と刀華と泡沫とのやりとりだ、重勝は二人に何でもないと言つたがそれは二人に余計に心配させるだけだったのだ。

「……そうだな、まずは去年の七星剣武祭で風間は【辞退】じゃなくて【サボつて不戦敗になった】リユウを話させてもらうぞ」

どうやら烈は教えてくれるようだ。

「去年風間は七星剣武祭で戦いたい伐刀者がいたらしいが、七星剣武祭開幕の前々日に開かれる出場選手達を招いた立食パーティーの時にその伐刀者は代表に選ばれなかつたつて事を知つたつてリユウだな、そいつはその時三年だったらしいから風間が今回の

学内選抜戦にエントリーしているリュウはわからないがその時はそんなリュウで風間はやる気をなくしてサボったんだ」

「……重勝の性格を考えたらそうでしょうね、アイツは自分がやる価値が無いと思つたら絶対にやらないからね……それで？それが生徒会長さんとの険悪な関係の理由はなんなの？」

「まず破軍学園での順位は公式戦での成績で決まる事は知っているな？風間は破軍学園に入學してからその不戦敗を除けば公式戦、模擬戦、学生イベント戦と敗北したことが無い無敵の序列一位（エース）なんて去年の七星剣武祭の前まではそう呼ばれていた破軍の英雄だったんだが……」

——英雄とかシゲのガラじゃねえな……。

——絶対嫌がってたわね、その呼び名。

「そんなリュウで風間は学園中から期待されていたんだ、奴なら《七星剣王》になれる、破軍を七星の頂きへと連れて行ってってくれるってな、だけど風間はその期待を最悪な形で裏切った為に学園中から非難されたってリュウだ。特に東堂は風間をライバル視していた上に責任と人の想いを背負う重みを何よりも大事にする真面目大王だったからな……」

「つまり、生徒会長さんは学園の期待を裏切ったシゲが許せなかったって事？」

「そうだな、ただ東堂は自分の価値観を人に無理矢理押し付けるような奴じゃない、恐らくそれ以外にもライバル視していた風間と戦う事を楽しみにしていたのにそれも無下にされた事や自分が七星剣王になれなくて皆の期待を果たすことができなかつた事なんかで気が動転していたつてリユウだろうな、どうせアイツ東堂にサボつたりユウを話してないんだろうしな、そんなリユウで東堂は風間に模擬戦形式で決闘を挑んだんだが・・・」

烈は何を思い出したのか、気まずそうな表情で話しを続ける。

「これが一方的な試合でな・・・風間は試合開始すぐに〔零か無限（ゼロ・オア・インフイニティ）〕を使って空中を飛行して制空権をとつてな、それから空中から一方的に重力エネルギーの魔弾や砲撃を容赦なく乱射して東堂は逃げ回りながら雷撃をちまちま放つて牽制することしかできなかつたつてリユウだな、いくら東堂が《閃理眼（リパースサイト）》で相手の身体に流れる伝達信号（インパルス）を感じ取つて相手の動きが読めるからといつても制空権を取られている上に自分の身体能力で対処しきれない程の弾幕を撃つてこられたらどうしようもないからな・・・」

空を飛べるというのにはある意味桐原静矢の「狩人の森（エリア・インビジブル）」より厄介だ、大体の伐刀者は制空権を取られただけで行動が制限されてしまい、《身体強化系》の能力しか使えない伐刀者に至つては何もできずにただ一方的に空から爆撃される

だけという圧倒的なアドバンテージを得るからだ。

「……それだけならまだ良かったんだが……【あの止め】はえげつなかったな……」
「幸斗の龍殺剣よりはマシだ」

「「シゲ（重勝）（風間）!?!」」

いつの間にか重勝がトイレから戻って来ていた。

「人が目を離している隙に勝手にベラベラと人の過去を話しやがって」

「黙ってても無駄だと思っぞ、この二人の眼はなんとしてでも目的を果たそうって眼だ、ここで話さなかったら学園のデータベースにでもハッキングするとかのアホな行動をしそうだったから話したってリユウだ」

「……幸斗はともかく姫ツチはできそうだな……はあ……仕方ねーか」

「……つまり生徒会長さんは重勝が学園中の期待を裏切った上にそんな戦い方をされて負けたから恨んでいるって事なの？」

「それは無いな、アイツは一流の伐刀者だけ、戦いに卑怯だの難癖つけるような三流とは違う、そう言った奴等は無理だと決めつけて今回の選抜戦にエントリーしてないザコ共だけだ」

「じゃあ何でだ？」

「東堂は責任感の強い奴だからな……たぶん焦ってんだろ？生徒会長としても学園中か

ら期待を背負った身としても、自分が何とかしなければいけない、この現状を変えなければいけないってな」

大勢の人達の想いの重みを背負う【善意】、これが東堂刀華の強さだ、しかしそれ故に何かあつたら他人よりも自分を戒めるのだ、つまり七星剣武祭で負け続けている破軍学園の現状を変えようと必死になっている為に重勝に勝たなければいけないと思つているのだ。

「これでいいだろ、それよりも烈、お前は今日弟が迎えに来るって言つてたよな？」

「ああ、多分そろそろr「烈、また焼肉のタレをかけて食つているのか？」・・・噂をすれば来たな」

そろそろ話を終わりにしてこの場を解散しようかと思つたその時、定食屋の暖簾を潜つて入店して来た一人の少年が幸斗達の前にやつて来て呆れたように烈に話しかけて来た。

その少年は165cmぐらいの低身長で蒼い袴を履いていてそれと同じ色の甚平を着ていてその上から紅い上着を着ているという変わった服装であり、整った黒髪が夜に良く合っていて中性的な顔立ちだが可愛いと言うより凛々しいと言つた感じの不愛想な雰囲気であり、水晶の様に綺麗に透き通つた蒼い眼はまるで全てを見通すかのような神秘的な印象を感じた。

「前から言っているだろう【絶】ジャ○は何にでも合うように作られているリュウだつて」

「そう感じるのは貴様だけだ」

【絶】と呼ばれた少年は烈の言葉を無情に否定する、どうやら彼が烈の弟のようだ。

——ん？コイツどこかで……。

幸斗は絶を見てどこかで会ったような気がした、なんとか思い出そうとそのスツカラカンな頭を振り絞ろうとするが、その前に涼花が絶に話し掛けた。

「こんにちは……いえ、もうこんばんわの時間ね《如月絶（きささらぎ ぜつ）》君」

「……ああ、まさかこんなところでクラスメイトと会うとはな……」

「は!?!クラスメイト!?!」

絶は幸斗と涼花と同じ一年二組のクラスメイトだった。

「……何故驚いている真田？まさかクラスメイトの顔も覚えていないわけではあるまい」

「……きつとそのまさかよ、このお馬鹿は親しい人間と剣を交えた人間の事しか覚えられないんだから」

「……」

クラスメイトの顔すら覚えていない幸斗に対して押し黙ってしまう絶、あまりのお馬

鹿さに呆れてしまったのだ。

静寂が辺りを流れて数秒経ったその時、幸斗と涼花と重勝の生徒手帳から同時に着信音が鳴ったので三人は生徒手帳をポケットから取り出してディスプレイを見た、送信者は《選抜戦実行委員会》からだ。

「……………へっ！面白そうな相手じゃんか！名前に強そうだし」

「……………ふっ！ランクも圧倒的に上だし能力の相性も最悪の相手ね……………でも、だからこそ倒し甲斐があるわ」

「……………アイツか……………」

選抜戦実行委員会からのメールということは次の対戦相手が決まったということだ、幸斗と涼花と重勝はそれぞれディスプレイに表示された対戦相手を見て三者三様の想いを馳せた。

『真田幸斗様の選抜戦第十試合の相手は、二年二組・《碎城雷（さいじょう いかずち）》様に決定しました』

『佐野涼花様の選抜戦第十試合の相手は、一年一組・ステラ・ヴァーミリオン様に決定しました』

『風間重勝様の選抜戦第十試合の相手は、三年三組・《貴徳原カナタ（とうとくばら かなた）》様に決定しました』

『どうやら第十戦目も波乱を呼ぶ試合となりそうだ。』

ステラ・ヴァーミリオンの憂鬱

刻は幸斗達がショットピングモールで夕食を取る休日の朝まで遡る。

『お兄様、いらつしやいますか？ 珠雫です』

『あたしもいるわよ、ステラちゃんが心配で様子を見に来たの』

『べ、別に私は負け犬に成り下がったステラさんなんてどうでもいいから！ た、ただいっまでも引きこもってお兄様に迷惑をかける駄皇女に文句を言いに来ただけだから！』

「はは・・・今開けるよ」

ここは第一学生寮の一輝とステラの部屋だ、ステラが幸斗に敗北した日からステラはまともに食事を取らずに自室に引きこもってしまい、そのまま現在に至る。

素直になれない珠雫の声に一輝は苦笑いをしてから玄関の入り口を開けて訪問者である珠雫と有栖院を部屋に入室させた。

「おはよう黒鉄さん、有栖院さん」

「どうやら先客がいたみたいね」

珠雫と有栖院がリビングに入ると先に訪問していた机の横で正座している清楚な黒髪の真面目そうな女子生徒が二人に挨拶をしてきた。

「おはようございませす綾辻先輩、貴方も来ていたんですね」

挨拶を返す珠雫、彼女の名は《綾辻絢瀬（あやつじ あやせ）》、《最後の侍（ラストサムライ）》と呼ばれる有名な非刃刀者の剣士《綾辻海斗（あやつじ かいと）》の娘であり、あの試合の翌日に一輝に剣術指南を頼み込んでそれ以来一輝達と共に訓練をしている三年生だ。

「うん、ボクは知り合つて日が浅いけど流石にこんな状態の人を放つておけないよ」

絢瀬はそう言つて部屋の隅を見る、部屋の明かりはついている筈なのにその場所だけ何故か暗闇が覆つているように感じ、その暗闇の中で壁の方を向いて三角座りをして無言で蹲つているステラがいた、この前の試合で負けたことが余程シヨックだったのだから彼女はまるで【燃え尽きたよ、真つ白にな・・】と言つて灰になつてゐる矢〇ジョーの様に真つ白になつたような錯覚を感じさせて虚ろな目をしていた。

「ステラさん、いつまでそうやっていじけてお兄様に迷惑をかける気なんですか？・・この駄皇女、そんなんだから脚が太いんですよ」

珠雫はステラに近寄つて反応を確かめる為にステラを罵倒する、しかしステラは虚ろい目をしたままで全然反応しない、いつもなら【誰が脚太いですつてえっ!?】と言つて猛反発してくるのだが今の彼女はそんな気力さえ無いのだった。

「・・・・これは重症ね」

「……調子狂うわね……。こんな【燃えカスになったステラさん】略して【カステラ】な状態じゃ文句を言う気にもならないわ」

「カステラって……」

ステラの暗い雰囲気一同意気消沈気味になる、ステラは一輝達のムードメーカーな存在だったので彼女が暗くなると太陽が沈んだ様に暗い雰囲気になってしまっただった。

一輝が台所からお茶菓子を持って来るとステラを元気づける方法を皆で考え始める。しばらく考えていると絢瀬が何かを思い付いたみたいであり口を開いた。

「……ねえ皆、ボクにいい考えがあるんだけど」

いろいろ苦勞はしたがなんとかステラを外に連れ出した一輝達は広い湖の畔にある広場に来ていた。

「落ち込んだ時は身体を動かすのが一番だ、ヴァーミリオンさんも剣士の端くれならきつとこれで上手くいくはずだよ！」

一本木の傍で一輝達が見守る中ステラと絢瀬は20mの間合いを挟んで木刀を持ち向かい合っていた、剣を打ち合つてステラの闘争心を取り戻すというのが絢瀬の魂胆だった。

「・・・確かにステラの性格を考えると一番効果的な方法だと思うけど・・・」

一輝は心配そうにステラを見てそう言う、何故なら絢瀬は毅然と剣道の中段構えをとっているのに対してステラは当然の如く虚ろな目をして俯いたまま両腕をだらしく下げて生気を感じないからだ。

「・・・これはとてもじゃないけど戦えるコンディションじゃないわね」

「ホント手のかかる人、まあ一度キツイのが入れば流石の駄皇女も目を覚ますでしょ」

有栖院と珠雫もステラを心配していた、日が照つて湖に光が反射し凄く明るい真昼だというのにステラを中心とした半径約1mが暗黒空間とも表現してしまう程暗いのだ無理もない。

「……それじゃあ……いくよっ!!」

絢瀬は攻撃宣言と共にステラに向かって駆けだした、対するステラはそれでもなお全く反応しないで棒立ちしているだけだ……そして――

「ハアアアアアツ!!」

「ぐふっ!!」

「「あ」」

チカラ強く振り抜かれた絢瀬の木刀がステラにクリティカルヒットしてステラは芸術的と言つてもいい程美しい放物線を描いて湖にダイレクトダイブ、大きな水柱が立ち鮮やかな虹が架かった。

「……あれ? おかしいな? ……」

絢瀬は自らに水飛沫がかかる中で呆けた、コンナハズデハーと言いたげに。

「……はあ……まったく本当にしようがない人……」

湖からステラを引き上げた一輝達は次に珠雫の提案で破軍学園の敷地のはずれにある「ニヤンニヤンランド」という猫の触れ合い広場に来ていた。

「原始的で野蛮なステラさんがこれで立ち直るかはわかりませんが、気分を害した時は小動物と触れ合うのが一番です、特に子猫を撫でると凄く癒されますよ、私も気分が優れない時はこうしてよく子猫を撫でて落ち着きます」

珠雫は白い子猫を抱き上げて撫でながら一輝達に説明をする、珠雫は無表情を装っているが若干口端が吊り上がっていてかなり嬉しそうだった。

「意外だな、珠雫が猫好きだったなんて」

「うふふ、そうね、びっくりしちゃった♪結構女の子らしい珠雫の一面が見られて」

子猫を撫でて嬉しそうにする珠雫を見て若干驚く一輝とその場を茶化す有栖院、珠雫の兄である一輝と姉(?)のような存在である有栖院は珠雫の女の子らしい一面が見られて嬉しいのだ・・・しかし——

「ええ、好きですよ——

——層で卑怯で汚い人間よりよっぽど好感が持てます」

「……………」

珠雫は顔に陰を落として笑顔でそう言った、珠雫は過去に一輝が実家から迫害を受けたうえに居ない者として扱った事から人間嫌いになったのだ、やはり珠雫は平常運転だった。

「…………でもありがとう珠雫、ステラのために気を使ってくれて」

「別にステラさんの為ではありません、これ以上お兄様に迷惑をかけさせない為にも早く立ち直ってもらいたいだけです」

ステラを元気づけようとしてくれた珠雫に感謝の言葉を言う一輝だが全く素直にな

らない珠雫、ステラと仲が悪くていつもケンカしている珠雫だがなんだかんだって心配なのだ。

「はは……そういえばステラは……えっ!」

一輝はいつの間にかいなくなっていたステラを探すために辺りを見渡す、するとすぐ近くに沢山の猫が山のように群がっている中から人間の手が一本飛び出でているのが見えた……ステラの手だ……。

「わああああああっ?!?ステラアアアアアッ!!」

「あらあら♪早速猫ちゃん達と触れ合っているわね、あんなに沢山の猫ちゃん達が群がっちゃってカワイイわ♪」

「……はあ……何やっつてんですかあの駄皇女は?……」

大量の猫の山に埋もれるステラを見て大慌てでステラの救出に向かう一輝に和む有栖院に呆れる珠雫、結局これも上手くいかなかったようだ。

「えへへへへ、カワイイ♥」

その横で無邪気に黒い子猫に頬ずりしている絢瀬の事は……そっとしておこう……。

それからも有栖院の提案でショッピングをしたり一輝の案によりいつものトレーニングをしたりしたのだが、ステラは終始俯いたまま虚ろな目をしたままであった。

今はすっかり日が沈む時間帯となったのでこの日はこれで解散となり一輝とステラは珠雫達と別れて第一学生寮の自室に戻って来ていた。

「ステラ……」

「……………」

一輝が声をかけても部屋の隅で壁の方を向いて三角座りをして俯いたまま返事をしないステラ、ステラがそうなった原因などとづくに分かりきっている。

「……ステラは約束を守れなかったことを気にしているの？」

「……………」

一輝とステラの約束……恋人同士になったあの日に誓った七星剣武祭の決勝でもう

一度戦おうという約束。

『ねえ、ステラ』

『・・・なによ』

『さつき、僕と一緒にならどこまでも上を目指していけるって言うてくれたよね？』

『・・・うん』

『僕もだ、僕も、ステラとならどこまでも強くなれる気がする』

『だから行こう、二人で、騎士の高みへ』

『そしてその頂きを巡る最後の戦いで・・・僕は君と戦いたい』

『・・・望むところよっ！今度は絶対、負けてなんてやらないんだからっ！』

『約束だ』

しかし、それは儚く散った・・・。

『オレだって七星剣武祭でブツ倒すと誓った【龍】がいるんだあああつ!!こんなところで
テメエに負けている暇はねえんだよっ!!ステラ・ヴァーミリオンツ!!』

運命を覆し続ける一人の前に進む事しか知らない伐刀者の龍(竜)すらも葬る一撃に
よって・・・。

『龍殺剣(ドラゴンスレイヤー)アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!』

容赦なく消し飛ばされてしまった。

「・・・・・・・・イッキ・・・・・・・・アタシ悔しい」

あの瞬間を思い出してしまったステラはついに耐えられなくなって弱音を吐きだした。

「約束したのに・・・・・・・・大切な約束だったのに・・・・・・・・アタシ・・・・・・・・ううつ・・・・・・・・」

三角座りをしたままだがステラはいつの間にか一輝の方を振り向いて泣いていた、いつも気高く燃え盛る陽光の様に強い紅蓮の皇女の姿は今は何処にも無く凄く弱々しい姿だった。

本当ならこんな情けない姿など最愛の恋人にして最強のライバルである一輝に見せなくなかっただろう、しかし、もう我慢の限界だ。

「・・・・・・・・うつ・・・・・・・・うつ・・・・・・・・うわああああああんっ!!!」

「・・・・・・・・ステラ・・・・・・・・」

「悔しいっ!!悔しいっ!!悔しいっっ!!!!ごめんなさいイッキツ!!大切な約束だったのにつ!!アタシ・・・・・・・・アタシツ!!・・・・・・・・ううつ!」

「・・・・・・・・」

突如立ち上がって自分の胸に飛び込んで来て泣きじやくるステラを一輝は無言で抱きしめて彼女が泣き止むまで胸を貸し続けたのだった。

・・・・・・・・ステラは散々一輝の胸で涙が枯れるまで泣き続け、今はそれも済んで現在は一

輝とベランダに出て星空を見上げていた。

「……ごめんねイツキ、情けない姿を見せちゃったわね……」

「いや、むしろ嬉しかったよ、それだけステラは僕を頼りにしてくれているってことでしょ。」

「……はあ……イツキだからこそ弱いところを見せたくなかったのよ、もう遅いけれどね」

「はははは……」

ステラの告白を聞いて苦笑いをする一輝、これまでの暗さはステラにはもう無い、結局一人で立ち直ってしまった彼女を見て一輝は——

——ステラは弱くなんかないよ、僕なんかよりずっと強い人だ。

改めてこう思った。

「……確かに今年の七星剣武祭はステラは出場できないかもしれない、一敗ならまだ本当に決まったわけじゃないけれど、折木先生の話によるとこの選抜戦はこのまま進めば代表枠六名は無敗が埋めることになるって言っていた」

「うん、それは知ってる、つまりアタシは実質七星剣武祭への道は閉ざされたってことだって……」

「そう……だけどステラは何も恥じる事はないよ」

一輝は思い出す、自分との約束を果たす為に最後まで勇猛果敢に戦い続けたステラの姿を――

『アタシはイツキと七星の頂きをかけた戦いでもう一度戦う約束を果たす為に、こんなところでアンタに負けるわけにはいかないのよっ!!』

最後に言ったあの言葉を一輝が聞き逃す筈がなく、自分との約束をそこまで大切に思っていてくれたステラに対して一輝は嬉しくて仕方がなかった。

「一敗も出来ないなんて、厳しい戦いよね」

「うん、だけど……僕も他人事じゃないな」

皆同じルールで戦っている、この学園で七星の頂きを目指す誰もがただ一敗も許されない、それが選抜戦だ、結局のところ七星の頂きに至れるのは一人だけなのだから。

「次で第十試合目、もう選抜戦も折り返し地点だ、僕も一層気を引き締めてかからないからね」

「うん、頑張つてねイツキ!アタシも前を向かないとね、まだアタシ達は一年生だから来年だつてある、それに今年だつて絶望的といつてもまだ本当に終わつた訳じゃない、運に頼るのはアタシの性に合わないけれど上手く無敗の生徒と当たつて勝ちまくれば今年の七星剣武祭への道を繋ぐことだつてできる!……よしっ!やるわよおおおっ!!」

ステラは一度過ぎた事に対してこれ以上ウジウジするのを止めて前に進むことを選んだ、気が付けばステラは以前の様な元氣いっぱい姿を取り戻していた。

——君は本当に強い女性（ひと）だ。

「それにしてもシズクの奴アタシが何も言わないのをいいことに好き放題言ってくれたじゃない！」

——そんな君だから僕は——

「アイツこの脚の事をなんつった!?!」

——……ん？

「誰の脚が猪八戒みたいですか？」

「いや、珠雫はそんなk「確かに聞いたわよゴラアアアアアツ!!」いや、一国の皇女様がそんな言葉使ったら駄目だつて——」

ウガアアーっと両拳を上に向けて叫ぶステラをなだめようとする一輝だったがその時、生徒手帳の着信音が鳴り響いた。

「……アタシのみたいね……」

鳴ったのはステラの生徒手帳だったみたいでありステラはポケットから生徒手帳を取り出してディスプレイを見た。

『ステラ・ヴァーミリオン様の選抜戦第十試合の相手は、一年二組・佐野涼花様に決定し

ました』

選抜戦実行委員会からの対戦相手の通知だ、対戦相手は涼花……この前の試合でEランクでありながら一輝が大苦戦した桐原静矢にほぼ無傷で圧勝した選抜戦無敗組だ、それを見たステラは嬉しそうに腕を振るわせていた。

「グレートだわ、こいつはあ！言った傍から無敗の生徒と当たるなんて、運はアタシに味方をしたみたいね！」

かくして選抜戦の折り返し地点である第十試合目の対戦カードが決まった、果たしてステラは涼花を倒して七星剣武祭への道を切り拓くことができるのか？それとも……。運命の第十戦目が今、始まろうとしていた……。

選抜戦第十戦目開幕！

……破軍学園第一訓練場のバトルフィールド内で模擬戦をする二人の生徒の姿があった……。だがこれは戦闘と言えるようなものではない、何故なら一人の黒髪長身痩躯の少年が上空を飛び回ってもう一人の栗色の長髪三つ編みの少女を空から重力の魔弾や砲撃などによる空爆戦法で容赦なく一方的に蹂躪しているからだ。

「くっ!?!外れない!」

栗色の長髪三つ編みの少女……。東堂刀華はバトルフィールドの中央で五十にも及ぶ数のテニスボールくらいの大きさの重力エネルギーの魔力球に周囲を包囲されている中で黒く光る重力エネルギーでできた輪に両腕ごと身体を縛られて無防備状態だ、この輪は今刀華が戦闘をしている黒髪長身痩躯の少年……。風間重勝の伐刀絶技の一つである《重力の拘束具（グラビティバインド）》である。

「閃理眼で行動が全て読まれているんだつたらそれに合わせて誘導して行動を制限して解つていても対処できない状況を作ればいい……。フィーネ（終わり）だぜ東堂……。そう宣言して80m上空から柄に引き金があつてその上部分に回転式弾倉（リボルバー）がある全体的に黒い色をした大剣……。所謂【砲剣（ガンブレード）】型の霊装の

切っ先を地上にいる拘束されて身動きが取れない刀華に向けて回転式弾倉を六回転（フルリロード）する。

重勝の霊装には自らの魔力を弾倉に籠める事によって弾倉に魔力を圧縮して貯蓄しそれをリロードすることによって一時的に自らの魔力を爆発的に高めることができるという能力がある、今重勝はそれによってAランククラスの魔力を身体中に纏っている、あまりにも高濃度の魔力なので重勝の身体に黒いオーラが纏わり付いているように見えた。

「……悪魔……」

ハイライトが消えた冷たい眼で刀華を見下ろす重勝を見て恐れるように刀華はそう言う、黒い魔力オーラは風の様に変え、彼の周囲を球形に漂い始めてそれは次第にうなりを強め対流を生み出し大気を震撼させた。

黒い魔力は更に濃度を上げて黒から白に色が変わり、それが重勝の背後に六翼の様に広がった、更に砲剣の切っ先にも膨大な白い超重力エネルギーが周りから集まる様に収束されて巨大な光の球が形成された。

「……お前がそう言うんなら……悪魔でも構わねーよ……」

重勝が冷たい声でそう言い返したところで……刀華の世界は白く染まった……

「はっ!?!」

刀華は破軍学園に関する資料が無数に散乱している机の上に伏して寝てしまつたらしく、たつた今悪夢（ゆめ）から目を覚ました。ここは破軍学園の生徒会室だ、刀華は周りを見回してみると自分の部下達がいつも室内を散らかす所為でガラクタが散乱している見慣れた風景を見てホッと一安心をした。

「あつ！刀華ちゃん！目を覚まされたのですね、大丈夫ですか？酷くうなされていたみたいですが・・・」

刀華が目を覚ますと近くの机で各部活動の予算の計算をしていた金髪長身で純白の鍔の広い帽子を被つて同じ色のベルラインドレスを身に纏つた貴婦人のような少女が

立ち上がった刀華の身を安じるように彼女に声をかけて駆け寄って来た。

彼女こそが生徒会会計にして破軍学園序列四位〔貴徳原カナタ〕だ。

「……カナちゃん? ……」

駆け寄って来たカナタを見て呆ける刀華、寝ぼけているのだろうか?

——何で今更あの時の夢なんか見たんだろう? ……そういえば……。

刀華は思考を張り巡らせる、するとカナタが何かを察したみたいに話した。

「……刀華ちゃん、昨日わたくしの第十戦目の相手が風間さんに決まったと実行委員会からの連絡が来た時から気が気で無い様子でしたが……もしかしてそれが関係しているのでしょうか?」

「………」

カナタの問いに刀華は無言のまま俯く、刀華はカナタが心配なのだ、カナタを信頼していないわけではないが風間重勝の実力は一年前に完全敗北をした刀華が一番よくわかってる、だから何も言い返せなかった。

だが沈黙は肯定と受け取ることができ、カナタは何も答えない刀華に対して笑顔を浮かべた。

「……刀華ちゃん」

「……カナちゃん?」

優しく声をかけるカナタに刀華は顔を上げて彼女と目を合わせる、カナタの表情はいつも通りの優雅な笑みだが眼は真剣だった、まるで覚悟を決めた戦士のように……そして――

「風間さんは刀華ちゃんが倒すとおっしやっていました……別にわたくしが倒してしまつても構いませんわよね？」

その一瞬、カナタから発する濃密すぎる血の芳香が室内に広がったように感じた。

『LET' s GO AHEAD (試合開始)！』

「うおおおおおおお!!!」

『おおおつと！開始早々碎城選手が自らの霊装である《斬馬刀（ざんばとう）》を頭の上で振り回す！大質量が風を切る轟音が実況席まで届いてきそうな迫力だああああ！』

—— 斬馬刀つてそのままじゃん!? ひねりがねえな！

ここは破軍学園第二訓練場、今現在この場所では学内選抜戦の第十戦目の試合が進行中であり、今試合をしているのは幸斗と坊主頭で巨漢の男子生徒・・・生徒会書記にして《城破き（デストロイヤー）》の二つ名を持つ【碎城雷】だ、幸斗は碎城の霊装の名前が見たまんまなので心の中でツツコミを入れた、彼は碎城が振り回す斬馬刀の圧力など気にも留めていないようだ。

「問おう！貴殿は其（それがし）の能力を知っておられるか？」

頭上で斬馬刀を回転させながら碎城は幸斗に問う。

「あ、調べんの忘れてた・・・」

「フツ！流石【紅蓮の皇女】を倒した男、大した余裕だ」

「あはははは！わりいわりい」

「されど・・・此度ばかりはその余裕は仇ぞ！」

轟音を鳴らして碎城は頭上で回転させていた斬馬刀を幸斗に向けて構えた。

「其の能力は【斬撃重量の累計加算】！振り回せば振り回すほどに重くなる！限界重量はざっと十トン！其の能力を知らずに限界までチャージさせてしまった貴殿の落ち度だ

!

「そうかよ・・・それが運命だつて言うんなら——」

『おおおつと?!真田選手、なんと自らの霊装である鬼童丸をリングに突き刺して手放した?!そして今まさに斬馬刀を打ち下ろさんとする碎城選手に左拳を振りかぶつて突撃して行つたああああつ!!なんたる無謀!真田選手は碎城選手の一撃など素手で十分だ』
 というのかあああつ!!』

「つ?!そこまで愚弄するか!・・・いいだろう!地に沈め、真田幸斗つ!!《クレツシエン ドアックス》!!」

霊装を捨てて素手で向かつて来る幸斗を見て嘗められていると感じた碎城は怒りを乗せた一撃で地を割る程の超重量を宿した斬馬刀を幸斗に打ち下ろした・・・しかし—

「——その運命を覆してやるつ!!」

「な、にいいつ?!」

幸斗の左拳が打ち下ろされる斬馬刀と正面から激突して、なんと全く拮抗すらせずにバキインという音と共に斬馬刀が砕け散った、そしてその勢いのまま幸斗の左拳が碎城の顔面に叩き付けられた。

「びかんばんび%#*&ぶべ@じつつ!!」

ジャ○アンがの○太の顔を殴った時のように顔面が陥没した碎城は意味不明な言語で叫びながら真っ直ぐ吹っ飛び、後方の赤ゲートを通って軌道上にある壁を全て突き破って第二訓練場外に飛んで行った。

『なななななんということだあああああああつ?! 真田選手、碎城選手の斬馬刀を素手で殴り砕いてそのまま碎城選手を吹っ飛ばしてしまったあああああつ!!』

「嘘だろ?・・・」

「ただけ化物なんだよアイツ・・・」

「ていうか霊装が砕けるところなんて初めて見た・・・生きているのか碎城さん?」
「俺・・・少しちびつちまった・・・」

またしてもとんでもない光景を見せた幸斗に一同は哑然とする、こう何度も人外な事をやつてのける幸斗は破軍学園の生徒達に化物認定されていた。

・・・そして、10カウント場外ルールによってカウントダウンを行い十秒が経過した。

「碎城雷、場外! 勝者、真田幸斗!!」

「グラッツェ!・・・少し物足りねえけど・・・まあ、楽しいバトルだったぜ!」

レフェリーが幸斗の勝利宣言をすると幸斗は碎城が飛んでいった赤ゲートの方に指さしてそう言うてから青ゲートの方に退場して行った。

『砕城選手戻って来ません！【殲滅鬼（デストラクター）】真田幸斗選手これで十連勝！砕城選手の重さ十トンの一撃を素手で砕くという人外技で勝負を決めましたああああ！いやあしかしこの前のヴァーミリオン選手との試合の時に勝負を決めた龍殺剣といい、真田選手には驚かされてばかりです！』

「本当に凄まじいわね彼」

「うん、まあ彼はステラに勝つたんだしこれくらいはやつてもおかしくはないかな？」

「いや、十分おかしいと思いますよお兄様」

「ははは・・・」

観客スタンド二階で観戦している一輝達がそれぞれ今の試合の感想を述べた。

——真田幸斗君か・・・僕よりも魔力量が少ないにも拘らず圧倒的にステラを上回る攻撃力・・・それにステラの天壤焼き焦がす竜王の焰（カルサリテイオ・サラマンドラ）を打ち破ったあの時に彼が左腕に纏っていた光は一刀修羅の光に似ていた・・・一体彼は何者なんだろう？

幸斗と同じ生まれながらにして才能に恵まれなかった身として一輝は幸斗に何か思うことがあるようだ。

「お疲れさん幸斗」

「いや、あれはお疲れって程じゃないわね、どう見ても楽勝だったし」

青ゲートの前で退場した幸斗を出迎えたのは重勝と涼花だった。

「ハハハハハ！まあ、少し手が腫れたけどな！」

「碎城の最大の一撃を素手で殴って腫れるだけってお前な・・・」

「いつもの事でしょ？気にしていたら身が持たないわよ重勝」

笑いながらとんでもない事を言う幸斗に呆れる重勝と涼花、だが呆れている暇はない、次は涼花の試合だ、バトルフィールドを見るとたった今赤ゲートから涼花の対戦相手であるステラが入場して来ていた。

『さあ注目のカードはまだ続きます！本日の第十九試合開始だ！まず先にリングに上

がったのは皆さんご存知の破軍学園唯一のAランク騎士！〔紅蓮の皇女〕ステラ・ヴァーミリオン選手だああああっ!! ヴァーミリオン選手は選抜戦第八試合目まで全て相手の棄権負けによって威圧だけで全勝をしていた七星剣武祭代表最有力候補だったのですが・・・前回の試合先程の試合で勝利した真田選手に惜しくも敗れ、七星剣武祭代表入りは厳しい状況になっています! しかし今回戦う相手は選抜戦九戦九勝無敗の選手である為この試合に勝利すれば七星剣武祭への道が拓けるかもしれません! だがそれは逆に考えるともう後が無いということ! ヴァーミリオン選手は文字通りの崖っぷちで試合に臨む事となります!! 』

「・・・行けるか涼花?」

この前よりも凄まじい気迫を纏ってバトルフィールドに立つステラを見て幸斗は不敵な笑みを浮かべて涼花に尋ねた。

「・・・正直魔力的にも能力の相性的にも厳しいわ・・・普通なら何もできずに負けるでしょうね・・・」

返つて来た答えはかなり後ろ向きだった、これが普通の答えなのだろう・・・だが、この三人は世界最強クラスの傭兵団のメンバーだった三人だ、普通では無い。

「・・・でも、負ける気なんかないんだろ?」

「勿論よ! わたしを誰だと思ってるの? わたしは元西風隠密機動部隊の〔鉄の乙女〕ア

イアンメイデン) 佐野涼花なのよ」

「愚問だったな幸斗、何故なら俺達は」

「ああ、わかってるぜ！」

「道理を叩き潰して運命をブツ飛ばす!!それがオレ(わたし)(俺)達【西風】だ!!」
 三人の心が一つとなり気合を入れて幸斗と涼花は交代するようにハイタッチを交わして涼花はバトルフィールドに上がって行った。

『そして次に現れたのはこちらも期待のルーキーである【月花の錬金術師】の二つ名を持つEランク騎士!佐野涼花選手だあああつ!!前回の試合である【無冠の剣王】が大苦戦をした【狩人】桐原選手の【狩人の森(エリア・インビジュアル)】をリング全体に砂鉄をばら撒いて足跡を辿るとい画期的な方法で破り頭角を現した可憐な華!ここまでの選抜戦の対戦成績は先程も言った通り九戦九勝無敗の素晴らしい成績を残しています!』

ステラの20m前に涼花は立って向かい合い、辺りの空気が二人の闘気と会場の大歓声によりヒートアップしていた。

「アンタ、確かりョウカっていったわね・・・悪いけどアンタの快進撃もここまでよ!」

「ご苦労なことね皇女サマ、心配無用よ!勝つのはわたしなんだからね!!」

「傅きなさい!妃竜の罪劍(レーヴァテイン)!!」

「希望（ゆめ）を創り出せ！鉄の伯爵（アイゼングラーフ）!!」

『さあお互いに固有霊装（デバイス）を顕現させて構えた！この試合、ヴァーミリオン選手が勝って自身の七星剣武祭代表入りの可能性を繋ぐのか!?それとも佐野選手が勝利して【狩人】に続いて【紅蓮の皇女】にもとどめを刺すのか!?それでは皆さんご唱和ください!』

『LET' s GO AHEAD（試合開始）!』

Aランクとは？

幸斗VS碎城の試合の決着と同時刻、第一訓練場では如月絶VS兎丸恋々の試合が行われていた。

『おおっと兎丸選手！《マツハグリード》を使いリング全域を目に捉えきれない速度で駆け回ってリング中央にいる如月選手を翻弄しています！如月選手棒立ちのまま動けない！やはり音速を超えた速さの前には成す術がないのか？どう思いますか西京先生？』

実況解説の男子生徒がゲストで実況席に招かれて来ている寧音にそう質問をする、絶がバトルフィールド中央で極道の人間が所持しているような短刀・・・所謂「ドス」のような形状をした自身の霊装《緋月七夜（ひづきななや）》を左手に持つて棒立ちのまま全く動かないのを見れば誰だつてそう思うだろう、しかし寧音はこれを否定する。

『君の目は節穴かいメガネ君？』

『メガネ君!?!』

『あれは諦めて立ち往生してるじゃあないさね、ほれ、ぜつつーの目を見てごらん？眼をキョロキョロしているだろう？』

寧音の言う通り絶の眼は何かを追うように超高速で縦横無尽に動いていた。

『キシヨイ!はつきり言つてキシヨイです!・・・しかしこれはどういう事か?適当にやっているわけではないようですが、もしかして如月選手は兎丸選手の動きを眼で捉えていると言うのでしょうか?』

『そう言うことさね』

——驚いたよ、まさかアタシの動きを眼で追える人がいたなんてさー・・・でも眼で追えたつて身体がついてこれなくつちや意味ないね!

恋々は構わず絶の背後から音速越えの速度で迫る、その速度はマツハ2を超えていた。

「これで決める!《ブラックバード》・・・っっていない!」

恋々が勝負を決める一撃を繰り出そうとした時、既に何故かそこには絶の姿はなかった・・・一体何所にと恋々が思つたその時——

「ふっ!」

恋々は背中に衝撃を感じ気付いた時には彼女は仰転していた。

「えっ!」

恋々は何が何だか分からなかった、何故なら今彼女の視界に映っているのは仰向けに倒れた自分を見下ろす絶の姿だったからだ。

「あ・・・ありのままに今起こつた事を話すよ!アタシはキサラギ君の背後を取つたかと

思ったら逆に背後から一撃をくらっていた、何を言っているのか分からないと思うけれどもアタシも何が起こったのかわからないんだ！頭がおかしくなりそうだった！催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチャなもんじゃあ断じと「超スピードで合っているぞ」ええっ!!？」

ネタをかます恋々にツツコミを入れる絶、どうやら単純に恋々を超える速度で動いただけだったようだ、それもただ少しだけ魔力で強化した身体能力だけで。

「う……嘘だっつ!!？」

「嘘じゃない、今のは《如月瞬煌流体術》秘技《瞬閃（しゅんせん）》だ。これは並の伐刀者が使おうとも別に音速を超える速度が出せるわけではないのだがオレはこの技と相性がいいみたいでな……マツハ20くらい軽く出せる」

「殺○んせー!!？」

「口だけは元気のようにだが身体はもう動かせないだろう?」

「……あははははっ! そうみたいだね……」

「そうか……じゃあとどめを刺す前に言っておきたい事がある」

「ん、何?」

「……マツハ2なら【ブラックバード】じゃなくて【フォックスハウンド】だろうがっ!!」

「知ってるのニー〇レス!」

「はあっ!」

「ぐほおっ!!」

あまりマンガとか読まなそうな絶が少しマイナーな作品を知っていた事に驚いた恋々はそのまま絶の鉄拳を左頬にくらって意識が暗転（ブラックアウト）した。

「兎丸恋々、戦闘不能!勝者、如月絶!!」

レフェリーが絶の勝利を告げて試合は決した。

『決まったああああ!勝ったのはCランク騎士、如月絶選手だああああっ!!いやあしかし如月選手凄い身体能力ですね西京先生・・・え?』

実況解説の男子生徒が興奮しながら隣にいる筈の寧音に話し掛けるが、そこには既に寧音はおらず代わりに寧音に似せた人形とその額に貼られた書置きがあった。

『そろそろ第二訓練場で面白そうな試合がやるからそっちに行くねー!バイバーイ!』
書置きにはこう書かれていた・・・。

『ええええええええええっ!!?』

メガネが割れる程の絶叫が第一訓練場内に響き渡った・・・。

「はっ！」

「無駄よ！」

場所は替わって第二訓練場、涼花は試合が開始されてすぐに左腕に無数に巻かれてい
る手拭いのうちの一つを右手に取ってそれを鉄化（エンダーンアイゼン）を使って鉄の
ブーメランに変えてステラに投げるが、彼女が纏う摂氏三千度の炎に溶かされて一瞬に
して蒸発してしまう。

——普通の鉄は約千五百度で溶けてしまうわ、そしてわたしの【鉄化】で変化さ
せた鉄は使った魔力にもよるけれど基本的に耐熱温度は二千二百度……皇女サマの《妃
竜の羽衣（エンプレスドレス）》を突破するには足りないみたいね……なら！

「これならどうっ！」

涼花はもう一つ手拭いを右手に取って手拭いの先っぽを振じて尖らせてから鉄化を使い、鉄の投擲槍に変化させてもう一度ステラに向かってそれを真っ直ぐ投げた。

「・・・アンタ馬鹿あ!?!何度やったって——っ!?!」

ステラはそれに対して妃童の羽衣を纏っているから問題ないと思い動こうとは思わなかったが、槍が眼前に迫った時にステラは槍の切っ先が朱く光っている事に気が付いて咄嗟に左に躲した、するとその槍の切っ先以外は先程と同じように溶けて蒸発したがその切っ先だけは溶けずにステラの右頬を掠り後方の壁に突き刺さった。

「・・・へえー、やるじゃないリョウカ、槍の切っ先だけに魔力を収束させて練り込んで耐熱性を上げるなんて」

「御褒めいただき光荣ね」

「今度はアタシの番よ!アンタがEランクだからって手加減なんかしない!ガチの本気のマジモードで行かせてもらおうよっ!!」

「ステラさん快調みたいですね」

「うふふ、そうね、この前までの落ち込み様が嘘みたいね」

観客スタンド二階で一輝と共に観戦をしている珠雫と有栖院が元氣そうに試合をするステラを見て感想を述べる、二人はこの前までこの世の終わりの様な表情をして灰になっていたステラが今日まともに試合ができるのかと心配をしていたのだがその心配もなさそうなので安心していた。

「ね、心配はいらなかつたでしょ?ステラは強い、心身共にね」

「・・・まつ! そうでなければ張り合いがありません・・・ステラさんの事はちゃんと見極めなければなりませんからね(ボソ)・・・」

「?・・・何か言つたかい珠雫?」

「何でもございませぬお兄様」

「クスクス♪」

「?・・・まあいいけど・・・ステラはどう攻める気なんだr——えっ!」

何気なくバトルフィールドから視線を外して珠雫達と会話をしていた一輝はバトル

フィールド内に視線を戻すと突然第二訓練場内の気温が急激に上昇したので一瞬驚いたがその正体はすぐにわかった、ステラが摂氏三千度の炎を纏った妃竜の罪剣を真上に掲げそれを光の柱に変えていたからだ。

「【天壤焼き焦がす竜王の焰（カルサリテイオ・サラマンドラ）！いきなり全力全開だねステラッ！！」

「・・・実際に自分に向けられてみるととんでもない重圧だわ・・・」

目の前の超エネルギーの光の柱は動画や観客スタンドから見たのとは大違いな威圧感を感じた涼花は若干額に冷や汗を掻いていた。

「はあああああああああああああつ!!!」

そしてステラは勢いをつけて大剣を振り下ろし、超エネルギーの光炎が涼花に向かって放たれ、そのまま涼花を飲み込んだ。

『佐野選手成す術もなく巨大な炎に飲み込まれたあああああああああああつ!!これで勝負ありか!?!佐野選手は消し炭になってしまったのかあああああつ!?!』

しばらくすると涼花のいる辺りを焼き払った炎が消えていく．．．するとそこにはなんと地中深くまで空いた半径約3 m程の円形の穴が石畳のバトルフィールドにポツカリと空いていた。

『こ．．．これはどういう事だあああつ!?!ナパーム弾の直撃にも耐えうる特殊石材で作られている伐刀者専用のリングに穴が空いています！いったいこれは．．．』

『地下100 mくらいまでを鉄に変えてそれを魔力強化した拳で砕いたみたいさね』

『うおっ!?!西京先生いつの間に!?!ちよつと困りますよ勝手に!』

『固い事言うもんじゃあないよ、見たところゲストはいないんだろう?ウチが解説引き受けてあげるよ』

『．．．．はあ．．．．しようがないですね．．．』

『．．．．あの人自由過ぎるでしょ．．．』

ステラは無断で実況席に座って解説役をブン取った寧音の声を聴いて呆れながら空

いた穴に歩いて近づいた。

「つまりリョウカはこの下にいるってことね・・・よしっ！」

ステラはそう確信すると大剣に蛇のように長い身体を持つ竜の形をした炎を纏わせて振り上げる。

「文字通り墓穴を掘ったわねリョウカ！これでアンタは逃げ道を失ったも同然！このままこの穴に妃竜の大顎（ドラゴンフアング）をブチ込んであげるわ！・・・と見せかけて！」

ステラは竜炎を纏った大剣を真上に振り上げながら後ろに身体を反転させる、するとその30m先の床がこの穴と同じくらいの大きさの範囲が鉄になっていて、その部分にたった今亀裂が入り砕けてバトルフィールドにもう一つ穴が空いた。

「本命はこっちでしょ!? 捉えたわよりリョウカツ!!」

ステラはそれを見逃さなかった、その瞬間に大剣を振り下ろして放たれた炎竜がその穴の中に突入して地中深くまで潜り、大爆発と共にその穴の中から天井まで巨大な炎柱が立った。

「勝った！第九話k「言わせないからっ!」ぐふっ!」

ステラが勝利を確信して真上に右の人差し指を掲げてネタを挟んで勝利宣言をしようにとした瞬間に最初に空いた穴の中から涼花が飛び出して来てツツコミと共に繰り出

した跳び蹴りがステラの背中にクリーンヒットした、二つ目に空けた穴は囷だったのだ。

「絶影っ！」

「ぐっ!？」

「叩みかけるっ!!」

「くっ!がっ!このっ!？」

いつの間にか二本の玩具の剣を鉄化させて小太刀を生成していた涼花はそれを両手に一本ずつ持って目の前でよろめくステラに目で追えない程の速度で左右前後東西南北から縦横無尽に連続攻撃をして叩みかけていき、体勢が崩れているステラはまともに防御できずにどんどん身体中を切り刻まれていく。

「調子に乗るなああっ!!」

「くっ!？」

激昂したステラは無理な体勢のまま無理矢理大剣を振り上げて涼花を上空に吹き飛ばした、涼花はなんとか二つの小太刀で防御に成功したもののステラの強力な臂力で振るわれた一撃は凄まじく鉄の小太刀は二本共砕け散ってしまった。

・・・しかし、涼花の追撃はこれでは終わらない——

「えっ!？」

ステラは追撃仕返してやろうと涼花のところまで跳躍しようとするがその時に彼女は自分の右脚が動かない事に気が付き右足を見てみた。

「ちよっ!!?いつの間にな?」

ステラの右足にはなんと鉄の足枷が絡み付いていないか、涼花は連続攻撃の最中に手拭いを一枚ステラの右足に絡み付かせて鉄化させていたのだ、しかしこの程度ならステラは摂氏三千度の炎で一瞬にして溶かすことができるからあまり意味がないように思えるが――

「一瞬止まれば十分よっ!これで決めるっ!!はあああああつ!!」

涼花は空中から無数の鉄のブーメランを下にいるステラに向けて放った、これらには全て魔力強化によって耐熱性を上昇させてある、これで勝負は決まったか?――

「………はあ……甘いわよりヨウカ」

「……えっ？」

「ふんっ！」

無数のブーメランがステラに突き刺さろうとしたその瞬間、ステラは腹にチカラを込め身体全体から炎を爆発させるように放出して無数のブーメランと足枷を一瞬にして吹き飛ばした。

「嘘……」

涼花の表情が驚愕に染まる、最高のタイミングだった筈だ、それをステラは魔力を放出しただけで打ち破ってしまった。

「……信じられないって顔ね……なら覚えておくと良いわリヨウカ」

万有引力の法則に従って成す術もなく無防備状態で落ちて来た涼花にタイミングを合わせて妃竜の罪剣を振り上げるステラ。

「チカラも、異能も、小細工も、全て正面からねじ伏せる、それが出来るからこそアタシはAランクなのよっ！」

そして大剣は涼花の左脇腹に叩き込まれて――

「ぐばあ、あ、あ、っ!!!」

涼花はそれによつて身体が【く】の字に曲がつて吹っ飛び、後方の壁に叩き付けられて粉塵が舞い煙が覆つた。

佐野涼花の絶対的価値観（アイデンティティー）

「・・・そう・・・兎丸さんは負けたんだね・・・」

この第二訓練場の観客スタンド最上階の通路の手摺りに両手を置いて試合を観戦している刀華が隣に来た泡沫から報告を受けてそう言った。

「如月絶つて一年に負けたんだってさ、なんでも空間土竜（ディメンショナルモール）の弟みたいなんだ、ホント凄いな今年的一年はさ、皆強くて参っちゃうよ、コイツらが非行とかに走ったら止めるのはボクらなんだぜ？」

今ここにいる生徒会のメンバーはこの二人だけである、恋々は試合に負けて医務室で気絶中、碎城は先程の試合で何所かに吹っ飛ばされて「行方不明」、カナタは次の第十試合目の最終戦に備えて選手専用の待機所にいる。

「・・・どうやらコッチの試合も決着がついたみたいだね、次はいよいよカナタと・・・アイツの試合か」

泡沫はバトルフィールドの端の壁に吹っ飛ばされて叩き付けられた涼花を見てそう呟く。

「・・・いや・・・まだみたいだよ」

「・・・は？」

しかし刀華はそれを否定して涼花が叩き付けられた壁のところを指さす、泡沫がそこを覗き込むように見てみるとそこには左脇腹を右手で押さえて口端から血を流しながらも立ち上がる涼花の姿が見えた。

「・・・へえ、大した根性じゃん♪」

「まつ！これで姫ツチが終わるわけがないわな」

「当たり前だぜ、涼花は勝つて言った、アイツはできない事は絶対に口に出さないからな」

青ゲートへの入り口付近の待機所から試合を見ている幸斗と重勝は立ち上がった涼

花を見て感嘆とする、二人は信じているのだ、涼花の勝利を。

「それに姫ツチの奴、今かなり怒ってると思うぞ？ さっきのあの皇女サマの言葉は姫ツチの絶対的価値観（アイデンティティー）を否定するものだったからな・・・」

涼花の絶対的価値観・・・それはどんなに強い能力者が相手でも工夫次第で勝てるという戦術的思考だ、「面白い事をした者が勝つ」、それが涼花が癖みたいにもいつも言っているセリフ、それを否定されたのだ、内心穏やかではないだろう。

「・・・へっ！でもあれくらいなら問題ないさ！」

幸斗は自信満々にそう言い放つ、何故なら――

「アイツはこんなもんじゃないぜ！アイツがいつも誰と打ち合っていると思ってるんだ？」

そう、涼花は普段はステラよりも圧倒的な膂力を出す幸斗と訓練をこなし何度も打ち合っているのだ、「ステラ程度の膂力」で打ちのめされる涼花ではない。

「・・・へっ！そりやそうだな」

「そういう事だ、涼花はこっからが本番だぜ！」

なので二人は試合を見守ることにした、涼花が必ず勝利すると信じて。

「それに・・・涼花はまだ本気出してねえしな」

「・・・・・・・・・・」

涼花は無言で立ち上がり学生服のスカートの中から鉄の破片がこぼれ落ちる、地中深くまで逃れた時に彼女は念を入れて腹と背中に鉄板を仕込んでいたのだ、これのおかげで涼花はダメージを抑えることができたがステラの強烈な一撃がモロに入ったのだ、鉄板は一撃で粉碎されて抑えられていてもダメージはかなりのものだろう。

「へえ、中々しぶといじゃない・・・でも・・・これでとどめよっ!!」

ステラはそんな状態の涼花にも一切容赦はしない、ステラは誓ったのだ、もうどんな相手だろうと絶対に油断なんかしないと。

「・・・・・・・・・・」

爆ぜるが如き速度で迫って来て大剣を振るってくるステラに対して涼花は僅かにバックステップで後ろに飛び退くが――

「そんなんで避けたつもり？これで終わりよっ!!」

ステラは地を踏みしめて前に跳躍するように勢いをつけ飛び退いている最中の涼花に大剣を振るった。

――悪いわねリョウカ・・・この試合もらったわっ!!

ステラの妃竜の罪剣が涼花を捉えた――

・・・かに思えたがなんと大剣が涼花に直撃する寸前でステラは涼花を見失った・・・。

「・・・はっ？」

ステラは何が起こったのかわけがわからなかった、そして次の瞬間、ステラは後頭部

に強い衝撃を感じた。

「ぐはあっ!？」

踏みつけるような涼花の跳び蹴りがステラの後頭部に炸裂してそのままステラは目の前の壁に顔面から叩き付けられた。

『おおっとつ!?!ヴァーミリオン選手決定的な一撃を外して佐野選手に背後を取られて逆に強烈な一撃をもらったあああつ!これは一体どういう事でしょうか?』

『うはは!涼ちん中々面白いことをするねえ、【相手の意識の死角を突く】なんてさ!』『意識の死角・・・ですか?』

『そうさね、ウチは《抜き足》っていう特殊な呼吸法と歩法によって自らの存在を【覚醒の無意識】に滑り込ませる体術が使えるんだけどさ、これはあくまで【意識の狭間】に入る体術であるから訓練をすれば対処できるようになる、だけど今涼ちんがやったのは【意識の死角を突いて自らの存在を相手の意識から完全に外して回避した】というもので、これを使われたらウチでも対処できないねえ』

『・・・そのようなことが可能なのでしょうか?』

『ウチは知らないけどねえ、涼ちんとゆつきー、それと重坊はこの学園に来る前にいた所でいくつかの特殊スキルを叩き込まれていたみたいで、これもその一つみたいさね・・・確か重坊は《集中回避》って言ってたかなあ?』

『はあ?・・・おおつと!?ヴァーミリオン選手ようやく壁から抜け出しました!それに対して佐野選手はリングの中央まで跳躍して距離を取りました!』

「くっ!よくもやったわね!」

ステラはバトルフィールドの端で中央にいる涼花を恨めしそうな涙目で睨みつける、眼に破片が入ったみたいで幾らステラでも流石にこれは相当痛かったのだろう、そんなステラに対して涼花は真っ直ぐステラを見据えて挑発するように手招きをしていた。

「来なさい【ステラ】、返り討ちにしてあげるわ!」

「っ!?!嘗めんじやないわよリョウカッ!!」

ステラは涼花の挑発に乗って大剣を構えて突攻、前にも似たような事があつた気がする、分かっていたことだがステラはかなり沸点が低い、入学式の日にちよつとした事で珠雫とケンカになって一週間停学になったことだつてある、これが彼女の弱点と言えるだろう。

「はあっ!やあつ!!とうっ!!」

ステラは日輪の如き剣の軌道で涼花に猛攻をする、ステラが使う剣術である《皇室剣技（インペリアルアーツ）》だ、これは斬るといふより叩き付けるような威力に重点を置いた攻めの剣術、故に威圧感が凄まじく、涼花は最小限の動きで躲し続けているもの、徐々に後方に追いやられて行く。

「ほらっ！どうっ！したっ！のよっ！アタシをつ！返りっ！討ちにつ！するんじやつ！
なかつたのっ!!」

「・・・・・・・・」

涼花はステラの剣を躲し続けながら彼女の動きを観察していた、反撃のチャンスを探っているのだ、ステラは左斜め上から右斜め下到大剣を振り下ろし涼花がそれを小さくバックステップをして躲し、ステラがそれを追撃する為に身体の重心を急激に前にかけて大剣を切り返そうとする・・・・その瞬間、涼花は急に前進してステラに威圧をかけた。

「え？・・・・きやあつ?!」

それに対して反射的に身体の重心を後ろに引いてしまったステラは足がもつれてバランスを崩してしまい、尻餅を着くように倒れ、涼花はそれを見逃さずに仰転するステラの顔面に強烈な右拳を叩き込んだ。

「ぐがっ!」

下に叩き付けるように殴られたのでステラはバトルフィールドの床をバウンドしながら20m程吹っ飛び倒れた。更に不安定な状態で殴り飛ばされたのでその際にステラは妃竜の罪剣を手放してしまい、大剣は鮮やかな放物線を描いてバトルフィールド中央の床に突き刺さった。

『い、今のは何だあああつ!? 佐野選手はヴァーミリオン選手の皇室剣術に防戦一方だった筈! なのにヴァーミリオン選手が殴り飛ばされたあああつ!? 西京先生、これも佐野選手の特特殊スキルなんですか?』

『いや、今のはただの「アングルブレイク」さね』

『アングルブレイクってバスケとかで稀に起きるアレですか!』

『そういうことだあね、相手の重心に揺さぶりを掛けることによつてスリッパダウンを誘う・・・紅蓮の皇女の皇室剣術は叩き付けるように攻める攻撃的な剣術だからねえ、特に重心移動が激しい動きをするのさ、涼ちゃんはそこを突いたんだよ』

『へえ、そうなんですか・・・おおつとつ!? 佐野選手ダウンしているヴァーミリオン選手が起き上がる瞬間を狙つて突攻を仕掛けに行つたあああああつ! 霊装を手放してしまつたヴァーミリオン選手はこれにどう対処するのか!』

よろよろと起き上がるステラに向かつてもう一度顔面に拳を叩き込もうとする涼花。

「・・・引つ掛かつたわねリョウカツ! ハアアアアアツ!!」

それに対してステラは涼花が近づいて来たのを見計らつておもいつきり右拳を振り被つてカウンターを叩き込もうとした・・・だが、涼花はステラが右拳を繰り出そうとした瞬間に左掌で彼女の右肩（第2肩関節辺り）を押さえ付けた。

「へっ!?!」

右肩を押さえ付けられた渾身のステラの右拳は・・・動かなかった、そして涼花はそのまま左腕にチカラを加えてステラの身体を押し飛ばした。

「くっ!!?何がどうなつて」「どんどん行くわよ」「っ!負けるかっ!」

『両選手そのまま武器無し肉弾戦に突入だあああつ!・・・しかし今佐野選手がやったのは何だったのでしょうか?』

『基本的にパンチつてえのは肩を回して繰り出すものだろ?更により強力な一撃を出すうとするならより大きく肩を動かす必要があるのさ、だから涼ちゃんは紅蓮の皇女が腕を振り被って肩を後ろに下げた瞬間を狙って肩を押さえ付けた、その結果紅蓮の皇女は肩を回せずに拳を繰り出すことができず、更にその状態だと身体の重心は後ろに掛かっているからそのままチカラを加えることによって軽く押し飛ばすことができたっていうことさ!』

『成程、説明ありがとうございます!・・・さて、このまま肉弾戦となるとパワーで勝負アームリオン選手の方が有利かと思われませんが、どうでしょう?』

『そうとも限らないさ、よく見てみな』

格闘戦を繰り広げる二人を見てみるとかなり密着した超近接戦で戦闘をしていて、涼花はステラが拳を繰り出す度に肘や膝でステラの拳を潰していた。

『ハハハハこれはっ!』

『【交叉法】・・・所謂カウンターさね、相手の動きを読み切って攻撃と防御の交差と共に相手にダメージを与える武術の高等戦術さ、いやあしかし涼ちゃんは色んな戦術が使えるんだあねえ、見てて楽しくなってくるよ』

様々な戦術を使い徐々にステラを追い込んでいく涼花を見て寧音は面白そうに試合に夢中になっていた。

「何をやっているんですかあの駄皇女は!?!あの距離ならさつきみたいに炎を纏えば一瞬で焼き倒せるっていうのに!」

「それは違うよ珠雫、多分ステラは【やらない】んじゃない【できない】んだ」

「?・・・どういう事ですかお兄様?」

攻めあぐねているステラを見て珠雫は文句を口にする、しかし一輝がその文句を否定したので疑問に思った珠雫は一輝に理由を求めた。

「【アンクルブレイク】に【交叉法】と佐野さんがさつきからやっている技術はどれも並外れた動体視力と反射神経、そしてそれらを確実に実行する為の冷静沈着さと判断力が必要だ、しかも彼女はステラの巨大な威圧感を感じながらも冷静さを失わない強靱な精神力も兼ねそろえている、僕だってステラの皇室剣術を受けた時は《模倣剣技（ブレイドステイル）》で読み取るまで受け流すのがやっとだったんだ、それを佐野さんはさつきステラの皇室剣術を躲しながらステラの身体の動きを読み切って様々な方法で手玉に取っている・・・あの距離なら恐らく一瞬でもステラが隙を見せれば彼女は瞬時にステラに決定打となる一撃を与えてくるだろう、だからステラは佐野さんを相手に一瞬たりとも意識を緩められないんだ」

「・・・それなら距離を取ればいいんじゃないかしら？」
一輝が説明すると今度は有栖院が一輝に質問をした。

「さつきからステラは何度も距離を取ろうとしているさ、だけど佐野さんはステラより遙かに速いうえに彼女自身がステラが距離を取る隙を見せてくれなくて頑なに超近接戦を保とうとしている、多分この肉弾戦はどっちかの均衡が崩れるまで続くだろう・・・でも崩れるのは多分・・・」

この肉弾戦の決着の結果を察して俯く一輝、このままいけば打ち負けるのはステラだろう、そうなれば試合は一気に涼花の優勢に傾く、ステラの勝利は厳しいものとなるだろう。

「・・・大丈夫一輝？」

有栖院が無言のまま俯く一輝を心配する、そして一輝は眼を見開いて顔を上げ真剣な表情をしてバトルフィールドで戦う自分の恋人を見据える。

「大丈夫だ、問題ないよ・・・どんな結果になつたって見逃さないさ、ステラが戦うこの一分一秒を！」

一輝はそう決意して傷ついていくステラの姿を目に焼き付けた。

・・・そして、とうとう均衡が崩れ、この試合はクライマックスを迎えることとなつた。

一流の戦術家の条件は！

涼花VSステラの試合は肉弾戦で自分が放った拳を悉く潰されて攻めあぐねるステラが我慢の限界に達して右拳を大振りしようとした事で試合が動いた。

「はあああああっ!!」

重心を前に倒して涼花に渾身の右ストレートを叩き込もうとするステラ、涼花はそれを見逃さずしやがんでステラに足払いを掛ける。

「キヤアツ!?!」

涼花は前から引つ掛けるのではなく後ろから払う様にステラの脚のバランスを崩し、意表を突かれたステラは後ろに尻餅を着くように倒れようとする。

「はあっ!」

「がっ!」

そして涼花は倒れようとするステラの真横に回り込んでステラの身体を上空に蹴り上げた。

50m程斜め上に蹴り飛ばされたステラは若干気を失いかけたがなんとか意識を保つ、だが涼花の猛攻は止まらない。

「《絶影乱舞（ぜつえいらんぶ）》!!」

「っ!!ぐっ!!がっ!!ぐっ!!げっ!!ぎっ!!」

涼花は右脚を軸にして一回転すると普通の人間の目では捉えられない程の速度でステラのいる位置まで跳躍してまた彼女の身体を蹴り飛ばし、そのまま空気を蹴って超高速移動をしてステラの飛ばされた方向に回り込みまた蹴り飛ばしてそれを六回続ける。

右、左、後ろ斜め上、右手前、左斜め上とまるでピンボールの球の様に蹴り飛ばして行き——

「ぐはああああああああああつ!!」

最後に自身の身体を縦に一回転させてその遠心力を利用した踵落としをステラの頭に叩き込み、ステラはバトルフィールド中央・・・彼女の霊装である妃竜の罪剣のすぐ真横に叩き付けられた。

「・・・・・・・・・・」

戦塵が舞い、煙がステラの姿を覆い隠す、涼花はステラが落ちた20m手前に着地してステラのいる場所を睨みつけた。

「・・・いやあ、イツキといい、ユキトといい、アンタといい、まったくもって日本の伐刀者は強い強い」

煙が晴れるとそこには横に突き刺さっている妃竜の罪剣を手に立ち上がりかけてい

るステラの姿があつた、彼女の眼には燃えるような闘志が宿っている。

「アタシの国やクレールデルラント王国の伐刀者達の百倍は齒応えがあるわ……」

身体中から火の粉を巻き上げ戦う意志を消さないステラ、彼女の心は今最高に高ぶっている、このような自分を追い詰めるような実力者と戦い高みを目指す為には彼女は日本に來たのだ、一人の騎士として魂の震えが抑えられないだろう。

「……だけど、これじゃあ終われない！」

ステラは地に足を踏みしめて立ち上がり燃えるような眼差しを涼花に向ける。

「ああっ!!終われないわよn—————」

ステラが床に突き刺さっている妃竜の罪剣を引き抜いた瞬間に彼女の足下の床が崩

れ落ちた。

「小細工が駄目なら大細工よ」

「おわあああああつ!!」

『おおおおおおおつとつ!!突然のアクシデント発生だあああああつ!!ヴァーミリオン選手突如足下の床が抜けて深い穴が空いた為にそのまま落ちてしまったあああああつ!!』

『うはははははっ!いや、これはアクシデントなんかじゃあないよ、さつき地中に逃れた時に涼ちゃんはもう一つ落とし穴を作っていたんだあね、強い衝撃を与え続けると崩れ落ちるように計算してさ!そんなでもって今紅蓮の皇女が霊装を引き抜いたのが引き金(トリガー)になったみたいさね!』

「くっ!やつてくれるじゃないn————ちよっ!!普通そこまでやるううううううっ!!」

落下して行くステラが目にしたのは穴の底に仕掛けられた無数の鉄の剣山だった。

「・・・嘗めん・・・じゃないわよおおおおおつ!!」

このまま落ちればステラは串刺しになってしまうのだがAランク伐刀者である彼女はこの程度の事ではやられたりしない、ステラは剣山が自分の身体を貫く前に妃竜の羽衣を纏って全ての剣山を一瞬にして溶かし尽くした。

そのまま穴の底に着地したステラは大剣を上に掲げて地上にいる涼花に向かってドヤ顔で叫ぶ。

「どうよりヨウカツ!!アンタがどんな事をしたってアタシには通用しな i —————
へっ?」

しかし上を向いた瞬間にステラの目に飛び込んで来た光景は上から落下して来る彼女の視界を埋め尽くす程大量の土と瓦礫だった。

「ふざけんなあああああああああああああああつ!!!」

そしてそのままステラは絶叫と共に圧倒的な質量に押し潰されてしまった。

「悪いわねステラ、わたし・・・魔力制御は得意じゃないの・・・」

ステラが落ちて数秒後に穴の端から崩れ落ちて埋まった穴を見ながらそう呟く涼花、彼女の魔力制御はDと測定されている、これは伐刀者として平均的なランクだ、鉄化する前に形ができているブーメランや投擲槍ならともかく鉄化させる範囲指定を繊細にしなければならぬ落とし穴を作る場合彼女の魔力制御だとどうしても多数の綻びが生じてしまうのだ、故にステラが穴の底に着地した反動でもろい側面が崩れてしまったということだ。

『あああああつと!?!ヴァーミリオン選手生き埋めになってしまったあああああつ!!』

実況の女子生徒が絶叫し終わると辺りは静まり返り第二訓練場にいる人間達は全員息を呑んだ。

『……ヴァーミリオン選手が生き埋めになった穴からは何も反応がありません……これで勝負有りか?』

しばらくしてレフェリーがこれで勝負は決まったと判断して涼花の勝利を宣言しようとしたその時——

「ステラ・ヴァーミリオン、戦闘不能!勝者、佐野涼花——」

爆発音と共にステラが生き埋めになった穴から巨大な炎柱が立ち昇り、炎柱の中からステラが燃えるような髪をたなびかせてゆっくりと出て来て不死鳥の様にバトルフィールド上に舞い降りた。

『おおおおおおっ!!もはや勝負は決したかと思われましたが、なんとヴァーミリオン選手!佐野選手が仕掛けた罠など意にも返さずに全てを焼き尽くしてリングに舞い戻ってきましたああああっ!!これがAランク!戦術・戦略ではどうすることもできない圧倒的なチカラ!運命を押し通す事が出来る神に愛された人間だあああああああああっ!!』

ステラが涼花の戦術や罠をチカラ尽くで突破して舞い戻った瞬間に第二訓練場内には大歓声が響き渡った。

「Aランクはやつぱり凄いわ！」

「流石としか言いようがないな！」

「やつぱり敵うわけがないよな、あんな化物にさ！」

「落第騎士や殲滅鬼に負けたのだからきつと何かの間違いだったのよ！」

「戦術や剣技なんて意味無いぜ！圧倒的な才能の前にはな！」

「バカじゃねえのかあの女？戦術なんかでAランクに勝てるわけがないのにさ！」

観客の生徒達が好き勝手な事を言つて騒ぐ、それを聞いてステラは不快に思った、まるで自分が才能だけでここまでできたように聞こえたのはもちろん、自分を負かした一輝や幸斗・・・そしてここまで自分を追い詰めた涼花を嘲笑する声まで聞こえてきたからだ。

ステラは怒りのあまりに怒声をあげたくなるが、それをグツと堪えて目の前にいる涼花を燃え盛る眼差しで見据えて彼女に妃竜の罪剣の切っ先を向け――

「……次にアンタは「残念だったわねリョウカ、アンタの戦術じゃアタシは倒せないわ!」と言う」

「残念だったわねリョウカ、アンタの戦術じゃアタシは倒せないわ!……ハッ?!」
 言い放つ言葉を涼花に当てられて驚いたステラが目にした光景は涼花が無数にある何かを両手でおもいつきり引いている姿だった。

涼花が手に握っている物をよく見てみると彼女の手の中から様々な方向に延びている無数の線の様なものが見えていた。

「何よそr——ぐはああ”あ”あ”っ!!?」

次の瞬間に様々な方角から鉄のブーメランが飛来してきてステラの身体のうちこちに突き刺さった。

「なん……ですつ……て……」

身体中から血潮が噴出し床にうつ伏せに倒れるステラ、その瞬間に大歓声に包まれていた第二訓練場内は一瞬にして静まり返った、一体何が起こったというのか?ステラは痛みよりも困惑に満ちた表情をして自分を見下ろしている涼花と目を合わせた。

「何がなんだかわからないって顔ね．．．じゃあ聞くけど、魔力量が平均的なわたしがそう何回も能力を行使できると思う？」

「それは．．．」

「できないわよね．．．これはアンタがさつき吹っ飛ばしたヤツなのよ」

「．．．．．は？」

涼花が言っているのは彼女がステラの一撃をくらう前にステラが自身の魔力を放出させて吹き飛ばした無数のブーメランの事だ、今ステラの身体中に突き刺さっているのは全部それだと言うのだ。

「実はこれ全部鉄化を使う前の手拭いの時に糸を一本解れさせて伸ばしておいたの、つまりこれは全て鉄系付きのブーメランだったのよ」

「う．．．．そ．．．．」

「アンタが吹っ飛ばしたブーメランはこの第二訓練場の様々な場所に突き刺さったわ、わたしは今それから延びた鉄系を手繰り寄せて引き抜いて手動でコントロールしてアンタにぶつけたってわけ、さつき魔力を収束させて練り込んで耐熱性を上げたってアンタ自身が見破ったでしょ？だからアンタの炎で溶けずに突き刺さったのよ」

「．．．．．じゃあ．．．さつきアンタがブツ飛ばされる前に信じられなさそうな顔をしていたのって．．．」

「勿論ただの演技よ・・・残念だったわね」

それを聞いたステラの意識は段々朦朧としてきた。

「チカラも、異能も、小細工も、全てを正面からねじ伏せることができるからAランク?・・・そんなことで破られる戦術なんて五流以下よ・・・覚えておきなさい皇女さま」

涼花は意識を失いつつあるステラの目をよく見て言い放つ。

「圧倒的なチカラも、恐るべき異能者も、神に愛された存在でさえ、全てを手玉に取って勝利する、それが出来て初めて「一流の戦術家」って言うのよ」

さっきの言葉の仕返しだ、重勝が言った通り涼花はステラのさつき言った言葉が癪に障っていたのだ。

——・・・悔しいなあ・・・

意識を失う前にステラはここまでの事を思い返していた。

——最初イツキとの出会いは最悪だったけれど、彼の生き様を見ているうちに段々と愛おしくなっていたのよね・・・そんなでもってイツキが選抜戦第一戦目の相手に・・・名前忘れたけど粹好かない男にイツキが馬鹿にされて周りもそれに便乗してイツキを馬鹿にしたのを見て我慢できずに叫んじやったのよね・・・今思えばこれ、全生徒の前で愛の告白をしたようなものだったわ・・・幸い誰も覚えていなかったみたいだけど・・・でも、そのお蔭でアタシとイツキは恋人同士になれた・・・

思い返すのは彼女の最愛の恋人との記憶、そして彼女の今までの戦いの軌跡だ。

——そしてアタシはイツキと約束をした……七星の頂きを懸けた戦いで再び剣を交えるって約束を……でもアタシは負けた……あの鬼のように強い伐刀者に……そしてせつかく回って来たチャンスでさえアタシは失おうとしている……悔しいわ……七星剣王になるって言って国から飛び出して来たっていうのに……

七星の頂きへの道は自分の思っていた以上に険しかった……そう思いながら彼女の意識は消えていく。

——……でも……来年はアタシが勝つわ！……イツキ、ユキト、そしてリョウカ、首を洗って待ってなさいよ……

そしてステラは清々しい顔をして気を失った……

「ステラ・ヴァーミリオン、戦闘不能！勝者、佐野涼花！！」

紅蓮の皇女ステラ・ヴァーミリオンの七星の頂きを目指す戦いは……ひとまず終わりを迎えた……。

友の為に誓った決意

風間重勝と貴徳原カナタが知り合ったのは二年前の今頃だ、カナタは当時昔からの友人である刀華から「同学年に規格外な魔力制御能力を持つ生徒がいる」という話を聞き、ある日の放課後に興味本位でその生徒がいつも自主訓練をしているとされる破軍学園の敷地内にある湖の畔の広場を訪れた。

——…見事なものですね…

カナタは目の前の光景を見てしばらく開いた口が塞がらない程感嘆とした、黒髪瘦躯の男子生徒が湖の上で「滞空」したままサッカーボールでリフティングをしている、しかも三球同時に足でお手玉をするように上手くコントロールをしていたのだが、凄いはそこではない、なんとそれと同時に五十にも及ぶ数のテニスボールぐらいの大きさの黒い魔力球が湖の上の至る所で無数のサッカーボールをリフティングしていたのだ。

——わたくしも魔力制御には自信があるのですが、流石にこれは驚きました、間違ひなく彼の魔力制御能力はAランククラスですね。

【魔力制御】とは魔力を扱う上手さの事だ、この能力値が高ければ高い程、刀者は様々な事が出来るのだ、黒髪瘦躯の少年…重勝が今やっているのは自身に掛かっている重

力を無重力にする零か無限（ゼロ・オア・インフィニティ）の「発動と行使」、空を三次元移動する為の魔力の「放出」、無重力状態で上手く飛行する為の魔力放出の「出力の制御」と安定させる為の「放出する方向の制御」、そして「五十という数の魔力球の制御」とサッカーボールを破壊しないようにする「威力調整」を同時にやっているのだ、規格外と言われても不思議ではない。

更に言えば無数のサッカーボールをリフティングし続ける「圧倒的バランス感覚」と様々な距離にある魔力球を全て正確に把握する「異常クラスの空間認識能力」にそれらを一つの乱れも無く冷静かつ確実に行使し続ける「集中力」、これらを全て持ち合わせていなければ今のこの光景を生み出す事は不可能だろう、カナタはそういう考えに至った為に重勝の魔力制御能力は規格外だと納得して関心した。

「……よしっ！今日はこのまま……かつ！」

重勝はそう言い終わると同時に自身がリフティングをしていた三つのサッカーボールをプレーシユートの要領で同じ方向に蹴り飛ばし、更にその周囲でリフティングをしていた五十の魔力球も全て同時に同じ方向にサッカーボールを吹っ飛ばして、サッカーボールを飛ばした先にはボールを収納する為の籠があり、全てのサッカーボールは一球も外れずにその籠の中に入って納まった、しかも一球もこぼれずに。

—— 凄い……。

カナタは見事としか思い様が無かった……【身体と五十の数の魔力球の超精密同時制御】、まさに神技だ。

「……で？いつまでアンタはそこで見ているつもりだ？」

「……気付いておられたのですか？」

重勝は湖の岸に着地すると木の陰から自分を覗いていたカナタに声をかけ、自分の存在に気付かれていた事に少し驚いたカナタは観念して木の陰から出て来た。

「気配は消していた筈なのですが……」

「悪いな、俺は少し特殊な環境で育ったんでな……で？何か用か《紅の淑女（シャルラッハフラウ）》？」

「っ!？」

カナタは気付けば能力を発動して重勝を攻撃していた、彼女は刀華と共に《特例招集》という形で魔導騎士の実戦に参加したことがあり既に二つ名持ちだ、だがそれを知っているのは学生騎士だと同じ特例招集を受けた者だけだ、彼女は特例招集の時に目の前にいる黒髪瘦躯の少年の事は見覚えが無い、故に自分の二つ名を知っていた重勝に強い不信感を抱いたのだ。

大氣中に散らした目に見えない程に小さな無数の刃を自在に操るカナタの伐刀絶技《星屑の剣（ダイヤモンドダスト）》が重勝を切り刻もうとするが、いつの間にか重勝の

左手には黒い砲劍型の靈装が握られていて重勝は迫り来る見えない筈の星屑の劍を砲劍の一振りで薙ぎ払った。

「……いきなり物騒だな貴徳原」

「……貴方は何者なんですか?……」

重勝が攻撃に込められた殺意を感じて反応し、加えてたったの一振りで無数の極小の刃を薙ぎ払ってしまう程の実力を持っている事に気付いたカナタはますます重勝に対する不信感を強め、思い切って問い質してみることにした、すると重勝は不敵な笑みを
して――

「別に……俺はただの元教官さー!」

どう考えても年齢に合わない経歴を暴露した。

「……どうやら寝てしまっていたみたいですね……」

赤ゲート側にある選手専用の待機所にて貴徳原カナタは目を覚ました、彼女は壁際に精神統一をしている間にか立ったまま寝てしまったようであり口元に掌を翳して小さくあくびをしていた。

「……風間さんと知り合ったあの日からもう二年が経つのですね……」

カナタは感傷に耽っている、どうやら昔の夢を見ていたようだ。

——結局あの後すぐに偶然近くを通った教師の方が騒ぎを聞きつけて来て止められてしまいましたね……何故【特例招集】に参加した事が無い風間さんがわたくしの事を知っていたのか？その事が気になって後々財団の情報網を使い風間さんの事を調べて視たところ、彼は今から五年前に壊滅した世界最強クラスの傭兵団【西風】の团长【風間星流】の息子であり、【漆黒の剣聖】の二つ名で裏社会に名が知られる存在だったみたいですね、そして彼がああのおしやつた【元教官】というのは彼の西風での役職が【戦術教官】だったから……。

カナタは頭の中で自身が調べあげた重勝の情報を整理する。

——……何故風間さんは刀華ちゃんを否定するのでしょうか？教官という役職

は部下達を導いて指導するという大勢の人の想いを背負う仕事である筈……それを考へたら刀華ちゃんと風間さんは分かり合つて同じ道を共に歩いて行ける筈なのに何故……。

大勢の人達の想いを背負つた事があるのならば刀華の気持ちは解る筈だ、カナタはそう思つたのでこの後に行う重勝との試合に対して彼女はある決意をしていた。

「わたくしはこの試合で風間さんの真意を確かめてみせます、一年前のあの日から悩み苦しみ続ける刀華ちゃんに自分のやつてゐる事は間違つていないと確信して安心してもらう為にも」

カナタは刀華の為にそう誓つた、刀華は昨年の七星剣武祭後にやつて敗北した決闘から今まで「もしかして自分のやつてゐる事は間違つていたのではないか？」と懸念してしまいそれを否定する為に必死になつて頑張つてきたのだ、カナタは昔からの親友である刀華をその苦しみから解放する為にこの一戦に懸けていた。

『三年・風間重勝君、三年・貴徳原カナタさん、試合の時間になりましたので入場して下さい』

試合の準備完了のアナウンスが流れ、カナタは誓つた決意と共に入場ゲートへと向かつた。

「グレートね、こいつはあー！」

「何を言っている?」

涼花VSステラの試合終了後、ステラは担架で医務室に運ばれ、試合中に涼花が空けた穴を塞ぐ為に黒乃がバトルフィールド上にやって来て自身の能力を使い穴のある場所の時間を巻き戻してバトルフィールドを元の状態に戻していた。

「よし、これで完了だ・・・はあ・・・佐野、まさか真田ではなくお前がリングを破損させるとは思わなかったぞ?」

「ははは、わたしのは能力の応用ですから・・・勘弁してもらえると嬉しいです・・・」
「別に悪いわけではない、少し意外だったただけだ」

「はは……ところで、幸斗の試合の時からこの訓練場内のあちこちに多くの先生方やプロの魔導騎士らしき人達がいるみたいですけど、もしかして幸斗の龍殺剣による被害を抑える為ですか？」

穴を塞ぐ作業をしていた黒乃を隣で見ている涼花が第二訓練場内の至る所に配置されている大人達を見て黒乃にそう質問をする。

「それもあるが……次の試合は風間が試合をするのだろうか？」

「はい、そうですね？……重勝が？確かに重勝は高火力の砲撃系伐刀絶技が使えますが、アイツが観客に被害を及ぼすようなヘマはしないとしますよ？幸斗みたいなお馬鹿じゃないんですから」

「……佐野、一年前に風間が東堂と決闘をしていた事は知っているか？」

「……はい、この前の休日に如月先輩から聞き出しました」

「そうか……私はこの事を学園のデータベースに保管されていた動画を見て知ったのだが……奴はその時、東堂に【禁技指定】級の伐刀絶技をぶつけて決着をつけている」
「……えっ!?!」

眉を顰めて真剣に話をする黒乃の話を聞いて涼花は驚いた。

「禁技指定級ってそんな、わたしの記憶だと重勝は禁技指定級の伐刀絶技なんて使えなかった筈？」

「この五年間お前と真田は今まで風間と会っていないのだろうか？ならその間に習得したと考えるのが妥当だろう」

「……そうですね」

「納得したか？……なら話を続けるぞ」

修繕作業が終わったので二人は青ゲートに向かって歩きながら話を続ける。

「決闘と言っても模擬戦形式だったから【幻想形態】で放ったのが幸いして東堂に怪我はなかった……だが被害は凄まじくてな……その試合を行なった第一訓練場は全壊しその試合を見ていた生徒達は被害を受けて一人残らず気絶した、中にはトラウマを抱えてしまった生徒も大勢いたな……」

黒乃は上の空で説明をする、現実逃避したい気持ちでいっぱいなのだろう。

「それ以上の被害は審判をしていた教師と偶然第一訓練場の周りをうろついていた教師達による迅速な対応により防いだが……恐らく放っておいた場合は破軍学園とその周囲の町が地図から消えていただろう、なにせその伐刀絶技は真田の龍殺剣には遠く及ばないものの……エネルギー総量が6から7PJ（ペタジュール）はあったそうだから……」

「……」

黒乃の話を聞き終わって涼花は絶句した、重勝が刀華に止めを刺すのに使った伐刀絶

技はウラン爆弾（広島原爆）約百発分は下らない威力だったらしい、確かにそれが本当なら警戒するのも納得だ。

——如月先輩が言っていた「えげつない止め」というのはこの事だったのね……しかし重勝はどうしてそんな過剰な伐刀絶技を使ったの？ 周りへの被害が判らない奴じゃないのに……。

涼花はますます疑問を抱いた。

そうこうしているうちに青ゲートを潜った涼花と黒乃は待機所から出て来た重勝と擦れ違った。

「……………」

涼花は声をかけようとしたが重勝の発する戦場に向かう戦士の気迫を感じ取り、話し掛けられる雰囲気じゃないと判断して無言で黒乃と共にその場を跡にした。

『さあああっ！ 本日の試合もいよいよクライマックス！ 学園序列のトップクラス同士が潰し合う本日の最終戦にして最注目カード開始だああああっ!!』

実況解説の女子生徒が最終戦開始の宣言をすると同時に第二訓練場内はヒートアップする。

『まず最初に青ゲートから姿を現したのは悪い意味でこの学園で知らない者はいないでしょう！ 彼は去年の七星剣武祭で優勝候補と言われていたにも拘らず不調でもないの

に一回戦を棄権をして学園中の期待を裏切った破軍学園最強の「裏切り者の序列一位（エース・オブ・ビトレイアー）」！三年一組風間重勝選手！だがここまでの選抜戦の成績は九戦九勝無敗！しかも全試合全くダメージを受けていない完全試合（パーフェクトゲーム）を続けており、更に彼は今までこの学園に入学してから例の七星剣武祭初戦の棄権を除いて公式戦・模擬戦・学園イベント戦と負け無しで今も尚学園序列第一位の座を譲らない！伐刀者ランクはB！お得意の伐刀絶技「零か無限（ゼロ・オア・インフィニティ）」を自在に操り大空を舞う空の騎士だあああああつ！！」

青ゲートから重勝が入場して来ると観客スタンドからブーイングが飛んだ。

「スカしてんじゃねえぞこの裏切り者がっ！」

「今更何しに出て来たのよっ!?引っ込めっ！」

「お前なんか貴徳原さんに切り刻まれて死ねっ!!」

「高ランクだからって調子に乗ってんじやないぞ、この屑がっ！」

「とつとと序列一位の座を会長に明け渡せ！お前が学園最強なんて認めねえぞっ!!」

「この野郎っ!!」

ブーイングの嵐の中から誰かが重勝に向かって空き缶を投げた……だが――

「……………」

「痛っ!…………てめえ…………」

重勝は飛んで来た空き缶を無言で弾き返して空き缶を投げた生徒の額にクリーンヒットし、それを皮切りに激怒した観客の生徒達が次々とバトルフィールド内に空き缶やペットボトル・・・あと不良っぽい生徒達が煙草の吸殻を投げ入れてきた。

『コラーーーーーッ!! 気持ちは分かるけれどリングに物を投げ込むなああああつ!!』

「・・・・風間重勝っ! とうとう出てきたか! 相変わらず憎たらしい奴だぜ!」

「・・・・風間さん・・・・」

第二訓練場内がブーイングの嵐に包まれる中、泡沫と刀華は入場して来た重勝を見て怒りと不安を顕わにした。

「うた君・・・・カナちゃんは大丈夫かな?」

「……………」

刀華がカナタの心配を口にするると泡沫は眉を顰めて無言になる、二人は重勝の事を嫌ってはいるが実力を認めていないわけではない、昨年の七星剣武祭ベスト4の刀華でさえ重勝には傷一つ付けることが出来なかったのだ、カナタが重勝に勝てる可能性は限りなく低いだろう、二人はそれが判っているから不安なのだ。

……………その時——

「皆様静粛にお願ひ頂けますか？」

赤ゲートのの中から丁寧ながらも威圧感を感じる声が聞こえてきてブーイングの嵐が止んだ。

「……………カナちゃん？」

刀華が赤ゲートの辺りに視線を向けるとそこには不気味なくらい純白のドレスを身に纏い、身体中から出る血の臭いを全く隠さずに垂れ流して入場して来るカナタの姿があった。

『・・・さあ、気を取り直して・・・次に美しい純白のドレスをその身に纏って赤ゲートから姿を現したのは生徒会会計を務めるBランク騎士！特例招集を受けて実戦経験もある凄腕伐刀者！【紅の淑女】の二つ名で知られる三年三組、貴徳原カナタ選手だああああっ!! 貴徳原選手のここまでの選抜戦の成績はこちらも九戦九勝無敗！学園序列は第四位と・・・これはお互いに無敗同士にして学園最強クラス同士の潰し合いとなりましたああああっ!!』

気品溢れる雰囲気で優雅にバトルフィールドに上がったカナタを見た観客達は今度こそ大歓声を上げた。

「うおおおおおっ！来たあああああっ!!」

「待ってました、貴徳原さんっ!」

「あんな奴細切れにしちゃってください!」

「貴徳原さん！先日我が茶道クラブの活動費を援助していただき、誠にありがとうございます!」

「期待しています、貴徳原さん！」

重勝とは豪い違いだ、大歓声の中を悠々と歩いて来たカナタは重勝の20m手前で立ち止まって向かい合い、鋭い眼でこちらを睨みつけていて臨戦態勢の重勝に声をかける。

「貴方と戦うのは初めてですね風間さん、二年前のあの時は邪魔が入ったので戦えませんでしたし」

「・・・そうだな・・・」

重勝が静かに答え返すとカナタはクスクスと笑い――

「参りますよ、《フランチエスカ》」

自らの霊装を顕現した。

カナタの霊装は透ける程に薄いガラス細工のような「レイピア」だ、彼女はそれを右手に持ち胸の前で水平に構えて左掌を切っ先に当てて差し込んだ・・・だがフランチエスカの刃は彼女の掌に刺さらずに塵となって砕け、大氣中に砂光と舞った。

「あの時の続きと参りましょう風間さん、わたくしはこの時をずっと待ち望んでいました」

カナタの伐刀絶技【星屑の剣】が大氣中に無数に舞う、これでカナタは戦闘準備完了だ。

「・・・そうだな・・・ケリは付けねーとな・・・」

そして重勝もそれに応えるように霊装を顕現させる。

「未来（さき）を指し示せ！ 《重黒の砲剣（グラディウス）》！！」

全てが漆黒に染められている砲剣が重勝の左手に握られてその切っ先をカナタに向けた、これで両者戦闘準備完了だ。

『さああああっ！盛り上がって参りましたああああっ！この試合、風間選手が空を制してまたしても完全試合をしてしまうのか？それとも貴徳原選手が風間選手に引導を渡すのか？・・・それでは参りましょう、本日の最終戦を開始します！・・・LET'S

GO AHEAD（試合開始）！！』

試合が始まった瞬間、重勝は砲剣を両手持ちにして正面にいるカナタに向けて切っ先を掲げ、回転式弾倉（リボルバー）を五回転させて砲剣の切っ先に強力な重力エネルギーを収束させた。

「……いきなり高火力砲撃ですか……」

「へっ！お前の周りに漂う無数の刃ごと吹っ飛ばしてやるぜっ！」

重勝は不敵な笑みをしてそう宣言し、引き金を引いた。

「《収束重力砲（ストライクブラスター）》アアアアアアアアアッ!!」

漆黒色の暴力の塊が撃ち出され、それが目視不能の刃を全て吹き飛ばして純白の貴婦人を襲った。

翻弄される紅の淑女

重黒の砲剣から放たれた黒い重力エネルギーの砲撃がカナタを襲う．．．その砲撃は彼女に直撃する手前で僅かに軌道を変え、カナタの僅か右側を通過して後方にある赤ゲートを含めた軌道上にあつた障害物を全て消し飛ばして外まで直通の大きな穴が空いた。

——くっ!?なんて重い砲撃ですよ!

僅かに砲撃が逸れた理由は星屑の剣が吹き飛ばされる前に無数の刃を砲撃の左側一点に集中してぶつけて僅かに軌道を変えたからである、しかし砲撃の威力は凄まじく僅かに軌道を変えるのが精一杯だったカナタは額に少量の汗を掻いていた。

この動作だけでもカナタはかなりの体力を使ってしまったが休んでいる暇は無い。

「はあああああつ!」

「くっ!?」

大気中の星屑の剣が砲撃で吹き飛ばすや否やいつの間にか重勝が砲剣を構え直し物凄く速度で一直線に距離を詰めてカナタに斬りかかって来ていた。

——攻撃の切り替えしが早い!流星ですわね風間さん．．．ですが!

「おっとつ!？」

砲剣の間合いまで距離を詰めて砲剣を振り上げようとする重勝だったが、その時唐突に重勝は何故か真後ろに飛び退いた。

「危ねー危ねー、戻って来んの速えーな!もう少して細切れになるところだったぜ」

砲撃で吹き飛ばした星屑の剣が早くも戻って来て見えない無数の刃が重勝に真上から奇襲して来たのである、高いセンスと西風時代の経験によつて殺気に敏感な重勝は力ナタの攻撃に込められた微妙な殺気を感じ取つて緊急回避をしたということだ。

「気付かれましたか・・・ですが捉えましたわ!」

「・・・チツ! 囲まれたか・・・」

傍から見たら重勝は不審に周りをキョロキョロとしていているようにしか見えないけれど実際は見えない無数の刃が重勝の周囲360度を包囲していた。

「《星屑の斬風(ダイヤモンドストーム)》」

目視不能の数億の刃が一斉に重勝に襲い掛かる、周囲360度全方向から飛んで来る攻撃は普通なら避ける事は不可能のだが・・・攻撃対象の黒い剣士に限つては話は別だ。

「ふっ!」

重勝は両膝を折り曲げて勢いを付け高く跳躍して「零か無限(ゼロ・オア・インフィ

「ニテイ」を発動、自身に掛かる重力をゼロにして宙（そら）へと舞い、数億の刃が空を切り刻んだ。

「……やっぱり飛びますわよね……」

星屑の斬風を上に乗って飛んで躲して空中を飛翔する重勝を見上げてカナタはそう呟く、すると観客スタンドからまたしてもブーイングが飛んで来た。

「また飛んだよあの屑！」

「下りて来い卑怯者が！正々堂々と戦え！」

重勝が空を飛んだことを非難する観客の生徒達、その生徒達の数は重勝が入場して来た時のブーイングの数より僅かに少なかった。

——何が卑怯だと言うのでしょうか？風間さんはただ自身の能力を応用して飛行しているだけ、伐刀者として当たり前の様に能力を使用しているだけに過ぎませんわ、ですのにそれを卑怯とは理解し難いですわね。

カナタは眉を顰めた、能力を行使して戦うのは伐刀者として当たり前の行為であり常識だ、それに敵に公正さや公平さを求めるのは「騎士」のすべき事ではない、「学生騎士」とはスポーツマンとは違いいずれ国の防衛を担う「戦士」なのだ、そんな人間が相手の非合法性に腹を立てるなどお門違いもいいところだ。

今ブーイングを飛ばしているのは全員低ランクで七星剣王を目指す事を最初から無

理と決めつけて諦めていて選抜戦にエントリーしていない生徒達だ、彼等は自分より才能がある者を妬み、逆に自分より才能がない者を見下して自己満足をする向上心の欠片も無いド三流・．．いや五流以下の伐刀者だ、その証拠に重勝が裏切り者で嫌われ者だからと言って選抜戦にエントリーしている生徒達はブーイングを飛ばしている生徒達の事を疑問に思っている、ブーイングを飛ばしている五流以下の生徒達は現実を理解していいのだった。

『いやあ、両者かなり動きましたでしたが立ち上がりはまずまずと云ったところ、お互いに様子見をしているのでしょうか？どう思いますか西京先生．．あれ？』

そういえば先程から寧音が解説をしていない、今頃それに気付いた実況解説の女子生徒は隣にいる筈の寧音の方を見るとそこに寧音は居らず、代わりに寧音に似せた人形とその額に貼りつけてある書置きがあった。

『疲れたから解説降りるね〜！後はテキトウにやって〜』

書置きにはこう書かれていた、寧音はどうやらまたしても気まぐれを起こして去って行つたようだ。

『もう誰かこの仕事代わってえええええええええええええええええっ!!』

第二訓練場内に絶叫が響き渡るがお構いなしに試合は進行する。

「出だしをミスつたな．．．んじゃこれで引っ掻き回してみるか、《誘導重力球（グラビ

「デイシューター」

重勝は滞空しながら多数のテニスボールくらいの大きさの重力エネルギー球を自身の周囲に出現させた。

「……出しましたか、刀華ちゃんを翻弄した伐刀絶技を……しかし見た所最大数である五十球ではないようですね……」

カナタは重勝が出した誘導重力球の数を見て彼がいつも操っている五十球ではない事に不満そうにする、今重勝が出した誘導重力球の数は三十二球だ、一流の伐刀者なら……いや、一流の戦士なら誰もが手加減される事は屈辱以外の何者でもないだろう、つまりはそういうことだ……だがそれならば——

「それなら本気にさせてあげましょう、その三十二球を斬り墜として!」

自分が全力を出すに値する戦士である事を思い知らせばいい、カナタはそう思い辺りに漂う無数の刃を自分の周囲に集合させて迎撃体勢に入り、重勝は重黒の砲剣を真上に掲げて——

「シューウウウウー——————トツ!!」

攻撃宣言と共に砲剣を振り下ろし、それと同時に三十二の重力球が一斉に地上で待ち構えているカナタに向かって飛んで行った。

「久しぶりにシゲのまともな戦闘を見たけどやっぱシゲはすげえぜ！」

「無重力状態の身体を安定させながら飛行しつつあれだけの数の魔力球をコントロール……相変わらずイカレた魔力制御能力ね」

「これが貴様の言っていた『裏切り者の序列一位』の戦闘か、見事なものだな」

「だろ？アイツは腐っても破軍の序列一位（エース）だつてリユウだ」

「うははっ！流石重坊だね、魔力制御だけは流石のウチも敵わないよ」

「貴様の魔力制御はE判定だろうか」

実況解説席の真上の階にある観客スタンドの最前列の席で観戦をする幸斗と涼花と先程試合が終わって合流した如月兄弟と実況解説席から抜け出して来た寧音と仕事の間の息抜きでここにいる黒乃が異常クラスの魔力制御能力で空中機動をしながら三十

二の数の魔力球を操ってカナタを攻めたてる重勝に感服していた。

「・・・はあ・・・どうしてお前達はいつも学園施設を破壊するんだ？結局風間も試合開始早々訓練場に風穴を空けてしまったしな・・・」

「へっ！オレ達西風は壊すのは得意なんだぜ！」

「自慢する事じゃないわよお馬鹿」

黒乃は先程消し飛ばされた赤ゲートのあつた場所を見て嘆き幸斗は胸を張ってそれを自慢し涼花がそれに対してツツコミと罵倒を入れる、一ヶ月前まで学園施設を破壊する困った生徒はステラと珠雫だけだったというのに最近では幸斗達が選抜戦の試合がある度に試合会場である訓練場を破損させるので黒乃はストレスがマツハで溜まり胃薬を飲む量が増えたらしい。

「・・・しかし風間の奴あれで本気じゃないっていうリユウだから恐れ入るな・・・」

落下防止の柵の上に片肘を着いてそう洩らす烈、試合は今三十二の数の魔力球に翻弄され苦戦しつつもカナタが星屑の剣を操って徐々に少しずつ魔力球を斬り墜としていき十まで数を減らしていたところだ、カナタは何発か被弾したらしく身に纏う純白のドレスが何か所か破損して穴が空いていて少し痛々しい姿になっている。

「それは風間先輩の闘気を視れば分かるが・・・あれで全力で無いとしたら全力はどれほどのものになるのだろうか？」

重勝が本気じゃないのは分かってはいるが、それ故に本気を出した重勝の戦闘力が気になる絶、序列三位である烈でさえ歯が立たないと言うのだからその弟である絶が気になるのも仕方ないだろう。

「気になるのか絶？シゲの本気は凄えぞ、今までオレは一回もシゲに勝った事が無い、シゲはオレの目標にしている伐刀者の一人だぜ！」

不敵な笑みを浮かべて自慢げにそう説明して宙を飛び回っている重勝を見据える幸斗、世界最高峰の魔力量を持つAランク伐刀者であるステラに圧勝した幸斗ですら一勝もしたことがない全力を出した重勝の戦闘力はどれほどのものだろうか？

「そっ！」

カナタは左から来た二発の魔力球を無数の刃で斬り墜とす、残りはあと五球。

「くっ!? ちよこまかと!」

カナタは周囲に展開し複雑な軌道を描いて飛び回り襲い掛かって来る魔力球に苦戦をする、これは全て30m上を飛び回る重勝が自分の意志で操っているので動きが予測し辛いのだ、身体能力A判定で完全掌握ができる一輝なら一分で全て看破して攻略するだろうが、身体能力D判定のカナタには今正面からこちらに向かつて来る五発の魔力球ですら掻い潜って空を飛ぶ重勝に攻撃する事は不可能だろう、故に星屑の剣で全て斬り墜とすしかないのだ。

—— 刀華ちゃんが対応しきれなくて翻弄された数は五十でしたわね・・・こんな事では風間さんの真意を確かめる事なんて夢のまた夢ですわ・・・。

この程度の数刀華なら簡単に攻略する、それなのに自分はたかが三十二球の魔力球如きになにを苦戦しているのだろうかとかカナタは嘆きながらも迎撃するために身構える。

それぞれが複雑な軌道で迫る五発の魔力球に対応しようとしたその時カナタは上空を飛び回っていた重勝の姿がないことに気が付き、その瞬間背後に僅かな殺気を感じたので振り返って無数の刃をその殺気を出している存在・・・砲剣で斬り掛かって来た重勝の振るう漆黒の刃にぶつめた。

「くっ! っ! っ! の間! っ!」

「おっ!!これに気付くか、限界まで殺気を消した筈なんだがな……」

カナタは自分に向けて振るわれた漆黒の刃を一瞬だけ止めることができたのでその隙に後方にバックステップをして砲剣を避ける事に成功する……しかし——

「ぐはああああっ!!」

一瞬気を放した隙に五発の魔力球がカナタの背中に被弾してしまった。

痛みと衝撃で身体の体勢を崩すカナタを重勝は容赦なく追撃する。

「《拡散多弾頭射撃（マルチプルバースト）》!!」

この一瞬で高く後方に飛び退きながら砲剣の回転式弾倉（リボルバー）を一回転させて魔力を一時的に強化して砲剣の切っ先を体勢を崩しているカナタに向けて引き金を引く。

放たれた大きめの黒い重力エネルギーの塊が四つに分裂してその四つがまた四つに分裂……計十六発の重力エネルギー弾がカナタに追い撃ちをかけに行く。

「まだ……終わるわけには参りませんわっ!!」

カナタはよろめく脚を強く地面に踏みしめて無理矢理体勢を立て直し——

「《星屑の斬壁（ダイヤモンドシールド）》ッ!!」

目視不能な程細かい数億の刃を目視可能なくらい密集させて正面に防壁を作り、飛来した重力弾十六発全てを阻んで斬り墜とす事に成功、彼女は意地を見せつけた。

「はあっ！・・・はあっ！・・・はあっ！・・・はあっ！・・・」

息を荒くして片膝を着くカナタ、先程被弾した背中はその部分の布が弾け飛んで肌を風に曝し、その肌は被弾によつて痛々しく傷つき、そこから流れ出る血が背面に残つた純白の布を緋色に染めていた――

・・・既に満身創痕のカナタだったが・・・重勝（悪魔）は容赦をしてくれない。

『おおっとっ！風間選手今度は【誘導重力球】を五十球展開っ!!満身創痕の貴徳原選手に更なる絶望を叩き込もうとしています！なんとという鬼畜！敵は死すべし慈悲は無いを素で行く男、風間重勝！貴徳原選手はこれにどう対抗するのかああああああああつ！?』

「本当に容赦ありませんね風間さん、刀華ちゃんが悪魔と言っていたのにも領けますわ……」

カナタは50m上空で五十の数の黒い魔力球の中心で滞空して砲剣を真上に掲げている重勝を見上げて弱々しくそう呟く、彼女は疲労困憊している身体に鞭を打つ様によるよると立ち上がり身構えた。

「シューウウウウウー……トツ!!」

極刑宣告の様に放たれた五十の魔力球が空からカナタに向かって襲い掛かる、一年前に刀華が対応出来なかったのはこの数だ、これ乗り越えなければカナタに勝利はない。

空中戦

「なっ!?空を飛びながらあの数の魔力球を制御しているってどういうの!」

「ただ五十の魔力球を操っているならともかく、重力操作と魔力の放出をして安定した飛行をしながら全ての魔力球の位置を把握して同時に全て別々の動きをさせている……これは下手をしたら珠雫以上の魔力制御能力だわ」

「……これが……学園序列一位の実力の一端か……」

観客スタンド二階の席で観戦をしている一輝達が上空から怒濤の攻めをする重勝を見て驚いている、彼等は数刻前に先程の試合で敗北して医務室に運ばれて行ったステラの所に行こうとしたのだが、これからも選抜戦を勝ち抜いて行く為には学園最強クラス同士が戦うこの試合を見逃すわけにはいかなないと判断しステラの様子を見に行くのを後回しにして観戦を続けることにしたのだった。

——この学園にこんなに魔力制御能力の優れた先輩がいたなんて……どうやら私のこの学園の学生騎士への認識は甘かったみたいですね、私が一番かと思っていたのですが……。

三人の中でも特に一年生最高の魔力制御能力を持つ珠雫は魔力制御能力だけは自分

が破軍学園一だと思っていたのでショックを受けると同時に今までの自分の認識の甘さを改めていた。

「実力の一端？どうということなの一輝、あれでもまだ本気じゃないって事？」

有栖院は一輝が呟いた言葉に疑問を抱いたので一輝にその疑問を言ってみると一輝は眉を寄せて真剣に話します。

「・・・アリス・・・風間さんは去年の七星剣武祭を試合当日に棄権して裏切り者扱いされている事は知っているよね？」

「ええ、学園のそこら中で彼の悪評は耳にするしね」

「その七星剣武祭後の夏休み明けの日に風間さんと学園序列二位の東堂刀華さんが決闘をしたんだ、何故だかは知らないけれど七星剣武祭を勝手に棄権をした風間さんは序列一位に相応しくないと当時の理事長が仕組んだ決闘だというのが有力説だね、本当の理由は本人達しか解らないだろうけれどそれは重要じゃない、問題はその決闘で風間さんが全くの無傷の完全試合（パーフェクトゲーム）で東堂さんに勝利した事だよ」

一輝はバトルフィールド上空で未だに無傷の重勝を目で追いながら話を続ける。

「僕はその決闘の時に学園の郊外で鍛練をしていたから気が付かなくて見逃したんだけど・・・去年の七星剣武祭でベスト4に入った【雷切】の二つ名で知られる東堂さんの実力を考えると・・・風間さんが今本気を出していると仮定するなら東堂さんが完全試

合で負けるなんてあり得ない、彼女ならこれぐらい余裕で攻略するよ……だからこれは風間さんの実力の一部だけだと考えたって事さ」

「……つまり詳しい事は分からないって事ね……」

一輝が当時の決闘を見逃したと聞いて呆ける有栖院、しかし一輝は構わずそのまま話を続ける。

「まあそうなんだけども……僕はそれ以外の風間さんの今までの公式戦・模擬戦・学園イベント戦の動画は全てに目を通したよ……だけど風間さんはどの試合も目の前で試合をしている風間さん以上の戦闘力を出さずに全て勝利しているんだ、つまり東堂さんとの決闘で風間さんは破軍学園に入学して一番高い戦闘力を出したということが簡単に予測できる……少なくとも目の前の風間さんはまだ本気じゃないって事だよ」

恐らく風間重勝という伐刀者の底はまだまだ深い、一体彼はどれほどの実力を隠しているのか？一輝はそれが気になり、同時に選抜戦で自分が重勝と当たった場合にどういいう戦術なら彼を地に墜とせるのだろうかと考えながら観戦を続けるのだった。

「くっ！この数をコントロールしながら自らも自由に動いて遊撃……貴方は本当に人間なのですか!？」

五十の魔力球と連携を取りながら容赦なく攻めて来る重勝に対して襲って来る魔力球を必死に迎撃しながらカナタは悪態を吐く、重勝は時に二・三球の魔力球を自分の後方から追従させて近接戦を仕掛け襲い掛かって来る星屑の剣を魔力球でブロックしつつ凄まじい剣速の剣閃で斬り掛かり、時に複数の魔力球を操って彼女の行動を制限させて動きが止まった所で砲撃を撃ち込むなどをして徐々にカナタを追い詰めていた。

「どうしたんだ貴徳原っ!?!まだ一つも俺にお前の刃は届いてないぜっ!？」

一瞬の隙を突いてカナタに接近して剣閃の連撃を彼女に振るう重勝、それに対してカナタは漆黒の刃でその身を斬り刻まれながらもなんとか致命傷となる攻撃だけは上手く逸らして必死に耐えている。

「うっ！っ！ぐっ！……まだ……まだですわっ!!」

「おっと」

カナタは重勝の上段から下段への直斬りを右側に躲して一瞬にして星屑の剣を彼の口内に向けて飛ばすものの、並外れた反射神経でそれに反応した重勝は地に振り下ろした砲剣をすぐさま切り返して振り上げる事によつてその風圧で眼前に迫つた無数の刃を吹き飛ばし、カナタが更に追い撃ちを掛けて来ようとしていたので重勝は後方に大きく跳び退いて飛行して宙に逃れるが――

「逃がしませんわよっ!」

すぐさまカナタは無数の刃を重勝の後ろから追撃させる、だがそれはすぐ近くに漂つていた四つの魔力球が飛んで来てお互いに相殺されて追撃は失敗に終わり――

「甘えよ貴徳原」

「しまっ!」

「収束重力砲（ストライクブラスター）っ!!」

重勝は一瞬の隙を突いて十二の魔力球でカナタを包围して彼女の動きを妨害し砲剣の回転式弾倉（リボルバー）を五回転させて圧縮された魔力を彼女の方に向けた切っ先に収束し、高重力エネルギーの砲撃を行動を制限されたカナタに撃ち、直撃と共に大爆発した。

『風間選手の収束重力砲が炸裂ううううっ!!これをまともに受けたら無事では済ま

ないぞおおおおっ!? 貴徳原選手万事休すかああああああああっ!!?」

大爆発によって発生した爆炎と煙が徐々に晴れてきて完全に消えるとそこにカナタの姿は無かった。

『とっ、貴徳原選手が消えたああああああっ!!? どういう事だああああああっ!!? もしや今の砲撃で木っ端微塵になってしまったのかああああああっ!!?』

実況解説の女子生徒の絶叫が響き第二訓練場内の観客の生徒達の顔が真っ青になり静まり返る、カナタは今の砲撃で粉々になってしまったのか? ——

「……おいおい、聞いてねーぞ? まさかお前も飛べるなんてよ……貴徳原」

地上60m上を飛行する重勝がそう言ったのが聞こえてきたので観客の生徒達は全

員ハツと上を見上げた、するとそこには重勝の20m手前で【宙に制止して】息を荒く吐きながらも堂々と彼と向かい合うカナタの姿があった。

『なっ!!? ななななななななと貴徳原選手は無事だったああああああああああ!!
しかもなんと貴徳原選手も空を飛んでいます! これは一体どういう事だああああ
ああああ!!? さつきから私は叫んでばかりでそろそろ喉が痛くなってきたぞおおお
! 水っ! 水うううううっ!! . . . って空あああああああ!!?』

実況解説の女子生徒の悲痛な叫びが会場全体に響き渡る、その実況解説席の真上の階の観客スタンド最前列の席を見るとそこにいる寧音が150mℓ入るペットボトルの水をがぶ飲みする姿が見えた(笑)。

「. . . わたくしは自分の操る星屑の剣の上に乗っただけ、要は使いようですわ. . . 貴方が零か無限(ゼロ・オア・インフイニティ)を上手く応用して飛行しているのと同じです風間さん」

カナタの足下を見てみるとそこに薄ぼんやりと光る透明な足場が構築されていた、確認するまでもない、これは星屑の剣の集合体だ、カナタは飛行しているのではなくこの足場に乗って立っているだけなのだ。

そもそも重勝の【零か無限】は空戦に特化した能力というわけではない、これは彼の規格外な魔力制御能力あってこそその空戦スキルだ、ただ飛行するだけでさえ珠雫と同等

の魔力制御能力が必要とされるのにそれに加えて五十もの数の誘導重力球を操り尚且つ自分自身も動いて空と地上の近中遠全ての距離の戦闘を制するある意味ステラ以上のオールラウンダー、重勝の魔力制御がどれだけ規格外なのか良く分かる。

「そうかよ・・・んじゃ、このまま空中戦と行くか！」

重勝は空中を漂う全ての誘導重力球を自分の周りに集合させて自らも攻撃体勢に入る、五十あつた魔力球もいくつかカナタに斬り墜とされるか被弾するかして数が減り今は先程と同じ三十二球となっていた。

「風間さん、行きますよー！」

二人がそれぞれ誘導重力球と星屑の剣を飛ばし合って互いに正面衝突したのを合図に激しい空中戦が始まった。

「なるほど！同じ場で戦ってアドバンテージを無くせば同ランクである風間重勝と互角に渡り合えるってわけだ！流石カナタ!!」

観客スタンド最上階の通路にある手摺りに座って観戦する泡沫が興奮気味にカナタを絶賛する、泡沫はそもそも今までカナタが一方的に押されていたのも一年前に刀華が完全試合で負けたのも全て重勝が制空権を奪取したことによるアドバンテージの所為だと思っていたのでそのアドバンテージさえなければ刀華もカナタも負けたりしないと踏んでいた。

「……いや、これは愚策だよ……」

しかし、隣で観戦している刀華はそうは思わなかった。

「は？何でだい刀華？」

「確かに同じ土俵で戦えばやりやすくなるよ……だけどそれだと風間さんはまた別のアドバンテージを得る事になるんだよ……」

「別のアドバンテージ？」

「そう、うた君も分かっているとは思うけど相手の土俵で戦って勝つには少なくとも相手より三倍以上強くなければいけないの、空戦に慣れている風間さんと慣れていないカナちゃんとはどちらが有利かは明白だよ」

刀華は説明しながらバトルフィールド60m上空で戦闘を繰り広げる二人を見上げた。

無数の刃が一つの魔力球を斬り墜とした隙にカナタの後方から接近して彼女の背中を斜めに斬り付けて大ダメージを与え、激痛による悲痛な叫びを上げる彼女に容赦なく四発の魔力球を上から勢いよくぶつけて追い撃ちをかける重勝・・・戦況は全く好転していないどころか寧ろカナタの戦闘力が落ちて状況が悪化しているようにも見えた。

「ただでさえ慣れない空中戦なうえに多くの星屑の剣を足場としてコントロールしながら足場を作った為に大幅に数を減らした星屑の剣で無茶な対応をしなければいけない・・・空での戦闘は地上での戦闘と比べて視界が広くなるからより多くの対応能力が必要になる、カナちゃんとの空間認識能力と魔力制御は優れているけれど風間さんのと比べると正直御粗末と言える・・・風間さんの凄まじい空戦スキルは彼の持つ規格外な魔力制御と空間認識能力あってこそその物だから、今のカナちゃんは絶対的に不利な選択をしたんだよ」

「・・・そんなの・・・アリアかよ・・・」

刀華の説明を聞いて落胆する泡沫、こんな無茶な選択をした親友に困惑せざるを得ない刀華はどんどん傷付いていくカナタを見て疑問を抱いた。

「そんな基本的な事カナちゃんだって分かっている筈・・・なのにどうして?」

「ぐはああああっ!!．．．まだ．．．まだですわっ!!」

行く手を阻む無数の不可視の刃を一振りで薙ぎ払って正面からカナタに接近した重勝は彼女の腹部に水平蹴りを叩き込んで蹴り飛ばす．．．今のカナタの姿は試合前の気品に満ちた貴婦人の姿はどこにもない悲惨な姿である、いつも被っていた鍔の広い純白の帽子は多くの魔力球の被弾によつて弾け飛んで無くなり、身に纏った純白のベルラインドレスは漆黒の刃で斬り裂かれ魔力球が被弾して弾け飛んだりした為に上半身の布は身体の大事な部分を隠す僅かな布しか残っておらず、下半身の長いスカートは所々に穴が空いていたり左右がスリットの様縦に斬り裂かれたりしていて下着と生足が見

えていて既にスカートの役割を果たしていない、そして何よりも悲惨なのは身体中の至る所に付けられた傷口から流れ出る血が白い肌と残った僅かな布を緋色に染めていて見るに堪えない、正直鮮血で染まっていない箇所を探す方が困難だった。

その彼女の負傷が未だに無傷の重勝との実力の差を物語っていた、しかし彼女は諦めない、勢いに乗って更に追撃を仕掛けて来る重勝の一瞬の隙を突いてカナタは無数の刃を彼が振るってくる漆黒の刃にぶつけて拮抗させる。

「風間さん！貴方は一体何を考えているのですか?！」

「ん?。」

至近距離で漆黒の刃と無数の刃を拮抗させている状態を保ちながらカナタは問う、親友を苦しめる存在である目の前の黒い剣士にずっと前から聞きたかった疑問を。

「学園中の人達の想いと責任を踏みにじって皆を敵に回して！皆の想いを背負って戦う刀華ちゃんの事を何とも思わずに容赦なく叩き潰し邪魔して!!それなのにこうして選抜戦に出てわたくし達の邪魔をして!!一体何のつもりなのですか!?!わたくし達は……刀華ちゃんは応援してくれている《若葉の家》の子供達や学園の皆さんの希望となつて前に進む勇気を与えようとしているのに！それを貴方はっ!!」

悲痛な想いを星屑の剣に乗せて重勝を後方に弾き飛ばす、皆の希望である刀華の道の邪魔はさせない、その友への強い想いが最早立っているのが不思議なぐらい身体の限界

『貴徳原選手砲撃ごと天井に叩き付けられたあああああつ!!まるで勝負にならなああああいつ!!風間選手圧倒的強さで格の違いを見せつける!これが序列一位の実力だあああああつ!!』

砲撃がカナタごと天井に直撃した事によって被爆し、直撃した箇所は大穴が空いて蒼穹の大空がそこから顔を出した。

「.....」

意識はあるものの最早身体にチカラが入られないボロボロのカナタが星屑の剣の足場を失い、まさに今落下しようとしている

.....だがここで彼女が楽になる事を重勝（悪魔）は許さなかった。

「っ?!」

穴が空いた天井の手前で落下しかけたカナタの右手首に突如出現した黒い輪が嵌められ、右腕を宙吊りにする様な恰好にして彼女をその場に拘束した。

「・・・【重力の拘束具（グラビティバインド）】・・・」

宙吊り状態のカナタがチカラの無い声で重勝が使った伐刀絶技の名を呟く、一年前の決闘で重勝が刀華の身体をこれで拘束して無防備状態にしてそのままとどめを刺した忌まわしき輪・・・それが今自分の右手首に嵌まっている事実が彼女の心に苦虫を嘔み潰したような遣るせ無い想いを抱かせた。

「・・・貴徳原・・・」

砲剣の切っ先をカナタに向けて回転式弾倉を五回転させる重勝、最後は高重力エネルギーの砲撃でとどめを刺すつもりのようなだが重勝はまだ切っ先に重力エネルギーを収束しない。

「【若葉の家】っていうのは何だかわからねーけど・・・お前・・・東堂が活躍するのを見てアイツ等全員が前に進んでいると本気で思っているのか?」

「・・・えっ?!」

重勝はさっきのカナタの問いに対して問い返したい事があったのだ、彼が問うのは刀華が本当に破軍学園の生徒達が前に進む為の希望になっているのかという疑問だった、

何を訳のわからない事を言うのかと思つたカナタは呆けた、それもそのはず、刀華は破軍学園の生徒会長にして昨年の七星剣武祭ベスト4まで勝ち進んだ英雄、皆が彼女を慕い、尊敬し、信頼している……刀華は確かに皆が目指すべき目標になっている筈だ……カナタがそんな想いを馳せていたその時、地上の観客スタンドから罵声の嵐が飛んで来た。

「ふざけんなよ裏切り者が！」

「テメエに勝ち進む資格なんかねえっ！引つ込みやがれ！」

「そうよそうよ！」

「会長達は俺達の為に戦つてくれているんだ！てめえと違つてな！」

「貴徳原さんを放せ人間のゴミが！高ランクだからって好き勝手やれると思つたら大間違いだ！」

「そうだ！お前なんか会長がきつとぶちのめしてくれる！いつまでも調子にのつているんじゃないぞ！」

次々と飛んで来るブーイングの嵐、裏切り者の重勝を罵倒し刀華達を信頼する声。

——ほら、やつぱり刀華ちゃんは間違つてなどいません、こんなにも大勢の人達が刀華ちゃんを信頼してくれて。

カナタは心の中で安堵した、刀華が正しいという事は皆の信頼が証明してくれている

からだ。

「そうだ！会長がきつとやってくれ！」

「ああ！絶対に会長が俺達の代わりに全てを成し遂げてくれる！」

「あの人は俺達凡才と違って特別だからな！お前なんか目じやないんだよ！」

「そうだ！だから会長達の邪魔してんじやねえよ！」

——……えっ!?

安堵していたカナタだったがしばらくブーイングを聞いていると何か違和感を感じた、何かが変だ、何かが引つ掛かると。

皆が刀華やカナタの事を信頼してくれているのは確かだ、なのに何故か変な感じをカナタは感じたのだ、一体どうしてと思っていたところで重勝が口を開いた。

「そういえば【落第騎士】と【狩人】の試合の時もアイツ等はこの様な感じの罵倒をしていたな、【フランクのくせに背伸びしてんじやねえよ】とか【狩人の邪魔するな】とか【騎士の風上にも置けないクスだ】とか自分達より低ランクの黒鉄を馬鹿みてーに笑つてよ、あれ聴くに堪えなかつたぜ、自分達は立ち向かう事さえしない癖にさ」

重勝が呆れるように話をする、と重黒の砲剣に変化が起こった。

『な、何だこれはあああああっ!?!風間選手の霊装の刃が真ん中から二つに割れてその中から黒い砲塔が出て来ましたあああああっ!?!』

漆黒の刃が二つに割れてそれが花卉の様に開き、中から姿を現した黒い砲塔が上で拘束されているカナタにその砲口が向けられる、砲口の中を良く見てみると奥に圧縮された黒い重力エネルギーが渦を巻くように収束されていた。

「悪いな貴徳原、質問には「つい最近やりたい事ができたから」としか答えられねーわ！今教えたら意味がねーからな・・・んじやちよつとキツめのいくぜっ!!」

カナタは感じた違和感と余計に謎を残す重勝の答えを聞いた為に動揺して混乱しているが重勝はカナタが考えをまとめるのを待つということをせずには容赦なくその真っ黒な筒の中で渦巻く暴力の塊を発射した。

「《収束重力大砲（ストライクカノン）》!!」

収束重力砲（ストライクプラスター）が巨大な重力エネルギーの塊を砲弾として撃つのならこれは黒い極太レーザーだ、無慈悲を体現するような黒い砲撃が拘束されて動かないカナタを飲み込み蒼天を駆けて行った。

行き着いた答えと終焉の光

漆黒の極太レーザーが天井に空いた穴を更に広げて突き破り、蒼天の彼方に飛んで行った光景を目の当たりにした観客の生徒達は全員啞然として静まり返っていた、果たしてカナタの安否は？彼女は無慈悲を体現したような砲撃に飲み込まれて消滅してしまつたのか？

『と……貴徳原選手の姿がありません……あの砲撃でカツ消されてしまつたのでしょうか？……』

「やり過ぎだつてリユウだろアイツ……」

重勝が放つた一撃は学園序列三位である烈でさえ戦慄を覚える程だつた、明らかにオーバーキルだと。

「……確かにやり過ぎだがこれぐらいで済んだんならまだマシだ、一年前の【アレ】はこんなものではなかつたのだしな……」

「そうさね（モグモグ）、重坊の【アレ】に比べればこれぐらいそよ風が通つたのと同じだしねえ（モグモグ）」

「確かにそうだが、アンタ等何余裕そうにしているんだつてリユウだ！理事長と臨時教

師だろアンタ等!? 自分の生徒が一人死んだって言うのn「貴様の眼は白玉か何かか烈? 貴徳原先輩は存命だぞ」・・・は?」

この惨劇を見ても尚、安心したかのように観客席に座りながら腕と脚を組んでホツとする黒乃とその隣の席に座って何でもないかのようによつぽっを頬張る寧音に烈は激怒しかけたが、カナタは生きていると絶が横槍を入れた事で烈は呆けた。

烈は絶が指さした自分達から見てバトルフィールドの最奥の端を見た、するとそこには血塗れの姿で片膝を床に着いて肩で息をしている女性の姿があった：：カナタだ：：『と・・・貴徳原選手は生きていたあああああつ!! なんと屈の精神でしょう! あの絶体絶命の状況を切り抜けて紅の淑女（シャルラツハフラウ）はリングに舞い戻って来ましたあああああつ!!』

「へえ、シゲのあれを躲すか・・・やるじゃん」

幸斗は右手首を拘束されて動けない状態だったにも拘らず重勝の収束重力大砲（ストライクカノン）を避けたカナタに感心する、しかし一体どうやって避けたのかと疑問を抱いている中、隣にいる涼花が口を開いた。

「ええ、そうね」

——— 砲撃に飲み込まれる前に星屑の剣で拘束されていた右腕を切り落とすなんて、貴徳原先輩は相当な覚悟でこの試合に臨んでいるみたいね・・・」

尋常じゃない視力を持つ涼花にははつきりと見えた、カナタの右腕の二の腕の先がなくなっているのを。

『なななななななんという事でしょうかあああああつ!? 貴徳原選手は右腕を切り落として拘束から逃れるという方法で砲撃を躲していたあああああう・・・オエエエエエエエエエツ!!!』

「カナ・・・ちゃん・・・」

「・・・クソツッ! 風間重勝、そこまでやること無いだろっ!!?」

あまりにも惨いカナタの姿を見て腹の中の汚物を口から吐き出してしまふ実況解説の女子生徒の声が彼女の惨さを物語っている、彼女の昔からの親友である刀華と泡沫もこの惨状を見てそれぞれ戦慄と怒りの感情を抱いていた。

「刀華! もうこの試合は止めた方がいいかもしれない! このままだとカナタが!・・・刀華?」

「やめて・・・もうこれ以上は・・・カナちゃん・・・」

泡沫はこれ以上の試合の続行は危険だと思い、悔しいが審判にカナタの棄権を宣言してもらおうよう促しに行こうと刀華に声をかけるが、彼女は落下防止の柵の上に両手を着いている状態で身体が震えて痙攣していて眼から涙を流し絶望に染まったような表情をして動揺していた、あんな姿になってまで戦うカナタを見て耐えられなくなったの

だ。

——刀華が涙を流すところなんて初めて見た、クソツ！アイツツ！！

刀華は強い、どんなに苦しくても第三者の為に比類無きチカラを発揮する強さを持つた少女だ、泡沫は誰よりもその事をよく知っている、故に刀華が弱さを見せているのに驚愕したのだ、信じられないと……だがよく考えてもみると第三者の為にチカラを尽くすという事は大切な人達が傷つくのを誰よりも恐れているということだ。

【七星剣武祭】も【学内選抜戦】も【実像形態】での命のやり取りだ、その為命を落とす事だつて考えられる、選抜戦にエントリーしている生徒達は皆それを覚悟の上で参加している、それを危険だからと言って止めたり悲しんだりするのは騎士として侮辱と言ってもいいだろう、しかし大切な人が死ぬ程傷ついているのを見て平気な人間なんていない、特に第三者の為にチカラを尽くす刀華は一年前の決闘のトラウマと合わせて心が深く傷付いていた、彼女は自分が戦つて死にそうになつていいるならトラウマがあつてもいくらでも耐えられるが、それが大切な親友であるならば彼女の心の傷は相当なものだろう。

「クソツ！審判は何をやっているんだ!?こんな戦える状態じゃないだろうが！」

バトルフィールド外の端で集まつて中止するか続行するかでもめている審判達を睨みつけて悪態を吐く泡沫は動揺しているままの刀華から離れるわけにはいかず、地上で

満身創痕になっているカナタを上空で見下ろす重勝を見て何もできない自分に怒りと悔しさを覚えた泡沫はギリツと齒軋りを一回するのであった。

「はあっ！・・・はあっ！・・・はあっ！・・・はあっ！・・・」

「《再生槽（カプセル）》に入れば切断された箇所も接合することができるからって無茶すんなあ」

重勝は地上30mぐらいまで高度を下げて地上で床に片膝を着きながら肩で息をすする隻腕となったカナタにそう言って呆れた、バトルフィールドの外れを見ると運営スタツフらしき人が切断されてそこに落ちたカナタの右腕を回収しているのが見える、この試合の終了後にカナタが再生槽に入って右腕を接合できるようにする為に再生槽

がある医務室に運ぶのだろう。

「だけども、お前このまま続けたら死ぬぞ」

今のカナタは身体中からの大量出血で見ても無残に身体全体が鮮血で染まっ
て非常に危険な状態だ、早急に治療しなければ命を落とし兼ねない。

「やり尽くして勝機が無い」んならギブアップしろ、戦場では勝つ事より生き残る事の方が大切だぜ、何度負けたって生きてさえいれば何度だってリベンジできる、だが死に
じまつたらお終いだ、俺は今このままお前が戦い続けて死ぬ意味なんてねーと思う、確
かに諦めない【不屈の心】は大事だがそれは死ぬまで戦い抜く事じゃねえ、何度負けて
無様を晒しても立ち上がって立ち向かい続けるド根性だ、俺はこのまま続けるのが合理
的だとは思わねーな」

「……………」

【不屈の心】と【悪足掻き】は違うとカナタに突き付ける重勝、元教官であつた重勝は生
き残る事の重要性が分かっているのだ、重勝達は三年生なのでここで負けたらもう七星
剣王になる事は一生叶わないが、生きてさえいれば新たに目指す道などいくらでも見つ
けられるのだから。

「それにお前、《貴徳原財団》の跡継ぎなんだろう？ ・ ・ ・ 将来お前を必要としてくれる人
達がいっぱいいるんだからここで意地を張ることはねーだろう？」

「……………」

カナタは日本有数の資産家である《貴徳原家》の令嬢だ、ここで彼女が亡くなれば日本一の財界は大きな痛手を負うことになるだろう、重勝は生き続ける目的があるなら尚更止めるべきだと思った。

「それでもまだやるって言うんなら容赦はしねえ、俺は腐っても戦士だからな、敵に同情して情けを掛けるなんて甘さはねーよ」

「……………」

重勝は無言で俯くカナタに砲剣の切っ先を向けて最後の警告をする、それに対してカナタは片膝を着いて俯いたままゆっくりと口を開いた。

「……確かにわたくしには【貴徳原】の為に尽力を尽くす義務がありますわ……わたくしは曾祖父や祖父、そして父が受け継いできた貴徳原の魂を尊敬しています、ですの義務を成し遂げずにこの世を去るのはその魂を汚すことに他ならないでしょう……」

ここで死ぬ事は義務を放棄するということだ、自分の父親達を尊敬するカナタにとつてそれはあつてはならないことだろう……しかし——

「……ですが、ここで諦めればもう苦しみ続ける刀華ちゃんを救う手掛かりは見つからないと思っています、友達一人救えなくて何が【高貴なる者の義務（ノブレスオブリージュ）】と言えるのでしょうか!? それこそ父達が受け継いできた魂を汚す行為ですわ!」

「貴徳原」は起源を市民革命以前のフランスに持つ元貴族だ、貴徳原家は時代が変わつてもなお「高貴なる者の義務（ノブレスオブリージュ）」を口だけでなく行動をもつて示し続けて来た、例え偽善と罵られようと彼等は数世代前からずっとそれを続けて来た、カナタはそのことを誇りに思っている・・・だからこそ彼女は——

「わたくしは一人の騎士として生きるより、友や大勢の人達のチカラになる事を躊躇いません！それがわたくし、貴徳原カナタの騎士道なのですから!!」

「.....」

俯いていた顔をバツと上げて真つ直ぐな眼で空を浮遊する黒い剣士を見据えるカナタ、もう何を言つても無駄かと思つた重勝は砲剣を両手持ちにして砲撃体勢に入る、一撃でとどめを刺す気だ、しかしそんな時にカナタはなんと薄ら笑いを浮かべていた。

「それと風間さん・・・なにも勝った気になつて居るのですか——

——この試合……わたくしの勝ちですわ!」

「一方的にやられて意識を保っているのもやつとな満身創痍の状態でカナタはなんと勝利宣言をし、その瞬間、重勝の上下左右前後全方位に数億の桜色の刃が出現して、それが重勝の周囲を隙間無く球形に完全包囲した。

『おおおおと!?何だこれはあああああ!?突如出現した無数の桜色の何かが風間選手を覆い隠してしまいました!』

『《吭景・星屑の剣（スフィア・ザ・ダイヤモンドダスト）》、目視可能な程に濃く密集した数億の刃が球形に敵を包囲し逃げ場を失くした敵を斬殺する伐刀絶技です、風間さん、貴方と空中戦をおこなっている間に仕掛けさせて頂きました!』

カナタはただ愚かにも相手の土俵で戦ってフルボッコにされていたわけではなかった、より相手の近くで気を引く為にわざと空中戦をして重勝が彼女をフルボッコにしている隙に彼女は少しずつバトルフィールド上空に満遍なく目視不能の刃を設置して大掛かりな罠を張っていたのだ。

数億の刃はまだ包囲しているだけの状態なので重勝はまだ無事だ、重勝は咄嗟に包囲の外側の至る所に漂っている残りの誘導重力球を全て自分を包囲している数億の刃にぶつけるがビクともしない。

「無駄です、吭景・星屑の剣の切れ味はウオーターカッターにも匹敵するのです、たかが誘導重力球如きで破れたりはしません」

片膝を着いていたカナタが立ち上がりそう言うと球形が一気に凝縮して行つた。

「これで終わりです風間さん……億の吭(のど)に喰い破られて散りなさい——」

「《絶空剣(ぜっくうけん)》っ!!」

数億の刃が同時に全方向から重勝を斬り刻もうとした瞬間に重勝は重黒の砲剣を振り抜いた。重勝の放った一撃は台風の如き剣圧を生み出し轟風が一気に駆け抜け強烈な気流となる、同時に何かが激しく鬨ぎ合い球形の数億の刃が全て吹き飛んで消滅した。

『おおっと!? 吭景・星屑の剣の中から突如轟風が発生して数億の刃が全て消滅してしまつたああああ!! これは風間選手がやったのでしょうか!? 当の本人は全くの無傷です!』

「ま、まさか!?! 真空刃で吭景・星屑の剣を【空気ごと】吹き飛ばすなんて……」
カナタは重勝が放った絶空剣に驚愕した、重勝が放った全力の一振りが自分の起死回生の伐刀絶技を大気ごと吹き飛ばして簡単に打ち破ってしまったからだ。

「これだけやってもまだ……届かないというのですか……」

どれだけ攻撃しても全て蹴散らされて掠り傷一つ付けることができない、未だ無傷で天（そら）から自分を見下ろす黒い剣士の姿にカナタは絶望と恐怖を感じた――

尽くしているカナタに砲劍の切っ先を向け冷たい声で彼女に問う。

「貴徳原……お前は何もわかつていねえ、友や大勢の人達のチカラになる事を躊躇わらねーだ？それは自らを犠牲にしてもする事じゃねーだろ、東堂もそうだがお前等は自分の事に無頓着過ぎだ……第三者の為に尽くすのは結構だがそれで傷ついて死んでそいつ等を悲しませたら本末転倒だろ？……【若葉の家】だか何だか知らねーけど背負った想いの重みで潰れちまったら意味……ねーだろ……俺、何か間違った事言ったか？」

重勝は全てを暗闇に叩き墜とすような眼差しでカナタを睨んで威圧する、彼は内心頭にくていた、他人の為なら自分はどんなに傷ついてもいいという自己犠牲、それは大切な人達を悲しませる行為だというのにそれを続ける刀華達の事が解せないのだ、幾ら皆を導く為とはいえど……その答えは今の重勝の問いを聞いて癩に障ったカナタが齒を食い縛って隻腕となった左腕を震わしながら言い放った。

「ふざけないで下さい！わたくしはともかく刀華ちゃんは背負った想いで潰れたりしません！皆の為に比類無きチカラを發揮する【善意】こそが刀華ちゃんの強さの源泉であり、魂なのですわ！刀華ちゃんを侮辱するのもいい加減にしてください！刀華ちゃんは自分が負けるということがどれ程多くの人間に悲しみを与えることかを知っています！ですから彼女は負けないし折れないのです！刀華ちゃんの事を何も知らない癖に

知った事を言わないでください!!何も背負っていない貴方に刀華ちゃんは絶対に負けたりしません!!無論わたくしも!!」

カナタは重勝が刀華の強さを否定したのが許せなくて激怒したのだ、それを聞いて重勝は不気味なくらい静かに右腕をゆっくりと上げて彼女を指さして――

「・・・背負う物が無い奴には負けない?・・・とんだロマンティストだな」

そう言った瞬間、上空いっぱいは無数の誘導重力球が展開された・・・その数・・・二百。

「なっ!!?」

『なああああああああああつ!!?何だこれはああああああつ!!?私は風間選手が今までこれだけの数の誘導重力球を展開した事など記憶にありません!!風間選手の誘導重力球の最大数は五十球ではなかったと言うのかああああああああつ!!?』

「嘘・・・ですわ・・・こんな・・・A判定じゃ納まりません・・・」

激怒により持ち直したカナタの心が再び絶望に染まる、これだけの数を飛行しながら制御するなど珠雫でも無理だ、そんな事を平気でやってのける重勝の魔力制御ランクは

「ん?言っでなかったか?俺の魔力制御ランクはS判定だ、ついでに言っておくと魔力の消耗を気にしなければこの六倍の数はいけるな・・・」

まさかのAランクオーバー、しかも誘導重力球の制御可能の最大数は脅威の千二百球、最早学生騎士レベルではない、その事実カナタは驚愕し同時に悟ってしまった：自分で勝てないと。

「お前の考えはよくわかった・・・もう何も言わねーよ・・・」

・・・そこから先はもうただの蹂躪（リンチ）だった。

もはやカナタに反撃する暇すら与えず重勝は彼女に魔力球の数の暴力で攻め立て、砲撃を撃ち込み、漆黒の刃の剣閃で斬り刻み、殴り飛ばし、蹴り飛ばす。

「ひ、酷い・・・」

「なにもここまでの事はないだろ・・・」

「あ・・・悪魔だ・・・」

あまりにも惨い惨劇に観客の生徒達は先程ブーイングしていた威勢が完全に無くなり、ひたすら戦慄するしかないようだった。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

観客スタンド二階で観戦している一輝達は重勝の圧倒的戦闘力を目の当たりにして言葉を失っていた。

「あんなにキレている重勝を見るのは久しぶりね、幸斗が無茶な過剰訓練（オーバーワーク）をして言う事を聞かなかった為に重勝が【少し、頭冷やせ】とキレて乱闘になったあの頃を思い出すわ、二人が本気で暴れた所為で大森林が一つ荒野になってしまったのだから」

「あの時はオレだつて譲れなかったんだ、弱いままだと前に進めねえからな・・・負けたけど・・・」

「八年前に静岡にあつた大森林が一夜にして消えたつてニュースがあつたが、貴様等の仕業だつたのだな・・・」

「あれ日本中で大騒ぎになつたつてリユウだからな、アホかつてリユウだ」

「うはは！面白そうな話じゃないか！昔から重坊達はやんちゃしてたんだあねえ」

「・・・頼むからこの学園を荒野にするのだけは止してくれよ・・・いや、もう遅いか・・・」

実況解説席の真上の階の観客スタンド最前列の席にいる幸斗達は国中を騒がせる程の大事を起こしていた衝撃の過去を暴露していた。

・・・そして、刀華と泡沫はというと・・・。

「もう・・・やめ・・・て・・・カナチャ・・・ん・・・」

「クソツ！クソツ!!何でボクはいつも役立たずなんだ!?!あの時も今もつ!!」

刀華は悲惨な姿と成り果ててもなお傷め付けられる親友を見るのが耐えられず柵の

上に顔を伏したまま呻き、泡沫はいつも無力な自分の事を嘆き柵の側面の鉄格子に八つ当たりをしていた。

勘違いしないでほしいが刀華は別にただ今の重勝を恐れて震えているわけではない、大切な親友を助けに行きたくても助けに行くことが許されない事に耐えられないのである。七星剣武祭も選抜戦も命懸けの死闘だ、エントリーした生徒達は皆それを承知の上で参加しているので途中で止めに入る行為は彼等の覚悟を汚す事に他ならない。また、重勝は刀華やカナタの事を認めずに陥れる為に叩きのめしているのでは断じて無い、寧ろ叩き潰すに値する伐刀者だと認めているからこそ重勝は敬意を払い彼女達を完膚無きまでに叩きのめするのである。刀華はそれを分かっているからこそ齒痒くて仕方がないのだ。

「《複数同時挟撃（クロスファイヤー・シュート）》・・・」

地上40mにブツ飛ばされたカナタに重勝は彼女の20m手前の地上30mの位置から彼女に砲剣を持っていない右手の人差し指を向け、その人差し指から六発の重力弾が同時に放たれ、彼女を前方六方向から挟撃するように被弾し被爆する。

「・・・・・・・・」

被爆によって地に墜ちて倒れ伏すカナタの意識が途切れたかを確認もせずにはイライタの消えた冷たい眼で彼女を見下ろして砲剣の切っ先を彼女に向ける。

「や・・・やめろおおおお風間重勝ううううううううううう!!!」

痺れを切らした泡沫がとうとう耐え切れずに叫ぶが、重勝は気にも留めずに容赦なく砲撃を放ち、直撃による爆風によってまたしてもカナタは上空に吹っ飛ばされた。

・・・カナタは薄れゆく意識の中、この戦いで得た情報を整理して考えていた。

——あの時感じた違和感は・・・気の所為などではありません・・・。

カナタはそう確信して次々と情報を整理して行く・・・【勝ち続けて皆に希望を与え、前に進む為の目標になろうと尽力する刀華】、「それで本当に皆が前に進むうとしていいのか?という重勝の疑問」、「裏切り者として皆から憎まれ、それでもなお序列一位の座に居座り続ける重勝」、「低ランクの生徒達による黒鉄一輝(Fランク)への侮蔑と罵倒」、

【刀華なら必ずやってくれるという期待と信頼】

——つ!?ま、まさか!?そんなっ!!

情報を整理しているうちにカナタは衝撃の答えに行き着いた。

——「……刀華ちゃんが勝ち続ける事で、低ランクの生徒達が前に進む事を諦めてしまう」なんて!?

彼女が行き着いた答えはあまりにも残酷な答えだった……そしてカナタは重勝が何故憎まれる事をする理由について考えた。

——「……まさか風間さん、貴方がやっている事は!?

そしてカナタがある仮説に行き着いたその時、突如出現した黒い輪に彼女は20m上空で隻腕となった左腕ごと胴体を拘束されてしまった、重勝の重力の拘束具（グラビティバインド）だ。

——これは……あの時の……。

宙に固定された状態でカナタは目を見開き、天井すれすれの位置まで上昇している重勝を見上げ、彼が砲剣の回転式弾倉（リボルバー）を六回転（フルリロード）し、超高濃度の黒い魔力オーラを自身の身体全体に纏い始めたのを見て極限の戦慄を覚えた。

「フイーネ（終わり）だぜ……貴徳原」

黒い魔力オーラが風のように形を変え重勝の周囲を球形に漂い始める、それらは次第

にうなりを強め対流を生み出し大気を震えさせた。

『か、風間選手が魔力を纏った瞬間空間が揺れ始めたあああああつ!? ヤバイヤバイ! !これはヤバイ!!』

「まさか!?これが理事長の言つてた!!」

「くっ!?あの馬鹿者がつ!!・・・全員に次ぐ!結界の展開準備を急げ!!客席まで被害を出させるな!!」

そう、これは一年前の決闘で重勝が刀華にとどめを刺すのに放った【禁技指定】級の伐刀絶技だ、黒乃は無線機を取り出して第二訓練場内にいる教師や魔導騎士達に指示を出した。

「う・・・うわああああああつ!!」

「に、逃げろおおおおおおおおつ!!」

「お助けええええええええええつ!!」

「ゴメンナサイ!ゴメンナサイ!!ゴメンナサイ!!ゴメンナサイ!!」

観客の生徒達が一齐にパニックを起こして大慌てで逃げ出し始めた、中にはトラウマが再発して泣き狂う生徒もいた。

「な!?何なのこれはっ!?!」

「お兄様、逃げましょう!何か危険な予感がします!!」

「確かにそうだけど、このままだと医務室にいるステラが危ない！まずは急いで医務室に行つてステラを連れて行かないと!!」

一輝達は医務室で療養中のステラを連れ出して逃げる事に決めて立ち上がり早急に行動し始めた。

「っ!!」

「刀華っ!!」

観客スタンドの最上階の通路にいる刀華は咄嗟に柵を飛び越えて階段を下り駆け出した、彼女が最も恐れていた事が目の前で現実になろうとしている、もう我慢できない、これは一年前の決闘と違つて実戦形式の選抜戦、今重勝にこれを撃たせたら彼女の大切な親友が存在ごと消されてしまう、覚悟と魂を汚す行為なのはわかつている、死んでしまつても文句を言う資格が無いのもわかつている、彼女はそれを承知で重勝を止めにする、大切な親友を救う為に。

重勝が重黒の砲剣を天に掲げると身体に纏つた魔力オーラが更に濃度を上げて黒から白に変わり――

「これが俺の――」

砲剣の切っ先を真下にいる宙に固定されて抵抗不可状態のカナタに向け、魔力オーラが彼の背後に六翼のように広がり――

その光は無情にも放たれた・・・極光が轟く、無制限に解放されたチカラが主の意志に従い敵を討ち滅ぼす為に荒れ狂い、空間を歪ませ、果てしない暴力の極光が極大の光の剣となり柱となつて――

「嫌あああああああああああつ!!!」

全てに慈愛の心を分け与える優しき少女の叫びと共に・・・紅の淑女を飲み込んだ・・・。

死闘の終結、未来（さき）へと向けて

重勝が放った「光翼ノ帝剣（アストラル・ブレイカー）」は超圧縮された膨大な超重力エネルギーを放出し、敵を空間ごと押し潰し消滅させるという伐刀絶技だ、その破壊規模は幸斗の龍殺剣（ドラゴンスレイヤー）には遠く及ばないものの巨大都市一つを軽く丸ごと消し飛ばすぐらいはある。

「ぬううううう！なんて圧力さね！なんてもの使うんだい重坊！腕が弾け飛びそうだけぞ！！」

「無駄口を叩くな！一瞬でも気を抜けば破られるぞ！！」

白い超重力エネルギーの柱がカナタを飲み込み、光がドーム状に広がって直径百メートルのバトルフィールドを飲み込み、そしてそれが観客スタンドの手前でまるで見えないう壁に阻まれたように停止し空へと上昇、巨大な光の柱となり天井を完全消滅させて突き破って蒼穹を貫き、白い光の巨塔が建つ。

「風間の奴やりやがった!!どう考えてもこれオーバーキルってリユウだろ!!」

「確かに凄まじい・・・先生方が被害を抑えてくれているとはいえ、これは個人に向けて使う伐刀絶技では無いな」

「凄え……シゲの奴いつの間にこんな伐刀絶技を使えるようになったんだよ!? くううう
! オレの龍殺剣とどっちが上か勝負してみたいぜ!!」

「いや、流石にアンタの龍殺剣には敵わないわよ……でも相手を重力の拘束具（グラビ
ダイバインド）で拘束し完全無防備状態になったところをこれだとどめを刺す……鬼
畜……いや、悪魔ね……」

目の前で黒乃と寧音が能力を使用して被害を食い止めている中で幸斗達は呑気にも
光翼ノ帝剣に対する感想を述べていた。

「いやよなアンタ達気楽でええ!？」

「まったく、食い止められるとは限らないのだぞ」

「なあに! 平気ですよ、いざとなったらオレが龍殺剣をブツ放して消し飛ばしてやりま
すから!!」

「やめなさいお馬鹿!?! それやったら逆に被害が広がるわよ!!」

「……寧音、なんとしても食い止めるぞ!!」

「ガッテンくーちゃん! ウチもまだ死にたくないからね!!」

駄目だったら龍殺剣を使うという幸斗の恐ろしい宣言を聞いた黒乃と寧音は必死に
なって能力の出力を上昇させた。そして光の巨塔が建つてから約一分が経過したとこ
ろでそれは消え去り、光に飲み込まれたバトルフィールドは完全に消滅していて代わり

に巨大なクレーターができていた。

「……その中心に生まれたままの姿で意識を失っている血塗れの女性が倒れていた。

「……放つ前に幻想形態に切り替えていたか……」

光翼ノ帝剣を防ぎきってホツと一安心した黒乃がそう呟く、倒れている女性は言うまでもなくカナタだ、重勝は光翼ノ帝剣を放つ直前に殺傷ダメージになる実像形態から精神ダメージになる幻想形態に切り替えていたのだ、故に彼女は消滅しなかったのだ。

「貴徳原カナタ、戦闘不能！勝者、風間重勝!!」

「カナチャああああああんっ!!」

レフェリーがカナタが気を失っているのを確認して試合終了宣言をした瞬間に刀華は観客スタンド一階にある柵を跳び越えてバトルフィールドがあつたクレーターの端しに飛び降り、坂を駆け下ってクレーターの中心で倒れているカナタの許へと急いで駆け寄り彼女を介抱する。

『つ……遂に決着ううううううっ!!長い長い死闘を制したのは「裏切り者の序列一位（エース・オブ・ビトレイアー）」風間重勝選手だああああっ!!しかもまたまた無傷の完全試合（パーフェクトゲーム）！風間選手はこれで無傷の十連勝！破軍学園最強の無敵の序列一位（エース）は腐っても健在だああ!!……って当然だけでもう皆避難しているじゃないの!?!』

「急げ！担架持つて来い！」

医療班の人達が瀕死の重傷を負ったカナタを担架の上々に寝かせて医務室に運んで行く、それを見送った刀華は立ち上がって無言のまま悔し涙を流した。

「……………」

青ゲート近くのクレーター端に降り立った重勝は刀華に何も言わずに立ち去ろうとする……………だが——

「轟け、《鳴神（なるかみ）》っ!!」

立ち去ろうとする重勝の方に振り返った刀華が自身の霊装である黒漆の光沢を持つ鞘に収められた日本刀を顕現させてそれを抜刀、身体中から轟音を響かせる程の雷光を放電させ怒りが籠った鋭い目線で背を向ける重勝を睨み、彼に鳴神の切っ先を向ける。

「……………試合の結果に難癖付けられる筋合いねーんだけど……………」

重勝は刀華が言いたい事が分かっていて、誰だって大切な友達を傷つけられておいて怒りを抱かない人間なんていない、しかし、選抜戦は全てを覚悟して戦うものでありその結果どうなろうと文句を言う資格など誰にも無い、故に重勝が言った事は果てしなく正しい……………だが。

「……………確かに学生騎士としても選抜戦に出場している身としても貴方に文句を言う資格も恨む資格ありません……………ですが、貴徳原カナタの友人として……………東堂刀華

個人として貴方の事を絶対に許しません!!」

それでも刀華は許せなかった、身体中から溢れ出る怒りの轟雷がクレーター全体を撃ち抜く、彼女は改めて目の前の黒い剣士を倒すべき敵として認識して決意を新たにす
る。

「私は貴方を倒します! 必ず倒します!! 傷付けられたカナちゃんの為にも絶対に貴方を許しません!!」

「……………そうかよ……………」

この選抜戦か七星剣武祭で重勝を倒す、以前から変わらない誓いだがいともより強くそれを宣言する刀華に重勝は一言そう言つてその場を跡にして行つた。

実況解説席の真上の階の観客スタンド最前列で一部始終を見ていた寧音は眉を顰めた。

「……………くーちゃん」

「何だ?」

「確かに今の試合、重坊はやり過ぎだと思ふんだよねえ、あんな滅茶苦茶な伐刀絶技なんて使わなくても重坊は圧勝だっただろうに、これじゃあ余計にとーかちゃん達を始めとした生徒達に恨まれるだけで重坊にはなんのメリットも無いと思ふんだけど……………くーちゃんは知っているのかい? 重坊の目的を」

寧音は一段上の席に座って脚を組んでいる黒乃にそう尋ねた、これほどの惨劇を見ても重勝に「被害を抑える私達の身にもなれ」としか注意せずに彼を野放しにしている黒乃を怪しいと思ったのだ。

考えてみれば理事長である黒乃が学園のマイナスイメージにしかならない重勝を未だに序列一位の座に置いておく意図がまるでわからない、理事長としての権限を使えば学園の汚点である重勝を退学にする事は出来なくても序列一位（エース）の座を剥奪する事はできる筈だ、序列一位にするならば刀華の方が学園にとつて余程メリットになる、それなのにそれをしない黒乃は確かに変だ・・・彼の目的を知っていて尚且つその目的に賛同していなければ余程の馬鹿でもない限り誰もが彼を見限る筈なのだから。

そんな寧音の疑問を聞いて黒乃は目を瞑り口を開く。

「・・・ああ、知っている・・・奴はこれから先、この学園全体が強くなる為には欠かせない人材だからな」

黒乃は重勝の目的を知っていた、そしてその目的は破軍学園の学生騎士達を強くすると言うのだ。

「詳しい内容を今言う事は出来ないが・・・風間の目的を達成させる鍵を握るのは――

—
真田と黒鉄だ
—

「お疲れシゲ！すっげえなああの最後のやつ！いつあんなもん覚えたんだ？今度オレの龍殺剣とどっちが上か勝負しろよ！」

「お前は日本地図から関東地方を消す気か？」

青ゲート側の待機所から出て来た重勝を出迎えたのは幸斗と涼花だ、如月兄弟は用事があるからと言って先程別れたようだ。

「それにお前の龍殺剣とじゃあ勝負にならねえよ、総発生エネルギー量を見ても俺の光翼ノ帝剣は大きく見積もっても精々7PJ（ペタジュール）、お前の龍殺剣は16・8PJなんてイカレたバ火力じゃねーか」

「イカレてんのはアンタ達の頭の中よ、それ、精々なんてレベルじゃ無いから」

「それにお前、選抜戦や戦闘訓練もいいが、ちゃんとテスト勉強してんのか？来週だけ中間テスト」

「うゝっ！・・・よ、余裕だただぞ！オ、オレが本気を出せばテテテテストぐらいバベ勉強しなくてもももももももm「つまりやっていないのね、このおバカ」うつせえよ涼花っ!!」

「ハハハ！仕方ねーな」

「頭撫でるな！ガキ扱いすんじやねえよシゲ！」

「ん？悪いな、丁度いい所に頭があったからつい、ハハハハ！」

「くっそお馬鹿にしやがってえ〜!!」

長身である重勝が170cmと少しの低身長である幸斗の頭をわしやわしやと撫で回して笑い、二人に弄られて不貞腐れた幸斗が重勝の手を振り払って二人の前に立ち、二人に指をビシツとさして喚く様に宣言し出す。

「見てろよ！今度の中間テストはオレ自身のチカラで全教科全て80点以上の高得点を取ってやるからなっ!!」

「五教科総合50点以上すら取った事無い癖に何ほざいてんのよ」

「うるせえっ！オレはやると言ったらやる男なんだ！・・・いいぜ、オレが高得点を取れないのが運命だって言うんなら、その運命を覆してやるっ!!」

「無理に決めゼリフ言つて強がんたって、昔みたいに俺が教えてやるか」やっつてやるぜ！「うおおおりやああああああああああああつ!!」・・・はあ、困った元教え子だぜ・・・」

大興奮した幸斗は重勝の申し出を聞かず、廊下なのに何故か砂煙を巻き上げて突っ走って行ってしまった。

「・・・ねえ、重勝？」

「ん？」

幸斗が走つてどこかへと行つてしまふと涼花が話し辛そうに重勝に話し掛ける。

「アンタは強いわ、伐刀者として天才クラスの才能を持ちながらもやれる事があるんなら妥協せずになんでもやつて自分の可能性の限りを出し尽くすアンタのやり方は尊敬に値する……今日使つた光翼ノ帝剣だつてわたし達と離れ離れになつていた五年の間に試行錯誤の末に習得した伐刀絶技なんですよ？」

「まーな、姫ツチも知つてんだろ？俺の絶対的価値観（アイデンティティー）は「やり尽くしたなら諦める」、コイツは「幸斗がくれた」物だからな、つまんねー生き方しか知らなかつた俺に絶対的価値観をくれたアイツには感謝しているぜ」

「やり尽くしたなら諦める」、裏を返せば「やり尽くしてなければ諦めない」という意味になる、重勝は今日の試合の最中カナタに「不屈の心」と「悪足掻き」は違うということとを説いた、これは彼の絶対的価値観に基づいたものだったのだろう。

「……でも重勝、今日の試合で今制御できる誘導重力球（グラビティシューター）の最大数を述べていたけれど……」「五年前と変わつていない」のは何故？」

なんと重勝は五年前から千二百もの誘導重力球を制御できたと言ひ、何で五年も経つて進歩していかないのかと疑問を抱いた、果てしなく試行錯誤をする重勝が五年も進歩無しなんてあり得ない、そう思った涼花は思い切つて重勝に聞いてみる、すると重勝は目を瞑りゆつくりと口を開く。

「・・・光翼ノ帝剣を身に付けた時からな・・・まるで糞堅えー鎖に縛られたみてーに前に進めなくなつちまったんだ、どんなに色々やり尽くしてもよ・・・」

重勝はそう話しながら涼花に背を向けて歩き出して行った、涼花が見るいつも果てしなく大きく見えるその背中中は・・・この時だけは儂く寂し気に見えていた・・・。

風間重勝と貴徳原カナタの試合の終了をもつて激動の選抜戦第十戦目の全ての試合が終了した。

数々の七星剣武祭代表有力候補の生徒が敗北しまさに激動と言える試合であった。

【狩人】桐原静矢に続いて【紅蓮の皇女】ステラ・ヴァーミリオンと【速度中毒（ランナーズハイ）】兎丸恋々が二敗目を喫し代表入りの可能性が完全に消え、【城砕き（デストロイヤー）】砕城雷と【紅の淑女（シャルラツハフラウ）】貴徳原カナタも敗北した為に、ますます代表入りをする生徒六名の予測がつかなくなつた。

現在の代表入りの有力候補は以下の通りである。

三年・Bランク【裏切り者の序列一位（エース・オブ・ビトレイアー）】風間重勝

三年・Bランク【雷切】東堂刀華

三年・Bランク【空間土竜（ディメンショナルモール）】如月烈

一年・Bランク《深海の魔女（ローレライ）》黒鉄珠雫

一年・Cランク《朱月刃（あかげつじん）》如月絶

一年・Dランク《黒い荊（ブラックソニア）》有栖院凧

一年・Eランク【月花の錬金術師】佐野涼花

一年・Eランク【殲滅鬼（デストラクター）】真田幸斗

一年・Fランク【無冠の剣王（アナザーワン）】黒鉄一輝

学園序列トップ3以外はなんと全員一年生という驚愕のラインナップであった、彼等の今後の試合は一切目が離せないだろう、若き騎士達の健闘を祈る。

なお、この十戦目の試合で【殲滅鬼】に殴り飛ばされて学園の敷地外に吹っ飛び行方不明になっていた【城破き】が熱海の海岸に打ち上げられているのが発見された、彼は顔面が陥没していて重症だったが再生槽（カプセル）によって完治し現在は何事もなく生徒会の書記として元気に活動している。

そして、今回の最終試合で大量出血や右腕切断などによる瀕死の重傷を負った【紅の淑女】はなんとか一命を取り止め、再生槽によって傷は完治し右腕も接合し完治したのだが……未だ意識不明で現在は休学扱いで東京にある大型の病院にて療養中であり、彼

女は事実上の選抜戦エントリー抹消という形となつてしまい、彼女の所属する生徒会の役員等を始めとする多くの破軍学園の関係者が彼女の早期回復を望んでいる。

また、先日の第九戦目の第五訓練場半壊に引き続き、今回は第二訓練場が最終戦で【裏切り者の序列一位】が決め技として放った伐刀絶技によりまたしても半壊するという事態が起きた、後にこの一連の内容を知らされた連盟はこれを重く受け止め、この二つの訓練場を半壊させた【殲滅鬼】の【龍殺剣】と【裏切り者の序列一位】の【光翼ノ帝剣】を危険と見なし、今年の七星剣武祭の終了と同時にこの二つを【禁技指定】登録するところが決定された。

「♪、なかなかフレッシュな事やってんじやねえか！面白れえ」

魔導騎士育成機関の一つ【巨門学園】、東北地方に存在するこの学園の校舎の屋上にて魔導騎士連盟が発行する新聞を読んで口笛を吹く一人の男子生徒の姿があった。

「そもそも能力値選抜なんざくだらねえぜ！本当に強え奴つてえのは命懸けのデスマッチをやつてこそ見つかるんだ、なあ、真田幸斗」

巨門学園の学生服のズボンの両膝に穴を空け、学生服の上に三日月の刺繍が背中にある蒼い上着を羽織り、右眼に黒い眼帯をした隻眼の粹で空気の昂りを感じさせる雰囲気伊達男が幸斗の名前を呟き立ち上がる。

「七星剣武祭の前にもちよいと挨拶にでも行つてみるか！噂の【氷の冷笑】も大した事なくて退屈していたところだしな！」

気を昂らせる彼が纏う突風がプラズマ現象を発生させる、蒼い雷光が蛇の様に彼の纏う突風に巻き付き天へと昇る、それはまるで蒼い龍が天高く飛翔するように見えた。

「七星剣武祭前の顔合わせと行こうぜ、真田幸斗!!フレッシュだぜ!!」

熾烈を極める学内選抜戦の最中だというのに破軍学園で一騒動が起きる予感を感じ

させた。

ライバル、それは・・・【強敵】と書いて【とも】と読む！

曾て日本を中心に活動していた世界最強クラスの非合法傭兵団【西風】。

世界で五本の指に入る実力を持ち【傭兵王】の二つ名で知られる伐刀者【風間星流】を筆頭に【ひたすら前に突き進む志】を秘めた男達が伐刀者・非伐刀者・年齢問わず集まり結成されたこの傭兵団は五年前に団長である星流を失い壊滅した。

当時、福岡県北九州市のはずれにある小さな村で起きた大量虐殺事件の犯人である凶悪な伐刀者の討伐依頼をその村の村長から受け、その伐刀者が恐ろしく強く現在この村より北西に位置する【死絶島】を根城にしているという情報をその村長から貰った星流は西風全軍を率いて死絶島に乗り込んだ。

だがそこで待ち構えていたのは世界最悪の犯罪者にして世界最強の剣士【比翼】の【エーデルワイス】であった。

数々の特殊スキルを使う精鋭である西風の団員達も強すぎるあまり捕らえることを放棄された程の実力を持つ彼女には足下にも及ばない、総力を結集してかかった団員達は彼女の剣技の前に次々と倒れ西風は壊滅的な打撃を受けてしまう。

死力を尽くしてエーデルワイスに一太刀を入れ僅かな隙を作った星流は団員全員に撤退命令を出し、彼が追撃して来るエーデルワイスを食い止めている間に団員達は船に乗って死絶島を脱出した。そして星流はその戦いの中で命を散らしたのだった。

命辛々死絶島を脱出した西風の団員達は北九州の港に停泊するが、そこに待ち構えていたのは国際魔導騎士連盟から選抜された精鋭魔導騎士達と【特例招集】を受けた優秀な少年伐刀者達であった、彼等は待ち伏せしていたのだ、まるで西風が死絶島に出向きエーデルワイスに敗北してこの港に逃げ帰って来るのを解っていたかのように。

西風の団員達は彼等を相手に激しく抵抗するものの全員が満身創痍である為に満足に実力を出す事ができずに鎮圧され、戦闘の最中に海に落ちて行方不明となった数名を除き全員残らず連盟によって拘束されてしまい、この日をもって西風は壊滅した。

ほぼ全員が魔導騎士の資格を持たないで活動していた彼等は魔導騎士制度法違反によつて【元服】している団員達の殆どが連盟が管理する伐刀者専用の監獄に投獄され、元服していない十五歳以下の少年伐刀者達は連盟が管理する教育施設で再教育を受ける事となった。

・・・その少年伐刀者達の中に当時十歳にして【子破王】と恐れられた真田幸斗の姿もあつた。

教育施設の面会室、一枚の強化硝子が面会者との間に隔たるこの部屋で前に朱いメツシユが入った夕焼け色の髪で灼熱の様な瞳で相手を焼き焦がすような眼をした両頬に二重三角形のタトウウが彫られている十歳の少年・・・真田幸斗は面会に来た同い年の右眼を白いガーゼで覆った黒髪の少年と張り詰めた空気を漂わせて面会をしていた。

「よお、二週間振りだな真田幸斗」

「・・・何しに来たんだ？」

「へっ、最初の言葉がそれとはつれねえじゃねえか？この右眼を潰した奴がよ」

面会に来た隻眼の少年に対して素っ気無い態度をする幸斗、現在彼がこの施設に入ってから二週間が経っておりこの隻眼の少年と幸斗はその二週間前の北九州の港で相對していてその戦闘中に幸斗が少年の右眼を潰したという因縁ができていたのだ。

この隻眼の少年はなんと十歳という幼さで「特例招集」を受けた天才児であり今回は

彼の初陣でもあった、その洗礼がこの右眼というわけである。

「恨み言でも言う為に来たのか？・・・なら帰れよ」

「んだよフレツシユじゃねえな、この右眼を潰したテメエに興味が湧いて来たんだぜ、そのシヨボイ魔力量なうえにボロ雑巾な状態でこの俺と互角に戦ったテメエにな・・・」
「オレは男に性的な興味を持つ変態じゃねえから断るぜ」

「俺だつてねえよタコ！」

張り詰めた空気だったのに話が逸れてきた為に緩くなったので一呼吸置いた隻眼の少年が気を取り直して幸斗に向き合う。

「そんなテメエに聞きてえ・・・テメエはこれからどうするつもりだ？施設で再教育プログラムを受けるのは「元服」する十五歳までだろ、その後どうする？」

伐刀者は《元服制度》によって十五歳で成人とされる、幸斗達が再教育プログラムを受けるのはその間だけだ、隻眼の少年は満身創痍で自分を傷つける程の実力者である幸斗がその後どうするのか興味があった、故に彼は敵同士であるにも拘らず幸斗と面会に来たのである。

「・・・その後も決められてんだよクソ、俺達は全員強制的に連盟に入れられて正式な魔導騎士の資格を得る為に騎士学校に入学させられるんだとよ、チツ！好き勝手に人の人生決めやがって、一応騎士学校には入学するがオレは連盟の言いなりになる気はねえ、

オレはオレ自身が決めた道を行く」

幸斗はその灼熱のような目線で隻眼の少年を睨みつける。

「魔力量で決められた運命なんて覆してやる、邪魔する奴はブツ飛ばす！」

当然の如くこの面会室には盗聴器が設置してあるというのにお構いなしに伐刀者の有り様に喧嘩を売するような事を言い放つ幸斗、これを聞く連盟の役人は相当腹を立てることだろう、しかし――

——・・・へっ！二週間前と同じいい眼をするじゃねえか、まるで付けられた足枷を今にでも引き千切つて暴れ出そうとする鬼の様だぜ、施設に入つて腑抜けたかと思いきやとんだフレッシユな野郎じゃねえか、おもしれえ！

直接その言葉を聞いた隻眼の少年は口の端を吊り上げて凶悪な笑みを浮かべた、まるで面白い事を聞いたとにやけるやんちゃボウズのように。

「おもしれえ事言うじゃねえか真田幸斗・・・そういうえば二週間前は結局横槍が入つて一対一じゃ決着つけられなかつたな」

そう言つて隻眼の少年は真つ直ぐ幸斗の灼熱の様な眼を見た、獲物を目に捉えるような鋭い眼で。

「ならこの決着、お互い騎士学校に入学する五年後に最強の学生騎士を決める大会・・・
【七星剣武祭】の舞台上で決着を着けようぜ真田幸斗！まさか受けねえなんて言わねえだ

ろうな!?”

不敵な笑みを浮かべて幸斗に提案をして挑発する隻眼の少年、どっちが強いのか白黒ハッキリ付けなければ気が済まない、彼の心の中は今幸斗への対抗心でいっぱいだ……そしてそれは幸斗も同じだ。

「……上等だ、オレを誰だと思つてやがる! 西から吹き荒れる猛き熱風! 天下無敵の傭兵団西風特攻部隊のエース! 運命を覆す【子破王】真田幸斗とはオレのことだ!!……いぜ、その喧嘩……買った!!」

これが幸斗が七星剣武祭の出場を目指す理由だ、この時倒すと誓つたこの少年と戦つて倒す為に彼は前に進むのだ、運命を覆し、その未来(さき)に進む為に。

「フレツシュだぜー! そう来ねえとな!……鬼は龍が喰らう、真田幸斗! テメエはこの《伊達政和(だて まさかず)》が直々にブツ倒す!!」

二人はこの時をもってライバルとなった、互いに高みに上り詰める為の最強の好敵手同士に……。

あの激動の選抜戦第十戦目から約一ヶ月が過ぎた、衣替えによって学生服は夏服に変わり薄手になり季節の変わり目を感じさせる。あれからも幸斗達は順調に連勝を重ね次の試合でもう第十六戦目、学内選抜戦はいよいよ終盤に差し掛かっていた。

「うおおおおおおおおおおおおおおおっ!!」

この日、地球温暖化の影響か最大気温三十度以上の真夏日のような暑さでありギリギリとした熱線のような太陽光が地を焼く中、幸斗・涼花・重勝の三人は基礎戦闘力向上の為にトレーニングを行う為に破軍学園の敷地より約2 km北にある山岳道路に来ていた。

「見ているだけで暑苦しいわね・・・」

無数の大型トラックのタイヤをワイヤーで後ろに繋いで引きずる特殊合金製の競輪

自転車漕ぎ砂煙を巻き上げながら猛スピードで坂道を駆け上がる幸斗、大量の汗を流して雄叫びを上げながら自転車を漕ぐその姿はただでさえ暑いのに余計に熱気をまき散らして周囲の気温を上昇させるかのような錯覚を感じさせるので坂の頂上付近の木の陰で見えている涼花は顔を引き攣らせた。

幸斗がやっているトレーニングは「マウンテンサイクリング」、急斜面の坂道をギアの無い競輪自転車を漕いで登ることによって効率良く脚力を鍛えるトレーニングである。「・・・二分八秒・・・こりやあまた異常なタイムだな・・・」

幸斗が山岳道路を登りきり、坂の頂上でタイムを計っていた重勝が止めたストップウォッチの記録を見て顔を引き攣らせる・・・この山岳道路は全長1・2kmあるうえに斜め三十八度の急斜面であるのでそれを無数の大型トラックのタイヤを引きずりながら歩くよりもキツイ自転車を漕いで登って来ておいてこんな異常なタイムを叩き出した幸斗にドン引きしたのである・・・。

「・・・ふう・・・よしっ、絶好調だ!もう一度」

「そのくらいにしておけ、いくつ自転車をお釈迦にするつもりだ?」

「そうよまったく、この自転車特別発注するのhighくて大変なんだからね」

坂の頂上に到着した幸斗は調子に乗ってもう一度やろうと既にポロポロの自転車に乗って坂を下ろうとするがそれを重勝と涼花が引き留める、特殊合金製のこの自転車は

幸斗の為に特別発注したものであり値段が非常に高いからだ。普通の自転車ではAランク伐刀者を大幅に超える幸斗の脚力に耐えられない、故にこの特殊合金製の自転車を西風時代のコネを使って特別発注したのだが、幸斗は今日このトレーニングで既に五台もの自転車を使い物にならなくしていたのだった。

「だつたら次のトレーニングをY」今日はここまでだ、全教科テスト赤点の補習のストレスを解消したいんだらうけど過度なトレーニングを長時間続けると選抜戦に支障が出るからな」おい！テストの事はもういいだろシゲ！」

戦闘を生業とする魔導騎士でも社会の基礎知識は必要だ、騎士学校である破軍学園にも当然一般知識の授業およびペーパーテストは存在する、先日ペーパーテスト全教科全て80点以上の高得点を取ると息巻いていた幸斗だったが結果は全教科全て30点以下の赤点・・・見事に惨敗だったので幸斗は数日前まで補習授業を受けさせられストレスが溜まっていた。

「特に五教科は酷かったわね、現代国語15点、理化学12点、現代社会7点、英語12点・・・そして数学に至っては0点・・・合計46点・・・またしても50点の壁は越えられなかったわね」

「りよ・う・かああああ!!」

「そもそも間違える度に腕立てやスクワットを千回やるとかいう時間を無駄にするよう

「な勉強方法で上手く行く筈がないでしょお馬鹿」

「うがあああああつ!!」

涼花に馬鹿にされるように指摘され腹を立てて余裕そうに逃げ回る彼女を追い回し始める幸斗——その時、破軍学園の敷地の方から爆発音が聴こえてきた。

「なんだ?」

異常に思った幸斗達は切り立った崖の上から2km先に見える破軍学園の敷地を見渡し、何かが爆発したような黒煙が敷地の入り口付近の広場から上がっているのが見えた。

「なつ、何だよあれ!」

「・・・敵襲か?」

幸斗は煙が上がっている辺りを良く見てみるが遠すぎて詳しくは分からない、重勝も眼を魔力で強化して見てみるが広場に人だかりができているのが見えただけで誰がいるのかは解らなかった。

「・・・面白い人達が来ているみたいね」

そんな中で異常な視力を持つ涼花には広場にいる人間達一人一人が誰なのかがハッキリと見えたみたいであり、広場の中央にいる三人を見て彼女は笑みを浮かべていた。

「解ったのか姫ツチ?これをやった奴等が」

「ええ、わたし達が良く知っている奴等よ、特に今広場の中央で大勢の学園の生徒達を相手に無双している男なんて幸斗の因縁深い人間よ」

「オレの因縁深い人間？・・・まさか！」

笑みを浮かべながら語る涼花の言った男の事が誰なのかを察した幸斗は驚愕と共に心の奥底から闘争心が湧いて来て不敵な笑みを浮かべるのだった。

「安心しな、不本意だが幻想形態だ」

「ひいっ!?!」

右眼に黒い眼帯をして背中に三日月が刺繍された蒼い上着を羽織った伊達男が蒼い刀身の太刀の形をした霊装の切っ先を尻餅を着いて後ずさる男子生徒に突き付けている。

——何なんだコイツ!? 普通能力は一つだけしか使えない筈だろ!?

周囲にはこの男と戦って倒れている破軍学園の生徒達が気を失って倒れていた、それらは炎症や凍傷、鎌鼬で切り裂かれたように学生服がズタズタにされていたり感電していたり様々な状態で倒れていて、これらを一つの能力でやったと説明するには明らかに不自然である。伐刀者の能力は一人一つしか使えないのが常識だ、それをこの隻眼の少年はまるで複数の自然干渉系の能力を行使して戦闘しているように見えるので異常に感じるのだ。

「喧嘩売られたからとは言えやり過ぎだろ政和・・・」

「やり過ぎか? 挨拶程度だっていうのにやられるコイツ等が弱いんじゃないか?」

隻眼の少年の後ろにいる右頬に斜め二本の傷がある極道の息子っぽい少年が唾然として呟き、その隣でしゃがみ込んで退屈そうにしている不真面目な雰囲気少年がそれを聞いて自分の意見を言った。

そんな事を言っているうちに隻眼の少年は男子生徒を太刀で一閃して気絶させていた、問答無用である。

「こんな雑魚共じや全然フレッシュにならねえ、挨拶に来たんだからとつと出て来いよ・・・真田幸斗！」

身体と太刀に突風を纏い蒼いプラズマ現象が蛇の胴体を持った龍を模る、この隻眼の少年こそが巨門学園の大型新人（スーパールーキー）【伊達政和】、【蒼雷龍（ブルーライトニングドラゴン）】の二つ名を持つ幸斗の最大のライバルだ。

紅蓮の皇女VS蒼雷龍

現在生徒会長である刀華はある事情により不在である、その為素行の悪い生徒達がこれを機に普段抑制されている鬱憤を晴らそうと良からぬ事をするのである。

二分前、政和達は破軍学園の敷地の入り口にて出入りの許可をもらい近くの広場に足を踏み入れた所で素行の悪い愚かな生徒達に絡まれて喧嘩という名の戦闘が始まり、政和一人が三十人も生徒達を相手に無双をして現在に至る。

「政和、もういいだろ？ さっさと受付に行つて真田達を呼び出してもらおうとしようぜ」
「ふあくあ．．．破軍の奴等ザコ過ぎ、うちの学校のザコ共の方がまだマシだな、ほんの少し」

其処ら中に倒れている生徒達の中心で蒼い太刀を地に突き刺して眼を瞑り精神統一をする政和に終わったなら用事を済ましに行くぞと声をかける二本傷の少年とやつと終わったかと欠伸をして破軍の生徒達を馬鹿にする不真面目そうな少年、そんな二人の声を聞いても政和はその場を動かさず周囲に意識を集中していた。

「．．．．．へっ！ 真田じゃねえが少しはやりそうなのが来たみてえじゃねえか」

「は？」

こつちに向かつて来る伐刀者の殺気を感じ取った政和は眼を見開いて太刀を地面から引き抜き、木の陰から飛び掛かつて来る二人の伐刀者を迎え撃った。

「来てくれ、陰鉄！」

「傅きなさい、妃竜の罪劍（レーヴァテイン）！」

【無冠の劍王（アナザーワン）】黒鉄一輝、【紅蓮の皇女】ステラ・ヴァーミリオン、破軍学園が誇る実力者の二人が破軍学園の敷地内で暴れる隻眼の劍士を鎮圧せんと自らの靈装をもって飛び掛かる。

「ブツ潰れなさいっ!!」

先に劍を届かせたのはステラだ、地を揺るがす膂力を以って政和を上から叩き潰そうと妃竜の罪劍を落下の速度と自身の体重も利用して叩きつけるように振るい、政和はそれに対して太刀を上段に横にして構え振り下ろされて来る大劍をガードしようとする。

——このまま叩き潰す！

防御体勢を取った政和を見てしめたと思ったステラはそのまま全力で太刀に大劍を叩きつける……だが——

「……へっ！」

「なっ!?!」

大劍が太刀に接触する直前に政和は口の端を吊り上げほくそ笑み太刀を引く、それに

よってステラは宙でバランスを崩し、振り下ろされた大剣は政和が身体を右にずらした事によって空を斬り——

「ホラッ！」

「ぐはっ!？」

政和が右に身体をずらした動作を利用して一回転し足の踏ん張りが利かない宙で無防備状態となつてしまったステラの左頬に強烈な裏拳が炸裂した。

それと同時に一輝が薙ぐ様に陰鉄を振るつて政和に斬り掛かろうとして来たので政和は裏拳で右腕を振りきっている状態にも拘らずそのまま左手に持った太刀を片腕で振り上げ一輝を迎え撃つ・・・その瞬間、一輝の身体は霧のように消えた。

「第四秘剣・蜃気楼」

薙ぐ動作と同時に政和の目前に着地した一輝は足捌きによる落下速度の勢いを利用した急激な緩急で残像を作り政和に間合いを誤認させたのだ。

——こいつ!？」

それにより一瞬にして政和の懐に入ることに成功する一輝、一瞬度肝を抜かれた政和は再び横薙ぎで自分の胸を斬り付けて来た陰鉄を——

「ふっ!？」

「っ!？」

咄嗟に大きく身を後ろに反らして躲した、間一髪だったので政和は額に若干冷や汗を掻いていた。

一輝の後方に吹っ飛ばされて数メートル先にスタイリッシュに受け身を取っているステラを後目に二人はそのまま斬り合いを始めた、目にも留まらぬ無数の剣閃が衝突し火花を散らす。

——なんて重い剣撃なんだ!? 下手したらステラ並じゃないか!

——こいつ俺の剣を全て受け流してやがるのか!? …へっ! なかなかフレッシュじゃねえか!

嵐のような連撃のぶつかり合いの最後の二撃で二人は互いに後方へ大きく弾かれ地面をスライドするように滑って一輝はステラの隣に止まり政和は自分の仲間の二人の手前に止まった。

真夏のような暑い太陽光が地に降り注ぎ辺りを沈黙が支配する、汗を流しながら両者は霊装を構えて睨み合い、一輝の隣にいるステラも大剣を地面に突き刺して政和を睨みつけた。

「…一応言っておくが、喧嘩売って来やがったのは其処らに転がっている奴等だけ」
沈黙を破ったのは政和であった、発言した内容は言葉だけを聞けば正論を言っただけで弁解しているように聞こえるが彼の口端は吊り上がっていて明らかに一輝とステラを挑発

するように笑っていた。

「それはなんとなく分かる、彼等はよく迷惑行為をして生徒会に嚴重注意されていたみたいだからね・・・でも君は多分強者に遭遇したらどのみち戦闘を仕掛けていたんだらう？巨門学園の大型新人（スーパールーキー）、【蒼雷龍（ブルーライトニングドラゴン）】伊達政和君」

「・・・ほう」

政和の素性を知ったうえで一輝は攻撃を仕掛けたようだ、蒼い上着の下に着ている白い外套のような制服は巨門学園の物であり後ろの二人が身に着けているのも同じものである、このクソ暑い日になって暑苦しい恰好をしているんだと言いたくなるが何はともあれそれで彼等の身分は特定できる。

「君の事は連盟が発行している新聞に載っていたから知っているよ、過去最年少で特例招集を受けたBランクの天才児、中学生時代は中学生（シニア）リーグ無敗の三冠を達成しここ最近では入学早々巨門学園のエースにして【氷の冷笑】の二つ名で知られる《鶴屋美琴（つるや みこと）》さんに模擬戦を挑み僅か二秒で鶴屋さんを瞬殺し、公式戦ではなかった為に巨門学園の序列順位に変動はなかったものの事実上巨門学園最強の学生騎士となった期待の大型新人、ひどく好戦的な性格で強者と出会ったたら場所も顧みず挑みかかる傾向があり【爽快（フレッシュ）だぜ】と言う口癖と隻眼が特徴である：」

そして大きな才能を持ち幼少期から逸話を残している伐刀者は世間に名が知られる、政和は全国レベルで数えきれない程の逸話を残していたので情報誌に掲載されるのも道理であつた。

「そーいや最近よく取材が来るな、ちよつと前まで世界最高の魔力を持つAランク伐刀者であるなんちやら皇国の皇女が破軍に留学して来たつう話で持ちきりだったらしいからあんまり連盟の取材なんか来なかつたんだが、その皇女が破軍の七星剣武祭代表学内選抜戦で二回負けて七星剣武祭代表落ちたつていう理由ですっかりその皇女の話題が薄れたらしいぜ・・・はっ！その皇女が今何所にいんだかしらねえが、相手が真田と佐野だったのが運の尽きと言うべきか最高の魔力を持つて生まれただけで調子に乗つた慢心皇女なんぞ所詮この程度だったなと言うべきか・・・」

政和は自分の事を良く調べていた一輝に感心して思い出したかのように最近の情勢について話し出した、その内容は一輝の隣にいるステラが選抜戦に負けた事を小馬鹿にする内容だった。

——ステラがどれだけ努力してきたか知らないくせに好き勝手な事を！

政和は目の前に本人がいることに気付いていないようだが一輝にはそんなの関係ない、最愛の恋人にして最大のライバルである人を馬鹿にされた一輝は怒りが爆発しそうになりながらもなんとか平静を保ち続けている、ここで我を失つて政和に攻撃したら

こつちが悪者になるからである、元々は破軍の生徒達が政和達に危害を加えたのがそもその発端なので政和が戦闘することを合意せずに危害を加えれば一輝達も同罪なのである、さっきの攻防くらいなら所見の咄嗟の行動だったので軽い注意で済むが政和が自分達は被害者だと発言した今攻撃したら自室謹慎処分か最悪退学となってしまうだろう、故に一輝は込み上げてくる怒りを必死に抑え込んでいた・・・だが、自分の隣にいる話題の皇女本人は我慢できなかったようだ。

「アンタ・・・もういつペン言ってみろ・・・」

「あん？」

血が滲む程拳を強く握りしめて身体中から火の粉が巻き上がる、昔から才能だけしか見られてこなかったステラにとって慢心皇女なんて悪口聞き逃せる筈がないのだ。

「イツキ・・・コイツはアタシにやらせて」

「ステラ・・・」

ステラは一人で政和と戦うと言って一輝の前に立つ。

「・・・俺としてはそっちの黒髪の方が見どころがありそうだからできればそっちと戦りたいんだがな・・・つか何キレてんだお前？」

政和は魔力を放出させて明らかに激怒しているステラに疑問を抱いた、それを見兼ねた二本傷の少年が呆れたように溜息を一回吐いて政和に話し掛けた。

「政和……そいつが例の紅蓮の皇女だ、顔ぐらい覚えておけ」

「……チツ！なんだ本人かよ、負け犬皇女なんかに興味無いんだがな……」

「っ!!」

「ちなみにそつちの黒髪が無冠の劍王だな……」

「うおっ！マジかよ!?!こりやあいきなり大物と出会ったぜ、へへっ!」

「舐めんじやないわよ……」

目の前にいる女が紅蓮の皇女本人だと聞いた政和は白けた、七星劍武祭代表に選ばれた見込みの無いステラに関心が無いからだ、それを聞いたステラの怒りのボルテージが急上昇し一輝の事を聞いて態度を変えた政和を見て馬鹿にされたと怒りの炎を燃え上がらせた。

「お兄様！ステラさん！」

「やっど追い付いたわ……!?!」

校舎の方から珠雫と有栖院が駆けつけて来た。

——何よこの惨状……これを一人の伐刀者がやったっていうの？

有栖院は周辺に様々な負傷を負って倒れている生徒達を見て驚愕した、これ全てを一つの能力でやったと言うのだから無理もない。

「……手を出すんじゃないわよシズク、アリス、これはアタシが売られた喧嘩よ……」

「……まっ、噂の世界最高峰の魔力の保有者がどんなもんだか見てみるのもいいか……
いいぜ、来な」

ステラが加勢しようとする珠雫と有栖院を制していると政和が戦闘行為に応じた、
これでもう攻撃しても問題ない。

「消し炭にしてやる！喰らい尽くせ！妃竜の大顎（ドラゴンフアング）!!」

ステラは挑発するように右手で手招きしている政和に大剣の切っ先を向けて妃竜の
大顎を二発放った、どこまでも追尾する二体の炎竜が一直線に飛んで行き政和を襲い掛
かる……だが――

「……えっ!?!」

「なっ!?!」

「嘘っ?」

突然ステラが驚きの表情で固まり珠雫と有栖院が驚愕の声を上げた、なんと妃竜の大
顎が二体共政和の10m手前で消失したのだ。

「……何らかしらの能力を使ったみたいだね……」

その中で一輝だけが政和の身体の周りに蒼いプラズマ現象が発生した瞬間に妃竜の
大顎が消失した事に気が付いたようだ。

「アンタ何したのよ!?!」

「へっ！どんなに熱い炎だろうが【酸素がなければ消滅する】ってことだ！」
「な、なんですって!？」

ステラは政和の発言を聞いて驚愕した、確かに火は酸素がなければ存在できない、つまり妃竜の大顎が消失した辺りが真空状態になったのだ、しかし何もせずに酸素を消失させて一部の空間だけ真空状態にする事など不可能である。

——つまりアイツの能力は真空状態の空間を作り出す能力って事ね！だったらステラは妃竜の罪剣に摂氏三千度の炎を纏わせて息を止め、政和に向かって爆ぜるが如く勢いで突撃した。

真空状態である宇宙空間でもロケットのエンジンから炎は噴射する、ロケットエンジンの噴射口から出る炎はあらかじめガスと空気を混ぜたものをノズルから出しているからだ、ステラは魔力を放出し続けて炎を維持することによってそれと同じ事をすればいいと考えたのだ。

真空の中の圧力は魔力のバリアで防げばいい、世界最高峰の魔力を持つステラだからできる芸当だ。

——これでアンタの能力は封じたわ！アタシの事を慢心皇女と馬鹿にした事を後悔しながら懺悔なさいっ!!

ステラが政和の10m手前を通過する・・・ステラの読み通り大剣に纏った炎は消える事無く燃え盛り続け政和を射程圏内に捉えた。

「・・・考えが甘えな・・・」

「えっ!？」

ステラが政和に炎を纏った大剣を振るおうとした瞬間、彼女は【地面に足を捕られて】身体の体勢を崩してしまった。

「な、何なんですかあれ!？」

「ステラちゃんの足下の土が砂になった!？」

有栖院が今言った通り政和が身体中に蒼いプラズマ現象を発生させた瞬間にステラの足下の土が突如砂に変化してステラの足がそれに埋まった為に彼女は体勢を崩したのだ。

「これは・・・砂漠化?」

一輝が今言った砂漠化とは乾燥帯の移動などの気候の変化によって起きる自然現象である。

「随分と呆気なかったな皇女さま・・・少なくとも今のテメエ相手じゃ全然フレッシュな戦いではできねえな・・・」

政和は小さな砂漠に足を捕られ体勢を崩したステラにそう言うとう自身の霊装である

蒼い太刀に旋風と蒼いプラズマを纏わせてステラに斬り掛かった。

「うおおあああああつ!!!」

それに対してステラは雄叫びを上げて身体を捻り、その遠心力で無理矢理大剣を振るって太刀を弾き返そうとしたが――

――・・・嘘でしょ?・・・。

妃竜の罪剣は太刀が纏っている旋風に上に押し上げられて空を斬った。

《蒼牙ノ太刀（そうがのたち）》

そして蒼い太刀はそのままステラを一閃した。

――

「ステラアアアアアアアッ!!」

幻想形態の精神ダメージによって呆然とした表情で意識を刈り取られたステラが美しい放物線を描いて後方に吹っ飛び、一輝が絶叫しながらステラの身体を落下する前に受け止めた。

「あのステラさんがこうもアッサリ・・・」

「一体何なの彼の能力は?」

選抜戦で敗北したとはいえ破軍学園でも屈指の実力者であるステラがいとも簡単にやられた事に驚愕する珠雫と有栖院、一部の空間が真空状態になったり土が砂漠化した

りと政和の能力はわけがわからない。

「・・・なあ？Aランクってこの程度なのか？」

「いや、日本のAランク学生騎士である《風の剣帝》は今の紅蓮の皇女とは比べ物にならない程凄まじかったぜ・・・まあ、俺達とはかく今の政和の敵じゃないがな・・・」

「・・・アリス・・・ステラをお願い」

「ちよ?!?!一輝!?!」

政和の仲間である二人がひそひそ話をする中、一輝はお姫様抱きになっているステラを有栖院に預けて鋭い目線で見ている政和と向き合った。

「・・・どういうつもりなのかな？」

今度は一輝が対一で政和と戦うつもりだ、互いの目線が合わさり睨みつけて威嚇し合う、戦闘が始まるのを今か今かと待ち侘びているかのように辺りを静寂が支配した・・・のは束の間で突然政和の表情が緩んで彼は太刀を下げたので一輝は疑問を抱いた。

「・・・・・・・・へっ! テメエとは是非とも戦り合いたかったが——

——悪いな、メインゲストが来たみてえだ」

「え!?!」

「伊達政和うううううううううううううううううううう!!」

政和が不敵な笑みをして空を見上げた瞬間に天を揺るがすような叫び声がかから降り注ぐように聴こえてきた。

彼等の真上に存在する雲を突き抜け一人の男が凄まじい闘気を纏い朱い太刀をその手に持って空から流星の如く落下して来た。

「フレッシュだぜ! 凄く待ち侘びたぞ、真田幸斗おおおおおおおおおおおお!!」

流星のように空から派手に登場した伐刀者——幸斗を迎え撃つ為、政和も凄まじい闘気を纏って地面を蹴り空へと跳び上がった。

「うおおおおおおおおおおおおおおお!!」

伊達政和の伐刀絶技

果てしなく広い蒼穹の大空……この広大なワールドを朱と蒼、二つの閃光が駆け抜け、交差し、せめぎ合い、衝突し、火花を散らしていた。

「五年ぶりだな真田幸斗！あの時以上の凄げえ闘気じゃねえかよ！フレッシュだぜ!!」
「へっ！テメエこそあの時より剣のキレが増してやがんじやねえかよ！それでこそオレがブツ倒すと誓った【龍】だぜっ!!」

足で空気を蹴って超高速で地上2000mにある雲の中を【跳び回る】朱（幸斗）と蒼（政和）はその中心で鏝競り合い状態で互いの再会と再戦を喜ぶように不敵に笑い、自分の宿命のライバルが五年前の邂逅の時より圧倒的に実力を付けている事を感じ取り称え合う。

「嬉しいぜ真田幸斗！こんなにも早くテメエと刃を交えられるなんてよっ!!」

政和がハイテンションでそう言い放った瞬間に二人は交えている太刀を弾き互いに後方に弾き飛んで距離が開いた、あまりの威力に衝撃波が発生して雲が消し飛び大気を揺るがした。

「へっ、そうかよっ！随分暇なんだな伊達！」

幸斗は空気を蹴り前傾姿勢を取って更に上空に跳んで政和に皮肉を言うが内心は嬉しそうにしている、七星剣武祭まで戦えないと思つた最大のライバルと思いがけない所で戦えるのだから無理もないだろう。

「でもせっかく来たんだ、土産代わりにオレの鬼童丸の刃をたつぷりくらいやがれ!!」
「ハッ、そりゃこつちのセリフだ! 挨拶代わりに俺の《蒼龍丸(そうりゆうまる)》の斬撃を山程ブレゼントしてやるよ!!」

「上等だつ!! うおりやああああああつ!!」

《螺旋風(らせんふう)》!! はああああああつ!!」

空気を蹴つた跳躍で超高速で上昇し雲海を突き抜けた幸斗は朱く煌く鬼童丸を下方の雲海に向けて振るいステラの天壤焼き焦がす竜王の焰(カルサリテイオ・サラマンドラ)を大きく上回る威力の剣圧を放ち、それと同時に政和が雲の中を落下しながら身体中に強烈な蒼いプラズマ現象を発生させて蒼く輝く蒼龍丸の刀身に竜巻を纏わせそれを巨大化させて上空に撃ち放つた。

巨大な閃光と竜巻が正面衝突、極大球状に大爆発し雲海が爆ぜ大気が衝撃波によつて激震した。

「真田君・・・伊達君・・・」

「・・・私・・・夢でも見ているの?・・・」

「・・・あの二人・・・本当に人間なの?」

遙か上空で朱と蒼の閃光が縦横無尽に駆け抜け何度も交差しその度にまるでTNT（トリニトロトルエン）爆弾で爆破された建築物の如く雲が次々と爆散していく、その光景は戦争していると錯覚してしまう程あまりにも苛烈な戦闘であったので一輝達は戦慄した。

「まったく、こうなる事は予想していたが喧嘩っ早いたらありやしないな」

「幸斗の奴・・・また腕を上げたっていうか、人外になっちゃったっていうか・・・」

政和の仲間である二人は遙か上空で戦闘を繰り広げる幸斗と政和を見上げて呆れて

いた、するとそこに――

「あちやー、幸斗の奴やつぱりもう戦闘してやがったか」

「本当にもう、我慢という言葉を知らないのかしらあのお馬鹿？ここから2 kmも離れている山岳地帯の高台から跳躍して行くななんて呆れてものも言えないわ」

「ん？」

「お前達は……」

涼花をお姫様抱きにしている重勝が北の方角から飛来して来た、どうやら幸斗は単身でここまで跳躍して来たようであり彼が空から現れたのはそれが理由であったようだ。

「ん？……ひよつとしてお前……綱定か？」

「あ、ホントだ、久しぶりねツナ」

「幸斗がいるんならお前らもいるとは思っていたけどお前らも空から来るのな重勝、姫……て言うか姫、いい加減「ツナ」って呼ぶのやめてくれない？オイラはマフィアのボスの十代目じゃねーぞ」

重勝は政和の仲間二人の背後に着地して涼花を降ろすとやる気のなさそうな少年が自分達の知り合いである事に気が付いて涼花と共に声を掛け、声をかけられたやる気のなさそうな少年は重勝達が現れた事にさほど驚いた様子もなく答えた。

「綱定、知り合いか？」

「おう、オイラの古巣の仲間だ」

このやる気のなさそうな少年の名は《鬼庭綱定（おににわ つなさだ）》、彼は五年前幸斗達と共に連盟が管理する教育施設で再教育を受けた元西風の団員であり役職は《追撃部隊》、西風時代の二つ名は《絶止の追撃者（ロックチェイサー）》という、つまり幸斗達の元仲間だ。再教育を受けて十五歳になった元西風の団員達は全員が同じ学園に入学するわけではない、実戦経験豊富な彼等を一つの学園に集中させると学園のパワーバランスが崩壊するので可能な限り別々の学園に入学させるのだ、幸斗と涼花と重勝が同じ学園に入学したのは偶然ということであった。

「そうか……」

重勝と涼花が綱定の元仲間だと聞いた二本傷の少年は重勝と涼花に向き合った。

「初めましてになるな、俺は《片倉十士郎（かたくら じゅうしろう）》、上で暴れている馬鹿の昔馴染みのダチだ、まあよろしくとだけ言っておくぜ」

「片倉？」

「片倉って、あの《瞬剣（しゅんけん）》の片倉？」

十士郎がざつくばらんに名乗ると重勝と涼花は驚きの声を上げた。

「お兄様、瞬剣の片倉って？」

「うん、昨年の七星剣武祭で一年生でありながらベスト8まで勝ち進んだ巨門学園の実

力者だよ、彼の能力は「身体の活性化」、自身の五感や反射神経や膂力など様々な身体能力を瞬間的に超強化する事ができる身体強化系の能力でそれは人間の限界すら越えるらしいね、霊装は刀と脇差の二振り《神無月（かななづき）》、片倉さんはこの霊装と「身体活性化」をもって放つ相手の急所である【額】【首】【心臓】【鳩尾】【金的】の五ヶ所を同時突きする伐刀絶技《点衝剣（てんしょうけん）》を決め技として使い破竹の勢いで勝ち進んで行っただけけど、ベスト8で東堂さんと当たり、点衝剣が東堂さんに届く前に雷切で斬られて敗北したんだ」

「凄く微妙な成績ね」

「聞こえてるぞ……」

話を聞いていた一輝達はひそひそ話をしていたが聴力を超強化していた十士郎には丸聞こえだった、その時――

「うおっ!？」

「何だ!？」

ガキインという大きな剣音が聴こえて来たと思っただら上空から超高速で垂直に落ちて来た何かが一輝達と重勝達の間を挟む位置に叩き付けられて砂煙が舞った。

「……チッ! 相変わらずの馬鹿力だなあの野郎!」

砂煙が晴れるとそこには政和が地に片膝を着いて悪態を吐いていた、どうやら彼は幸

斗の一撃を受け止めてチカラ負けして上空から叩き落されたようだ。

「……また砂漠化している……」

一輝は動揺している、政和が遙か上空から叩き落されて無事なのは地面に叩き付けられる前に落下地点を「砂漠化」してクツション代わりにしたからだ。

「伊達ええええええっ!!」

「チイッ!」

そしてすぐに上空から流星のように落下して来た幸斗がそのままの勢いで政和目掛けて突っ込み鬼童丸を振るい、政和は幸斗が突っ込んで来る前にその場を跳び退いて回避し、幸斗が政和がいた砂漠地点に落下と同時に爆発したかのように再び砂煙が舞った。

「メチャクチャだわ……」

「もう今更だぞ姫ツチ……」

「まさか政和のような馬鹿がもう一人いたとはな……」

「衝撃波で周囲の木々が薙ぎ倒されているじゃんか……」

涼花達は周囲の被害に無関心な幸斗の暴風のような戦闘を見て啞然としていた、この前黒乃に学園を荒野にするなど諦め気味に注意されたのだが、どうやら聞いていなかったようだ……。

砂煙が晴れ、あんな勢いで落下して来たにも拘らずピンピンしている幸斗が姿を現す、幸斗は砂漠地点の上に堂々と立って30 m前方にて不敵な笑みで蒼龍丸を構えている政和に鬼童丸の切っ先を向けて楽しそうに不敵な笑みを浮かべているが何故か右肩が【氷結】していた。

「行くぜ！伊達えええええええつ！！」

「来い！真田あああああつ！！」

幸斗は右肩の氷結など気にも留めずに雄叫びを上げて政和へと突攻して行った。

「……一体何なんだ彼の能力は？」

「これで一つの能力だって言うの？」

一輝と有栖院が困惑気味に呟く、【酸欠】【砂漠化】【竜巻】【氷結】……どう考えても一つの能力だと思えない能力なので二人が困惑するのも無理はないだろう。

それを見兼ねた十士郎が仕方ないと言うかのように一輝達に歩いて近づき語り出した。

「政和の能力は確かに一つだ……だがこれを一つだと言うのは全ての自然干渉系の伐刀者に喧嘩を売っているとしたか思えないけどな……」

後方で木々を薙ぎ倒し学園施設を破壊しながら暴れている幸斗と政和の方に十士郎は不服そうに振り向いて説明する。

「政和の伐刀絶技は自分の半径10 m以内に様々な自然現象を発生させる《自然災害（ナチュラル・ハザード）》だ」

【自然災害】——危機的な自然現象によって人命や人間の社会的活動に被害が生じる現象の事をいう。日本の法令上【自然災害】は異常な自然現象により生ずる被害と定義されていて、その種類は【暴風】や【地震】【津波】【噴火】など多種多様、超常現象を操る伐刀者のチカラを持ってしても完全に防ぐ事はできない未だに人類に牙をむく強敵だ。

「ちよつと待つてください！それではあの方は無敵じゃないですか!?そんな人がどうしてBランクなんですか!？」

政和の能力の説明を聞いた珠雫が疑問を抱き十士郎に抗議した、政和が自由に自然災害を起こせるのなら彼はAランク認定されていてもおかしくはない筈だからだ。

「それは政和の【自然災害】は環境に依存するからだ、雪の無い場所で【雪崩】が起きるか?・・・つまりそういう事だ」

政和が【自然災害】を使うには条件が揃っていないなければいけなかった、この日は真夏の様な日差しが降り注いでいる、【酸欠】は熱で酸素を燃焼させて真空状態にしてその空間を魔力で固定、【砂漠化】は土を乾燥させて乾いた砂を作り出し、【竜巻】は上昇気流を伴う気流の渦巻きを発生させて魔力で太刀に固定したり飛ばしたりしていたという

ことだ。

「なら彼（幸斗）の右肩が【氷結】していたのは？この暑さの中で凍り付くなんて説明できるとかしら？」

今度は有栖院が十士郎に説明を要求した。

「さっきまで雲の上で暴れていやがっただろう？雲は水滴の塊だ、そして雲の上は真夏でも温度が氷点下まで下がっている、【氷結】現象を起こす条件は十分だぜ」

十士郎が難なく質問に答えたので一輝達は無理矢理納得する、納得いかないとは思っても目の前で起こっている以上受け入れるしかないのだから。

「・・・だが政和は【自然干渉系】の伐刀者に対しては確かに無敵だな、自然干渉系の能力は環境を変える、それに適応した自然現象を起こせばいいんだからな・・・」

そう、例えばこの広場に政和にやられて倒れている生徒の中に【凍傷】状態の生徒がいる、彼は氷の礫を飛ばす能力を持っていてその原理は空気中の水素を【冷やして】凝固させるといふものなので彼が能力を使った瞬間その範囲に【自然災害】を使ってそれを相手にぶつけなければいいのだ。

「さて、そろそろ避難した方がいいかもな・・・」

「「えっ!!」」

「これでフィーネ（終わり）だけ伊達っ!!オレの最強の一撃をくらいやがれっ!!!」

「フレッシュユだぜ真田っ!!真っ向から叩き潰してやるよっ!!」

十士郎が神妙な顔をしてそう言ったので一輝達は驚いた、既に爆心地と化している幸斗と政和がいる場所を見てみると二人は40m間を挟んで睨み合い、幸斗は鬼童丸を両手持ちにして構え、政和は天に龍が昇って行くと錯覚する程のプラズマ現象を発生させて蒼龍丸を構えていた。

「あのお馬鹿、龍殺剣（ドラゴンスレイヤー）を放つ気!!?」

「こりやあやべえな、止めるぞ姫ツチ!綱定!」

「逃げるなら・・・いや、もう遅いか・・・」

幸斗が龍殺剣を放つ体勢だと気が付いた涼花と重勝は幸斗達を止める為に急いで幸斗達に向かって駆けだし、綱定はアツサリ諦めてその場に座り込んでいた。

「言い忘れていたが政和が自然災害を発動する時必ず蒼いプラズマが発生する、それが蒼い龍に見える事からアイツは「蒼雷龍（ブルーライトニングドラゴン）」と呼ばれ、「説明はもういいですから急いで止めに入りましょう!!このままだと破軍学園が消えてなくなってしまうす!!」・・・やれやれ、あの馬鹿が・・・」

この非常にマズイ状況で右手の人差し指を立てて説明する十士郎に二人を止めに行こうと叫ぶように必死に説得する一輝、それを聞いて十士郎は仕方が無く一輝達と共に幸斗達を止め駆けだして行った。

そして幸斗と政和が太刀を振るおうとした所で二人は綱定を除く全員に取り押さえられて事態は終息した。

政和の頼み事と第十六戦目の対戦相手

「〔霊装と能力の無断使用〕に〔学園施設の一部全壊〕、更には〔羽田空港の便を二つ遅らせざるを得ない程の航空空路妨害〕……貴様は戦闘する度に学園のみならず校外にまで迷惑を掛けるな……真田」

破軍学園校舎一階の男子トイレの入り口の前で黒乃は仁王立ちをして中で掃除をしている幸斗に説教をしている。

幸斗は黒乃が今言った罪状により罰として学園全ての男子トイレ掃除をさせられていた。酷い罪状の割には軽い罰のように見えるが破軍学園の敷地は東京ドーム十個分、そんな広大な敷地内にある全て男子トイレを掃除しろと言うのだからかなりしんどい罰である。

しかし今回は幸斗一人で全てを掃除しろというわけではない……何故なら——
「……何で破軍の生徒でもねえ俺が……」

「自分から進んで戦闘行為をしたのだから当然だ、それに安心しろ、もう既に巨門学園に連絡して許可を貰っている、〔ご〕迷惑をお掛けしたお詫びに好きなだけコキ使ってください」とな

水切り掃除をしている幸斗の後ろでデッキブラシで床を磨いている政和も一緒に罰を受けているからだ。

「それじゃあ全ての男子トイレの掃除が終わったら理事長室に來い、伊達は私に何か頼み事があるのだろうか？ 詳しい事はそこで聞いてやる、じゃあまた後でな」

黒乃はそう言つてその場を跡にした。

「……何でこうなつたんだ？」

「知るかよ、こんなの全然フレッシュじゃねえ……」

残された二人は掃除しながら不満を口にする、あんな所で戦闘をすれば当たり前だといふのに自覚が無いのだからまったくもつて質が悪い。

「……まあなんだ、ここは楽しい話でもしながら掃除するでしょうぜ、お前他の学園にもAランクがいるって知っているか？」

沈む気持ちの中政和が話を振つて來た、内容はステラ以外のAランク学生騎士についてだ。

「いや初耳だぜ、ヴァーミリオンだけじゃなかったのか？」

「ああ、今年留学や編入によつて日本の伐刀者専門学校に入つて來やがったからな、あの皇女サマ含めて四人いるぜ」

幸斗は政和の話に興味を示した、戦闘狂である幸斗にとって強敵が増える事は大変喜

ばしい事だからだ。

Aランク——伐刀者の最高ランク、英雄として必ず歴史に名を遺すと言われる規格外な能力者達……日本に在籍している学生騎士にそんな奴がステラの他に後三人もいると言うのだから驚きだ。

政和がデツキブラシで床を磨きながら日本在籍のAランク学生騎士について語り始める。

「まずはあの『七星剣王』が在籍する名門【武曲学園】、そこに【籍だけ置いている状態】の【風の剣帝】『黒鉄王馬（くろがね おうま）』だな、コイツは五年前小学生（リトル）リーグのチャンピオンになって以来ほぼ日本から失踪状態だったんだが最近になって姿を現したって話だ、噂じゃ七星剣武祭にエントリーするかもしれないねーってよ」

「へえ、黒鉄王馬ねえ……黒鉄？」

幸斗は話に出てきたAランク学生騎士の姓を聞いて首を傾げた、幸斗と同じ破軍学園の一年生である一輝と珠雫の姓と同じだったから彼等との関係を疑ったからだ。

「ああ、【無冠の剣王】と同じ【黒鉄家】の人間だな、と言っても奴は家の事より強敵と戦り合う事が全てみてえだぜ、なんでも一族の面子ばかり気にする実家に嫌気がさしたみてえで実家と決別したって話だ……ま、気持ちは分かるがな……」

一輝と王馬、珠雫の実家である【黒鉄家】は日本を第二次世界大戦で戦勝国へと導い

た極東の英雄《黒鉄龍馬（くろがね りようま）》——通称《サムライ・リョーマ》を排出した名家であり、それ故にこの一族は非常に自尊心が高い。

昨年一輝がともに授業を受けさせてもらえず留年したのもそれが関係していた、魔導騎士の世界において黒鉄家の影響力は非常に高い、Fランクの落ちこぼれである一輝を魔導騎士にするのを黒鉄の恥として破軍学園に圧力を掛け一輝を卒業させないよう仕組んだのだ、彼等は家の面子を護る為ならどんな汚い事でも行う、王馬が家を捨てるのも納得だ。

「その風の剣帝なんだが・・・俺は数ヶ月前、仙台で奴を見かけた」

いきなり奇妙な表情になった政和が遠目で王馬を見かけた事を話だす、政和は宮城県の出身だ、それは休日地元に戻った時の事だと言う。

「広瀬川の近くを通った時の事だ、俺は突然聴こえてきた水を切る様な音が何なのか気になって川の浅瀬に目を向けた、そこに奴はいた、そよ風で漆黒の長髪を揺らし直立不動の状態で浅瀬の中央で眼を瞑って精神統一をしていやがった・・・奴はその時上半身裸でな、俺はその時奴の身体を見て目を疑った・・・奴の上半身は傷痕だらけだったんだ、どんな傷でも治せる再生槽（カプセル）の技術が発達したこの時代によ」

政和はその時見た王馬の異常性をデッキブラシを動かしながら語る、幸斗はその話を一言もしやべらずに聞いていたが、政和はいきなりニヤリと笑った。

「俺は奴の身体に途方もない異質を感じたが・・・俺はどういうものだかなんともなくわかったぜ、【俺がよく知っている異質】だったからな」

なんと政和は王馬の異常性の正体を簡単に理解したと言った。

「何なんだそれは？ 勿体ぶってねえでオレにも教えるよ」

「へっ！ テメエなら奴に会えばすぐに気付けるだろうよ、何故なら奴の身体は——

——方向性は違えが「テメエと同じ」だからな」

政和は衝撃の発言をした、幸斗と王馬の異常性は同じ種類のものだと言うのだ。

「……はあ？」

意味不明、幸斗はそう思ったようだ。

「オレが黒鉄の兄貴と同じ？なに言ってるんだオレの身体は傷だらけなんかじゃないぜ」

「……テメエひよつとして理解してないのか？自分の身体が普通じゃねえ事によ」

「オレは何事にも諦めねえでひたすら団長やシゲが課した特訓をこなして強くなっただけだ、普通だろ？」

自分はいくまで普通だと言う幸斗に対して自身の額に右掌を当てて呆れる政和、考えてみれば幸斗の方が相当異常だろう、世界最低とも言える魔力量でありながらAランクを越える膂力を出し測定不能の攻撃力と判定が下される非現実的な伐刀者……彼を異常と言わずして何と言うのだ。

「まあそれは奴と会った時の楽しみとして取っておけよ、そんじや次は昨年までこれといって注目する伐刀者がいなくて目立たなかった【文曲学園】に彗星の如く編入して来たって評判のAランクの話だ」

政和は諦めてさっさと二人目のAランク学生騎士の事について語りだした。

「そいつの名は《千石万斎（せんごく ばんさい）》、二つ名は《届き得ぬ手腕（クリアアー

ム》つって能力は《万物干渉の選択》つう因果干渉系の能力らしいぜ」

次々と万齋の情報を口にする政和、どうやら彼は情報の秘匿ということをせずバンバン自分の手札（カード）を使っているらしい、よっぽど自信があるのかそれともAランク特有の傲慢さか……。

「……しかし、何でそんな凄そうな奴の名が今まで世間に知られなかつたんだ？」

幸斗の言う事はもつともである、Aランクともなれば普通超が付く程の有名人になっている筈だからだ、増してや王馬以外の日本人学生騎士となればマスコミが放つてはおかない筈、一体何故？

「さあな、俺も驚いたがそんな事気にしてもしょうがねえしな、戦ってみればわかるだろうよ……奴は文曲に編入してからというものの学園で無双の強さを発揮して僅か一月で文曲のトップになつたつて話だ……表向きはな……」

「表向き？」

男子トイレの床にバケツの水を撒きながら意味し気な事を付け加えて語る政和に水切りで床に撒かれた水を排水口に押し込みながら疑問を口にする幸斗。

「実は届き得ぬ手腕の野郎は文曲で二敗しているという噂がある、Aランクの面子を保つ為にその情報だけは学園が隠匿しているみてえだが……他に注目する学生騎士もいねえ文曲にAランクを倒せる奴がいるのか？俺としてはそっちの方が興味が引かれる

ぜ」

へっ！と笑みを浮かべて二人目のAランク学生騎士について語り終える政和、彼の興味は万齋よりも彼に勝ったという二人の伐刀者の方に行っているようだ。

———　　「そういう文曲といえは『あの二人』が入学した所だったな、アイツ等は西風の主力だったからAランクに勝ったっていうのはアイツ等の可能性が高えな。

政和の話を聞いて幸斗は文曲学園に入学したかつての仲間の事を思い出していた、その二人はかなりの実力者のようだ。

「そして最後はあの皇女サマの留学の話で持ち切りだった所為で注目度が薄かったイギリスの天才の話だ」

政和が最後のAランク学生騎士について語り始めた、それはステラと同じ外国からの留学生だという。

「奴は皇女サマと同じで今年日本に留学して来た伐刀者、入ったのは『廉貞学園』だ、名前は《クリスフィール・アルルカント》と言って《クリス》という愛称で慕われているらしいぜ、《写し鏡の才女（クロスミラージュ）》と名高い天才学生騎士として有名だがあの皇女サマと比べるとかなり劣るらしくて留学した当時は連盟が発行する新聞の端に小さくその他扱いで載っているくらいだったんだが、あの皇女サマが選抜戦でテメエらに敗北して七星剣武祭に出場しない事が決まるや否や急に注目度が上がったというわ

けだ・・・これで全員だな」

政和が床を磨き終えた瞬間に話が終了した、話に出て来た三人はどいつもこいつも一筋縄ではいかなそうな奴ばかりで幸斗は胸を躍らせていた、七星剣武祭の楽しみが沢山増えた。

「おしっ！なかなかフレッシュになったぜ、ここは終わりだな、次いくぜ」

「おう！」

この場の掃除を終えた政和がデッキブラシを右肩に担ぎバケツを右手に持って幸斗に次のトイレに移動するぞと促し、幸斗も水切りを左肩に担いでそれに同意した。

「・・・ところでテメエここへはオレと戦う為だけに来たのか？さつき理事長に頼み事があるのかなんとか言っていたけどよ・・・」

「ん？・・・ああ、ここへ来たのはテメエの腕が錆びついてねえか見る為だけ、だが【幻想形態で軽く打ち合っただけ】じゃあイマイチわかんねえ、あれだけじゃ物足りねえしな・・・そこでだ——」

「つまりお前達は真田の試合を直接観戦したい・・・そういう事だな？」

「ああ、そうだけ」

幸斗と政和が破軍学園の男子トイレを全て掃除し終えた後二人は理事長室に向かい、既にそこにいた涼花と十士郎を交えて政和は黒乃に頼み事をしていた。重勝と綱定は大事な話があるらしく別の場所において一輝達は気絶したステラを保健室に運んで行ったのでここにはいない。

「・・・まあ構わないぞ、どうせ勝手に動画サイトにアップされるのだから情報の隠蔽もなにもあつたものではないのだしな・・・」

「よっしゃ、サンキューな！」

「すまない新宮寺殿、うちの馬鹿がとんだ我儘を・・・」

何を言っても無駄だと悟つたのか黒乃は政和の頼みをアッサリ承認した。政和の頼

み事とは近日中にある幸斗の選抜戦第十六戦目を観客スタンドから生で観戦したいというものであり、それは幸斗の「実像形態」での斬り合いを見てその闘気と剣気を直接肌で感じる事によつて高揚感を得る為であった。

「確かに動画で見ると直接観戦するのとじゃ全然違うのは分かるけれどこのお馬鹿の実力だと並の相手じゃ瞬殺してしまつて参考にならないと思うわ」

「そうだけ、黒鉄とかとでも当たらない限りオレは一瞬で勝つちまうぜ、破軍全体の伐刀者の実力は大体把握したしな」

幸斗は破軍学園でトップクラスの实力者だ、その為選抜戦で彼と渡り合える相手と当たる可能性はかなり低い、それだと一瞬で終わつてしまうので闘気を感じるもなにもないだろう。

「へっ！俺の予感によく当たるんだ、テメエは次の試合でなかなかの相手と当たるぜ、きつとなー！」

「けどよ、この選抜戦オレはヴァーミリオン以外全て一撃でケリがついてんだぜ、そんな簡単n————」

政和が自信たっぷりな幸斗の次の試合相手はかなりの実力者であると宣言して幸斗がそれを退屈そうにして疑うと幸斗と涼花の生徒手帳からメールの着信音が鳴り響き、二人は学生服のポケットから生徒手帳を取り出してディスプレイを見た。

『真田幸斗様の選抜戦第十六試合の相手は、一年四組・黒鉄珠雲様に決定しました』
「……………黒鉄は黒鉄でも妹の方かよ……………」

幸斗は一見呆れているような事を言っているが顔は笑っていた、相手にとって不足なし、そんな笑顔だ。

「へっ！どうやら俺の感は当たったみたいだな！」

「ああ、コイツとなら楽しい試合ができそうだぜ！……………涼花はどうだ？」
「……………」

幸斗は久々に強者と試合ができる胸を躍らせて涼花に彼女の対戦相手を尋ねるが……………涼花は破軍学園に入学してから今までにないくらい真剣な表情でディスプレイを見ていた、幸斗はそんな涼花の隣に寄って彼女の生徒手帳を覗き込んだ。

『佐野涼花様の選抜戦第十六試合の相手は、三年三組・東堂刀華様に決定しました』

涼花の対戦相手は昨年の七星剣武祭のベスト4にして破軍学園序列二位、生徒会会長【雷切】東堂刀華、重勝が破軍で数少なく認める一流の伐刀者だった。

同時刻、第六訓練場内、今このバトルフィールド上は氷獄と化していた。
「な、なんだよ・・・あいつ」

「化物だ……」

「本当に五十人を……たった一人で倒しちまった……」

観客スタンドにいる生徒達が震えた声でそう言う、今から十分前この場に一人の一年生がやって来てその場にいた全ての伐刀者に挑戦を叩きつけた、そして癩に障った伐刀者達が一齐にその一年生に挑みかかり……結果は全滅だった。

「全然足りないわ……」

誰一人彼女に触れる事すらできずに一人残らず氷像にされてしまった……バトルフィールド中央に立つて自分が作り上げた《凍土平原（とうどへいげん）》を眺めつまらなそうに溜息を吐いている「深海の魔女」黒鉄珠雫に。

「……だけど貴方は私を楽しませてくれるわよね？」

珠雫は自分の生徒手帳を左手に持つてディスプレイに書かれている対戦相手——
幸斗の名前を見て凄艶な笑みを浮かべていた、自分が愛し尊敬する兄より少ない魔力量にも拘らず大気すら揺るがす無双のチカラを発揮する……間違いなくこの破軍学園で最も兄に近い伐刀者と戦える事に……全力で「壊せる」相手と戦える事に彼女は胸を躍らせていた。

——まあ、希望を言えば魔力制御S判定の風間先輩相手が一番望ましかったけれど

幸斗も相手にとって不足はない、珠雫は昂る高揚感に我慢できなくなつて高笑いをしだした。

「ふふ、あはははは!!」

彼女の深海の底から込み上げて来るような愉悅の笑い声が第六訓練場内に響き続けた。

「・・・なるほど、佐野さんが相手だと本気を出さざるを得ないか・・・」

ここは奥多摩の山奥にある破軍学園の合宿所、その正面玄関の前で自分の生徒手帳

を手を持って届いた対戦相手の告知のメールを読んで刀華はそう呟いた。

何故彼女がこんな所にいるのかというと先日生徒会に黒乃から依頼を要請されていたのだ、この合宿施設の近くに不審者が出たので調査してほしいと。

そこで刀華は事前調査として単独で合宿所周辺を見て回っていたのだが収穫は無し、残りは合宿所の敷地内にある高山や森林のみ、しかしそれらを刀華一人で見て回るには厳しく、仕方なく一旦破軍学園に戻って対策を練ろうと合宿所の玄関口を出たのだが、そこでメールが届いて現在に至る。

「・・・この試合は間違いないギリギリの戦いになる、だけど私は誰が相手だろうと負けるわけにはいかない、遥か高い空の上にいる最強の騎士に勝ち皆を導く為にも」

刀華は遥か彼方まで広がる夕焼け色の大空を見上げた、東を見るとその一部が黒く染まっていてそこには一際輝く赤い一番星があった。

「私は必ずあの星に刃を届かせてみせる、風間さん、貴方を倒さない限り私は私の想いを貫く事ができません、最後まで戦い抜いたカナちゃんや私を信じてくれていた皆の為に・・・私は勝ち続けます！」

自分が如何に小さい存在だと認識させられるような広大な大空に刀華は誓った、自分の信じる道を進み続ける為にあの星を——重勝を大空から引きずり落とすと。

この空に誓った想いを胸に刀華は帰路に着いた。

幸斗と涼花の試合当日の早朝、重勝は東京都内のある宿泊施設の廊下を歩いていた。

「・・・・・・・・こだな・・・」

重勝は384号室と書かれた扉の前に立ち止まる。

先日理事長室で幸斗達が黒乃と話していた時、重勝は綱定に学園の屋上で五年前の西風壊滅の真相について相談をしていた。

『北九州の村の大量虐殺をやったのは比翼じゃないと?』

綱定は重勝が述べた推測を復唱して首を傾げた。

『ああそうだけ、あれはどう考えてもおかしい、待ち伏せしていた連盟の準備が良すぎる、俺はあの大量虐殺は連盟の暗部……《倫理委員会》辺りの誰かが怪しいと睨んでいる』

今重勝が言った国際魔導騎士連盟〔倫理委員会〕とは日本在中の学生騎士・魔導騎士達の〔倫理〕を監督し必要があれば指導や追放処分を申請するいわば〔憲兵〕ともいべき部署だ、この部署は秘密警察との批判があり暗部の部類に入る、所属している人間は意地の悪い奴が多く昇進する為に気に入らない魔導騎士や学生騎士を貶めて強制的に追放したりするという黒い噂もある。

『……なるほどねえ、あの汚い連中なら昇進の為にオイラ達西風を騙し討ちするなんて事十分に考えられんな』

『だろ?……だが決定的な確証がねーんだ、元隠密機動の姫ツチに頼んで調べてもらうって手もあるけど俺と違って真剣に七星剣武祭代表入りを狙っている姫ツチには選抜戦に集中してもらいてーんだ、どうしたもんか……』

腕を組んでんぐつと唸り悩む重勝、そこに綱定は軽々しく提案をする。

『それなら〔あの女〕に依頼すればいいんじゃない? ホラ、昔テロ組織の揺動の依頼でお前が知り合ったあの女だよ、お前かなり懐かれていただろ?、あの女が在学してる学園は能力値選抜だから今暇なんじゃないの』

『……はあ……それしかねーか……』

このような事があつて重勝はある人物とこの場で「一方的に」待ち合わせする事となつたのだつた。

重勝の選抜戦第十六戦目は前日《重戦車（ヘビィタンク）》の二つ名を持つ《桃谷武士（ももたに たけし）》という生徒と試合をして試合開始と同時の砲撃で桃谷を瞬殺して早くも完全試合十六連勝目を挙げていたので彼はしばらく試合が無い、幸斗と涼花の試合は気になるようだが選抜戦終盤に差し掛かった今、今日ぐらいしか学園を離れる事ができないので仕方がないのだ。

「……入るぞ」

重勝は気怠そうに384号室の扉を開けた——

「お帰りなさい！ご飯にします？お風呂にします？それとも、わ・た・sうぎやつ!？」

部屋に入っただけいきなり水色の髪で扇子を持ったグラビアアイドル顔負けのスタイルの少女が何故か裸エプロン姿で揶揄うようにそう言って寄って来たので重勝は躊躇わず無言の手刀をその少女の脳天に落とした。

「うううっ、まさか私が意識の死角を突かれるなんて・・・」

「お馬鹿な所に場所を指定してお馬鹿な行動をするからだ」

部屋の中は中央にハートが沢山ある布団が敷かれたキングサイズのベッドがあり、その上にはデイスコなどにあるミラーボールがぶら下がっていて床も壁も天井も一面鏡張り・・・どう見てもラブホテルの一室だった。

「いたたた、せつかく私が緊張した雰囲気解してあげようと思ったのに相変わらず可愛く無いんだから」

「頭いい癖に馬鹿な事ばかり考えてんじやねーよ《刀奈（かたな）》」

【不覚】と書かれた扇子を持った両手で頭を抱えて蹲る裸エプロンの少女に眼を細めて呆れる重勝、どうやらこの少女が重勝が倫理委員会への調査依頼をする相手のようだ。

「いくら二人きりだからといって一応今は仕事で会っているんだから【楯無】って呼んでよnってきやああっ!?!」

裸エプロンの少女が立ち上がってそう言いながら重勝にズイッと寄って来た、そして鬱陶しく思った重勝は全く躊躇せず少女のエプロンをはたき落としたり、エプロンが床に落ちて抜群のスタイルが目立つ彼女の大胆なビキニ姿が露になった、どうやら裸エプロンではなく水着エプロンだったようだ……。

不意を突かれた事による羞恥心で顔を真っ赤にしているこの少女こそが【貪狼学園】の生徒会長にして裏業界に精通する《更識家》の当主《更識楯無（さらしき たてなし）》、《霧纏の淑女（ミステリアス・レイディ）》の二つ名を持ち刀華やカナタと同じ【特例招集】を受けた事もあるBランクの実力者である。

契約と突き進み続ける意志

「ん、あつ！んあつ♥」

薄暗い鏡張りの室内に少女の艶めかしい喘ぎ声の木霊している。

「へっ、暫く見ないうちになかなかいい身体になったな楯無、手が吸い付くようだぜ」
「やんっ、そんなにハッキリと言わないで、恥ずかしいじゃないの——あんっ♥」

ほぼ裸に近いビキニ姿の楯無が室内中央にあるキングサイズのベッドの上に向つ伏せになり、彼女の身体を跨ぐようにして彼女の上に覆い被さる重勝がリズムに合わせるように上下運動をしている。

「口はそう言ってるけど身体は正直みたいだぜ、ほらここがいいんだろ？」

「あああん♥気持ちいい！とろけちゃううっ！」

重勝が上下に動く度に快楽が身体を駆け巡り狂うように喘ぐ楯無。

元服した若い男女がラブホテルの一室のベッドの上で重なり合い快楽の海に溺れる……そう、何をしているかなんて野暮な事は聞くものではない、こんな場所で男が女に快楽を与えて喘ぎ声をあげさせる行為など決まっている——

「んんっ、ほんとシゲ君マツサージ上手いわねえ、気持ち良すぎて思わず声に出しちゃったわ」

そう、マツサージである・・・。

重勝が楯無の背中から脇腹を両手で解すように揉み回し、日頃の生徒会の仕事や家の任務などで披露した彼女の身体を癒す・・・楯無は気持ち良さのあまりに緩みきつた顔をしていた。

「まっ、教官時代に頑張つて課題をクリアした奴の労いを兼ねてやっていた事なんだが、喜んでもらえてなによりだ」

「あら随分教え子想いの教官じゃない、あの子の言った通りね♪」

「あの子って・・・そう言えば貪狼にはアイツが入学したんだっただな・・・」

「ふふ、なかなか優秀な生徒だったから生徒会にスカウトして庶務をやってもらっているわ♪」

「.....」

重勝は自分の教え子が厄介な奴に目を付けられたなど同情して話題を変える。

「ところでさ、お前今年の七星剣武祭には出場するの？去年は更識の仕事と重なって出場辞退していたけど」

「勿論今年は出るつもりよ♪うちの理事長が今年は優勝を狙うって息巻いているしね、最近倉敷君も必死に個人訓練をして実力が上がっているみたいだし、君の元教え子君もいるし、貪狼が七星の頂きを狙える戦力は十分あるわよ！」

「へっ！言ってくれるじゃねーか、だが破軍だって負けちゃいねーぜ、この前お前のところのエースに勝った黒鉄一輝を筆頭に東堂や如月兄弟、そして幸斗と姫ツチだっているんだからな！」

【戦力充実】と書かれた扇子を掲げて七星剣武祭は貪狼がもらうと宣言する楯無に対してそれに対抗するように破軍の戦力を言う重勝、だが楯無はその中に重勝自身の名が無い事に疑問を抱いた。

「・・・ねえ、君はどうなの？もしかして最後のチャンスなのにまた出ない気？」

「さーな、選抜戦の結果次第だ」

重勝は楯無の問いに【選抜戦の結果次第】と答えた、【代表に選ばれたら】ではなく：。「そう・・・まあ私も人を導く立場なうえに世の裏に通ずる一族の当主だから能力至上主義の魔導騎士世界の現状は理解しているわ・・・でも最後までいい自分の為に戦ったていいんじゃない？」

現在楯無は二年生なのでもし今年急な仕事が入って七星剣武祭の出場を辞退する事になっても来年がある、対して重勝は最上級生である三年生であり、今年を逃したらもう七星の頂きを狙うチャンスは二度と訪れない、【七星剣王】の称号は全ての学生騎士にとつての夢であり、憧れであり、最も価値のある称号なのだ。重勝にはそれを掴む実力が十分にあるというのにそれを自ら放棄する事は普通ならありえないと思うだろう、しかし――

「悪い、俺の性分なんだ、努力が必ず報われるわけじゃねーつつうのは理解しているけど元教官として努力が実りそうな奴すら生まれながらの才能が無いってだけで理不尽に潰される現状を認められねーんだわ」

重勝は自分の栄光よりも才能の有無だけで努力すら否定される世界を・・・少なくとも自分の目の届く範囲の現状を変える事を優先した、例えば自分がいくら周りに嫌われよ

うとも・・・それに報われそうな努力すら否定されては教官としての本分を失ってしま
う、上を目指そう、前に進もう、そんな志を持つ者達を教え導き未来へと羽ばたかせる
のが教官なのだ。

「・・・損な性分ね、人の事は言えないけど・・・」

「まーな・・・それより依頼と契約の話をしようぜつと！」

「んあつ♥」

重勝は楯無にマッサージを続けながら調査依頼の話を切りだした。

「依頼内容は国際魔導騎士連盟〔倫理委員会〕の身辺調査、調査対象は〔五年前の北九州
市最北端の村で起きた大量虐殺事件に関わった人物の特定〕だ」

「・・・そう・・・やっぱり君も倫理委員会が怪しいと思ってるのね・・・」

「君も?・・・てことはお前も倫理委員会が怪しいと思ってる事か?」

「そうよ、五年前のその事件の直後から更識家は彼等が怪しいと睨んでいたわ、表向きに
事件の犯人とされている〔比翼〕のエーデルワイスは世界最悪の犯罪者とされているけ
れど無意味な殺生をする人物じゃないわ、十中八九真犯人が彼女が北九州の近くに潜伏
していたのを利用したのでしょうね」

エーデルワイスはたまたま死絶島に潜伏してただけで大量虐殺事件の犯人ではな
い、西風を追い詰め団長にして重勝の父親である風間星流の命を奪ったのは事実彼女で

あるがそれは西風が全軍で彼女に戦いを挑んだ結果でしかないのだ。

「そして壊滅状態の西風を待ち構えていた魔導騎士達の手際が良すぎる、明らかに西風の動きを完全に把握していたとしか考えられないわ」

楯無は次々と自分の推測を話していく。

「【突然起きた犯人不明の大量虐殺事件】に【偶然死絶島に潜伏していた比翼】に【手際が良すぎる魔導騎士達】、そして【連盟に所属しないで活動して成果を上げていた西風を彼等は目の敵にしていた】、そして【日本の魔導騎士達を取り締まり日本の情勢にも通じている倫理委員会】・・・エーデルワイスが犯人じゃないとすると一番怪しいのは倫理委員会だと考えられるわね・・・」

「俺の推測も全く同じだな、なら話は早え、この依頼引き受けてくれるな?」

「勿論よ、五年前から気になっていた案件だったしね、私達は他者から依頼されなければ下手に動けないから都合がいいわ」

楯無は重勝の依頼を気兼ねなく引き受けた。

「そうか、んじや報酬h「報酬はいらないわ、その代わり今から手伝ってほしい事があるの、君にしか頼めない事よ♪」・・・何だ?」

報酬の代わりに手伝ってほしい事があると云った楯無に重勝は嫌な予感を感じて警戒しながら聞き返した、すると楯無が色っぽい声で――

「でもそ・の・ま・え・に♪最後にお尻を揉・ん・で♥」

と、薄い一枚の水着に包まれたムツチリとした大きなお尻をいやらしく左右に振りながらおねだりしてきた、彼女はどうしても重勝を揶揄いたらしい・・・しかし、普通の健全な青少年なら性的な魅力たっぷりのお尻を前にして本能と理性がせめぎ合い羞恥心で顔を真っ赤にしてたじろいでしまうだろうが、生憎この風間重勝という男にはその手は通用しない。

「はいよ」

「きやつ!?!んあつ♥ちよつと!?!んんつ、少しくらい動揺しとあんつ♥」

「んん、ここはあんま揉む必要なかったんじゃねーか?至って肉付きと形のいい張りのあるいい尻だぜ?」

「につ、肉付きがいいとかいい尻とか口に出して言うなああああああああつ!!!」

重勝は全く躊躇わず真顔で楯無のお尻を両手で水着越しに鷲掴み、左側を時計回り、右側を逆時計回りに大きく大胆にネットリと揉み回し始めたので楯無は今度こそ性感帯を刺激されて喘ぎ声を出し顔を真っ赤に染めて文句を言おうとするのだが、重勝がお尻の健康状態を真顔でハッキリと口に出して言ってきたので楯無は羞恥心のあまり叫んだ・・・が、重勝は手を緩めてくれない。

「んあああああああああああつ♥」

ラブホテルに相応しい艶めかしい絶叫が室内に響いた（笑）。

楯無はお尻のマッサージの後に「ついでにおっぱいも♥」と言おうとしたのだがこの無神経男にそんな事を言ったら間違ひなく葛藤も恥じらいもせず真顔で躊躇なく自分の乳房を揉みしだいてくるだろうと悟ったので断念したのだった。

「未来（さき）を指し示せ！重黒の砲剣（グラディウス）!!」

ラブホテルのチェックアウトを済ませた二人は無人の港へとやって来た。

楯無は連盟よりある依頼を受けていた、それはここから約6400km南東のハワイ

沖上空で《大国同盟（ユニオン）》が極秘に開発をした対伐刀者用無人兵器が試験稼働実
験中に突如暴走し日本に向かって来ているので騒ぎになる前に撃墜してほしいとの事
だった。

破軍学園の制服ではなく黒いジャケット姿の重勝が霊装を顕現する、楯無の頼みとい
うのはその無人兵器の撃墜を手伝ってほしいという事だった。

——何でコイツはそんな一大事にマツサージなんか強要してきたんだよ？

重勝がそう思うのも当然である、下手をしたら日本が危ないというのにどう考えても
ラブホテルなんかでマツサージをしている場合ではない非常事態なのに楯無は余裕
ぶっついていたからである。

それはそうと突然だが、刀華の二つ名である「雷切」は彼女の伐刀絶技、超電磁抜刀
術《雷切（らいきり）》があまりに強すぎて鮮烈だった為にそのまま彼女の二つ名になっ
たのである。

「蒼天に舞え！《霧纏の淑女（ミステリアス・レイディ）》!!」

それなら固有霊装（デバイス）がそのまま二つ名になる事だつて十分にあり得る、そ
う、更識楯無がまさにその例であった。

周囲の水素が霧となって楯無を包み込む、やがて霧が晴れると楯無は両腕両脚を中心
に機械的なアーマーを纏っていた。

「腕と脚以外殆ど露出してっけど一応全身装甲型の霊装だな……そういうや昨日試合した桃谷も全身装甲型の霊装だったな……」

重勝は昨日瞬殺した桃谷の全身甲冑の霊装《ゴリアテ》の事を思い出してそう呟いた、全身装甲型の霊装は珍しく希少なので驚くのも無理はない。

「さあて、行こうか助手君!」

「誰が助手君だ誰が!」

楯無の左右に浮いているクリスタルのような物体——《アクア・クリスタル》が水のヴェールを展開して大きなマントの様に彼女を包み込み、彼女の身体が浮遊する、楯無も重勝と同じで空戦可能な伐刀者であるのだ。

彼女が飛行しているのは霊装の能力であり動力は「蒸気」、そう、楯無は珠雫と同じ水を操る伐刀者であった。

——成程、確かにこれは俺にしか手伝えない件だな、殆どが飛べない伐刀者に対抗する為の兵器が高速機動の飛行兵器とは考えたじゃねーか!

重勝は心の中で対伐刀者用の兵器を作った名も知らぬ誰かを称えた、制空権を取れば殆どの伐刀者相手に有利に戦える事は重勝が一番よく知っている、しかしそんな物は風間重勝と更識楯無には通用しない。

「細かい事は気にしない!今は一大事なんだから文句を言わずに行くわよ!」

「その一大事にマッサージを強要してエロい声を出していたのは誰だったのかな？この処女が」

「なっ!?!処女は関係ないでしょ!」

「んじゃ行くぜ!」

「ちよっ!?!待ちなさいよ!!」

顔を真っ赤にして文句を言っている楯無を無視して重勝は飛び立った、目指すは南東、目標は日本に向けて暴走して来ている最中の無人兵器だ。

—— 悪りーな幸斗、姫ツチ、お前等の応援に行けそうもねーや

本日強敵と試合をする元教え子達の応援に行けない事を心の中で謝罪し重勝は音を置き去りにして超音速の世界に入った。

『うう・・・クソツ、クソツ!!』

河原の傍で夕焼け色の髪の子少年が涙目で木の棒を地面に叩き付け続けている。

『まあたやってんのかあの無能なガキ?』

『いくらやったって無駄な努力だろアレ? 伐刀者は魔力が無ければゴミだぜ』

『しかもアイツ魔力どころか剣も銃も体術もからっきしダメで空間認識能力も野球のゴロすら捕球できない程貪くさいし掃除させたら前より汚れているし買い物に行かせたら金失くして迷子になっているし計算なんか1+1すら1-1や88なんて答えやがるし何をやらせてもまるで才能ねえんだぜ?』

『うわあ・・・1-1はともかく88なんてどっから出てきたんだよ?』

『あんなの相手にするだけ無駄だな、無能が移っちゃまう』

『違いねえ!』

『『『『『『『『アハハハハハハハツ!』』』』』』』』

これはかつて幸斗が西風に入つて一ヶ月経った頃の記憶だ、ごく普通のDランク魔導

騎士の両親の間に生まれた幸斗は四歳の時テロリスト集団に住んでいた町を焼き払われ両親は帰らぬ人となってしまった・・・そしてそのテロリスト集団を炎に包まれた町の中単独で討伐した西風団長の風間星流に二つ上の兄と共に拾われて命を救われたのであった。

今でこそ固い絆で結ばれている西風の団員達だが当時は才能こそ全てという思考の団員は少なくなく、こうして魔力が殆ど無いどころか全ての才能が平均以下の無才である幸斗を馬鹿にして嘲笑する団員は少なくなかった。

『ううっ・・・クソッ！オレは・・・さいのうなんかなくなつたつて！・・・なくなつたつて・・・』
『ようっ！幸斗！何泣いてんだ？泣いていたら幸せが逃げて行け！笑いなっ！』

『だんちよう・・・』

河原の水平線に太陽が沈みかけて空が幼い幸斗の髪色と同じ夕焼け色に染まった頃、木の棒を振り疲れて地面に仰向けに倒れ、自分の才能の無さとそれでも強くなる事を諦めたくない気持ちとで葛藤をして辛くなった幸斗が泣きそうになったところで団長である星流がなかなか戻って来ない幸斗を迎えにやって来たのであった。

沈みかけの太陽が直ぐに昇りそうな程チカラ強い笑みをして泣きそうな幸斗を元気づけようとする星流、しかし幸斗は沈みかけの太陽が今すぐ沈んでしまいそうな程辛そうな表情をしていた。

『だんちよう……こんなにさいのうのないオレがにしかぜのなかまになってよかったんですか?……オレはたすけてくれただんちようのチカラになるためにつよくなりた……でも……オレ、なんのさいのうもないから……ないから……ううつ……』
幼い幸斗は一生懸命になって命を救ってくれた星流に恩返しをしようとしていたのだった、それを聞いた星流は真剣な表情で幸斗と目を合わせて――

『オレのチカラになりたい?……バカヤロウツ!!』

『ひっ!?』

幸斗に怒鳴った。

―― やっぱりさいのうのないオレなんかだんちようのチカラになりたいなんておこがましかったんだ。

怒鳴られた事で幸斗はそう思った、しかし、星流が怒鳴った理由は全く違うものだった。

『俺はテメエに恩返ししてもらいたくて助けたんじゃねえ!生きてほしいから助けたんだ!馬鹿にすんなっ!!』

『ひいっ!ごめんさい!』

『………はあ……』

星流は地に伏せて怯えて謝る幸斗を見て溜息を吐いた、別に怖がらせるつもりはな

かったので気まづくなつたのだ。

『……幸斗……強くなりてえんだつたら泣くんじゃねえ、どんな奴が相手だろうとニヤリと笑つて立ち向かう気概を見せろ』

『……』

星流のチカラ強い言葉に幸斗は顔を上げて恐る恐る星流の眼を見た、魔王すら怯ませそうな程強く冰山ですら一瞬にして溶かしてしまふ程情熱に満ちた眼をしていた。

『幸斗……自分が潰れそうになつたら今から言う言葉を思い出せ！』

その眼に引き込まれた幸斗は星流の言葉に釘付けになつていた、一字一句聞き逃すものかと言わんばかりに、そして星流はその言葉を言い放つた——

『壁が立ちふさがるならブチ抜いて進め！道が無ければ自分（テメエ）で切り拓け！！魂の熱風が未来（あす）へと吹き荒れる！！』

ここに彼の息子がいたら「最後のはいらねーだろ？」と呟く事間違いないのクサイ言葉を恥ずかしがりもせずハッキリと言いつ放った星流、その言葉を幸斗はしっかりと魂の底に刻み込んでいた。

『忘れるな幸斗！才能なんて突き進み続ける意志で踏み越えろ！【道理を叩き潰して運命をブツ飛ばす！】それが西風だ！！』

星流の言葉に聞き入っていた幸斗の眼にはもう涙は無く、あるのはやってやるという不敵の笑みだった。

『一年・真田幸斗君、一年・黒鉄珠雫さん、試合の時間になりましたので入場してください』

「んじや行ってくるぜ涼花！楽しんで勝ってくるからよっ！」

第四訓練場の赤ゲート前の控室にアナウンスが響き、出番が来た幸斗はこの次に試合を控えた涼花に笑顔でそう言つて立ち上がった、待ちくたびれましたと言わんばかりだ。

「あら、随分と嬉しそうじゃない？そんなにこの試合が楽しみだったの？」

「それもそうだけどき、夜いい夢を見たから気分がいいんだよ！身体が軽い、今日は誰にも負ける気がしねえぜっ!!」

「そう、でも調子に乗って足下掬われるんじゃないわよ？」

「そんな素人みてえな事しねえよ！オレを誰だと思つてやがる!!?オレには西風の魂が刻み込まれているんだ！」

今日も幸斗は運命を覆す為に突き進む、己の魂に星流から聞かされた突き進み続ける意志を刻み込んで。

「さあ、いくぜっ!!」

強気な声をあげて不敵な笑みと共に幸斗は赤ゲートを潜り抜けて行った。

殲滅鬼VS深海の魔女

『さあそれでは、本日の第十二試合の選手を紹介しましょう！青ゲートから姿を見せたのは今我が校で知らない者はいない注目の騎士・黒鉄一輝選手の妹にして紅蓮の皇女に次ぐ今年度次席入学生！ここまでの戦績は十五戦十五勝無敗！属性優劣も何のその！拔群の魔力制御力を武器に今日も相手を深海に引きずり込むのか！一年「深海の魔女（ローレライ）」黒鉄珠雫選手です!!』

試合会場である第四訓練場内が大歓声に包まれ、青ゲートから小柄で銀髪の少女――珠雫が姿を現し堂々たる姿勢でバトルフィールドに立った。

「っ!？」

そして次の瞬間珠雫は自分が巨大な赤鬼に叩き潰される幻覚を見て一瞬脚が竦んでしまった、たった今赤ゲートから姿を現した男の底知れない闘気と威圧感を感じ取って――

『そして赤ゲートから姿を見せたのはこちらも黒鉄一輝選手と並ぶ注目度を誇る騎士！魔力量最底辺のFーでありながら攻撃力上限突破のEX（測定不能）という矛盾のステータスを秘める異質な男！【紅蓮の皇女】【城破き（ゴーストロイヤール）】といった名だた

る騎士を次々と打ち破り！ここまでの戦績は黒鉄選手と同じく十五戦十五勝無敗！その規格外の膂力から放たれる鬼の一撃が全てを粉碎する！一年「殲滅鬼（デストラクター）」真田幸斗選手だあああああああつ！！」

「ハッ！ようやく出てきやがったか、退屈な試合ばかりで暇だったぜ！」

「無理を言つて観戦させてもらっている立場で文句を言うな」

「ふくん、以前より凄い闘気じゃん」

丁度大型中央モニターの反対側にありバトルフィールド全体を見渡すことができ観戦するには絶好の位置にある観客スタンドの最前列の席に政和達三人は座っていた。幸斗が赤ゲートから入場して来て大歓声があがるところまで十一試合も低レベルの試合を見せられてつまらなそうにしていた政和が不謹慎な事を言つたので十士郎がそれを戒め、幸斗の昔の仲間である綱定は五年前の西風壊滅時より圧倒的に上回った闘気を放つ幸斗を見て薄い反応ながらも関心していた。

「真田と対戦する奴は無冠の剣王の妹か、へっ！今までのザコ共より何百倍は歯応えがありそうだな！こりやあなかなかフレッシュな試合が期待できそうだぜ！」

幸斗が立つ20 m前で彼と向き合い、真剣な目線で彼を睨む珠雫のチカラを感じ取つた政和は期待に胸を躍らせた、ここまでつまらない試合を十一試合も見せられた不満を全て払拭する程の戦いを期待して。

一方、一輝・ステラ・有栖院の三人は珠雫が入場して来た青ゲートの真上の席にいた。「いよいよシズクの番ね、普通の相手ならシズクの心配なんかしないんだけど相手はアタシが敵わなかったユキト、アイツの攻撃力は間違いない学園一．．．いや、世界一かもしれないわ、これはシズクが不利かもしれないわね．．．」

若干悔しそうにステラがそう言う、今は幸斗に負けた事を割り切ってはいるものやっぱり悔しいのだろう。

「．．．いや、珠雫の場合は不利とは言えないかもしれない」

「えっ? どういう事イッキ」

「真田君が今まで試合した相手はステラに〔城砕き〕の二つ名で知られる砕城さん．．．他も全て〔パワーファイタータイプ〕なんだ、実際にはステラはオールラウンダーなのかもしれないけど基本攻撃力が目立つしね、だけど珠雫は遠距離(ロングレンジ)からの飛び道具を軸に相手を翻弄する〔魔法戦タイプ〕だ、チカラでごり押しして来る真田君を上手く搦め手で翻弄して試合の主導権を握れば珠雫が有利になる筈さ」

「．．．」

一輝が考察をステラに話している隣で有栖院は一言も発せずじつと珠雫の後ろ姿を見つめていた。

—— ついにこの日が来たわね、珠雫はステラちゃんを倒した彼と試合をする事が

決まった時から絶対に彼に勝つと三日間必死に頑張ったんだから・・・相手は強敵だけど、頑張つてね珠雫!

有栖院は心の中で珠雫にエールを送った。

——真田幸斗・・・成程、桁違いね。

珠雫は前方約20mにいる幸斗の鬼の幻覚を見てしまう程の凄まじい闘気を感じ取つて身震いをしていた。空気が無数の太針の様に身体中に突き刺さり激痛を感じる、地球の重力が十倍か二十倍になったかのように身体が重い、蟻谷から冷や汗が滴り落ちる・・・この相手は強い、今まで自分が相手をしてきた誰よりも格上で計り知れないチカラを感じる、珠雫はそう確信した。

——でもだからこそ倒し甲斐があるわ、私はずっとこういう機会を待ち望んでいたのだから。

珠雫は強敵と戦う事で最も愛する兄への想いを試す事ができる事に思わず顔がにやけた。

——相手はお兄様より魔力が無いにも拘らずステラさんを倒したお兄様に最も近い伐刀者——相手にとって不足無し!この試合で黒鉄珠雫(私)の限界を試してやるっ!!

「運命を切り拓け!鬼童丸!!」

「飛沫（しぶ）け！《宵時雨（よいしぐれ）》!!」

幸斗は朱い太刀、珠雫は小太刀の霊装を顕現させて構え、戦闘準備完了だ。

『それでは第十二戦目——LET'S GO AHEAD（試合開始）!』

戦いの火蓋は切つて落とされた・・・それと同時に幸斗がいつものように珠雫に真正面から突撃した。

「うおおおおおおおおおおおおつ!!」

—— なっ!?速いっ!!

『ああつと真田選手、試合開始と同時に黒鉄選手に向かって突攻!20mの距離をほぼ一瞬にして詰め寄つて至近距離（クロスレンジ）に入ったああああああつ!!』

並外れた脚力で珠雫との距離を一瞬にして詰めた幸斗が珠雫をその朱い太刀の射程圏内に捉えた、予想外の幸斗の速力に内心驚愕して咄嗟に宵時雨を中段に構えて防御体勢に入る珠雫だが、幸斗はその真上から鬼童丸を横一闪!

『真田選手、霊装ごと黒鉄選手を一闪!防御の上から一刀両断だああああああつ!!』

ここまでの選抜戦で幸斗はステラ以外全て初撃で決着を着けている、唯一初撃で決着を着けられなかったステラはその初撃で後方に吹っ飛ばされて壁に大の字でめり込んで大ダメージを受けている・・・今まで幸斗の初撃は必ず相手にクリーンヒットしていた・・・しかしこの試合で初めて幸斗の初撃は相手に躲される事となる。

「なあっ!？」

『おおっとこれは一体どうした事でしょう!?!横に真つ二つにされた黒鉄選手の身体が突如崩れて水飛沫が弾けた!これは水の分身だああああ!!』

幸斗が斬ったのは珠雫が能力で造った自身の分身だった、見事に騙された間抜けな幸斗は驚いて素っ頓狂な声をあげてしまう、そして当の本人は——幸斗の真後ろだ!「もらった!《水牢弾(すいろうだん)》っ!!」

「しまっ t——」

珠雫は5m後方から鬼童丸を振り抜いた為に体勢が崩れている幸斗に宵時雨の切っ

先を向けてそこから直径30cm程の水の砲弾を放ち、それが幸斗の顔面に直撃し水が幸斗の頭から首全体を包んで留まった。

「ぼっ!?!ぼっぼっ!!」

『ああつと!この選抜戦で多くの騎士達を深海に沈めてきた黒鉄選手の水牢弾が真田選手に直撃!真田選手息ができずに苦しんでいます!これは早くも万事休すかつ!!』

「……ぼ……ぼ……ぼ……」

幸斗はその場でもがき苦しみながらよろめき段々と肺に空気が無くなってきたようであり徐々に腕のチカラが無くなっていく、珠雫はそんな幸斗の無様な姿を見て失望を抱いた。

「……なによ、これで終わりなの?散々期待させといてその様なんでがっかりしたわ……」

幸斗はやがて静かになり腕をだらんとチカラ無く下げ眼を閉じた……一輝達をはじめとした第四訓練場にいる誰もがこれで終わったと思った——

「ハッ！馬鹿が！この俺がライバルと認めた男がこの程度で終わるわけねえだろ!!」

特別に観戦している他校の隻眼の伊達男とその仲間にして幸斗の昔の仲間と控室にいる月花の錬金術師の二つ名を持つ戦術家の三人を除いて。

「・・・なっ!？」

珠雫はたった今仕留めたと思った伐刀者を見て信じられないと言わんばかりに眼を見開いた、なんと幸斗は静かになつたと思つたらいきなり鬼童丸を静かに構えて眼をカッと見開き、首から上全体に水球を纏わせたまま珠雫めがけて突撃して来たからだ。

「がぼぼぼっ！（なめんなっ!）ぶっぼぼぼっ！（くっだけ散れっ!）」
「くっ!？」

幸斗は勢いよく高く跳び上がり、太刀を後頭部まで振り上げ珠雫めがけて落下しその勢いを利用してチカラいっぱい太刀を振り下ろした。

珠雫は苦い顔をして後方に飛び退き、攻撃対象を見失った太刀がバトルフィールドを

砕いた。

『真田選手いきなり復活してすぐさま伐刀者専用のリングを粉々に砕いてしまったあああああっ!?! V S ヴァーミリオン選手の時と同じようにまたしても巨大クレーターを造ってしまいましたっ! 魔導騎士連盟はリングの強度を見直した方がいいんじゃないかあああああっ!?!』

「(ぎゅぎゅぎゅ)ぎゅぎゅっ! (まだまだ行くぜっ!)」

「くっ!?!何で!?!」

水球を首から上に纏わせたまま猛攻を仕掛けて来る幸斗を見て珠雫は唇を噛む、水牢弾が幸斗に直撃してから既に十分が経過しているのに彼は窒息せずまるで気にも留めずにいるので珠雫は困惑しているのだ、人間が水に潜れる時間は一般人で一分から三分ぐらいだ、そしてどんなに訓練した人間でも最長で約十五分、伐刀者は少し延びるかもしれないがそれは魔力あってこそであり幸斗の魔力量は世界最低のF判定、とてもじゃないけど息を止められながらあんなに激しく動いて窒息しないだなんて信じられないだろう。

しかし今赤ゲート側の控室にあるモニターでこの試合を見ている涼花はこう語る。

「アイツ昔はカナツチだったんだけどね、意地になってやり過ぎなくらい特訓して何故か【無呼吸で三時間潜水できるようになってしまった】のよ」

この非現実的な理由が珠雫の水牢弾で窒息しない理由だった、三時間潜水なんてアラ
ンクでもできるかどうかと首を傾げる事だろう、それぐらい異常な事である。

更に幸斗の昔の仲間である綱定はこう語る。

「アイツは本当の意味で何の才能もなかった人間の出来損ないだったんだよなく、魔力
量は勿論、剣術も体術も銃器類の扱いもてんでダメでそれどころかまともに買い物や掃
除すらできなかった、【強くなるなら自分の長所を活かせ】なんて言葉があるがアイツに
は長所なんてものはなかったんだ・・・だけどアイツは全てに意地になってぶつかり続
けた、何年も何年も毎日毎日挫折を繰り返してね、知ってるか？アイツは【あの敵には
パワーじゃ絶対に敵わない、技術を磨け】って言われても【ならもつとパワーを上げりや
いいんだろ】とか言う馬鹿なんだよ、オイラ達は無理だつて思ったんだけどアイツは
次々と不可能を可能にしていきやがったんだ、そしたらなんかオイラ達まで才能がある
奴等に負けたくない、越えられない壁なんかぶつ壊してやるなんて思うようになって
さ・・・まったく不思議な奴だよ幸斗はさ」

そして幸斗の最大のライバル、政和はこう語る。

「たつた今できねえ？持つて生まれた才能が違う？だから何だつてんだつて壁にぶ
つかり常に限界を越えようとする、それが真田幸斗という男だ、全ては無理だろうがマ
ジで意地を張り続けて挑めば例え何年かかろうが大抵何とかなるもんだ、【念力岩をも

通す」、奴はその信念を以って運命を覆す、まったくもってフレッシュな野郎だぜっ！」
幸斗の今までの異常性や今日の前で起きている状況もその信念が成したものであるのだ、【念力岩をも通す】、それが真田幸斗の絶対的価値観（アイデンティティー）なだから。

「くそっ！仕方ない！」

剣速、技のキレ、攻撃の鋭さが段々と増してきた幸斗の猛攻を水牢弾を維持し続けながら凌ぎ続けるのは不可能だと判断した珠雫は悪態を吐きながら止むを得ず幸斗の首から上を包んでいる水球を解除した。

「ハアッ！」

「ちっ！」

水牢弾から解放された幸斗がクレーター中央の上を跳んでいる珠雫目掛けて跳躍し鬼童丸を横一閃するが珠雫は身体を反らして間一髪朱い太刀を躲しクレーターのど真ん中に着地する、それと同時に――

「凍てつけ！凍土平原!!」

宵時雨をクレーターの中心に突き刺し言葉と共に彼女の足下が凍り付く、氷は幸斗が地に着地する前に壁際までフィールドを侵食して巨大クレーターとなったバトルフィールド全体を氷結させた。

——これでもそのまま真田さんが斜面に着地すればバランスを崩して倒れる筈、そこを狙えば!

珠雫はそう目論んでいたが彼女の目論見はアツサリと覆された。

「嘘っ!?!」

幸斗は氷結したクレーターの斜面に着地した瞬間まるでアイススケートのように氷の斜面を滑ってバランスを保った、それどころかその勢いを使って加速している。

「うおりゃああああああっ!!」

幸斗は珠雫の周囲を超高速で滑り回って彼女を攪乱し巨大な剣圧を放った。

「《障波水漣（しようはすいれん）》!!」

その剣圧は珠雫の前の地面から吹き上がった幅3mの水の壁が阻んだ、しかし幸斗の剣圧閃光はステラの天壤焼き焦がす竜王の焰（カルサリテイオ・サラマンドラ）を凌駕する一撃だ、幾ら鉄壁を誇る珠雫の障波水漣でもまともに受け止めれば術者ごと吹っ飛んでしまっだらう……故に珠雫は——

「受け流すっ!」

障波水漣の形を変化させて上に向かって反り立つ壁となった。

「くううううううっ!?!」

上にカーブを描く壁に伝わって閃光を空へと導く、壁に伝わせる事によって衝撃が幾

らか激減しているがそれでも凄まじい衝撃の為珠雫は魔力の放出と制御の為の集中力をとてつもなく使い苦痛で顔を歪めていた。

「負ける……ものかああああああああつ!!」

珠雫が最後の踏ん張りを見せとうとう閃光を上へと逸らす事に成功し、閃光は第四訓練場の天井を破壊して天へと昇って行った。

『黒鉄選手、真田選手の強烈な破壊力を秘める剣圧を上手く逸らした!!両選手お互い一歩も引きませんつ!!』

「ハア、ハア、ハア……」

「やるじゃねえか黒鉄妹!へへっ!ワクワクしてきたぜ!!」

かなりの集中力と魔力を使わされ肩で息をしている珠雫に対して楽しそうに不敵な笑みをしてそう言う幸斗、実況解説の女子生徒が言ったように互いに一歩も引かない二人だが試合はまだ始まったばかりだ、果たして勝つのは幸斗か?それとも珠雫か?

氷獸群

一進一退の攻防を繰り広げる幸斗と珠雫、青ゲート上の観客スタンドの席で観戦している一輝達は相変わらず常識外れの幸斗に啞然としていたがそれ以上に繊細な魔力制御と柔軟な思考による戦法をもって予想以上の実力を発揮した珠雫に驚いていた。

「あ、あのユキトの剣圧を受け流しきるなんてやるじゃないのシズク」

「うん、正直驚いたよ、どうやら珠雫は僕の想像以上に実力を付けていたみたいだね」

障波水漣の形を変えて幸斗の放った剣圧閃光を空へと逸らした珠雫の技量を絶賛するステラと一輝、特にこの剣圧閃光で自分の最大火力の伐刀絶技を破られているステラは声が震えるくらい驚いていた。

「珠雫の高い魔力制御があつてこそその防御方法だね、もしあれをまともに受け止めていたら珠雫は障波水漣ごと吹き飛ばされていただろうね」

「それはそうよ、アタシの天壤焼き焦がす竜王の焔が撃ち負けたんだもの、もしシズクがあれを簡単に防いだらアタシの立場が無いわ」

「うふふ、鍛練の成果が出たわね珠雫、凄いわー」

「……成程、この三日間珠雫と一緒に姿が見えないと思つたらアリスが珠雫の鍛練に付

き合ってくれていたんだね」

一輝は自分の事のように喜んでゐる有栖院を見て彼が珠雫の成長を手助けしていた事に気が付いた。

「そうよ、でもあたしは大した事はしていないわ、あたしはただ《鳥獣戯画（シャドウビースト）》を使って四方八方から珠雫を攻撃していただけなんですもの、珠雫はそれを障波水漣の形を変えて受け流し続けるって訓練をしていたってわけ♪」

有栖院の【鳥獣戯画】はダガーナイフ型の霊装《黒の隠者（ダークネスハーミット）》を地面に突き立てて虎や熊といった影の猛獣を出現させて襲いかからせる伐刀絶技である、珠雫はこれを長時間障波水漣で受け流し続ける事により高い耐久力と柔軟性を得ることができたのだった。

「・・・やっぱりユキトの圧倒的な攻撃力に対抗するにはイツキがアタシの皇室剣術を受け流し続けたように【柔】のチカラで制すしか無いのか・・・ねえイツキ、シズクはこれで勝てると思う？」

Aランクの意地に懸けてユキトにチカラで勝ちたかったステラは半分諦めたかのようには落胆してから一輝にこの試合の行方を聞いてみた。

「そうだね・・・珠雫が遠距離戦を維持し続けて真田君を近寄せさせずに制すれば珠雫が有利に試合を進める事ができると思うよ・・・ただ——」

一輝はバトルフィールド上で珠雫が放つ水の弾幕を蹴散らして彼女に正面突破をしてくる幸斗を真剣な表情で見据えてステラの質問に答える。

「——もう遠距離戦法は崩壊しているから珠雫に秘策がなければ有利なのは真田君だね」

一輝は気難しそうにそう断言した、しかし有栖院はそれでも余裕の笑みを崩さない。

「秘策ならあるわよ♪たぶんそろそろ札（カード）を切ると思うわ♪」

剽軽な態度で自信たっぷりにそう言う有栖院、果たして珠雫の秘策とは？

『真田選手攻める攻める！黒鉄選手が放つ水弾の嵐をもろともしていません！まるで』

んな砲撃も恐れないで突き進む突騎兵のようだ!!」

「まだまだいくぜ黒鉄妹っ!!」

「その呼び方はやめてくださいっ!」

幸斗が凍土平原によって凍り付いたクレーターの斜面を滑るように疾走し迫り来る水弾の嵐を一太刀で吹き飛ばし眼前に吹き上がって行く手を阻む障波水漣すら拳一つで粉碎して珠雫に迫る。

「オラアッ!」

「くっ!」

幸斗が振るう太刀を前方高く跳び上がって回避する珠雫、そのまま幸斗の頭上を前方宙返りをして通り過ぎクレーターの斜面を登り切ったところにある端に着地した。

——そろそろ仕掛けるか!

「障波水漣!」

珠雫が再び水の壁で自分の周囲を覆って防御体勢に入る、しかしそれはさつき幸斗が放った剣圧閃光を空へと逸らした反り立つ壁ではなく普通の障波水漣だった。

「それで守りを固めたつもりか黒鉄妹っ!?! そんなの一発でぶっ壊してやるぜ!」

幸斗は珠雫の方へと振り返って鬼童丸を振り上げる、剣圧閃光を放ってぶっ飛ばすつもりだ、しかし——

「んがっ!？」

幸斗は何かに足を捕られて前のめりに倒れて凍り付いた地面にキスをする事になった、何故なら凍り付いた地面から生えてきた水の腕が幸斗の両脚を掴んだからだった。

——今だっ!!!

幸斗が間抜けな格好で倒れると同時に彼の頭上に巨大な影がかかる、珠雫がコツソリと空気中の水素を幸斗の頭上に集束して一瞬にして氷結させて造り出した巨大な氷塊だ、それが真下の幸斗に落下して豪快な破砕音と共に幸斗を押し潰した。

「よしっ! やったの!？」

だがステラがフラグを建ててしまった・・・。

「うおらあああああっ!!！」

幸斗の上に落下した瞬間、大気を揺るがす程の衝撃波と破砕音と共に氷塊が爆発するように粉々に破壊された、幸斗が右アッパーで氷塊を殴ったのだ。

——・・・どういいう事? これに反応するなんて・・・。

珠雫は内心困惑していた、どうして幸斗は今の奇襲に反応できたのかと、Aランククラスの魔力制御による迷彩に人間の絶対の死角である頭上からの奇襲、だというのに幸斗はそれに当たり前のように反応し粉々に粉碎して見せたのだ、わけがわからないのも無理はないだろう。

「ハッ！地面を凍り漬けにしたのは間違いだっとな」

政和は鼻を鳴らしてそう言う、彼は幸斗が今の奇襲に反応できた理由が解つたみたいだ。

「ああ、今のは俺も解つた、凍り付いた地面が鏡の役割を果たしてそこに氷が映つたから反応できたのだろうか？」

「フレッシュだぜ十士郎、その通りだ」

そう、凍り付いた地面に氷塊が映つたからだ、幸斗は転倒した瞬間にそれが目に入つて一瞬で受け身を取りすぐさま体勢を立て直して落下してきた氷塊に右アッパーを叩

き込んだのだった。

「だからと言って普通あれを拳一つで破壊できるのか？なんと常識外れな……」

「幸斗が常識外れなのは今に始まった事じゃないし、あれぐらいはな……」

「へっ！それぐらいやってもらわねえとこの俺のライバルに相応しくないぜ！」

「お前らな……ん？あの少女何かするみたいだぞ？」

十士郎は政和と綱定の言動に呆れているとバトルフィールド上の珠雫が宵時雨を凍り付いた地面に突き刺そうとしている姿が目に入った。

「へっ！どうやら無冠の剣王の妹はまだ奥の手を残していたみてえだな、どれ、お手並み拝見とさせてもらうぜ」

近接戦（クロスレンジ）は自殺行為、遠距離（ロングレンジ）からの弾幕は全て叩き落される、不意打ちすらチカラ技で押し切られた・・・珠雫が考えた対幸斗の戦術は出足を挫き遠距離戦で釘付けにすることだったのだが最早破綻している、幸斗相手に遠くで縮こまっただけではジリ貧にしかならないと悟った珠雫はとっておきの切り札を切ることにした。

——確かに貴方のチカラは私の想像を絶する程のものだった・・・なら——
「当たらなければいいっ！ 《白夜結界（びやくやけつかい）》!!」

珠雫は宵時雨を凍り付いた地面に突き刺しそう言い放った、その瞬間に凍土平原の氷結が一瞬で固体から気体へと変換され濃く白い霧がバトルフィールド全体を覆い尽くしてしまった。

『何だどうした!? 突如黒鉄選手の伐刀絶技によって濃霧が発生してリング・・・だったクレーター全体を覆い隠してしまいました！ これでは試合状況がまったくわかりません！』

「おいおいなにも見えねえぜ・・・オレの視界を封じて一方的に廻り倒そうと考えてんだろうけどこの霧じゃテメエm——」

濃霧の中に閉じ込められた幸斗は辺りを見渡し霧が濃すぎる故に全く何も見えない

事からこの霧を発生させた珠雫もわからなくなっているだろうと予想するがその瞬間に正面から水の弾丸が直線的に飛んで来て幸斗の右頬を掠った。

「・・・・・・・・マジ？」

幸斗は呆けた、どうやら珠雫は幸斗の居場所を正確に把握しているみたいだ。

自分は全くわからないというのにと思っている暇も無く今度は幸斗の真下の地面から水の剣山が飛び出して来て幸斗を串刺しにしようとしていた。

「どあああああああつ!!？」

不意を突かれて間拔けな叫び声を上げながら奇妙なポーズをして剣山をやり過ぎした幸斗は先程水の弾丸が飛んで来た方向に突撃する、珠雫が水の弾丸を放つ時は必ず宵時雨の切っ先から放つので飛んで来た方向に彼女がいると思つたのだ。

そして幸斗の読み通り珠雫はそこにいた。

「見つけたぜ黒鉄妹!くらえつ!!」

幸斗は珠雫を鬼童丸で横一闪!・・・しかし――

「なっ!!?また分身だ?!?」

それは水でできた分身だった・・・珠雫の氷像の首が飛び地面を転がる、幸斗はそれを不気味そうに見ていると今度は鋭く先が尖った大きなつららが複数幸斗の頭上から降って来た。

「一体何でオレの居場所がわかんだよっ！」

幸斗は振って来たつららを悪態吐きながら太刀の一振りで薙ぎ払う、すると地面に転がっている珠雫の氷像の頭がギギギと幸斗の方に振り向き口を開いた。

「貴方は馬鹿ですか？この霧は私の能力で作ったもの、つまりは私の身体の一部と同じです、視界が利かずともどこに何があるのかも誰がいるのかも全て感じ取れるに決まっているじゃないですか」

「キシヨイツ!？」

突然珠雫の氷像の頭が語りかけて来たので幸斗は悪寒が奔って驚いた、濃い霧の中氷首が語りかけてくる・・・かなりホラーだ。

「この霧の中では貴方は私に手も足も出せません、幾ら貴方の攻撃力が規格外だからといても当たらなければどうという事は無いのですから」

「・・・へっ、だったらー！」

幸斗は思いっきり鬼童丸を振り上げて勢いよく振り下ろす、強大な臂力で振られた事により事象変化が発生し剣圧が巨大な閃光となって放たれ濃霧を吹き飛ばした。

「へへっ!どんなもんだ「無駄ですよ」・・・マジか?・・・」

四散した濃霧が間もなく集まって来て再び辺りを覆い隠す、Aランク判定の魔力制御能力を持つ珠雫が霧を操っているのだ、吹き飛ばされた霧を一瞬で掻き集める事など朝

飯前だろう。

「余裕ぶつていられるのも今の内です、目の前をご覧になってください」

「はっ。」

珠雫の氷首がそう言うので幸斗は困惑気味に目を凝らして正面を見た、するとそこには霧に紛れた何かの影がこつちに向かつてゆつくりと近づいて来ているのがわかった。

「おいおいおい何なんだよあれ？」

「知っていますか？魔力制御能力が高い伐刀者は想像力次第で何でもできるようになるのですよ」

そして幸斗の前にそれは姿を現した、氷と水でできた巨大な虎・鷲・大蛇・etc…氷と水の猛獣の群れがあらわれた！（笑）

「これこそ私がアリスの『鳥獣戯画』をヒントに編み出した伐刀絶技《氷獣群（ひようじゅうぐん）》！さあ、絶氷のサバンナより来たる誇り高き獣達よ！その全てを噛み砕く牙を以って目の前の獲物を捕食せよっ！！」

「「「「「URREYYYYYYYYYYYYY!!「「「「「」」」」」」」

「…・テメエ…・キャラ崩壊してねえか？そして氷獣共もその咆哮はなんか違うぞ、なんか人間止めたっばいぞ？」

眼をカッと見開いて氷獣達に大声で号令を出す珠雫の氷首、すると氷獣達が奇妙な雄

オラオラオラオラオラオラオラアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!

暴風が巻き起こる程の超高速ラッシュを一齐に飛び掛かって来る氷獣の群れに叩き込んで一気に粉碎した。

「URREEYYYYYYYY!」

「チィッ!?!」

ラッシュが止むのを見計らって上空から一体の氷コンドルが急降下して来てその鋭利な嘴をもって幸斗の眼を突き刺そうとして来た。

「ウラアッ!」

幸斗は首を右に傾けることによって嘴を回避し通り過ぎた氷コンドルを回し蹴りで破壊した。

「「URREEYYYYYYYY!」」

「チッ!次から次へとっ!!」

続いて氷ジャガー・氷ジャツカル・氷大蛇が幸斗を取り囲むように三方向に陣取り幸斗を威嚇する、後方にもまだまだ珠雫が作り出した氷獣達が控えている、これだけの数の氷獣を作り出し形を維持し続けながらコントロールをする珠雫の魔力制御能力には感服をせざるを得ないだろう、幸斗は面倒だと思つて舌打ちをした。

「グッ!?!」

ては一瞬でも隙を作れば良かったのだ、水の鎖が地面から飛び出した時には既に氷獣達が幸斗に向かって飛び掛かっついて気が付いた時には氷獣達は幸斗の眼前に迫っていた。

「……………マジかよっ！」

幸斗は虚しくも圧倒的な質量に押し潰されてしまった……。

「やべっ、もう始まってやがるってリユウだ!?!」

「貴様が悪いのだぞ愚兄、いい加減焼肉のタレを飯にかけて食うのをやめろ！」

第四訓練場の観客スタンド最上階の通路の出入り口から如月兄弟が大急ぎで入って来た、今日は二人の試合は無いにも拘らず既に第十二試合目だというのに今頃になってやって来た理由は烈が食あたりで二時間トイレに籠っていたという実にくだらない理由であり絶は変食を続ける烈を咎めている・・・トイレに籠る兄が出て来るのを二時間も待ち続けた絶も相当な御人好しだと思いが・・・。

「美味いんだから仕方がn「烈！前だ！」いゝっでっつ!？」

観客スタンド最上階の通路にある柵の前に出た瞬間に前斜め下から烈の頭に何かが飛んで来てスコーン！と綺麗に命中した、烈はかなり痛そうに頭を抱える。

「痛てて、何なんだよ一体・・・ってぎえええええええええっ！生首!？」

「よく見ろ馬鹿兄、氷だぞこれは」

烈は飛んで来て自分の頭に命中して通路上に転がる珠雫の氷首を見て悲鳴を上げすぎさま絶が烈を落ち着かせた、これは先程幸斗がイラツとして蹴り飛ばしたものであった。

「なんだよ脅かすなよ・・・何でこんな物が・・・何だ、この状況は?！」

烈は気が抜けたようにバトルフィールドを見下ろすとバトルフィールド全体が全く見えない程の濃霧に包まれているのを見て啞然とした、周りの観客達もざわざわと動揺していて試合の時はいつも大歓声で騒がしい訓練場内がこんなにも静まり返っている

のだから無理もないだろう。

「真田にこんな芸当は不可能だ、恐らく黒鉄珠雫の伐刀絶技だろうな」

「成程、真田の近接戦を封じる戦術としては悪くないってリユウだが観戦している側から見たら迷惑な戦術だ『ドオオオオオオオオン!!』何だ!?爆発音?」

絶が状況を分析し烈が納得していると突然爆発音が聴こえてきて第四訓練場内は緊迫した空気に包まれた。

『おおっと!?なんの状況もわからないこの霧の中で突然の爆発音です!果たして真田選手が優勢なのか?それとも黒鉄選手が優勢なのか?一体どうなんだ——って何だあれはっ!?突如霧の中から山がせり上がってきましたあああああっ!!』

緊迫した空気の中爆発音と共に突如出現した高さ約50mくらいの山、その山の後方下から山の頂上に跳び上がって来て着地する一つの人影があった・・・幸斗だ。

『あああつと真田選手です!とんでもない跳躍力で山の頂上に跳び乗りました!しかし真田選手かなりダメージを負っていますが大丈夫なんでしょうか?表情が影で隠れて見えません』

幸斗は山の頂上で傷だらけの身体をだらんとさせて顔を伏している、彼は氷獣達に押し潰される瞬間地面をチカラいっぱい殴り付けてその場を陥没させその衝撃をもって氷獣達を破壊して危を脱し、その副作用として正面の地が陥没した足下と比例して盛り

上がったのだった。

「……………」

「バトルフィールド全体が良く見える特等席で観戦をする政和が無言で山の上の幸斗を睨んでいる、幸斗の体たらくに怒りを感じているのか？それとも失望しているのか？

「……………真田——

——随分と楽しそうじゃねえかよ、フレッシュな表情だぜ」

顔をあげた幸斗の表情は……凶悪な程笑っていた、政和はこれを見て羨ましがって

いたのだ、楽しそうだと。

「上等だ、テメエ上等だよ黒鉄妹！へっ！これなら「リミッター」を外してもよさそうだぜ！！」

幸斗はメチャクチャ嬉しそうに衝撃的な事を言い放った。

「リミッター!?!リミッターって何言ってるのよ？まさかユキトは今まで本気じゃなかったって言うの!?!このアタシとの試合の時も！」

ステラは幸斗の発言に驚愕と激怒を覚えた、自分は手加減されて負けたのかと。

——真田君は本気じゃないとなんとなく感じていた、一体リミッターって何なんだ？

一輝は神妙な表情で幸斗を見据えていた、彼はこれから何をするのかと。

「……珠雫……」

有栖院は眼下の濃霧に眼を凝らして珠雫の心配していた、こんなのは予想外だったと。

「……………」

そして霧の中の珠雫は苦虫を噛み潰したような表情で山の上を見上げていた、これから来る鬼の逆襲を迎え撃つために。

様々な感情が飛び交う空気の中で幸斗は何故かその場に座り込み学生ズボンの裾を

たくし上げていた、そして――

「へへっ！これを外すのも久しぶりだぜ！」

幸斗は両足首に嵌めてあったレッグバンドを取り外し、更に両腕に嵌めてあるリストバンドを取り外して立ち上がった、両手に今外した四つのバンドをぶら下げて。

「「「「「は？」「「「「「」」」」」」」

第四訓練場内の人間達の心が数名を除いて一つになった・・・。

「もしかして・・・重り？」

有栖院が呆けながらそう言い終わると幸斗はバンドを下に落としました。

「「「「「プッ！ギャハハハハハハハハハハッ!!」「「「「「」」」」」」

バンドが落ちて行く最中第四訓練場内に観客達による大爆笑が響き渡った。

「重り？重りだつてさ！」

「アイツ騎士の戦いをスポーツの試合と勘違いしてんじゃないの?！」

「ギャハハハハハハハハハッ！こりゃあ傑作だ！」

「ちよつと馬鹿力だからって伐刀者を舐めるのも大概にしるよEランク風情がっ!!」

「そうだそうだ!!」

「ちよつと重りを外したぐらいで戦況が覆るわけが――」

「おっしやああっ！軽くなたぜ!!」

幸斗は山の上で軽く二三回飛び跳ねる、身体感覚を確かめた幸斗はすぐに目線を現れた珠雫の方へと向けた。

「くっ!」

珠雫はすぐさま吹き飛んだ霧を集束させて再びバトルフィールド全体を濃霧で包み込む、自分の居場所を正確に幸斗に把握させない為だ、しかし――

「んな事したって今のオレには無駄だぜ……んじや、行くぜっ!!」

幸斗は鬼童丸を下段に構えて腰をおとし……なんとブオン!という風切り音と共に消えた。

「――えっ!?!」

珠雫は目の前で起こった事象に対して時が止まったかのような錯覚を覚えて身体が固まってしまった……バトルフィールド全体を包み直した濃霧が完全に消滅している山の頂上にいた筈の幸斗がまるで瞬間移動したかのような速度で自分の懐に入り込み、既に自分の腹部に凄まじい威力の回し蹴りを叩き込んだ後だったからである。

「――がはあああ”あ”あ”あ”あ”あ”っ」

あまりの速さに時間差で珠雫の腹部が陥没しソニックブームによる衝撃波の発生と共に珠雫はブツ飛ばされてしまった。

真の強者

太陽から降り注ぐ光を受けて幻想的に白く輝く雲海の上を沿うように二つの閃光——重勝と楯無がハワイ沖で暴走した対伐刀者用無人兵器を撃墜しに行く為に超音速で飛行し蒼穹を駆けぬけて行く。

「つまりその無人兵器は魔力を吸収・貯蓄しその魔力の特性を付加・放出する事ができる《運命鉞（フォーチュンタイト）》で製造されていて、伐刀者の伐刀絶技を吸収し自身の攻撃リソースに変換する性能があるということかよ」

「そゆこと♪それに加えて大半の伐刀者が持ち得ない飛行性能があるから対伐刀者用の兵器として成り立つのよ」

「ふーん、大同盟の連中は運命鉞なんてよくそんなに滅多に見つからねーもんで兵器を造る気になったもんだな、こんなの量産できねーだろ？」

二人は超音速で横に並んで飛行しながら会話をしている、内容は今から破壊しに行く対伐刀者用無人兵器の性能についてだ。

話に出た【運命鉞】とは第二次世界大戦の最中突如アラスカ州に落下した謎の小隕石の中に含まれていた超希少な鉞物でありその特性は今重勝が説明した通りである、運命

の総量と言われている魔力を吸収するという下手をすれば魔導騎士世界の秩序をひっくり返しかねないこの鉱物はその特性からこの名が付き小隕石が落下したアラスカ州が大同盟に加入しているアメリカ合衆国の領土であつたが為に大同盟が保有する事となつたのだ。

「君い、そう言うけれど幸斗君が身に着けてるリミッターも運命鉱製でしょうに？ 西風が所有していた裏ルートで手に入れたんでしょ？」

「まーな、邪の道は蛇つてやつだ」

そんな希少な鉱物が故に裏ルートに流出してしまう事が稀にある、そのため西風などの非合法組織が手に入れてしまう事も少なくなかつた。

「幸斗君のリミッターって確か君の重力の能力を吸収させてリストバンドやレッグバンドの形に加工した物だよな？」

「その通りだ、幸斗のリミッターは装着した奴は身体に永続的に40Gの重力とBランクの魔力負荷がかかけられ続けるという代物だな」

「・・・1Gは1秒間に9.807m/s加速する時の重力加速度の事だから、その40倍・・・そこに幸斗君の体重を掛けて計算して・・・更にBランクの魔力負荷・・・幸斗君って人間なの？」

楯無が幸斗のリミッターの概要を聞いて幸斗に掛かる負荷を計算して青ざめる、幸斗

の人間性を疑ってしまう程の計算結果だったようだ。

「ぶつちやけやり過ぎたと思ってるぜ、幸斗の奴最初は1.2Gくらいでぶつ倒れていたのに外そうとしねーでさ、そんでどんどん負荷を上げたりリミッターを着けながら訓練を続けさせていたらいつの間にか40Gの重力が身体に掛かっけても俊敏に動けるようになっていたってわけだ・・・幸斗の奴死ぬ気で鍛練していたから・・・」

「いや、普通あり得ないわよ・・・」

「わかってるさ、アイツの身体がいつの間にか普通じゃなくなっていた事ぐらいな、恐らくこのリミッターを着けて戦い続けた所為だ、人間の限界を超えた負荷を身体に掛けて抗い続けた結果幸斗の身体は構造を変えてしまったみてーだな・・・まったく俺の想像を越える大した教え子だぜ」

重勝は幸斗の尋常じやない努力を誇りに思っていた、それを成し続けているのは幸斗の【突き進み続ける意志】だ、幸斗も涼花も重勝も巨門に入った綱定も西風の【道理を叩き潰して運命をブツ飛ばす】という信念を抱いて育ってきたのだ。

「さ、無駄話はここまでにしようぜー」

「そうね、たぶんそろそろターゲットは近い、気を引き締めて行くわよー」

重勝と楯無は閃光となって果てまで続く光り輝く雲海の道を駆けて行った。

「……マジ……かよ……」

「……凄まじいな……真田」

如月兄弟は後方斜め上の壁に空いた大穴を見て戦慄していた、ここ第四訓練場内観客スタンド最上階まで届いた幸斗の蹴圧がこのような破壊現象を引き起こしたのだ。

これだけでもリミッターを外した幸斗の一撃が規格外だという事がわかるであろう、そんな一撃を珠雫にくらわせてブツ飛ばした本人はどこか手ごたえを感じてなさそうに眉を擡めていた。

「……チッ！外した」

珠雫に回し蹴りを叩き込んだ左脚が濡れているのを見て舌打ちをする幸斗、ブツ飛ばしたのは直撃する直前に入れ替わった珠雫の水の分身だったのだ、珠雫は幸斗がリミッターを外している最中にどんな攻撃が繰り出されても対処できるように水の分身を用意していたという事だ。

「はあっ！はあっ！はあっ！．．．掠っただけでこれなんて．．．」

回し蹴りを回避した珠雫は幸斗の作った山の陰に隠れるように山に背中から寄り掛かって何故か腹部を右手で押さえながら苦しそうに激しく息を吐いている、幸斗の攻撃が速過ぎて完全に躲す事ができなかったのだ、正確には幸斗の蹴り自体は躲したのだがその瞬間に発生した衝撃波が珠雫の腹部を抉りハンマーで殴られたような衝撃を受けてしまったという事だ。

『あ．．．ああ．．．なんと凄まじい一撃なのでしょうか．．．私、開いた口が塞がりません．．．真田選手、攻撃こそ躲されたものの一蹴りで形勢をひっくり返してしまいました．．．』

実況解説の女子生徒が動揺しながら解説し観客である生徒達の殆どが髪を乱して唾然としている、幸斗が放った回し蹴りの衝撃波は強化窓ガラスを粉碎し中央モニターの画面に亀裂を生じさせ観客スタンド中にある小物を吹き飛ばすなどの凄まじい被害を出していた。動揺するのも無理は無い、この惨状を引き起こしたのはたった一蹴りなの

だから。

「く……!」

——冗談じゃないわ!こんなの一撃でも受けたら一卷の終わりじゃない!

珠雫は右手で腹部を押さえながら呻く、あまりにも自分の予想を超えた幸斗の戦闘力に彼女は内心焦りを覚え脳内の危険信号が激しく鳴動する、今この時をもって試合の主導権は幸斗が握り——

「……そこにいるんだろ黒鉄妹?次はブチ当てるぜっ!!」

「っ!?!」

——気付かれt——

「うおらああああああああつ!!!」

大爆発したような轟音と共に山が粉碎されるのを合図に鬼の逆襲が始まった。

『まさに大災害！まさに破滅（カタストロフィ）への序曲！真田選手リング・・・だったクレーターの地形を次々と変え黒鉄選手に超猛攻!!一方黒鉄選手は水や氷の分身を駆使してなんとか凌いでいますが、いやはや真田選手の攻撃が速すぎる！私、目で追う事が出来ません！黒鉄選手、防戦一方で反撃できません!!もし真田選手の攻撃が一撃でもクリーンヒットしたなら恐らく黒鉄選手は地に沈m・・・いや、粉々になってしまうかもしれません！黒鉄選手絶体絶命だあああああああああああつ!!!』

「なによ、これ・・・強すぎるじゃない・・・」

バトルフィールド内を圧倒的破壊で蹂躪し珠雫の分身を次々と粉碎していく幸斗、その光景を目の当たりにしてステラは戦慄していた、今の自分とはケタが違い過ぎると・・・そして彼女は珠雫が異常である事に気が付いた。

「ねえイツキ、シズクどうしちゃったの？」

「どう、とはっ？」

「見てわかるでしょ？突然動きも対応も伐刀絶技のキレまでかなり悪くなっているわ」
「・・・さつき重りを外した後の初撃を完全に回避しきれなかったみたいね、不意にあのスピードで攻撃されたら一輝やステラちゃんならともかく珠雫にはひとたまりもないわ・・・」

ステラが一輝に問いた答えは真剣な表情で観戦している有栖院が振り向かず代わりに答えた、彼はバトルフィールド内の蹂躞劇から目を離せないらしい。

「!?、じゃあシズクはあの一撃を受けたダメージを庇いながら戦っているって事なの!?」
「受けたと言うか掠ったんだらうね、でもあの破壊力から察するに今の真田君の攻撃は掠っただけでも致命傷だ、たぶん珠雫は今、いつ気を失ってもおかしくない程の激痛に耐えながら戦っているんだ」

「そんな・・・」

今度はしっかりと一輝が答え、それを聞いたステラは珠雫が幸斗の一撃をくらって粉々になってしまふのを想像してしまい呻いた。

無論一輝も珠雫の敗北など想像したくないだろう、しかし幸斗と珠雫の間には絶望的と言える差がある事を彼は察してしまった、なにしろ珠雫が対幸斗の為に用意した秘策すらもはや意味の無いものになってしまったのだ、珠雫の勝利は絶望的だろう。

「得意な遠距離戦（ロングレンジ）も破れ秘策すら通用しなかった・・・正直このまま

じゃ・・・珠雫は負けるわ」

「っ!!!」

有栖院のチカラの無い声の結論を聞いた瞬間、ステラは胸の奥底が熱くなるのを感じた、そして――

「シズクーーーーーッ!!がんばってーーーーーっ!!!」

チカラの限り叫んだ、叫ばずにはいられなかった。

ステラの叫びは第四訓練場内に響き渡り、戦意喪失しかけていた珠雫の耳にもよく聞こえた。

——貴方なんかに応援されても嬉しくないんですからっ！

血が滲む程拳を握りしめて眉を吊り上げ強がる珠雫、素直になれない彼女だったがこの叫びは戦意喪失しかけていた珠雫の闘争心を再び燃え上がらせる。

——目の前にいるのはステラさんが勝てなかった相手・・・彼を倒せば私がステラさんより上だという証明になる・・・。

珠雫は目の前に迫りつつある幸斗を睨みつけて宵時雨を構える。

——それにお兄様は必ず七星剣武祭に行く、だから妹である私はお兄様の横に立たなければならぬ！

珠雫は尊敬し愛する兄の強さを理解している、Aランク伐刀者ですら倒した兄が選抜戦なんかで躓くわけがない、珠雫は奮起した強い想いを胸に目の前の鬼に立ち向かう。

——だから絶対に勝つ!!!

「っ!?!」

「ああああああああっ?!?!」

珠雫は幸斗が振るう鬼童丸の側面に宵時雨をぶつけるがそれでも圧倒的な脅力の前には意味を成さず衝撃で吹き飛ばされてしまう・・・しかし、珠雫にとってはそれでい

いのだ、これで距離が稼げたのだから。

砂煙を巻き上げてクレーターの坂を転がり上がる珠雫は今自分が転がり上がっている坂を凍らせた、そしてそれを空中への滑走路としてクレーターの坂を転がり上がりきり上空へと珠雫の身体は投げ出された。

「《多重水分身（たじゅうみずぶんしん）》っ!!」

珠雫は空中で身を翻し宵時雨の刃を天に掲げて高らかにそう言い放った。

第四訓練場内中の空気中の水分を一斉に自分の形に形成させてバトルフィールド全体に百人を超える自分の分身を造りだし、バトルフィールド中央にいる幸斗を取り囲んだ。

『なんだこれはあああああああっ!!黒鉄選手、大多数の分身を造って真田選手を取り囲みました!お前は一体どこの世界のN I N J Aだあああああああっ!!』

「へっ! 圧巻じゃねえか、そう来なくっちゃなああああああああっ!!」

幸斗はクレーターを駆け上がり珠雫の大軍に向かって突攻、戦争地帯の激戦区のように飛んで来る水弾の嵐を掻い潜り、波のように押し寄せる珠雫の分身達を次々と斬り飛ばし殴り飛ばし粉碎して行く、幸斗の猛攻は止まらない、どんなに数を集めようが枷が解き放たれた鬼は止められない。

「・・・どうして?・・・」

「ん？」

百人以上いた珠雫の分身が本体を含めて残り五体となった時、珠雫は悔しさのあまりとうとう声に出してしまった、自身の胸の内に秘めていた疑問を――

「どうして【貴方達】は・・・そんなにも強い・・・私は、こんなにも弱いのに・・・」

幸斗は無言で襲い掛かってくる珠雫の分身に応戦しながら10m先で再び戦意喪失寸前の珠雫の独白を聞く。

【貴方達】と言ったのは幸斗の他に自分の愛する兄である一輝の事も指しているからだ。珠雫は実家である黒鉄家にいた頃、彼女の周りにはチカラに屈服する【弱い】人間ばかりだった、自分は生まれながらにして伐刀者として高い才能を持っているから自分は何をやっても許されて、周りの人間達は自分の才能というチカラの前に頭を下げ媚び諂い誰も逆らおうとはしなかった。

珠雫は実に下らないと思った、強い者に頭（こうべ）を垂れて内心微塵も感じていないような謝意や誠意を平気で言う汚い人間が珠雫は大嫌いだった。

そして自分もコイツ等と同類だという事実が珠雫自身を苛立たせ、その鬱憤を自分より弱い者につつけている時、黒鉄家の落ちこぼれと呼ばれていた兄、一輝と出会った。

『よわいものいじめをしちゃダメだ』

一輝は珠雫の頬を叩いてそう言った、黒鉄家の強者である筈の彼女に対して弱者である筈の一輝が真つ向から刃向かってきたのだ。

珠雫はこの時【本物の強い人間】に出会った、己の信念を貫き何者が相手だろうと立ち向かう事ができる人間が本当の強者なのだ。と珠雫は感じた。

故に珠雫は憧れた、本当に強い人間である兄に。

そして目の前の伐刀者もまた兄と同じ真の強者である、だからこそ珠雫は知りたかったのだ、二人はどうして強いのかと……。

「……そう思ってたんなら何ウジウジしてやがるんだ？……テメエ！」

「っ!？」

幸斗は珠雫の独白にイライラしながら彼女の分身最後の一体を撃破し彼女に向き合った。

「そうやってウジウジ立ち止まってたってどうにもなんねえだろうが！戦う気がねえんならとつととギブアップしやがれ！オレは才能があるのに前を向かない奴が大嫌いなんだよっ!!」

幸斗が珠雫に返した言葉は彼女を卑下にする暴言だった、それを聞いた珠雫は当然激昂して――

「貴方に……お前に何がわかるって言うの！私が今までお兄様と自分は何故違うのk」わ

かるわきやねえだろ！オレはテムエじゃねえんだ！弱いと思つたらとにかく前に突き進むしかねえんだよ！！」ふ、ふぎけないで！！

珠雫は幸斗に横槍を入れられた事に激怒して彼に水弾を放つ。

「ふぎけちやいねえっ！オレは今まで自分が弱いからこそ前に突き進み続け、今ここにいるんだあああああああああつ！！」

「っ!? 障波水漣!!」

幸斗は水弾を太刀で一閃し珠雫に正面から突撃し、珠雫は自分の前に水の壁を出現させて幸斗を迎え撃つ。

「壁が立ち塞がるならブチ抜いて進む！」

幸斗は障波水漣を右ストレート一発で崩壊させた、今まで一から鍛えあげた自慢の拳で。

その瞬間を見ていた政和はこう語る。

「へっ、それでこそ俺のライバルだ！才能だけに頼つた奴はもろい、ちよつと自分のチカラが通じなかったただけで簡単に潰れちまう、それは才能というチカラしか信じられなかったが為にそれだけが自分の全てだと思ひ込んでしまふからだぜ！だから強え奴等はどいつもこいつも限界という壁を壊そうとするんだ！」

真の強者、それは限界という壁に立ち向かい挑み続ける事ができる者。

「氷獸群っ！」

珠雫は幸斗が障波水漣を崩壊させるのと同時に三体の水ゾウを自分と幸斗の間に作って自分への進路を塞いで幸斗を妨害する。

「道がなければ自分（テメエ）で切り拓く！」

幸斗は鬼童丸の横一閃だけで三体の水ゾウを倒壊させた。

それを見ていた珠雫の兄、一輝はこう語る。

「僕は五歳の時何もかも諦めて家から逃げ出してしまった事があった、でもそんな時僕の前に龍馬さんが現れて僕に言った、「諦めない気持ちさえあれば人間はなんだってできる、なにしろ人間ってやつは翼もないのに月まで行った生き物なんだからな」と、真田君が言っている事も恐らく同じなんだね、「諦めずに道を切り拓こうとすればきつと上手くいく」ってさ」

真の強者、それは自分の道を自分で切り拓いて見つける事ができる者。

「……だ！凍土平原っ！」

「なっ!?!」

水ゾウ達を倒壊させた瞬間珠雫が幸斗の僅か1m前方の地面に宵時雨の刃を突き刺して半径20mの地面を幸斗ごと凍り漬けにしてしまった。

『真田選手不意を突かれて氷像になってしまったああああ！黒鉄選手の逆転勝ちかああ』

あああつ!!』

「凶に乗るからこうなるんですよ、何が突き進むですか、そのt——」

珠雫が氷像となった幸斗を見据えて凄艶な微笑を浮かべていると突如地面が振動し、次の瞬間幸斗の氷像が砕け、氷の内側から身体を高速振動させて密着している氷を切削して破壊し生還した幸斗が不敵な笑みを浮かべながら鬼童丸の切っ先を珠雫に向け……高らかに口を開き——

「魂の熱風が未来（あす）へと吹き荒れる!!」

そう言い放った。

これを見ていた元西風の隊員である涼花と綱定はこう語る。

「いや、それはいらぬわよ（つての）……」

真の強者、それは何事にも怯まない強靱な心を持つ者……これは違う気がするが……。

「くっ！こうなつたら!!」

珠雫は後方に飛び退きクレーターの端に着地する、そして——

『うおおおとおつと黒鉄選手！大気中の水分を集束して水の龍を自らの背後に降臨させました!』

「ちよつ?!シズク、何よこれ!?アタシの妃竜の大顎（ドラゴンフアング）ソツクリじやな

いの！パクリよパクリ！」

「パクリじゃありません、参考にして私なりの伐刀絶技に昇華させたんです、人聞きの悪い事を言わないでくださいステラさん、あと脚太いですよ」

「なんでそこから見えるのよ!?!」

青ゲートの上の観客スタンドから発情期のようにギャーギャー騒ぐステラと口論をする珠雫の背後に現れたのは蛇のような身体を持つ水でできた龍である。

「へえ、そいつでオレを倒すつてのか?」

「ええ、この伐刀絶技の名は《水龍弾（すいりゆうだん）》、さっき言ったとおりステラさんの妃竜の大顎を参考にして編み出したものです、そして貴方はこの水龍を討ち倒すことはできませんよ」

「言うじゃねえか、ヴァーミリオンの妃竜の大顎はオレに通用しなかつたつてのによ」

「確かにこの水龍弾はステラさんの妃竜の大顎みたいに複数同時に放つ事はできません、それは魔力量の違いもありますがそれとは別に私がこの水の龍の身体中全てを常に高圧で循環させているからですよ」

高圧で循環させている水流はダイヤモンドすら簡単に切り裂く事ができる、そもそもこの地球の大地は水によって形造られたものなのだ、故に――

「この世に水で破壊できない物など存在しない！もう一つ言えばこの水龍弾の追尾性能

はステラさんの妃童の大顎を大きく上回っています！つまり貴方はこの水龍に打ち勝てずに敗北する運命だっ!!」

珠雫がそう宣言すると水龍が珠雫の前に出て幸斗を今にも喰い殺さんとするように前傾姿勢をとっていた。

圧倒的存在感を出す水龍に睨みつけられた幸斗（鬼）は・・・凶悪と言える程に笑っていた、幸斗にとって龍と対峙する事など今更だ、幸斗は一旦視線を観客スタンドに向けてここからでも良く見える席に座ってこつちを見ている自分の最大最強のライバルと目を合わせ――

――オレが倒したい龍はお前だ、こんな奴とつととブツ倒してやるからそこで見ていやがれ!

と眼で伝えるように睨む、政和がそれに答えるように「へっ!」と不敵な笑みを浮かべると幸斗は視線を水龍に戻して鬼童丸の朱い切っ先を水龍に向けて口を開く。

「いいぜ、オレがそいつに無様に倒されるのが運命だつて言うんなら――その運命を覆してやる!!」

幸斗はいつも通りの決めゼリフを言い放ち、鬼と水龍は同時に討ち倒すべき敵に向けて突撃した。

雨の中の決着

何故この世界の人間の殆どは壁が行く手を阻んだら乗り越えようとしなのだろうか？

何故この世界の人間の殆どは道が途切れていたら自ら作って進もうとしないのだろうか？

何故この世界の人間の殆どは・・・生まれ持った才能の有無に限らず運命を受け入れて先に進もうとせず立ち止まってしまふのだろうか・・・。

・・・答えは簡単、この世界は運命が魔力という名のチカラとなって【できる】【できない】が目に見えているからだ。

才能が無い者は【できない】という現実を突きつけられ勝手に才能には一生敵わないと決めつけてやる前から諦め、才能がある者は【できる】という優越感に浸りそれに依存してしまい勝手に自分にはそれしか無いと決めつけて自分の才能以上を目指そうとしない。

——何故オレが才能が無いのに強いのかって？そんなの決まっているだろ!?

本当に大切なのは才能が無いのを理解した上で、または才能を磨いた上でそれより高みを目指そうとする果てしない意志を持つ事だ。

——オレを誰だと思っただやがる!?! オレは——

その果てしない意志を持った一人の鬼は自分に向かって来る水の龍に正面から堂々と立ち向かい・・・朱い刃を振るった。

「オレは——真田幸斗だあああああああああああああああああああつ!!!」

凄まじい膂力で振るわれた太刀は凄まじい嵐のような衝撃波を発生させて前方を扇状に薙ぎ払った。

「っ!!?きやああああああああああああああ!!」

水龍は爆散したように弾け飛び、その後方にいた珠雫は強烈な衝撃波によつて悲鳴と共に吹き飛ばされて後方の壁に叩きつけられ衝撃波が収まると同時に地に倒れ伏し、その後すぐに衝撃波を受けた壁は珠雫が叩きつけられた場所も含めて崩壊し・・・第四訓練場内全体に豪雨が降り注いだ。

「どわあああつ!!」

「なつ何だ!？」

「何で屋内なのに雨が!？」

「もくサイアク〜!買ったばかりのブランドのバッグがびしょ濡れじゃない!」

豪雨で濡れてしまった観客の生徒達が小さくパニックを起している、この豪雨の正体は弾け飛んだ水龍弾の水だ、珠雫はこれだけの水を龍の形に保ちつつ全体を高圧水流になる程循環させ続けながらコントロールしていたのだ。

—— 情けないね：：私：：お兄様が見ているのにあんなにみつともなく喚いて：：。倒れ伏す珠雫は全身を豪雨に打たれながら先程の自分の行為を後悔して思い耽る。

—— 本当は解っていたの、真田さんもお兄様も：：そしてステラさんも自分の才能に負けずに更に高みを目指して前に進む事ができるから強いんだって：：。

珠雫は本当はずっと前から：：兄と出会ったあの日から既に理解していた、才能の有無に限らず自分の限界を越えようとする果て無き向上心を抱いて進み続ける人間が強いのだと。

—— 私は結局自分の持つ才能の範囲内でしか物事を考えられなかった、勝手に決めつけていたんだ、自分は武術の才能が低いから自分の得意な魔力制御力を伸ばしてお兄様の手助けをするしかないと：：お兄様は才能があるならそれを伸ばした方が遥かに

効率的だとおっしゃってくれましたが、それが武術的能力を伸ばさなくていい理由にはならないのよ……。

幸斗も一輝もステラも涼花も重勝も如月兄弟も政和も……そして【雷切】と名高い刀華も、強い伐刀者は皆才能だけでなく武術も磨いている、魔力なんて強さのほんの一部に過ぎないのだ、それなのにこの世界の人間の大半は魔力こそ至高だ最強だなど勘違いをする……今の珠雫はそんな事は決して思っていない、だが高い才能を持って生まれ魔力至上主義の塊である黒鉄家で育ったが為知らず知らずのうちに魔力しか無いと思いつけてしまったのだ。

——お兄様達が強いのは当たり前なのに本当に馬鹿ね……。私……。

珠雫はそう思い納得しながら気を失い……。豪雨が止んだ。

「黒鉄珠雫、戦闘不能！勝者、真田幸斗!!」

「グラツツエー！楽しいバトルだったぜ、黒鉄妹!!」

豪雨が止むとすぐにレフェリーが倒れ伏している珠雫が気絶しているのを確認して幸斗の勝利を宣言し、幸斗は珠雫に敬意を払いウインクしながら珠雫に向かって指差して最後まで戦い抜いた彼女に敬意を払った。

『試合終了!!全てを深海に沈める魔法の策略をモーゼが大海を割るかの如く切り抜け、見事勝利を収めたのはEランク騎士！殲滅鬼（テストラクター）真田幸斗選手だあああ
あっ!!』

「・・・珠雫・・・残念だったけどよく頑張ったわね」

大歓声が第四訓練場内に響く中で有栖院は眼を閉じて珠雫の健闘を称えた、幸斗に勝つ為の彼女の特訓に付き合った身としては少々悔しい思いはあるだろうが珠雫が全力を出した結果だから仕方がないと有栖院は受け入れていた。

「・・・なんか納得いかないわ・・・」

ステラが不機嫌そうに不満を口にする。

「・・・やっぱり珠雫が負けたのを受け入れられない？それは僕だつて悔しいとは思つて
i 「そうじゃないわ」・・・わかつているよステラ、真田君がまだ完全に本気を出して
ないからでしょ？」

なんと一輝とステラは幸斗がまだ本気じゃない事を見破つていた、確かに幸斗は「リ
ミッターを外す」とは言つたが「本気を出す」とは言つていない。ステラは無言で頷き、
試合終了直後だというのにバトルフィールド上で未だにピンピンしている幸斗を見つ
めた。

「・・・ユキトにはまだ余力が残っている、全力であんなチカラを使ったのなら一刀修羅
を使った後のイツキみたいに気を失いそうになっている筈・・・アタシは超が付く程手
加減されていたのね・・・」

「ステラ・・・」

泣きそうな程苦い表情をして震える程拳を握りしめるステラ、彼女は手加減されて負
ける程未熟な自分が情けなくて悔しいのだ、しかし一輝は彼女に言う――

「その悔しさを忘れないで、それを乗り越えてこそ君はどこまでも強くなれる筈だから」
「・・・うん、わかつてる・・・」

人は何度も悔しい思いをして立ち上がつてを繰り返してこそ強くなる、そしてそれは
珠雫だつて同じだ。

——これからだよ珠雫、今年の七星剣武祭の出場は難しいかもしれないけれど騎士の道は負けてからが本番なんだ。

一輝は何度も諦めそうになりながらも最後まで戦い抜いた妹の事を思う。

——立派だったよ珠雫、強くなつたんだなあ、いつも僕の後ろをとことこ付いて来たあの小さな女の子がさ。

一輝は今日この瞬間程自分が四年の年月の経過を感じた一瞬はないと思つた・・・そして一輝は腕を後頭部に組んで気分良くバトルフィールドを去る鬼の背中を見つめる。

——やつぱり凄まじく強い。

珠雫は決して弱いわけでは無いし今の試合だつて彼女はステラや有栖院の伐刀絶技を参考にし新たな伐刀絶技を引つ提げて全力で挑んでいた。

しかし真田幸斗という鬼はそれを全て真つ向から叩き潰した、世界最低の魔力量である筈の幸斗は世界最高の魔力を持つステラを龍殺しの剣で仕留め、学園最高クラスの攻撃力を誇る碎城を拳一つでブツ飛ばし、そして今一年最高の魔力制御能力を持つ珠雫を地に沈めてみせた・・・そんな彼を見て一輝は思う。

——【殲滅鬼】真田幸斗・・・是非一度剣を交えてみたいものだね。

幸斗と同じく世界最低の魔力量と言われた一輝はそういう思いを胸に抱いていた。

「……よし、帰るぜ」

「は？」

レフェリーが幸斗の勝利を告げると政和は早々に席を立ち、当然だと言うかの如く帰るといったので十士郎と綱定は呆けた、注目すべき試合がこの後すぐもう一試合あるというのに。

「は？」じゃねえよ、約束したのは真田の試合までだったろ？」

「そうだが今から理事長室に電話して許可をもらえばいいんじゃないか？新宮寺殿は気前のいい方のようなだから一試合くらいなら許してもらえるだろう」

「そうだな、それに次の試合は姫と去年十士郎先輩が負けたあの「雷切」の試合だ、見て行く価値は十分あると思うけどな」

そう、次の試合はEランクで能力の使用回数が限定されていながらも多彩な戦術を使いこなした相手を翻弄する涼花と去年の七星剣武祭ベスト4の刀華だ、両者共に今のところ選抜戦無敗の猛者同士の試合なので見逃す手は無い筈、しかし政和は「お前は一言多い」と綱定の発言に対して一言文句を言っている十士郎に「フツ」と笑い――

「確かに面白そうなカードだが今の試合を見てこんなところで油売ってる暇なんかなくなつた」

と、階段の前に出て出口のある上に昇って行く。

「とつとと帰って鍛えねえとな、じゃねえと真田の野郎に後れを取つちまう」

「お、おい！」

「はあ、まいつか、どうせ後で動画サイトにアップされるだろうし」

十士郎と綱定も席から立ち上がり政和を追うようにその場から移動して行った。

「俺もどうかしてられねえ、真田・・・フレッシュな試合だったぜ」

この試合で宿命のライバルの闘気と五年間の成長をしっかりと感じた政和はそれに

触発されて静かに闘志を燃やし、不敵な笑みを浮かべて第四訓練場を跡にした。

十士郎も続くように第四訓練場を出るが、綱定は何かを思い出したかのように出入り口前で止まり、上を見上げる。

「・・・そういえば今日重勝が更識家の当主に契約交渉しに行ってるんだったな・・・アイツ上手く契約できただろうな？」

綱定は今この場にいない昔の仲間の事を心配しつつ出入り口を潜って行った。

一方その頃、重勝と楯無はついに撃墜目標である対伐刀者用無人兵器をその視界に捉えていた。

「楯無！あれか？」

重勝は前方からこつちに向かつて来ている正体不明の飛行物体を見て楯無に問う。

「ええ、間違いないわ！依頼者から送信されてきた写真と完全に一致している」

楯無は先程までの剽軽な態度とは違い真剣な表情で目標を確認してそう答えた。

向かつて来る飛行物体は全体的に白く兵器と言うにはあまりにも小さく人に近い形状をしていた、フルフェイスの頭部に白いスカート状の軽鎧、そして右手には一振りの大型プラズマブレードを携えている、その姿は兵器というよりまるで――

「空飛ぶ白い騎士・・・さしずめ《白騎士》ってところね！」

「へっ、上等じゃねーか！ さっさと撃墜して契約成立とさせてもらおうぜっ！」
今、ここに黒い剣士と霧の淑女が鋼鉄の白い騎士と激突する！

蒼穹の激闘

果てしなく広がる蒼穹の大空をバトルフィールドとして戦闘が開始された。

向かって来る重勝と楯無の存在に気が付いた白騎士がプラズマブレードを構え、残像が発生する程の超加速をもつて二人に向かつて先制攻撃を仕掛けに行く。

——へえ、なかなか速えじゃねーか。

白騎士の機動力が予想より遥かに高かったので感嘆とした重勝は砲剣を振るって迫る白騎士のプラズマブレードを迎え撃とうとする……だが——

「ふっ！」

重勝は砲剣がプラズマブレードに接触する直前に砲剣を引き身を反らし宙返り（ルーブ）でプラズマブレードを躲すと——

「隙ありいっ！」

ドリルのように螺旋回転する水の突騎槍（ランス）を生成した楯無が上を宙返りで飛んで下に背を向ける重勝の下を潜り、プラズマブレードを振りきって大きな隙ができている白騎士目掛けて水の突騎槍による強烈な突きを放つ。

対する白騎士はなんと一瞬にしてプラズマブレードを切り返して楯無が突き放つ水

の突騎槍を正面から迎え撃つ。

——なるほど大した反射速度ね・・・でもダイヤモンドすら切り裂く高圧水流を螺旋回転で循環させて生成した絶対的な貫通力を誇る水の槍——私の伐刀絶技《蒼流旋（そうりゆうせん）》ならこんな剣ぐらい——

「一撃で突き破れる」、楯無が内心でそう言おうとした瞬間、白騎士のプラズマブレードが蒼流旋の切っ先に食い込んで水飛沫が迸った。

「ほえっ!？」

予想外の現象に戸惑い素っ頓狂な声を出してしまつた楯無、だが呆けている場合ではない、白騎士の凶刃が蒼流旋を斬り裂いて彼女に迫るが、それは宙返りで彼女の真後ろに來た重勝が彼女の左腕を掴んで引き寄せる事によつて空を切つた。

「はあっ!」

重勝は楯無と入れ替わり様に前に出て白騎士の脇腹に強烈な蹴りをかまして白騎士を吹っ飛ばす事によつてなんとか体勢を立て直す時間を作り、二人は横に並んで30m先に吹っ飛んだ白騎士を見据えた。

「油断したわ、まさか私の蒼流旋が正面から切り裂かれるなんて・・・」

「・・・という原理かしらねーがどうやらあの剣は伐刀絶技を無力化するみてーだな、ついでに言つておくと装甲は運命鋳製のようだが、蹴り入れた時幸斗に付けたリミッ

ターと同じ感触がしたから間違いないぞ」

「つまり剣を掻い潜って直接攻撃を入れても物理攻撃以外吸収されてしまうって事ね……」

「そういうことだな、さてどうするか？」

体勢を立て直して再び正面から向かって来る白騎士を迎え撃つ為に身構えながら首を捻って攻略法を考える重勝と楯無、伐刀絶技は斬られるか吸収される、敵は人型だけど兵器だから対人戦用の武術では決定打は与えられない。

——運命鉱の性質から考えて恐らく霊装による直接攻撃も霊装ごと吸収されちゃうな……あの剣も魔力をブツた斬れるみてーだからもしさつき奴の剣をそのまま霊装で受けていたら俺の身体ごと真つ二つだったところだ、霊装も魔力で形成させてっからな、危ねー危ねー……。

重勝は一步間違えれば即死だった事実にも顔に冷や汗を掻き、立てた仮説を踏まえてどうするかを考える、だがじっくりと考えている時間はない、雲海を突き抜けて猛スピードで一直線に飛翔して来ている白騎士がもう目の前に迫って来ているのだから。

「……仕方ねーな、物理的な方法で応戦しながら考えるとするか……楯無」

「ん？」

重勝は一振りの短刀を取り出して楯無に投げ渡した。

「とりあえずそれ使え、幸斗の攻撃でもなかなか破壊できない特殊合金製だ」
「へえ、なかなかの業物じゃない♪」

渡された短刀を見回すように眺めて絶賛する楯無、かなり気に入ったようだ。

そして重勝も同じ特殊合金製で造られた一本のダガーを取り出し一旦霊装を消滅させて既に目の前まで迫って来ている白騎士を迎撃する為に身構えた。

「・・・いくぜっ!」

目の前の雲が爆散し白騎士が弾丸のように突撃して来る、神速のプラズマブレードが重勝に振るわれそれを重勝はダガーで受け止める、強烈な剣撃の威力に若干表情を歪める重勝であったがなんとか持ち堪える事ができた。

鏢競り合い状態の中で楯無が重勝の右側から割り込み鋭い剣閃で白騎士の首を落とさんとする、白騎士はスラスターを逆噴射して後方に緊急回避、楯無の刃が空を切る。

後方に緊急回避した白騎士を楯無は直進横転飛行（エルロンロール）をして追撃、遠心力を利用した変則軌道の剣閃を繰り返そうとするが、一瞬にしてプラズマブレードを構え直しスラスターを吹かして急速方向転換をして来た白騎士の刃が既に振るわれていた。

楯無はプラズマブレードを横転旋回（バレルロール）で回避、白騎士と擦れ違うように右側を通り抜けた。

選交代と言わんばかりに楯無の後方に控えていた重勝が隙を突いて白騎士の懐に潜り込み、奴の鳩尾に強烈なボディーブローを叩き込み、身体が「くの字」に曲がった瞬間に胸に回し蹴り上げをブチ込んで上空にブツ飛ばした。

雲を突き抜けた先には既に楯無が先回りしており、彼女は雲に大穴を空けて下から飛ばされて来た白騎士の背中を短刀で一突きにしようとするが、短刀が突き刺さる直前で白騎士が左にスラストを吹かして急旋回（ブレイク）し短刀を高速回避してしまう。

白騎士はそのまま楯無の背後に「捻り込み」、突きを放った体勢で隙だらけになった楯無の背中に向けてプラズマブレードによる袈裟斬りを繰り出した。

絶体絶命かと思われたが、超音速の垂直上昇機動（ヴァーチカルブースト）で真下から飛来して来た重勝が間に割って入りダガーでプラズマブレードを受け止めた。

「楯無っ！一気に押し切るぜっ!!」

「OK！ガンガン行くわよっ!!」

互いをカバーし合う交代（スイッチ）と流れるような連携で白騎士を激しく攻め立てる二人、しかし人型だと言っても相手は機械だ、撃墜するには大きな火力が必要だろう。

——さて、どうしようか？・・・このままやつてもジリ貧だわ、そうなたらそのうち私達は魔力が尽きて海にダイブする事になっちゃやう、どうしよう着替え持つてきてないのに。

白騎士が繰り出すプラズマブレードの連撃を短刀で捌きながらそんな事を考えている楯無、困っている割には随分と余裕そうだ。

「ハアツ!!」

ガキイインツ!という剣撃音が蒼穹の大空に鳴り響く、重勝のダガーの刀身と楯無の短刀の刀身が交差するように重なりその中心で白騎士が振るったプラズマブレードを受け止めたのだ。

「・・・楯無」

「・・・何?」

「物理攻撃なら通用するんだよな?」

「・・・そうね」

二対一の鏖競り合い状態——身体がほぼ密着した超至近距離で目を合わせて確認し合う重勝と楯無、あと数センチで唇同士が触れ合いそうなこの状態で二人は何かを企んでいる悪人のような凶悪な笑みを浮かべていた——

よく周りを見てみたら薄い霧のようなモノが彼等の周囲の空域を包み込んでいた、心なしか気温が若干上昇しているようにも感じる。

そして二人はニヤリと笑うと突然腕のチカラを緩めワザと白騎士に弾き飛ばされた。

「……今だ楯無っ!!」

弾き飛ばされた事を利用して発生した霧の外に二人が飛び出した瞬間重勝が楯無に合図を出し、楯無は自身が身に纏う全身装甲型の霊装——【霧纏の淑女】に全身全霊の魔力を流し込み淡く発光させ——

「おねーさんの熱き想いをくらいなさい! 《清き熱情（クリア・パッション）》!!」

楯無が伐刀絶技の名を言い放った瞬間に霧に包まれた空間の温度が一気に急上昇して大爆発が発生した、【水蒸気爆発】という現象はご存知だろうか? 水は熱せられて水蒸気となった場合に体積が約千七百倍となる為多量の水と高温の熱源が接触した瞬間水の蒸発による体積の増大が発生してそれが爆発となるという現象だ。

楯無の伐刀絶技【清き熱情】は周囲の空間の水素に魔力を流し込み温度を露点温度ま

で下げ霧を発生させて周囲を包み、頃合いを見て発生させた霧に再び魔力を流し込んで温度を急上昇させ【物理的】な水蒸気爆発を引き起こすというものである。

「壁一つ無い空の上だったから上手く行くか不安があつたけれど都合よく無風だったからねえ、手際よく事を進められたわ♪引き金が魔力でも【攻撃そのものが物理攻撃となる伐刀絶技】なら運命鉦の魔力吸収効果も意味を成さないわね♪」

そう、運命鉦が吸収するのは魔力だけなので魔力を使つていても攻撃そのものが物理攻撃ならば吸収できないのだ。

しばらくして爆風が止むと案の定水蒸気爆発に巻き込まれた白騎士は無惨な姿になつていた、頭部のフルフェイスには亀裂が入りひび割れ装甲はボロボロ、手に持つているプラズマブレードは刀身が折れて先が無く、身体全体から黒い煙を排出していて機能がほぼショートしていた、もはや戦闘の続行は不可能だろうし運命鉦の装甲も最早使い物にならないだろう……。

この時点でミツシヨクリアーの筈なのだが……これで終わりにしてくれない悪魔がいる事を忘れてはならない……。

「よくやったぜ【刀奈】！……これで終いだっ!!」

「……へ？」

楯無の隣でいつの間にか重黒の砲剣を再顕現させていた重勝がその切っ先を見るも

無惨な姿の白騎士に向け、回転式弾倉（リボルバー）を五回転させて重力エネルギーを切っ先に収束していた。

「収束重力砲（ストライクブラスター）アアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!」

まさにOVER KILL！（汗）、無慈悲な漆黒の砲撃が哀れな白き騎士を飲み込み母なる海へと還した……。

「……………」

海が割れて天まで昇る巨大な水柱を目の当たりにして開いた口が塞がらない程唾然とする楯無、やっぱりこの男は悪魔だと彼女は思った。

天にも届きそうな水柱はやがて沈静化し広大な海に白騎士の残骸が散らばって浮かび上がった、砲撃で木っ端微塵となったようだ。

「よし、これで契約成立だな！倫理委員会の内部調査、頼んだぜ！」

白騎士の撃破を確認した重勝は砲剣を肩に担ぎ楯無に不敵な笑みを向けてそう言った。

「……ふふっ、任せなさい！【更識楯無】の名に懸けて必ず五年前の真相を掴んでみせるわ！」

「へっ、期待してるぜ！」

自身の豊満な胸を叩いて自信満々に約束をする楯無を見て重勝は彼女になら安心し

て任せられると思った、五年前に西風を壊滅に追い遣った真の黒幕の解明を。

「……さてと、こっちはこれで一件落着だ、幸斗と姫ツチの試合はどうなっただろうな……」

重勝は広大に広がる蒼穹の大空を見上げ、今日学園トップクラスの実力者と死闘をする事となっている元教え子達の事を想って黄昏る。

——幸斗は相当ハマしなけりや問題無く勝てるだろうが……気になるのは姫ツチだな……。

重勝が心配しているのは涼花だ、当然だろう、涼花の対戦相手は刀華——重勝が破軍内で数少なく認める一流の伐刀者なのだから。

「……東堂……はああ……」

重勝は自分に刀の切っ先を向けて敵意と信念を向けてくる刀華の姿を思い浮かべて面倒くさそうに溜息を吐いた。

『二年・佐野涼花さん、三年・東堂刀華さん、試合の時間になりましたので入場して下さい』

「……………」

破軍学園の第四訓練場の赤ゲート側の控室内に騎士達に戦いの場に出るよう指示するアナウンスが響き渡る、神妙な静寂の中で携帯ゲーム機のような端末——「仮想戦術シミュレーター」を椅子に座って声一つ発さずに真剣に眺めていた戦術家の少女が端末を机の上に置いて静かに立ち上がった。

戦術家の少女——涼花は戦場に赴く戦乙女（ヴァルキリー）のような引き締まった表情をしていてまるで余裕を感じられない、無理もない、彼女がこれから相対する相手は破軍学園で二番目に強く【雷切】の二つ名で知られる実力者である東堂刀華なのだから。「……電子上の計算なんてこんなものね……いいわ、幸斗が運命を覆すように、わたしもわたしの戦術を以って運命を覆してみせる」

入場ゲートに向かいながらそう呟く涼花、彼女は懐から好物である濡れ煎餅を取り出して景気付けにそれを一口かじり、入場ゲートを潜って行った。

・・・机の上に置かれた仮想戦術シミュレーターは伐刀者のステイタスとこれまでの公式戦のデータを基に何通りも戦闘シミュレーションを行ない勝率を計算するものがある。

今、この端末の画面には上に「佐野涼花 VS 東堂刀華」と表示されており、左下には佐野涼花の勝率が表示されていた――

・・・勝率———3%と・・・。

月花の錬金術師VS雷切

十分前の幸斗と珠雫の激闘によりバトルフィールドが大破した破軍学園第四訓練場……それも経った今理事長である黒乃の手によってクレイジーダイヤモンド……もとい、修復が完了しいつでも試合をする事が可能な元の石畳のリングに直った。

次の戦いの期は……熟した。

『皆さん、長らくお待ちせしましたっ！これより本日の最注目カード、第十三試合目を開始します！』

実況解説の女子生徒の試合準備完了の放送が第四訓練場内に響き渡り、今日これまでに無いと言える割れんばかりの大歓声が沸き起こった……たつた今青ゲートから姿を現した破軍学園の英雄の登場によって。

『さあまず青ゲートから姿を見せる騎士はこの学園で知らない者などいないでしょう！我が校の生徒会長にして校内序列二位！しかし学園の誰もが口を開けばこう言います、【彼女こそ破軍学園最強の騎士だ】とっ！それは彼女が今までに出した輝かしい実績が示しています！前年度の七星剣武祭では二年生で準決勝まで駒を進めるといふ快進撃を見せ堂々のベスト4に輝き、この選抜戦でも未だに無傷の十五戦十五勝無敗！あの

【裏切り者の序列一位（エース・オブ・ビトレイアー）】風間選手や現【七星剣王】諸星選手にすら破られた事の無い不敗の伝家の宝刀が今日も金色の閃光が瞬くと共に相手を斬つて落とすのか!?!三年Bランク【雷切】東堂刀華選手ですっ!!」

相手を射貫くように鋭く、しかし奥に皆の為に必ず勝つという決意の焰を秘めた眼をした刀華が栗色の長い髪を靡かせて盤上に上がる、その眼にはいつもかけている眼鏡は無い、視力を遮断する事によつて生物の身体に流れる微細な伝達信号を感じ取る伐刀絶技【閃理眼（リバースサイト）】の精度を最大にする為・・・つまり刀華は本気なのだ、彼女の正面に見える赤ゲートの薄暗い通路を通つてたつた今現れた一人の戦術家の少女を倒す為に・・・。

『そして次に赤ゲートから姿を見せるのは相手の度肝を抜く多彩な戦術を以つて【狩人】【紅蓮の皇女】と次々に代表入り候補達を七星の頂きへの道から叩き落してきた戦術家！彼女もまた学園で注目の的となつている騎士の一人です！果たして彼女の戦術は無敵の雷切を掻い潜り、いつも口にする【最も面白い事をする者が勝つ】という思想を貫き通す事ができるのか!?!一年Eランク【月花の錬金術師】佐野涼花選手ですっ!!』

目の前で猛者の風格を漂わせて佇む刀華をその双眸に収めて盤上に上がつて来た涼花、刀華の前方約20mで立ち止まり無言で刀華を睨みつける、バトルフィールド全体の空気が礫の様に降り注いで二人の猛者の身体を震わせる、この場だけ重力が何倍にも

なったかの様に空間がビリビリする・・・今、二人の間に交わす言葉は無いしその必要は無い、あるのはただ・・・戦いのみ——

「希望（ゆめ）を創り出せ！鉄の伯爵（アイゼングラフ）!!」

「轟け！鳴神!!」

全ての無機物を鉄に変える鉄の指貫グローブが涼花の両手を覆い、黒漆の光沢を持つ鞘に収められた日本刀が刀華の左腰に据えられる・・・今、二人の少女の決意と意地を懸けた戦いが——

『それでは参りましょう！第十三試合目・・・LET'S GO AHEAD（試合開始）！』

始まった・・・。

『こ、これはどうしたことでしょうか？試合開始から既に一分が経過しているというのに未だ両者前に出ません！』

左腕に巻かれた無数の手拭いのうちの一枚に右手を添える涼花。

左腰に差してある鳴神の柄を右手で掴み抜刀の構えをとる刀華。

互いに今にも飛び出して行きそうな前傾姿勢で距離を保ったままバトルフィールドを半周、両者この一分の間一度も攻撃せず睨み合ったままである、だが観客達は全員が固唾を呑んで二人を見守り第四訓練場内はひりつくような緊張感に包まれていた、まるで嵐の前の静けさの様に……。

「……いつまでああしているつもりなんだ？そろそろ飽きてきたんだけど」

観客スタンド最上階の通路の手摺りに両手を着いて観戦する幸斗が退屈そうに呟く、彼は試合の後にここで如月兄弟と合流していたのだった。

「そう言っただけはいるが貴様も解っているのだろうか？佐野と東堂先輩は互いに七星剣武祭代表候補に名が挙がる実力者同士、しかも互いにリングの端から端まで届く攻撃手段があるのだ、両者共に相手を自分の射程内に収めているというのに迂闊な動きを見せるの

は阿呆のする事だ」

「リユウはそれだけじゃない、戦況に敏感な佐野の事だからアイツは恐らく東堂に近寄る事を拒んでいるな」

幸斗の両隣で観戦している如月兄弟が試合状況を分析する。

「・・・【雷切】ってやつを警戒してんのか？」

幸斗は自分の考えを口にした、刀華がこれまでの公式戦で雷切を抜き放った試合は一つの例外も無く彼女が勝利している、雷切はあまりにも強すぎるからだ。

腰に差した鳴神の鞘と刀身に強力な磁界を発生させてレールガンのように刀身を射出し、落雷すらも斬り裂く超雷速の一刀が敵を両断する、それはもはや人間が対処できる一撃ではない、故に必殺だ。

破軍最強の重勝も雷切から逃れる為その刃が届かぬ空へと逃れ、現七星剣王ですら終始雷切の間合いの外に身を置く事に徹した。

つまり未だ嘗て刀華の近接戦（クロスレンジ）を突破した者はいないということだ、幸斗がそう考えるのも当たり前だ。

烈は溜息を一つ吐いておもむろに答えだす。

「それもリユウの一つだが佐野にとってそれ以上の脅威は東堂の【閃理眼】だろう、あれは戦技・戦術タイプの天敵だ、自分の全ての動きが読まれているからな・・・」

烈の言う事も尤もだ、やる事が全てバレーているのなら戦術の意味はなくなる、涼花はこれだけで戦術家として潰されたも同然なのだから。

「つまりこの試合佐野は受けに徹するしかないってリュウだな、あの戦術戦術うるさい佐野が自分から不利になる距離に足を踏み入れる筈がない」

「そうだな、だが東堂先輩が動き出せば戦況は一気に動く事だろう、佐野が最初から主導権を奪われるのは明白だ」

戦術戦において生命線と断言できる主導権を涼花は最初から失っていると如月兄弟は答えた……しかし——

「涼花が不利?……プツ!ダハハハハハハッ!!」

それを聞いた幸斗は笑った。

「?……何がおかしい?まさか今の話を聞いても佐野の戦術が東堂を上回るリュウがあるとしても言うのか?」

烈は幸斗が笑うのを理解できなかった、当然だ、無敗の【雷切】に生物の動きを完全に読む【閃理眼】、戦術で刀華を破れる要素がどこにもないのだから。

首を傾げる烈を横目に幸斗は不敵の笑みをしてバトルフィールドを見据えて口を開く。

「見てみりゃ解るぜ烈先輩!……絶、さつきテメエは生徒会長さんが動けば戦況が一気

に動くつつつたな？ だけど——

——先に動くのは涼花だぜ！

幸斗は確かに断言した、この受けに徹しないといけない状況で涼花は動く……西風に常識など通用しない——

『おおつと佐野選手ここで前にでたあつ！堂々の突撃だあああああつ!!』

「なっ!?!」

「なん・・・だと!?!」

眼を見開いて驚愕する如月兄弟の声を合図に試合は動いた。

静寂は突然涼花が刀華に向かって駆け出した事により破られた。

周囲に響くどよめきの中涼花は左腕に巻かれた無数の手拭いの内一枚を外しそれをオーバースローで投げる寸前に鉄化（エンダーンアイゼン）を発動して鉄のブーメランに変える。

——このタイミングで仕掛けて来た!?

閃理眼で常に涼花の身体に流れる伝達信号（インパルス）を見ていたから【動くのは判っていた】、しかし伝達信号の流れで行動と心理状態を読んでいる事を予測する事ができても考えそのものを読み取る事はできないのでここで【動くとは予想外だった】、故に刀華は一瞬驚いてしまった。

「はあっ！」

——正直驚いたけど・・・甘い！

驚いたと言っても動きは読めている、刀華は真正面から馬鹿正直に飛来して来たブルーメランを最小限の動きで難なく躲してすかさず鳴神を抜刀、抜き放たれた刃から三日月型の雷撃が飛び涼花に迫る。

涼花は天高く跳躍する事によりそれを回避、しかし刀華の眼は涼花を捉えて離さない。

——少し早いですがこれで決まりです佐野さん、空中ではこの雷撃を躲す事などできなんでしょう!?

収め直した黒漆の鞘から再び刃が抜き放たれ雷撃が飛翔する、空気を蹴れる幸斗や空を飛べる重勝と違い涼花は空中で身動きを取るスキルなど持つていない、故に今下から飛来して来ている雷撃を躲す事など不可能、雷の刃が涼花の身体を呆気なく両断・・・するかと予想されたが雷撃が放たれる前に涼花が妙な動きをしていた。

——っ!? 鉄を放り投げて身代わりにした!?

涼花は一本の鉄棒を造りだして宙に放り投げ、放たれた雷撃は身代わりとなった鉄棒に直撃してそれが灰となって消滅した。

そして涼花は空中に跳んだまま左腕の無数の手拭いの内約半数を取り外して全てを

鉄棒に変えて――

「はあああああああつ!!」

バトルフィールド全体に散らばるように全てを投げ下ろし石畳の床に全て突き立った。

「絶影っ!」

無事バトルフィールド上に帰還した涼花が常人には認識不可能な速度で無数に突き立った棒の合間をジグザクに駆けて再び刀華に接近する。

対する刀華は涼花の動きを牽制する為に雷撃を放つ、だが――

「なっ!?!」

『な、なんと東堂選手が放った雷撃がリングに突き立つ鉄柱に吸い寄せられたあつ!』

「くっ!」

『東堂選手雷撃を乱発しますが全て佐野選手に飛んでいかずリング中に突き立った鉄柱に向かって行きます!これは一体どういう事だあつ!』

「これってどう見ても【避雷針】よね?」

青ゲート上の観客スタンドの席で観戦しているステラが微妙そうな表情をして隣にいる一輝に質問をする。

「そうだね、でも凄く単純な作戦だと思うけれどかなり効果的かもしれない、避雷針は落

雷を避ける為に設置するものだけ別になら落ちて来る雷が吸い寄せられるわけじゃなくて「雷を導く為の導雷針」だから雷の方から向かって行くみたい、だから落雷である必要は無いらしいね、避雷針が大地に蓄積された電荷を放出して電位差を緩和するから雷が誘導されるって言われているけれど詳しい原因は未だに不明らしい・・・なんにせよこれで東堂さんの遠距離戦（ロングレンジ）と中距離戦（ミドルレンジ）を封じ込めたも同然、佐野さんは遠中距離の優位性を得た事になるからこれで五分五分になったという事だね」

一輝が曖昧にそう説明をした、つまり涼花は刀華の飛び道具を封じたという事らしい、近距離戦（クロスレンジ）で勝てないのならば飛び道具を封殺して自分だけ遠距離から飛び道具で攻めればいい、実に理に適った作戦だ。

「でも五分五分になったからと言ってモリョウカが有利になったってわけじゃないでしょう?」

「もちろん、東堂さんにはまだ不敗の雷切による無敵の近接戦がある、それにステラや真田君のような大火力持ちならともかく佐野さんは遠距離戦の火力が低いから東堂さんに決定打を与えるには接近する必要がある、五分五分とは言ったけれど実質有利なのは東堂さんかな?・・・」

一輝は涼花が刀華を倒すにはやっぱり無敵の近接戦を攻略するしかないと言う、事実

今涼花は突き立った無数の鉄柱の間をジグザグに絶影で超高速移動をして刀華に近づき雷切の射程圏外ギリギリのところまで鉄の投擲槍を投げては後退してまた近づいては投擲槍を投げて後退してのヒット&アウェイを繰り返しているが刀華は余裕で対処していた。

そして今まで様子見をしていて膠着状態だった学園二位が遂に動き出した。

『東堂選手とうとう動き出しました！自ら接近し無敵の雷切で決着を着けるつもりなのでしょいか!? 佐野選手急遽方向転換をして進撃してくる東堂選手から逃走を開始します！ライトが描く光の軌跡のような二つの閃光がリング中を縦横無尽に駆けまわる！激しいデッドヒートの開戦だあああああっ!!』

《疾風迅雷（しっふうじんらい）》、電力で自らの筋肉を刺激し身体のパフォーマンスを限界まで引き上げる刀華の伐刀絶技だ、その速度はまさに電光石火と表現できる超高速であり涼花の高速移動スキル【絶影】にも引けを取らない。

二つの閃光がほぼ直角の速度で追いかけて合う、バトルフィールドの端を旋回し突き立った無数の鉄柱の間をジグザグに駆け抜けフィールドの端から端に鮮やかな放物線を描いて跳び回る・・・そんな中で刀華の閃理眼は奇妙な伝達信号を感じ取っていた。

——佐野さんがどこかで床に三回手を着いた・・・私を落とし穴か何かで罠に嵌めるつもりですね！

思い浮かぶのは選抜戦第十戦目の涼花VSステラの試合、涼花は鉄化を応用して地中深くまでを鉄に変えそれを魔力で強化した拳で砕くことによって深い「壕」を造りこれを利用した戦術でステラを出し抜いた事だ。

ここで刀華が予想した涼花の戦術は高速戦闘によって現在位置を曖昧にし罍を仕掛けた位置を刀華に誤認させて彼女を罍に誘導し嵌まったところを鉄のブーメランなどの飛び道具で狙い撃つというものである。

——確かに音速に等しいこの速度だと罍を仕掛けた位置を把握するのは至難の業……だけど佐野さん、その戦術には孔がありますよ！

刀華は見破ったと言っているかのように微笑する。

——佐野さんが落とし穴を造るには同じ場所に拳を叩きつけるといふ動作をしなければならない筈、それほどの大きな動作を私は見逃したりしません！逆にその隙を見切つて罍を回避するのと同時に貴方に接近し雷切で斬つて落とす！それで試合は終わりです!!

刀華はそう確信して不敵の笑みをする、自分が勝利するヴィジョンが見えたからだ。勝利を確信した刀華は雷光が駆けるかのように疾走する涼花のすぐ後を追つてバトルフィールド中央を駆け抜ける……その時——

——……えっ!? 足に魔力を——

しまった、その手があったか!?!?! そう思った時にはもう遅い、脚に踏ん張りを効かせて急に方向転換しようとする刀華だったが車は急には止まれないように音速に等しいこの速度でいきなり進路を変えることなどできはしない。

「っ!!?!」

戦術そのものは刀華の読み通りだった、だが罫を作成する方法が少しだけ違ったのだ。……涼花は鉄化した床を拳ではなく足を魔力強化して踏み抜いたのだ、これなら大した動作をする事もなく落とし穴を造る事ができる。

刀華は涼花が「拳を床に叩きつけるという固定概念に囚われていた」所為で文字通り墓穴を掘ってしまった、閃理眼は動きを読んで予測する事はできても未来予知ができるわけでは無い、涼花の身体に流れる伝達信号を一瞬で感じ取って行動の意味を理解できても身体がそれに間に合わない。……ここまで言えばもう分かるだろう、刀華は今涼花が仕掛けた罫にまんまと嵌まってしまったという事だ。

直径3m、深さ40cmの円形の穴に脚を捕られた刀華は身体のバランスを崩してその場に硬直し動きを止めてしまった、そして――

「はあああああつ!!」

刀華が穴に嵌まるのを見計らって涼花は振り返り体勢を崩した刀華に無数の鉄のブーメランを投げつける、しかしこの行動は刀華が予め予測していた通りだったので不

意打ちにならなかつた、刀華は身体中から放電する事によつて全てのブーメランを弾き飛ばしたのだ。

「はっ！」

すぐさま跳躍して穴から脱出する刀華、結局涼花の策は失敗に終わった——

・・・と思われたが実はこれは単なる時間稼ぎだつた、月花の錬金術師が刀華に対抗する武器を造るまでの——

「っ!? その武器は」

刀華は驚愕のあまり思わず声を出してしまった、今涼花が捻じつて棒状にした手拭い

を三枚結んで連結させて鉄化を使い造りだした武器が刀華にとって因縁深い物だったからだ。

『ああと佐野選手！東堂選手がブーメランに対処して穴から脱出している隙に一本の鉄の長槍を造りだした！槍といえば今年の七星剣武祭準決勝で東堂選手を下した現七星剣王の霊装と同じ形状の武器です！佐野選手は今年の現七星剣王と同じようにそのリーチの長さをもつて雷切を封殺するつもりなのでしょうか!?!』

涼花は造りだした長槍————昨年刀華を負かした現七星剣王の霊装と同じ種類の武器の切っ先を10m前に立つ刀華に向けて構え彼女をその視界から逃さないとしても言わんばかりに睨みつけた。

佐野涼花の体技、東堂刀華の一年間

閃理眼から齎される情報による刀華の予測を逆に利用して彼女を罠に嵌め、その隙に鉄の長槍——現七星剣王の霊装と同じ種類の武器を造りだし刀華を睨みつける涼花。

——相手の能力の裏を搔く思考にそれを怯まず実行する大胆不敵さ、そして戦術が成立するまでどんな事があっても心を乱さない冷静沈着さ……流石佐野さんですね……刀華は涼花の戦術を見切る自身があつた、しかし見事に出し抜かれてしまい少々恥ずかしく思った刀華は佐野涼花という戦術家の認識を改めた、認めよう、彼女はこの眼で捉えきれるような相手ではないと……しかし、刀華は口の端を若干吊り上げて微笑していた。

——ですがその選択は大きな間違いですよ……何故なら貴方と七星剣王とは決定的な違いがある！

『おおっと！動きが止まっていたのも束の間、東堂選手迷いなく佐野選手へと駆けだした！』

相手が昨年自分が負かされた伐刀者の霊装と同じ種類の武器を持って待ち構えているというのにそれに怯まず正面から突撃する刀華。

得物のリーチというアドバンテージを得ている涼花は雷切の射程に捉えられるより先に刀華を射程圏内に捉え、片脚を踏み出してその長いリーチを活かした突きを繰り出す。

刀華は一瞬にして身を屈めて迫る槍の真下を潜りそのまま涼花の懐に潜り込む、槍という武器はそのリーチ長さからして懐に潜り込まれると弱いという弱点があり刀華はその弱点を把握していた、故に迷わずこの避け方をして接近したのだ。

右手で鳴神の柄を掴んで抜刀の体勢に入る刀華、彼女はその刃が届く距離に涼花を捉えた瞬間に雷切で彼女の細い胴を一閃するつもりだ……だがそれをアツサリやらせる程佐野涼花という伐刀者は甘くない——

「はあっ！」

伝家の宝刀が抜かれる前に手首を翻して長槍を回す涼花、刃が付いていない柄尻の部分が弧を描いて払い上げるように刀華に迫る。

「ふっ！」

刀華はそれを横に転がる事によって余裕で回避に成功、すかさず涼花が長槍を棍のように振り回して刀華を追撃するものの刀華は軽々と回避し続け涼花を翻弄していた。

——見事な槍術ですな佐野さん、槍の主となる攻撃方法である【突き】を囿にし長い棒のような柄を棍術のように振るって【払う】……一体どれだけの武術を修めている

のかと関心しますが残念ながらその程度じゃ「七星剣王」には程遠い。

涼花の繰り出した遠心力を利用した長槍の横払いを小さくバックステップをして回避する刀華。

—— 槍の攻撃方法は「突き」と「払い」の二種類があるけれど「七星剣王」の槍術には一切「払い」が存在しない。

横払いを躲した刀華は涼花が長槍を反転させる隙を見て前に出る。

—— 「七星剣王」の「突き」は強いし速い、「払い」なんて必要ない程に・・・。けどそれだけなら私は負けたりしない、何故なら「突き」はあくまでも「点」の攻撃でしかないから見切りやすい。

手首を器用に翻して柄を回転させ向かって来る刀華に突きを放つ涼花、しかし刀華はそれを見越したかのように身体を傾け、長槍の切っ先の狙いの外に位置取って突進し続ける、このままだと涼花の突きは空を切り大きな隙ができるであろう、そうなたら雷切の絶好の的だ。

—— ……でもあの人の突きは——

「【曲がる】んでしょう？七星剣王の突きは」

そんな声を耳にした瞬間、刀華の閃理眼が視覚えがある奇妙な伝達信号を感じ取った、目の前の少女の身体から――

「――なっ!!？」

瞬間、涼花が突き放った槍の軌道が変わった。

「ぐううっ!!?」

『な、なんと?!佐野選手の渾身の突きが東堂選手の左肩を貫いたあああああつ!!東堂選手この選抜戦初のダメージ!先制したのは佐野選手だあああああつ!!』

強烈な一撃が刀華を後方に突き飛ばし観客スタンドからどよめきの声上がる、刀華は脚を踏ん張ってなんとか倒れずには済んだものの貫かれた左肩の傷口から流れ出る血を右手で押さえて20m前方にいる涼花を睨みつける、刀華の表情は激痛による苦痛よりも涼花が繰り出した槍の軌道が突然変わった事による驚愕に染まっていた。

「どうなっているの!?!...どうして佐野さんが《ほうき星》を!?!」

思わず声を荒げて思った事を口に出してしまう刀華、無理もない、今涼花がやったのは現七星剣王が使う変則体技【ほうき星】そのものだったのだから。

「...ふう、手首が痛いわ、七星剣王みたいに連発するのは無理みたいね...ま、動画を観た見様見真似の一夜漬けの特訓じゃこんなものか...」

右手首をブラブラ振って訝しそうにそう言う涼花、完璧にできなかった事に納得がない様子だ。刀華はそんな涼花の発言を聞いて驚愕の表情を更に険しくする。

———今...何て言ったの?...動画を観た見様見真似?...一夜漬け?

困惑する刀華、七星剣王の【ほうき星】とは槍を突き出す瞬間手首のスナップと肘の

角度を変えることで「槍を突き出しながら軌道を変える」変則体技だ、曲がるというのはその軌道の変化があまりにも鋭すぎるが故に受けた者には槍が曲がったと錯覚するからである。

そしてそれは傍から見たら一突きにしか見えない程の超高速変化の筈だ、実際この場で今の一撃の事象を正しく認識できた者は誰一人としていない、一般生徒達は勿論有栖院やステラや如月兄弟、幸斗や一輝でさえも「刀華が槍の突きを躲し損ねた」としか認識できていない。

涼花が口にした動画というのは恐らく七星剣王の公式戦の記録映像だろう、七星剣王が「ほうき星」を使ったところをその動画で観たのだろうが今説明した通り常人では：いや、一流の魔導騎士でさえ映像越しでほうき星の変化を認識する事は厳しい、もし涼花が言った事が事実ならば彼女は彼女は映像越しで「ほうき星」が視えていたという事になる。恐ろしい動体視力だと刀華は思った、事実涼花は「アングルブレイク」や「交叉法」などといった並外れた動体視力がなければできないような事をVSステラ戦にて披露していたがここまできたら最早並外れたでは済まないだろう。

驚愕の理由はそれだけではない、突きと同時に軌道を変え鋭すぎる所為で槍が曲がって見えるなんて芸当一夜漬けでできるものではない、「ほうき星」は現七星剣王が気が遠くなる程の果てに極めた積み重ねた努力によって成し遂げられた奇跡なのだから。

——想像を絶する程の技量がなければあの体技を身に付ける事なんてできる筈がない、況してや一夜漬けなんて・・・佐野さん、一体貴方は傭兵時代にどれだけの修練と実戦を積んできたというの？

生徒会のメンバー達は涼花達が元傭兵だという事を知っている、独自に調べたからだ。刀華は涼花が不完全とはいえ現七星剣王の体技を使用したという現実に対して涼花の過去の修練と実戦の賜物だろうと思えば彼女の・・・いや、傭兵団西風の底知れなさを感じて内心戦慄していた。

「・・・・・・・・」

再び鉄の長槍を構えて無言で刀華を睨みつける涼花、その眼（まなこ）は戦慄する刀華の姿をしつかりと捉えている、凄まじい闘気と威圧感だ、まるで蛙を睨みつける蛇のような眼光だ、刀華の額から汗が流れ出る。

——いくら探しても全く隙が見当たらない、【意識の狭間】すらも・・・七星剣王の《八方睨み》にも引けを取らない程死角が無いし、どうしようか・・・。

刀華は左肩の傷口から右手を離し凄まじい威圧感で睨みつけてきている涼花に対抗するように鋭い目線で睨み返し抜刀の構えをする、相手の過去を模索したって仕方がない、試合に勝つ事の方が重要だ。

——雷撃はリング中に突き刺さっている避雷針で封じられている、接近しようもの

なら巧みな槍術と〔偽・ほうき星（今、刀華が名付けた）〕で迎撃される、〔抜き足〕で接近しようにも意識に隙が無い・・・これは完全に戦いの主導権（イニシアチブ）を取られちゃったな・・・。

困り果てて眉を顰める刀華、誰がこんな展開を予想しただろうか？絶対無敵の雷切による無敗の近接戦（クロスレンジ）を持ち学内序列第二位で前年度の七星剣武祭ベスト4の東堂刀華がEランクでたかが〔生き物以外の触れた物を鉄に変える〕なんて程度の低い能力の伐刀者に主導権を奪われて窮地に陥るなどと。

沈黙が第四訓練場内を支配する中涼花と刀華は睨み合い、それは永遠に続くのかと思ってしまう程時間が経過したその時——

「・・・いい加減飽きたわ」

『佐野選手長い沈黙を破って動きでした！あまりに長い睨み合いに痺れを切らしたのか！？槍の切っ先を東堂選手に向けたまま突進だあっ!!』

——我慢できなくなった？違う、佐野さんは常に冷静だ、閃理眼で視たから判る。

突騎兵のように突撃して来る涼花を迎え撃つ為に身構える刀華、あまりにも凄まじい速度だったので槍の切っ先が風を突き斬り三角錐状の小規模な衝撃波が発生している・・・そして一秒も掛からず鉄の長槍が刀華を射程圏内に捉えた。

突進の勢いそのまま突き放たれた槍を刀華は左に回避しようとするが涼花は当然〔偽・

ほうき星」で槍の軌道を変えた、狙いは刀華の利き腕である右腕だ。

——・・・ここだっ!!

刀華は迫る長槍の切っ先を狙って鳴神を抜刀、銀色の刃は見事に槍の切っ先の横腹に命中し軌道を外側に逸らす事に成功した。

「やあああああああつ!!」

好機と思った刀華はそのまま抜刀した鳴神を上段に構えて大きく踏み込み若干体勢を崩した涼花の喉を目掛けて突き放ち、銀色の切っ先が彼女の喉を——

「——っ!!?」

突き穿つ寸前で刀華は突如として涼花を見失ってしまった、刀華は涼花が何をしたのかをすぐに理解した、自分の「意識の死角を突かれた」と。

脳の情報の優先度が低い「覚醒の無意識」に入る「抜き足」とは似て非なり、完全に相手の「意識の外側」に身を置いて存在を見失わせるという傭兵団西風の特特殊スキルの一つ【集中回避】。

【意識の外側】を突かれた人間は基本的にこれに対処する事はできないのだが刀華には相手の身体に流れる伝達信号を感じ取る「閃理眼」がある、意識から外れていても伝達信号が発せられる場所を感じ取ればそこに敵は必ずいる。

・・・後ろだ！刀華は踏み込んだ脚を軸にして腰を回し弧を描く軌道で振り返り様に

水平斬りを放つ態勢に入りカウンターを狙う。

「ちよつと遅いわね、生徒会長さん」

「なっ!?!」

刀華が振り返つた時には既に涼花が鉄の長槍をもつて突き放つて来ていた・・・それは傍から見たら一突きにしか見えずに三点同時に穿つ現七星剣王の《三連星（さんれんせい）》をも上回る――

――五連・・・同時突き!!?

「《流穿五芒星（ペンタルファトラスト）》っ!!」

「ぐはああっ!!」

突き放たれた五つの刃の内三つが刀華の両膝と左の上腕を刺し貫き、残り二つが右の前腕と蜂谷の右側を掠り鮮血が飛び散った。

『佐野選手の攻撃がまたしても東堂選手にクリーンヒット!! 痛烈な一撃が・・・いや、一撃にしか見えませんでしたがよく見ると東堂選手は今の一突きで五ヶ所負傷している!!? 超神速の五連突きだあああああ!!』

「くっ!!」

堪らず後方に飛び退く刀華、閃理眼で涼花の動きを察知したおかげで槍が突き刺さる寸前に反応し、右腕を下げ首を左に傾ける事によつてなんとか利き腕と頭部の負傷を軽傷にする事に成功、両脚は突き刺さった瞬間に若干後方に身を下げ事によつて負傷はしたものの機能はするくらいにはダメージを和らげる事ができたのだが――

——くっ! 左腕はもう使い物にならないか・・・左腕を狙った一撃だけ【偽・ほうき星】を使つて来たから避けきれなかった・・・。

言葉にならない程の左腕の激痛に表情を曇らせる刀華、上腕に空いた大きな傷口からの流血により緋色に染まった左腕をだらんと垂らしていて明らかに左腕はもう機能していない事が解る。

——・・・これが佐野さんの・・・風間さんの教え子の実力か・・・。

この機を逃すまいと追撃して来る少女を自分が打倒すべき黒い剣士の姿と重ねてギリツと歯を軋らせる刀華、そうだ、私はここで負ける訳にはいかない、あの学園最強の裏切り者にこの刃を届かせるまでは・・・刀華は激痛を堪え鳴神の刃を左腰の鞘に収め、抜刀体勢で迫る涼花を迎え撃った。

『これはなんと予想外な試合展開なのでしょうか!?あの【雷切】東堂刀華選手がEランクの佐野選手が振るう槍術の前に防戦一方!雷切の間合いに入る事ができずに徐々に身体中に刺突傷が付いて追い詰められて行く!東堂選手このまま今年の七星剣武祭準決勝の敗戦の二の舞となってしまうのかああああああああっ!!!』

「マジかよ、あの雷切が・・・」

「なんなの？あの一年・・・」

「俺・・・夢でも見てんのか？・・・」

「これはもしかするともしかするかも・・・」

破軍学園の英雄である刀華が主導権を奪われて劣勢となつている光景を目の当たりにして観客の生徒達が動揺の声を洩らしている・・・ここは一輝達がいる席とは反対側の位置にある赤ゲートの真上の席、そこに生徒会庶務・兎丸恋々、生徒会書記・碎城雷、そして生徒会副会長・御祓泡沫——現在入院中の生徒会会計・貴徳原カナタを除く生徒会メンバー達がこの場に集い自分達のリーダーの試合を真剣に見守つていた。

「ひええ、かいちよーがボコボコにされてる・・・」

「元傭兵団西風の『鉄の乙女（アイアンメイデン）』佐野涼花・・・よもやこれほどの腕とは・・・」

防戦一方なりリーダーの姿を目の当たりにして啞然とする恋々と碎城、やはり彼等も刀華が劣勢に陥つているのが信じられないようだ。

「アタシが試合で負けたクロガネ君やキサラギ君といい、さいじよーを熱海までブツ飛ばしたサナダ君といい、ホント今年の一年生はバケモノだらけだね、アタシ達二年生の代表候補は全滅しちやつて上級生としての面目が丸潰れだし・・・」

「うむ、まったくもつて情けない限りだ・・・」

「カナタ先輩も負けちゃったし、もしここでかいちよーまで負けちゃったr「バカな事言ってるなら少し黙ってよ恋々」・・・副かいちよー?」

刀華が負けると不安そうに恋々が口にした瞬間にこの試合が始まってから不気味なくらい真剣に無言で観戦していた泡沫が冷たい印象の低いトーンの声で恋々の発言を制した、いつも呑気でふざけている事の方が多し泡沫の印象からはかけ離れた冷たい声で言うので恋々は畏縮した。

「刀華が負ける? おかしな事を言うんだね、確かに涼花ちゃんの戦術は脅威だし体技だってあの七星剣王に引けを取らないくらい凄い・・・だけどこの一年間刀華が何もしていないでいたと思うかい?」

「それは・・・」

「ありえぬな、あの方は常に上を見続けるお方だ、去年の敗戦の経験を活かして何か対策を練っているに違いない」

「そういう事さ、何も心配する必要は無いよ、背負っているものの重みが違うんだ、刀華は必ず勝つ」

自信をもって「刀華は勝つ」と断言する泡沫、彼は刀華を信頼しきっていた、今まで培って来た絆、大勢の人達に希望を与えるという重責、そして大切な人達を想う心がある限り彼女は負けたりしないと・・・。

「そう、涼花ちゃんにも今の七星剣王にも……風間重勝にだってね……」

『佐野選手猛攻っ！流れるような槍術で東堂選手を雷切の射程圏内に入らせずに攻め立てる！ラツシユ！ラツシユ！ラツシユ！！東堂選手防ぐのが精一杯だあああああつ！！』

長槍の長いリーチを活かした鋭い突きに時折「偽・ほうき星」を織り交ぜ、懐に潜り込まれそうな躲し方をされたなら長槍を棍の様に回して「払う」ことによつて牽制する、一見すると涼花の方が圧倒的に優勢に見えるし事実先程まではその変則的な攻勢で刀華を圧倒していたのだが――

——・・・何かがおかしいわね、さつきまで生徒会長さんは重心を後ろに下げて打ち合っていたのに今は安定した・・・いや、寧ろ少々前傾姿勢になっっているわ。

再び鳴神を抜刀した刀華と打ち合いながら今の状況に違和感を感じる涼花、打ち合いで前傾姿勢という事は攻めに転じているという事だからだ。

——わたしの攻めに慣れてきたという事？・・・いや、今でもわたしが急に槍の軌道を変えれば生徒会長さんは受けに回っているわね・・・。

つまり刀華は涼花の槍術を見切ったわけではないという事だ。

涼花は突きを左に躲して自分の懐に踏み込もうとしている刀華を「偽・ほうき星」で追撃し、その際に咄嗟に受け止めてきた鳴神を大きく外側に弾き飛ばした、これで刀華に隙ができた。

——もらったわ！雷切ならともかく生徒会長さんの通常の剣速じゃこの位置からわたしの切り返しには追い付けない!!これで——

決定打が入る!・・・涼花がそう確信して再び槍を突き放とうとしたその時、外側に弾かれていた鳴神が突如雷光のような速さで切り返されて突き放たれた槍を斜めに割り込むようにして上から叩き落した。

——なっ!!?何、今の切り返しの速さ!?

ここで涼花がこの選抜戦で初めて動揺の感情を顕わにした、彼女が調べた刀華の情報

にはこのような技は無かったからだ。

「くっ、はあっ！」

涼花は叩き落された反動を利用して槍をクルツと回し左脚を軸にして一回転して即座に連撃を繰り出す。これも刀華の異常な速度の切り返しによっていなされてしまう。

——— どういう事？ ただの魔力強化じゃAランクでもない限りこの切り返しの速度は出せない筈よ。

相手の弾き返しの反動を利用した流れるような槍術で刀華を攻め立てる涼花、しかし今の刀華には簡単にあしらわれ、先程まで刀華が後退気味だったのに今は涼花の方が後退気味だ。

——— この切り返しの速さ、まるで強力な斥力で反発させているような・・・まさか!?!この感じは！

佐野涼花は常に流動的な戦場の変化に対応する為西風時代から肌で周囲の空間の変化を敏感に感じ取れるように鍛えてきている、故に察する事ができた、刀華の周囲に特殊な磁場が形成されているのを。

——— なるほど理解したわ、生徒会長さんは電磁力の引力と斥力を利用してこの異常な剣速の切り返しを繰り出しているのね。

先程泡沫が言った通り刀華はこの一年間何もしていなかったわけじゃない、今刀華が

使っている伐刀絶技は現七星剣王の「ほうき星」を攻略すべく編み出し磨き上げてきたものだ、手首にかかる負担が尋常ではない為乱発はできないものの、その稲光のような斬閃の鋭さによる切り返しは相手のリズムを狂わせる、これが刀華の新伐刀絶技の一つ《稲妻（いなずま）》である。

「・・・佐野さん、貴方には感謝します」

刀華が打ち合いをしながら悠々と涼花に話しかける。

「七星剣武祭の舞台で諸星さんと再戦する前にこの伐刀絶技が【ほうき星】に対抗できるのかを確かめる事ができたのですからっ!!」

長い打ち合いはとうとう終わりを迎えた、刀華が振るった軌跡しか見えない程の剣閃が涼花の長槍に打ち込まれて彼女を後方に大きく弾き飛ばした。

「くっ!」

バク転側転バク宙とバトルフィールドの端までアクロバティックに距離を取った涼花、雷切の射程圏外でも近接戦（クロスレンジ）は不利と悟った涼花は遠距離戦（ロングレンジ）中心の戦術に切り替えようと左腕の手拭いに右手を添える。

刀華の飛び道具はバトルフィールド中に突き刺した無数の避雷針により封じられている、最高速度も二人はほぼ同じだ、近づかなければまず涼花が負ける事はないだろう。

——・・・仕方ない、遠距離戦で牽制しながら戦術を練り直し——

涼花がそう考えた瞬間、突如左手に持った鉄の長槍と彼女の両手の鉄の指貫グローブ型の霊装【鉄の伯爵】が凄まじい【引力】によって正面に引っ張られた。

「っ!!?」

引っ張られる長槍と霊装に引かれて涼花の身体が宙に浮き上がり数十メートル前方で【鳴神を後方に引くようなジェスチャーをしている】刀華に向かって真つすぐ強制的に飛んで行く、抵抗は……できない。

——これは……【磁場を直線状に延ばして電磁力の引力で金属の物を引き寄せている】ってうちの!?

刀華が倒すべき相手は現【七星剣王】だけではない、これは大空を蹂躪する黒い剣士——学園最強の【裏切り者の序列一位】風間重勝を大空から地に引きずり墜とす為に編み出した彼女の二つ目の新伐刀絶技……その名も——

「《落雷（らくらい）》っ!!!」

涼花が刀華の領域（クロスレンジ）にダイブした瞬間に鳴神の刃が袈裟の軌道で振るわれ、涼花が持っていた長槍が柄の中央から両断されて――

「――がっ!!?」

涼花の左胸から右脇腹までにかけて鳴神の一閃が刻まれた・・・。

戦場の叫び（ウォークライ）

川のせせらぎが聴こえる程静かな水辺の森、そんな場所で大型の銃槍（ガンランス）型霊装を携えている無精髭でガタイのいい中年男性が30m前方に聳え立つ大木を獲物を狙う鷹のような鋭い双眸で睨みつけており、その大木の裏側には年齢7・8歳くらいの幼い少女が息を殺して身を潜め男の様子を窺っていた。

——…今だっ!!

男が一步前に脚を踏み出した瞬間に少女は今手に握っている鉄のロープを引く、すると男の足下の土の中から鉄の剣山が飛び出て男を襲った。

飛び出した剣山を銃槍の一突きで一瞬にして破壊した男を見た少女は大木の陰から飛び出し木の棒を能力で鉄の小槍に変えそれを持って男に襲い掛かる、大型の武装はその大きな質量と重量の為振った後の隙が大きいと考えたのだ、案の定男は突きの体勢からまだ戻っていない…しかし——

「良い判断だが——」

「うぐっ!？」

「まだまだ甘い」

なんと男は突き出した槍を地に突き刺し、それを支点にして身体を回し襲い来る少女に遠心力を利用した回し蹴りを御見舞いした為に少女は地に倒れた、奇襲失敗である。

この男は当時《罨名手（マスタートラッパー）》と謳われた傭兵団西風の隠密機動部隊総隊長《毛利彰時（もうり あきとき）》、目の前で不貞腐れ顔をして倒れている当時八歳の佐野涼花の上司である。

「悔しいわ、せっかく重勝に特訓してもらったのに隊長に届かなかった・・・」

「いや、悪くないと思うぜ、エモノの欠点を突いた理に適った策だった・・・だが俺のような一流の戦士は自分の欠点を利用して敵を罨に嵌めるなんて事を平気でやりやがるからなあ、経験と格が違い過ぎたと言う事だ、ガハハハハハッ！」

「・・・ムカつく」

自慢げにドヤ顔で高笑いをする彰時を見て涼花は拗ねてしまう、相当イラツとしたようだ・・・。

「ハハハハ・・・ところで涼花、今の奇襲何で本気で向かって来なかった？」

しばらく高笑いをしていた彰時だったが急に真剣な表情をして立ち上がる涼花に対して疑問を言う。

「・・・先の事を考えてチカラを温存したのよ、例え全力の奇襲が成功したとしてもそれで仕留めきれなかったら戦闘続行が厳しくなるからね」

涼花はパンツと身体に付着した土を手で払いながら理由を答えた、それを聞いた彰時は一回溜息を吐いて涼花の眼を見て口を開く。

「確かに戦闘のペース配分は大事だ、だがな、どんなに優れた戦術も十分なパフォーマンスを発揮できなければ成り立たないんだぜ」

「……」

押し黙る涼花、戦術は人間が伐刀者の時代より前から今まで強大な敵に立ち向かい打倒して来たチカラだ、しかしそれを成し得る身体能力と条件が揃わなければ意味がない。

「臨機応変に対応するんだ、今本気を出す時かどうか見極めて時には賭けに出る事も必要な事もある、効率を重視するのは戦術家として当然だけだよ——」

彰時は一呼吸置いて——

「——本気を出すべきだと思ったなら迷う必要は無いぜ」

チカラ強い笑みを浮かべて涼花にハッキリと助言をした。

『佐野選手起き上がったあつ！佐野選手優勢だった試合が東堂選手の素晴らしい初披露の伐刀絶技によって見事にひっくり返り、佐野選手の小さな身体に決定的な一刀が刻まれましたが致命傷ではなかった模様！痛々しく見える負傷に反して傷は浅かったのでしょうか？試合続行です!!』

刀華からの思わぬ反撃を受けて倒れてしまった涼花がよろよろと起き上がる。刀華の【落雷】で引き寄せられた涼花は刀華の一閃を持っていた長槍で受けそれが両断される瞬間に数センチズラす事によって鳴神の刃の軌道をほんの少し変えて急所を逸らしていたのだ、その証拠に数秒前まで袈裟に斬り裂かれた大きな裂傷から血液が流れ出て破軍学園の黒い女子学生服を緋色に染めていたのだが今は止まっている、間一髪だった。

「本当に見事な体捌きですね、普通は宙に浮かんだあの体勢で抵抗するのは難しい筈な

のに見事としか言いようがありません」

10 m 先で抜刀の構えをしている刀華は完全に不意を突いた筈なのにそれを受けきった涼花を称賛した。

「それはどうも」

「ですがこれで形勢は逆転しました、【落雷】は磁場の効果範囲に比例して消費魔力が大きくなる伐刀絶技ですが自由自在に磁場の形を変える事ができます、遵って貴方がリング中に設置した避雷針には影響されません、そしてこれは金属である鉄を創り出す貴方にとつて相性最悪、もう貴方の策は通用しません」

「・・・そうね・・・」

刀華の話を聞きながらおもむろに立ち上がる涼花、戦術が破られた事が流石に堪えたのか表情に影を落としてフラフラしている・・・のだが彼女は不気味な雰囲気醸し出して不機嫌そうに口を開いた。

「・・・ムカつく夢を見たわ・・・」

「・・・え？」

涼花が身体を揺らして眩いた瞬間彼女の身体中からドス黒い靄が溢れ出たので刀華は警戒する、一体これは何なのかと。

「本気を出したいなら本気を出させてあのアホヒゲ隊長が五月蠅いの、【コレ】はわたし

の戦術の矜持に反するから使いたくないっていうのに……」

——い……一体何なのこれ？魔力ではないみたいだけど……。

涼花の身体からどンドン溢れだす得体の知れない黒い靄にたじろぐ刀華、黒い靄は徐々に激しく鳴動し、そして——

「……いいわ、だったら出してあげる……わたしの……全力全開（フルパフォーマンス）をねっ!!!ハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!」

顔を上げて眼をカッ！と見開いた涼花がその小さな身体に似合わぬ雄々しい咆哮を上げた瞬間、黒い靄が爆発するかの様に流動し彼女の身体に纏わり付いたのだった。

『いいいいいいー 一体何が起きているんだああああっ!!? 突如発生した黒い何かが佐野選手に纏わり付いてしまいましたああああああああっ!! 彼女は東堂選手の一撃で暗○面に墜ちてしまったというのかああああああっ!!?』

「何だ何だ!!? 佐野の奴どうしちまったってリユウだ!」

「・・・不可解だな」

パニックに陥る実況解説の女子生徒の声が第四訓練場内に響き渡り観客達が動揺の声を上げる・・・破軍学園トップクラスの実力を持つ如月兄弟も例外ではなかった。

そんな中この場で一人だけ楽しそうにニヤけている奴がいた・・・涼花のルームメイトにして同じ元傭兵団西風の団員である幸斗だ。

「・・・へっ! 涼花の奴使う事にしたんだな! あんなに嫌がっていたってえのによ!」

「真田、貴様は知っているのか? 今佐野が起こしている現象を」

「ああ知ってるぜ、オレも使えるしな」

「ハアツ!」

「どういうリユウだ?」

「アレはな——」

「《戦場の叫び（ウォークライ）》、傭兵団西風の連隊長クラス以上の団員が本気を出した時に発する闘気さね」

「西京先生!？」

「理事長まで」

一方青ゲート上の観客スタンドの席にいる一輝達の許に寧音と黒乃がやって来た。

「西京先生に理事長先生、二人揃ってどうしたのかしら？」

「なに、用があるわけじゃない、お前達の姿が見えたから声をかけたただけだ」

有栖院の問いに黒乃が答える、二人は時間ができたのでただ試合を見物しに來ただけである。

「傭兵団西風？ どういう事なのネネ先生？」

「そのまんまの意味さ、涼ちゃんは五年前に壊滅した世界最強クラスの非合法の傭兵団【西風】の一員だったのさ」

「それも奴は【鉄の乙女】の異名を持っていた実力者だ、【戦場の叫び】が使えても不思議ではない程の・・・まあ、あの東堂が相手では本気を出さざるを得ないのも仕方がないな・・・」

「き、聞いてないわよそんなのっ!!」

——傭兵団西風・・・成程、【表】の人間である歳にしては技術も精神も卓越していると思ったけれど最初から【裏】の人間だったのね、納得したわ・・・。

疑問に答えた寧音と黒乃に逆ギレするように仰天するステラとそれを聞いて絡んだ鎖が解けたかのように納得する有栖院、そして——

——佐野さんが元傭兵・・・あの【戦場の叫び】という闘気・・・色は違うけれど、あれはまるで——

一輝はバトルフィールド上で涼花が発している黒い闘気が何かに似ていると思った、ここで彼が思い出したのは忘れもしない、あの自分と最愛にして最強のライバルの運命

を変えた一戦——ステラVS幸斗の試合で幸斗が剣圧閃光や龍殺剣（ドラゴンスレイヤー）を放つ直前に彼の腕に纏われた青い焰のような光・・・一輝の一刀修羅にも似たあの現象だった。

幸斗と涼花の関係性を思った一輝は思い切って黒乃に質問してみる事にした。

「理事長・・・もしかして真田君も・・・」

「ああ、奴も元西風だ、【子破王】の異名を持った特攻部隊のエースだったな・・・どうしてそう思った？」

「色は違いますがあの黒い焰のような現象が真田君がステラ戦の時に大技を放つ直前に腕に纏った青い焰のような現象に似ているからです、それにあれはなんだか一刀修羅の光に似ている気がします・・・理事長、もしやあの【戦場の叫び】というスキルは【生存本能（リミッター）】を外して全力で戦う】スキルじゃないんですか？」

黒鉄一輝の代名詞【一刀修羅】は人間が本能的に掛けている生存本能（リミッター）を意図的に外して形振り構わず全力で戦闘を可能にする伐刀絶技だ、それと似たような何かを涼花の【戦場の叫び】から感じた一輝は黒乃に再び質問をした、すると黒乃はしよ
うがないと言いたそうな溜息を一回吐き返答する。

「その通りだ、あのスキルはお前の一刀修羅のように身体の全てを全力で使って戦闘力を格段に上げる、当然使用者に掛かる負担も凄まじいのだがあれは一刀修羅と違って〇

N・O・Fが可能のようだ、部分的に使用する事も可能だから真田は龍殺剣などの大技を使う時一瞬だけ腕を全力強化したのだろうな・・・」

「……………」

一輝は押し黙った、【戦場の叫び】は自分が苦勞して至った伐刀絶技と似ているが性能は遥かに上だったからだ。

一刀修羅は一度使用したら途中で止める事はできない、一分間で全て使い切るのを前提とした伐刀絶技だからだ、それに引き換え【戦場の叫び】は使用中に止める事も部分的に使用する事も可能で明らかに使い勝手の良さが違う、身体のリミッターの付け外しを自由自在にするなんて芸当尋常じゃない修練が必要だろう、一体彼等は今までどんな経験を積んできているのか、一輝はそう思いを馳せた。

——うっ、なんて圧力、こうして向かい合っているだけでも身体が張り裂けそう……。

黒い焰のような鬨気を纏った涼花が刀華を睨みつけて威圧する、今刀華が感じている重圧は凄まじいものだ、会場内は冷房が利いているというのに身体中から大汗が流れ出て身に付けている下着を濡らしそれが肌に貼り付く感触が気持ち悪い。

「……わたしは非効率でつまらない戦法は嫌いなもの」

刀華を視界に捉えて語りだす涼花。

「この【戦場の叫び】は入れ切りは可能だけど身体に大きく負担が掛かり体力はガンガン消費して攻撃の反動は常人が拳銃を片手撃ちした時の衝撃並の苦痛……ハッキリ言って最悪のスキルだわ……」

涼花は愚痴のような説明をして溜息を吐き、一呼吸おいて【でも】と口を開き——
「不本意だけどわたしは本気で戦いたいと思ったの、それが必要だと感じたから……思ってしまったのなら仕方がないわ！」

「っ!!」

一歩涼花が足を踏み出すと発する鬨気が更に激しく鳴動して突風が刀華の長い髪を

弾き肌を痺れさせる、来る！そう感じた刀華は抜刀の体勢からより低く腰を落としいつでも雷切が抜き放てるよう身構えた。

「長引くと面倒だから・・・飛ばして行くわよっ!!」

涼花は速攻で行くと宣言した瞬間、なんとその場から姿を消した。

——消えた!?!・・・いや違う!左の避雷針の上だっ!!

刀華は閃理眼で近くの伝達信号が発せられる場所を特定してその場所を見上げる、彼女の左7mに突き立っている鉄柱の面積が狭い上に涼花は片足で跳び乗っていた、彼女はもう既に鉄の投擲槍を生成して刀華に向けて投げてきている。

——くっ、速い!速力だけじゃなく投力も格段に上昇しているなんて!!

投擲槍のあまりの飛来速度に躲すことができずに止むを得ず鳴神を抜刀して投擲槍を真上に弾き飛ばす刀華、その一瞬の隙を狙って涼花は鉄柱の側面を蹴り弾丸のように刀華の間合いに突攻する。

「てやつ!」

「はあっ!」

直撃弾のように手前に着地した瞬間に繰り出された拳を刀華は【稲妻】を使った超速の切り返しで迎え撃つ、火花を散らして激突を繰り返す【鉄の伯爵】と【鳴神】、超高速の打ち合いが始まった。

『おおつとここに来て再び猛ラツシユの打ち合いだあああつ!!しかし佐野選手は今度は拳、しかも両手での乱舞だから速度が段違い!果たして東堂選手の新伐刀絶技【稲妻】は打ち勝つ事ができるのか!』

打ち合いの最中、刀華は表情を歪ませる。

——速いだけじゃない、途轍もなく重い!このままじゃ押し切られる!!

刀華は仕方なく後ろに跳び退く、そこに先程上に弾き飛ばした投擲槍が落下して来た。

「はっ!」

「なっ!?!」

刀華が跳び退いて後退すると涼花は落下して来た投擲槍のところまで跳躍し上から叩きつけるように投擲槍を蹴り飛ばし刀華が跳び退いた場所の数センチ手前に突き刺さる、するとなんと突き刺さった場所の床に亀裂が入って砕けた。

——っ!?!これは、ここの石畳の床が鉄化している!?

数センチ手前にいた刀華は当然崩れた床に巻き込まれて脚を捕られ体勢を崩す。

———そういえばさっきの追走戦の時佐野さんは——

【三回】手を床に着いていた、そう思い出した時既に涼花が体勢を崩した刀華の真後ろに着地して回り込み、遠心力を利用した裏拳を繰り出して来ていた。

「ぐはっ!!」

陥没した床に脚を捕られて後ろに振り返る事ができない刀華の脇腹に涼花の裏拳がクリーンヒット、刀華は弓から放たれた矢のように吹っ飛び、軌道上に突き立っていた鉄柱を二つ折り倒して場外ギリギリの位置に落下した。

『東堂選手痛烈な一撃をもらいダウーン!!モロに入りましたが果たして立ち上がれるん「う・・・ぐっ!」即立ち上がったあああああっ!!なんとという根性なのでしょう!これも学園序列第二位の意地か!』

刀華は裏拳を受けた脇腹を手で押さえながら激痛による苦痛の表情をしてゆっくりと立ち上がる、だがかなり辛そうだ。

——二本肋骨が折れたみたい、くっ!これだと【雷切】を一発放つのが限界かな・・・。

刀華は鳴神の刀身を鞘に収めて自分の状態を確認する、状況は絶望的だ。

——最早四の五の言ってられない!次の一発で勝負を決める!!

脇腹の激痛を堪えて抜刀の構えを取る刀華、次の接触で雷切を抜き放ち決着を着けると決めた、どのみちもう身体はボロボロだ、外すかもう一度攻撃をまともにくらえばその瞬間刀華の敗北が確定する。

「・・・・・・・・」

近くに突き立っている鉄柱の上に再び跳び乗る涼花、彼女は刀華を一瞥すると鉄柱を蹴って別の鉄柱に向かって弾丸のように跳び、その鉄柱の上に跳び移ってはまた蹴って弾丸のような速度で他の鉄柱に跳び移るを繰り返して縦横無尽に宙を跳び回った。

『佐野選手宙を跳び空を駆け回って東堂選手を翻弄しています！速い・・・否【疾い】！佐野選手が纏った黒い闘気が漆黒の閃光となって空に蜘蛛の巣のような軌跡を描いています！！まるでこの巣に掛かった手負いの獲物を仕留めると言っているかのようだあああああっ！！』

——閃理眼だけに頼ったらだめ、周囲に意識を張り巡らせて佐野さんの意識を読まない。

刀華は意識をバトルフィールド上の空間にのみ集中させ耳から周囲の雑音が消える、極限の集中状態（ゾーン）に入ったのだ。

——・・・右、奥、斜め左奥、中央、左、手前、右——

鉄柱を蹴って加速し続ける涼花の速度は既に恋々の【ブラックバード】——マッハ2を上回る超音速であった、にも拘らず刀華は閃理眼から齎される伝達信号と合わせて涼花の意識を追い彼女の位置を正確に捕捉している、そして決着の時は訪れた。

「正面奥だっ!!!」

刀華は自分から見て反対側のバトルフィールド最端に涼花が跳び下りたのを感じ

取った、正面から真っ直ぐこっちに向かって来る、鳴神の柄を握る刀華の右手に緊張が走った。

「勝負っ!!!」

覚悟はできている・・・あとはこの一瞬に全てを懸けるのみだ。

抜き放たれる【雷切】、限界ギリギリの一秒間

刀華は疾風の如く宙を駆け回っていた涼花が地に降り立ったのを察知しここまで一度も抜き放っていない伝家の宝刀【雷切】を放つ為の抜刀体勢に入る、雌雄を決する時は来た。

「はっ！」

直線上にて待ち構える刀華に向けて極限まで加速した超音速を超えた神速の疾さをもつて前へと踏み出す涼花、いつの間にか鉄の投擲槍を生成していた彼女はその矢尻を殴り飛ばすようにして投擲槍を弾丸の如く前に撃ち出し先行させる。

神速の勢いで撃ち出された投擲槍の着弾地点は抜刀体勢の為後方に下げている刀華の左脚だ、だが幾ら投擲槍の弾速が速くても【涼花が投擲槍を殴り飛ばすという動作】を閃理眼で捉えていた刀華にとって狙われた左脚の位置をズラし抜刀の構えを解く事無く投擲槍をやり過ぐす事など造作もない事だ。

——構えを崩して雷切を封じた瞬間にその神速の運動エネルギーをもって私に決定打を入れるのが狙いだっただのかもしれないけれど問題無い！これだ——
終わりだ、そう思いきる前に投擲槍がコンマ数秒前まで刀華の左脚があった場所の床

に着弾し、それと同時に刀華は左脚を後ろに引つ張られたような違和感を感じ突如視線が上方に向いた。

「っ!?!」

その時刀華は思い出した、バトルフィールド全体を縦横無尽に駆け回った追走戦の時に涼花が床を鉄化させたのは三か所だったと・・・そう、涼花が狙ったのは鉄化させた最後の場所、即ち今刀華が立っている床だ、ナパーム弾の直撃にも耐え得る伐刀者専用の素材を使った石畳みの床をそれより遙かに脆い鉄床に変え、それを神速の運動エネルギーをもった投擲槍で砕きその場の地形が僅かに変わった。

刀華はそれによつてできた穴に左脚を捕られたのだ、視線が上に向いたのは左脚のみが下に下がり体勢が上に向いてしまったからだ、体勢が上に向く程この穴は深かったようだ、そして左脚のみが下に下がったという事は左半身が傾くという事・・・即ち左腰に差してある鳴神も傾き【雷切】の射線が上に向いてしまったという事だ。

閃理眼で確認してみると涼花は体勢を低くした前傾姿勢で真つ直ぐと向かつて来ているのがわかる、ここまで分かれば考えなくても彼女の狙いが理解できる、射線が上に向いた【雷切】の下を潜つて突破し決着を着けるつもりだと・・・。

——佐野さん・・・本気で【雷切】を正面から攻略するつもりなんですわ・・・確かにこの体勢で抜き放ったところでこの刃は貴方を両断する事無く空を切るでしょう

ね・・・仮に一秒でも時間があるのならば腰の鳴神を傾けて雷切の射線を調節する事ができるのですが向かって来ている佐野さんの速度を考えると間に合わないか・・・でも甘いですよ、私の間合いに入って来るなら刃が当たらなくても一切問題はないっ!!

体勢が傾いた刀華の間合いに涼花が足を踏み入れる直前に鳴神の刀身が収められた黒漆の鞘から雷光が迸る、刀華は一瞬の迷いもなく雷切を抜き放つつもりだ。

刀華の【雷切】は未だに誰一人として破られた事の無い不敗の一刀、抜き放てば必ず敵を斬って落とす無敵の伐刀絶技、それは手向かう者全てを例外無く一閃のもとに斬り捨ててきた伝家の宝刀・・・それが今――

「雷切っ!!!」

抜き放たれた。

雷光が迸り空間を白く焼き尽くす、一瞬にして解放された圧倒的熱量、雷速を超越した一閃が周囲の空間を爆砕し荒れ狂う暴風の余波が観客スタンドにまで及び第四訓練場を揺るがした。

【雷切】が無敗である理由は二つある。

一つはその剣速があまりにも速過ぎ、そしてあまりにも強すぎる為であり、雷すらも斬り裂くその一撃は最早人の身で対処できるものではないからである。

もう一つは今起きている立っている事も儘ならない程の衝撃波だ、音速を超えれば衝撃波（ソニックブーム）が発生するのは当然であり、雷速となればその威力は計り知れない、故に例えその一閃が外れようと雷速の衝撃波が間合いに入った万物を引き裂くだろう。

故に近接戦において死角無し、刀華は抜き放った一刀に手ごたえを感じなかつた、しかし彼女は確かに見た、【雷切】の下を潜るピンクブロードの髪の少女の小さな身体を白い暴風が掻き消すのを――

．．．だというのに【雷切】を振りきり大気が爆ぜた瞬間、刀華の閃理眼は異常に疾い伝達信号を感じ取った．．．彼女のすぐ後ろから――

――なっ!!!?

鳴神を振りきった体勢で刀華は首をまわし横目で後方を確認し千切れそうな程眼を見開き驚愕した。

「次に貴方は【何で．．．何で貴方がそこにいるの!!!? 佐野さんっ!!!】と言つて驚くわ」
「何で．．．何で貴方がそこにいるの!!!? 佐野さんっ!!!」

刀華の背後――バトルフィールド端ギリギリの位置に雷切の衝撃波に引き裂かれた筈の涼花がいつの間にか玩具の剣を取り出し鉄化させて生成した鉄の小太刀を両手

に一本ずつ携えてそこに存在しているのだから直前に言い放つ言葉を言い当てられても驚いている暇もないのは仕方がないだろう。

——ど、どうして……っ!!?

動揺する刀華は自分の背中を突き穿たと右の小太刀を繰り出して来きている涼花の足下を見て衝撃を受けた、彼女の足下を中心に床に蜘蛛の巣状の亀裂が入って窪みが作られ、そしてなによりも彼女の両脚を凄まじく濃度の高い黒い闘気が覆っていたからである。

よく見ると涼花が身体全体に纏っていた黒い闘気が脚以外の部位から消えているのが判る、闘気が脚に集束されているのだ。

——ま……まさか!? あり得ない!!

刹那、ガラツという【天井の一部が崩れ落ちる音】が刀華の耳に入り彼女は確信した、涼花は【雷切】の衝撃波に引き裂かれたのではなく【吹き飛ばされた】のだと。

正確に言うとうと涼花は暴風の気流に逆らわず激流に身を任せ同化するかの如く流れに乗り自らわざと吹き飛ばされたのだ、流れに逆らわなければ引き裂かれる事は無い。

だがそんな事は刀華もできるのも彼女が驚愕したのはそこではない、普通室内でそんな方法で吹き飛ばせば音速を超えた速度で壁に激突し、例えAランクの伐刀者であっても重傷は免れない、況してや平均的な魔力量でE判定の防御力しかない涼花の場合激突し

た瞬間に身体が潰れて弾け飛んでしまっただろう、なのに彼女は健在だ、しかも無傷で……。

その理由は涼花の脚を覆う集束された高濃度の黒い闘気にあった、彼女は雷切が発生させた暴風に乗って後方に吹き飛んだ瞬間〔戦場の叫び〕の闘気を両脚に集束し脚を強化して着地点の「観客スタンド二階の通路階段」を強化した足で蹴って勢いを殺さないように三角の軌道で跳び、「天井」「反対側の観客スタンド二階の通路階段」という感じで次々に強化した足で蹴りひし形を描く軌道で一瞬にして刀華の背後に回り込んだという事だった。

——天井が崩れる音は強化した足で踏み抜いたから崩落して足下の亀裂は着地した時の運動エネルギーが強すぎてできたもの……確かに全て三角跳びで受け身をとつたのなら激突の衝撃を軽減したうえでその勢いを殺さず逆に利用して超加速する事も可能……だけどいくら脚を超強化したからといって人間の反射速度でこの方法を可能にするなんて——

不可能だ、人外クラスの身体能力を持った伐刀者が地形を完全に把握して激突するタイミングと軌道を吹き飛ばす前から計算していない限り……そう、涼花は試合前……いや、対戦相手が刀華に決まった時からこれをやると決めていたのだ、彼女は数日前からこの第四訓練場内に何度も足を運んで全体を隅々まで歩き回り地形を頭の中に叩き込

んで計算し【雷切】を攻略する準備を前もってしていたという事だ。

戦いは剣を交える前から既に始まっている、佐野涼花という伐刀者はそのことをこの学園の誰よりも理解していた。

「ぐうぐうっ!!」

さつき折れた肋骨より来る想像を絶する激痛に耐え刀華は【雷切】により振りきった鳴神を【稲妻】による斥力で無理矢理後方に反発させ、身体を振じって凄まじい速度で後ろに振り返り様に迫る涼花を迎え撃つ・・・とんでもない執念だが涼花の方が一歩速かった、【雷切】の生み出した衝撃波すら利用して音速を超越した勢いで加速し突き出された切っ先は刀華の右手に握られた鳴神の柄を突き飛ばし、刀華は自分の霊装をその手より失った。

「はああああああああああああっ!!!」

鳴神を弾き飛ばした際に突き放った鉄の小太刀は砕け散ったが霊装を失った刀華に最早抵抗する術は無い、涼花はそのまま左手に持ったもう一つの小太刀の切っ先を刀華の喉に向けて突き放つ。

「……………ここで終わりだったいの? ……今年の七星剣武祭に出場できず、学園の皆の期待にも応えられず、若葉の家の子供達を悲しませて、諸星さんにリベンジできず……………風間さんに一矢報いるどころか前に立つ事すらできずに……………」

鉄の刃が迫り絶望しそうになる刀華、この時彼女の心中には昨年の七星劍武祭の敗北から今までにかけての記憶が走馬灯のように駆け巡っていた。

七星劍武祭ベスト4という実績を上げそれを祝福しながらも優勝できなかった事を微かに残念そうにする若葉の家の子供達・・・自分に期待を寄せ頼ってくれる学園の皆・・・自分の隣に立ち共に切磋琢磨してどんな困難も乗り越えてくれる生徒会の仲間達・・・そして――

『勝手に学園の期待だとか責任だとかを背負えって言われてもはつきり言って迷惑なんだけど』

『・・・・・・お前がそう言うんなら・・・悪魔でも構わねーよ・・・』

『へっ！やってみろよ【序列二位】、楽しみにしてるぜ』

『・・・・・・試合の結果に難癖付けられる筋合いねーんだけど・・・』

『・・・・・・そうかよ・・・』

自分より遥かに高い大空を飛び、ハイライトの消えた悪魔のような眼で見下ろし裏切った最強のライバルとの記憶が彼女の心の中を光の速さで駆け巡り、それが彼女の精神を奮起させる。

――そうだ、私はこんなところで負けるわけにはいかない！皆の期待に応え、風間さんの前に立つ為にもっ!!!

パキイイーーーーンッ!!何もかも出し切った刀華が全てを諦め眼を閉じた瞬間、彼女の耳にそんな硝子が割れるような音が入ってきた・・・目の前から。

「ええ?」

刀華は思わず眼を開いた、すると眼前に涼花の右拳があつたので刀華は尻餅をついてしまったのだが・・・その拳は刀華の顔面を捉える直前の位置で止まっており、その拳

を覆っていた筈の涼花の霊装【鉄の伯爵】が何故か砕け散っていた。

「……わたしもまだまだ三流ね……幾ら全力だからって魔力に余力を残さず使い切ってしまうなんて……」

涼花はそう呟いていた、よく見ると左手の鉄の伯爵も砕け両脚に纏っていた筈の黒い鬨気もきれいさっぱり消えていた……そう、涼花の魔力が枯渇したのだ。

考えてみれば涼花の魔力量判定はDランク、平凡な量しか持つて生まれてこなかった凡人なのだ、ただでさえ刀華の遠距離攻撃を封殺する為に多数の避雷針を生成してバトルフィールド全体に突き立てたり遠距離戦（ロングレンジ）で牽制する為に沢山の飛び道具を生成したりして半分以上の魔力を消費したと言うのに【戦場の叫び】なんて燃費の悪いスキルを使って長く持つ筈がない、当然の理だ。

『こ、これは一体何が起こったのでしょうか!!東堂選手の伝家の宝刀【雷切】が遂に抜き放たれ、凄まじい衝撃波が会場内を蹂躪したかと思っただらいつの間にか佐野選手が東堂選手の背後に回り込み東堂選手が鳴神を手放して床に座り込んでいました!!この状況から判断すると佐野選手は雷切を掻い潜って東堂選手の背後に回り込み彼女にカウンターを決めようと拳を繰り出したと思われませんが……しかしどういう事でしょうか？両者に霊装を失っています……』

雷切による暴風が止んで我に返った観客達が啞然として動揺している、当然だ、この

状況を作った当事者二人は体感時間的に何分にも感じたのだろうが、実際は「雷切」が抜き放たれてから僅か一秒しか経っていないという刹那の攻防だったのだから・・・。

「どうなってるの？何で雷切を放ったのにあの一年は倒れていないのよ？」

「うわっ、なんだこれ!?階段が崩壊している!？」

「うおっ!?!まぶしっ!あそこの天井穴なんか空いていたか？」

「会長、何で座り込んでいるんだ？」

ざわざわと騒ぎ立てる観客達、そんな雑音の中で涼花は前に繰り出していた右手を上
に掲げ――

「・・・降参（リザイン）するわ」と告げた・・・。

『・・・ここで佐野選手降参（リザイン）を宣言!!ハイレベルな凄まじい攻防の連続で本日の再注目カードに相応しい激熱な試合でしたが、それを征したのはやはりこの人! 我らが生徒会長【雷切】東堂刀華選手ですっ!!!佐野選手もギリギリまで喰らい付き東堂選手を追い詰めましたがやはり前年度ベスト4の壁は厚かった!!!』

勝負は決した、勝利の女神は刀華に微笑んだのだ……しかし、当の本人は涼花の突然の降参宣言で頭が混乱していて尻餅を着いたまま動揺の眼で涼花を見上げていた。

そんな刀華を涼花は不機嫌な顔をして見下ろし口を開く。

「納得いかないでしょうけど……生徒会長さん、わたしは無駄な抵抗をする程バカに成りきれないの、理解しているんでしょ？ 魔力が無い人間は幸斗の龍殺剣のような火力がなければ高ランクの伐刀者に傷一つ付ける事もできないって……」

「貴方の霊装を弾き飛ばした後の一撃で決めて丁度魔力を使い切って勝つつもりだったのだけど貴方の執念がわたしの愚策を上回った……ただそれだけの事よ、魔力が尽きた時点でわたしの負けは確定、少なくともルールに縛られた試合形式だとね……」

刀華の勝利を祝福する大歓声の中、涼花は呆然と座り込んだままの刀華に背を向け赤ゲートに向けて歩き出す。

「もう少し魔力があれば勝っていた」とか「持って生まれた才能に助けられたわね」とか見苦しい言い訳をするつもりはないわ、全部わたしが戦術家としてド三流だったのが悪いの……じゃ、七星剣武祭の代表入り目指して頑張つてね」

去り際にそう言つて振り返らずに軽く手を振りながら涼花は赤ゲートを潜つてバト

ルフィードから退場して行き、刀華はそれを呆然と見送る事しかできなかつた。

理屈は理解できる、しかしこんな勝ち方で胸を張る事などできはしない。

読み合いで負け、体技で後れを取り、拳句今まで無敗を誇っていた自慢の必殺の伐刀絶技を突破された・・・今まで自分が磨き上げてきたもの全てが敗れたと言うのに持つて生まれた魔力（さいのう）のおかげで勝てたなどと彼女のようない一流の戦士が納得できぬわけがなく、ポツカリと大きな孔が空いたような虚無感が戦いに勝利した筈の学園の英雄と呼ばれる少女の心を埋め尽くしていた。

「……ふう……」

赤ゲートを潜って退場し控室に戻った涼花は次の試合の選手が赤ゲートを潜って入場するのを見送ると気が抜けたように壁に凭れ掛った。無理もない、「戦場の叫び」は制御可能と言っても一輝の一刀修羅と同じ自分の全てを使うスキルには変わりないのだから。

「本当にド三流な選択をしたわ、不足の事態に対処する為に余力を残す事は戦術の基本なのにそれを一時的な感情に身を任せて度外視するなんて戦術家として有るまじき愚行だったわね……」

「でも後悔はしてないんだろ？」

涼花が壁に背を預けて今の試合を振り返り反省しているとそこへ通路側の扉を開いて幸斗が入室してきた、涼花が「戦場の叫び」を全力で使った反動で疲れ切っている事が分かっていた為、次の試合の観戦を続ける如月兄弟と別れて彼女を迎えに来たのである。

「ホラ肩貸してやるよ、もう出血は止まっているんだろうが斬られた事には変わりねえんだ、医務室行け」

「……ええ、お願いするわ……」

幸斗の申し出に甘えて涼花は幸斗の首の後ろから左腕をまわし彼の横に寄り掛かるようにして立ち上がり二人は医務室に向かう為に控室を退出して薄暗い通路をゆつくりと歩いて行く。

「まったく、疲弊している女の子を歩かせるなんて気が利かないわね、抱きかかえて行くって考えはなかつたのかしら、このへタレ」

「凶々しい、んな無駄口叩けるんだからこれで問題ねえぜ」

「……はあ……ホント相変わらず失礼なお馬鹿なんだから……」

他愛の無い会話をしながら通路を歩き続ける二人、その様子を見るに涼花は今回の敗戦で反省はしても落ち込んではいないようである。

「……そうね、後悔はしていないわ、少なくとも今のわたしじゃ本気を出さずして生徒会長さんの雷切を攻略する事は不可能だったでしょうからどっちにしろ負けていただろうし、寧ろ愚策でも本気を出してよかったと思っっているわ……わたしもまだまだ戦術家としてド三流だという事を実感できたのだしね」

今回の敗戦は自分を見つめ直すいい機会だったと涼花は感じており、戦術家として三流だったから負けたというその言葉の裏にはあくまでも一流の戦術家は絶対に運命に負けたりしないという持論を貫く想いもあった、当然だ、それこそ佐野涼花の絶対的価値観（アイデンティティー）なのだから。

「で？アンタはわたしと会長さんの試合を見てどう思った？まさかわたしが負けたからって怖気づいたなんて言わないでしようね？」

「んなわけねえだろ・・・寧ろワクワクしてきたぜ、七星剣武祭には生徒会長さんみてえな強え奴等がいっぱい出て来るのかってよ！」

少し意地悪そうな言い方で煽るように聞いてくる涼花に凶悪なくらい不敵な笑みでそう言い返す幸斗、想像もつかないような猛者達と戦えるのが楽しみで仕方がない、そんな顔だ。

「ワクワクしてきたってどこの戦闘民族よ・・・眩しいわ、馬鹿やつてる間に出口が見えてきたわね」

太陽光が入り込んで来る外への出口が正面に見えてきた。薄暗い通路にいる為かそれはまるで暗闇の中に光の扉が出現したかのような光景であり、彼等を明日へと導いているように見えた。

「・・・へっ、んじや行くかつ！」

未来（あす）に向けて——二人は光の扉を潜り、世界中を覆い尽くしそうな暖かい光に出迎えられるのだった。

・・・こうして学内選抜戦第十六戦目は代表入り候補の一角であった【深海の魔女】と【月花の錬金術師】が敗戦を喫するという結果に終わった。

選抜戦もいよいよ終盤に差し掛かり七星剣武祭代表入り争いはますます激しさを増す事だろう、果たして七星の頂きへの切符を掴む六人は誰になるのだろうか？

【最弱】の邂逅

『・・・そうか・・・姫ツチは負けたか・・・』

涼花VS刀華の試合終了から約一時間後、幸斗は誰も連れずに一人で学園の校舎内の廊下を生徒手帳を耳に翳し通話しながら歩いていった。

『まっ、あの東堂が相手なら順当と言ったところだろうな・・・』

「そうか？結構紙一重だったと思うぜ」

『だろーな、姫ツチの事だからたぶん【雷切】は攻略したが魔力が足りなくなつて降参したつてところだろうしな』

「・・・シゲ、お前本当に試合観に来ていなかったのか？・・・」

幸斗は通話の相手である重勝が試合を観ていないのに憶測だけで試合結果を言い当てる事に驚きを通り越して疑うように呆れる、コイツは予知能力でも持っているのかと・・・。

『ハハハハ・・・んで今姫ツチはどうしているんだ？アイツは選抜戦に腕試し目的でエントリーしていたから落ち込んだんじゃないねーと思うけど』

「涼花なら医務室の再生槽で斬られたトコ治した後には「疲れたから戻って寝るわ」つつつ

て寮に帰った」

『だろーな、姫ツチらしいぜ』

「つたく．．．シゲ、オレ達の試合を放っぽってまで何してたんだ？」

『ん？．．．ああ俺の用事な、お前更識家の当主の事覚えてるか？』

「？．．．楯姉（たてねえ）がどうしたんだ？」

『．．．覚えてたか、まあお前楯無の事姉のように慕ってたからな．．．』

重勝は懐かしそうに言う。次にどう言おうか迷っているかのように間を空けてから話を続けた。

『．．．俺の用事ってのは今日その楯無に仕事を手伝うよう頼まれてな、それでお前等にはちよつと悪いと思っただが、昔S級テロ組織の殲滅作戦に手を貸してもらった借りもあつたから仕方なく手伝っていたんだわ』

一応嘘は吐いていない、頼まれたのは会った時だが．．．。

重勝は今五年前の西風壊滅の真相を掴む為に動いている事は幸斗達には内密にしている、これは幸斗達に余計な懸念を植え付けて選抜戦に支障を出さないようにする為だ、元教え子達には選抜戦に集中してほしい、重勝はそう願っているのである。

『だから悪いな』

「別にいいけどよ．．．それならそうと言ってから行けよ」

『ん？言つてなかつたか？』

「言つてねえから！初耳だつての！……で？用事は終わったのか？」

『まーぼちぼち終わつたぜ、夜には学園に戻れると思うから心配すんなよ』

「ああ、分かつた……んじゃまた後で……楯姉によろしくな」

幸斗はそう言つて通話を切り生徒手帳を学生服の内ポケットにしまった。

「さてと、夜まで暇だな……サテイスフアクションバーでも買つてくるか……」

試合以降今日は特に用事がない幸斗はとりあえずアイスでも食うかと思ひ購買に向かう事にした。

——毎度の事だがシゲの奴いつも突拍子も無く何かをやっているんだよな……今日の事だつて朝に突然「悪りーな、今日学園外に用事があるからお前等の試合観に行けぬーや」なんて言いやがつたしよ。

幸斗はズボンの脇ポケットに両手を突っ込んで廊下を歩きながらさつきまで通話していた自分の元教官の事を想ひ悩む。いつも飄々としていて捉えどころが無く何を考えているのかよく解らない男だがいつも自分達の成長を手助けしてくれて目標を達成した時は心から祝福してくれる、鳥のように自由奔放で風のように自分達を導き、近いようでどこか遠い、そして蒼い天（そら）のように惹かれる大きな背中で大空のような強さを持った兄のような存在……しかしその眼は時々どこか遠い空を見ているように

見える、何だかいつか遠い空の彼方へと行つてしまふのではないかという印象と不安を抱いてしまう……幸斗は重勝の事を少々危なっかしく思つていた。

——シゲのやる事にとにかく言うつもりはねえが、なんかいつも誤魔化されていく気がするんだよな……。

一体いつも何をやって……そう考えたところでT字路となつてゐる場所を横切ろうとした時曲がり角から「変なもの」が現れた。

——ん？……何だコイツ？プリントの山？

天井に着きそうなくらい高く積まれた真つ白な長方形の紙の束を何者かが両手に抱えて運んでいるみたいだ。その何者かは「うん……しよ……」というキツそうなうめき声を出していて明らかに無理をしているようだ。

「あ、危なっかしいわね……」

「そうだね、手伝つてあげたほうがよさそうだ」

たつた今幸斗の反対の道から現れた男女もそれを見て不安に思い心配して声を掛けようとしている、紙の山がグラグラと揺れていて見るからに不安定なのだから当然だ、幸斗はその二人に任せておけばいいかと思いきつさきと立ち去ろうとしたのだが——

「きやああああああ！」

「うわああ!？」

「ちよつ?! んぶつ!!」

男子生徒が声をかけた瞬間に紙の山を持った人物が驚き、つまずいて前に転倒した為に正面から声をかけた男子生徒に大量の紙をぶちまけてしまい、丁度その直線上にいた幸斗も不幸な事に巻き添えをくらい紙の雪崩に飲み込まれて埋もれてしまった・・・。

「あーあ、何やつてるのよ・・・って!？」

「あわわつ!ご、ごめんなさい!前に人がいるなんて思つてなくて!」

「いや、こつちこそいきなり声をかけて脅かしてごめん——ぶつ!」

「ううつ・・・何なんだよ、気を付けろ・・・おい・・・」

「あうう、めがね・・・めがねどこお?」

紙の海から這い出た時幸斗の目に入ったのは栗色の三つ編みの女子生徒が四つん這いになりさつききの男子生徒の眼前に純白のショーツに包まれたぷりぷりした尻を突き出して艶めかしく振っている時が凍り付くような衝撃の光景だったので眼を細めた、どうやら栗毛の女子生徒が紙の山を運んでいた張本人らしく倒れた時にスカートが捲れ上がってしまったのだろう、他人が見たら間違いないくらいあらぬ誤解をしそうな絵面だ。

「ちよ、貴女!スカート!スカート捲れてる!」

「え?・・・いやあああああああつ!!」

男子生徒の連れである紅毛の女子生徒が栗毛の女子生徒に注意すると彼女は羞恥心

のあまり悲鳴を上げて慌ててスカートを元に戻した。

——・・・間抜けなうえに人騒がせな奴だなオイ、一体どこの誰・・・ん？

幸斗は栗毛の女子生徒の両腕両脚に包帯が巻かれているのに気が付いた、なんとも痛々しい姿だ。

——おいおい、こんな怪我しててあんなメチャクチャな量のプリントを運んでたのかよ・・・。

怪我人に無理させてんじゃねえよと栗毛の女子生徒に紙の山を運ぶよう指示を出した見知らぬ誰かを軽蔑する幸斗、その時男子生徒と紅毛の女子生徒が痴話喧嘩のように揉めている横で幸斗は床に転がっている丸メガネを見つけて拾い上げた、栗毛の女子生徒の近くに落ちていたところを見るとどうやらこれは彼女の物らしい。

——・・・なるほど、さっきの変態行動はこれを探してたんだな・・・。

別に初対面の男に眼前で履いているパンツを見せつける痴女じゃなかったんだなど失礼な事を思った幸斗はその栗毛の女子生徒に歩み寄って拾った眼鏡を差し出した。

「なあ、さっきからアンタが探していたのってこれだろ？」

「あ！そうです！ありがとうございます！これがないと私なんにも見えなく・・・て・・・

真田君？」

「ん？・・・生徒会長さん？」

眼鏡を受け取った女子生徒と顔を合わせてみるとその女子生徒は幸斗が……いや、破軍学園中の生徒達が良く知っている人物にして一時間前に涼花と死闘を演じた上で紙一重で勝利した学園序列二位、【雷切】東堂刀華であった……更に――

「あ、貴女はもしかして……東堂刀華さん!?!……それに――」

「あ、アンタユキトじゃないの! なんとこんなところに?」

顔を合わせて固まっている二人の顔を見て男子生徒と紅毛の女子生徒――黒鉄一輝とステラ・ヴァーミリオンが驚きのあまり声を上げていた。

「……おいおい、これってどういう顔触れなんだ?……」

なんて異色な組み合わせだと思った幸斗はそう呟いていた……。

とりあえず幸斗と一輝達は紙を運ぶのを手伝う事にした、どうやら刀華は生徒会の仕事に関する資料を生徒会室に運んでいる途中だったらしい、なんでも溜まった仕事を急いで片付ける必要があるらしく涼花との試合での負傷を再生槽でなんとか仕事ができるくらいにまで中途半端に治療し無理して仕事を強行したというこの少女を流石に放つてはおけないだろう、四人は床に散らばった資料を拾い集めてそれを四分割し全員で運ぶという順当な方法で行く事にして現在資料を抱えて生徒会室に向かっているところだ。

本当は負傷が治りきっていない刀華の分も自分が持つと一輝が申し出たのだが仕事の全てを他人に任せるのは刀華の責任感が許さないうらしく彼女は申し訳なさそうに拒否していた。

道中擦れ違う学園の生徒達が刀華に尊敬の眼差しと共に挨拶をしてきてそれを彼女は一人一人丁寧に名前を呼んで対応したり、ステラが幸斗に「来年は絶対にアタシが勝つんだから首を洗って待つてなさいよ！」と啖呵を切ってきたので幸斗が「へっ！そうはいかねえよ！次も勝つのはオレだ！」と宣言したり、一輝とステラが刀華に涼花との試合の感想を聞いて刀華が気まずそうに答えたりしながら五分程歩いた後、四人は生徒

会室の前にたどり着いた。

「ふーっ、やっと着いた、生徒会室って意外と遠いのね」

「皆さんどうもありがとうございます、ぜひ中でお茶でも飲んでいってください」

「じゃあお言葉に甘えて、ステラと真田君は？」

「アタシも、喉カラカラだもん」

「丁度暇してたからな、別にいいぜ」

「ではどうぞ中へ——ふぎゅ!!」

刀華が生徒会室の扉を開いて三人を先導しながら室内に足を踏み入れると彼女が足下に転がっていたダンベルに足をつまずかせて前のめりに転倒した、尻を上突き上げた体勢で突つ伏し再び刀華の純白のショーツが丸出しになっている。

「……スカート仕事しろよ」

「……ねえイツキ、この人のパンツに広告載せたらスポンサー料とれるんじゃない？」

「その発想はなかったよ」

純白のショーツに包まれた刀華の尻を見て三者三様の言葉を口にする幸斗達、この人はいつか自分のドジっぷりで某君と響き合うRPGのヒロインのように壁に自身の形をした壁穴を空けてしまうのではないだろうか……。

「あいたた……もーなんな——な、何これええええええええええつ!!?」

刀華が起き上がって改めて生徒会室内を見た瞬間、甲高い彼女の悲鳴が室内に鳴り響いた。本棚という本棚から本が、引き出しという引き出しから雑貨を、とにかく室内の物という物が無差別無秩序に散乱していて散らかし放題散らかっていたからだ。

「まるでゴミ屋敷だな、テレビで見た事があるぜ……」

身も蓋も無い事を呟く幸斗、室内には現在入院中のカナタを除いて生徒会メンバー全員が集まっており、書記である碎城は議事録をまとめたりして真面目に仕事をしているのだが、副会長である泡沫がテレビゲームに興じていて仕事をサボり、その隣でランニングシャツとショーツ姿の庶務・恋々がゲーム画面を眺めながらエキスパンダーで筋トレをしてこちらも仕事をサボっていた。

「あれ〜？かいちよー帰ってきたんだー、おかえりー」

「あはは☆刀華はドジだなあ、また転んだのかい？」

室内を散らかした張本人である二人がなんの悪気も無しに気さくに入り口の前で固まる刀華に声をかけてきた、その瞬間に刀華の奥底でわなわなと煮え滾って来た何かが発射された。

「……黒鉄さん、ステラさん、真田君……ちよつとだけ外で待っていてくれませんか……」

笑顔が怖い（汗）、有無を言わさぬ圧力で幸斗達を廊下へと追いやり、ゆらりとアン

デットののように扉を閉めると一瞬の静寂が過ぎると共に耳が割れそうになる怒声と地獄の奥底に響くような悲鳴による協奏曲（コンチェルト）が周辺区域を蹂躪した、薩州弁のような言葉が聴こえてきたような気がしたがあまりにも耳に響く怒声だったので三人は耳を塞がざるをえなかった。

やがて納まると代わりにドタバタするような擬音が聴こえてくる、刀華（オカン）監修の下室内を片付け始めたようだ……。

「……なんつつうキイーキイー声だ……ガラスを鉤爪で思いつきり引つ掻いている音みてえ……」

「くく……鼓膜が破れるかと思ったわ……」

「ははは……ちよつと驚いたね……」

怒声が止むのを見計らつて耳を開放する幸斗達、刀華の怒声に相当堪えたようでありキーンと耳鳴りがしている。

ドタバタ音はしばらく続きそうであり、すぐには入らせてくれそうにないので三人は仕方なく少し話をしながら待つ事にした。

「……それにしてもアンタ等とここで会うとは思つてなかつたぜ」

「それはこつちのセリフよ、リヨウカはどうしたのよ？ 十文字以内で簡潔に答えなさい」
「ステラ、それはちよつと横暴なんじゃない？」

「部屋に帰って寝た」

「本当に十文字以内で答えたよこの人!？」

ステラの先制がピッチャー返しのように返され一輝のツツコミが冴えわたったところで話が止まる、話題が尽きたのかそれとも何から話せばいいのか分からないのか……恐らく後者だろう、今日の試合で幸斗は一輝の妹である珠雫を下している、しかも先月そこにいる彼の恋人を16・8PJのオーバークイルで叩き潰し二人で誓い合った約束を水泡に帰させた張本人でもある、基本自分と仲間を含めた知り合い以外の心境なんてどうでもよく思っていて空気を読まない幸斗だがむやみに理由も無く相手を無下にする発言をするようなクズではない、今この二人に何かを言ったところで気分を悪くするだけだろうと思つてこれ以上口を開こうと思わなかつた幸斗だつたが――

「……真田君、今日の試合凄かつたね、あのリミッターはいつの頃から着けているんだい?？」

そんな考えを知つてか知らずか一輝が今日の試合について切り出してきた、何言つてんだコイツと思つた幸斗は溜息を吐いて質問を質問で返す。

「……黒鉄……お前オレの事良く思つてねえんじやないのか? オレは今日お前の妹をブツ飛ばした男だぜ?」

「【一輝】でいいよ……試合に関しては勝負なんだ、珠雫は自分の全てを出し切つて立

派に戦った、君はそれを真つ向から受けて立ち存分に応えてくれた、僕にとつてはそれが全てだよ、妹の想いを受けきつてくれた事に感謝こそすれ、恨むなんて事しないさ、だから君が僕に気を遣う必要はないよ」

少々気まずそうにしている幸斗の眼を見て真つ直ぐと答える一輝、これは彼の偽る事の無い本心だ、そんな想いを感じて受け取った幸斗は「ならいいか」と現金な事を思い気軽になって返した。

「そうか……ならオレの事も【幸斗】って気安く名前で呼んでくれて構わねえよ、ヴァーミリオンもな」

「うん、わかったよ幸斗君、改めてよろしくね」

「アタシも【ステラ】で構わないわ、リョウカにもそう伝えときなさいよ！来年はアタシが絶対に勝つんだからね！」

「それさつきも聞いたぜ……でも何度でも言うが何度だつてオレが勝つ！」

「いいえ、絶対にアタシが勝つわ!!」

「いやオレがっ!!」

「ははは……」

友好を築く筈が何故か幸斗とステラの意地の張り合いになってしまった事に苦笑いをする一輝、だが試合で負ける気はないのは一輝だつて同じだから仕方がない。

の先、魔導騎士の世界にどのような未来を齎すのか、今はまだわからないのであった。なんにせよこれで幸斗と一輝——二人の【最弱】が邂逅を果たした。この二人がこ

強さの源泉と自分だけの剣

ミロン、ミロンと蝉が鳴く、緑生い茂る自然を背景に間に仕切られたネットを挟んで鬼と妃竜は今再び対峙し、激突しようとしていた。

「まさかこんなところでアンタにリベンジできるなんてね・・・これも運命の悪戯という奴かしら」

余りある強大な魔力が身体中から溢れ出し焰となって天へと昇る、目の前の相手を高き真紅の瞳で見据え再戦に燃えるは「紅蓮の皇女」ステラ・ヴァーミリオン。

「・・・へっ！運命なんかにおレの道を決められて堪るかよ、これは必然だぜ、意志という名のな！」

大気を震わせるような凄まじい鬨気を発し大地が悲鳴を上げる、その威圧まさに鬼の如し、紅蓮の皇女に相對するは「殲滅鬼（デストラクター）二真田幸斗。

学内選抜戦では鬼に軍配が上がった、しかし男子三日会わざれば括目して見よという言葉があるように、一月経てば前に進み続ける者達は見違える程変わるものだ、今の彼等が激突すれば勝利の行方は判らないだろう・・・。

「フフツ、それもそうね・・・それじゃあそろそろ・・・」

「ああ・・・始めるとしようぜ！」

斯くして鬼と妃竜は一月の時を得て再び激突するのだった――

バドミントンで・・・。

「いくわよユキトツ！はあっ!!」

シャトルを頭上に放り投げてトスを上げたステラが気合いと共にサーブを打った。

バドミントンという球技は魔力の無い非伐刀者でも時速400kmを大きく超える速度で飛び交うシャトルを打ち合うという超高速の世界だ、世界最高峰の魔力で身体強

化した臂力をもって打ち出されたシャトルの速度と球威は想像を絶するものであり音の壁を易々と超越して行く。その一打まさにレーザービームの如し、常人がこれを受けたとすればただでは済まないだろう・・・そう、常人ならば。

「ドラアッ!!」

ステラと相對している真田幸斗という男は常人という枠組みには嵌まらない、彼はステラが放ったレーザーサーブを球威を上乗せするようにして打ち返した。

「っ!?アタシのサーブを簡単に打ち返すなんてやるわねっ!」

自身満々で放ったサーブがアツサリ破られた事に驚くステラ、更に速度と球威が増したシャトルが大気を貫き超高速で返って来て、それを彼女は更に球威を上乗せして打ち返した。

「そう言うテメエこそオレが正面返しして打ち難くした球を器用に打ってんじやねえかっ!」

幸斗がそれを更に球威を上乗せして打ち返す。

「ハアッ!」

「オラアッ!」

「タアッ!」

「ハッ!」

時速1000kmを優に超えた球速で白熱したラリーを展開する幸斗とステラ、二人の人知を超えた臂力で振るわれるラケットは衝撃波を発生させて周囲の小物を吹き飛ばし、超高速で宙を翔けるシャトルはもはや常人の目にその姿を捉える事は適わない光の軌跡となっていた。

「オリヤアアツ!!」

「チツ!」

「貰ったあああつ!!!」

ステラは幸斗がラケットを引いたところを見切つてシャトルを打ち込み、それによつてタイミングを見余つてしまった幸斗は大きくロブを上げてしまい、好機と思つたステラはその強靱な脚力をもつて跳び上がり、地上約20m程上がったシャトルを空中でラケットをチカラいっぱい大きく振り下ろして叩き落とす。

「ダ〇クスマー………ッシュ!!!」

ステラは自分が日本に来てから読んでハマつた某テニス漫画の技の名前を叫んでいるが、それと共に急角度で下に打ち出されたシャトルは炎を纏いフェニックスと化したのでもはや別の何かである。

何はともあれ炎熱纏いしフェニックスと化したシャトルは音と大気を突き破る超高速と球威をもつて流星の如く地上の幸斗に襲い掛かつて行く。

「はあああああああつ!!」

幸斗はこれを迎え撃たんと左半身を後方に下げて腰を落とし、左手に持ったラケットを上段に引いて構え、気合いを入れて灼熱のような朱い闘気を発する、そして・・・流星のフェニックスと激突した。

「うおおおおおおおつ!!」

人知を超越した腕力をもって振るわれたラケットはフェニックスの頭部を捉えた、想像を絶する威力の衝撃がラケットを通して幸斗の身体を震わせる。

「くっ!」

余りにも凄まじい衝撃に幸斗は苦悶の表情を浮かべた、素の臂力こそ幸斗の方が上だが20m上空からのスマッシュという位置エネルギーを得たシャトルの球威は凄まじいものだ、幸斗のラケットが徐々にフェニックスに押されて後方に押し込まれて行く・・・しかし——

「負けるもんか・・・真の漢はこんなもん—— 気合いでブツ飛ばすんだよおおおとおおつ!!」

幸斗は負けじとフェニックスを押し返す、全身全霊全力全開の気合いと根性を以つて、その姿はまさしく・・・闘魂!

「うおおおおおおおつ!!波〇球っ!!」

そしてフェニックスは敗れた、太陽よりも熱い気合いと情熱がシャトルを跳ね返し、炎の塊となつて一直線に大空より舞い降りて来るステラを襲う。

「ちよつ!?嘘でしょおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

炎の塊はステラに抵抗すら許さず彼女を吹き飛ばし弾丸すら超越する速度をもつて後方に存在する森を貫き大地を抉つて全てを灰塵と化した。

「オレの波○球は100008式まである!」

ステラが頭から地に埋もれて勝負が決した事を確認した幸斗はドヤ顔でネタを言い放つた。炎の塊が通つた跡は何も残っていない、地平線の彼方まで半月状に地が抉れて森の一部に一直線状の道が開通したのだった。

幸斗と一輝が知り合って打ち解けた後、彼等は突貫で片付けられた（脇にあつたクローゼットが異様に膨らんでいたが、そんなものは知らん管轄外だと言わんばかりに無視した）生徒会室に招き入れられ、そこで碎城が刀華が仕事の助っ人を連れて来てくれたと勘違いをしたのが切っ掛けで刀華はその仕事の概要について幸斗達に話した。

『先日新宮寺理事長から生徒会に頼み事がありました、七星剣武祭の前にもいつも代表選手の強化合宿を行っている合宿施設が奥多摩にあるのですが、最近そこに不審者が出たそうなので一応生徒会のほうで安全確認をできてほしいと頼まれました、合宿所近辺は数日前に私が見て周ったので問題ありません、でも合宿所の敷地には高い山や広い森もあつて、貴徳原さんが入院中で人員不足の生徒会だけでは恥ずかしい事に人手が足りなくて……』

このように説明した後刀華は申し訳なきように手伝つてほしいと幸斗達に頼んだ。

そこで一輝がその不審者とは何なのかと質問をしたのだが――

『それは……なんでも体長四メートルくらいの巨人みたいで……』

『はあっ!?!』

『きよ、巨人!?!』

『巨人ってあれか? 【駆逐してやる!】 ってやつか?』

『う、うん・・・たぶんその巨人で合っていると思います・・・』

『ね、ねえ、巨人って、それ本当なの!?!』

『随分と食いつくねステラ』

『だ、だつて巨人よ! 未確認生物よ! ロマンじゃない!!』

『へえ、ステラちゃんはそういうの好きなんだ?』

『川〇浩探検隊のDVDで日本語を覚えてくくらい大好きよ!』

『ぶつ飛んだところから日本に入って来てんだな、おい』

『それ殆どやら s 』副会長、それ以上言ったら何されるかわかりませんぞ』

『ねえねえイツキ! トーカさん達も困ってるみたいだしアタシ達が協力しましょうよ!』

ユキトもどうせヒマしてたんではよ? アタシ巨人に会いたい!』

・・・とまあこんなやり取りがあつて幸斗達三人はその週の日曜日である現在、カナタを欠いた生徒会メンバーと共に碎城の運転するバンに乗つて奥多摩の山奥にある破軍学園の合宿所にやつて来ていたのである。

緑溢れる森林に高々と聳え立つ山々、そして・・・西の方角に半円状の形に挟れて地平線の彼方まで延びた一本の道・・・。

「真田君・・・先日の試合の時もリミッターを外した時に放つた蹴りの蹴圧で学園より2km先にある高台を崩落させたと理事長が頭を抱えていましたが、まさか少しスポーツ

をただけで森を破壊するなんて・・・貴方は少し自重というものを覚えた方がいいですよ」

「・・・はい、ごめんなさい・・・」

「ステラさんも無闇やたらと能力を使わないでください、事前に能力の学園敷地外使用許可を貰ってきているとはいえ緊急時と戦闘以外で能力を使用するのは感心しませんよ」

「・・・はい、仰る通りです、すいませんでした・・・」

バドミントンで遊んで周囲に甚大な被害を齎した幸斗とステラは合宿所の側にあるキャンプ場のジャリジャリした砂地の上に正座して刀華（オカン）のお説教を受けていた。毎度毎度戦う度に環境破壊をする幸斗、気に入らない事がある度にキレて周囲を放火するステラ、二人はこれに懲りて少しは自重してくれればいいのだが・・・恐らく無理であろう・・・。

「分かればよろしい！・・・さあ、合宿場の広大な敷地を歩き回る為にもまずはお昼を作りますよ」

説教が終わると刀華の呼びかけでここにいる全員が協力して昼食であるカレー作りを開始した。

長期任務で人里が無い地域に赴きサバイバル活動をした経験がある元傭兵の幸斗は

狩りや釣りなどの自給自足はお手の物である：：しかし、彼は料理などしなくても「焼けば何でも食える」という困った思考を持つてしまっていてできる料理は「丸焼き」だけである・・・なので刀華が幸斗に与えた役割は釜の火が消えないように薪を運んで来て釜の火にそれを焼べ続ける事であった。

「オーライ、オーライ、オーライ——」

恋々の先導に従つて幸斗は膨大な量の薪を上担ぎ上げて歩いて行く、そこに積み上げられた無数の薪の高さは幸斗の背丈の数倍はあり重量にすれば数乗はあるであろう、ハッキリ言つて釜に使う薪の量ではない、木の家一つ分の材料を丸ごと持つて来たようなものである。

「はいいサナダ君真つ直ぐ真つ直ぐー、五歩進んだら止まつて下ろしてー」

「ういーつす」

「・・・」

尋常じゃない量の薪を釜の隣にドサドサと下ろして山を作る幸斗を見て釜の隣で玉ねぎを切つていたステラは口をパクパクさせて啞然としていた、彼女も腕力には自信があるのだが家一軒分の重量を軽々と運んで来れるのかというところと正直言つて難しいだろう、それを汗一つ流さずに余裕で運ぶ幸斗にステラはまだまだ大きな差を感じた。

——— 一体何をやったらF———なんてカス魔力でこんな馬鹿力になるっていうの

よ・・・。

正確には魔力を使用しない素の膂力なのだがそれが幸斗の異常性に拍車をかけているのだから困ったものである。

一輝は仮設の水道でジャガイモの皮剥きをしていた、彼は四年も一人暮らしをしていたので一定の家事は手際よくこなす事ができる。

ジャガイモの皮を剥き終えてそれを水に浸している間に一輝は切り終えたニンジン
を皿に載せ刀華の許へと持って行くのだが、エプロン姿で手際よく調理を進めている刀
華の姿が目に入り足が止まった。

「ん？どうかしましたか？」

「あ……いや、なんでもないです……」

その場でぼーっと刀華を眺めていた一輝は気になって振り向いた刀華の声によって正気に戻った。一輝はそこで違和感を感じた、何故調理中の刀華の姿を見てその雰囲気飲まれていたのだろうか。

先日の試合で涼花と限界ギリギリの死闘を繰り広げていた彼女の闘気を見てもここまでのものは感じなかった、不思議に思ったがとりあえず一輝は持って来たニンジンと刀華に渡した。

その後刀華と少し暖かな談笑をして彼女が後は一人でできるので休んでいて下さいと微笑みながら言うのでお言葉に甘えて一足先に炊事場を抜け出したのだが――

「ふっふっふ、どうしたんだい後輩くん、刀華のおつきいお尻に見とれたのかなあ？」
「い、いえ、違いますよ！」

さつき刀華を見つめてぼーっとしていた事を飯ごうで米を炊いている泡沫に意地悪な笑みで追及されたので一輝は焦り声を荒げて弁明をする。

「そうじゃなくて……自分でもよくわからないんですが、こう、目を奪われたんですよ、東堂さんが炊事場に立つ姿に……なんていうか、そこに目を逸らしちゃいけない何かがあるように思えて」

「ふうん、一目でそれに気が付くなんて後輩くんはやっぱりただ者じゃないね」
「・・・どういうことですか？」

「あの立ち姿に見逃しちゃいけない何かを感じたんだろう？その感覚は正しいって事だよ、あの姿こそ刀華の核、彼女の強さの源泉みたいなものだからね」

「強さの源泉？」

「ああ、昔から刀華を見てきたボクはそれをよく知っている」

そして泡沫は自分達の過去を織り交せて刀華の強さの源泉について語りだした。

昔、刀華と泡沫はカナタの実家である貴徳原財団が運営している「若葉の家」という養護施設にいた。様々な事情を抱えて身寄りをなくした子供が沢山いるその施設の子供達は当時雰囲気が悪く、似たような境遇のグループを組んで些細な事で傷付け合って苦しんでいたが、そんな中で刀華は皆を笑顔にしようと頑張っていたらしい。

東堂刀華という少女は昔から人の世話を焼かずにはいられない御人好しである、親に殺されかけて人格が壊れ手に負えない程乱暴だった当時の泡沫に何度も傷付けられても絶対に彼の事を見捨てずに向き合ったらしく、その甲斐あって泡沫は人間らしい感情を取り戻せたようだ。

そんな心優しい刀華に泡沫は今でも刀華に感謝していて彼女の事が大切なのである。

ある日泡沫は刀華に「どうしてそんなに強いのか？」と尋ねた、そうしたら彼女はこ

う言つたらしい——

『私はたくさん両親に愛してもらつた、たくさんの笑顔と愛情をもらつた、その思い出は両親が亡くなつた今でも私を支えてくれているの、だから私も他の子供達を笑顔にした、みんなの支えになるような思い出を作つてあげたい、人を愛する事は両親が自分に教えてくれた大切で大好きな事だから』

この話を聞いて一輝は理解した、東堂刀華という少女の強さの源泉とは【善意】——
——自分の為ではなく第三者の為に比類無きチカラを發揮する慈愛の心であると。

「その言葉通り刀華は施設を出た今もずっと【若葉の家】のみんなに笑顔と勇気を与え続け、学園のみんなの期待に伝えてみんなを導き続けている、親なしだろうとなんだろうとすごい人間になれるんだということ身を以つて示し続けてくれている……全国でも指折りの実力派学生騎士【雷切】として活躍し続ける事だね……それを【アイツ】は……」

この時泡沫は子供のようにあどけない普段の印象からは考えられないような憎しみに満ちた歪んだ表情を一瞬だけ浮かべていた、一年前にみんなの期待を裏切つて自分の大切な刀華を完膚無きままに叩き潰した黒い剣士を思い出して。

『なんでだよっ!!?なんで大勢の人達の想いを背負つた刀華が負けて、何の覚悟も無いお前が勝っているんだ!!?答えろよ風間重勝!!』

『とんだロマンティストだな御ね、別に難しい事じゃねーだろ？ただ単純に俺が東堂より実力が上だったってだけだろうが——』

——大勢の想いを背負った奴が勝つとは限らねーんだよ——

「クソツ……」

「……どうしたんですか？」

「……いや、なんでもないよ、少しつまみ食いでもしようかなって考えていただけ」「それ、口に出して言っちゃいけない事ですよね？」

「あはは☆そうだね、後で刀華の長〜いお説教を受けるのは勘弁だから止めておくよ」

泡沫は一瞬の悪態を一輝に感づかれそうになったので適当な事を言っごまかした、泡沫にとってあの時重勝が言った言葉は刀華の強さを全否定する忌むべきものだ、みんなの期待を裏切るような奴に東堂刀華が負けるなんてあり得ない、いや、あつてはならない、故に彼は東堂刀華の凄さを語り他に知らしめる。

「後輩クン、君は強い、正直予想以上だった、ボク程度じゃ歯が立たないしカナタですら危ういと思う……だけどそんな君でも刀華には勝てない、刀華の強さは別格だ、なぜならあの子は自分が負けるということがどういふことか、どれほど多くの人間に悲しみを与えることかを知っているから、だから負けない、だから折れない、あの子と君では【背負っているモノの重み】が違うんだ」

泡沫は「背負っているモノの重み」を強調して断言する、まるで話相手にそうあるべきだと言いつけるように。

——そうだ、刀華の背負った期待と責任の大きさは生半可なモノなんかじゃない、あんな奴が言った戯言なんて気にする必要なんて無いんだ。

そして自分にも言い聞かせていた、泡沫の脳裏に過ぎるのは先月の風間重勝VS貴徳原カナタの試合でカナタが見るも無惨な姿になっても死力を尽くして立ち向かい今泡沫が言った事と同じ内容を大空から見下す重勝に言い放った時に彼が冷たく返して来た言葉だ。

『貴徳原：お前は何もわかっていねえ、友や大勢の人達のチカラになる事を躊躇わねーだ？それは自らを犠牲にしてもする事じゃねーだろ、東堂もそうだがお前等は自分の事に無頓着過ぎだ・・・第三者の為に尽くすのは結構だがそれで傷ついて死んでそういうのを悲しませたら本末転倒だろ？・・・【若葉の家】だか何だか知らねーけど背負った想いの重みで潰れちまったら意味・・・ねーだろ・・・俺、何か間違った事言ったか？』

『・・・背負う物が無い奴には負けない？・・・とんだロマンティストだな』

——・・・いつ思い出してもムカつく、刀華やカナタの事を何も知らなくせに！認めない、認めるわけにはいかない、東堂刀華が風間重勝より下だなんて現実（リアル）など周りにだって認めさせはしない、故に目の前の後輩に認識してもらおう為に強く

断言した、何も背負っていない、背負う事のできない人間は刀華には勝てないと。

「……………」

案の定一輝は泡沫の断言に応答を返さずに視線を楽しそうに料理を作る刀華に向けて思いをはせていた。

——…確かに、そういうものは僕にはない……。

泡沫の言った重みが一輝の剣には宿っていない事の事実が一輝の信念を歪ませ始める、自分の理想とする自分になる為に何があっても進み続ける意志が消えて行く、お前の軽い剣では東堂刀華を倒す事などできはしない、そんな言葉が心の中を蝕んで一輝の信念は深い闇の中に沈みかけていた。

「……」

気が付けば一輝はキャンプ場の近くにある河原の前で黄昏ていた。

【君では刀華には絶対に勝てない】、泡沫から刀華の強さについて語られそう断言した時、得体の知れない恐怖心を感じて気付かぬ内に逃げ出していたのだ。

——僕は……今まで何を思つて剣を振つていたのだろう……。

今まで積み上げてきたモノが足下から崩れ落ちるような感覚を一輝は感じていた。魔導騎士の名家に生まれながら伐刀者としての才を持たず誰からも要らない者とされてきた自分は誰の為でも無く自分が他者に認められたいが為にひたすら騎士の高みを目指してきた、他の誰でもなく自分自身の為に。

対して東堂刀華は伐刀者として優れた才を持ち、両親が亡くなり天涯孤独の身となつても他者を助け、他者を導き、大勢の人間の期待を一身に背負う事ができる。

自分と彼女はあまりにも違う、違い過ぎる。

才能が違う、精神が違う、信頼が違う、秘めた想いが違う……自分の持つているモノは彼女の背負っているモノと比べたらあまりにも矮小だ。

——理事長が僕を学園から卒業させてくれる条件は七星剣武祭で優勝する事だ、目指さなければならぬのが頂点である限り出場する全ての学生騎士を倒さなければな

らない、例え東堂さんだろうと……でも……。

……勝てる気がしない、一輝の心は今比べる者の大きさに臆して弱気になっていた……その時、一輝の背後から声が掛かった。

「こんなところに居やがったか、メシできたぞ一輝」

「……幸斗君……」

「……何だよ辛気臭い面しやがって、ステラと喧嘩でもしたか？」

やって来たのはカレーができて一輝を呼びに行かされた幸斗だった、声に振り向いた一輝の表情がムカつくぐらい暗かったので幸斗はそう言つて一輝の横に立った。

「はは、違うよ、ちよつと考え事をしていてね……」

「考え事？」

「うん……何もない人間が幾ら頑張つても大きなモノを持った人の為に剣を振るう人は敵わないのかな……」

一輝は思わず悩んでいる事を洩らす、自分と同じで魔力に恵まれず我武者羅に進んで来た幸斗が相手だったから口に出してしまったのだろう。

「……幸斗君……君はどんな事を考えて剣を振っているの？よかつたら聞かせてくれないかな？……」

だから聞きたくなつたのかもしれない、自分と同じで才能に恵まれず、特に周りから

期待を寄せられているわけでもないにも拘らず確固たる意志を以って剣を振るい前に突き進み続けるこの少年の強さの源泉は何なのかを。

「・・・話してやってもかまわねえが、その前に聞きてえ事がある——

——一輝、お前自分の剣を何だと思つてやがる？」

幸斗は川に向けていた視線を隣に立つ一輝の眼に真っ直ぐ向けてそう言った、唐突に返された意味深な質問返しに一輝は困惑する。

「……ごめん、質問の意味がよくわからないんだけど……」

あまりに意味不明な質問だったので一輝はそう返すしかなかった、それはそうだが、騎士の高みを目指す為、夢を掴み取る為、大切な人を護る為など剣を握る理由は多々あれど剣そのものは相手を斬り討ち倒す武器……剣は剣としか言えないだろうから。

そんな一輝の内心を察してか幸斗は流れに任せるかのようにそのまま語りだした。

「……一輝、オレが五年前に壊滅した傭兵団【西風】の団員だつて事は知っていたな？」
「……うん、先日の試合の時に観客席で理事長から教えてもらったよ」

「なら話は早えな……十一年前、オレの住んでいた町がテロリストによつて焼き討ちにあつてオレは両親を亡くし、【傭兵王】の異名を持つ西風の団長に拾われて西風の団員になつた」

幸斗が語りだしたのは自分の過去にあつた出来事についてだつた。

「オレはこの通り伐刀者の才能が無えし、それどころか頭もバカだし、剣も銃もからつきし、機械関係もチンプンカンプン、雑用だつてまともにもできねえ能無しだつた……壊滅した五年前こそ全員が全員を信頼し合う絆で結ばれた最高の団だつた西風もその頃は団員の半分以上が学園のクソ共のような才能至上主義の脳ミソな奴等でな、ソイツ等に無能なオレはいつも馬鹿にされていたんだ……オレはそれがすげえ悔しくてよ、負けたくなくて意地になつてソイツ等に言つたんだ、【オレの剣は運命を砕く剣だつ！

持つて生まれた魔力なんかには負けねえ！テメエ等今に見てやがれ！いつか吠え面搔かせてやるからな!!」ってな、当然ソイツ等はその場で大爆笑してオレを嘲笑ったがオレは我武者羅になって剣を毎日振り続け、シゲがつけてくれた無茶苦茶キツイ特訓の甲斐もあってオレはなんとか実戦に出れるようになったんだ」

幸斗が語る過去の話を一輝は一言も発さず真剣に聞いて思いを馳せた、やはり自分と似ていると。

一輝も伐刀者としての才能が無くて実家の人間に厄介者呼ばわりされ自分の味方は妹の珠雫ぐらいしかおらず自分が無能なのが悔しくて必死に剣を振るい魔導騎士を指しているのだ、一輝は幸斗の過去に共感を覚えたがそれがどのようにして彼の強さに繋がるのだろうかと思ひ、語り続ける幸斗の話に耳を傾け続けた。

「そしてオレは七歳になった時初めて実戦で戦闘をする事になった、小規模テロ組織の殲滅作戦でな、敵の数は数十人くらいで伐刀者の数はそれほど多くなかったから西風にとつて大した相手じゃなかった、だから作戦の実動部隊はオレと団長を含めた数十人の少数で決行する事に決めて敵のアジトへと突入したんだ・・・ところが敵には隠し玉がいた、《巨岩（きよがん）》のタイタスつつう身体を硬てえ岩体に変える能力を持ったCランク伐刀者がいやがったんだ・・・アジト内部を知り尽くしている敵は上手く地形や罠を利用してオレ達を分断して各個撃破する策を使い、オレは運悪くタイタスの野郎と

タイムンをする事になっちまったんだ」

幸斗は休む間も無く語り続ける。

「団長や今のオレならタイムタスは敵にもならねえザコなんだがその時のオレは普通の岩を欠けさせる事ぐらいしかできねえヘナチヨコだった、言うまでもなくオレはタイムタスにフルボッコにされ地に踏みつけられた、その時に野郎はこう言いやがったんだ、「わかったかガキ、これが魔力の差つてやつだ、魔力量とは運命のデカさ、テメエのカスみてえな魔力で俺に勝てるわけねえんだよ！これは運命で決まっている!!」とバカ笑いしながら、オレはその時暗くて冷てえ何かに身体が沈む感覚がした、口はふぎけんなど吼えていたけど意志が死にかけていやがったんだ、オレの剣はこの程度のもだったのかって胸糞悪い事を考えちまってな・・・それで野郎の言葉とチカラに屈しそうになつて意志が消えそうになつたその時、上の階で戦っていた団長が飛び降りて来てタイムタスに跳び蹴りをかまして壁にブツ飛ばしてオレを救ってくれた・・・一輝、その後団長はどうしたと思う？」

「いきなり質問?・・・そうだね、やっぱり状況を見てその時の幸斗君の実力じゃタイムタスを倒せないだろうと判断して代わりに戦つたんじゃ・・・」

「不正解だぜ・・・正解は「無様に倒れているオレの胸ぐらを掴み上げてオレの顔面を一発ブン殴つた」だ」

「えっ!？」

「あの時の一発は効いたぜ、【幸斗おっ！歯あ食い縛れええっ!!】と地面を転がるくらい
ブツ飛ばされたからな、それでオレは一瞬団長に幻滅されてしまったかと思っただが
その後団長は圧倒的な不敵の笑みでオレにこう言ったんだ【目は覚めたかよ幸斗、お前
自分の剣を何だと思っただけ？お前の剣は運命を砕く剣だろうが！そんな凄えモン
持つてんだ、何も恐れる必要はねえ、お前が自分が信じた意志を貫き通して戦えばこん
な能力だけの岩ヤローなんか敵じゃねえ筈だ!!】とな」

「それってさっき幸斗君自身が団のみんなに言った」

「そう、馬鹿にされたのが悔しくて意地になっただけで言っただけの戯言だ、団長はあの時陰で
聞いてやがったんだ・・・団長はオレの戯言を本気で受け止めてくれた、オレなら
タイタスをブツ倒せると信じてくれたんだ、オレは団長のその言葉で前に突き進む意志
を取り戻し、団長が後ろで見ている中全力全開でタイタスに立ち向かってポロポ
ロになりながらも野郎を倒した、そして団長はオレの頭を撫でながらこう言った、【いい
か幸斗、自分を信じろ、持って生まれた才能でもねえ、他人から背負わされた期待や責
任でもねえ、自分の信じた剣を信じろ、自分の信じた意志を信じろ、自分の信じた自分
を信じろ、必死こいて剣を振るい続けた毎日は無駄なんかじゃねえ、未来（あす）を信
じて積み重ねた【毎日のチカラ】は剣に宿ってお前の唯一無二のチカラになるんだぜ」と

な

「あ……」

剣に宿る重みは誰から背負った想いの大きさではなく自分で決めた想いの大きさ、【信じ続ける毎日の積み重ね】が真田幸斗の強さの源泉だと一輝は理解した、自分が本当に心から決めた想いならどこまでだって貫くことができる【信念】、この少年はそういう強さを持っている、考えてみれば刀華の【善意】だって人から言われたからではなく刀華自身が想いのままに選んだ道なのだ、強いに決まっている。

そして一輝自身はどうだ……実家を飛び出し、各地の剣術道場に道場破りをして周って様々な剣技を盗み、学園の講師を打倒してまで破軍学園に入学し、実家の妨害で授業を受けさせてもらえなくて留年したというのに諦めず、一刀修羅なんて使い勝手の悪い伐刀絶技を編み出してまで魔導騎士を目指し続けられるのは何故だ？自分の今までを、自分の毎日を、自分の意志を、自分の可能性を信じ続けているからではないのか？

「一輝、オレがどんな事を考えて剣を振っているのかと聞いたな？そんなの決まっているだろ、【突き進む！】それだけだぜ。オレの剣は運命を砕く剣だ、それは今でも変わらねえ、壁が立ち塞がるならブチ抜いて進む！道が無ければ自分（テメエ）で切り拓く！魂の熱風が未来（あす）へと吹き荒れる!!オレを誰だと思つてやがる!?!オレは真田幸斗だ!!運命を覆す伐刀者だ!!オレの前に立つ敵（うんめい）は例えば会長さんだろうが全国

の学生騎士だろうが全部ブツ倒すっ!!!」

燃えるような闘志を燃やした灼熱色の眼で真っ直ぐ一輝の眼を見て毅然とそう言い放つ幸斗、その火山口からマグマが噴出するような威勢に一輝は圧倒された、先程刀華の雰囲気にも飲まれた時以上だった、そして同時に思い出した、自分も自分で決めた道を信じてしっかりと進んでいたではないかと。

——ああ、僕はなんて思い違いをしていたんだ、しっかりと持っているじゃないか、【自分の可能性を信じ続ける意志】の強さを。

心を覆っていた闇に光が射して闇が消え去っていく感覚がする、背負っている重みが違うからなんだ？ 届かないのなら何が何でも届かせるだけ、そう、今までと何も変わらない、絶対に敵わないような相手に立ち向かうなんてフランクの一輝にとっては今更だろう。

【雷切】東堂刀華は確かに強い、実力も秘めた想いも……だけどその強さの源泉は結局のところ【東堂刀華だけの強さでしかない】、当然だ、刀華の通った道と想いは彼女だけのものなのだから同じ物差しで測ろうとする事自体がそもそもその間違いだったのだ。

——そう、僕は僕自身の強さと想いを……僕の最弱（さいきょう）を以っていつも通りぶつかればいい、それが僕の剣なんだから。

一輝の心にもう迷いは無かった、自分の剣は決して軽くなんかない、そう確信……い

や、そう信じる事にしたからだ。

「イツキー！ユキトー！カレー冷めちゃうわよー！早く来なさいよー！」

「ホラ、愛しの皇女サマが呼んでるぜ？さっさと行くぞ！」

「う、うん……」

あまりにも来るのが遅かったので追加で呼びに来たステラの声が聴こえて二人はキャンプ場に戻る事にした。

幸斗が前を歩き一輝がその後ろを着いて行く……一輝は幸斗の背中に大きな意志を感じてある想いを抱いていた。

——幸斗君、君は凄い騎士だ、周りが何を言おうがどんな挫折を突き付けられようとも自分だけの剣で進み続ける確固たる意志を持っている……ステラと珠雫が敵わなかったのも納得したよ、なんの才能も無くても自分が積み重ねて作り上げた自分のチカラを信じているから強いんだね……君がステラを負かして彼女との約束が破れてしまつてからというものは七星剣武祭で優勝する事だけを考えていたけれど、改めて思つたよ——

———そんな凄い君に……僕は勝ちたい！
黒鉄一輝は真田幸斗という伐刀者を今年の七星剣武祭最大のライバルだと認識した
のだった。

傭兵団西風壊滅事件の真相

幸斗達がカレーを食べている頃、重勝は先日更識楯無に依頼した「五年前の北九州市最北端の村で起きた大量虐殺事件の黒幕を探る為の国際魔導騎士連盟倫理委員会の身辺調査」の結果報告を聞く為、楯無を破軍学園第一学生寮にある自分の自室に招き入れていた。

「流石に仕事が早えーな、まだ一週間も経ってねーっていうのに呆れるぜ」

「いやーそれほどでもあるわねー、更識の仕事は迅速且つ正確さがモットーですから♪」
「だったら生徒会の仕事もこれぐらい真面目にやってくださいよね、この前虚（うつほ）さんが仕事サボった会長の分まで書類整理して「会長が真面目に仕事しない・・・」と小さく愚痴を零していましたよ」

重勝はリビングにある椅子に座り、テーブルを挟んで「出来る女」と書かれた扇子を開いて仰ぐ楯無と赤髪ショートヘアで一見「ボーイッシュな少女」と見間違う程童顔な少年と向かい合って会話していた。

「あれはサボったんじゃないやありませんー！生徒達の活気を上げる為に私が企画した学園イベントを主催していたから忙しかったんですうー！」

「〔降参無しの野球拳大会〕なんて学園イベントで開催するものじゃありませんよね!? おまけに〔優勝者には学園の好きな異性と交際する権利を与える〕なんて人権侵害にも程がありますよ!」

それだけ真面目に家の仕事を熟せるんだったら生徒会の仕事も真面目にやれと指摘する赤髪の少年に対してワザとらしく不貞腐れて言い訳をする楯無、しかし彼女が最近企画して開催したという学園イベントは学生が行うには些か破廉恥な内容の催し物だった上に優勝賞品が人としての権利から逸脱した内容だったので赤髪の少年は怒りのあまり楯無に文句を叫んだ。

話を聞いている限りでは楯無は貪狼学園の生徒会長という立場にも拘らず生徒会の仕事を定期的に放つぱり出して部下に押し付け、自分は突拍子の無い騒動を起こして毎度毎度学園中の生徒達と親睦を深めて楽しんでいるらしく、その所為で貪狼学園生徒会のメンバー達のストレスはマツハで溜まりまくっているという現状のようだったので話を聞いていた重勝は眼を細めて呆れている。

「はああく、まったく会長はいつもいつも……ごめんなさい重勝さん、久しぶりに会えたつていうのに見苦しいところを見せてしまった」

「ハハハ、なに気にすんなよ〔スバル〕、元気そう……じゃねーみてーだが昔の教え子に会えて俺は嬉しいぞ、久しぶりだな、まさかお前まで来るとは思わなかったぜ」

「っ！はいっ！僕も五年振りに尊敬する重勝さんと会えて感激しています！お久しぶりです！昔重勝さんに組んでもらった訓練メニューは一日たりとも欠かしていませんよ」

気苦労のあまりに溜息を吐き重勝に謝罪をするこの赤髪の少年の名は《美空スバル（みそら すばる）》、貪狼学園一年生で生徒会庶務の役職に就いているこの少年は幸斗と同じ元傭兵団西風【特攻部隊】の隊員だった過去を持ち、教官だった重勝の教え子の一人でもあり、重勝にキラキラした眼差しを向けて会えた事に凄く感激しているのを見ても解る通りスバルは自分の教官であった重勝の事を異常な程尊敬しているのが解る、スバルの発言を聞いて解る通り彼は幸斗にも劣らないくらい真っ直ぐな性格をしているようだ。

「へっ、眩しい眼をしやがって、お前は頭は悪いが問題ばかり起こす幸斗と違って昔から人の言う事を真面目に聞いて物事に取り組む優等生だったからなあ・・・まあ、たぶんその所為で楯無に目を付けられて捕まったんだろーけどな・・・」

「学園の旧校舎に低ランクの生徒を連れ込んで酷い事をしていた不良グループを一つ叩き潰したところを会長に目撃されてスカウトという名の脅しをされたんですけどね！」
「あー人間きが悪いわね、原則として学園敷地内では『模擬戦場などの一定の場所以外での霊装と能力の使用は禁止』なのに無断で霊装を使用していた事を黙認してあげるから

私の部下にならない？ って交渉しただけよ」

「それを脅して言うんだ（です）よ……」

「さて、それじゃ本題に入りましょうか♪」

この女サリリと流しやがったと重勝とスバルは楯無にジト目を向けるのだが彼女はそんなのお構いなしに話を進める。

先程まで不自然な笑顔を取り繕っていた楯無の表情は消えて真剣な顔付きへと変化したので重勝とスバルも同じように真剣モードになって楯無の話に耳を傾けた、これから話す内容は彼等元西風にとって自分達のリーダーを死地に追い遣り、西風を壊滅させた仇が何者なのか判明する重大な内容だ、一字一句聞き逃す訳にはいかないだろう。

「単刀直入に結論を言う」と倫理委員会は……黒よ」

楯無は正面の椅子に座る重勝の眼を真っ直ぐ見てそう断言した。

「やっぱりな……となるとあの出世欲に塗れた連中の事だ、大方世界最強を誇る西風を陥れる事によって大きな手柄を手にするつもりだったんだろうよ、その為にあの〔比翼〕が日本のどこかに現れるのを見計らってその近辺の人里の人間を暗部を使って皆殺し、んでもって情報操作で比翼に罪を被せて西風にその偽の情報を流し、俺達西風と比翼を対立させ、あわよくば同士討ちを狙った……もし比翼が俺達を撃ち洩らしたとしても自分達の不祥事だけを偽って連盟の日本支部に事の顛末を伝える事によって日本の魔

導騎士達を動かし、万全を喫した連中が港でボロボロになった俺達を一網打尽にする……大体そんなところだろ？」

「……はあ、本当に呆れた洞察力ね、倫理委員会が黒幕だつて言っただけでそこまで正確に推測するなんて、連盟の日本支部に直接出向いて侵入してまで調べて来た私の立場が無いわ……」

「れ、連盟に侵入したんですか!? データベースにハッキングを掛けたりしたんじゃないくて?」

「そんな後ろめたい記録なんて電子上には残さないわよ、腕利きのハッカーが居れば簡単に情報を抜き取られちゃうからね、倫理委員会の区画である地下十階の書斎から倫理委員会の起こした不祥事の記録が溢れる程保管されていたの、その中から見つけたのよ」

楯無は次に言おうとした倫理委員会の不祥事についての内容を重勝が推測だけで完璧に言い当てたので右掌を自分の額に押し当てて呆れた、その時に彼女は連盟に直接侵入した事を洩らしたのでスバルは驚愕した、その後楯無が言った内容が本当ならば彼女は相当優秀な諜報部員だと認識せざるを得ない、流石は対暗部の一族【更識家】だ。

「……チッ！俺達は奴等の出世欲の為にまんまと嵌められたってわけか……西風を舐めやがって……」

「重勝さん、僕、許せないよ、アイツ等の所為で団長が……重勝さんのお父さんが！」
「……ふう……まったく、裏でなにこそそこそとやってんのかと思つたら、わたし達に黙つてそんな重大な事をやっていたのね重勝」

「……つてげっ！ 姫ツチ!？」

「涼花ちゃん!?! いつの間に?」

「あら涼花ちゃん、ごきげんよう♪ 久しぶりね、元気そうだなによりだわ♪」

「お久しぶりね更識の当主サマ、そしてスバル、非常に興味深い話をしているわね、わたしも混ぜてもらおうわよ」

五年前に西風を陥れて壊滅に追い遣つた黒幕である倫理委員会に対し心の奥底から煮え繰り返るような怒りの感情を露わにする重勝とスバル、そんな時に突然室内に居ない筈の少女の声が響いたと思つたらいつの間にか重勝の隣の椅子に涼花が非常に不機嫌な顔をして座つていて濡れ煎餅をかじっていたので、重勝は内密にしていた話を聴かれたのでギョっとし、スバルは涼花が音も無くいつの間にかこの場に現れたので驚いた。

楯無だけは平静を保つて涼花が普通に入り口から入つて来たかのように微笑んで彼女と挨拶を交わしているが内心は——

——ちよっ?!? 脅かさないでよ涼花ちゃん! 何でシゲ君といい君達はこうも簡単に

私の意識の裏を突いてくるの! 私暗部の人間として自信無くしそうんだけど!!

という感じで動揺しまくっていたが、涼花はそんな楯無の心情など気にも留めず会話に混ざろうとしている、因みに彼女は今涼花の存在を認識した瞬間仰天のあまりもう少しで失禁するところだったみたいだ。

——くつ、流石は姫ツチだ、調査報告を聞いてほんの少し気を散らしていたとはいえ俺が意識の死角を突かれるなんてな、やっぱ元隠密機動部隊は伊達じゃねーわ・・・
今回の件に係わらせたくなかった涼花に事のあらましを聴かれてしまったので重勝は表面上は無言で平静を保ち続けているが内心は凄く動揺していた。観察眼が非常に優れている涼花はそんな重勝の心情を察したようであり、一度小さく溜息を吐く。

「はぁ・・・そんな不満そうな顔したって無駄よ、元西風の一員としてこの件は見過ごせないわ」

「姫ツチ・・・」

「重勝、わたし達は西風時代にどれだけアンタと一緒に過ごしていたと思ってるの? アンタは他人には無関心だけど身内は鬱陶しいくらい大切にしている人間なのは知っているわ、そんなアンタの事だからどうせ幸斗とわたしには選抜戦に集中してもらいたいから黙っていたんでしょうけどね」

「・・・」

「それならわたしは問題ないわね、進行状況から見るにこの選抜戦は全勝した生徒が代表枠を占めるのももう確実と言っても過言じゃない、この前の試合で会長さんに負けたわたしは代表入りする事は無いだろうからアンタの心配は無用よ」

平静を保って無表情に見つめてくる重勝に自分もこの件に係わらせてほしいと食い下がる涼花、彼女も元西風だ、自分の団を壊滅に追い込んだ仇が判明したというのに当事者の一人である彼女が見過ごせる筈なんてないだろう。

「・・・はあ・・・仕方ねーな、幸斗には黙っているよ・・・」

全く引き下がる気配のない涼花に重勝はとうとう折れた。

「言われなくても幸斗にだけは絶対に言うつもりはないわ、あのお馬鹿の事よ、この件を知ったら絶対に単独で連盟に乗り込んで倫理委員会の連中を潰しに行こうとするに決まっているんだから・・・」

「それはやめてほしいわね、不本意な事にあんな腐った連中でも日本の伐刀者達を取り締まるのには必要なのよ、完全に潰れたら日本に伐刀者の不正行為者や犯罪者が大幅に増加するでしょうね」

「だからと言つて出世なんて物の為に僕等を陥れた落とし前を付けない訳にはいきませんよね重勝さん？」

「当たり前だ、西風に舐めた喧嘩売りやがったんだ、五年前の後始末はつけねーとな・・・」

倫理委員会を物理的に潰すのは重勝達元西風には簡単だ、彼等は昔から連盟の定めた法を無視して自分達の意志で行動して来たので連盟にしがらみなど全くない、伐刀者の秩序が乱れようが崩壊しようがまた昔みたいに自分達の意志で行動するだけなのだから……しかし一輝達のような普通の学生騎士や黒乃達のような連盟の魔導騎士にとつては大問題だ、伐刀者の不正を取り締まる人間が不足し秩序が乱れば増加した犯罪者を取り締まる手が回らなくなるだろうし、そうなったらプロの魔導騎士を目指す学生騎士達も未熟なまま戦場に駆り出されて多くの犠牲を出す事態になる事だろう、それだけは避けたいところだ。

しかし西風を汚いやり方で陥れた後始末はつけないければならない、西風は魔導騎士制度法を無視した非合法伐刀者集団なので潰されただけならまだ納得できただろう、だが倫理委員会は彼等を潰す為に罪の無い北九州の村の人々を皆殺しにするという卑劣な行爲を行った、しかも動機は出世欲、断じて許す訳にはいかない。

「だったらどうするの？組織そのものを叩き潰す訳にはいかないんだし」

「俺達を陥れようとしてクソみたいな計画を考えた首謀者が倫理委員会の中にいる筈だ、ソイツを潰す！」

「決まりですね……会長、北九州の村の人間を皆殺しにして僕達を比翼にぶつけると計画した首謀者は誰なんですか!？」

計画を実行したのは倫理委員会であるなら計画を考えた首謀者はその中にいる、当然楯無は卑劣な計画を立てた首謀者についても掴んでいる。

「・・・首謀者は――」

楯無の口から首謀者の名が語られる、今明かされる五年前の事件の黒幕、その首謀者とは？

先程まで快晴だった窓の外は・・・雲行きが怪しくなっていた・・・。

昼食のカレーを食べ終えた幸斗達はある程度腹具合が落ち着くの見計らつてから山の散策を始める事にした、引率である刀華が班分けを行ない、砦城を緊急時の為に合宿場に待機させて、彼等は山を登り始める。

まず、一輝とステラの班が先行して行き、少し遅れて泡沫と恋々の班が別のルートを進む、そして――

「やっぱ野生の蛇はマズイ・・・」

「真田君、捕まえた蛇を焼いて食べながら登らないでください、行儀悪いですよ」

斜面がきつく草木が生い茂る山林の中を幸斗と刀華の二人が歩く、伐刀者の訓練施設であるこの山の道は険しい上に茂みの中から毒蛇などの危険生物が奇襲して来るのも珍しくはない。

だが傭兵時代に何度もサバイバルな状況を乗り越えてきた幸斗にとってはこの程度の山道など苦難の内に入らないようであり、先程の茂みで捕まえたマムシを串に刺しバーナーで良く炙つて食しながら余裕そうに山の斜面を登って行くので、彼の数メートル後方から若干きつそうな表情をして斜面を登る刀華が幸斗を行儀が悪いと戒めるのだが、果たしてツツコムのはそれだけでいいのだろうか・・・。

「食い物を粗末にする方が行儀悪いと思――っ！冷て・・・」

そんなやり取りをしていると、いつの間にか快晴だった空が雲で覆われていて空から

ぼつりと雨粒が幸斗の頭上に落ちた。

「うわ、雨かよ、面倒だな・・・」

「日本は最近亜熱帯化の影響で豪雨（スコール）が多く発生していると聞いたけれど本当のようですね・・・さっき通った道の側に雨宿りでできそうな横穴がありました、そこまですり返しましょう」

刀華の提案に従って二人は段々と激しく降って来る雨の中山道を下り横穴がある場所に向かつて行く。

今回の目的である巨人はまだ見つからない、果たして彼等を待ち受ける巨人とはいったい何者なのだろうか？

刀華の独白、明かされる想い

幸斗と刀華は滝のように激しく天から降る豪雨をアイスクリームを挾ったかのような球形に窪んだ横穴の内側から眺めている。

「あぶねえ、ギリギリ本降りくらわずに済んだぜ・・・」

「ふふつ、そうだね、着替え持つて来ていないから服が濡れなくて本当によかったと思うよ、ここでしばらく雨宿りをして雨が弱まるのを待ちましょうか」

横穴の内側に散乱していた木々を幸斗が持ち歩いていたバーナーで燃やして焚火を作り、二人は焚火の側でしやがみ暖を取る、この雨は長く降り続きそうだ、暗くなる前に止むのは期待できないので二人はある程度雨が弱まったら先に進む事にしたのだ。た。

・・・沈黙していると空気を悪くすると思ったので、刀華は幸斗に話し掛ける。

「真田君、学園生活にはもう慣れた？学園に来る前まで連盟の教育施設に居て学校に通って同年代の人達と一緒に勉強とかをした経験が全く無いって聞いたからちよつと気になっちゃって」

「別に問題はねえっすよ、本に書いてある字や数字を見たり先公がする意味不明の話を

聴いていると頭がクソ痛くなったりはするけど、メシは美味しい、選抜戦で色々な奴と戦えて楽しいし……それにこの五年間会えなかったシゲにもまた会えたしな」

「……………そう……………」

学園生活についての話題を振る刀華であったが幸斗が自分の宿敵である重勝の名を出した事によって彼女は気を重くした、幸斗の気を悪くしないように平静を装い彼に小さく微笑んで返事を返したのだが――

「あ、そうだ、選抜戦と言えはこの前の涼花と会長さんの試合は見ていてメチャクチャ凄い試合だったぜ、会長さんの雷切を攻略した涼花も凄えと思ったけど、何よりも会長さんあの涼花の戦術に耐えきってアイツに降参させるなんてさ」

「……………」

幸斗が更に追い打ちをかけるような話題をふっ掛けて来たので刀華は沈黙した、意地を通したと言えば聞こえが良いがああのは結局刀華が持つて生まれた魔力（さいのう）が涼花よりも圧倒的に上回っていたから最終的に勝てたに過ぎず、実力は完全に涼花が上だったと認めざるを得ない、運も実力の内とは言うが戦う気力も残されていなかったところで相手が五体満足な状態で降参して来たのだから屈辱だったのも無理はない。普通ならそんな傷を抉るような話題をされればいくら温厚な刀華とて怒るのだが、幸斗に悪気は無いので彼女は沈黙するしかなかった、ホント幸斗はデリカシーの無

いおバカである。

この真田幸斗という少年は刀華の越えるべき存在である風間重勝の元教え子だ、だが飄々としていて何を考えているのか理解できない重勝と違って幸斗は自分の信じる道を疑いも迷いもなくどこまでも突き進む眩しいくらい真つ直ぐな心を持っている、一年前に重勝に叩きのめされて以来自分の進む道に少々迷いが生じている刀華にとつてこの少年はあまりにも眩しい存在だ、故に刀華はこの少年に聞いてみたい事があつた。

「・・・真田君・・・私は最近ちよつと悩み事があるんだけど、迷惑じゃなかつたら聞いてもらえますか？」

「悩み事？生徒会長なのに？」

「あはは、生徒会長だつて悩みぐらいありますよ」

「ふうん、でもオレみたいなバカに会長さんの悩みが理解できんのだろうか？」

「別に難しい事じゃありませんよ、今から私が言う悩みに対して真田君なりの考えを聞かせてもらえればいいですから」

「んん・・・分かった、言つてみて？」

幸斗が了承したので刀華は目の前で揺らめく焚火の火を瞳に映しながら静かに語り出した。

「・・・少し昔の話になるんだけど、私は幼い頃に両親を亡くしてとある養護施設にいた

の、その施設には私以外にも親を亡くして子供達が大勢いたんだ」

刀華がまず最初に語るのとは自分が親を亡くした後に入る事になった養護施設【若葉の家】についてだ、東堂刀華という少女の物語はここから始まった。

「その施設の子供達は結構仲が悪くていつも喧嘩していたの、私よりずっと不幸な巡り合わせで身寄りを無くして心が傷付いてしまったみたい、中には両親に殺されかけた為に人格が破堤して誰彼構わず乱暴を振るう困った子もいたなあ」

語って聞かせている人物が後輩だという事を忘れていいのか丁寧語を忘れていつの間にか素の言葉で話してしまっている刀華。

「私はそんな不幸になってしまった子供達を助けて笑顔にしたいと思った、困っている人達のチカラになってあげたいって思ったの、それで私は施設の子供達と徹底的に向き合ってみんなのチカラになるよう努力した、どんなに拒絶されて暴力を振るわれても助ける事を諦めなかった、その甲斐あって私は施設の子供達に信頼を寄せられるようになったんだ」

刀華は少しニヤけている、凄く嬉しい思い出なのだろう、なにせ自分の努力が実を結んだ出来事なのだから。

「私はみんなの期待を裏切らずにしつかりと応えられる責任感を持つ人間こそが強いんだと確信した、だから私は施設を出た後も大勢の人達の助けになってみんなの期待に応

え続けたんだ、そうする事でみんなが笑顔になって多くの人を幸せにできる、それが凄く嬉しいの」

他者の為に比類なきチカラを発揮する「善意」が刀華の強さでありそれにより齎される他者の笑顔が彼女の生き甲斐だ、だからどこまでも頑張れる、どこまでも強くなれる……しかし――

「……だけの私の想いは……最も否定されたくない人に否定されちゃったんだ……」
みんなから寄せられた期待を一身に背負って飛び続けた少女は……自分よりずっと高い大空を飛ぶ少年によって地に叩き落された……今までの嬉しそうな表情から一変して刀華は気を落とし、低いトーンの声で話を続ける。

「破軍学園に入学して私はとある同級生に憧れを抱いたんだ……その同級生は風のように掴みどころが無くて偶に学園の規則を破ったりするからちよつと不真面目な印象だったけれど、困っている人がいたら興味なさそうな不利をして陰で助けていたり、熱心に訓練をする人が伸び悩んでいたらさり気なくアドバイスをしたりして学園のみんなの助けになる事をしていたから私は同じ志を胸に抱く同志を見つけたと思って彼に興味を抱いたの。彼は凄く強くてみんなの注目を集める不思議な魅力を持っていたんだ、一年にして模擬戦公式戦学園イベント戦全戦全勝、学園のみんなから寄せられる信頼も厚く、空を舞い果敢に戦う姿はみんなに希望を与え、彼は一年にして無敵の序列一

位（エース）の名で呼ばれる破軍の英雄となった……」

刀華はある同級生の話を語る、その同級生とは聞くまでも無い、幸斗の元教官にして彼が兄のように慕う男、風間重勝だ。

「私はそんな彼に惹かれていた、彼の隣に立ちたい、彼と同じ高みに行きたいと心から願っていたの、いつの間にかにね……だけど、彼はみんなを裏切った……破軍学園が近年優勝者を出していなくて毎年今度こそ優勝者を出そうと必死に息巻いている七星剣武祭で、彼なら絶対に優勝できると期待されていたにも拘らず、彼は背負うべき期待と責任を放棄して七星剣武祭を投げ出したんだ……」

今刀華が語ったのは昨年の七星剣武祭で重勝が無断で試合を棄権した時の話だ、幸斗は一月前に如月烈から当時の話について聞かされている。

——会長さんはシゲの事を裏切る前からライバル視していたと烈先輩が言っていたけれど、憧れだったんだな、オレと同じように。

幸斗にとつても重勝は憧れの存在で越えるべきライバルだ、なので幸斗はこの部分に關しては刀華に共感を抱いた。

「シヨックだったなあ……彼は同じ志を持つ同志だと思っていたのに……憧れていたのに……」

「……会長さん……」

「私は彼の行動に納得できなくて彼に決闘を申し込んだんだ、私の想いを剣に込めて全力でぶつければ彼に届く筈だと思つて……だけど私の剣は……彼のいる空には届かなかった……想いは「とんだロマンティストだな」と否定されちゃったんだ……」
憧れの人に裏切られ、想いは踏み躪られた……これが刀華の心に深い傷を付け、彼女の志を迷わせる原因だったのだ。

「真田君……大勢の想いを背負つて戦うのは間違つているのかな……人の為に振るう剣つて弱いのかな……」

刀華はいつも強い意志を感じさせる彼女からは考えられないような弱々しきで幸斗に本題を聞いた。目の前の少年はいつだつて自分の意志、自分の剣、自分のチカラを作り上げた毎日といつだつて自分を前面に押し出して進み続ける伐刀者だ、他人の事などお構いなしに……だから答えを聞くのが恐いのだ、他者の為に戦う自分とは完全に異なつた強さを持つこの少年はきつと自分を否定するのだろうかと思つて……。

「……別に間違つてなんかねえんじやねーの？」

返つて来た返答は意外な事に刀華の想いを肯定する言葉だつた……。

「アンタはそれが正しいとマジで思つているんだろ？ならその想いを貫いて進み続ければいいじゃねえか」

「……簡単に言いますね」

「だって抱いている想いなんて人それぞれだろ、正しいも間違いもあるかよ」

人は皆違う、生まれも育ちも考え方も十人十色だ、ならば自分の想いを信じて貫き通せばいい、それが幸斗の返答の意味だった。

「……ただ……確かに今の会長さんの剣じやあその男には届かねえな」

しかし、想いは肯定するが、剣は否定した。

「……理由を聞かせてもらってもいいかな？」

みんなの為に振るう剣を否定された刀華は内心ショックを受けながらも冷静にその根拠を幸斗に求める。

「……そもそも会長さん、アンタ剣に想いを込めて全力でぶつかれば届く筈って言ったけど、本当に自分のマジな想いをその男にぶつけたのか？」

「……全力でぶつけましたよ、学園のみんなが託した想いを踏み躪った事が許せない、責任を放棄するのは無責任だって」

「責任とかの【理性】で抱く想いの事を言っているんじゃないやねえ、アンタ個人の【本心】の事を言っているんだよ」

「えっ？」

「確かに他人のチカラになるってのも会長さんの本心なんだろうよ、だがそれは周りを見て抱いた【理性的な本心】じゃねえか、オレが言ってるのは自分（テメー）の魂の奥

底から湧き出る想い……【本能で抱いた本心】の事を言っているんだ」

本能——それは【渴望】、人の皮を剥ぎ肉を抉り骨を砕いた神経のその奥、原初の階層に刻まれた純粹な想いだ。

「会長さん、この前の涼花との試合で涼花がアンタの雷切を破った時、暴風でよく見えなかつたけれどそれが止む直前にアンタ叫んでいただろ？その声にそれを感じた、【剥き出しの本能】ってやつを」

涼花VS刀華の試合の最終局面、涼花が鉄の小太刀で刀華の霊装をその手から突き飛ばした後に刀華が霊装の鞘を手にとって涼花の追撃を防ぐ時、幸斗は彼女から【剥き出しの本能】を感じたと言っている。

『そうだ、私はこんなところで負ける訳にはいかない！皆の期待に応え、風間さんの前に立つ為にもっ!!』

刀華はその時そう強く渴望し、折れた肋骨が体内の臓器を傷つけて血反吐を吐きながらも意地で涼花の追撃を防いだのだ、これがなければあの時刀華は負けていた。

「だけど、普段のアンタの剣からはそれが感じられねえ、アンタは【責任という理性】で戦い、理性で相手を倒そうとしてやがる、そんなの剣の刃を鞘に収めたままなのと一緒だ、そんなんじゃないやあ地を這う敵は叩き潰せても気が遠くなる程遠い空には届かねえぜ、絶対にな」

「……………」

【剥き出しの本能】から来る想いを出し切らなければ風間重勝には勝つ事などできない、そう幸斗は断言する。【雷切】東堂刀華は今まで他者の為に剣を振るい皆に希望を与え、る為に戦ってきた伐刀者であり、いつでも背負った責任を第一に考えて行動してきた為に本能を剥き出しにして戦った事など一度だってない、理性を失ったら獣と同じだからだ、感情に身を任せて戦えば我を失い皆を傷つける、そういうものなのだから。

「……真田君、それは駄目です、本能を剥き出しにして戦えば剣を鈍らせます、それでは何も成せないし何も救えないただの暴力なんですよ」

故に刀華は厳しい言葉で幸斗にそう言った、言つて聞かせなければならなかった、感情に身を任せて戦い続ければいつかは身を滅ぼす事となるだろう、彼女はそう考えているのだから。

「……しかし、幸斗はそれを否定する。」

「そんな事はねえよ、何故ならオレは大切な存在を失つて絶望していた時、ある男が剥き出しの本心でオレにぶつかつて来て、それでオレは再び前に突き進む意志を取り戻す事ができたんだからな！」

「……えっ!?!」

——今、何て言ったの? ……真田君が絶望していた?

真田幸斗という少年は刀華が知る限りではどんな困難も不撓不屈の心でもし
ない強靱な精神を持った伐刀者だ、実際に幸斗はいつだって【前に突き進み続ける意志】
を掲げて立ち塞がる壁を今まで培って来た毎日の修練によるチカラでブチ壊して来た、
その幸斗が絶望した事があるなんて信じられないと刀華は驚愕する。

幸斗の絶望・・・それは五年前、世界最強の剣士【比翼】のエーデルワイスの凶刃に
よって傭兵団西風の団長である風間星流が倒れ、国際魔導騎士連盟の策略によって西風
が壊滅し、幸斗等西風の少年伐刀者達が連盟の教育施設に入れられた時の話だ・・・。
・・・当時、運命を覆さんと突き進み続ける少年は、心の支えであった星流と団を失
い、運命に屈しそうになっていた事があった・・・燃える太陽が沈みかけるように・・・。

墮ちた記憶とダチの拳（こぶし）

・・・五年前、世界最強クラスと謳われる傭兵団【西風】は国際魔導騎士連盟【倫理委員会】の卑劣な策略によって世界最強の剣士【比翼】のイーデルワイズと対峙して敗れ、西風団長【傭兵王】風間星流が命を散らし、西風は壊滅した。

西風の団員達は北九州の港で待ち伏せしていた連盟の魔導騎士達によって戦いの最中に海に落ち行方不明になった数名を除き【魔導騎士制度法違反】の罪により全員が拘束され、元服済みの者達は投獄、そして元服していない少年伐刀者達は青森県の人里離れた山奥にある伐刀者専用の少年院に送致され再教育プログラムを受けさせられる事となった。

「囚人番号53番、出ろ！」

施設の一室の扉が開き暴力的な命令口調の声が室内を反響する。大便器と寝心地悪そうな鉄のベッド以外何も無い白一色の小部屋、ここは施設で再教育プログラムを受ける罪を犯した少年伐刀者を勾留する為の部屋である。

「……………」

「……………フンツ、汚くて陰湿な面だ！法に逆らったクズにはお似合いだな」

警棒を掌に軽く叩いて不快な音を出す無精髭面の看守が室内の奥の壁に凭れ掛つて座り込み虚ろな目をして墮落している十歳の少年に対して悪態を吐く、その少年は赤いメッシュが入った夕焼け色の髪を爛れさせ灼熱色の瞳のハイライトを消沈させて一言も発さずに項垂れている。

「とつとと出ると言っているんだ、このクスガキが！」

看守は命令しても返事一つしない少年に怒声を浴びせて無理矢理立ち上がらせ、手に持つ警棒で少年の背中を殴り付けて部屋の外に追い出す・・・少年の名は「真田幸斗」、魔力量F—という不遇を毎日の努力と不屈のド根性と「突き進む意志」で今まで運命を覆し続けてきたこの少年は命の恩人で父親同然だった星流と西風という居場所を失い、心の支えを失った少年は今燃える太陽が沈みかけるかのようにその意志を無くしかけて気を落としていた。

・・・運命を覆す伐刀者は今、悲しみという運命に屈しようとしていた・・・。

幸斗達元西風の少年伐刀者達がこの施設に送致されてから一日が経過した日の昼過ぎ、彼等の再教育プログラムの一環として各個人の戦闘データ採取の為の模擬戦が行われる事となった。

模擬戦の内容は連盟が施設に派遣した魔導騎士との実戦形式での試合だ、行う場所は施設にある模擬戦場であり外に待機させられた元西風の団員達がそれぞれに付けられた囚人番号順に呼ばれて一人ずつ模擬戦場に入り、模擬戦場のバトルフィールド上に待ち構えている魔導騎士と順番に一人ずつ一対一で実戦形式の試合を行い、それぞれの戦闘力を測るのである。

『次！囚人番号53番、入れ！』

「・・・・・・・・」

暴力的なアナウンズが幸斗の囚人番号を呼び、模擬戦場の出入り口の扉が開かれて幸斗が無言で入室する。

施設の模擬戦場は室内にあり白く殺風景な空間が広々と広がっている、天井は約40m程の高さがあり室内の中央には伐刀者専用の石畳のバトルフィールドが質素に設置されていてその上には幸斗の対戦相手を務める魔導騎士が立っていた。

「来たね、僕が粛清するクズ傭兵団の残党が、クククツ、なんとまあ流石連盟の法を犯すクズ共の一員というべきか、陰気なクソガキだね、クククツ、僕としてはもっと生きの良い奴の方が粛清し甲斐があつてよかつたんだけど仕方がないか、クククツ」

「……」

バトルフィールド上で自分の金髪のモミアゲを人差し指で弄っている如何にも陰湿貴族っぽい感じの魔導騎士が幸斗が入室して来たのを確認し、俯きながらバトルフィールド上上がってくる暗い表情の幸斗の姿を見て彼を不快な笑みで蔑み、バトルフィールド上上がった幸斗を見下すような視線で見定める。それを聞いても幸斗は何も返さない、ただ虚ろな眼をして俯いたままである。

「ユキどうしちゃったの？何で西風が馬鹿にされたつていうのに何も言い返さないんだよ！」

既に模擬戦を終えた者達が待機させられている観戦室にて幸斗の仲間の一人である

美空スバルが模擬戦場内が覗ける強化ガラスを拳で叩いて怒りを露わにしている、今の幸斗が以前の元氣先行な彼からは考えられないような生気の無さなので動揺しているのだ、以前の幸斗なら「へっ、ならテメエはそのクス傭兵団の残党にこれから惨めつたらしく負ける無能野郎つてわけだな！」と内心怒りを燃やしながら不敵な笑みで挑発し返す筈なのだから。

「あのお馬鹿……と言いたいところだけど、今回ばかりは……わたしだって辛いわよ……」
「幸斗……団長の事引きずるなって……言えるわけ無いか……オイラもだし……」
「……………」

佐野涼花、鬼庭綱定、そして死んだ風間星流の息子である風間重勝、彼等もまた模擬戦を終えて観戦室におり、そこから模擬戦場内の生気が抜けた幸斗の様子を目の当たりにして気を落としていた、いつもクールでどこか余裕を持った精神をして毒舌を言う涼花も今回ばかりは弱音を吐き、いつもやる気がなさそうでマイペースな綱定は星流が死んだ事の悲しみに関して自分も立ち直っていないという理由で気を落とし、いつも飄々としていて余裕の表情を絶やさない重勝は腕を組んだまま立ち無表情で一言も発さずに模擬戦場内の幸斗を気難しい視線で眺めていた。

そして涼花達が見守る中、試合は開始されようとしていた。

「さあ、ゴミ掃除の時間だあつ！ 肅清せよ！ 《白鳳の双聖剣（ヴァイスフリーユージェル

怒りで我を失った鬼は破壊の限りを尽くし模擬戦場内は僅か一分で廃墟と化した、核シエルター並の硬度がある内壁は鬼が振るう剣の衝撃波により半壊し、天井は鬼の剣圧によつてその上の屋根ごと消滅して蒼穹が顔を出し、ナパーム弾にも耐え得るバトルフィールドは鬼が叩きつけた剣によつて完全に崩壊しクレーターと化したのだった。

「ひ、ひいひいっ!!来るなあああバケモノオオオオオオオッ!!」

鬼の殲滅対象である皇は怒り狂い襲い掛かつて来る鬼の恐怖に晒され悲鳴をあげながら逃げ惑っている、先程の余裕は何処へ行ったのやら、涙目で地にへたり込んで後退しながら白い双剣をメチャクチャに振り回して錯乱しているというなんとも情けない姿を曝している。それで威嚇しているつもりなのだろうか?そんなもので鬼が止まるわけがない。

「あゝあゝ ああああああああつ!!」

「ひいひいひいひいひいっ!!」

鬼の一撃が振り下ろされ、悲鳴をあげながら無様に転げ回つて鬼の凶刃から逃げ回る皇、我を失った鬼は追尾ミサイルのようにひたすら狂うような突攻を繰り返し憎むべき敵を殲滅せんと襲い掛かる、今の幸斗は怒りと憎しみに支配されて自分の意志を無くした狂戦士（バーサーカー）だった。

「何で、どうしてええっ!?!奴の脅力は僕の《怠惰の楽園（ウィーク・エリア）》で弛緩さ

せている筈なのにいいいいっ!!?」

皇は自分を中心にした半径1km以内にいる有りとあらゆるモノを弛緩させて弱体化させる能力を持っている、それは筋力や感覚、モノの耐久性や伐刀絶技の威力に至るまでこの金髪の魔導騎士の1km以内に入った者は魔力量以外の全てが時間が経つにつれてどんどん無力化され続けるのだ。

その筈なのに幸斗の攻撃力は止まる事を知らずに鬼は破壊の限りを尽くし続けている。皇の伐刀絶技が利いていないんじゃない、幸斗の膂力が規格外過ぎて弱体化させ切れないのだ。幸斗の規格外な攻撃力は彼が今まで毎日積み上げて続けて来た修練とド根性の軌跡だ、真田幸斗の、傭兵団西風の子破王の、突き進む意志の、運命を覆す伐刀者の魂だ。皇如きに喰らい尽せるわけなど無い。

・・・しかしし意志を失くして振るう剣に魂は宿らない、これではただの破壊者だ。

「ユキーもうやめて！いつも真っ直ぐなユキは何処へ行っちゃったの!?!そんな自分を見失って暴れるだけの弱いユキなんかもう見たくないよ!!」

「あのお馬鹿自分を見失っているわ、どんな苦しみにも悲しみにも屈せず自分の意志で愚直に進み続けるだけがあのお馬鹿の唯一の取り柄だったっていうのに、それすら失ったアンタになんの価値があるのよ・・・」

「・・・アイツ・・・もうだめかも・・・せつかくここまでのチカラを身に付けたって

「幸斗おおおおおおおおおおおっ!!!」

そこから幸斗の名を叫ぶ男の声が模擬戦場内に響き渡った、地の底から吹き上がる様な雄々しい叫び声だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・えっ!!!?」

幸斗は声が聴こえて来た観戦室の方を振り向き、そこに威風堂々と立っている男の姿を見た瞬間、衝撃のあまり眼を限界いっぱいまで見開いていた・・・・そこに居たのは――

「痛つて……え……シゲ？」

「目は覚めたかよ……幸斗……」

壁にめり込んだ幸斗は骨の髄まで沁みるような痛みを感じながら眼を開く、すると目の前にいたのは星流ではなく、その実の息子の風間重勝が左拳を振り下ろしている体勢で幸斗を怒気の籠った眼で睨んでいたのだった。

幸斗が見た星流は幻覚で幸斗を殴り飛ばしたのは重勝だったのだ、彼は今非情にみつともない醜態を曝す幸斗を見てキレていた、しかし彼がいつもキレた時に見せる眼のハイルイトが消えた悪魔のような冷たい怒りでは無い、齒を軋らせ眉間を寄せて眼を吊り上げさせた激情の怒りである。

重勝は真つ直ぐ壁にめり込んだまま呆然としている幸斗に近づき――

「シゲ?……なんどうぐつ!」

怒気の籠った右腕で幸斗の胸ぐらを掴み上げて壁から引き剥がし、そしてそのまま腑抜け切った根性の幸斗に……大声で怒鳴った。

「お前何してるんだよつ!!絶望なんかで自分の意志を見失つてみつともない戦いをしやがつて!ふざけてんのか!?親父……団長や俺はお前にどんな事があつても【突き進む意志】を忘れるなど教えた筈だ!!!」

重勝は幸斗の胸ぐらを掴み上げたまま想いのままの激情をぶつけた、故に幸斗は動揺

する、今まで重勝がこれ程までに激怒した記憶は幸斗には無いのだから。

重勝は絶望して意志を失くした幸斗が許せなかったのだ、今までどんなに無能でも諦めずに誰よりも強くなろうと毎日地獄のような鍛練と実戦を想像を絶する不屈の精神と不変のド根性で乗り越えて来たこの少年が憎しみなんてものの所為で情けない醜態を曝しているのが我慢ならないのだ……だが。

「……もう、オレは進めねえよ……全部終わったんだよ……西風も……オレの進む道も……」

風間星流という大きな存在と西風という居場所、二つの心の支えを失った幸斗の中にはもう不屈の精神など無かった、彼に重勝の言葉は届かない、悲しみの涙を流して弱音を吐くだけだ。

「オレ達を……オレを導いてくれた団長はもういない……もうどうする事もできやしねえよ……いつそオレも死んで団長のいる場所にい……ふざけた事ほざいてんじやねえええええええつ!!!」がはああつ!!!」

希望が無いのなら死んだ方がいい、そう幸斗が口にした瞬間重勝の怒りは爆発し怒りの左拳が幸斗の頬に炸裂する。殴り飛ばされた幸斗は後ろの壁に背中から叩きつけられて地に伏した。

あまりにも情けない男に成り下がってしまった幸斗に重勝はもう我慢の限界だった、

彼は魂の奥底の感情を爆発させる。

「お前そんなんで・・・そんな情けねえ戯言をほざいて・・・そんな曲がりまくった体たらくで——」

——親父に・・・傭兵团西風团长【傭兵王】風間星流に顔向けできんのかよっ!!!
「つつつつ?!?!?!」

爆発するような重勝の一喝が堕ちかけた少年の魂に突き刺さり幸斗はハツと眼を見開いた、感情の爆発が止められない重勝は続けざまに幸斗に想いのままの激情をぶつけ

続ける。

「確かに風間星流という男はウンザリする程救い様が無いロマンティストだったさ！だけどあの男は自分の意志を絶対に曲げずに降りかかる苦難に立ち向かい、無理を通し、道理を叩き潰し、運命をブツ飛ばして来たとしてもない男だった!!お前はそんな凄え男に今のみつともねえ姿を曝して顔向けできんのか!?!胸を張って全力で突き進んで生きたくて言えるのか!?!答えるよ、真田幸斗つ!!!」

重勝の魂の奥底から来る純粋な想いを乗せた叫びが幸斗の魂を撃ち抜いた、今のお前に風間星流という偉大な男に顔を向ける資格があるのか?憎しみに支配されて意志を見失い恥となる曲がった剣を振るって恥ずかしく無いのかと問い質され、幸斗は．．．みつともない恥ずかしさのあまり悔し涙を流した。

「．．．でき．．．ない．．．胸を張れる．．．わけ．．．ねえ．．．」

幸斗は地に手を着いて突き進む意志を見失った自分を嘆き、心の内を言葉にして曝け出していく。

「悲しかった、団長が死んだ事が．．．悔しかった、比翼の奴にも連盟の連中にも負けて西風を失った事が．．．憎かった、団長を殺した比翼の奴が．．．」

「．．．」

「だから．．．そんな弱え自分が情けなさ過ぎて．．．もう．．．どうだっていいと思っ

ちまつて……団長がオレに教えてくれた大切な意志を……踏み躪つちまつた……ううつ……うあああああ……うううう!!!」

幸斗は自分の大切なものを忘れた事を恥じて泣き叫ぶ。

「面目ねえつ！面目ねえ面目ねえつ!!うううつ、オレ憎しみなんてくだらねえ感情でみつともない剣を振つちまつた!!自分の意志を曲げちまつた!!……シゲ……団長……すまねえ……ホントすまねえ!!うわあああああああああああああつ!!!」

少年は泣いた、自分が曝した恥を懺悔して泣き叫んだ、心の叫びを……そんな少年の叫びを少年の教官である黒髪瘦躯の少年は正面から受け止めていた。

「俺だつて親父を殺した比翼は憎いさ……でもよ、どんなに憎くかろーが悲しかろーが、自分の意志だけは見失つたらいいけねーよ」

重勝は眼の前の教え子の心の叫びを聞き入れながら大切な事を泣き叫び続ける教え子に語る。

「憎しみを抱いたつていい、復讐する事も否定しねえ、だけだよ……自分に恥となる剣だけは振るつちやいけねーよ」

実の父親を失つた重勝の方が誰よりも悲しい筈だ、なのにこの教官は自分の悲しみよりも潰れそうになっている教え子を再び立ち上がらせる事を優先したのだ、この少年は本当に強い男だ、死んだ父親と同じで。

「一度立ち止まって泣いたっていいさ……泣き止んだんなら、また進み出せばいい……」
重勝はその後、幸斗が泣き止むまで彼をその場で見守り続けたのだった……。

「こうしてオレは自分の教官だった男の拳と教えと剥き出しの本心を有りつたけぶつけられて【突き進む意志】を取り戻したってわけだ……そしてオレは誓ったんだ、もう

二度と風間星流という偉大な男に……何よりも自分に恥じるような剣は絶対に振るわねえとな」

「……そんな事が……」

幸斗が語つた五年前の話を聞いて刀華は内心驚いていた、どんな事があるとも自分の想いを真つ直ぐ曲げないであろうと思つていた幸斗が過去に絶望して自暴自棄になつていた事もそうだが、何よりもあの何を考へているのかがよく分からない重勝が激情の怒りを露わにして人に本心をぶつけたという出来事に驚愕したのだ。

——あの風間さんが自分の本心を剥き出しにして激怒した事があつたなんて……。

刀華の知る風間重勝という男は飄々としていて掴みどころが無くいつも余裕を絶やさない冷静さで激しい感情を表に出さない印象である、その為彼が激情を露わにして怒り人と正面から向き合つて救つていたという話は彼女が衝撃を受けるには十分だった。

「その後オレは施設を破壊した罰として独房にブチ込まれて二週間謹慎処分、教育プログラムはランク別だったからBランクのシゲとはそれつきりだ……以上、一度大切な意志を見失つたみつともない男の話はこれで終わり」

パンパンツと手を叩いて過去語りが終わつた事を告げる幸斗、実はその謹慎明けの二週間後幸斗は面会にやつて来た隻眼の少年と七星剣武祭で戦う約束をして宿命のライバルとなるのだが、それは今刀華に話す必要はないのでここで締めたのである。

「オレは自分の教官だった男の剥き出しの本心によつて救われたんだ、内に秘めた自分（テメー）の本心をブチ撒けたら相手を傷つけるかもしれないねえ、そうじゃなくともそれを聞いた第三者に失望されるかもしれないねえ、けどそんなものにビビッてたんじゃあ遠い空に剣は届かぬえぜ……生徒会長さん、アンタ有るんだろう？その男にぶつきたい本心つてやつが……【善意】や【責任感】なんて理性からの本心じゃねえ、魂の奥底に眠る【純粹な本心】つてやつがよ」

「わ、私は……」

「分かっているとは思うが裏切られた憎しみなんてものの事を言ってるんじゃないぞ、もつと単純で真つ直ぐな感情だぜ」

「憎しみじゃないって……真田君は憎んでいるんじゃないんですか？貴方の大切な人を殺したあの比翼の事が」

「当然憎んでるぜ、団長の仇だからな……だがさつきも言っただろ？オレはもう曲がりくねった恥となる剣は絶対に振るわねえってよ……団長の仇は勿論取る、だがそれは憎しみに囚われた【復讐の剣】でじゃねえ、オレの意志で振るう【自分（テメー）の剣】でやるんだ、比翼はオレの越えるべき最大の目標だ、いつか【オレの剣】で奴をブツ倒す！それがオレの【純粹な本心】だぜ！」

「越えるべき最大の目標……」

真つ直ぐ向けて来る燃えるような灼熱色の幸斗の目線に刀華は圧倒されてたじろいでしまう、幸斗が言う通り刀華は他人の為ではない自分自身だけの本心を曝け出すのを恐れているのだ、これを曝け出してしまったら周りとの関係が壊れてしまうかもしれない、自分を信頼してくれる皆を失望させてしまうかもしれないと・・・刀華は苦し紛れに憎しみを抱いている存在がいるのは君だつて同じだろうと幸斗に指摘するが真つ直ぐな言葉で返して来た言葉に刀華は何やら思う事があつたようであり、静かに言葉を復唱する。

「・・・私は——」

刀華が観念して自分の想いを吐き出そうとしたその時——

「っ!?!・・・何だ今の音は!?!」

雨音を掻き消す程の轟音がどこからか聴こえて来たので二人は驚きその場を立ち上がる。

「音の大きさからしてここから近いですね・・・」

「もしかしたら例の巨人が現れたのかもしれないねえ!行こうぜ、生徒会長さん!!」

「ちよつ、真田君!?!」

幸斗は音が聴こえた方角へと一人で横穴を飛び出して行ってしまった、何の迷いもなく真つ直ぐに・・・。

「……本当に昔絶望していたのかを疑問に思うくらい真つ直ぐな人ですね……」

刀華はあつという間に姿が見えなくなつた幸斗が行つた方向を眺めて関心する、自分の宿敵である黒い剣士はあの少年に本能から来る純粹な本心をぶつけて絶望していた少年を再び立ち上がらせて前に進ませた……そんな黒い剣士の前に再び立つた時、果たして少年の言う【剥き出しの本心】を彼にぶつけてこの気が遠くなる程遠い空に自分の剣を届かせる事ができるのか？横穴から歩き出た刀華は激しく降り続ける雨空を見上げて感傷に浸つた。

「一度立ち止まつて泣いたっていいさ……泣き止んだんなら、また進み出せばいい……」
か……気障な台詞ですね……」

巨人とエンカウントしていたのは一輝達だった。数時間前に突如ステラが高熱の病に倒れ、緊急避難用の山小屋へ避難して雨をしのいでいた一輝達に突然岩石の巨人が襲撃して来た。山小屋は巨人の岩拳によって破壊され、一輝は高熱で弱っているステラを後方に下がらせて雨の中単独で巨人に立ち向かっている。

「第一秘剣、《犀撃（さいげき）》っ!!」

限界まで引き絞った右手で突き出す一輝の最大攻撃力を誇る対物奥義が岩石の巨人の胸を穿ち、そこに大孔が開通し、そこから岩を繋ぎ合わせて作られた巨人がガラガラと音を立てて崩壊した。

よし!と空中で小さくガッツポーズをして安堵を浮かべた一輝が着地した瞬間、なんと今崩壊した岩石が再び重なり合いあつという間に無数の岩人形へと変貌してしまつた。

「・・・え?」

一輝は信じられない物を見るように啞然とする、良く岩人形達を見てみると岩と岩の間に糸の様に細い魔力を感じる事ができた・・・つまりこの岩人形達は――

「伐刀絶技……敵は伐刀者だ！ステラ、周囲を警戒してっ！」

一輝は後方に下がっているタオルケツト一枚で何故かそれ以外何も身に着けていない裸同然の姿のステラに注意を促す……一体二人は山小屋の中で何をしていたのかと疑問に思うところだが、そんな些細（？）な事を気にしている余裕など無い。

「イツキ！後ろっ！」

「っ！」

ステラの叫びに反応して一輝は背後から不意打ちして来た一体の岩人形の岩拳を陰鉄で斬り払ったが、岩人形には少し亀裂が入っただけで大したダメージは与えられていない、明らかに火力不足だった。

——これは……まずい！

硬い岩に刃を打ち付けた反動で腕が麻痺した一輝に周囲の岩人形達が一齐に襲い掛かって来た、流石の一輝もこんな状態で何十体もの岩人形に一齐に殴り掛かられては溜りもないだろう。

「イツキイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイッ!!」

一輝の危機にステラは悲痛な叫び声をあげる、万事休すか……と思われるその時——

「させるかよっ！運命を切り拓け！鬼童丸————っ!!」

突然雨空に雄々しく威勢のいい声が響き渡り、一輝に群がって来た数十体もの岩人形達がいきなり上から落ちて来た前髪に朱いメッシュが入った夕焼け色の髪で両頬に逆三角形のタトゥーを入れた灼熱色の眼をした少年が着地と同時に振り下ろした朱い刀身を持つ太刀の一撃の衝撃によって全て木っ端微塵に砕け散った、まさに間一髪だ。

「ようっ！待たせたな一輝、ステラ！随分と苦戦してんじやあねえか？」

「幸斗（ユキト）君!？」

「成程な、巨人つてえのはガセネタだったというわけか・・・」

鬼童丸を肩に担ぎ威風堂々と現れた幸斗は歓喜の声をあげる一輝とステラの前に立ち、周囲からにじり寄って来ている無数の岩人形達を灼熱の眼で睨みつける、そして岩人形達に向けて・・・叫んだ。

「おうおうおうおうおうデク人形共っ!!集団で群れて寄って集って!オレのダチ共を甚振つてくれるたあくいい度胸じゃねえかあっ!!」

幸斗はいきなり岩人形達に向かって威勢良く啖呵を切り始める。

「ゆ・・・幸斗君?」

「い、いきなりなにやってんのよユキト!」

幸斗の唐突な奇行に一輝とステラが困惑して立ち往生してしまう、幸斗はそんな二人の事などお構いなしに左手に持った鬼童丸を振り上げ刃を天に掲げる、すると剣圧が天

に届いて雨雲を吹き飛ばし、陽の光が幸斗を照らす。

「天より陽が射す日ノ本にいく、荒々と吹き荒れる西熱風っ！」

朱い鬼童丸の刀身が陽の光に照らされてキラリと光る。

「団を護りて気高く散ったあゝ、偉大な男の魂この胸にっ！」

この大空に響き渡る程猛々しく吼える。

「受け継ぎし不撓不屈の伐刀者っ!!」

燃える太陽のように熱き闘志を秘めた一人の男の姿が少年に重なる。

「この真田幸斗がっ!! 相手になってやるぜえっ!!」

運命を覆す不屈の伐刀者、真田幸斗は高々と言い放つと同時に地を蹴った、突き進む

意志を宿した剣と共に。

動き出す者達

夕暮れ時の破軍学園・・・本校舎一階昇降口前の掲示板に経った今国際魔導騎士連盟から発行された情報誌のある一面が張り出され、その一面があまりにも衝撃的な内容だったので掲示板を見に集まった人達は騒然となっていた。

「おいおい、いよいよ本格的に動き出せるって時にコレかよ・・・チツ、厄介な事になりやがった」

掲示板の前に集まる人だかりの後方で重勝が掲示板に張り出された情報誌と同じ物の一面を手にとって見て舌打ちをする、その隣では涼花が神妙な表情で生徒手帳を耳に翳し誰かに連絡を取ろうと通信を試みている事から彼等はかなり深刻な状況に直面しているという事が窺い知れる。

「・・・・・・・・ダメ、繋がらないわ、どうやらあのお馬鹿は今山奥にいるみたいね」

「圏外か・・・幸斗の奴東堂達と奥多摩の合宿場に行くと言ってやがったからな、黒鉄とヴァーミリオンも同行しているらしいから連絡が取れば都合が良かったんだが・・・仕方ねーな・・・」

「それで、どうするの?..」

「急いで奥多摩に行くぞ姫ツチ、〔奴等〕が黒鉄と接触する前に黒鉄とヴァーミリオンを保護しねーと後々面倒な事になる！」

生徒会の仕事溜まってからとスバルに引きずられる形で貪狼学園へと帰って行った楯無を見送った直後に齎された衝撃の情報・・・それは情報誌の一面を飾る木々を背景に口付けを交わしている一輝とステラのスクヤンダル記事だった・・・。

今、何者かの陰謀によって破軍学園に波乱が起きようとしていた・・・。

「……あ、あ、あ……」

「……何なの……これ？」

幸斗のパフォーマンスによつて雨雲が吹き飛びギラギラと燃える夕陽が天を朱に染める中、一輝とステラは唾然と立ち竦んでいる……。目の前で無数の岩人形達を痛快タクティカル無双ゲームの如くハリケーンの様に蹂躪する鬼の姿を目の当たりにして。

「ドラアッ!!」

幸斗は後方から殴りかかつて来た一体の岩人形の拳に振り返り様に真正面から鬼童丸を叩き付ける、規格外の臂力で叩き付けた衝撃は岩の腕を爆砕し身体をも連鎖破壊して粉々にし、更には爆砕した岩人形の衝撃波によつてその後方30mまでに存在する数体の岩人形達をも連鎖的に爆砕した。

「温りいんだよデク人形共がっ!!」

続けざまに挟撃で襲い掛かって来た二体の岩人形が繰り出して来た拳をスライディングで躲し正面の岩人形の股下を潜り抜ける、攻撃対象を見失った二つの岩拳は互いのドテツ腹に突き刺さり貫通してそこに嵌まってしまい二体共に身動きが取れなくなってしまう。

「オラアッ!!」

その場で軽く跳び上がった幸斗はその二体に水平蹴り一閃！二体纏めて容赦なく粉々に破砕した。

「オリヤリヤリヤリヤリヤリヤリヤリヤリヤリヤリヤリヤ!!ダリヤアアアアアアアアアアアッ!!!」

幸斗は水平蹴りの勢いのままに右脚を軸にしてその場で独楽の様に回転し台風の如き蹴圧で周囲360°。全方位から群がって来る無数の岩人形達を纏めて吹っ飛ばした。

「す……凄……い……」

「ま……まさかユキトがここまで規格外の怪物だったなんて……」

吹っ飛ばされた岩人形達が木々を薙ぎ倒し、切り立つ断崖の形を変え、空の星になるなどをして次々と屠られていく様を見て一輝とステラは呆気に取られている、自然災害級の暴力で襲い来る有象無象共を蹂躪する幸斗はまるで台風の目だ、圧倒的な鬼のチカラの前に遠からん者はひたすら戦慄し近からん者はただただ撲滅されるのみなのだ。

「うわっ、何これえ☆、ゴ○ラでも暴れてんの?」

「うひゃく、サナダ君もうメチャクチャじゃん、あはは♪これはアタシ達の出番は無いかもね」

「……これが殲滅鬼(デストラクター)の……いや、傭兵団西風特攻部隊のエース【子破王】のチカラということか……正直想像以上でした……」

「御祓さん！兎丸さん！」

「トーカーさんまで」

「黒鉄さん、ステラさん、お待たせして申し訳ありません！」

暴れまわる鬼が引き起こす嵐の中、先程形が変わった断崖の上に泡沫と恋々そして幸斗の後を追って来た刀華が到着、ハリケーンのように無数の岩人形を相手に無双する幸斗を目の当たりにして三者三様の言葉を発し戦慄しており、その姿を確認した一輝とステラは彼女達の名を呼び、後から来た事を刀華が三人を代表して謝罪の言葉を言った。

——あのゴーレム達は魔力の糸で遠隔操作されているみたいだね・・・成程、敵は【鋼線使い】か・・・。

刀華は謝罪を言うと共に戦場を全体的に見回して状況を分析して敵の正体を見破った、【鋼線使い】の特性について彼女は良く知っている、刀華は敵の弱点を幸斗に伝えるべく声を上げた。

「真田君！聞いて下さい！敵は無機物を糸の霊装で操る【鋼線使い】です！複数同時にゴーレムを操っているならば攻略するにh「中継地点（ハブ）の奴を探せってんだろ？」・・・そうです・・・」

聴こえるように大声で説明している途中で伝えようとしていた事を幸斗が言い返して来たのでテンションが冷めてしまう刀華、彼女は失念していた、幸斗は頭は残念でも

歴戦の猛者である元傭兵、実戦経験は特例招集の経験がある刀華よりも圧倒的に上なのだから「鋼線使い」と対峙した事など幾らでもある、告げ口など余計なお世話というものだった。

「こういう類は自分の手を汚さない粹好かない陰湿ヤローだというのが相場で決まっつてやがるからな、中継地点を作つてそこから複数のデク人形共を操つてんのは間違いねえだろうよ……」

中継地点を介することで遠くに姿を隠しながら一方的に敵を攻撃する、それが「鋼線使い」の鉄則（セオリー）だ、この戦術の長所は遠くに身を隠しているので自分は傷付かずに相手をフルボッコにできる事だが……故に敵に中継地点を索敵されるのは避けなければならぬ、よつて自分の元に繋がる糸はできるだけ少ない方がいいのだが、逆に言えば中継地点が破壊されたら人形を操れなくなる、つまりこの戦闘はその中継地点の岩人形を破壊すれば終息するのだ……。

「……へっ！なら——」

——全部ブツ壊せばいいっ!!」

「「「へっ?」」」

不敵な笑みで幸斗がそんな頭の悪い事を自信満々に言い放ったので一輝達は全員呆けた、何言ってるんだコイツ、敵の魔力が続く限り無限に再生し続ける岩人形達を全て破壊するなんて不可能だ・・・というのが常識だが、前にも言った通り西風に常識など通用しない。

「・・・行つくぜええええええええっ!!」

左手に持った鬼童丸を高々と上に振り上げる幸斗、その左腕に【戦場の叫び】の闘気を纏わせ雄々しい咆哮を上げる、そして——

「オラアアアアアアアアアアアアッ!!!」

振り下ろした・・・人知を超越する脅力により発生した剣圧が事象改変を引き起こし光の波が一直線に全ての岩人形達を先にある山林ごと飲み込んで跡形も残らず消滅さ

せて行く。

「[[[[[[.]]]]]]」

絶句する一同、もはや何も言うまい・・・真田幸斗というおバカに常識を求め事自体がそもそも間違いなのだ。

「スツキリしたぜ！買ったばかりのパンツを履いた正月元旦の朝のように爽やかな気分だ」「幸斗君！危ないっ!!」「ん？」

気持ち良さそうに額の汗を拭う幸斗だったが一輝の突然の呼び声に後ろを振り向くと、なんと目の前には一回り大きな一体の岩人形が岩拳を振り下ろして来ていた、一体だけ剣圧閃光の攻撃範囲外に居たのだ、そしてあれだけの岩人形を撃破したというのに動いているという事はコイツが術者の中継地点だという事だ。

「ほっー」

「[[[[[[へっ?]]]]]]」

そして再び呆気にとられる一同、中継地点の岩人形が不意打ちで繰り出して来た岩拳を幸斗は右手の人差し指と中指の二本の指だけで軽々と止め――

「うおりやああああああつ!!」

そのまま前に出されている岩人形の太い腕を両手で掴みジャイアントスイングの要領で岩人形の身体を振り回しそのまま上空に投げ飛ばして――

「これでフィーネ（終わり）だぜっ!!!」

鬼童丸を振るって特大の剣圧閃光を上空に放ち、中継地点の岩人形は光の中にカツ消された。

「グラッツェ！楽しいバトルだったぜ!!」

「……」

遙か上空で祝砲のように弾けた剣圧閃光に指さしてウインクをして勝ち鬨を挙げる幸斗にもはや言葉すら出ない一輝達……へっ、汚い花火だと言いたくなるような圧倒的な勝利であった。

同時刻、日本某所・・・真昼でも暗いこの室内は今、何かが爆発したかのように爆煙が蔓延しその場に居る二名を含めて部屋全体が煤塗れになり真っ黒になっている。

「ごほっ！ごほっ！・・・ふんっ、所詮はくだらん人形だな、魔力の欠片も無い攻撃などで消されるとは」

「ナハハハハハッ！いや最高だろ？糸に伝わった衝撃の振動であの粹好かねーイカレピエロが盛大に大爆発したんだぜ、まあ本体じゃねーのが残念だけど爽快サプライズだったぜ！」

室内のソファアーに座っていた黒い長髪で長身の男が煙で噎せながら立ち上がり身体中に付いた煤を手で払いながら数秒前まで人型の何かがあった爆心地点の前に立ち見下して蔑む、その後ろで額にヘアバンドを着けたツンツン頭の長身の男が実に愉快そうに腹を抱えて爆笑しており、その男は笑い終わると黒髪の男の隣に並び爆心地点を見下ろして気分良さそうに笑みを浮かべた。

「さっすが幸斗！相変わらずブツ飛んだ爽快さ！へへっ、アイツまた一段とバケモノになりやがったな」

ツンツン髪の男は宙にコインを指で弾き飛ばしながら気分良さそうに幸斗を昔馴染

みのような口調で称賛する、その口振りからして彼は幸斗の知り合いなのだろうか？それを聞いて黒髪の男が不機嫌そうに鼻で笑う。

「ふんっ、だが所詮は出来損ないに毛が生えた程度の有象無象だ、魔力無きペテンに興味など無い」

黒髪の男は圧倒的チカラを見せつけた幸斗を世界最底辺の魔力量だからという理由で自分の敵ではないと評価を下す、どうやらこの男は今の魔導騎士世界に良くいる魔力至上主義者のようだが、他の口だけの奴等とは明らかに違う猛者の雰囲気放つている。

そんな黒髪の男の評価を聞いてツンツン髪の男はやれやれって感じの落胆した表情をした。

「お前まだそんなくだらねー価値観で判断してんの？呆れて物も言えねーな」

「貴様こそもはや存在せぬ身内の人間にくだらん幻想を抱くのは止める事だな」

「うっせえよ、頭の固い家出ヤローが」

テンション低めで不毛な言い争いをする二人、なんだかんだ言っているが険悪な関係であるわけではなさそうだ。

「そもそも騎士が騎士たる由縁は魔力の有無だ、そして魔力とは理（ことわり）を逸脱して世界を変革するチカラ、〔この世界に自らの意志を反映するチカラ〕と言われている。

総魔力（オーラ）量が生涯変化しないのは生まれ落ちた瞬間にその者の世界に及ぼす影響力、世界に刻む歴史の大きさが決まっているからに他ならない。人はこれを「運命」と呼ぶ、すなわち「騎士のチカラ」とは他者の「運命」を退け、自らの「運命」を押し通すチカラだ・・・あの小僧の膂力の高さは認めるが魔力という運命に抗うチカラを持たない有象無象など話にならない」

黒髪の男は「魔力は運命を押し通すチカラ」だと主張する、事実これまで強い魔力を持つA級魔導騎士は一人残らず歴史に名を刻む大業を成している。故に騎士の世界では魔力量が一番大切だと言われるのだ、一般的な解釈に基づいた黒髪の男の主張は決定的外れではない・・・しかし、それを聞いてもツンツン髪の男は実にくだらなそうな目を黒髪の男に向けている。

「得意気に言ってるけどよー、じゃあ何で世界最高の魔力量とか言われているあのエロい身体の皇女サマは無様にも魔力量が低い幸斗と姫（涼花）にボッコボコにされて七星剣武祭の代表から落ちてんだ？・・・お前確かあの皇女サマと戦る為に日本に戻って来たんだったよな？皇女サマが七星剣武祭に出ねーんじやお前ここに居る意味あんの？」

「その事か・・・正直紅蓮の皇女には失望した、最上質の魔力を持つていながら「あの愚弟」を含めてEランク以下のペテンなどに三度も遅れを取るとはどうやらオレの眼も腐っていたらしい・・・無論「前夜祭」が済んだならオレは日本を再び去る、オレの求

めるものが無いこの国に居ても意味など無いのだから」

ツンツン髪の男が言うには黒髪の男はステラと戦う為に海外から日本にやってきたらしいが、どうやら凡才の涼花や世界最低クラスの魔力量しか持たない幸斗と一輝に敗北したという情報を耳にして失望を抱き彼女を見限ったようだ。

一輝の事を「愚弟」と罵る黒髪の男、そう、この男こそ日本の「風の剣帝」の異名で呼ばれるAランク学生騎士にして一輝と珠雫の兄「黒鉄王馬」その人であった。

「オレが求めているのは死力を尽くしても手も足もでない程の圧倒的なチカラによる、もしもの余地など微塵もない程の絶対的な「蹂躪」だ、オレを相手にそれができるとすれば絶対的な魔力量を誇るステラ・ヴァーミリオン以外あり得ないと思っただがとんだ期待外れだった……」

下唇を噛み締めて失意を口にする王馬、ステラが自分の求める者足り得ないのならば日本に帰って来たのは無駄足だった、なら仕事が済んだのならこの国を去る……ツンツン髪の男にその旨を伝え行き場を失くした目的を呟くとツンツン髪の男は——
「絶対的な蹂躪?……プッ!ダーッ!ハハハハハハハッ!!!」

眼から大量の涙を飛び散らせる程大爆笑した。

「貴様……何がおかしい!?!」

「だってよー、圧倒的な蹂躪なら真田幸斗以上に適任な奴なんていねーだろ!お前も

さつき見た筈だ、あれはまさに蹂躪だっただろう？」

不可解な表情を浮かべる王馬にツンツン髪の方は真田幸斗こそ王馬の求める条件にドンピシャで当てはまると豪語する、当然だ、蹂躪とは最強の攻撃力があってこそ、攻撃力EX（測定不能）の規格外な幸斗が論外のわけないのだから・・・しかし、王馬はそれを否定する。

「ふつ、どうやら貴様は先程言った話を聞き逃していたようだな、魔力無きペテンなど——」

若くして耳の遠い愚者には情けとしてもう一度説明してやろうと鼻で笑って先程言った説明を復唱しはじめると王馬であったが、その愚者がいきなり話に横槍を入れて来た。

「お面白い意志持つてんのによー、そのつまんねー価値観の所為でそれが全部台無しになってんだよなあ、その価値観変えねー限りお前は幸斗と戦えば確実に簡単に蹂躪されて負けるな」

「なんだと?・・・」

それは王馬にとつて聞き捨てならない暴言だった、Aランクである自分が魔力がほぼ皆無に等しい小石に蹂躪されて負ける?ふざけるのは遊んでる時だけにしろ、彼はそうツンツン髪の方を睨む。

「幸斗とお前は良く似てんだよなあ、誰の為でもねー、自分が最強になる為にひたすら自分（テメー）の意志で突き進み続ける信念を持つている・・・だが幸斗とお前とは決定的に違うものがあるんだ、それがわからねー限りお前は幸斗に勝てねーよ、絶対になんなら命賭けたっていいぜ」

ツンツン髪の男は今の王馬では幸斗に勝てないと小馬鹿にした笑みで断言する、幸斗と王馬の違いと言えば魔力量の差だが真田幸斗という規格外に魔力量の差など意味が無い事は一月前のステラ戦で証明されていると言っているだろう、王馬のような絶対的魔力至上主義な人間でもなければ嫌でも理解する・・・ではそれ以外で二人の決定的な違いとは一体何なのだろうか？この男の言う魔力至上主義の価値観を変えなければ王馬は幸斗に圧倒的大差を付けられて負けるというのにヒントがあるのかもしれないが・・・。

「・・・ふんつ、くだらん！これ以上貴様の戯言などに付き合つてられるか！」

元々不機嫌だった王馬は更に不機嫌になつて部屋を出て行つてしまった、Fの魔力量しか持たない伐刀者として出来損ないである幸斗に勝てないと言われた事が余程腹が立ったのだろう、部屋にはツンツン髪の男だけがポツンと残された。

「まったく短気なヤローだな、もつと視野を広く視れりゃあアイツは劇的に変わるつてのに勿体ねー」

一人寂しい殺風景な部屋の真ん中で指でコインを上弾き飛ばし、アイツは困った奴だと訝し気な表情をしてそう言い、宙に舞うコインが落ちて来る間に顔と髪に付着している黒い煤を両手で払い落した。

「まっ！実際に幸斗と会って戦ってみれば堅物王馬も変わるだろーけどな、アイツに係わった奴は何らかしらの影響を大きく受ける、運命すらも・・・へっ、【前夜祭】が楽しみだぜ！」

不敵に笑い落ちて来たコインを掴み取る幸斗を知る男、先程まで黒い煤で真っ黒になつていた彼の顔と髪は煤を払い落した事によつて本来の色を取り戻した――

：男は幸斗と同じ前髪朱メツシユの夕焼け色の髪で燃えるような灼熱色の眼を持つていた。

始まる悪意渦巻く騒乱

東京にある総合病院・・・その内部にある穢れ一つ見当たらない清潔な白一色の病室のベッドにて「紅の淑女」貴徳原カナタは意識を取り戻した。

「・・・・・・・・・・」は？・・・・・・・・

知らない天井を見て何故自分はここにいるのかと朦朧とする意識の中カナタは上体を起こし、気を失う前の出来事を思い出そうと記憶を洗う。

——・・・そう・・・確かわたくしは選抜戦で風間さんと試合をして——

敗北した、それも完膚無きままに・・・恐らく自分は意識不明の重体で大型の病院に移送されたのであろうとカナタは察した、切り落とした筈の右腕が元通りに接合しているのも再生槽（カプセル）の治療によるものだろう。

——・・・わたくしはなんて不甲斐無いのでしょうか、あれほど風間さんを倒すと息巻いておきながら手も足も出ずにこの体たらくとは、これでは刀華ちゃん達に合わす顔がありませんね・・・。

カナタは学園序列一位の黒い剣士に圧倒的な実力差を見せつけられて敗北した自分を情けなく思い気を落とした、彼女より強い刀華すら凌駕する実力を持つ重勝に勝てな

かったのは順当な結果と言えるのだがやはり一人の騎士として悔しかったのだ……だが落ち込んでいる場合ではない。

——負けたのは悔しいですが収穫はありました、これは試合中の風間さんの発言と今までの彼の行動からわたくしが立てた仮説に過ぎませんが風間さんがわたくし達と対立して皆から嫌われる行動を取る理由は恐らくこれなのでしょう、急いで刀華ちゃん達に伝えなくては！

昨年からの苦しみから親友を救う為にカナタは命懸けで答えを探り出した、この答えを親友達に伝える事ができれば重勝との因縁に決着を着ける事が出来る筈……そう思つて彼女は意識を覚醒させるのだが——

「……えっ?!?!」

白白白……意識が覚醒してカナタの視界に入つて来たのは病室内に広がる純白だった、天井も白い、壁も白い、カーテンも白い、ベッドとシートも白い、自分が今身に着けている患者衣も白い……。

『フイーネ（終わり）だぜ……貴徳原』

「うっ?!」

カナタは辺り一面真っ白な病室内を目の当たりにした瞬間、天（そら）から悪魔のようなハイライトの消えた冷たい眼で見下ろす黒い剣士が白く膨大なエネルギーを砲剣

「うゝ、頭痛え、鬱だ、何でオレがどやされなくちやならねえんだよ？」

「当たり前です！勝手に単独行動をした挙句に自然破壊、本来ならお説教で済む問題ではありませんよ！」

「あはは☆、天候まで人為的に変えちゃったし、こりやあ学園に氣象庁からの苦情がきているだろうね、帰ったらたぶん理事長からも叱られるだろうから覚悟しておいた方がいいよ、殲滅鬼クン♪」

「うげく……」

「あはは……愁傷さま……」

幸斗が岩人形達を相手に無双した後、幸斗は刀華（オカン）により一時間説教され、現
在は憂鬱な気分です皆と共に下山している真つ最中であつた。

空はすっかり日が沈みかけていて既に朱い一番星が顔を見せる時間帯、ほぼ真つ暗になつた山道をライトで照らして彼等は帰路を進む。岩人形達を操っていた者の正体は幸斗が手掛かりである岩人形達を塵も残さず殲滅してしまつたので結局解らず終いだつた、おまけに訓練施設の一部である山林も幸斗無双によつて半壊してしまつたので

巨人騒ぎが収まってもこれではとてもじゃないけど代表選手の強化合宿などできる環境ではないだろう、強化合宿ができるようにしにきたのにこれでは本末転倒な結果だ、刀華は絶対に二度と生徒会の仕事の手伝いを幸斗には頼むまいと決めたのだった・・・。「あ！明かりが見えたよー！やつと帰って来れたー！」

数分歩きやつと麓に下りると恋々が先に視える合宿所の明かりを指差して燥ぐ、一行はようやく戻って来れたのだ。

「む、帰って来たようだな」

彼等の帰りを律儀にも施設の外で待っていた砕城が皆を出迎える。

「ヴァーミリオンが倒れたと聞いたが、大事はないか？」

「迷惑かけてごめんなさいね、風邪なんて初めてだったから自分が風邪だってよくわからなくて」

「何だ、ステラ風邪ひいたのか？オレも風邪なんかひいた事ねえからよくわからねえけど辛いのか？」

「幸斗君も風邪ひいた事ないの!?!なんとかは風邪をひかないとはよく言うけどそれは・・・」

「おい一輝、テメエ今オレの事を馬鹿にしなかつたか？」

砕城はステラが道中病を患って倒れたという連絡を受けていたので彼女を心配して

確認する、心配させた事をステラは謝罪し、生まれて一度も風邪をひいた事がないと言う幸斗が疑問を口にしたのでそれを聞いた一輝が驚き迂闊な事を言ってしまう、幸斗がムツときて一輝を不審に睨みつけた、事実なので仕方がない（笑）。

念のためこれをと砕城はステラに風邪に良く効く自作の薬を渡す、なんでも砕城の実は薬師の家系らしい、ステラはありがたきお礼を言つてそれを受け取ると砕城はそういえばと一輝に声を掛けた。

「黒鉄、実は先程お前を訪ねて来た人がいたのだが」

「僕を？」

「ああ、学校に行つたらこっちにいと聞いてきたらしくてな」

一輝はわざわざここまで自分に会いに来るような知り合いに心当たりがないので首を傾げた。

「砕城さん、その人の名前は？」

「確か——」

砕城は腕を組んで訪ねて来た人物の名を思い出そうとしてうぐんと唸る。

「わざわざこんな山奥まで来るなんて——苦労なこつたな、一体何所の誰——つ!!?」

幸斗はやれやれと右掌を右肩の上に翳して皮肉を言う・・・その時、背中に不可解な怖気が奔り、幸斗は思わず振り向き身構えてしまう。

——何だ、この身の毛が弥立つような嫌な感じは!?

背後の薄暗い広場を不快な形相で睨みつける幸斗、するとその広場の先からコツコツと足音が聴こえて来た、一体何者だ、この非常に不愉快な雰囲気を感じさせる奴は? 例えるなら吐き気を催すような邪悪! そう思った時考え込んでいた碎城が思い出したようにその人物の名を口にした。

「……ああ、そうだ、【赤座】と名乗っていたな」

「っ!?!」

一輝は告げられた名を聞いて表情を強張らせた……そして——

「おーいたいた、よおくやく会えました」

幸斗が睨みつけている方の陰から気味の悪いねつとりとした男の声が聴こえてきて、全員が視線をそちらに向けると陰から赤いスーツを身に纏った肥満体型の中年男性が現れた。

「ご無沙汰しますねえ〜一輝くん、んっふっふ」

「……………」

男は恵比寿にも似た笑みを浮かべて嘗め回すような視線を一輝に向けている、その男

を見て幸斗は得体の知れない嫌悪感が身体中を駆け巡って表情を強張らせていた。

——何なんだこのオツサン、凄え粹好かねえ感じがする、オレは今まで傭兵家業をしてきて色んな人間を見てきたけど初対面でここまでクソみたいな雰囲気を感じた野郎は今まで会った事がねえ、コイツは臭せえ、ゲロ以下の臭いがプンプンするぜ。

何がなんだかわからないがコイツは激しく気に入らないと本能が疼いている、幸斗はおそらく知り合いであろう一輝に神妙な声音で問いかけた。

「一輝……誰だこのオツサン……」

その問いに対し一輝は同じく神妙な声音で答える。

「この人は……《赤座守（あかざ まもる）》さん、黒鉄家の分家の当主さんだよ」
「っ!!」

幸斗はそれを聞いた瞬間にこの人物がどういう人間なのかを理解してすぐに威嚇の目線を赤座に向けた、黒鉄家の人間が一輝に対してどういう仕打ちをしてきたのかは幸斗も重勝から聞かされて理解している、コイツはクスだ、纏う雰囲気からして交流しなくても解る、幸斗は今にも霊装を顕現して斬り掛かりそうになるくらい赤座に敵意を向けて威嚇し空気をひりつかせるが——

「んっふっふ、そんな怖い顔をしないでくださいよお、私だつて嫌なんですよお？こんな出来損ないの為にわざわざ奥多摩くんだりまで足を運ぶなんてねえ？」

当の赤座はまるで臆した様子もなく見繕ったような笑みで攻撃的な言葉を言った。

そのわざとらしい侮蔑にその場にいる全員が赤座が一輝に明確な敵意を向けている事を感じ取る、この男は紛れもなく一輝の敵だ、低ランクの伐刀者を出来損ないと嘲るその魔力至上主義のクズ共によく見られる態度、幸斗はそれが激しく気に障って我慢ができなくなり赤座のスーツの襟首に掴みかかった。

「テメエこのクソ野郎っ!!誰が出来損ないだつて?もういつペン言つてみやがれっ!!」
「んぐっ!!」

「幸斗君!?!止めるんだ!その人は《国際魔導騎士連盟日本支部の倫理委員長》、下手な事をしたら君にどんな処分が下されるかわからないよ!」

「知るかよそんなk「真田君!」・・・ちっ!」

一輝の制止も聞かずに赤座を掴み上げて左拳を振り上げると刀華が厳しい眼を幸斗に向け促すように首を左右にゆっくりと振っていたので幸斗は気まずくなり、舌打ちと同時に仕方なく赤座を解放した。

「けほっ!けほっ!いきなり何をするんですか?苦しいですねえ・・・んん?そういうえは貴方どこかで・・・」

首の圧迫感から解放された赤座は汚らしく咳き込み、自分に危害を加えてきた少年に抗議の眼を向ける、すると赤座は幸斗の顔を見てどこかで見た顔だと思ひ右手の人差し

指と中指を自身の蟬谷に当てて思い出そうと考え込む、数秒の沈黙が辺りを支配すると赤座は思い出したかのように顔を上げてニタリと気色悪い笑みを浮かべ口を開いた。

「ああ、思い出しましたあ、誰かと思えば西風とかいう害悪集団の負け犬でしかかも一輝クンより出来損ないの虫ケラクンじゃあないですかあ、んっふっふ、どうりで汚らしい手だと思いましたあ」

「デメエ……」

「んっふっふ、相変わらず野蛮人ですねえ、暴力はいけませえん、今の自分の立場わかっているんですかあ？ 貴方達は連盟本部の《白鬚公（しろひげこう）に「使える」という恩恵を受けて釈放されているんですよ、倫理委員長である私に逆らうのは賢明ではないと思いますけどねえ、んっふっふ」

「この野郎……」

「ですがしかし笑えますねえ、五年前の一件で西風（貴方達）は団長の【傭兵王】を失い壊滅、一方私達騎士連盟日本支部は世界最強クラスにして次々と仕事を無断で奪っていく悪徳傭兵団を壊滅させて世に連盟の有能さを知らしめ大満足、随分と差が付きましたあ、悔しいでしょうねえ」

「んだとっ!!」

「真田君っ!」

「……くそっ!」

幸斗が元西風の「子破王」だと知って西風を侮辱する数々の言葉を吐き出す赤座に再び殴りかかろうとする幸斗であったが、刀華が真面目に心配そうな辛い表情をして制止の声を掛けてきたので、悔しそうに悪態を吐いて振り上げた左腕を下ろした、これ以上刀華に心配されなくなかったからだ。

赤座は嘲るような笑みで幸斗を一瞥すると再びその嘗め回すような視線を一輝に向けて。

「んっふっふ、まったく貴方に相応しい友人ですねえ、出来損ない同士で傷を舐め合つてとてもお似合いですう」

「……」

「ア、アンタいい加減に——」

「まあひとまずその事は置いて、さっさと本題に入らせてください、山奥は蚊が多くてかかないませんかからねえ、んっふっふ、今日私がここに来たのはですねえ、騎士連盟日本支部の倫理委員長として一輝クンにとーっても大事なお話があるからなんですう」

一輝と幸斗を低ランクという理由で出来損ない扱いをし続ける赤座にステラが我慢の限界を迎えて文句を言おうとするが赤座は聴く耳持たずに話を切り出してきた。どす黒い感じがプンプンする話だ、どう考えても要件はろくでもない。

「今更僕にどんな話があるのでしょうか？」

「んっふっふ、まあ話すよりもコレを見てもらった方が早いでしょう、どーぞどーぞ、今日の夕刊ですよ」

話を促す一輝に赤座は本日連盟が発行した複数の新聞記事を手渡した、一輝は早速妙な胸騒ぎを感じる中新聞を開き、ここにいる全員がどれどれと一輝の周りに集まって新聞を覗き込む。

「っ!!?? イツキ、こ、これって!」

それは先程破軍学園の掲示板に張り出されたものと同じ、口付けを交わしている一輝とステラの写真が一面に掲載されたスキャンダル記事だった。

驚きのあまり一同は眼を丸くして内容を読み上げていく。

「【黒鉄一輝は昔からの札付きで人格的に問題のある男だ】」

「【姫の純潔を奪った男】・・・ひどい内容・・・」

「【日本とヴァーミリオンの国際問題に発展か!】・・・まあ、そうなるよね」

「んっふっふ、凄い内容でしょう? 巷は今大騒ぎですよ? 国賓に手を出すなんて前代未聞の不祥事ですからねえ」

「・・・【ヴァーミリオン国王、一月前より意識不明のまま未だ目覚めず】・・・何だコレ?」

「ちよ、ちよつと待って！なんなのよこのデタラメは!?明らかにゴシップ記事じゃないの!・・・最後のはともかく」

その記事は確証もない内容で一輝を非難し事態の重大さを煽り立てるような言葉が並んでいる、一部おかしいのも混ざってはいるがこれは明らかに作為的なでっち上げだ、ステラは一輝から新聞をひったくって怒鳴り声を上げ赤座に詰め寄った。

・・・因みに幸斗が読み上げたヴァーミリオン国王が一月前から意識不明だという内容については、実は国王は動画サイトで一月前の幸斗VSステラの試合を観ており、幸斗が放った全力全開の龍殺剣（ドラゴンスレイヤー）にステラが飲み込まれたシーンを見た瞬間にシヨックで失神し、それが衝撃的過ぎた所為で未だに生死の境を彷徨っているからである（笑）。

赤座は激昂するステラにわざとらしくニタニタとした笑みである事ない事を吹き込もうとするがこの三か月間黒鉄一輝という人間を一番近くで見ってきたステラには通じない、それでも赤座はそんな事はどうでもいいと要件の内容を続ける。

「んっふっふ、まあお姫様がどう思おうと事実はどうして記事になったわけです、大衆がどう受け取るかは明らかですなあ、現にこの一報を受けて一輝クンの騎士としての資質に対する疑問の声が連盟の方でも強く上がっています、そこで緊急に連盟日本支部の方で本件に関する査問会が開かれることになりましたね、その場で一輝クンの騎士として

の資質を総合的に検証し、もし資質が不適格だと判断した場合、日本支部から連盟本部の方に一輝クンの「除名」を申請させていただくことになったんです・・・今日、私は一輝クンをその査問会に連れて行く為にやって来たわけなんですよ。これは「倫理委員会」の正式な招集ですう、応じて頂けないと・・・んっふっふ、まあ一輝クンの立場はとても悪いものになってしまいますう、もちろん来て頂けますよねえ一輝クン、んっふっふ」

「っ!!」

幸斗はもう我慢の限界だった、嘘も周りが全て信じれば真実になる、そんな権力に物をいわせた汚い手段で全てを思い通りにしようとする権力者のクズ野郎共が彼は大嫌いなのだ。

「・・・おい」

「ひっ!!」

「「幸斗（ユキト）（真田）君!?!」」

幸斗は先程よりも凄まじい殺気を出してズンズンと赤座に詰め寄り、赤座はその殺気を受けて怖気付き、一輝とステラと刀華は突然の幸斗の行動に声をあげる。

「こ、今度はなんなんですか!?!虫ケラクン、私に手を出した」 「黙れよ」 ひいっ!!」

赤座は動揺しながらも倫理委員長という権力を盾にして自分に危害を加えようとす

る幸斗を制しようとするがそれも向けられる殺気が強まるだけであり赤座は畏縮する。

「オレは表向き学生騎士の身分だが連盟(テメエ等)の飼犬である騎士じゃねえ、元傭兵で戦士だ、除名されようが関係ねえんだよ、向かって来る奴は潰すだけだ・・・オレは今までの傭兵生活で権力者という奴等を山ほど見てきた、全部じゃねえが大半が反吐が出る程のクズ野郎共だったぜ、その中でも思い通りにならなければ権力を使つて他者を追い詰めるやり方をする奴等は特に虫唾が走つた」

連盟の役人に危害を加えて学生騎士の身分を剥奪されたところで真田幸斗という男には大した打撃にはならない、いや、元西風の残党達全員がそうだろう、何故なら彼等は魔導騎士になれなかつたがまた昔のように非合法の傭兵生活に戻ればいいのだから。

故に幸斗は止まらない、自分の古巣である西風を侮辱し、剩え権力にものを言わせたでつち上げの汚い所業でダチを貶めようと企むこのクズ野郎は絶対に許さねえと。

「・・・オレはなあ、テメエのようなクズ野郎は——」

たじろぐ赤座の前に立った幸斗は左拳を振り上げる。

「地の果てまでブツ飛ばすと——」

「ちよ、ちよつと待つてくさいよ、ここは冷静に話し合い m——」

「——決めてんだよっ!!!」

「「幸斗(ユキト)(真田)君っ!!!」」

今度は皆の制止の声は聞かない、幸斗は怒りを込めて振り上げた左拳を見苦しく焦る赤座の顔面に向けて振り下ろした――

「止せ、幸斗っ!!」

刹那、すっかり日が暮れて闇が支配する天の星空から声と共に二つの影が舞い降り、拳が振り下ろされる前に幸斗と赤座の間に割って入り幸斗を制した、こんな時にいったい誰だ？ 幸斗は思わず拳を止めてしまい、割り込んで来た二人の正体を見て眼を見開き

驚愕する。

「シゲ!？」

「このお馬鹿! 状況も考えずに殴りかかろうとしてるんじゃないわよ!」

「涼花まで!？」

空から現れたのは重勝と涼花だった、二人は学園の掲示板に張り出されたスクリーン新聞を拝見し、重勝が涼花を横抱きで抱えて空を飛び此処に急行して来たのだ、一輝とステラが倫理委員会と接触する前に二人を保護する為に……だが——

——くそっ! 一足遅かったか! 黒鉄とヴァーミリオンがこの場にいなければいくらでも誤魔化し様があつたんだが、二人が奴の目の前にいるんじゃないや下手な事をすればそれを理由に黒鉄の悪評を拡大されかねえ……。

当の二人は既に倫理委員長である赤座と接触していたので手遅れだった、本来ならば二人を赤座と接触する前に保護して身を隠させ、赤座には「二人はまたどこかに遠出して行って行先は聞いてねーんだ、悪いな」と適当な事を言つて一度追い返し、その間に対策を立てる予定だったのだがこれではどうしようもない。

「なっ!?! 風間さん!?!」

「リョウカ!?! アンタどうしてここにいるのよ!?! と言うかどこから現れてんのよ!」

突然空から飛来して来た二人に周りも驚きを隠せなくて動揺している、それを鬱陶し

く思つた涼花は――

「少し黙つていなさい、話がややこしくなるわ」

と周りを一瞥して黙らせる（誰の所為でややこしくなつてゐると思つてんのよとステラが言い返そうとしていたがこれ以上場を混乱させない為に一輝が制した）と飛来した二人は重々しい空気の中、恐怖心で尻餅を着いていた赤座と向き合つた。

「お、おやおやおかと思えば破軍に身を置く負け犬軍団が勢ぞろいですかあゝ、助けてくださつた事には感謝しますが狂暴なガキの手綱はしっかりと握つていてくれないと困りますよお」

赤座は尻に付着した砂を手で叩き落としながら立ち上がり、額に冷や汗を掻きながらもわざとらしい笑みを浮かべて二人に蔑むような言葉でそう指摘する。すると重勝はなんと――

「そーだな、ウチのお馬鹿が仕事の邪魔をしてすまなかつた、俺達はこのお馬鹿を迎えに来ただけなんだ、仕事を続けてくれ」

と普段通りの飄々とした態度でそう謝罪の言葉を述べて促した。それを聞いた幸斗が納得いかないと怒りの感情を露わにする。

「なつ?!?ふざけるなよシゲ! コイツは西風を侮辱した上に一輝を――ぐはつ?!?・・・涼花・・・テメエ・・・」

納得できない幸斗は反抗しようとするが、涼花が幸斗の腹部に無言の肘打ちを入れてそれを阻止し、幸斗は肘打ちによる鈍痛で腹部を両手で押さえながら見損なつたと言っているかのように涼花を睨みつける、すると涼花が幸斗に身を寄せて周りに聴こえないように幸斗に言う。

「お馬鹿、ここでアンタがこの古狸に手をあげたら他人に暴力を振るう狂暴な友人を持つていると黒鉄一輝の悪評が拡大して取り返しの付かない事になるわ、奴等の目的は黒鉄一輝に無実の罪を着せて汚点を燻り出しそれを突き付け連盟から追い出し彼を魔導騎士の道から抹消する事なのよ、アンタ黒鉄の夢を終わらせたいの？」

「っ!!」

幸斗は涼花の説明を聞いて苦虫を噛み潰したように唇を噛んだ、迂闊だった、自分は除名されようがまた昔みたいに好き勝手に己を貫く非合法の傭兵に戻るだけだから問題ないと一輝の置かれていいる立場を考えていなかったのだ。

「くっ……畜生……」

幸斗は眼を強く瞑りバツが悪そうに呻いて黙り込んでしまう、幸斗がこの場で一輝（ダチ）にしてやれる事は何もない、幸斗の心は今やりきれない悔しさでいっぱいだった。

「……幸斗君」

そんな時、強い意志が秘められた静かな声が幸斗に掛けられる、幸斗はゆっくりと俯いていた顔を上げて自分に声を掛けてきた男——黒鉄一輝と目を合わせた。

「一輝……」

「……」

大きな決意を秘めた眼が幸斗に強く訴えてきている、〔僕は大丈夫だ、必ず戻ってくる〕と……。

「……信じて良いんだな?……」

幸斗は真剣な眼差しで静かに一輝に問う、一輝は幸斗と目を合わせたまま約束すると言わんばかりに無言で頷き堂々たる姿勢で赤座の前に出た。

「わかりました、査問会に出向します」

「んっふっふ、賢明な判断ですう、本来ならば暴行未遂でその虫ケラクンもしよっ引くところでしたけれど、一輝クンの素直な対応に免じてそれは不問にして差し上げましょう、聞き分けの悪い狂犬を檻に入れるのも手が掛かりそうで面倒臭いですからねえ、んっふっふ、では行きましょうか」

まっすぐと挑むような覚悟の眼で赤座を見つめ返し従う意を示す一輝、赤座はようやく終わったと安堵するかのようにはくそ笑み一輝を連れてその場から立ち去ろうと施設の出口に向けて歩き出す——

そこへ重勝が赤座を呼び止めた。

「・・・仕事が済みそうで気分がいいところ悪いーけどちよつと待ってくれねーかな、倫理委員長さんよ」

「おや、一体何でしょう？ 私も忙しい身なので手短にお願いできますか？」

赤座はその呼び止めに応じて重勝に首だけ振り向き鬱陶しそうな気持ちが駄々漏れな丁寧語でそう言う、やつと一仕事が終わったと思つたのに余計な横槍を入れられて心に鍵をかけるのが疎かになっているようだ。

「なに、用つて程のものじゃねーよ、こんな山奥まで足を運ぶ仕事熱心な倫理委員長さんちよつとしたアドバイスをしてあげようと思つてな・・・」

「・・・風間さん？」

学生服のポケットに両手を突っ込んでゆつくりと赤座の前に向かって歩く重勝、彼から漏れ出る並々ならぬ殺気を感じ取った刀華は一瞬戸惑った、こんな剥き出しの刃が心臓を貫くような殺意など今まで彼から感じた事はないと。

「・・・・・・・・」

その殺気を向けられている赤座は無言で・・・いや、一言も声が出せない程歩いて向かって来る悪魔を畏怖し恵比寿のような顔面を恐怖で歪ませている、夜だというのに身体中から出る汗が止まらない、一体この悪魔はこれから自分に何をするつもりなのかと身を震わせていた。

そして重勝はいつになく神妙な面持ちで赤座の前に立つ、その相手を刀剣で劈くような鋭い目線で目の前のクソ野郎のどす黒く濁った眼を睨みつけて・・・言い放った――

「出世できそうでお高く留まっているみてーだが油断はしねー方がいいぜ、【偏西風】はテメエの追い風になるとは限らねーからよ・・・」

悪魔は忠告する【偏西風】には気を付けろと・・・意味不明な言葉ではあったがその言葉には明確な殺意が込められていた。

五年前の西風壊滅事件の首謀者、それはこの日の昼時、事の真相を突き止めた更識家の当主である少女の口より語られた。

『首謀者は——国際魔導騎士連盟日本支部倫理委員長、赤座守よ』

今、悪意渦巻く陰謀と五年前の決着を着ける戦いの火蓋が切つて落とされた・・・。

黒鉄一輝の夢

落第騎士（ワーストワン）黒鉄一輝は日本の魔導騎士の名門「黒鉄家」の血筋である。黒鉄家は明治時代より第二次世界大戦の英雄にして《サムライ・リヨーマ》の名で知られる魔導騎士《黒鉄龍馬（くろがね りょうま）》をはじめ代々多くの優秀な伐刀者を今まで輩出してきた、その為黒鉄家は魔導騎士の世界で強い影響力を持つており、その当主の座に就く者は日本の魔導騎士達の規律となり秩序を護る責務を果たす使命が課せられている。

それは黒鉄家の現当主にして現在の国際魔導騎士連盟日本支部の支部長、そして一輝の父親である《黒鉄蔵（くろがね いつき）》も例外ではなかった。蔵は魔導騎士の世界の秩序を護るべく誰に対しても厳格たる人間であった、故に彼は《鉄血（てつけつ）》の名で呼ばれ、伐刀者としての能力が低い者が魔導騎士となる事を許さなかった、それは蔵の實の息子である一輝も例外ではない。

伐刀者の超常たるチカラはその魔力の大ききで「できる」「できない」を明確に理解する事ができる、その為連盟は伐刀者ランクという格付けを行う事により伐刀者達に分相応の役割を自覚させ、下剋上などという世界の秩序を乱す意識を根こそぎ奪う事によつ

て調和を保つシステムを創つたのだ。故に一輝や幸斗のような「何もできない筈の人間」が努力を重ねてチカラを付け「何かをしてしまふ」事は魔導騎士世界の秩序を混沌に陥れる「害悪」に他ならない、「努力だけで手に入れるチカラ」は根拠が無く絶対に通用するか知れない不確定なチカラであり、生まれ付いての魔力量と違い他者が明確に理解できないものだからだ。

故に敵は現在テーブルを挟んで向かい合っている出来損ないの息子にこう言う――

「何もできないお前は何もするな」、今も昔も私がお前に望むのはその一事だけだ」

彼等が座っている椅子とテーブルと煤けたベッド以外何も無い質素な室内が虚無感に包まれ、一輝の心に冷たい氷の剣山が突き刺ささるような無情さが突き刺さった。

一輝とステラのスキヤンダル報道があつた三日前、一輝は倫理委員会の招集に応じて東京都新宿区にある国際魔導騎士連盟日本支部に向出し、国賓との不純異性交遊の疑いにより騎士としての資質を再検証される事となつた為、支部の地下十階にある倫理委員会の区画の一室にて開かれた査問会に自分の騎士の道を賭けて出席した。

表向きは一輝に掛けられた不祥事を弁明し彼の騎士の資質に問題は無いと証明する為の場であつたが、査問員として集まつた倫理委員長の赤座をはじめとする倫理委員会の奴等が伐刀者として落ちこぼれである一輝を弁護するわけがない、彼等の真の目的は

奥多摩に重勝と共に現れた涼花が幸斗に説明した内容の通りの酷いものであった、倫理委員会の奴等は一輝に問い質す際に一輝の成人としての責任能力を問いつながら彼にあるべき成人としての法的権利は一切無視し自分達にとつて都合のいいシーンだけ彼を成人として扱う汚いやり方で一輝を精神的に追い込み彼を騎士の道から蹴落とす為の汚点を探る。

実に悪質な茶番だ、まるで普段は男女平等を主張している癖に「レディーファーストなんだから私が先よ」とか「女を殴るなんてサイテー」などと自分に都合のいい時だけ女性の権利を主張する自己中女のように指示滅裂であった。

そんなくだらない尋問に今まで実家から数々の妨害を退けてきた黒鉄一輝という男が屈する筈もなく、彼がステラと不純な目的で交際しているのでは断じてないと主張しきつた為とその場の判定は保留という事となり、後日改めて再度査問会の場が設けられる事となった。

不祥事の容疑が晴れていない一輝は此処——— 連盟日本支部地下十階にある一室に勾留され、現在五歳の誕生日以来顔を合わせていない父親の厳と面会をしていたのだった。

気まぐれで息子の顔を見に来たという厳に何をトチ狂ったのか「娘さんを僕に下さいっ!!」と言って「お前に珠雫（むすめ）をやれるわけがないだろう」と当たり前のように

うにバツサリ断られてしまうというなんとも言えない出来事があり、気まずい雰囲気の中面会を始めた黒鉄親子だったのだが一輝は気まずい空気の中で予想だにしなかった言葉を耳にして驚いた、なんと一輝が選抜戦を無敗で勝ち進んでいる事に対して感心を示すような話を敵が切り出してきたのだ。

一輝はその言葉が幻聴なんじゃないかと自分の耳を疑った、当然だ、自分の実家である黒鉄家は伐刀者として欠陥である自分に今まで酷い仕打ちを行ってきた、生まれた時より実家の人間達に一族の恥としてみなされ存在しない者として完全無視という酷い扱いを受け、家を出て魔導騎士を目指そうと学園に入学したならば一族の恥である自分を魔導騎士にさせまいと家の発言力を使って様々な妨害工作を行ってきた・・・目の前の父親はそんな実家の当主なのだ、称賛の言葉を自分に向けてくれたのを疑うのも無理はない。

だから一輝は・・・思い切って目の前の父親に秘めた想いを打ち明けた、「もし自分が七星剣武祭で優勝したら自分を認めてほしい」と・・・。

しかし一輝の切実な想いに対し敵が返した返答は最後に会った五歳の誕生日の時に言われた言葉と変わらなかった。

正確にはその言葉の意味も説明して理解させた上での返答だった。敵は黒鉄家の当主としてではなく国際魔導騎士連盟日本支部の最高責任者として魔導騎士世界の秩序

を保つ責任がある、その為には一輝や幸斗のような分不相応な存在が邪魔なのだ。

世界の多くの人間が持つて生まれた己が領分をはみ出さない分相應な生き方をして
いる、そこに地を這いずる下賤の者が天壤に位置する者達を引きずり下ろす下剋上とい
う名の分不相応な野心を抱き、それを成してしまうものなら【もしかしたら自分も】と
下の者達が次々と下剋上を掲げていき、やがては大きな争いに発展する・・・そしてそ
の中の多くの者がチカラ及ばず後悔しながら敗れていくのだ、【やつぱり下剋上を成し
た奴も特別な存在だった】と・・・魔力量という明確なチカラは一目で万人が理解する
事ができる、しかし一輝の持つ才は万人に理解できるものではない、故に黒鉄一輝は世
界の秩序を乱す害悪であり魔導騎士の世界から排除すべき者だと敵は断じたのである。

敵は一輝をしつかり認めていた・・・認めていたからこそ今まで一輝の道を妨害して
きたのだ。考えてみれば一輝が本当に【取るに足らない落ちこぼれ】ならば妨害工作な
ど必要ない、そんな事をしなくてもチカラ及ばずに勝手に潰れていくだろうから・・・。
「一輝・・・私に認めて欲しいと言ったな・・・ならば今すぐ騎士をやめろ。その道はお
前に与えられた役割ではない、お前にはお前に与えられた役割がある、その正しい道を
進め、それが魔導騎士世界の秩序を保つ為になる。何故なら魔力量とは人の持つ運命の
量、生まれ出する時より定められた序列なのだからな」

敵は一輝の夢を断ずるあまりにも非情な言葉を言い放った。黒鉄家の名誉などどう

でもいい、ただただ魔導騎士世界の秩序の為に分不相応な存在を排除する、それが国際魔導騎士連盟日本支部長〔鉄血〕の黒鉄蔵という男……一輝はようやく自分の父親がどういう立場の人間かを理解した……自分の事をどう思っているのかも——

——……そうか……僕は才能を持って生まれなかつた時点で父さんに何も望まれていなかつたんだね……ハハッ、なんだ、別に嫌われていたんじやなかつたんだ……でもこんな理由なら正直嫌われていた方がマシだな……。

実の父親に夢を否定され、最初から何の期待もされていなかつた事を知つて冷たく悲痛な感情が一輝の心を支配した、〔好き〕の逆は〔嫌い〕ではなく〔無関心〕、一輝と蔵はそんな言葉を連想させる関係だつたのだ。

——たぶん僕はまだ父さん（この人）との繋がりを求めていたんだろうな、だからこんなに悲しいのか……でも何でだろう？僕はまだ——

騎士の道を歩き続けたいと思つている……世に……いや、父に自分の存在を認めてもらいたくて今まで騎士の高みを目指してきたのに全てが無駄だつた、心の拠り所であつた最愛の恋人にして最強のライバルと七星の頂きを賭けてもう一度戦う約束は鬼の龍殺しの剣によつて既に打ち碎かれている……黒鉄一輝が戦い続ける理由はこれだけで失われた筈だ、なのにどうして……。

『一輝、お前自分の剣を何だと思つてやがる？』

想いに揺れる一輝の脳裏に思い浮かんだのは父親である敵でも妹である珠雫でも最愛の恋人であるステラでもなく、ステラとの大切な約束を打ち砕いた鬼——真田幸斗であつた。

鬼はその燃えるマグマのような灼眼でまっすぐ一輝を見据えて問いた、「お前の剣は何の為にある」と……。

鬼は己の過去を交えて語つた、「オレの剣は運命を砕く剣」だと……。

そうだ、黒鉄一輝にはまだ騎士の道を行く理由が残っている、例え肉親が否定しようと同係無い、運命が道を決めようとも自分は自分が決めた道を行く……迷う必要は……無い！

「それは断るよ、父さん」

一輝は無表情で返答を待つ敵の眼を強い意志を秘めた眼で見つめて堂々とそう答えた、それならもう認めてもらう必要は無い、だからその望みには従えないと……今まで無表情だつた敵はその返答を聞いて若干眉を顰めた。

「……理由を聞くのか？」

これだけ説明したのにまだ理解できないのかと解せない思いを抱いた敵は返答の根拠を一輝に求めた。

「……少し前に一人友達ができただ……その友達は僕よりも魔力量が低く伐刀者と

しての才能が欠如している、それどころか剣才も知性も他者より劣っていて「出来損ない」という存在を体現したかのような少年だった」

一輝は語り始めた、本当の意味でなんの才能も持つておらず神から見捨てられたかのような男の話を……。

「そんな人は普通なら運命に押し潰されてしまうのが道理だろうね、父さんの言う通りチカラの無い者が何もできる筈が無いんだから……でもね、その少年はそれでも進んだんだ、茨の道なんてものじゃない、進めば確実に死ぬような底無しの沼を……」

一輝が幸斗と友になったのはつい最近だ、今語っている話はキャンプ場の河原で幸斗が話してくれた過去から推測しているだけに過ぎず、少年の全てを知っているわけではない。

「例え底無しの沼だろうと少年は突き進む事を諦めたりしなかった、進んで沈むのなら進めるように橋を架ければいいと必死にチカラを付けて降りかかる運命を覆し続けて来たんだ、世界最高の魔力量を持つ気高き伐刀者の運命すら覆して……僕はその少年の事を心から凄いと思った、一体少年の道には今までどれだけ多くの壁が立ちはだかりそれを越えて来たのか、どれだけ多くの挫折を周りから突き付けられてそれを押しつけて来たのか、想像するだけで途方もなく感じたよ……」

一輝も平均の十分の一という魔力量しか持つて生まれなかった故にそれなりの挫折

を乗り越え場数を踏み越えて来た、故に平均の三十分の一しかない一輝以下の魔力量にも拘らず世界最高の魔力量を持つ伐刀者（ステラ）に真つ向から打ち勝つ程のチカラを鍛え上げた幸斗がどれ程の挫折と場数を越えて来たのかは計り知れない。

「そんな少年と僕は友達になり、三日前に河原の前で僕は友達になつたばかりのその少年に聞いてみたんだ、【君はどんな事を考えて剣を振っているの】かと・・・そしたら少年は質問を質問で返すように僕にこう聞いてきたんだ、【一輝、お前自分の剣を何だと思つてやがる?】つてさ」

「.....」

「そしたら少年は僕の答えを待たずに自分の過去を語りながら【自分の剣】について教えてくれた、その時に僕は思い出したんだ、僕が騎士の道を進むと決めた切っ掛けを」

何故黒鉄一輝という男は騎士の高みを目指すのか・・・思い出したと言つても別に忘れていたわけじゃない、この時の一輝は泡沫に言われた【君の剣では大勢の人達の想いを背負う刀華には勝てない】という言葉に惑わされて心在らずという心理状態だったので再確認したと言うのが正しい表現だろう・・・黒鉄一輝という騎士の原点、それは彼が幼い頃居ない者として実家の人間達から酷い扱いを受けた事に耐えられず家を飛び出し猛吹雪の中を彷徨っている時に出会った日本の魔導騎士の英雄【黒鉄龍馬】に言われた言葉によって救われた出来事だ、チカラを持って生まれず何もできずに悔しい想い

を抱いて途方に暮れていた時に「悔しいか小僧？その悔しさを捨てるなよ、悔しいと思うのはまだ諦めていない証拠だ」と――

『いいか小僧、今はまだ小さな小僧、お前が大人になった時、連中みたいな才能なんてちつぽけなもんで満足する小せえ大人になるな、分相応なんて聞こえのいい諦めで大人ぶるつまらねえ大人になるな、そんなもん歯牙にも掛けないでつかい大人になれ。諦めない気持ちさえあれば人間は何だってできる、なにしろ人間ってやつは翼もないのに月まで行つた生き物なんだからな』

この言葉を聞いた時、一輝は夢を抱いたのだ――

「僕は、例え才能が無くても騎士の道を目指して行きたいと頑張る人達の助けとなつて導く騎士になる！諦めなくてもいい、自分ならやれると信じて前に突き進み続ければ才能が無くても強くなれると胸を張つて言えるような!!」

激しく燃え盛る炎のような意志を宿した眼で鉄のように頑な敵の眼を見て一輝は堂々と宣言した、持つて生まれた才能は絶対ではない、そんなものが無くても【突き進む意志】を曲げずに強くなろうと上を目指し続けて行けば誰だろうが強くなれるのだから、そう、本当に何の才能も与えられずにこの世に生を受けたまるで神に見捨てられたかのような存在にも拘らず運命を覆そうと愚直に進み続けるあの鬼のように強い伐刀者のように。例えどんなに醜く足掻く事になろうともそれは恥などではない、諦めて弱

いままでいるのを容認する事こそ恥なのだ。

一輝の宣言を聞いて敵は失望するかのようには一回小さく溜息を吐いて口を開いた。

「・・・莫迦者が、話を聞いていなかったのか？それが秩序を乱す愚かな行為だと言っているんだ。どれだけ修練を積み重ねようと魔力量の乏しい者全てがお前のようになれる保証など無い、その結果大勢の人間が無駄な最後を遂げるのは目に見えている」

「もちろん頑張れば絶対に強くなれるという保証は無いさ、でも僕は知っている、誰よりも才能に恵まれず誰よりも不屈な意志を持つて突き進み続けて運命を覆し続けAランクすら正面から打ち破る強さを身に付けた一人の少年を」

確かに必ず歴史に名を連ねる英雄になると歴史が証明しているAランク伐刀者と違い、才能無き者でも頑張れば誰だつて運命に逆らえるという保証はない、しかし、誰よりも才能が劣る真田幸斗という男はその不屈の意志と根性で多くの運命を覆して来た、故に才能無き者が絶対に運命に逆らえぬ道理も無いのだ。

先程も説明した通り一輝と幸斗は友となつて間もない為二人の絆は浅いものだ、過去だつて全てを知っているわけではない・・・だが三日前、あの時一輝は真田幸斗に秘められた強大な魂を確かに感じ取つた――

『一輝、オレがどんな事を考えて剣を振つているのかと聞いたな？そんなの決まつているだろ、「突き進む」それだけだぜ。オレの剣は運命を砕く剣だ、それは今でも変わら

ねえ、壁が立ち塞がるならブチ抜いて進む！道が無ければ自分（テメエ）で切り拓く！魂の熱風が未来（あす）へと吹き荒れる！！オレを誰だと思つてやがる！？オレは真田幸斗だ！！運命を覆す伐刀者だ！！オレの前に立つ敵（うんめい）は例え会長さんだろうが全国の学生騎士だろうが全部ブツ倒すつ！！』

なんて雄々しく猛々しい騎士なんだと一輝は幸斗の気迫に圧倒された、そして同時に憧れも抱いたのだ、自分もこの少年のように前を向いて進みたいと願ひ、目標となった。「だから僕は大きな意志を持つて努力し続ければ誰もが騎士になれると信じている！父さんが懸念するような運命に負けてしまひそうな人がいたら、みんな僕が立ち上がらせて導いてみせる！！だから僕は・・・騎士になる夢を諦めないっ！！」

一輝は改めて蔽に宣言する、貴方が思つているような事態には自分がさせない、だから自分は貴方の思い通りにはならないと。

「・・・・・・・・」

蔽は無表情のまま無言で一輝の眼を見る、その眼は先程非情な言葉を突き付けた時に一瞬だけ見せた生気を感じられない悲しみの眼と違つて激しく燃えるマグマのような強い意志が宿つた眼であつた。

「・・・・はあ・・・・もういい」

蔽はこれ以上言つても無駄なようだなと溜息を吐いて立ち上がり、面会を切り上げよ

うと部屋の出入り口の前に移動する。

「・・・だから私は反対したんだ、あの西風の子破王を学園に入学させ魔導騎士の資格を取得させて連盟の戦力として利用するなど・・・」

敵は一輝が聞き取れない程音量を下げた声でそう呟き、部屋から退室して行ってしまう。

連盟本部が西風の残党である少年伐刀者達を戦力として利用する為彼等を再教育して魔導騎士学校に入学させる事が決まった当時、敵はF-1の魔力量である幸斗を学園に入学させる事に猛反対していた、しかし決定権は連盟本部長の「白鬚公」(アーサー・ブライト)にあったが為に敵の申し出は却下された・・・一輝の事もある為これ以上不穏分子を取り除く手を回してはられない為に敵は苦肉の策として幸斗の伐刀者ランクを攻撃力の規格外さを理由に特例としてEランクと評価するよう手を回したのだった・・・これが真田幸斗が魔力量世界最低のF-1でありながらEランクである真相であった。

「へえ、黒鉄の奴なかなか良い啖呵を切るじゃねーか、お馬鹿な幸斗に見事に影響されたな」

場所は替わって破軍学園の理事長室……。今この場所には多数の人間が集まっていた。窓際の壁に背中を預けて寄り掛かり、たつた今実に愉快そうに不敵な笑みをして言葉を紡いだ風間重勝を筆頭に彼と同じ元傭兵団西風の佐野涼花、破軍学園理事長の新宮寺黒乃、臨時教師の西京寧音、来客者として来た貪狼学園の生徒会長にして更識家当主の更識楯無、同じく貪狼学園生徒会庶務にして重勝と涼花と同じ元傭兵団西風の美空スバル……。そして黒鉄一輝の恋人にしてヴァーミリオン皇国第二皇女であるステラ・ヴァーミリオン、以上七名がこの場に集結しており、部屋の中央のテーブルの上に置かれた盗聴用のスピーカーでこの場にいる全員が今の一輝と敵の面会を聴いていたのであった。

「しっかしとんだロマンティストだな黒鉄、全ての落ちこぼれを救おうなんてよ」

「あら？ おかしいわね、とても世界最低の魔力量の伐刀者を鍛えた元教官の言う言葉には聞こえないんだけど？」

「ん？ 別に否定してるわけじゃねーぞ、俺は理想を主張するだけで何もしい奴は嫌いだけど理想を実現する為に行動できる奴は寧ろ好きだな部類だしな」

「アンタは普段の態度と発言の所為で勘違いされやすいのよ」

一輝を小馬鹿にするように微笑しながら言う重勝を揶揄うように笑みを浮かべて皮肉を言う楯無、それに対して重勝が軽い口調で返答し、涼花が呆れるように眩きながら盗聴スピーカーの電源を切った。

「それにしても呆れるような手際の良さだな佐野、まさかたったの数時間で連盟に侵入して黒鉄が監禁されている部屋を探り出して気付かれずに盗聴器を仕掛けて来るとはな……」

「アハハハッ！ 涼ちゃんやるねえ、さすが元西風隠密機動部隊の「鉄の乙女（アイアンメイデン）」さね！」

三日前に赤座が一輝を連れて行った後、深夜に破軍学園に帰還した重勝は涼花に「今から連盟の日本支部に潜入して黒鉄が監禁されている場所に盗聴器を仕掛けてきてくれ」と無茶な事を頼み、それを涼花はしようがなさそうに了承して新宿区に向かい、あつ

という間に連盟日本支部に潜入して重勝の頼み事を完遂して来たという出来事があった。あまりにも簡単に連盟に潜入し見つからずに盗聴器を仕掛けてきた涼花に対して黒乃と寧音は舌を巻いている、涼花の隠密スキルは驚く程優秀だなと感心する一方で、こんなにアツサリと侵入を許して連盟日本支部の監視防衛機能は大丈夫なのかと心配で仕方がない心境であるようだ。・・・寧音はまるで気にしていないようだが。・・・

「・・・ねえ・・・いい加減にして早いところ本題を話さないよ」

他愛ない話で場が乱れ、来客用のソファアに座る紅蓮の皇女が浮付いた雰囲気に苛々しながら一同にそう催促してきた。

一輝が倫理委員会に連れ去られてからというもののステラは気が気で無く常に眉を吊り上げて普段の涼花以上に不機嫌な雰囲気を醸し出して周りにばら撒いていた。この場に呼ばれる前も彼女は食堂で珠雫と校舎の一部を破壊する程のケンカをしている、一輝の事でステラと珠雫がケンカをするのはいつもの事だが今回はステラが弱音を吐いて珠雫を怒らせたといういつもとは異なる原因であった、そんなギスギスした中でこの場に呼び出されたステラは盗聴スピーカーから発せられた一輝の声を耳にして恋人が無事である事を確認すると気持ち少し軽くなって肩のチカラを抜く事ができたのだが、突如一輝の父親である蔵の声がスピーカーから発せられて面会が始まり、蔵が一輝の切実な申し出に対して非常な言葉を返した時、ステラの怒りは頂点に達した。

——魔導騎士の世界の秩序の為に何もできないお前は何もするな？認めて欲しかったら騎士をやめろですって？・・・それが・・・それが父親が実の息子に対して言う言葉なの!?!ふざけるんじゃないわよ!!必死に努力をして強くなつた人間を才能が無いつてだけで害悪と定める秩序なんてクソくらえだわ!!決められた運命に従って生きるだなんてまるで人形じゃないの!!私達伐刀者は腐つた世界の仕組みに組み込まれるだけの部品じゃない!!!

両親から大きな愛情を受けて育つて来たステラにとって子の夢を否定する親など存在してたまるものではなく、連盟が騎士に望む真の役割を知って内心怒りが火山の噴火のように爆発していた、じつとしてなどいられない、一輝を助けられる方法があるのなら早く教えろと彼女はこの場にいる全員に求めた。

「何から何まで話してもらおうわよ、アンタ達が何を企んで何をしようとしているのかを洗い浚い」

反撃の狼煙

「じゃあ順を追って話すぜ、倫理委員会の企みをブツ潰す計画をな」

無実の罪を着せられ連盟に連行されて行つた恋人を想い真剣な表情でこの場に集まつた面々にこれからどう動くのかを問うステラに重勝は室内をうろろう歩き回りながら説明し始めた。

「知つての通り今回黒鉄一輝は倫理委員会の奴等に連行され、奴が査問会とかいう名のくだらねー尋問をされる事になつちまつた理由はヴァーミリオン、お前と黒鉄が交際している事が外にバレて国際問題になりかねない状況になつた所為で倫理委員会の奴等がその不祥事の責任は国賓と交際するという軽率な行動をした黒鉄にあると主張した事によるものだ。だけどそれは法的に考えてもおかしい、既に元服制度によつて成人になつたと国から認められている伐刀者（俺達）はもうガキではなく交際は勿論結婚する権利もある、つまりお前等が交際しようがセツ○スしようが本来問題なんか起こり得ねーつつう事なんだが……」

「セツ!? ちよ、ちよつと!!」

「風間、交際はともかく学生の身で性行為をするのはさすがに問題になるぞ」

「寮の部屋割りを男女同室にした奴が何言ってるんだか……話を続けるぜ、そういうわけで本来認められている事柄を倫理委員会の奴等は新聞や報道などの情報メディアを利用して世間を騒がせ、黒鉄の奴を世の敵に仕立て上げて奴が査問会の場に出ざるを得ない状況を作り上げたという事だな」

重勝はまず今回の事の発端である一輝とステラのスキャンダル騒動について纏めた、この場にいる全員が今回の事件の内容を理解しているのかを確認し、理解していないのなら改めて理解させる為である。

「当然このスキャンダルはどう見ても捏造だ、倫理委員会の奴等はそうまでして黒鉄一輝という男を潰したいらしい、その黒幕は恐らくさつきスピーカーで聴いた黒鉄と話していた男……国際魔導騎士連盟日本支部長で黒鉄家の現当主【黒鉄蔵】だろうな、そして倫理委員長であるあの狸野郎は黒鉄家の分家【赤座】の当主……ここまで言えば察せるだろ？倫理委員会が黒鉄の奴を貶めて連盟から追放しようとしている真の理由をよ」

「……イツキの実家がFランクの落ちこぼれであるイツキを魔導騎士にさせない為に……」

一輝を連盟から追放しろと倫理委員長に命じた人物が一輝の父親である蔵であり、倫理委員長の赤座が黒鉄家の分家の当主であると重勝が説明した瞬間ステラは察する。

一輝の実家である黒鉄家は名家であるが故に異常なくらい面子を重んじる、Fランクの出来損ないである一輝を世に魔導騎士として出してしまったら家の名譽に傷が付くと考え今まで彼を騎士の道から排除する為に黒鉄家は数多の妨害工作を行ってきた連中だ、今回の件もその一環として一輝とステラの關係を利用されたのは間違いないだろう、なにせ一輝の妨害の為に家名の圧力だけで「実戦教科を受講する最低能力水準」などという普通あり得ないような無茶苦茶な規定を学園に組み込んでしまうような連中なのだ、奴等の仕業だと疑わない方が無理である。

「そういう事だ、仮に黒鉄敵個人の意志で黒鉄を追放しろとあの狸野郎に命じたんだとしても、盗聴器からさつき聴こえてきた黒鉄敵本人がぶっちゃけた主張の通り奴はカスな魔力量の伐刀者が成果を上げるのを害悪だと認識しているからどっちにしろ変わらねーな・・・ハッ！正直時代遅れのくだらねー考え方だぜ、確かに高望みせず全ての人間が生まれ持った能力に従って生きれば争いも起きねー平和な世界になるだろうな。だけど永遠に変わらないものなんざこの世にねーよ、形あるモノは必ずいつか滅びる、現状維持に固執した進歩のねえモノは時代の流れに飲み込まれるつつう未来（さき）が目に見えているからな、だから常に変わり続けなければならねーんだよ、魔導騎士の有り方も人の認識もな・・・」

重勝は先程盗聴スピーカーで聴いた敵の思想を鼻で笑って否定する。伐刀者という

異能力者がこの世に現れる以前より人間という生き物は文明を発達させ続け、常に前に向かって進歩してきたからこそ現代という時を生きているのだ、進歩無き秩序に未来(さき)はない、常に進歩し続ける時代の流れに乗れなければ時代に取り残されていずれは消え逝く定めなのだから。

「さて、これで今回の騒動の確認は終わりだな・・・それじゃ倫理委員会の企みを潰す計画について話すけど、その前に何か質問はあるか？」

今回の事件の説明を終えた重勝は執務机の前に立つてステラに質問はあるのかと尋ねた。

——質問ねえ、そんな事よりもさっさとその計画つてやつを話してもらいたいものだけど・・・そうだ！

ステラは折角なので気になっていた事を聞いておこうと思ひ、問いを投げた。

「ねえ、イツキの選抜戦はどうなるの？まさか不戦敗なんて事にはならないでしょうね？」

「そんな事は私の名譽に賭けてもさせない、黒鉄の試合は連盟日本支部の模擬戦場へ対戦相手を派遣して行われる事になっている。勿論審判として本校の教師も一人同伴するぞ、連中にジャッジなんぞを任せたら何をされるのかわかったものではないからな」
「因みに応援に行くのは無理さ、査問会が終わるまで面会謝絶らしい」

「完全に監禁ですわね……」

ステラの質問に対しては重勝ではなく黒乃が返答し寧音がそれに補足を入れるとスバルがそう呟いた、だが一輝は不戦敗にならないと聞くとステラは安堵の溜息を吐き、重勝が一回咳を払って本題を切り出す為に口を開く。

「まあそんなわけで選抜戦については黒鉄が負けねー限り問題ねえ、精神も幸斗のバカのおかげで高揚しているみてーだしな。そうなると後は連盟の奴等に反撃するだけなわけなんだけど……困ったことに計画を実行する為には倫理委員長の狸ジジイを公衆の全面に引っ張り出す必要があるんだ。今やつてる査問会の所為でそれが難しく……だからあの狸ジジイを引っ張り出す為の秘策として昨日、今回の件を説明して日本に来てもらう約束を取り付けたんだ——

——ヴァーミリオン皇国次期女王、第一皇女《ルナイズ・ヴァーミリオン》にな

「ブーーーーー!!!!!!!!」

重勝が赤座を公衆の全面に引つ張り出す為の切り札となる人物の名を真顔で暴露した瞬間にステラとスバルは衝撃のあまり吹きだした、涼花と楯無は眼を細めて呆れ、黒乃は片手で額を押さえて勘弁してくれと悩み、寧音は笑いを堪えるように腹を抱えて悶えている。

「今回の件は倫理委員会の奴等が「黒鉄が国賓であるヴァーミリオンと交際したという国際問題になりかねない軽率な問題を起こした」と告発した事がそもその発端だ、ならヴァーミリオンの家族に黒鉄の事を認めさせればこの件は収まるだろう？本来ならヴァーミリオン皇国の長である国王に来させるのが筋だが、国王は幸斗とヴァーミリオンの試合の動画を観た影響でショックを受けて気絶し、今現在も気絶したまま目を覚ましていないからな、だからルナの奴が国王代理として来日する事になったんだよ、黒鉄が自分の妹に相応しい男かどうか見極める為にn「ちよ、ちよっと待ちなさいよっ!」ん？」

微妙な空気の中何事もなかったかのように話し続ける重勝に気が動転していたステラが我に返って横槍を入れる。

「何でアンタ人の姉の連絡先知っているのよ!!?それに「ルナの奴」ってなんで親しそうに気安く呼んでいるの!!?」

「俺は傭兵時代の時、単独任務で一回だけヴァーミリオン皇国の隣国のクレールデルラント王国に行った事があってな、その時に訳あってルナと知り合ってダチになったんだよ」

「き、聞いてないわよそんなのっ!」

「・・・重勝・・・アンタがヴァーミリオンの第一皇女と知り合いだったなんて今初めて聞いたわよ・・・」

「ぼ、僕も初耳です!重勝さん、何で教えてくれなかったんですか?」

「ん?言つてなかったか?」

「言つてないわ(ません)よ!!」

重勝が過去にルナアイズと知り合っていたという事実を聞いて納得いかないと重勝に問い詰めるステラと涼花とスバルであったが、重勝がいつものように惚けた為に三人はすかさず指摘をした。それにしても対暗部の一族である楯無といい、ヴァーミリオン皇国の第一皇女であるルナアイズといい、重勝の交友関係は一体どうなっているのだろ

うか・・・。

「ルナ姉もルナ姉よ、そんな話アタシに一言も話してくれなかつたし・・・」

「まっ、非合法の傭兵と知り合つたなんて話してもしよーがねーだろうからな。そういう訳で今から三週間後にヴァーミリオン皇国の第一皇女が国王代理として黒鉄一輝という男が自分の妹の婿に相応しい人間かどうかを見極める為に来日する、明日にはその事がメディアにも報じられる筈だ。ヴァーミリオンの次期女王が訪ねて来たらさすがの倫理委員会も査問会やら面会謝絶なんでも中止せざるを得ねーだろうし、黒鉄の奴を表に出さないわけにはいかなくなるぜ」

「そしてそこでお前を含めた当事者同士の話し合いの場が持たれることとなれば必ずこの件に関しての結論は出る。今の黒鉄が「不祥事」を起こしたという連中の論調は当事者同士の話し合いが持たれていないうちから勝手に吹いているだけの憶測に過ぎないからな、ヴァーミリオンの親族が黒鉄を認めれば連中の論拠は根底から覆る」

「そうなれば今度はこつちが倫理委員会を迫及して彼等の企みを潰にかかせる事ができるわ、きつと倫理委員長の赤座はそうさせない為に公衆の全面に出て来て黒鉄君を陥れるような有る事無い事をルナアイズ様とその場に集まつた民衆に吹き込もうとする筈・・・そこでこの前私が連盟に潜入して調べて来たこの「倫理委員会が今までに起こしてきた不正の数々の資料」を新宮寺理事長と西京教諭がその場で倫理委員長に叩き付ければ連

中は言い逃れできず負けを認めるしかなくなるわ」

楯無が重勝と黒乃の説明を引き継ぐように説明しながらプリントの束を机の上に置く、プリントには五年前の西風壊滅事件の真相を始めとした倫理委員会の不正行為の数々が倫理委員長の赤座の直筆で記録されていた。

「既に筆跡鑑定は済ませてあるぜ、動かぬ証拠だ。計画通りにいけばこれで倫理委員会の奴等を黒鉄を追放するという企みごとブツ潰す事が出来る！」

「アハハハッ、やるじゃねーか重坊！こりゃあ面白くなつてきたよ！あの赤狸が無様に絶望する姿が目に見えねえ」

「ま、ルナの奴が黒鉄を認める事が前提にはなるけど話の分かるアイツの事だ、黒鉄の誠実な人間性を見れば気に入るだろうし後は黒鉄の実力さえ見せればすぐに認めると思うぜ、丁度三週間後は選抜戦の最終戦だから黒鉄の実力を披露する場については問題ねーしな。いや、黒鉄の精神を奮起させた事といい、親馬鹿で娘の事に関しては頭の固いヴァーミリオンの親父を長期間意識不明にして事を運びやすくしてくれた事といい、本当に幸斗の奴視えないところでいい仕事をしてくれたな！おかげで計画は上手く行きそうだが！ハハハハハハッ!!」

「……………」

寧音と共に高笑いをする重勝を見てその他の面々は啞然とした表情で思った、「コイ

ツを敵に回したら厄介な事になるだろう」と、倫理委員会の企みを潰す為にこの男はこの数日の間でこれだけの手を裏で回していた事を思うと呆れてモノを言えない。こんな厄介な男を敵に回した倫理委員会には自業自得とは言え、ご愁傷さまと言いたくなるくらい同情を禁じ得なかつた……。

——…ま、倫理委員会の連中は公衆の全面で今までの不正を暴露するだけにしといてやるが、あのクソ狸だけはこれだけじゃあ済まさねえよ、アンタには西風を舐めた計画で嵌めてくれた礼をたつぷりとしてやるぜ、この世に塵一つ残してやらねーから首を洗って待っているよ……。

高笑いをして高揚に浸る重勝であつたが、その眼の奥には氷の様に冷たい非情な殺意を秘めていたのだつた……。

計画の決行は学内選抜戦の最終戦が行われる三週間後となった。この計画の内容は一輝の試合の審判として連盟日本支部に派遣された《折木有里（おれき ゆうり）》教諭の口から一輝にも極秘に伝えられ、【運命の日】を迎えるまでは選抜戦に集中するという運びとなった。

ここままで全勝を守っている幸斗、重勝、刀華、有栖院、そして一輝はそれからも対戦相手を寄せ付ける事も無く連勝を重ね続けて行った。【運命の日】が後一週間に迫った頃には全勝を維持する生徒が幸斗達を含めて丁度二十四名となり、代表入りの生徒六人は全勝の者で埋まる事が現実のものとなった事によつて涼花や珠雫等一敗を喫している生徒達は全員選抜戦のエントリーが抹消される事となり、残りの試合数は泣いても笑つてもあと二試合となった。

ここまで来ると残りは全員一瞬たりとも油断ならない強者だ、序列二位の刀華もそうだが序列三位の如月烈や未だに伐刀絶技を使わずに体術のみで勝ち続けている如月絶はもちろん、それ等には劣るだろうが学園序列一桁台の生徒を破つて全勝を維持し続けているという三年の【葉暮姉妹】も中々の実力者であるとされているので気を抜く事はできない。

なお一層気合いを入れて鍛練に励む幸斗であつたが、そんな中で幸斗の生徒手帳に次の対戦相手を知らせるメールが送られてくる。

『真田幸斗様の選抜戦第十九試合の相手は、三年一組・如月烈様に決定しました』

次の幸斗の対戦相手は破軍学園内で数少ない重勝の友人であり、学園序列三位の猛者である烈だった。幸斗は送られてきたメールを見ると重勝が認める程の強者である烈と戦える事に歓喜を上げる。あと二回、あと二回勝てば七星剣武祭に出場する事ができる、大きな壁があと二つ立ち塞がる事になるが最大のライバルである蒼い龍との約束の舞台はもう目の前だ！

重勝、禁忌（タブー）を犯す？選抜戦第十九戦目開幕！

数々の激闘が繰り広げられた学内選抜戦も残り後は後二戦・・・どんよりとした曇りが天を覆う下、破軍学園第一訓練場内では選抜戦最終戦へと駒を進める十二人の騎士を決定すべく、選抜戦第十九戦目の試合が進行中であった。

『ご来場の皆様、お待たせしました！これより選抜戦第十九戦目を開始します！』

司会進行の女子生徒による開始宣言が場内に響き渡り、会場内に歓声が大いに沸いた。

『他の会場では既に九試合が行われ、残りの試合は此処第一訓練場で行われる二試合と今話題の問題となつている黒鉄一輝選手が試合をする国際魔導騎士連盟日本支部の模擬戦場で行われる一試合のみとなりました！黒鉄選手の試合の結果は決着が着き次第その報が届けられるとの事ですが、果たして黒鉄選手は最終戦へと駒を進めて来るのでしょうか!?どう思いますか、本日のゲストの西京寧音先生？』

『ん、よっぽどの事がない限りたぶん楽勝で黒坊が勝つんじゃないの？今日連盟に行つてんの別に大した事なさそうだったしな』

『先生という立場なんですから依怙臆員は止めてもらいたいものですが・・・この人は

言つても聞かないでしょうね・・・まあ気を取り直して、それでは本日の第一試合の選手入場だああああっ!! まず青ゲートからリングに上がつて来たのはこの世の悪を愛と夢と希望のチカラで討ち滅ぼし世界の平和を守る可憐な騎士(ヒロイン)！ 自らが想像したモノに身体を変化させる伐刀絶技《変身(メタモルフオーゼ)》と愛と正義のヒロインのチカラの前に悪が栄えた例(ためし)無し！ 校内序列第八位、三年五組Cランク！ 《変身少女(チェンジガール)》《綺羅星(きらほし)》のぞみ《選手ですっ!!》

まずピンク色に染めた髪を白いリボンで結んでツインテールにしている眼が不自然にキラキラしている女子生徒がバトルフィールド上に現れ、一部の男子生徒達の声が歓喜をあげた。胸元に赤いリボンを付けて袖とスカートの裾にヒラヒラの白いレースを縫い付けた変身ヒロイン風の改造学生服が彼女の可憐さと痛々しさを強調させている。

『あの娘確かこの前十八歳になつたって言つてたよな?・・・十八歳になつて変身ヒロインとか・・・プツ!』

『やめてあげて下さい、世の中には二十歳を越えても魔法少女をやっているヒロインも存在するらしいですからまだおかしくない筈です・・・たぶん・・・さあ! 続きまして赤ゲートより姿を現したのは毎度お馴染皆の嫌われ者! 暗黒の剣を携えて空から襲い掛かるその姿はまさに悪魔! 恐らくこの男程悪役(ヒール)が似合う者はこの学園には居ないでしょう!! 校内序列不動の第一位、三年一組Bランク! 『裏切り者の序列一

位（エース・オブ・ビトレイアー）」風間重勝選手の入場です!」

赤ゲートを潜り抜けてバトルフィールド上に黒い悪魔——重勝が気怠そうに額を指で掻きながら現れ、瞬間もはやお馴染となったブーイングの嵐が飛ぶ。重勝はそれを完全無視して目の前に立つヒロインと向き合った。

「現れましたね!学園の皆を不幸にする裏切り者の悪魔、風間重勝!!その悪逆非道な行い、この「プリティーマジカル☆のぞみ」が許さない!愛と希望のチカラをもつて成敗してあげるから覚悟しなさい!!」

「.....」

キラツ☆と右手の人差し指と中指を立ててその間から右眼が覗くように手を添えると左手を腰に当ててウインクをしキメポーズを取るのぞみを見て重勝は沈黙する。ハツキリ言つて痛い、周りから「いいぞいいぞのぞみちゃあああん!」や「行け行けのぞみちゃん!学園に巣くう諸悪の権化、風間重勝をやっつけろおおおつ!」とか「プリティーマジカル☆のぞみ、萌えええええつ!!」などという気色悪い男の声が第一訓練場内に響き渡つてかなり鬱陶しい。

「夢と希望と愛よ、世界に届け!出でよ《謎心の錫杖（パンドラ・ハーツ）》!!」

そしてのぞみはクルクルその場で回りながら先端にハート型のフレームが付いた杖型の霊装を顕現させた。

「・・・未来（さき）を指し示せ、「重黒の砲剣（グラディウス）」

のぞみに対して奇妙なモノを見る眼を向ける重勝も自身の霊装である砲剣を顕現して手に取り、その切っ先をのぞみに向けた。

『両者霊装を顕現！これで試合準備完了です！正義のヒロインが愛と希望のチカラで黒い悪魔に鉄槌を下し、世界の平和を護り抜くのか!?それとも悪魔がヒロインを討ち、世に悪が蔓延ってしまうのか!?それでは参りましょう！選抜戦第十九戦目、本日の第一試合——LET'S GO AHEAD（試合開始）！』

「その眼に焼き付けて、私の華麗なる変身を！プリティーマジカル☆チェーンジ!!」

『おおっと綺羅星選手！初っ端からお得意の「変身」を使ってきたああああ!!彼女の身体が眩い光に包まれてしまいました！今まで様々なモノに変身して周りをあつと言わせたきた綺羅星選手ですが果たして今回彼女は何に変身するのでしょうか？私、とても楽し——』

その瞬間、愛も勇気も夢も希望も裏切り者に向く憎しみさえ掻き消す爆★発★音が第一訓練場中に鳴り響いた。

「・・・テレビの中でやっていろよ」

その爆発音を起こした張本人である重勝が先程までのぞみに切っ先を向けていた砲剣を持つ腕を下ろしてそう吐き捨てていた。下ろした砲剣の切っ先を見てみると発砲

した後のような煙が立っており、のぞみに変身を行っていた筈の場所が爆煙に覆われている……ここまで言えばもう分かるだろう、そう、この男は変身ヒーロー・ヒロイン物最大の禁忌（タブー）を犯したのだ。

「「あの野郎、やりやがったあああああああつ?!?!?!」

『ななななななんとおおおおおつ!!風間選手、綺羅星選手が変身途中にも拘らず無情にも砲撃を発砲!!正義のヒロインに相對する悪役に有るまじき卑劣な不意撃ちをこの男はやつてしまいましたあああああつ!!汚い!さすが裏切り者の序列一位、汚い!!』

『アハハハハハツ!!マジでやりやがったよ重坊!こりやあ悪役失格さね、プププツ!』

観客スタンドの一部の男子生徒達の大ブーイングが飛ぶ中砲撃によつて発生した爆煙は止んで消え、そこには黒焦げになつて横たわり失神した無様なヒロイン（笑）の姿があつた……。

「綺羅星のぞみ、戦闘不能!勝者、風間重勝!!」

『そしてレフェリーより風間選手の勝利が告げられましたつ!!風間選手、十九戦連続完全試合（パーフェクトゲーム）!やはりこの男を止められる騎士はこの学園には居ないのか?!最終戦進出です!!』

「ふざけんな裏切り者がっ!!」

「とつと引つ込みやがれクス野郎っ!!」

「お前なんか東堂会長が必ずブツ倒してくれろ! いつまでも調子に乗ってんじやないぞ!!」

重勝の勝利が決まると同時に観客スタンドから野次と共に大量の空き缶やペットボトルが投げ入れられる、当たり前のように観客の生徒達によるブーイングだった。

「・・・・・・・・はあ・・・・・・・・よく飽きねーな・・・・・・・・」

呆れるように溜息を一回吐いてバトルフィールド上から退場して行く重勝、彼が去つた後のバトルフィールド上では投げ入れられて散乱したゴミの山に黒焦げのヒロイン（笑）が埋もれてしまったのであった・・・・・・・・。

「シゲ、お疲れ!」

試合を終えて赤ゲートを潜り控室に戻って来た重勝を次の試合に出る為に待機していた幸斗が出迎えた。

「ああ、疲れたな・・・精神的に」

「なんだよ、あれくらいでだらしねえなシゲ!最近フラフラとどつかに行く事が多くなったから鍛練不足で身体が鈍ったんじゃない?ん?」

「かもな・・・お前や親父達の喧しい口上とかで当の昔にあの手の類には慣れた筈だったんだが・・・」

「なんだか話が噛み合っていない・・・幸斗は戦闘による気疲れの事を言っていて、重勝は先程倒した変身ヒロイン（笑）の痛々しいペースに嫌気を感じて頭痛がする事を話している・・・間違いなく話が噛み合っていない・・・」

閑話休題（それはさておき）試合後に観客の生徒達が多量のゴミをバトルフィールドに投げ入れた所為で会場整備の為にインターバルが設けられたので少し時間ができた。幸斗と重勝はこの時間を使い、控室に置かれてあるソファアームに座って幸斗の今日の対戦相手である如月烈の話をする事にした。

「シゲ、烈先輩って強えのか？ 序列三位って言ってたけどよ」

幸斗はドストレートに重勝に質問をする。烈の事に関して幸斗が知っているのは重勝と刀華に次ぐ破軍学園の校内序列第三位である事と「空間土竜（ディメンショナルモール）」という二つ名で呼ばれている事、後どうでもいい事だが食事に必ず焼肉のタレをかけて食べる変食者であり「つてりユウだ」という口癖である事・・・そして重勝の学園の数少ない友人である事ぐらいである。情報が少ないので幸斗は試合の参考の為に聞いておこうと思ったのだらう・・・まあ、幸斗は涼花のように相手の情報を活かす戦い方は向いていないので単に興味本位で聞いたのだとは思うが・・・。

「・・・ああ、強えーぞ。身体能力に関しては弟の絶や俺達には劣るがヴァーミリオン並には優れているし、奴の能力に至っては間違いないく「破軍の全生徒中最強の能力」だからな」

幸斗の質問に対して重勝はソファアの背凭れの上に両腕を乗せて天井を仰ぐように凭れ掛り、思い耽るように確かに口にした、烈は破軍最強の能力を持っていると・・・。「それマジな話か？ お前や生徒会長さん、ステラよりも強い能力だって言うのかよ？」

幸斗はそれを聞いて顔を少し引きつらせて軽い驚きを露わにしている、当然だ、空を自由に舞い地上の者を砲撃で蹂躪する重勝や対応不能の雷速の抜刀術を抜き放つ刀華、そして世界最高峰の魔力量を持ち一切合切を摂氏三千度の炎で塵へと変えるステラス

らも超える能力を序列三位でBランクの烈が使つてくると言うのだから。

「まーな。ハッキリ言つて烈の伐刀絶技《土竜の手（モール・ザ・ハンド）》はチートだぜ、俺は奴と誰も見ていない山奥で無許可で模擬戦をした事があつたんだが・・・危うく負けるところだった」

「はあっ!?!」

幸斗は今度こそ大きな驚きを露わにした。前に重勝は破軍学園に入学してから去年の七星剣武祭一回戦の棄権を除き公式戦模擬戦学園イベント戦負け無しだったと烈から聞いたのだが全てが完全試合だったとは聞いていない、それでも自分の憧れの伐刀者である重勝が模擬戦で敗北寸前まで追い詰められた事があつたという事実には驚愕せざるを得なかったのだ。

「それってどういうk『一年・真田幸斗君、三年・如月烈君、試合の時間になりましたので入場してください』」

「おっ!掃除終わったか、意外と早かったな。お待ちかねのお前の出番たぜ幸斗!」

西風の若手の中でもトップクラスの實力を誇り破軍学園最強の学生騎士である重勝がチートと称する烈の能力とは一体何なのかと幸斗は重勝に聞こうとするが、運悪くインターバルの時間の終わりと次の試合の開始準備完了を告げるアナウンスが流れた。あれだけのゴミをもう片付けたのかと重勝は運営スタッフの有能さに感心し、幸斗の背

中をバン！と叩いて激励を入れると二人はソファーから立ち上がり、幸斗は入場ゲートを潜って行くこうとするのだが、重勝がちよつと待てと幸斗を呼び止めた。

「何だよシゲ？」

「時間がねーから詳しく烈の能力について話せねーけど、一つだけアドバイスだ。アイツの霊装には絶対に触れるなよ・・・【消される】ぜ」

「？」

幸斗は重勝のアドバイスが意味不明過ぎて首を傾げた。消される？それはどういう事なのかと追及したいところだが残念ながらそんな時間は無い。

「・・・まつ、良つか！戦れば解るだろうからな。んじゃあシゲ、楽しんで勝ってくるぜ！」

先程のブーイングの嵐が嘘の様に熱気的な大歓声が聴こえてくる。薄暗い通路の中を一人の鬼は己の行く道を阻む敵を討ち果たさんが為に目の前に広がる光に向かつてゆつくりと進行しその光を突き破って大歓声が包むバトルフィールド上へと足を踏み入れた。

『ちよつとしたアクシデントがありました、皆さんお待ちかねの本日第二試合の開幕です!多くの人がこの試合に注目している事でしょう!何故ならこの試合は本日の: :いや、この選抜戦第十九戦目の最好カードと断言できる組み合わせ!代表入り候補者同士の潰し合いなのですから!会場内の興奮が最高潮に達するのも当然と言えるでしょう!!・ ・ ・ それでは選手入場だあああつ!!赤ゲートから最初に姿を現した騎士は黒鉄一輝選手同様魔力量が乏しい才能社会の敗残兵!しかあしつ、侮る事なかれ、奴は雑兵に非ずつ!【紅蓮の皇女】【城砕き(デストロイヤー)】【深海の魔女(ローレライ)】といった名だたる猛者を次々とその剛力と不屈の闘志を以って蹴散らしここまで進撃して来た最強の兵(つわもの)なりつ!!現代に蘇った戦国武将!!一年二組Eランク!【殲

滅鬼（デストラクター）真田幸斗選手、ここに見参だあああああつ!!!」

割れんばかりの大歓声上がり、運命を覆す伐刀者真田幸斗は堂々たる姿勢で戦場（いくさば）に立ち、正面に見える青ゲートの中より現れる猛者を迎え撃たんが為に闘気を高める。その闘気の圧力は対峙する者に巨大な鬼を幻視させる程の凄まじさだ……しかし今回の敵は破軍でも三本の指に入る猛者、鬼を幻視する程度では怯む事は無い。

『そして後に続いて青ゲートを潜り抜けてリングに現れた騎士は我が校のビッグ3！昨年の七星剣武祭にも出場し成績は「雷切」東堂選手に次ぐベスト8！その節は東堂選手と同じく惜しくも現「七星剣王」諸星選手に破れてしまいました、その実力は折り紙付きです！果たして地に身を潜める土竜の鉤爪は鬼をも狩り取るのか!?校内序列第三位、三年一組Bランク！【空間土竜】如月烈選手の入場おおおおおつ!!!』アホ毛が立った黒い髪が目立つ伐刀者如月烈がバトルフィールド上に現れた瞬間に会場の熱気は最高潮に達する。大気を震わせる程の大歓声が響く中で20mの間合いを挟み、幸斗と烈、両雄は遂に向かい合った。

「待ってたぜ烈先輩！あのシゲが認める程の強え相手と戦えるなんてワクワクするぜつ!!!」

「ははっ！俺もだ真田。お前はヴァーミリオン戦に碎城戦、黒鉄の妹戦と、あつと驚くようなパフォーマンスを次々に披露してその存在を周りに大きく刻みつけたってリユウ

だからな、一学生騎士として戦って勝ちたいと思わない奴はヘタレだつてリユウだ」

不敵な笑みをして互いに今の想いを打ち明け闘志を燃やす二人。

「運命を切り拓け! 鬼童丸っ!!」

「掘り進め! 《神楽土竜（かぐらもぐら）》っ!!」

対戦カードが決まった時からこの瞬間が待ち遠しかった。二人は歓喜を上げるようにそれぞれの霊装（えもの）を顕現、幸斗は朱い刃（やいば）の太刀を取り、烈はモグラの鉤爪を模した二爪一对の武装を両手の甲に装着した。

「勝負だ真田っ!!」

「臨むところだぜ烈先輩っ!! アンタをブッ倒してオレは上に行くっ!!」

『ほっほ、なかなか凄まじい闘気さね♪ちよつとピリツと来たじゃねえか』

『私は既に汗びっしりです! これは我々の心を震わせるようなドラマが期待できるでしょう!! それでは選抜戦第十九戦目、本日の第二試合にして最終試合を開始します! 皆さんご一緒に試合開始を宣言しましょう! セー……のっ!!』

「「「「「LET'S GO AHEAD（試合開始）!!」」」」」

試合開始が告げられると同時に幸斗はロケットスタートの如く飛び出して行った。

『おおっと、やはり真田選手いつもと同様に正面から堂々と先制を取りに行つたあああああつ!! 如月選手、真田選手の規格外の攻撃力に対してどう対処するっ!!?』

土竜の手（モール・ザ・ハンド）

これまでの試合、幸斗は全て自分から先制を仕掛けている、四歳の頃から十一年間鍛え高め続けて身に付けたこの規格外の攻撃力を信じているからだ、自分の剣の一振りは全てを打ち砕けると・・・それは決して慢心でも過信でもない、今まで積み上げてきた自分のチカラを誇りに想い、自信を持っているのだ。

今回もまた幸斗は愚直に自分のチカラを信じて正面から対戦相手の烈に攻撃を仕掛けに行つたのだつた、烈がどんな能力を使ってこようと関係無い、上等だ、堂々と正面から打ち砕いてやる、真田幸斗という鬼は今までもそうやって戦ってきたのだから・・・だが——

「っ!!?」

烈を射程圏内（クロスレンジ）に捉えた瞬間、突如として幸斗の元傭兵としての戦場の感覚が警報を鳴らし背筋に悪寒が奔つた。

—— なっ!!?何なんだよコレッ!?

ヤバイヤバイヤバイッ！幸斗の脳内にはそんな文字の羅列が刻み続けられて感覚が危険信号を発しており、彼は前進していた足を止めてしまう。その隙を学園序列三位の

実力を持つ烈は逃しはしなかった。

「・・・隙ありだ、真田っ!!」

「っ!!がはっ!!」

烈の姿がブレて一瞬にして幸斗の間合いに入り込み烈の強烈な飛び蹴りが幸斗の腹部に突き刺さる、選抜戦第十戦目の時に兎丸恋々戦で如月絶が使っていた【如月瞬煌流体術】の秘技にして基本の体技である【瞬間】だ、膝を深く曲げ全身を撃ち出す様に一気に脚を伸ばして爆発的な初速で相手の不意を突くその走法は驚異的な突破力を誇り、合わせて蹴り放った一撃が幸斗の身体を後方へと突き飛ばす。

「ぐほおっ!!」

そのまま背中から赤ゲートの上の壁に叩き付けられる幸斗、VSステラ戦の時とは真逆の展開だ、壁に叩き付けられた幸斗は万有引力の法則に従って地面に落下し四つん這いの体勢で顔を上げ、前方約30m先で【どうだっ!】と言っているかのような不敵な笑みをしてこちらを見据えている烈を苦虫を噛み潰したような悔しさを噛み締めて睨みつける。

『真田選手いつも通り正面から先制攻撃を仕掛けに行くも、カウンターで如月選手の蹴りをモロに受け吹っ飛ばされたっ!!先制を決めたのは【空間土竜】如月選手!流石は序列三位と言ったところでしょうか!?真田選手がこれまでに戦ってきた生徒達とは一味

も二味も違います!!』

烈の先制で観客達の大歓声が一気に沸き上がる、試合開始早々かなりの盛り上がりであった。幸斗は痛ててと立ち上がり10カウントルールによりレフェリーが十数える前に再度バトルフィールド上に上がり先程の悪寒を警戒するかのように周囲に気を張り巡らせながら鬼童丸を下段に構えて烈と向かい合った、試合はまだ始まったばかりである。

「何やっているのよユキトツ!? 怖気づいて立ち止まるなんてアンタらしくないわよ!!」

右側に青ゲート、左側に赤ゲートが見える位置の観客スタンド三階の席で観戦しているステラが先制を受けてしまった幸斗に苛立ちを覚えて激昂している、確かにいつもの幸斗らしくない行動である、試合で彼女を真正面から吹っ飛ばした真田幸斗という伐刀者は相手を攻撃するのに躊躇いを見せる小心者ではなかった筈だ。

「……ふう……少し落ち着きなさい（ステラ）、最近の周りの陰口の所為で気が立っているのは知っているけどあのバカに当たっても仕方がないわ」

「別に当たってなんかいらないわよ！そんな事よりアンタはどうなのよりヨウカ!?ユキトはアンタの仲間でしょう？知り合つて間もないアタシにすらユキトらしくないと感じたのにアイツと昔馴染のアンタは今のを見て何とも思わなかったわけ!？」

ステラの右隣の席に座っている涼花がイライラして落ち着きの無いステラをしようがないなという感じで宥め、ステラはそれを気に喰わなく思い反発して涼花に物申す。確かに今のステラは他人には近寄り難い程苛立つて気分を害していた、二週間前のスキャンダル騒動と倫理委員会による恋人である一輝の拘束と監禁、それによつて彼女に向けられる学園の生徒達の軽蔑の目と陰口、そして何日も愛しの恋人に会えないという状況が彼女に耐え難いストレスを与え続け現在に至つてのである（因みに涼花がステラを名前呼びにしているのは二週間前幸斗が奥多摩の合宿場に向かう前に以前の生徒会室前でのやり取りでステラが言った伝言を涼花に伝えたからである（※詳しくは

【最弱の邂逅】の話を確認して下さい）。

まあ、涼花の言い分は正しいのだがステラの言う事も一理ある。幸斗と同じ元西風の団員である涼花が攻撃を躊躇して足を止めた幸斗を見ても落ち着いていられるのは確かに変だ、本来ならステラが言った文句は涼花が言うべきセリフの筈だし、いつもの彼女ならば「あのおバカ！」という罵倒を交えて毒づいているところであろう。だが彼女は心変わりした様子も無く普通に答えた。

「あら？ 理事長から話を聞いていなかったのかしら？ わたしもあのおバカも嘗ては最強クラスの傭兵団【西風】の一員だったのよ？ 【実戦の感】の鋭さはこの学園の生徒達の誰よりも優れていると自負しているわ。恐らく幸斗は如月先輩に接近した瞬間に「あのまま突っ込んだら危険」と感じたのね、「吹っ飛ばされて壁に追突する選択が最良の結果だった」と言えるくらいに」

「はあ？ 何で吹っ飛ばされるのが最良なのよ!? 最悪の間違いでしょう!」

涼花の言っている事を意味不明に思つてステラは苛立ちながらそう言う。それにしてもステラは少し苛立ち過ぎじゃあないだろうか？ 周囲の生徒達が声を張り上げている彼女に奇妙なモノを見る目線を向けている。

「・・・いや、最良だな」

ステラの言い分を否定したのは涼花の右隣の席に座っていた烈の弟の如月絶であつ

た。

「馬鹿正直に正面から行くかと思っていたが案外真田は戦闘においては頭の回転が速いらしい、或いは昔の実戦経験の賜物か・・・いずれにしてもあのまま突撃していたら間違ひなく真田は【消されていた】、正しい判断だったな」

無表情で幸斗を称賛する絶、幸斗がもしいつも通り真正面から斬り掛かっていたとしたら幸斗は烈の迎撃によって【消されていた】らしい。

「【消されていた】？何よそれ!？」

それを疑問に思ったステラは立て続けに疑問を言うがそれに答えたのはこの場に居るのが意外な人物だった。

「それが如月さんの能力だからですよ、正確には少し違いますけど」

「トーカーさん?」

ステラの左隣の席には何故か刀華が座っていてステラの疑問に対して優しい声で返答をしてきた。

「あれチートだよな☆、最速の【雷切】と相手の動きを読む【閃理眼】を持つ刀華じゃなかったら近づいた瞬間に一巻の終わりだぜ」

「うむ、其もまさかチカラの強さだけではどうにもならないというモノがあるとは思ってもみなかったな、如月の能力を見ると己の認識というものを改めさせられる」

「まあ、要は当たらなければどうという事は無いよ！アタシはキサラギ先輩と戦う事になったら逃げ回るけど……」

「【消される】……ね……その言葉から予測するに身体強化系はもちろん自然干渉系でもなさそうね、概念干渉系か因果干渉系か……どちらにしてもかなり強力な能力なのは間違いのないわね」

「如月先輩がどんな能力を使うのかは知らないけれど私はあの真田さんがこの程度で終わると思えないわ、あの人はお兄様の次に凄い人なんだから」

刀華の左隣には泡沫・砕城・恋々・有栖院・珠雫の順番で席に着いており、それぞれ試合を観戦しながら雑談をしている。錚々たるメンツだ、試合よりも学園の有名人達が一堂に会している事が気になってチラチラ彼等を見ている生徒も少なくない。

——ここに黒鉄一輝が居たら破軍学園のオールスター大集結ってところだったわね。

この場に集まったメンツを見て涼花はそんな事を考えていた。第一訓練場に入る前にバツタリと出くわした彼等は「折角だから皆一緒に試合を観戦しましょうか」という有栖院の提案でこの状況なのだが、生徒会に敵視している重勝が居ないからか意外と楽しく会話が弾んでいるようだ。

「……トーカさん、一体キサラギ先輩の能力って何なの？あのユキトが攻撃を躊躇うな

んて尋常じゃないわ」

「説明するより見た方が早いですよ。今【閃理眼】を使つて真田君が次にどう行動するかを読みました。が恐らく近づかず遠距離からの攻撃でしょう」

「賢明な判断だな、真田の奴が烈の能力を見破つたにしろ不明なままにしろ得体の知れない相手に対して無闇に接近戦を仕掛けるのは素人以下、飛び道具で相手の動きを牽制するのが定石だ・・・尤も——

——烈は飛び道具すら【消す】から意味が無いがな・・・」

絶はバトルフィールド上で烈から距離を取って太刀を振り上げる幸斗を無表情で見据えてそう言った、幸斗に哀れみを向けるように……。

「どうした真田、掛かって来ないのか？」

烈が右の鉤爪を手招きするようにクイクイ引いて幸斗を挑発する、普段ならその誘いに乗って突撃するところだが幸斗は控室を出る前に重勝が言ってきたアドバイスが気になっていた。

『時間がねーから詳しく烈の能力について話せねーけど、一つだけアドバイスだ。アイツの霊装には絶対に触れるなよ．．．【消される】ぜ』

【烈の霊装に触れると消される】、恐らくそれが先程の悪寒の正体についてのキーワードだろう、烈の霊装は今彼の両手に装着されている鉤爪【神楽土竜】、あれに触れてはならないのなら接近するのは愚策だ。幸斗はまず自分の規格外の攻撃力を正面からぶつけて強引に打ち破る事を考えたのだが烈の能力が【霊装に触れたモノを消す】ものだと仮定してもどの程度消せるのかは皆目見当が付かない、遵ってやはり自分自身が近接戦を仕掛けに行くのはNGだ。となると．．．。

「．．．烈先輩」

「ん？何だ？」

烈から約20mの距離を挟んで立つ幸斗は眼を瞑り、身体の中から闘気を捻り出して太刀を持つ左腕に集中させる、幸斗が剣圧閃光を放つ際に一瞬だけ発動させて強化を施す【戦場の叫び（ウォークライ）】だ。青白い焰のような闘気が瞬間的に幸斗の左腕を包み込み、通常でも規格外の腕力が想像を絶するものと化す。振り上げると風が天に昇り、天蓋を歪ませる。そして燃える焰のような眼（まなこ）を開き、その双眸に対峙する相手の姿をしつかりと収め、そして――

「シゲが学園最強と言ったその能力．．．確かめさせてもらうぜ、この一発でなああああ

あああああああああああああああああああつ!!」

刃を振り下ろした。

『出たあああああつ！真田選手お得意の剣圧閃光だあああああつ!!振り下ろされた太刀から解き放たれた暴力の波が如月選手を襲いに行くつ!!その火力は物理攻撃でありながらステラ・ヴァーミリオン選手の天壤焼き焦がす竜王の焰（カルサリテイオ・サラマンドラ）を凌駕する超破壊の一撃!!如月選手これを躲せるか!!?』

「.....」

巨大な閃光が空間を蹂躪するが如月烈は一步も動く気配を見せない。口もとを凝視すると少々ニヤリと吊り上がっていた。

「.....凄まじいな真田、剣気だけで身体が震える、しかもこれが魔力は一切使わない物理攻撃だと言うんだから驚きだつてリユウだ」

圧倒的な暴力の波が迫る中で烈は唐突に語り出した、未だに彼は他に何かをする素振りすら見せないでいる。

「才能の無いお前が一体どれだけキツイ鍛練と実戦を繰り返してここまでの一撃を放てるようになったのか想像するだけでも芯が震えるつてリユウだな、風間が言っていた通り本当にとんでもない男だつたつてリユウだよお前は.....」

剣圧閃光があと約3mに迫つたところで烈が動きを見せた、先程幸斗が太刀を天に掲

げたように右腕を振り上げて鉤爪を天に翳している。

一体何をするつもりだと幸斗は思ったが間もなく閃光は如月烈という存在を飲み込もうとしている、いくらBランクといえどもこれが直撃したら一溜りも無い筈だ。これは決まったかと思われたが――

瞬間、烈が掲げている鉤爪が青紫の光を纏って振り下ろされ、なんと接近した暴力の波が上から引き裂かれるように掻き消された。

「――なっ!!?」

逆風が幸斗の髪を逆立てる、同時に彼は今まで自分が磨き上げてきた自慢の一撃が軽々と掻き消されたという事実には驚愕の表情を浮かべて絶句した。

「だが相手が悪かったってリユウだな、土竜（モグラ）の爪は核兵器も隕石もか〇はめ波でさえ【削り取る】ってリユウだ」

鉤爪を振り下ろしたモーシヨンのまま挑発の笑みを浮かべる烈、お前のチカラはそんなものか？ そう言っているようだった。

『でっ、出た出た出たあああああつ!! 序列三位【空間土竜】の代名詞たる伐刀絶技、【土竜の手（モール・ザ・ハンド）】が全てを葬り去る殲滅鬼の剣圧を掻き消しましたあああああああつ!!』

「うおっ！何時見てもチートだなコレ。やっぱり幸斗のバ火力すらも消せるのかよ……」
壁に設置されている大型モニターから発せられる実況が控室内に響き渡る。ソファアに座ってモニターで試合を観戦していた重勝は幸斗の剣圧閃光をいとも簡単に掻き消してしまった烈の【土竜の手】の反則的能力に呆れの言葉を口にしてている。

「烈の異能、それはアイツの霊装【神楽土竜】の爪で抉ったモノを【空間ごと削り取る】概念干渉系の能力だ。どんなに硬い岩盤だろうと例外無く掘り削り風孔を空けるその鉤爪の前には攻撃力・防御力なんてものは意味が無え、削り取ったモノは烈自身すら何所へ行つたのか判らなねーらしいが、たぶん消滅したんだろーな。この分だと俺の光翼ノ帝剣（アストラル・ブレイカー）も幸斗の龍殺剣（ドラゴンスレイヤー）も通用しねーだろ。インチキ効果もいい加減にしろって言いたいぜ」

【削り取る】という概念干渉系の能力、それが如月烈の異能であった。空間を掘り進み全てに孔を空ける、故に【空間土竜（デイメンシヨナルモール）】、真に最強なのは竜の焰でも魔王の暴力でも鬼の剛力でも無い、全てに孔を空ける土竜（モグラ）の爪だ。

「幸斗、如月烈という伐刀者はお前にとって黒鉄兄妹以上に相性最悪な相手だぜ。下手

に近づけばその鉤爪で消され、受けに回れば防御ごと持って行かれ、自慢のバ火力も削り取られる……」

幸斗の持つ手札では正面から破る事は不可能、これまでどんな敵も例外無く正面から打ち破って来た誰にも負けない真田幸斗の最強の攻撃力が如月烈には通用しない。

「……が正念場だぜ幸斗、コイツを倒さねー限りお前が最強になる事は一生無え、真田幸斗という全てをもつてこの壁を打ち破ってみろよ、幸斗！」

重勝は両腕を組み、試すような眼差しでモニターに映る幸斗にエールを送った。

『……へへっ！』

そのエールが届いたのかは定かではないが、画面の中の鬼は驚愕の表情を崩し、嬉しそうに子供のような笑みを浮かべていた。

【一撃】の戦い、殲滅鬼VS空間土竜

《六感蹴士（サイドキッカー）》と名高い破軍学園三年のCランク伐刀者《工藤新二（くどう しんじ）》は大変優秀な学生騎士である。

生まれ付き視力・聴力・嗅覚・味覚・触感の五感に優れた非凡な情報認識能力を持ち、場の情報を暴き出す《第三の眼（サードアイ）》の能力が使えるという伐刀者としての才に恵まれて生まれてきた彼はその才能に胡坐を搔かず健全な精神をもって精進してきた。新二はその高い情報認識能力と幼い頃から磨き上げてきたテコンドーの蹴り技で校内序列第七位にまで上り詰め、昨年の七星剣武祭代表候補の最終選考にまで残った程の実力者である。

惜しくも昨年は代表入りを逃してしまったものの、今年こそはと【第三の眼】の精度の向上と蹴り技にひたすら磨きを掛け、その甲斐あって新二はこの選抜戦をここまで無敗で勝ち進んで来れたのであった。

その成果は生まれ付いての才能だけでなく決して慢心しない切実性と才能至上主義の現在には珍しくランクで相手を測らず、自分の目で視る視野の広さを持つていたから出す事ができたのだ。

——何だ・・・コイツ・・・。

そんな彼だからこそ深く感じとる事ができて理解してしまったのだろう・・・今自分が相対している剣士が放つ闘気が尋常じゃなく、相手が自分が勝てる見込みが限りなく低い猛者であるという事に・・・。

——なんて重圧だよ、圧力も半端じゃねえ、まるで高熱で焙られた圧力釜の中に入られたみてえじゃねえか・・・。

気当たりだけで意識が持つて行かれそうになっている新二は現在薄暗い広場の中央でその強烈な威圧を放つ黒髪の剣士と向かい合っている、全身から流れ出る汗が止まらない、今にも自分の全身を切り裂きそうな強い目線で真つ直ぐこちらを見据えているその剣士は魔力量F判定という欠陥伐刀者ながらも剣を構えるその姿だけで竜をも葬りそうな剣気を放っており、有無を言わせぬその眼光はまるで悪鬼羅刹の様である・・・その剣士、一言で表すのならば・・・修羅。

——去年「狩人」の奴が起こした騒動で目にした時からタダ者じゃねえとは思っていたが、まさかここまでの奴だったとはな・・・落第騎士（ワーストワン）、黒鉄一輝！

その眼光の奥に果てしない意志を感じ取った新二は戦慄により震える指先を抑えてその剣士——黒鉄一輝と相対す。一輝のその意志は恐らく新二に向けられたものは無いのだろう、もつと先の・・・鬼の背中を。

「それじゃあ黒鉄くん、工藤くん、準備はいいかしらあ？」

「いつでもいいですよ、戦意も覚悟も上々です、工藤さんは大丈夫ですか？」

これから行う試合のレフェリーを務める不健康そうな雰囲気の女性教諭——折木有里が試合の準備は出来たのかと二人の意を確認する、すると一輝がなんの迷いも無く肯定し戦意を向けながら新二に確認の目を向けた。

——っ！バーロー！っ！しっかりしろ俺っ！！今年こそ七星剣武祭への切符を手にするんだろうが！

「ああ！問題ねえよ！チャツチャと試合を始めようぜ！！」

新二は動揺してなるものかと威勢良く返事をして試合を始めるよう促した。上等な笑みを見せる新二であったが彼の手は目の前の修羅に怯えて震えている、強がる事はできてもなまじ実力があるが故に本能が告げているのだ……この修羅には勝てないと……。「うん、わかったわあ……ゴホンッ！……それじゃあ、これより選抜戦第十九戦目、三年Cランク工藤新二君、対、一年Fランク黒鉄一輝君の試合を開始します、二人共、霊装を顕現してください」

「来てくれ！陰鉄！！」

「蹴り穿て！ストライカー！！」

有里の指示に従って両者共に霊装を顕現して構え互いに睨み合った。此处、国際魔導

騎士連盟・日本支部の地下摸擬戦場にて彼等の最終戦への進出を賭けた試合が今、始まる！

「それでは二人共位置に着いてえ〜——————LET'S GO AHEAD（試合開始）！」

これまで数多くの火力を凌駕してきた幸斗の剣圧閃光を烈の土竜の手はいとも簡単に掻き消してしまった。これによって幸斗は勢いを無くし、下手に攻めに行く事はできなくなった……というのが普通なのだが——————

「シッ！」

「うおっ!？」

生憎元西風の団員は普通じゃない、幸斗は再び正面から烈に突撃し烈の土竜の手による横薙ぎ払いを体勢を下げてやり過ごしてそのまま烈の足下を太刀で横一閃する、烈はそれに対して大きく上に跳んで回避するが規格外の臂力で振るわれた太刀は強烈な衝撃波を発生させ跳び上がった烈の身体を暴風で吹っ飛ばした。

「まだまだあっ!!」

「マジか?」

幸斗はそのまま追撃を敢行する、弾道ミサイルが発射されるかの如く勢いで床を蹴った幸斗は空中で放物線を描いていた烈を通り過ぎて観客スタンド最上階の壁を蹴り、勢いのまま跳ね返って来て空中の烈を背後から強襲する。

「させるかってリユウだ!」

「っ!!」

「ウラララララララアッ!!」

「ハッ!ホッ!シッ!サッ!カッ!」

やらせて堪るかど烈は空中で無理矢理身体を捻って体勢を反転させる、そのまま弾丸のような速度で向かって来る幸斗を土竜の手による乱れ薙ぎ払いで迎え撃つのだが、幸

斗はタイミングを見極めて空気を蹴り、最小限の動きで自分に襲い来る鉤爪を全て躲し

「もらったあつ!!」

「ぐおあつ!!」

乱撃が止むのを見計らって烈の左頬に拳を一発叩き込んだ。

——くっ! そういや真田は空気を蹴って空中で動けるってリユウだったな……痛つてえ……。

しかしそこは流石序列三位、烈は幸斗の拳がインパクトする直前に首を拳のチカラの向きに合わせて振る事によって衝撃とダメージを軽減した……のだが、やはり幸斗の最強の攻撃力を受け流しきるには至らなかつたらしく、烈は地上に落下しながら左首筋を掌で押さえている、どうやら骨に僅かな痺が入ったようだ。

『真田選手、正面突破からの追撃! 如何なる攻撃も防御も関係無く理不尽に削り取る如月選手の【土竜の手】の前には如何に殲滅鬼の二つ名を持つ真田選手といえども慎重にならざるを得ないだろうと予想しましたが、予想を裏切って積極的な攻勢に出てきました!』

『ゆっきーの身体能力は明らかにれつつーを上回っているからねえ、れつつーの無敵の爪も結局のところ当たらなければどうという事は無いのさ。それに戦闘経験の差もあ

るだろうさね」

『はあ、戦闘経験ですか？如月選手はあの【雷切】東堂選手や【紅の淑女】貴徳原選手のように【特例招集】に参加した事もあると聞きますから、寧ろそれに関しては何月選手の方が上なのでは？』

『アハハッ！まあ大人の事情というやつさ、ゆつきーにも色々あるんだよ』

『はあ・・・』

「あの人また適当な事言つて誤魔化しているわね・・・」

放送で会場全体にモロ聞こえているにも拘らず適当に話を誤魔化す寧音のフリーダムっぷりに眼を細めてステラは呆れる。そりやあ幸斗が元非法の傭兵という連盟から犯罪者の烙印を押された人間だったという事がバレれば皆動揺するだろうからそれを避けたいのは分かるのだが、「大人の事情」は適当過ぎるだろう・・・。

「・・・まあそれは置いといて、ホントユキトは毎回予測不能な行動をするわね。アタシも常識人とは言えないけれどユキトの行動はブツ飛び過ぎよ、アイツ消されるのが恐くないわけ？」

先程までイライラして落ち着きがなかったステラだったが、烈の土竜の手が幸斗の剣圧閃光をアツサリ掻き消してしまったのを見て衝撃を受けた事によって今は少々気を静めている。その時に刀華から【土竜の手】の説明をしてもらい、その内容が余りにも

規格外だったので彼女はそれに恐れず攻撃を仕掛けに行った幸斗の神経を疑った。

「確かに真田君は少々無謀が過ぎますね、幾ら身体能力で上回っていて経験も勝るからといって一撃でも受けければ自身が消滅してしまうというのにそれを判っていて正面突破を図るだなんて愚行にも程があります。私は相手の行動を前もって読み取る事ができる【閃理眼】と何よりも速く相手に刃を届かせられる【雷切】がありますからほぼ確実に正面から破る事ができますが、真田君は身体能力と実戦経験によつて培われた感ですから確実とは言えません。距離を取つて剣圧の連発で牽制しながら隙を狙うという戦法もあるのに何故真田君は正面突破という無謀な行動をしたのでしょうか？」

刀華の指摘は尤もだ。一撃受ければゲームオーバーとなつてしまう条件で突攻するなど正気の沙汰では無い、幸斗が馬鹿野郎だからと言つてしまつたらそれまでだが、刀華は幸斗が突攻以外の戦術を知らないようにも見えたので彼女は疑問に思ったのである。

「・・・あのお馬鹿には・・・それしか無いからよ」

刀華の疑問に辛辣そうに答えたのは幸斗の仲間である涼花だった。

「知つての通り、幸斗は伐刀者としての才能が誰よりも劣つているわ・・・でも幸斗の無才はそれに止まらないの。学問はどれだけやってもほんの僅かな内容しか理解できず、剣は技が無くチカラ任せに振るうだけ、機械を弄ればすぐに壊し、元々は身体能力も運

動オンチだった為に昔はよく何も無い平地で転倒していた・・・幸斗が身に付けたスキルも全て重勝が組んだ効率の良い訓練メニューのお蔭で【年単位】で体得したもののよ。アイツはそれ程人よりも覚えが悪いの・・・」

涼花の淡々とした説明を聞いてステラ達は表情を曇らせる。幸斗は一輝のような剣才と観察眼が無い、幸斗はステラのように強大な魔力があるわけでは無い、幸斗は刀華のような高い戦闘技術を習得するセンスが無い、幸斗は涼花のような超高等戦術を組む発想力が無い、幸斗は重勝のような高いバトルセンスは無い・・・真田幸斗という男はとことん才能に見放された存在だ、まるで神から見捨てられたかのように・・・。

「アイツが元より生まれて持っていたモノなんてギリギリ一回霊装が顕現できるだけの雀の涙程度の魔力のみ、だからアイツが高みに上り詰める為にはどんな事であろうとも一度選んだ道を変える事はできないの。幸斗の歩みはこの世の誰よりも遅い、道を外せば終点に到達できる時間が無いのよ幸斗は・・・あのお馬鹿は正面から全てを打ち倒す道を選んでしまった・・・だからアイツが頂点に立つ為にはもうその道一本を突き進むしかないのよ」

才能が優れていれば優れている程選択の幅は広がる、何でもスポンジのように吸収して覚えるが故に道を進む速度が速くその分道を変えても終点に到達する時間があるからだ。逆に才能無き者はその才能の無さに比例して歩みが遅い・・・故に才能無き者が

才能に恵まれた者に勝つには選択の余地は無いのである。故に幸斗はステイタス攻撃力極振りの一点特化に鍛え上げて今まで降りかかる苦難を乗り越えて来たのだ。

「……………」

涼花が語る無才少年（幸斗）の宿命に一同が重く沈黙する中、絶はバトルフィールドに着地して左首筋を掌で摩る烈を儂げな表情で見つめていた。

「残酷だな、才能の有無というのは……」

絶のその呟きは誰に向けてのものなのか……皆が見守る中烈は約15m正面に着地して太刀を下段に構えてこちらを見やり不敵な笑みを浮かべている幸斗を甲斐甲斐しい眼で見据えていた。

「大胆にも攻めるな真田、俺の土竜の手は一撃でもまともに受ければ終わりだってリユウなのによ」

「へっ……さつきはビビッたけど、能力のクラクリさえ分かれば立ち止まる理由はねえ！オレはいつだって全力全開で突き進む！相手の能力が怖くて最強を目指せるかよ!!」

F-1の魔力量しか持つて生まれなかった幸斗にとつて相手の異能が脅威である事など今更だ、幼い頃何度も苦渋を舐めさせられ続けて来た、彼はその度に立ち向かい続けて強くなったのだ。

「それに烈先輩、アンタ防御力がそんなに高いわけじゃないだろ？さつき殴った時全身

の魔力防壁が一輝の妹と比べて少し薄い気がしたからな」

「……………」

幸斗の挑発気味の指摘に対して訝し気に左首筋から掌を離し、幸斗から若干視線を外してまいったなという感じでそっぽを向き掌で自身の後頭部を摩った。

「成程な、一撃必殺はお互いさまというリユウか……」

今の烈の発言からしてどうやら凶星だったようだ。烈の魔力量と防御力はC判定、このランクで身体に纏う魔力防壁だと通常の銃弾なら防げるが対物（アンチマテリアル）ライフルの弾丸だと大怪我、戦車の砲弾だと防壁が粉碎されて身体が木っ端みじんとなるくらいの強度だろう。それを圧倒的に凌駕する幸斗の超火力の攻撃がクリティカルヒットすれば一撃で烈の身体は爆裂四散してしまう事だろう、先程の拳もし受け流しに失敗していたら首から上が弾け飛んでいたところだ。

そんな危機一髪の状態だったというのに烈は冷や汗一つ掻かずに何食わぬ顔で幸斗に話を持ち掛けた。

「真田、今「オレはいつだって全力全開で突き進む」って言ったな？……だったらそのリミッター外したらどうだ？」

「っ！」

烈の提案に若干驚きの表情を浮かべる幸斗、烈の言う通り現在幸斗はリミッター――

カーカーカーンツ!!という爆発音が鳴り響き、誰もいない観客席が大破したのだった(笑)。

「うわあああああああああつ!!逃げろおおおおおつ!!」

「巻き込まれるぞ!!速く避難するんだあああああああああつ!!」

「総員退避!!繰り返し、総員退避!!!」

『真田選手リミッター解除!対黒鉄珠雫選手との試合で見せた鬼の蹂躞劇が今再び始まろうとしています!あの試合での周囲への被害規模を思い出したのでしょうか?真田選手がリミッターを外したのを目の当たりにして如月選手の後方の観客席にいる生徒達が悲鳴を上げて一斉に避難を始めています!、如月選手は真田選手の猛攻にどう対処するのでしょうか!』

「へっ!だらしねえ奴等だ!」

「いや、賢い行動だつてリユウだろ……。先日の【深海の魔女】戦でどれだけスタンドに被害が行ったと思っているんだ……。俺もコブができたつてリユウだし……」

そう恨めしそうに呟いて烈は前頭部を掌で摩る。イラツときて幸斗が蹴り飛ばした珠雫の氷首が頭に直撃した時の事を思い出したのだ(笑)。

烈は気を取り直して右の鉤爪の先を幸斗に向ける。

「まあそれは置いといて……。来いよ真田、お前の全力を見せてみるっ!!」

「へへっ！それじゃありクエストにお応えして・・・行くぜっ!!!」

戦闘再開、幸斗がブオン！という風切り音と共にその場に残像を残し音を置き去りにする超高速で烈に接近、同時に相手の頭部を狙う跳び水平蹴りを推進の勢いに乗って放つ。

「ふっ！」

烈はそれを前傾姿勢で体勢を低くする事によって回避、攻撃対象を見失った蹴りは空を切り、規格外の膂力で振るわれた蹴りは強大な衝撃波を発生させて既に避難が完了した後方の無人の観客スタンド一階を撃ち抜き、轟音と共に新たなトンネルが開通した。

——まるで空気が砲ってリユウだな、「深海の魔女」との試合の時よりキレと破壊力が増してやがるってリユウだ！

「うおおおおおおおっ!!」

幸斗の動きの爽快さに感心を示す烈であったが感心している余裕はない、外した勢いで烈を通り過ぎた幸斗が3m先で地を片手で「掴み」、それを支点にした遠心力をもつてUターンをして来たのである。

——指を床に突き刺して腕を軸にしただとおっ!? あんな勢いが付いていたら普通腕が千切れるってリユウだろ!?

「ドラアアッ!!」

「うおっとー！」

驚愕する烈に幸斗は加速の勢いに乗って太刀による一閃を繰り出す。幸斗の連続攻撃が速すぎる為に迎撃は困難だと咄嗟に判断した烈は高く空中に跳躍する事によって一閃を躲すものの、幸斗はすぐさま地を蹴って宙へと跳躍して烈を追撃、地上10mで烈を鬼童丸の刃が届く範囲に捉えた。

「いっただきいいいいいいいいいっ!!」

無防備な烈の背中に幸斗は容赦なく一閃を放つ、タイミングも完璧だ、これなら烈が振り返って鉤爪を振るおうとしようが間に合う事はないだろう。朱い刃が烈の背中を斬り裂いた・・・と思われたのだがその瞬間――

「っ!!?」

突如として烈の身体が一瞬にして消滅し朱い刃が空を切って真空刃が天蓋を斬り裂いた。突然の出来事に空中で戸惑う幸斗は周囲を見渡して消滅した烈を探した。何も無しに身体が消滅するなんてあり得ない、恐らく烈は何らかの伐刀絶技を使って瞬間的に移動したのだろう、幸斗は傭兵時代の経験から本能的にそう判断したのである。

「下だってリュウだぞ真田」

案の定烈の姿は地上にあつた。上空にいる幸斗を真つ直ぐ見据えて右の鉤爪を肩の後ろに回して斜め上に掻き下ろそうとする体勢を取っている。一体何のつもりだろう

かと幸斗が疑問に思った時、烈が口を開いた。

「ここで少し手品を見せてやるってリユウだ。俺の能力はこの【神楽土竜】の爪で抉り取ったモノを【削り取る】ってリユウなんだが・・・こうやって【空間を削り取れ】ば

——

話している最中に急に烈が振り被っている右鉤爪が青紫色に発光し、決るように振下ろされた鉤爪が烈と幸斗の間の何も無い【空】を空振った。

——は？烈先輩は何やってんだ？いきなり霊装を素振りするだん——っ!!?

刹那、幸斗の眼に驚愕の光景が映った。なんと10m下の地上に居た筈の烈が瞬きする一瞬にして眼前に現れたのだ。

「なっ!!?」

「——【瞬間移動】の伐刀絶技《空間切削（シユナイディング・ディメンション）》ってリユウだ！驚いたかっっ!!」

「ぬおおっ!!」

振るわれた左鉤爪が仰天して素っ頓狂な声をあげる幸斗の前髪を僅かに散らす、戦闘経験によって培われた直感により幸斗は反射的に右足で空気を蹴り空中サイドステップによって攻撃を左に躲したのだ。

「くそっ!」

幸斗はそのまま下方に体勢を傾けて空気を強く蹴り弧を描くようにスタイリッシュに地上へと着地する、一方烈はそのまま放物線を描き自然落下によってシユタツ！と観客スタンドの方を向いた状態で地上に着地して後方に振り返り、20m前方で太刀を構える幸斗を睨みつけて不敵な笑みを浮かべた。

「惜しかったなく、あと一瞬でも速く繰り出していけば終わっていたってリユウなのによ！やっぱり空間を削り取ってワープした後に相手を目視確認してから土竜の手じゃ遅いのかってリユウだな、うんうん」

軽く首を上下に振って自分で納得するような動作をする烈、しかし実際には間一髪であつた、幸斗の反応が一瞬でも遅れていたら今頃彼の身体はこの世には無かつたであろう。幸斗はそんな紙一重の戦闘に歓びを感じてニイツと笑みを浮かべていた。

「マジ強えな烈先輩！くうくつ！こんなギリギリの戦い久しぶりでワクワクが止まらないぜ！！」

「おいおいどこの野菜人だよってリユウだ・・・まっ、そう言っても俺も楽しんでるってリユウだけだな」

「でも烈先輩のその能力の弱点は見切ったぜ！確かにシゲの言う通り何でも無差別に削り取るその能力はシゲの砲撃やステラの炎より強えけど霊装を振るう動作は特別速えわけじゃねえから腕の動きに注意してりゃあ難なく避けられる、烈先輩自身も速えっ

ちや速えけどスピードも反射速度もオレの方が速えから先に攻撃を叩き込めばいい、つまりスピード不足だぜ！」

鬼童丸の切っ先を烈に向けて能力の弱点を指摘する幸斗、どんなに無敵の攻撃でも当たらなければどうという事はない、霊装で直接抉り取らなければ能力が発動しない烈にとってスピード不足は致命的だ。重勝が空を飛ばうが【空間切削】で空いた距離を詰めればいいしカナタが【星屑の剣(ダイヤモンドダスト)】を空気にばら撒こうが空間ごと削り取ってしまえばいいのだが、鉤爪が振るわれる前に刀華の【雷切】が先に自分の身に届き一刀両断されてしまう、一輝の【一刀修羅】のスピードに着いてこれずに翻弄されてしまう、これが如月烈の弱点だった。

・・・だが、序列三位の実力者がそんな自分の弱点を把握せずに放置しているわけがなかった。

「・・・ふう、バレたか・・・お前普段は馬鹿なのに戦闘の事に関しては鋭いつてリユウなんだな」

「舐めんよ、これでも今まで色々経験してきているんだ!!」

「はははっ! 悪かったってリユウだな・・・んじや見せてやるか。速度を極めた如月家伝統の【如月瞬煌流体術】の技をよっ!!」

威勢良く言い放ち太刀を構える幸斗に対して技を見せると言い放ち左脚を前に大股

を開いて腰を落とし今にも飛び出して行きそうな前傾姿勢で烈は構えを取った。

「行くぞ真田アツ!!如月瞬煌流体術【初伝】、如月烈!参るっ!!」

烈が気合いと共に名乗りを上げた瞬間、彼は地を蹴り疾風(かぜ)となった。

「・・・・・・・・」

その姿を彼の弟である絶は訝しくも真剣な顔をして見守っていた・・・・その蒼い瞳の奥に暗い影を落として・・・・。

幸斗絶体絶命、最速の如月瞬煌流体術

〔一瞬の煌き〕の間に相手を地に伏せるとされている速度を重点的に置いた如月家伝統の体術〔如月瞬煌流体術〕はまず流派の基礎にして秘技である〔瞬閃〕を修得する事で初めて〔初伝〕の技を学ぶ事が許される。

如月瞬煌流体術には〔初伝〕〔中伝〕〔奥伝〕そして〔皆伝〕という感じで技の修得状況に応じた〔段位〕が流派の継承者達に与えられ、その技は全て〔瞬閃〕の爆発的な加力から派生する。〔初伝〕の技とはその〔瞬閃〕によって派生させる〔基本の十一の型〕を指し、その十二の型を全て修得した者は〔初伝〕の段位を貰う事ができるのである。

先程試合開始直後に幸斗を吹っ飛ばした飛び蹴りも実は如月瞬煌流体術の〔基本の十二の型〕の内の一つ、五ノ型《閃牙突（せんがとつ）》であり、〔瞬閃〕の爆発的な初速の推進力を利用して相手の不意を突き高い突破力を持つ一撃を叩き込む技だったのだ。

「一ノ型《飛炎（ひえん）》っ!!」

如月瞬煌流体術の〔初伝〕を持つている烈は今、更なる技を披露した。〔瞬閃〕の驚異的な加速と共に繰り出した蹴りが空気の摩擦によって炎を纏い、それが赤い軌跡となって幸斗の脳天に襲い掛かった・・・だが――

「甘えぜ烈先輩！こんなチンケな炎ステラのヤツに比べたら蠟燭同然なんだよっ!! ドラアツ!!」

幸斗は烈の炎の蹴りを余裕で太刀で受け止め、そのまま太刀を振り切る事によって烈を斜め45度の角度で後方に吹っ飛ばし烈は観客スタンド最上階の壁に叩き付けられそうになるのだが、彼は壁に激突する直前に空中で膝を両腕で抱えるようにして身体を丸め、瞬時に高速回転する事によって体勢を立て直し、壁を蹴る事によって華麗に方向転換すると共に加速した。

『おおっ?!?如月選手、真田選手の一振りでもホームランされてしまいました、逆にその反動を利用して加速したああああっ!!壁を蹴り、天蓋を蹴り、大地を蹴って縦横無尽に宙を跳び回り加速し続けています!私段々と如月選手の姿を眼で追い切れなくなってきました!!つてか加速すぎてもう見えないつての!!』

『ほほう♪♪これが如月瞬煌流体術、十二ノ型《蛍光（ほたるのひかり）》かあ』
『知っているんですか、西京先生?』

『まあね♪♪【蛍光】というのは相手のチカラの反動を利用して爆発的に加速する機動技さね。パルクールつて競技は知っているかい?地形を活かして【走る】【跳ぶ】【登る】などの動作を複合的に実践する事によって人が持つ身体能力を極限まで引き出すのさ。【蛍光】はそれ等の動作と相手のチカラの反動を使ってドンドン加速するんだよ。たぶ

ん今のれつつーはもうマツハ5くらいまで加速しているんじゃないかな？」

『マツハ5!!?あの【速度中毒】兎丸恋々選手の【ブラックバード】より速いじゃないですか!!』

「んにやあああああつ!!また体術に負けたあああああつ!!」

寧音の解説を聞き恋々は頭を抱えて発狂する、兄弟揃って如月の体技に自分の異能が後れを取った事実が相当ショックだったのだろう。目の前では最早その姿を目に捉える事も適わぬ残像の軌跡が縦横無尽に第一訓練場内を翔け廻っている、とんでもない加速力だ、このまま行けば後数十秒でその残像すら目に映らなくなるだろう。

「如月さん、相変わらず・・・いや、これは今までの比にならない程の速さがでていますね」

「当然だ、【蛍光】は起点となる瞬発力の大きさの流れに乗って加速し続ける技だからな、真田の馬鹿力が起点となっているんだ、そこから生み出される速度はケタ違いに決まっているだろう」

「.....」

真剣な表情で試合の行方を見守る刀華はこれまでに自分が見た烈の最高速度よりも遙かに速い事に内心驚き、絶が当たり前だと言わんばかりに【蛍光】の詳しい詳細を踏まえて呆れた表情をする。如月瞬煌流体術十二ノ型【蛍光】の神髄は相手の流れと自分

の流れを理解する事に有る、起点となる反動に逆らわずその瞬発力に乗って加速し、立ち塞がる障害物に激突しそうになつても勢いを殺さず流すように蹴つて更に加速する……正に激流に身を任せ同化するかの如し、最早今の烈の姿は「一人を除き」この会場内の誰の眼にも映らず、あちこちで蛍の発光の如く点滅するような連鎖的な爆砕のみが烈の行方を示しているのだった。

……そんな中で唯一超音速で加速する烈の姿をその目に捉え続けられている例外の一人が己の胸の内に抱いていた疑問を解消する。

「……成程ね、前の会長さんとの試合で何故会長さんは雷切を放った後すぐにわたしが壁と天蓋を利用して後ろを取った事に気付けたのかと疑問に思っていたけれど、この技を知っていたからだったのね……」

佐野涼花には前の刀華との試合で気になっていた事があつた。それは涼花が刀華の放った雷切の衝撃波の反動を利用してワザと吹っ飛ばされ、壁と天蓋を蹴つて一瞬で刀華の背後に周つた時、何故刀華はそれに反応できたのか？ 幾ら閃理眼で相手の動きが読めるからといって雷切なんて大技を放っている最中に壁と天蓋を踏み碎いた僅かな音を手掛かりに瞬時に相手が背後に周つたと判断するなんて普通できるわけがない（まあ雷切の衝撃波に乗って壁と天蓋を蹴つて相手の背後に周るなんて神技をやつてのけた涼花が言える立場ではないが……）、以前に同じような事をする相手と対峙した経験が

なければ対応できる訳がないと不思議に思っていたのだが、今の刀華の発言でその疑問は綺麗に解消できたのだった。

「うん、あの時程如月さんに感謝した事はなかったですね。もし如月さんの【蛍光】を見ていなかったらあの時私は佐野さんに背後を取られた事に気付くことも無く背中を刺されて負けていた事でしょう、あの時の佐野さんは閃理眼で読み取れる情報だけでは反応が間に合わない程の速度が出ていましたから・・・」

「ほう、経験が活きたな。だが【蛍光】の真価はこれだけではないぞ、真田が相手なら・・・もっと速くなる」

如月瞬煌流体術がこの程度だと思ってもらっては困る、絶は称賛と共に前の涼花との激戦を思い出して思い耽る刀華にそういう理由を込めて言ってそこら中が超音速で動き回る烈の運動エネルギーによって爆砕する爆心地と化しているバトルフィールド上を眺めた。

「くっ!!」

正面の床が爆砕して蜘蛛の巣状の小さなクレーターが作られるのを見計らって幸斗は瞬時に飛び込むように右に移動し、その刹那幸斗がコンマ数秒前に居た場所を一迅の突風が通り過ぎる。

「チツ、速えな！涼花の絶影よりも圧倒的に速え」

床を一回転転がつて受け身を取り、瞬時に立ち上がった幸斗は舌打ちをする。周りを見回してみると床も壁も天蓋も辺り一帯蜘蛛の巣状にひび割れた小規模のクレーターだらけだ、烈が方向転換して加速する為に蹴った場所が超音速の運動エネルギーによつて踏み砕かれて陥没したのだろう。今も超音速で加速し続ける烈の姿は当然幸斗の目でも捉える事はできない。今のように烈の運動エネルギーによつて踏み砕いた床や壁が爆砕して陥没するのを見極めて躲すタイミングを図ることはできるが、このままでは反撃する事は難しいだろう。今の烈の速度はリミッターを外した幸斗も涼花の絶影も刀華の疾風迅雷も恣々のマツハグリードですら超越しているのだから捉えるのは至難の業と言える。

——地面が爆砕するタイミングを見計らつてカウンターを決めるしかねえか？モタモタしていたら烈先輩は更に速くなるかもしれねえし考えている暇はねえ!!

これ以上烈の速度が上がったら躲すタイミングすら掴めなくなると察した幸斗は意識を周囲に張り巡らせて烈が攻撃して来るタイミングを計りその瞬間を狙おうとするが・・・しかし——

「どああつ!？」

突如として右の床が爆砕すれば暴風に吹き飛ばされ——

「のわあああつ!!」

いきなり頭上の天蓋が陥没すれば数センチ前の床も爆砕されたので仰天し——
「ちよつ!? そんなの有りくぐはああつ!!」

前方右と前方左の床とその奥の壁にほぼ同時に小規模のクレーターが形成されたので驚いたらその瞬間に背中に強烈な衝撃が叩き込まれたので正面に身体が弾き出されて勢いのまま床を転がり壁に激突して自分の形をした壁穴が空いた。

『おおつと真田選手、如月選手の【蛍光】の超スピードの前に手も足も出ません! 一方的にフルボッコだああああつ!!』

「ぐぐぐ、ぐつそおお・・・」

若干癩癩を起しそうになりながらも幸斗は自分の形をした壁穴の中から根性で這い出て来る・・・なかなかタイミングを合わせる事ができない、烈が速過ぎるのだ、しかし焦ってはならない。

——集中しろオレ! こういうオレより速い相手と戦うときはどうしろとシゲから教わった? オレのチカラはどう活かせと? 相手が速過ぎてタイミングが取り難い場合は? ——

壁穴から這い出た幸斗はバトルフィールド上に戻りながら過去に重勝から教わった幸斗なりの速い相手への対処法を思い出そうとしていた、幸斗の武器は四歳の頃から愚直に鍛え上げてきたこの常識外れの膂力だ、それをどう活かして速い相手を捉えられる

一訓練場内の観客達はパニックに陥った。

幸斗は烈が攻撃するタイミングを完璧に捉える事はできないが、攻撃の間合いは肌で感じる風圧と床や壁が烈の運動エネルギーによって爆砕する場所を見て大体予測する事ができていた。それだけでできるのなら烈が中距離（ミドルレンジ）の間合いに入った瞬間に広範囲攻撃でブツ飛ばしてしまえばいい、チカラ任せに地面を爆砕するのは幸斗の十八番だ、どんなに速かろうと逃げられない程の広範囲を一瞬で蹂躪し尽くしてしまえば速さなど恐れるに足りない。

そして案の定、超音速で幸斗の間合いに入って来ていた烈が問答無用で幸斗の一撃で発生した強大な衝撃波を受けて一瞬にして観客スタンドの最上階の壁に吹っ飛ばされて行ったのが見えたのだが……。

「……フツ！」

その時、如月兄弟は同時に口の端を吊り上げていた。

「如月瞬煌流体術、七ノ型《貫穴閃（かんけつせん）》っ!!」

それは激震と暴風の中の一瞬の出来事であった。幸斗の振り下ろした鬼童丸が石畳

吹っ飛ばした筈の烈が瞬く暇も無く一瞬にして背後から強襲して来たという事実には驚愕を隠せずに頭の中が混乱していた。恐らく烈はまた壁や天蓋を蹴って幸斗の背後に周ったのだろうが、それにしても速過ぎる。コンマ一秒も経っていたのか判らぬ間に足下から光の柱が吹き上がって地上約30mに投げ出されていたのだ、信じられないのも無理はないだろう。

『いいい一体何が起こったんだあああああつ!!?もはやテンプレのように真田選手がリングを破壊して巨大クレーターが姿を現したと思っただらその中心から何やら巨大な光の噴水のようなものが噴き出していて真田選手が上空に吹っ飛ばされていましたあああああああつ!!?どうしてこうなったのかわけがわかりません!真田選手の規格外の一撃は遂に地球の核すら破壊してしまったと言うのか?!?それから如月選手はどうなっってしまった?彼の姿が未だに見当たりません!!』

「っ!!?」

激震が治まった事により会場内の混乱は収束に向かっている中、幸斗は実況解説の女子生徒の発言を聞いてハッ!と眼を見開き、空気を蹴って天蓋へと跳び、地面から見て逆さの体勢で天蓋に足を着けると同時に地上を見渡して烈を探してみるが・・・彼の姿はどこにも見当たらない。

——あの技を放った衝撃を利用して更に速くなったっていうのか!?信じられ

ねえ……。

もはや音すら置き去りだ、たぶんもう涼花ですら烈の姿を見失っている事だろう、運動エネルギーによって踏み砕かれて爆砕する壁や床も現象を引き起こしている本人が速過ぎてもう動きを捉える手掛かりにもならない、これが速さを極めたという【如月瞬煌流体術】だというのか……。

「へへっ……凄え、これで【初伝】なのかよ……」

「この程度で驚いてもらったら困るってリュウだな、真の如月の技はまだまだこんなものじゃねえってリュウだ」

「っ!!」

天蓋を軽く蹴った幸斗が再び宙に身を乗り出すといきなり何処からか烈の声が幸斗に語りかけて来たので幸斗は襲撃に備えて落下しながら身構えた。すると――

「六ノ型、《疾砲（しっぽう）》っ!!」

「なっ!?!」

烈が技名を言い放つ声が聴こえて来るのと共に幸斗の眼前の空間が一瞬歪み、そこから半径約50cm程の円盾状の衝撃波が二発発生して幸斗に向かって放たれる。

「くっ!」

幸斗は空気を蹴って進行方向を変え二発の衝撃波を回避し、攻撃目標を見失った衝撃

波はそのまま一直線に飛んで行き天蓋の一部を凹ませる。それを横目で確認した幸斗は今の衝撃波に違和感を感じていた。

「おいおい、これってまさか・・・」

「そのまさかだつてリュウだ、〔ケン圧〕を飛ばすのはなにもお前だけの専売特許じゃないつてリュウさき！」

「うおっ!？」

今度は空中を滑空する幸斗の斜め右上から先程と同じ形状の衝撃波が放たれ、幸斗はそれを紙一重で左に躲す。六ノ型〔疾砲〕は所謂〔拳圧〕による空気砲だ、〔瞬間〕による爆発的な初速の直進と共に拳を突き放ち空気を打ち出すという単純な技ではあるが打ち放つ瞬間の速度と瞬発力が大きければ大きい程それに比例した威力の拳圧を放つ事ができるのである。

——くそっ! 烈先輩の動きが全然読めねえ。この速さの中じゃ多分〔削り取る〕能力を使うタイミングを計れないんだろうから烈先輩が速度を緩めるのを見逃さなければ消される心配はねえだろうが・・・。

〔疾砲〕だけに意識を向けすぎて隙だらけだつてリュウだぞ!」

「なっ!?!——ぐはあっ!!」

幸斗が空中を滑空しながら思考を張り巡らせていると突然彼は腹部に強烈な衝撃を

感じ、気が付けば身体が「く」の字に曲がつて上に吹っ飛ばされ天蓋に背中から叩き付けられて跳ね返る。

そして認識不能の速度で動き回る【空間土竜】の逆襲が始まった。

「顔面のガードが甘い!!」

「ゴハアツ!!」

「頭上注意!!」

「ゴフウツ!!」

「背中がガラ空きってリユウだ!!」

「がっ!!」

『おおっと、真田選手空中でフルボッコにされていますっ！如月選手声は聴こえど姿は見えないっ！まるであの【狩人】桐原静矢選手の【狩人の森】のようだああああっ!!やはり序列三位は流石に強い!!【殲滅鬼】大ピインチッ！真田選手このまま選抜戦から消えて行くのかああああああっ!!?』

「〔狩人〕のヤツとは全然違げーよアホ」

赤ゲート側の控室のソファーに座り大型モニターで観戦中の重勝が解説を聴いて呆れるようにそう呟いた。

「〔狩人〕のヤツは認識できねーだけだから広範囲攻撃で潰せばそれでいい、だけど今烈の奴が認識できねーのは単純に速過ぎるからで広範囲攻撃をくらわせようとしても〔放つ前に潰される〕か〔一瞬にして範囲外に逃げられる〕かでアツサリ対処されちまう：：要するに〔瞬発性〕が明らかに違う」

重勝の言う「〔瞬発性〕とは簡単に言えば瞬間的なフットワークの事だ、瞬発性が優れていればいる程相手に攻撃を命中させる時間が短縮され反撃を許す可能性も下がる。

桐原静矢の霊装は弓型で遠距離から攻撃する事ができるのだが「弓を引いて矢を放

つ」という一連の動作があまり俊敏では無く、本人自体の動きも大して速くはない、故に相手に広範囲攻撃を放つ時間を与えてしまい、撃たれば逃げる事はできない。

それに対して今の烈は強大な瞬発性を得ているが故にどのタイミングでも相手に攻撃を届かせる事ができる、相手が広範囲攻撃を放とうとしても一瞬にして技の出を潰す事が可能であり反撃する隙を与えない、更に常に超音速で動き回っている為に位置が掴み難く、適当に広範囲攻撃を放つても簡単に避けられてしまう可能性が高いのである。

同じ認識不能でも【瞬発性】の違いだけでこれ程大きな違いがあるのだ。

「それにしてもマジ速えーな、たぶんもう姫ツチでも目で追えねーだろうな」

重勝が観ているモニターには空中で視えない何かに全身滅多打ちにされて悪戦苦闘している幸斗の姿が映し出されている。

「如月瞬煌流体術【基本の十二】の型の一つ、十二ノ型【蛍光】の真骨頂は【相手のチカラを利用して加速する】事だったな。技の引き金（トリガー）となる【相手の強力な一撃による反動の瞬発力】も勿論重要だが、最大の利点は【高速移動中に受けた相手の攻撃の反動すら利用して更に加速する事が可能】ってところだな」

要するに技の引き金となる瞬発力だけでなく音速移動の最中に受けた相手の攻撃をも自分のプラスに作用させてしまうというのだ。自分の繰り出した攻撃が例え不発であろうが防御されようがその【勢い】【反動】【衝撃】に逆らわずそれ等の流れに乗って

無限に加速し続けて行く、まさに「激流に身を任せて同化する」かの如く……。

「その特性故に相手のチカラが強ければ強い程【蛍光】の加速力は増す。人間の想像を絶する膂力を持つ幸斗はこの技の格好の動力源だ、あの技は普通ならこんな短時間で視認できなくなる程の速度には達しない、俺と戦った時もここまでにはならなかったからな」

幸斗の最強の攻撃力も相手によっては仇となる、今まさに幸斗はその身をもつてそれを体感し追い詰められているのだった。

「へっ……どうするよ幸斗。このままじゃお前はそこのチカラを活かせねーまま負けっちなうぞぞ?」

モニターに映るボロボロの幸斗を試すような目線で見て不敵な笑みをする重勝、その眼はいつの間にか教え子の成長を期待する教官のモノへとなっていたのだった。

「……ん?」

その時、重勝は知っている気配を感じ取った。その気配が向かっている場所はこの第一訓練場の観客スタンドの四階——現在実況解説の女子生徒とゲストの西京寧音が居る放送室だ。

「この気配は……へっ!どうやら【あっち】は終わったみてーだな」

「ぐあああああああつ!!」

幸斗は烈が放った【疾砲】による衝撃波の砲弾によつて地に墜とされクレーターの中に叩き付けられた。天に響く轟音が鳴り砂煙が舞い上がり．．．そして幸斗は立ち上がる。

「．．．ハア、ハア、まだだつ!．．．ハア、ハア．．．オレはまだやれる．．．ハア、ハア．．．ぜっ!!」

肩で息を吐きながらも不屈の精神をもつて上を睨みつける幸斗、額から血を流しその

身体はもうズタボロだ。幼い頃からの鍛練と実戦で鍛え上げた体力と団長譲りのド根性のおかげで耐久力は凄まじく高い幸斗だが、しよせん魔力の防壁を纏えない彼の防御力は最低値、このままやられ続けたら精神よりも先に身体が限界を迎えるのも時間の問題だろう……。

「いい加減見苦しいんだよ出来損ない！」

「【紅蓮の皇女】や【深海の魔女】に勝ったからもしかしたらと思っただけど、やっぱりEランクはEランクだったな!!」

「伐刀絶技が使えないゴミ以下の存在が学園のトップ3に勝とうだなんておこがましいのよ!!」

「七星剣王だなんて選ばれた天才しか成れないモノなんかは魔力がカスなお前や落第騎士が成れる訳ねえだろバーカ!無駄な努力なんだよ!!」

「ちよつと馬鹿力だからつて調子に乗った報いだな落ちこぼれ、実に良い格好だぜその姿!」

「ホント調子付いた身の程知らずが這い蹲るのを見るのは爆笑オンエアだよなあ!笑えるつたらありやしない」

「だよね〜」

「「「「「アハハハハハハハハハハッ!!」」」」」

烈の「蛍光」を前に手も足も出ない無様な幸斗を目の当たりにした観客の生徒達が一斉に幸斗を嘲笑し出す、その生徒達は皆選抜戦を勝ち抜き続ける低ランクの幸斗や一輝に嫉妬の念を抱くE〜Dランクの生徒ばかりだ、今まで自分達より格下である筈の幸斗がステラや珠雫などの最高ランクを打ち倒し続けるという快進撃に業を煮やす想いを抱き続けていた彼等はここに来て地に這い蹲る幸斗を見て爽快な気分になったので溜まつていた鬱憤を幸斗を嘲笑する事で晴らしているのだ。

ギリツ！と歯を軋らせて観客スタンドを睨みつける幸斗、だが観客達の嘲笑は止まない、ポロポロな姿で睨みつけられたところで滑稽なだけなのだから。

「いい加減にしなさいよアイツ等！ イツキと・・・名前忘れた・・・イツキの一戦目の試合の時といい、アタシがユキトやリョウカと試合している時といい、アイツ等そんなに低ランクを見下したいの!?! 選抜戦に出る度胸も無い癖に人がやられているのを見て馬鹿にして笑って！ ホント、頭に来るわ!!」

「ステラさんと同意見なのは癪に障りますが私も同じ気持ちです。自分から行動を起こす気もない下等生物の分際でお兄様や真田さんを愚かにも嘲笑うだなんて万死に値します・・・アイツラドウシテクレヨウカ・・・」

「腹が立つのは分かるけれどカタコトは止めなさい珠雫、アナタ今規制が掛かるような見せられない顔になっているわよ・・・」

聞くに堪えない嘲笑は当然ステラ達を不快にさせていた。身体中から火の粉を放出し今にも霊装を顕現して暴れ出しそうになっているステラに瞳のハイライトを消して眼を細め殺意を振る撒く珠雫をさりげなく宥める有栖院などが周りの目を惹いている。

「……………」

この見苦しい惨状は皆の期待と信頼を集める学園の英雄である刀華にすら気分の悪い想いを抱かせていた。

——これが・・・今の学園の現状だつていうの？・・・みんなが私達高ランク伐刀者に対して劣情を抱いているのは知っていた、選抜戦を勝ち抜き続けている真田君や黒鉄さんに嫉妬しているのもなんとなく解っていた・・・だけど・・・これはあまりにも

酷すぎる・・・そう思ったその時——

「そういうのは全部東堂会長に任せとけばいいんだよ！」

「そうそう。七星剣武祭の制覇も、裏切り者の風間重勝の打倒も、学園の平和を護る事だつてみいーーーーんな優秀な生徒会長がやってくれるんだからさあ、凡人なアタシ達が出しやばつたつて何もできる事は無いんだよ！」

「ホント馬鹿みたい（笑）、夢を叶えられるのは一握りの天才だけだというのにねえ」

「どんなに努力したつて、しよせん出来損ないは出来損ない、凡人は凡人なんだよ。夢を

目指すだなんて無駄無駄、人生テキトーが一番だぜ！」

「まあ、無理だと思つたら会長のような生まれ持つての天才伐刀者に押し付けられればいいのさ。有名人が活躍するのを見て夢を見る世の中のガキ共つて本当に馬鹿だよなあ？ そのうちその有名人と自分との才能の差に気が付いて挫折するのが見え見えだつてーのっ！」

「っ!!？」

周囲の観客達が嘲笑に雑じらせて話すひそひそ話が聞こえてきて、刀華は背中に悪寒が奔り眼を見開いた。周りから信頼されて頼られているという事には刀華自身も誇らしく思っている、彼女は他人を無償で助ける慈愛の精神で学園の皆を支えてきたのだから。しかし、それは皆が安心して自分の道を進めるよう手助けし導く為、あるいはやりたくても【できなかった】者達の無念を背負つて夢を見せる為なのである。なのに今聞こえてきた話はどれもこれも才能で全てを量り、夢も努力も否定し【できないと決めつける】内容ばかり、挙句未来に夢と希望を抱く子供達まで馬鹿にする始末であり、明らかに未来を諦めきつた感情が渦巻いていた。

——そんな事……思っていたの？……私は今までみんなに……夢を諦めないで……希望を持つてほしかつたから……その助けになればと……みんなの想いを背負つてきた……筈なのに……。

のであった。

大音量の怒鳴り声が第一訓練場内全体に響き渡り会場に居る全ての人間の聴覚を劈く。あまりの騒音の大きさに会場中の人間は耐え切れずに耳を両手で塞いでその場に蹲って悶えた。

「——っ!!……うるさいのはアンタよ幸斗、少しは周りの迷惑を考えなさいつての……」

騒音が止んでも尚耳鳴りが酷く反響している。その耳鳴りに耐えながら意識を正常に戻した涼花は騒音の原因である怒鳴り声を上げた張本人に対して文句を呟いていた。

「……よしっ! 静かになったな! これで集中できるぜ!!……さーて、どうするかな?」

何はともあれ観客達を黙らせた幸斗は再び上を見上げ、未だに超音速で動き周っている姿を見せない烈を攻略する方法を模索する。今の騒音の中でも烈は速度を落とさなかつたのかと疑問に思うかもしれないが、考えてみれば音すら突き破る速度で動いているのだから堪えるわけがないだろう……。そう考えていたのか、ただの直感かは定かではないが、幸斗は唐突に何かをひらめく。

——さてよ? どんなに速かろうが試合会場から外に出れるわけじゃねえ……。それにスピードを緩めなければ無敵の「土竜の手」を繰り出す事ができねえ……。なら烈先輩の動きを封じるには……。そうだ!!

普段は頭カラツポの癖にこういう時だけ頭が回る。幸斗は周囲が運動エネルギーによつて爆砕される現象が上に集中しているのを確認すると鬼童丸の柄を両手で握り、不敵な笑みを浮かべながら「太刀を振り上げる体勢」に構えだす。

「……まさか……」

涼花は嫌な予感を感じた。あのお馬鹿が考える事なんてロクな事じゃない……その感覚は……正しい。

「良い事考えたぜ！ 烈先輩がどんなに速かろうが試合会場全体を吹っ飛ばしちまえば関係ねえっ!!」

何か恐ろしい事をいきなり言い放った幸斗は鬼童丸の柄を持つ両腕に青白い闘気を纏わせる。この瞬間、第一訓練場内の人間は一人残らずこれから幸斗が何をしようとしているのかを理解して顔を青くした。

『さささ真田選手!?! 一体何を……ま、まさかつつ!!?』

『あー、ゆつきー「アレ」をブツ放すつもりみたいさね……』

幸斗が地を踏みしめると足下が大きく陥没し、大気が強大な闘気に当てられて大きく揺れはじめた。

「……まさかユキト、「アレ」を放つつもり!!?」

この状況、ステラには見覚えがあった。相手が上に位置取り、幸斗が上に狙いを澄ま

して太刀を両手で握り締めるこの状況を。

「・・・忘れやしないわ・・・ユキトのあの一撃は——」

彼女は思い返す、自分と最愛の恋人の運命が覆される事となった、あの一戦を・・・。
『オレだって七星剣武祭でブツ倒すと誓った【龍】がいるんだあああつ!!こんなところで
テメエに負けている暇はねえんだよっ!!ステラ・ヴァーミリオンツ!!!』

「——アタシとイツキの約束を跡形もなく消し飛ばした一撃——」

天空より振り下ろされた凶爪、幸斗敗北か!?

超音速で加速し続ける如月烈を捉えるべく、真田幸斗必殺の龍殺剣が天に向かつて放たれた。

【戦場の叫び】で強化された両腕をもつて想像を絶する膂力で振り抜かれた刃は人知が及ばぬ領域を侵す剣圧を引き起こし、大気の事象が改変されて超膨大なエネルギー量が生み出され、それが極大の波動砲となって天へと撃ち出されて行く。

「ちよっ!!?なにチヨー危ない技使つてんのサナダ君ウウー……ンツ!!」

「ぬううっ!!?なんとという一撃だ!!技を放った余波だけでこれ程の衝撃とはっ!!」

「あ・の・お・馬・鹿! やっぱりロクでもない事考えていたわね!! 前々から不用意に龍殺剣は使うなって口を酸っぱくして言い聞かせているのに!! アイツこの試合が終わったらシメてやるわっ!!!」

龍殺剣が放たれた直後その強烈な余波が暴風となって周囲の観客スタンドを蹂躪した。両腕を顔前に交差させて暴風の圧力に耐える涼花達を含め、観客達はその圧倒的な圧力に耐えきれず悲鳴をあげてパニック状態に陥る。小物は勿論の事、一部のガタがきっていた不良品の席まで暴風によって吹き飛んで行き、その暴風の圧力は第一訓練場の至

る所に亀裂を生じさせている。

その恐るべきエネルギー総量はプルトニウム爆弾二百発分に相当する16・8PJ（ペタジュール）……いや、これは幸斗がリミッターを付けている状態で放つ龍殺剣のエネルギー総量だ、今の幸斗はリミッターを外している。この一撃はリミッターを付けている時に放つそれを大きく凌駕していると予想される。

この龍殺剣は撃ち出された勢いがV Sステラ戦で放ったモノより凄まじく放たれた極大波動砲は天に昇りながら広がってあつという間に空間を蹂躪して行く、回避する隙間は無い、これならどんなに速く動けようが直撃を避ける事は不可能と言えるだろう……この男——如月烈という例外を除けば。

「なるほどな、速くて捉えきれないのなら逃げる隙間無く無差別に攻撃してしまえっつりユウか……ふうん、流石だと言いたいリユウだが……甘いぞ真田っ!」

天に昇りながら空間を蹂躪する龍殺剣を前に烈は遂に姿を現した、「蛍光」を止めて速度を緩めたのだ、「空間土竜」の代名詞たるあの伐刀絶技をもって龍を殺す剣を打ち砕かんが為に。

「どんな破壊力を秘めた一撃だろうと俺の【土竜の手】の前には——」

烈は天蓋を蹴り、圧倒的質量をもって迫る極大波動砲に向かって正面から突攻して行く。奇しくもこのシチュエーションは以前幸斗が龍殺剣を放って試合を決めた幸斗V

Sステラ戦のクライマックスと同じなのだが、今回龍殺しの剣に挑むのは未熟な妃竜では無い。勝利を約束された騎士王の聖剣だろうと白い魔王と恐れられる魔導師が放つ魔導砲だろうと宇宙戦艦から発射される波動砲だろうと全て関係無く削り取る無敵の爪を持った土竜（モグラ）なのだ。

「——通用しないってリユウだあああああああつ!!」

勢いそのまま落下しながら烈は右腕を振り上げ、極大波動砲と接触する直前に青紫の光を纏った鉤爪を振り下ろし、チエーンソーでダンボールを切断するかのように簡単に龍殺剣を中央から削り取って真つ二つに両断してしまう。

二つに両断された龍殺剣は烈の左右を通過して第一訓練場の天蓋を完全に消滅させて無限に広がる大空へと昇り、本日南関東の空を覆っていた分厚い雲を纏めて吹き飛ばして蒼穹広がる快晴へと天候を変え、成層圏を突き抜けた二つの波動砲の内の一つが先月打ち上げられたばかりの新たな氣象観測用の人工衛星をまたしても飲み込み再び宇宙の塵へと変えてしまい、もう一つの波動砲が火星へと向かう途中だった惑星探査機を飲み込んで塵一つ残さず消し飛ばし、二つの波動砲は無数の宇宙デブリを突き砕きながらそのまま宇宙の果てへと旅立って行く・・・数秒の間地球に二本の光の柱が建つたのであった・・・。

『真田選手の龍殺剣が炸裂ううううううつ!!!!戦略破壊兵器を圧倒的に凌駕するエネルギー』

ギーの奔流が天を突き、その射線上に存在する森羅万象は一切合切が光の中へと消え逝く定め!! そう、但しこの男を除いてはっ!!」

天蓋が消え去り、分厚い雲が遙か彼方へと吹き飛ばされた蒼穹がそこから顔を出した第一訓練場。絶大な破壊の痕を残した最強の極大波動砲は全てを削り取ってしまう無敵のモグラの爪によって引き裂かれ、その姿は宇宙の果てへと消えて行った・・・真田幸斗最大の必殺技はこの日をもって初めて敗れたのだ。

『校内序列第三位っ!』【空間土竜（ディメンショナルモール）】如月烈選手っ!! その霊装【神楽土竜】の爪で全てを削り取る【土竜の手（モール・ザ・ハンド）】はまさに無敵っ!! 戦略破壊兵器を超越した龍殺しの剣ですらこの爪の前には敵ではなあああああああああああいつ!!」

『うっひょー! やるねえ、れっつー!! ゆっきーのあの凶悪剣圧破壊光線を真っ二つにするのかい♪これはさすがのうちに驚いたぜ・・・もっとも——』

龍殺剣が引き起こしていた暴風が止み、その圧力にも目も開けられずに底に伏せていた観客の生徒達が天より陽が射す中起き上がって光の柱が消え去ったバトルフィールド上空を見る。そこには先程まで無限に加速しその姿を周りの目より消していた烈が姿を現しており、右腕を大振りに振り抜いた格好で地上のクレーターの中央に向かつて自然落下して行く最中であつたのだった・・・そしてその落下地点には落下して来る烈を

見上げながら両膝を深く曲げている鬼がほくそ笑んでいる姿があった・・・。

『——ゆつきーの作戦は龍殺剣でれっつーを仕留める事じゃあなかったようさね』

「はあっ!!」

放送を通して寧音が言い終えた瞬間、幸斗は曲げた両膝を一気に伸ばして風切り音と共に勢いよく宙へと跳び出し右拳を握り振り上げ、落下して来る烈へと弾丸の如く一直線に向かって行った。

幸斗が龍殺剣を放った真の狙いは「蛍光」による超加速を烈に止めさせる為だったのだ。蛍光を実行している間烈は「土竜の手」を使用する事ができない、幸斗はそれを看破して「試合会場全体を一気に攻撃すれば流石の烈も無敵の土竜の手を使用する為に蛍光による超加速を緩めざるを得ないだろう」とひらめき、それを実行したのだ。

作戦は御覧の通り見事に成功、空間に潜んでいたモグラはまんまと鬼の眼前に姿を現したのであった。

——よしっ、これならイケる!!烈先輩は今切り返すように左の霊装を振り被ってきているけれど、コンマの差でオレの拳が先に届くぜ!!

地上約30m辺りの宙で両者はおよそ0.3秒後に接触する事だろう。烈は今上下逆さ向きで落下し、下から迫る幸斗に対し振り上げるように左の神楽土竜を振り上げるように繰り出そうとしているが、幸斗は既に烈の顔面を狙って右拳を振り出している。

左手に持つ太刀ではなく拳で攻撃する事を選んだのは今までの経験上一瞬の勝負ならば剣より拳の方が速い故に有利だと本能的に判断したからだ。

「オラアアアアッ!!」

幸斗のその判断は正しい、このまま行けば烈の鉤爪が幸斗の身体を抉る前に幸斗の拳が烈の顔面を捉える事だろう。幸斗の全力の拳がクリーンヒットすれば例えBランクであろうと一撃でノックアウトは確実だ。

——オレの、勝ちだっ!!!

「三ノ型——《反衝脚（はんしゅうきやく）》」

幸斗の拳が烈の顔を殴り飛ばさんとする直前、烈がそう呟いたその瞬間に幸斗は腹部に突かれたような強烈な衝撃を感じ取った……。

——…は？

幸斗はその衝撃を受けた自分の腹に目を向ける。訳がわからなかった、何故なら彼の腹は木槌で叩き突かれた餅のように大きく円形に窪んでいたのだから……。

——なん……だ……と？

時が止まったかのような感覚に襲われ驚愕の表情を露わにする幸斗、視線をゆつくり上げると目の前にいる烈は頭をこちらに向けるかたちで向かって来ていたはずなのに何故か地に足を向けている正常な体勢になっていた……それだけならまだ驚くに値する事ではないのだが、彼は今……上に向かって上昇し始めている。

——…マジ……かよ……。

遅滞する感覚の中、幸斗は自分が今何をされたのかを察し、動揺の感情が彼の脳内を支配していた……幸斗はあの一瞬の間に烈の強烈な踏みつけ蹴りを腹部に受けていたのだ。

如月瞬煌流体術、三ノ型【反衝脚】——受けたら致命傷となる大振りの攻撃を囷に視線誘導し、その隙を突いて相手に【瞬間】の踏み込みを蹴り込んで相手に強烈なダメージ

ジを与えると同時に瞬間で距離を取る攻避一対の技である。

「——がはあっ!!」

そして時は動き出す……幸斗の感覚が正常に戻った瞬間、彼は口から胃液を吐き出し、衝撃によつて跳躍する前に居たクレーターの中央に背中から叩き落され、反動で身体がワンバウンドした後、その場に仰向けで倒れた。

「が……あ……あ……」

ド根性でなんとか意識を保つた幸斗であつたが、烈の「瞬間」の踏み込みによる衝撃は凄まじく重く、身体が痙攣して彼は一時的に動けない状態となつてしまつたようだ。

——クソ……身体が痺れて起きれねえ……このままじゃやべえ……。

この時、時計の針は丁度十二時を指していた。先程天に放つた龍殺剣により消滅した天蓋の遙か奥にギラギラと輝く夏の太陽が鎮座し無様に倒れている鬼を嘲笑うかのように見下しており、その中心には小さな輝きを放つ青紫の光が在り、それが徐々に増大して太陽を侵食している……否、その光は地上に「近づいて来ていた」。

——動け……動け!……動けっ!!——

その光が天より接近して来ているのを視認して必死に身体を動かそうともがく幸斗、あの青紫の光が何であるのかを理解した為に今すぐこの場から退避しなければ危険だと彼は確信したのだ。何故ならあの光は——

・・・そして・・・幸斗の足掻きも空しく無情にもその瞬間はやって来てしまった・・・
とうとう烈が流星の如く第一訓練場内に飛来し、その勢いのまま幸斗の真横に落下す
ると同時に青紫の光を纏う鉤爪が地に倒れる幸斗の身体に叩き付けられたのであった。

「・・・がっ!!!」

再び時が遅滞する。遙か上空より一直線に直下し叩き付けられた一撃は地に倒れる
少年の身体を跳ね上げる。遙か上空からの直下という巨大な位置エネルギーと重力加
速という運動エネルギーが学園中に響く轟音を鳴らすと共にクレーターを更に深く陥
没させ、砕かれた地の破片と粉塵が第一訓練場内を蹂躪した・・・そして時は動き
出す。

『きききき、如月選手の【土竜の手】が真田選手にクリティカルヒットオオoooooooooooo
!!!なんという事だあああああ!!!?真田選手必殺の龍殺剣が天を蹂躪し超加速し続ける如
月選手を止めたと思ったら、その隙を狙って追撃を仕掛けて来た真田選手を如月選手は

カウンターで地に叩き落とし天高く舞い上がるとそのまま隕石のような勢いで落下して地に倒れた真田選手に決定的な一撃を叩き込みましたあああああつ!!まさに息も吐かせぬ数秒の攻防!!常人には理解の及ばぬ圧倒的な光景に私、この昂る感情をどう言い表したら良いのか分かりません!!これは試合は決したか??!!全てを削り取る如月選手の手土竜の手をまともに受けてしまった真田選手はどうなってしまったのか!!?」

土竜の手による一撃の反動で跳ね上がり、バウンドしながら地を転がってクレーターの斜面が急となる直前の場所に幸斗の身体はうつ伏せに倒れる体勢で停止した。フィールドを覆う粉塵が晴れると第一訓練場内に居る全ての人間が倒れ伏した幸斗の姿を視認し眼を見開いて声が出ず啞然と沈黙する中、実況解説の女子生徒による試合状況を解説する大声が会場中に響いた。

「ユ、ユキトツ!」

「真田さん……」

「まともに受けていたわね……彼、無事なのかしら?」

うつ伏せに倒れ、ピクリとも動かない幸斗を目の当たりにしてステラ達を含めた観客達が一斉に青ざめる、最悪の事態を想定したのだろう、当然だ、烈の土竜の手は例外無く全てを削り取ってしまう無敵の伐刀絶技なのだから、それをまともに受けてしまった幸斗の身体が今どういう状態になったのかを想像するだけでも悍ましい事だろう。

「・・・」

幸斗の仲間である涼花と重勝もそれぞれ幸斗が倒れ伏す姿を見つめて訝し気に眉を顰めていた。果たして幸斗は無事なのか？そして試合の行方は!?

届けられたダチからのメッセージ!幸斗、今こそ本気を出す時だ!!

如月烈の無敵の「土竜の手」をその身に受けて倒れ伏した我らが真田幸斗。観客達は最悪の事態を想像して表情を青ざめさせ、ピクリとも動かない幸斗を固唾を呑んで見守っている。

『真田選手全く動く気配がありません!試合はこれで決したか!?それより彼は生きているのでしょうか!!?』

『ん、そうさねえ。れつつーの「土竜の手」はその鉤爪で抉ったモノを例外無く削り取って消滅させてしまうらしいからねえ、正直あれで削り取られたところによつては取り返しのつかない事になっているかも・・・』

『そ・・・それでは真田選手は死n』と言つても——』えっ!?!』

寧音が放送を通して最悪の事態の細かい予想をした為に実況解説の女子生徒が表情を引き攣らせて結論を口にしようとするが、のらりくらりと寧音がその言葉を遮る。

「ユキト、アイツもしかして死んじやったんじやないでしょうね!?!」

「・・・・・・・・」

「ねえっ!!何か言いなきいよりヨウカ!アンタの仲間がやられたっていうのに何で黙っているのよ!?!ゼツも何とか言ったらどうなの!?!アンタの兄g「あの愚兄が、何を甘い事を。それは真田に……いや、覚悟を持って戦う者に対する最大の侮辱だろうが」えっ!?!」

一方同時に観客スタンドに居るステラ達は揉めていた。仲間が死んだかもしれないというのにいつも通りの不機嫌そうな平静な態度でいる涼花や自分の兄がクラスメイトを殺したかもしれないのに相変わらず無愛想な絶に対して怒りを露わにして怒鳴るステラであったが、いきなり絶が呆れるように額に右掌を当てながら怒鳴り声に割り込み、烈のやった行為に対して扱き下ろしたのだが、ステラが怒鳴っている理由とは違う意味で言ったようである。

「真田は死んではいけないぞヴァーミリオン、何故なら——」

そして寧音と絶は同時に同じ言葉を口にする——

『『実像形態でくらったんじやないなら死ぬわけがないだろうが(けどねえ)』』

「げほっ!げほっ!」

二人が発言し終えると倒れ伏す幸斗が息を吹き返し、右手を地に着いて起き上がろうとしていたのだった。

『さ、真田選手は生きていたああああっ!!?特に目立った外傷も無く、致命傷を負った形跡は見当たりません!』

「ユキトツ!!」

「真田さん!」

「よかったあ、生きていたよー、死んじやったかと思って心配したよー」

「うむ、無事な様で安心したな」

「あのお馬鹿、余計にくらい過ぎなのよ防御力紙のくせに、もつと上手く立ち回ればこんな醜態曝さずに済んだわね」

「まあまあ、涼花ちゃん。ここは素直に無事だった事を喜んであげなさいよ、ね？」

幸斗が無事であった事にステラ達は歓喜しホッと安心感を得る（若干一名皮肉を言っているが・・・）、会場内も幸斗が存命だった事で重たくなっていた空気が和らいだようであり、他の観客達も胸を撫で下ろしていた・・・しかし――

「烈先輩・・・テメエ・・・何で・・・幻想形態に・・・」

当の幸斗は内心怒り心頭であった。彼はうつ伏せに倒れたまま顔を上げて目の前に立って自分を見下ろしている烈を怒りの形相で睨みつけている。

【土竜の手】をもちにくらったのに幸斗の身体に外傷一つ無い理由、それは烈が霊装を非殺傷の【幻想形態】に切り替えて伐刀絶技を放ったからである。今幸斗が怒りを抱いているのは烈にお情けをかけられたと思っているからだ。命を懸けて戦場に身を投じる者にとって敵に情けをかけられるのは最大の屈辱だ、元傭兵である幸斗もまたそういう類の人間であり、故にこの絶好の好機に自分に実像形態で止めを刺さなかった烈に対して非常に腹立たしい感情を抱いたのである。

「あく・・・お前の言いたい事は解ってはいるってリユウだが・・・勘弁してくれって。真剣勝負とはいえお前は俺の後輩ってリユウなんだぞ？可愛い後輩を消して気分が良いいリユウがないからな」

幸斗に怒りの感情を向けられても困ったように両掌を肩の横に上げてやれやれと理

由を説明する烈。選抜戦は実戦の感覚を養う為に実像形態で行う命懸けの戦いではあるのだが本物の戦場というわけではない、況してや対戦相手は皆ライバルではあるが殲滅すべき敵では無く学園の仲間なのだから命を奪って気分が良い訳がないだろう。覚悟が無いと言われればそうなのかもしれないが、少なくとも今目の前で倒れ伏している少年は自分の殺すべき敵ではないと烈は思ったのだ。

「ふぎ」・・・けんな!

だが幸斗にとつて相手の感情などどうでもよかつた、「かわいそうだから手加減してやろう」【殺す価値がないから命だけは見逃してやろう】「オメーじゃオラには勝てねえ」、幸斗はそういう見下げた感情を自分に向けられるのが大嫌いなのだ。

「舐めんな!こんなんじやオレはま d ——!!?」

『おおっと!?真田選手どうしたあつ!?怒りの形相で立ち上がろうとしますが、肩から崩れ落ちて身を伏せてしまいました!!真田選手立ち上がれませんか!』

——なん・・・だ?・・・急に・・・意識と・・・感覚・・・が・・・。

突如として意識が暗んだ幸斗は再び倒れ伏し、動揺の顔を烈に向けた、その灼熱の瞳の光は消えかけている。烈は当然だと呆れるような目線を見上げる幸斗のチカラの無い目線に合わせて口を開いた。

「無駄だ、【これで終わりだ】って言っただろう?幻想形態は肉体は傷付けないが【それ

以外」なら通常通りに作用するってリユウだからな。つまり今、お前は肉体は削り取られていないが「それ以外」は根こそぎ削られているってリユウさ、そのしつこい根性とかな……」

「っ!!」

烈の説明を聞いて幸斗の薄れる眼が一瞬だけ見開かれる。烈は先程の一撃で幸斗の「肉体以外の全てを削り取った」と言ったのだ。

人という存在を構成するのはなにも「肉体」だけではない、「精神」や「感覚」、伐刀者ならば「魔力」という風に様々なモノが人の身体には秘められている、幻想形態で放つ烈の「土竜の手」は肉体の代わりにそれらを全て削り取るのである。

これはお馬鹿な幸斗でも理解できた、今自分は体力も魔力も……自慢である不屈の意志すらも削り取られてしまっているのだと……。

「これをまともにくらべて未だに意識を保ち続けているのは大した意志を持っているなってリユウだが……その状態じゃあもう戦えないってリユウだな、身体が無事でも立ち上がる意志と気力がもう無いってリユウなんだからな」

「……………」

「風間の奴が言っていた通り大した男だってリユウだよお前は、出来損ないと称されるようななんの才能も無い身でこれ程までのチカラを身に付けたってリユウの他に、絶対

に諦めない不屈の心・・・俺なんかとは大違いだつてリユウだ」

烈はほぼ廃墟と化している第一訓練場全体を見回して幸斗のチカラを称賛すると、冥土の土産に教えるかのように幸斗に語りだした・・・如月烈という【出来損ないの武術家】の話を・・・。

「・・・俺と絶の実家は武術家の家系つてリユウでさ、魔導騎士が台頭に立つ魔術の才能中心の現代においては非常に珍しい【身体能力の高さで資質を量る価値観】を持つてい一族つてリユウなんだ」

如月瞬煌流體術を創設した如月家は神奈川県のはずれにその門を置いている。最速と謳われる武術の一派である如月瞬煌流體術は今時珍しく魔力量よりも身体能力・・・特に脚力を重要視する流派なのである。

「俺の弟である絶は生まれつき身体のパネが異常に発達しているつてリユウで如月瞬煌流體術と非情に相性が良く、過去最年少の十二歳で奥伝に至り、如月家始まって以来の神童つて呼ばれているつてリユウなんだが・・・その一方で現如月家の長男で次期当主である筈の俺は逆に生まれつき身体が弱かったつてリユウでな・・・あ、身体が弱いと言つても不健康つてリユウじゃないぞ!俺は至つて健康だ!まあ最近よく腹を壊すし、食生活がどうのこうのつて絶に言われているつてリユウだけど・・・」

「・・・・・・・・」

「いや、そんなイタイ奴を見る目で見るとってリュウだ！ジャ○とか黄○の味とか牛○のタレとか、凄く美味いんだから何にかけたっていいだろうがってリュウで——」

・・・話が脱線して烈は焼肉のタレは何にかけても美味いという内容を熱烈に語り始めたのだが、幸斗を含める第一訓練場内に居る人達が全員啞然としてビミョーな空気になったので烈は咳を一回吐いて気の昂りを抑え話を戻す。

「・・・まあ、それは一旦置いて・・・俺は絶とは違い他より身体能力に恵まれていなかったってリュウさ。俺は幼い頃は運動オンチってリュウでな、走ると200mも走破しないうちに息切れを起こし、50m走は魔力強化を施しても十秒以下、鉄棒は逆上がりすらまともにできなかつたってリュウ・・・」

烈は溜息を吐いて参ったなと黄昏て幼き日の黒歴史を語る。その黒歴史から判るように如月烈という少年は武術には向かない体質をしていたのだ。

「そんなリュウで俺はこれではいけないと人より十倍の身体能力向上の鍛練に励み、なんとか初伝を貰うにまでは至ったってリュウだが、俺にはそこが限界、師範である親父に中伝の継承は打ち止めされて事実上の破門になったってリュウさ・・・フツ！笑っちゃまってリュウだよな。伐刀者としては天才ともてはやされていても、価値観の違いだけでその天才も落ちこぼれになっちゃまうってリュウなんだからな・・・ホント理不尽な世の中だってリュウだ・・・」

魔導騎士養成を目的とした破軍学園では校内序列第三位という優秀な学生騎士である如月烈も如月という一派の中では落ちこぼれであった。技の伸びに限界を感じていた事を師範である父親に見抜かれて修練を打ち止めにされた時の絶望感と脱力感を烈は一日たりとも忘れた事はない。本当は悔しくて仕方がない筈なのに、その時の彼自身の弱い心が負けを認めてしまったのだ。

「だから真田、俺は前を向いて突き進み続けるお前の事は本当に尊敬するってリュウだ、羨ましいくらいにな・・・だがこれで理解したってリュウだろう? 世の中にはどうにもならない運命が一つや二つあるってリュウをよ・・・」

「・・・・・・・・」

「悪いが今年のお前の選抜戦はここで終わりだってリュウだ。なあに、お前を馬鹿にする連中の事なら気にするな、お前を笑う奴等は俺が黙らせてやるってリュウだからな。ここで倒れても恥じるリュウじゃないぞ、お前はまだ学園に入ったばかりの一年、お前の実力なら来年はほぼ確実に七星剣武祭代表入りできるってリュウだ・・・だから安心して眠れ」

「・・・・・・・・」

多くの理由を重ねて意識を失いつつある幸斗に烈は挫折を突き付ける。確かに幸斗はもう立ち上がるどころか左手に握る太刀を振るう気力と体力すら残っていない・・・諦

めない不屈の心も・・・根こそぎ削り取られてしまった・・・。

——真田、お前はよく戦ったと思う・・・だが巡り合わせが悪かったな。お前の一番の長所である攻撃力が通用しない相手という時点でほぼ勝敗は決まっていた。自分より強い相手に勝つ為にはその相手より自分が優れているモノで勝負するというのは基本だが、一流の伐刀者は相手より劣っているモノすらも利用して相手を罠に嵌めて潰す・・・終わったな・・・真田。

観客スタンドの席に座ってこの状況を眺めている絶もまた兄同様、幸斗はもう立てないだろうと思っていた・・・多少の相性の悪さなら戦法次第でひっくり返す事が可能ではあるのだが、あまりにも分が悪過ぎるのならひっくり返すのは不可能に近い、況してや一流の伐刀者が相手となるとほぼ勝ち目は無い。

「ユキト・・・」

ステラの神妙な眩きを最後に第一訓練場内全体は静まり、バトルフィールドだったクレーターの外側に居るレフェリーが手に持った旗を上げて烈の勝利を今にも宣言しようとしていた・・・。

——・・・ここまでなのかよ・・・。

消えゆく意識の中、幸斗は心の中で弱音を吐いていた。魂の底にある大切なモノが消えて行く感覚に苛まれていく。最強を目指し続ける心意気も、最大のライバルとの約束

も、諦めないド根性も・・偉大なる男から受け継いだ突き進み続ける意志も・・・。

『ちよっ!?!困りますって!!今試合中ですから!ちよまつ!!』

『悪いな、少しマイクを譲ってもらおうぞ』

終戦ムードの会場の静けさは、突如放送を通して聴こえてきた妙齡の女性の声によって破られた。

「へっ?」

「この声って……」

突如として聴こえてきた女性の声に会場内は何だときわめき始め、試合終了の宣言をしようとしていたレフェリーの手も止まった。ステラ達は聴こえてきた女性の声に聞き覚えがあるようであり呆けた声をあげている……その女性の声の主は——

『試合の最中にすまない、学園理事長の新宮寺黒乃だ』

「理事長!?!」

「何であの人が放送室に……」

いきなり放送を通し会場内に居る人間達に声をかけてきた黒乃の声に一同は困惑する。試合が決しそうなこのタイミングでいったい何の用があるのか?……その疑問は黒乃の次の発言によって明かされた。

『先程魔導騎士連盟日本支部に向かわれている折木教諭より黒鉄一輝と工藤新二の試合が決したとの連絡が入った。私はこれから其処で倒れている問題児が引き起こした被害の対応に追われなければならないので、後に時間が取れないので、この場を借りて皆にその結果を口頭で伝えさせてもらおう——』

——一年Fランク、黒鉄一輝と三年Cランク、工藤新二の試合は本日11:55をもって黒鉄一輝が勝利した。傷一つ負う事の無い完勝だったそうだ』

黒乃の口より齎された速報により静寂に包まれていた第一訓練場内は一瞬にして沸き上がった。落第騎士、黒鉄一輝の勝利・・・この時点で最終戦進出の騎士が十一人決定し、残る切符はあと一枚となったのだった。

「イツキ！よかった、勝ったのね!!」

「当然です、どこの馬の骨かわからない三下なんかにお兄様が負ける筈がありませんから」

「アラ？口ではそんな事言っているけれど珠雫、貴方今凄く嬉しそうな顔をしているわ

よ♪」

「さつすがクロガネ君だね！アタシが見込んだ通りの騎士なだけはあるよ♪」

「うむ、見事だ」

「相手がザコだったとはいえ、監禁という不自由な状況に置かれて精神が不安定な状態である筈にも係わらず完勝とはな・・・フツ、なかなかやるじゃないか」

「別に驚く事じゃないわよ。【模倣剣技】に【完全掌握】、【一刀修羅】なんて高度な集中力と精神力を要するスキルを駆使する黒鉄一輝がたかが監禁程度で精神を乱すわけが無いわ、順当な結果ね」

一輝の勝利という吉報に歓喜の声をあげるステラ達――

「・・・黒鉄さん・・・」

「刀華、気分が悪いんなら席を外したほうが・・・」

「ううん・・・大丈夫、しっかり観ておかないと・・・」

先程から心此処にあらざる状態だった刀華は泡沫に心配されながらも齎された報を聞いて気を取り戻す。

「あつちは黒鉄が勝ったってリュウか。奴は今先日の皇女サマとの熱愛報道で注目のつってリュウだからな、こりゃあ最終戦は大いに盛り上がるってリュウだ」

試合の勝利目前だった烈もまた空気を読んで報に耳を傾けて笑みを浮かべていた・・・

そして、一輝が試合に勝利し最終戦に駒を進めたという吉報は意識を失いかけている幸斗の耳にも届いていた。

——一輝が・・・勝った・・・。

幸斗は予期せぬ朗報に少しだけ意識を取り戻した。約二週間前に「必ず戻る」と約束して連盟に連れて行かれたダチが自分に向けられる理不尽な風当たりと倫理委員会共による胸糞悪い仕打ちにも負けずに前に進み続けているという情報は消えかけている幸斗の意識を保たせるには十分に効果があるモノであった。

・・・そして、放送室に現れた黒乃は窓ガラス越しにフィールドに倒れる幸斗を見つめ、一呼吸の間を置いてから更なる報を齎す。

『それともう一つ、折木教諭から其処に倒れている馬鹿者に伝えてくれと黒鉄からのメッセージを預かった。今言った通り私はこれから忙しくなるのでな、面倒だからこれもこの場で伝えさせてもらおう、一度しか言わないのでその馬鹿者は良く聞くように——』

黒乃はそう言うると一呼吸息を吸って間を空けてから幸斗に伝えるべく一輝のメッセージを言い放つ・・・この絶体絶命の窮地から彼を救う、降りかかる理不尽と戦い続けるダチの想いを——

『真田幸斗君、この前はありがとう。合宿場の河原で君が教えてくれた【突き進み続ける

意志」と〔自分だけの剣〕は僕に大切な夢を思い出させてくれた、騎士の高みを目指す
想いを強くしてくれたんだ。だから僕はその想いを胸に理不尽に抗い続け、こうして選
抜戦最後の戦いへと臨みを繋ぐ事ができたんだ。あの話を聞いた時、僕は君が〔本物の
強さを持った騎士〕だと感じさせられたよ。どんなに才能に見放されて上手くいかなか
てもできるまで物事に立ち向かい続ける不屈の心、周りから多くの挫折を突き付けられ
ても自分の想いを真つ直ぐ曲げない鋼より固い信念、強さを手に入れる為に想像を絶す
る努力を毎日積み重ねてきたド根性、そして世界が定めた運命をその〔運命を砕く剣〕を
もって覆し続け常に前へと突き進み続ける意志・・・それらの君の強さと凄さを僕はあ
の時に感じた。それで思ったんだ――

「僕はそんな凄い君と七星の頂きを懸ける舞台上で戦いたいと」

「っ!?」

【黒鉄一輝は真田幸斗と七星剣武祭で剣を交えるのを望んでいる】、それが伝えられた瞬間幸斗は眼を見開いていた。

——一輝が・・・オレと・・・。

メッセージ越しのダチからの想いに戸惑いのあまり困惑する幸斗、これは挑戦状だ、落第騎士・・・いや無冠の剣王（アナザーワン）から殲滅鬼（ゲストラクター）へのライバル宣言である。

『君に負かされたステラと珠雫の仇討ちというわけじゃない、僕は純粹に君と戦って勝ちたいんだ。君と勝負をする事で僕は更なる高みに行く事ができると思っている。僕と君、どっちが上かお互いの剣を交えて白黒ハッキリ付けよう! だから共に七星剣武祭の舞台に行こう、幸斗君!!』

——一輝・・・。

挑戦状は今、叩き付けられた。その音が幸斗の意識を、気力を、チカラを、不屈の心

を、突き進み続ける意志を甦らせる!

「熱いねえ、心が滾るようなりユウのメッセージだ、ご苦労なこつたな。悪いがその想いは……なっ!!?!!」

黒乃が『以上だ』と一輝のメッセージを伝え終えて放送を切ると烈は呆れるような表情でやれやれと皮肉を言い、試合の決着を着けようと倒れ伏す幸斗に顔を向けると、烈の目に驚くべき光景が飛び込んで来たのだった……倒れていた筈の幸斗が……四つん這いの体勢になつて意識を取り戻している。

「真田……お、お前っ!!」

烈は口どもつて動揺を露わにする。何故だ?確かに奴の意志と気力は根こそぎ削り取つた筈だ、何故起き上がっている!?!と……。

「……へっ!まつたくとんだ浮気ヤローだ。ステラとの約束が叶えられないからつて今度はオレに乗り換えて来るなんてよ……」

皮肉を交えながらもその顔には笑みが浮かんでいた、何事にも喰つて掛かるようないつもの不敵の笑みだ。幸斗は続いて身体を引いて片膝を立て、その足を地に着ける。

「……いいぜ、伊達のヤローのついでだ。その約束受けてやろうじゃねえか一輝! たつた今からテメエはオレの……ライバルだ!!」

そう言い放つて幸斗は……立ち上がった。

『た・・・立ったあああああああつ!!! 真田選手、現在連盟に居る黒鉄選手からの熱烈なメッセージを受け取ってあの絶望的な状態から見事復活しましたあああああああつ!! なんと不屈! なんと超展開! 真田選手の鉄の意志と鋼の強さには本当に脱帽です!! 彼の復活に会場内は最高にヒートアップ!! 試合続行ですつ!!!』

実況解説の女子生徒が黒乃からマイクを取り戻し、叫び狂うように解説を言い放つと同時に第一訓練場内の雰囲気は観客達の大歓声によつて地の底から沸き上がるかのように最高の盛り上がりを見せる。

「うっわー! 凄い凄いいい! まるでマンガみたいだね〜♪」

「うむ、其も心が震えたぞ」

「まったく・・・イツキったらしようがないんだから。これもアタシがユキトに負けたのが悪いのだけど、なんか妬けるわね・・・」

「負け犬であるステラさんにはもう用は無いです事なのでしようね。てなわけで敗者の妬みは醜いので口を閉じてください、あと脚太いですよ」

「アンタもユキトに負けたでしょうが!! あと脚太い言うなつ!!」

「んじや使いどころのない無駄乳」

「くっつ! 見てなさいよ、来年はイツキもユキトもリョウカもシズクもみいんなアタシがギャフンと言わせてやるんだから!!」

「ギャフン」

「キイイーっ！馬鹿にしてえ!!誰が今言えと言ったのよシズク!!」

「まあまあステラちゃん・・・」

幸斗の復活にステラ達のテンションも上がり上がりになって盛り上がっているようだ（特にステラが騒がしい）。

「烈の土竜の手をまともに受けて・・・立ち上がった・・・だど?」

その隣では絶が表情を固めて驚愕の声を上げ唾然としていた。幾ら幻想形態とはいえ土竜の手はその鉤爪で抉り取ったモノ全てを削り取る文字通り必殺の伐刀絶技、その恐ろしさを幼い頃から良く知っている絶は幸斗が立ち上がった事実が受け入れ難く感じていたのである・・・そして彼の隣の席に座る涼花は当然と言うかのように微笑を浮かべていた。

「なに、これも驚く程の事じゃないわよ。一瞬意識と精神を削られた程度で沈むようならあのお馬鹿は西風時代の初陣でもうとつくに死んでいるわ。選択を誤ったわね如月先輩、これでもう幸斗は本気になった。こうなったらもうあのお馬鹿を止められるのは、わたしの知っている限り世界に五人しかいないわよ」

「・・・なに?」

微笑を浮かべながら両腕を組んでさりげなく涼花が言った発言を聞いて絶は疑惑を

の声を上げる。本気になった幸斗を止められるのは世界に五人しかいないとはどういう事なのだろうか?・・・その疑問は今、立ち上がった幸斗に起こっている現象が関係しているようだ。

「な!?!・・・何だ【アレ】はっ?!」

「もおく、新宮寺理事長、困りますよお。マイクは私の魂なのに」

「スマンな、どうもこの後時間が取れそうもなかったんだ。勘弁してくれ」

「アハハッ！くーちゃん白々しいってば、他の教員にでも伝言で頼めばよかったのにさあ♪」

一方、観客スタンド四階の一角にある放送室では先程いきなり勝手に入って来て実況中の女子生徒から放送マイクを取り上げ情報告知を行った黒乃が被害者の女子生徒にガミガミ叱られていた。隣ではゲストでこの場に居る寧音が叱られて困った表情を浮かべている黒乃を見て愉快に笑っている。

「それにしてもゆつきー、派手にブツ壊してくれたねえ、もう廃墟じゃんか此処」

「この場だけで済んだのならまだ良かったんだがな。先程奴が引き起こした地震の影響で関東地方全域の山で土砂崩れが起きるわ、建物は数えきれない程倒壊するわ、海沿いでは津波が発生するわ・・・おかげで日本中の魔導騎士達が残らず出動して民間人の安全を確保する作業をしなければならぬ事態になった上に先程の龍殺剣でまた人工衛星を破壊し更には惑星探査機をも一機撃墜・・・もう勘弁してくれ、誰が事態を收拾すると思っているんだ・・・」

「アハハッ！ホントくーちゃん時の能力が使えて良かったねえ、コレ被害総額何兆じゃあ済まないと思うよ♪」

「・・・この被害規模だと全てを元に戻すのに半年以上は掛かるだろうがな・・・」

「ハハハッ！ドンマイ！きつとそのうちいい事がある・・・ん？」

肩を落として落ち込む黒乃を他人事なのを良い事に気さくに黒乃を励ます寧音であつたが、会場内のバトルフィールドが眺められる窓ガラス越しにフィールド内を見た寧音はそこに立つ幸斗が今何かをしようとしているのに気が付いたようだ。

「お!!ゆつきーが何かするみたいさね!さて、次はどんなモノをブツ壊すn——っ!!!?」

その時、寧音は今幸斗が発し始めた「何か」からゾクリ!と背筋が凍るような感覚を感じ取った。

——っ!!!? うちの手が・・・震えている?

寧音はその「何か」を感じ取ると自分の手が小刻みに震え出している事に気が付いた。これは感動から来る震えでも武者震いでも況してやこの猛暑の中で寒いという訳でもない・・・これはそう——

——まさか、うちが恐怖しているっつーのか!?!【至ってすらいない】子鬼(ゆつきー)の闘気なんかで【至っている】夜叉(うち)がビビッているっつーのか!?!

寧音は破軍学園の臨時講師に就いてから今までに無いと言えるくらいに顔を引き攣らせた。眼を見開き身体全体から汗を流し出しているその戸惑いの小柄からは普段の樂觀さは微塵も感じられない・・・KOK・A級リーグ世界ランク三位【夜叉姫】西京寧音は今、元服したばかりの一人の少年が現在発している【何か】によって正真正銘の

恐怖を抱いているのであった。

「く、くーちゃん．．．これは一体——なっ!!?」

寧音が黒乃に振り向くと寧音は更なる驚愕を目にする。なんと黒乃も寧音と同じように身体を小刻みに震えさせて全身から大汗を流しているのに対し、その隣に居る女子生徒は何事も無いかのように身体に異常は見られなかったのだ。

「ど、どうしたんですか？御二人共凄い汗ですよ!」

「．．．はは、そうか．．．真田の奴遂に本気になって「アレ」を使ったか．．．選抜戦では使わないだろうと高を括っていたが．．．これはまだまだこの試合で相当な被害が出そうだな．．．はは．．．もう胃薬の貯蔵は残っていない．．．な．．．」

「く、くーちゃん!い、一体ゆつきーは何をしたんさ!」

「ああそうか．．．貴様にはまだ教えていなかったな．．．」

原因不明の恐怖に晒されて混乱気味になっている寧音が問うと黒乃は遠い目をして明後日の方向を見ながら問いに答えた。

「初めに言っておく．．．信じられないかもしれないが、この恐怖は《世界の定めた運命の壁に達した者》と《運命の外側に立つ者》しか感じ取る事ができない．．．」

「なっ!!!?」

「?」

黒乃の発言に寧音はこれでもかと言うくらい絶句し、女子生徒は意味不明と言わんばかりに首を傾げたのであった。

「よく見ておくといい、これが真田が・・・攻撃力EXの判定を受けている真の理由だ!」

「や、真田・・・何だって・・・リュウだ・・・それは?」

如月烈は今、この試合で初めて動揺の感情を露わにしていた・・・目の前に立つ対戦相手の学生騎士、真田幸斗の足下や両肩から溢れ出す【異常】を目の当たりにして

「・・・烈先輩、ごちゃごちゃ言うのはここまでにしようぜ・・・へへっ! 【コレ】は七星剣武祭で伊達の奴と戦る時まで取っておきたかったんだが・・・仕方ねえ、披露してやるよ。オレの・・・全力全開（フルパフォーマンス）を!!」

幸斗が威勢よく本気で戦う宣言を言い放った瞬間に溢れ出る朱い闘気が彼の全身を包み始めた、幸斗達元西風の団員達が使用するスキル【戦場の叫び（ウォークライ）】の闘気と同じように。

それは元西風の団員である涼花と重勝にも行動を促した。

「皆、良く聞きなさい! アイツが【アレ】を使用したらもう先生方が護っているこの観客席も安全ではなくなるわ! 死ぬ覚悟が無い者はすぐにこの場から逃げなさい!!」

「リヨ、リヨウカ!!?」

「一体何を言っているのですか? 真田さんは一体、何をしようとしているの?」

涼花は観客スタンドに居る人間全員に対して大声で避難勧告を出しており――

「あくあ、やつぱり【アレ】を使うよな・・・これは俺が出ないと死人が出るかもしれねーな、仕方ない・・・未来（さき）を指し示せ、重黒の砲剣（グラディウス）」
赤ゲート側の控室でモニター越しに試合の行方を見守っていた重勝はソファアから立ち上がってそう呟き、廊下側の出口から出て霊装を顕現していた。

「此処に残るのならば覚悟しておきなさいよ――」

「烈、運良く生き残れたら特上の焼肉でも奢ってやるよ、だから気を抜くんじゃねーぞ」

「——鬼が……【叫ぶ】わ(ぜ)」「

「GURRAAAAAAAAAAAAAAAAAA——ッ!!!」

幸斗が空に向かって咆哮を上げた瞬間、彼の纏う朱い闘気が一気に激流の様に流動し活性化して弾けた。

そしてその闘気は世界を……次元を激震させる……《戦鬼の叫び（オーガクライ）》……発動!!

戦鬼の叫び（オーガクライ）発動！真なる攻撃力EX!!

真田幸斗という鬼の叫びは「この次元」を揺るがした。

人はおろか最早世界すらも理解が及ばぬそのチカラを世界中の「運命の外側に立つ者」達は感じ取り、そして慄く。

「っ!!?…何…今の?」

それはKOK世界ランキング第4位の《黒騎士》を動揺させ――

「ぬおっ?!なんっすかこれは?!びりびりするです!」

中華連邦のとある場所に幽閉されている《饕餮（トウテツ）》の鍛えあげられた肉体と精神を震わせ――

「…チツ!気分悪い。この感じ…【傭兵王】が連れていたあのガキか?…へっ!おもしろえ」

五年前に世界最強の傭兵、【傭兵王】風間星流がこの世を去った事で最強の傭兵の座をモノにした《砂漠の死神（ハブーブ）》の乾ききった心を沸き立たせ――

「ビツクリするな!もう!せっかくの楽しい虐殺タイムが台無しじゃないかあ…」

足下に死体の山を築き上げて快楽に浸っていた《傀儡王（かいらいおう）》の気分を損

ねさせていた・・・そして――

「世界が怯えている!?!・・・東日本の南から感じますね。魔力ではなく闘気のようなすが・・・」

世界最強の剣士にして世界最悪の犯罪者、五年前に傭兵団西風の団長【傭兵王】風間星流を亡き者にした幸斗達の因縁の伐刀者【比翼】のエーデルワイスにさえにも衝撃を齎していたのであった。

「世界が怯える程の尋常ならざる闘気を発する者・・・気になりますがこの程の闘気を発する強者ならいざれ相見える事となるでしょう。【絶望の未来の運命】を覆すチカラを持つかどうか・・・その時に確かめさせてもらいますよ、鬼のように凄まじい闘気を発する名も知らぬ強者よ・・・」

「あ……あ……あ……」

世界そのものが恐怖し定められた運命を脅かす重圧……開いた口が塞がらないとはこの事か、幸斗が叫び【戦鬼の叫び】を発動した後、変貌した幸斗の姿を目の当たりにして第一訓練場内に居る人間の殆どが絶句していた。

「な、何なのよ……あれは?……」

ステラをはじめとする観客達は、表情を硬直させて戦慄し、バトルフィールド……だったクレーター内に立つ幸斗に視線を集めている。

「あれが……真田……だと?……」

絶が今の幸斗の姿を見て声を詰まらせる。幸斗は今、身体中に朱く煌く焔のような闘気を身に纏い、夕焼け色の髪は無数の太い針のように逆立つて朱い燐光を発し陽炎の様に揺れている。燃え盛る灼熱の眼で目の前の烈（てき）を捉え、獰猛な笑みを浮かべている。両腕を組んで威風堂々と立つその姿はこの世の全てに楯突く反逆者のような雰囲気を出し、神すらも恐れぬ蛮勇さを感じさせていた。

その姿、まさに全てを破壊する赤鬼、全ての存在が恐れ慄く破壊の化身そのものであった……そして周囲の目を最も惹くのは――

「それよりも何なんですかアレは・・・真田さんの周囲の空間が・・・割れた?」

叫んだ後に幸斗の周りに突如として出現した無数の「孔」だろう。なんとも異様な光景だ、ガラスに穴が空いて出来たかのような形のそれは幸斗の周囲の空間に割って入って来たかのように浮いており、その「孔」からはまるでプラネタリウムで映す満天の星空のような風景が貌を出している。

『いい一体真田選手はなな何をしたというのでしょうか?!いいいきなり獣のように耳を劈くような雄叫びを上げたと思つたら、真田選手は朱い焰のような現象を身に纏つていて、驚く事にその周囲の空間が割れているという現象が起こっていました!!し、信じられません。真田選手はその魔力の低さ故に伐刀絶技が使えなかつた筈なのですが、これは一体・・・どういう事なのでしょう?・・・西京先生?』

『ぜえ、ぜえ!・・・はあ、はあ!・・・』

幸斗が引き起こした現象を目の当たりにして戦慄する実況解説の女子生徒が動揺しながら寧音に問う。その時横目を向けた彼女の目に入ったのは身体中から大汗を流して表情を引き攣らせ、明らかに気分を害している夜叉姫の姿だった。

——— いったいアレは何だつていうのさ!?!ゆつきーが叫んだらいきなり息が苦しくなつちまつた。何なのさ、この感じは!?!どう考えても普通じゃねーよ、まるで空を飛んでいる最中下から伸びて来た腕に脚を掴まれてそのまま海の底に引きずり込まれる感

じがするさね!

寧音は今の幸斗から得体の知れない畏れを感じていたのだった。興味本位から来るいつもの驚きではない、彼女は今本気で畏れているのだ、朱い鬨気を纏うあの少年を。

——それにゆつきーの周りの空間に空いた【孔】……見覚えがあるなんてもんじやない、あれは——

「くーちゃん……ゆつきーの周りにある孔って……」

寧音は黒乃に目を向ける。黒乃も幸斗が発する圧力に相当参っており、壁に背中を預けて気分悪そうに寄り掛かっていた。

「……貴様もわかつているんだらう寧音?……あれは時空間が崩壊してできる《次元の裂け目》だ……」

「……やっぱりそうかい……」

圧力で息が詰まりそうになりながらも黒乃は質問に答え、寧音は最初から返ってくる答えが解っていたかのように呟いた。この二人がアレを見間違う筈がない、実際には学生時代あの孔を目撃した事が……いや、此処に居る【世界時計(ワールドクロック)】の二つ名を持つ魔導騎士が実際に創った事のある現象なのだから。

「懐かしいねえくーちゃん。学生時代、ウチらが七星の頂きを懸けてぶつかり合ったあの決勝戦をさ……」

「・・・ああ、そうだな。アレは貴様がムキになつて「霸道天星」なんてもの使つたりしなければ使用したりはしなかつたんだぞ？・・・おかげでその時に使用した試合会場は今も【次元の裂け目】だらけで侵入禁止区域になつたままなんだからな・・・」

寧音の【霸道天星】と同じく連盟から【禁技指定】を受けた新宮寺黒乃必殺の抜刀絶技《時空崩壊（ワールドクライシス）》、指定した座標の空間の時空を無差別に捻り、空間を崩壊させて世界に消えない傷を創つてしまう恐るべき伐刀絶技だ。その消えない傷こそが【次元の裂け目】、世界そのものを傷つけてできる孔であり、そこからどこかの異世界に通ずると言われている超常現象である。

「アハハッ、細かい事は気にするんじゃないよ、もう過ぎた話じゃないか・・・しかし、あれはどういうことさね？幾らゆつきーの叫び声が頭がカチ割れそうなくらい五月蠅かつたとはいえ【次元の裂け目】が出来るだなんてさ・・・」

寧音の疑問はもつともだ。幸斗は黒乃のように空間に作用する伐刀絶技は使えない・・・というか伐刀絶技が使えないので叫んだだけで空間が崩壊したという事実は意味不明としか言いようがないだろう。

だが、あの真田幸斗という鬼がどれほど規格外な存在かを黒乃は知っている・・・。「私も信じたくはないが・・・真田は【物理的に時空間を破壊した】んだ・・・【戦鬼の叫び（オーガクライ）】を使用した真田の攻撃力はもはや世界すら理解できぬ高みに達

している、ただの叫び声ですら世界に傷を付けてしまう程にな……」

「……おいおい、マジかよ……それって……」

「ああ、【至っている】貴様が一番感じている筈だ……今の真田は【貴様達】を倒せるぞ」

黒乃は戦慄する寧音に忠告するように言い、寧音は表情を引き攣らせながらフィールド上に立つ朱い闘気を纏う幸斗に視線を向ける。

「なるほどねえ、あの子鬼は【世界が定めた運命そのものをひっくり返す】っていうのかい?……」

そう呟く寧音の顔には額から冷や汗を流しながらもいつの間にか笑みが浮かんでいった。

【運命を覆す伐刀者】……か……ハハ、マジ笑えね……」

「これが・・・真田の本気・・・」

寧音程のトップクラスの魔導騎士さえも戦慄させる幸斗の【戦鬼の叫び】、観客スタンド四階の放送室で感じる威圧感でさえこの有り様なのだから間近でその気当たりを受けている烈の精神は相当擦り減って意識を失いそうな程に参ってしまったている筈・・・なのだが。

——確かに驚く程の変貌だつてリユウだ。向けられる威圧は半端なく重いつてリユウだし、周囲の空間に突然空いた孔なんて非現実的過ぎてリユウが分からない恐怖を感じる・・・だが妙だ、目に見える程の凄まじい闘気だというリユウなのに・・・【全く何も感じない】？

烈は幸斗が纏う朱い闘気からは何も感じていなかった・・・いや【何も感じる事ができなかった】という表現が正しいのか？放送室に居る寧音と黒乃は肩で息をして相当参っているというのに烈や観客達は変貌した幸斗にただ動揺するだけで気当たりによる重圧が掛けられている様子は全く見られない、その動揺もどちらかという空間に空

いた孔を見て困惑している感じだ。
だからこそ烈は不気味に思った。

——なんで何も感じないってリュウだ？目に見える程の闘気が何も感じないなんてリュウ有り得ねえ！

多かれ少なかれ人は例外なく「気」を持つている、「元氣」「勇氣」「根氣」「色氣」「殺氣」etc・・・それ等を人は感じ取る事ができるものだ。一般人でも近くで背中に掌を向けられれば直接触れられていなくとも微妙な熱を背中に感じる事ができ、感覚が研ぎ澄まされた武術の達人ならば「気」の流れを感じ取って相手の行動を予測する事だつてできる。

その「気」が目に見える「闘氣」となる程巨大なものならば「何も感じない」なんて事は有り得ない筈だ。故に烈は今の幸斗から得体も知れない不気味さを感じたのだ。

「・・・ふ・・・ふ・・・」

「っ!!」

そう思っている最中に幸斗が動きを見せたので烈は神経を研ぎ澄ませて身構える。緊張が高まる中、幸斗が取った行動は——

「——アーハッハッハッハッハッ!!」

なんと天に轟くくらいの大声で笑い出したのであった。

「らしくねええー……っ!!何らしくない事やってんだよオレはよっ!!当たらなければどうという事は無い?隙を突く?バツカじゃねえの!?馬鹿なオレがいきなりそんなムズイ戦法やろうとしたつてできる筈がないだろうが!アハハハハハッ!!!」

「……………」

突然笑い出して愉快そうに自虐の言葉を吐き捨てる幸斗を見て烈は唾然と呆気に取りられていた。あまりにも予想外な行動だったので呆けたのだ。

「そうじゃねえだろオレツ!!オレの戦法はどんな奴が相手だつて堂々と正面から叩き潰しに行く事だろ!!相手がどんな能力を持つていようが関係ねえ!十一年間鍛え上げたこの腕で!剣で!立ち塞がる相手を能力ごとブツ飛ばすのがこのオレ:真田幸斗だつ!!!」

笑い終わると高らかにそう言い放つて幸斗は烈に朱い太刀の切っ先を向ける。唾然と呆気にと取られていた烈はそれで正気に戻り、未だに不気味な感じが抜けきれていない中で呆れるような笑みを浮かべて再び身構えた。

「……へっ!何を言い出すのかと思えばまだ理解してないつてリユウだな!言つた筈だぞ?世の中にはどうにもならない運命が一つや二つあるつてリユウをよ!どんなチカラや質量・事象だろうと例外無しに削り取る俺の【土竜の手】は無敵だつてリユウだ!お前の攻撃力がどんなに規格外だろうと俺を正面からブツ飛ばすなんて不可能だつ

てリユウなんだよっ!!!」

【理由】を重ね、幸斗に純然たる事実を突き付けるように言い放ち、烈は戦闘態勢に移行する。これは驕りで言っているのではない、事実烈の土竜の手は幸斗の全力全開の龍殺剣ですらも容易に引き裂く程の理不尽な性能を誇るチート伐刀絶技であり、正面から能力ごと打ち破るだなんて事実上不可能と断言できる。

・・・だがそれでも、ここにいるのは「運命を覆す伐刀者」、真田幸斗だ!

「へっ! オレにとつてそんなの理不尽なんか今に始まった事じゃねえぜっ! だから何度でも言つてやる!!・・・いいぜ、それがアంతの言うどうにもならない運命だつて言うんなら——」

幸斗は鬼童丸を天高く振り上げる。どんな理不尽な運命だろうと関係無い、【突き進み続ける意志】をもって突き貫く! その誓いを胸に——

「——その運命を覆してやるっ!!!」

【運命を砕く剣】を地に振り下ろした。

天に轟くような轟音と複数のガラスが一斉に砕けるような破砕音が鳴り響く、世界の意志すら理解できぬ脅力によって発せられた埒外の剣圧が事象改変を引き起こし、想像を絶する巨大なエネルギーが放たれた。

「なっ!?!?」

それを目の当たりにした瞬間、観客達は言葉を失い、烈の表情が驚愕に染まった。地を割り進むは巨大な朱い光の柱、それが周りの空間を崩壊させながら凄まじい速度で一直線に烈へと向かって来ている。

『こ、これはいつもの剣圧閃光では無いぞおおおとおつ?!? 圧倒的な朱ですつ！観客席最上階を優に越える高さの朱い光の柱が雑音（ノイズ）すらも掻き消す物凄い爆碎音を鳴らして周囲に【次元の裂け目】を形成しながら如月選手に襲い掛かって行くうううううううつ!!! 戦場のド真ん中なんて表現じゃ生温い！地の底から地獄そのものが吹き上がり、現世を侵食して行くかのようなクレイジーな光景ですつ!! 如月選手はもはや埒外なこの一撃に対してどう対処するのかああああああああああつ!!!』

圧倒的な存在感を出す滅びの朱が空間土竜の名を持つ騎士に襲い掛かる、クレーターの斜面など関係ない、埒外の物理現象は地も空も全てを飲み込んで無に還すのだ。

——なんつつう一撃だつてリュウだ！空間を歪ますどころか風穴空けながら向かってきやがる!!【常軌を逸した科学は魔法と変わらない】つてリュウはよく聞くが、それを容認してもこれはイカれているな!!・・・だが——

思っている事とは裏腹に烈は冷静に身構えていた、何故なら彼には絶対無敵の伐刀絶技がある——

——怖れるリュウはねえつ！どんなに埒外の威力だろうと俺の土竜の手に削り取

れないモノは無いつてリユウだああああああつ!!!

「うおおおおおおおおおおおおおおおおつ!!!」

『如月選手突っ込んだあああああつ!! 霊装【神楽土竜】を振り上げて襲い掛かって来る破壊の光に堂々と正面から挑み掛かって行ったあああああつ!! 空間土竜の持つ鉤爪は地獄をも引き裂けると言うのか!?! 真つ向勝負だああああああああああああつ!!!』

烈は右の鉤爪を振り上げ、青紫の魔力を纏わせる。彼は全てを例外無く【削り取る】概念を持つ抜刀絶技ならば地獄だろうと天国だろうと引き裂けると確信している、それは鬼が叫んだ後でもその場に残った者達も同様、空間土竜の負けは無いと思っていた――

——一人を除いて。

「……無駄よ如月先輩。【戦鬼の叫び】を使った幸斗の攻撃力は世界にも理解できない……それ程の埒外な攻撃力を前に概念干渉だろうと因果干渉だろうと全ての事象は……【貫かれる】だけよ」

月花の錬金術師の二つ名を持つ少女が哀れむように眩いた瞬間、全てを削り取る土竜の鉤爪は眼前に迫った破滅の光に向けて振り下ろされ、爪が光に触れると同時にその爪は……消滅した。

「なっ——」

その顔が驚愕に染まる間も無く烈は地獄に飲み込まれた……破滅の光はそこで止まる事は無く、その後ろにある観客スタンドにまで襲い掛かる。

「う……うわああああああっ!!!」

「に、逃げろおおおおおっ!!!」

「まだ死にたくないよおっ！ママー——ッ!!!」

迫る地獄を前に耐え切れず一目散に逃げ出して行く観客達……賢明な選択だ、太刀

打ち不可能な災厄から逃れるのは当然の行動であるのだから誰も咎める者などいない。きつと自分は大丈夫と思つてその場に残る者は気が狂つたか、或いは愚か者だけだ。

「・・・・・・・・」

「ちよつとリョウカツ!?何で逃げないのよっ!!」

その場には愚か者とは程遠い筈の戦術家の少女が残つていた。そう、破滅の光が飲み込もうとしている観客スタンドは涼花達が座っている場所だったのだ。

涼花は迫る破滅の光を前に微動だにせず無言のままその場を動く素振りも見せなかつた、皆と共に出入り口から避難する為に階段を駆け上がるステラが席から動こうとしない涼花に必死に声を掛けるものの、涼花は一向に動こうとしない。

「・・・・・・・・」

「リョウカアアアアアアアッ!!!」

彼女は正気なのかと疑う余地も無く、破滅の光が観客スタンドの一階を飲み込み始める。観客スタンドは斜面になつている構造なので涼花の居る三階を地獄が飲み込むまでに0.数秒の猶予はあるが、少数単位の秒数なんて人間にとつて猶予にならないだろう。

ステラの呼びかけも虚しく破滅の光が涼花を飲み込もうとしたその時、突然「白い」魔力砲撃が飛来し涼花を飲み込もうとしていた破滅の光に着弾する。

「・・・えっ?」

「なっ!!?」

ステラ達は自分の眼を疑った、白い砲撃が破滅の光に着弾した瞬間双方は眩い光を発すると共に対消滅したからだ。

結果として破滅の光は涼花を飲み込む直前で消え去り、彼女は無事であったのだが、破滅の光に飲み込まれてしまった烈は消滅してしまったのか?・・・否、彼はまだ健在であった。

——あつぶねえええええっ!間一髪だったってリユウだ!!

地獄が烈を飲み込んだと思われた瞬間、烈は地獄が通り過ぎた左側に現れていのだった。右の鉤爪が消滅した瞬間に彼は無我夢中で残った左の鉤爪で左の空間を抉り、「空間切削」を使って瞬間移動し奇跡的に回避をする事に成功していたという事だ。もし一瞬でも「空間切削」の使用が遅れていたら彼は今頃三途の川の手前に立って茫然としていた事だろう、まさに危機一髪であった。

——一体どうなっているんだってリユウだ!「土竜の手」はしっかりと発動していた筈だ!何のリユウでこっちの霊装が消滅したんだ!!

急いで瞬間移動をした為に停止が利かずに烈はその場に転がりながら困惑していた。無敵の筈の爪が真つ向勝負で敗北し打ち破られる事実が信じられなかったのだ。

別に事実を否定している訳ではない、全てを例外無く削り取る概念干渉の能力を持つ自信の異能がチカラ任せで引き起こした物理現象に通じなかった事に疑問を抱いて混乱しているのだ。無理もない、無敵と信じていた自慢の伐刀絶技がたかが剣圧という物理現象に打ち破られてしまったのだから。

・・・だが、疑問を抱いている余裕など烈にはない。

「——なっ!!?」

「うおおおおおおおおおおおおっ!!!」

烈は受け身を取り、立ち上がった瞬間またしても異常な程大きな爆碎音が聴こえて来たと思うと、なんと既に目の前で朱い闘気を纏った幸斗が拳を振り抜いて来ていたのだった。

先程まで幸斗が立っていた場所を見てみるとその地面から後方の観客スタンド全体とその先の外壁にかけて扇状に崩落していた、幸斗の埒外の脚力で地を蹴った為に崩壊したのだ。

——コイツツ?!?いつの間に間合いを詰めt——

烈の思考はこれ以上続かなかった。先程幸斗が破滅の光を放った瞬間にそれを目の当たりにした観客達は恐怖して一斉に逃げ出していたので崩落した観客スタンドは既に無人であり、死傷者はいなかったのだが、数メートル後方まで崩壊させる程の脚力で

地を蹴ったという事はそれ相應の速度で向かって来たという事に他ならない。

「——がはああっ!!!」

避ける間もなく幸斗の拳は容赦なく烈の腹部に突き刺さった。今の幸斗の攻撃力で殴られて身体が無事で済む筈が無いと悟った烈は死を覚悟したのだが……。

「……………」

気が付いた時には烈の眼には異常な光景が飛び込んで来たのであった……まずは視界全体に広がる蒼穹と下方に広がる白い雲海だ、右を見てみると渡り鳥の群れが列を組んで翼を飛ばたかしているのが見える。

——なっ!?何だっってリユウだこれはっ!!!

烈は突然視界に映った景色に動揺して取り乱す。

——ここは、空の上?……まさか、俺は今空を飛んでいるってリユウなのか!?

地に足が着いてなく、景色がDVDの超高速再生のようにスライドして行くのを目の当たりにして結論にたどり着き、烈は驚愕する。では何故自分は空の上を飛んでいるのか?一瞬前の時まで破軍学園の第一訓練場内で幸斗を相手に選抜戦をしていた筈なのに……。

……考えを張り巡らせる烈であったが、そんな暇もなく彼の眼に見える景色は変化していく。蒼穹は夕焼け色に変化し、気温も下がっていく……更にまた数秒で景色は

切り替わる、夕焼けに漆黒の帳（とぼり）が下り無数の星々が点灯し、漆黒を彩る……

——ちよっ?! 俺飛ぶの速過ぎるってリユウだろ!! あっという間に夜になっている場所に移動して……なあっ?!

そして景色が夜に切り替わって数秒後、水平線の向こう側から眩い光が射し込んで来た。

「これは……日の出? ……」

やがて光が照射される場所から夜の闇を蒼穹に染める光の球体が貌を出し、それが徐々に空へと昇って行く光景を見て烈は啞然と眼を見開いた。その光の美しさに感動を覚えたのか、未だに自分の身に何が起きているのかが理解できなくて困惑しているのは判らないけれど、とにかく烈は目の前の光景に目を奪われていた……新たな日の始まりを告げる、空へと昇って行く太陽に……そして——

「ぐはああああああっ?!」

大空の旅は唐突に終わりを迎えるのだった……。

突如として鳴り響いた爆音が聴覚を支配すると同時に烈は背中に痛烈な衝撃を感じ取り、それによって彼の全身の機能が麻痺してしまい、彼は何の抵抗も出来ずに地をバウンドしてスライドし、その摩擦の影響でそのまま減速して仰向けの体勢で止まった。烈は背中から地上に墜落したのだ。

「……此処は？……」

「おかえり、烈先輩……超特急便での世界一周の旅は楽しかったかよ？」

「……へっ?!」

仰向けに倒れて朦朧と空を見上げる烈の顔を唐突に一人の少年が覗き込み、烈はその少年の顔を認識すると数秒の沈黙を挟んでキョトンと呆けてしまった。

「……真……田？」

何故ならその少年は烈が空に旅立つ直前に試合で戦っていた対戦相手だったのだから。

周囲に目を向けると目に映ったのはクレーターの斜面と其処ら中の空間に空いた無数の【次元の裂け目】とほぼ全壊した観客スタンド……そう、烈は戻って来たのだ。破軍学園の第一訓練場に……。

『ななな、なんとという事でしょうかあああああつ!!? 一瞬のうちに真田選手が如月選手を空高く殴り飛ばし、その僅か数秒後に飛んで行った如月選手が反対の方角の空からまるで隕石のように戻って来て地上に叩き付けられてしまいましたあああああつ!!! 如月選手、勢いよく地上に墜落した衝撃で内臓が潰れてしまったのか!?! 口から血を流して倒れたまま起き上がる気配がありません!! これは試合続行不可能かあああああつ!!?』

「なん……だと……!!?」

こんな状況でも実況を続けている見上げた根性を持つ実況解説の女子生徒の解説が耳に入り、烈は驚愕した。たった先程幸斗が【世界一周の旅】と発言していた事を合わせて自分の置かれている状況を理解してしまったのだ。

——俺は……真田に空に殴り飛ばされて……世界一周をしたって……リユウなのか……。

世界一周をした・・・それが事実ならば先程の景色の流れがやけに速かったのも説明が付く。そう、烈は空を飛んでいたのではなく超高速で吹っ飛ばされていたのだ、今彼の顔を見下ろしている朱い闘気を身に纏う鬼の鉄拳を受けて・・・。

「・・・へっ！これでさつき手を抜かれた借りは返したぜ！かなり手加減して殴ったからな！」

「・・・は？」

してやったりと言うかのように不敵の笑みを浮かべている幸斗が衝撃の発言をした為には訳も分からず更に啞然と呆ける。なんと人間一人を世界一周させる程の威力で殴ったというのにこれで超手加減したというのだ。

「なにしろこの状態でマジになって殴ったら次元の果てまでブツ飛ばせるからな！」

「・・・ハハ・・・マジかよ・・・」

スケールが違い過ぎる・・・烈はそう思わざるを得ずに苦笑いをする。

「・・・成程・・・それがお前が今までに鍛え上げたチカラってリユウか・・・ハハ・・・やり過ぎだつてリユウだろ・・・」

「当たり前じゃん、オレは最強目指してんだ。シゲにだって一回も勝ててねえし、死んだ団長に比べたらまだまだオレは小せえ男だ。だから才能の壁だのどうにもならない運命なんかで足を止めている暇なんかねえんだよ、どこまでだって突き進むぜオレは」

「・・・そうか・・・」

烈はようやく理解できた気がした。仰向けに寝転がる自分に拳を向けてニヤリと笑い、誇らしげに目標を語るこの後輩が何故己の才能の無さに屈せずどんな障害をも乗り越えて行ける強さを持っているのかを・・・。

——才能の有無だなんて「何かをやりたい感情」の前にはちつぽけだつてリユウなんだ・・・【できる】からやるんじゃない、【やりたい】からやるつてリユウの溢れ出す感情が真田を突き動かしている・・・だから止まらない、【やつてダメだった場合の惨め】なんて「やらなかった場合の後悔」と比べたら断然マシだつてリユウだ。

自分の進みたい道を進んで、道半ばで終わつたとしても本望だ。もしそれで後悔するならば、その道は最初から本当に自分が進みたい道じゃなかった事に他ならないだろう。誰かに強要されたわけでもなく、自分が本気で進みたいと思つた道を自分で選んだからこそ消える事の無い情熱を抱いて進めるのだから。

——・・・突き進んだ未来（さき）にどんな結末が待っているリユウでも【やつてダメだった場合の惨め】より【やらなかった場合の後悔】の方がしたくない・・・か・・・フツ——

「・・・俺の負けだつてリユウだ・・・真田・・・最終戦・・・頑張れ・・・よ・・・」

烈は潔く負けを認め、幸斗にエールを送ると同時に意識を失つた・・・遂に試合の決

着が着いたのだ。

「如月烈、戦闘不能!勝者、真田幸斗!!」

「・・・へっ!・・・グラッツェ!・・・楽しいバトルだった・・・ぜ・・・」

レフェリーが幸斗の勝利を宣言した後、幸斗は「戦鬼の叫び」の最大持続時間である三十秒を切った為に朱い闘気が消え、身体の限界を迎えてその場に倒れ込んでしまったのだった。

限界ギリギリの死闘が繰り広げられたこの試合は幸斗の勝利で幕を閉じた・・・幸斗は遂に七星剣武祭への切符を賭けた学内選抜戦最後の戦いの舞台へと足を進めたのであった・・・。

【知らない】という苦痛

『けけけ、決着が着きましたあああああつ!!学園ビッグ3の一角、遂に敗れる!「殲滅鬼」真田幸斗選手、奇跡の大逆転勝利!選抜戦最終戦進出決定です!これで最終戦にて七星剣武祭への切符を賭けて戦う十二名の騎士が出揃いましたっ!最終戦は一週間後、破軍学園に在る六つの訓練場の全てを使用して全六試合を一度に行う事になっている予定なのですが……この第一訓練場の現在の惨状を視るにもう此処は使用不可能ではないのでしょうか?……』

幸斗が龍殺剣や戦鬼の叫びを使用して暴れまくった為にほぼ全壊し廃墟同然の場となった第一訓練場内に実況解説の女子生徒のアナウンスが木霊する。こんな惨状でよく放送機器が壊れなかったなど放送部の悪運の強さに感心したいところだが、彼女の言う通りこの悲惨過ぎるこの場の惨状ではもう試合する事は恐らく適わないだろう。

龍殺剣によって消滅した天蓋、割れたように瓦解した半周分の外壁、半周以上が崩壊した観客スタンド、巨大クレーターと化したバトルフィールドなどは黒乃の能力で時を遡らせれば修復は可能だが、問題は戦鬼の叫びを使用した幸斗の《事象貫通》の特性を持った埤外の攻撃によって其処ら中の空間に空いてしまった「次元の裂け目」であった。

「……確かに最終戦を全試合一度に行う事はもう無理かもしれませぬ……あの無数の孔が新宮寺理事長が【時空崩壊】を行使した時に生じる現象と全く同じモノだとしたら、二度とあの空間は元には戻せない筈ですから……」

涼花達を除く観客の生徒達が全員避難した為に静寂が訪れた中で若干だが落ち着きを取り戻した刀華が気分悪そうにそう呟いた。彼女の言う通り今この場の其処ら中にできている無数の孔は黒乃が禁技指定の伐刀絶技【時空崩壊】を使用した時に生じる現象と同じモノである。戦鬼の叫びによって世界ですらも理解不能となった幸斗の埒外の攻撃力が物理的に世界に傷を付け、二度と直る事の無い【次元の裂け目】を生じさせたという非現実的な事実には涼花を除くこの場に残った一同は声も出なかつた。黒乃の【時空崩壊】のように因果干渉によって時空間を傷つけたのならまだ納得できたのだが、恐るべきはそれが「世界すらも理解不能となる程の埒外の攻撃力で物理的に発生させた現象」だという事である。そんな言葉にもできない規格外な事をやってしまった幸斗は最早《臨界破壊の戦鬼（オーバーブレイカー）》と称されても不思議ではない。

「……世界が認識不可能となる領域まで攻撃力を撥ね上げ、全ての事象を貫いて破壊する【事象貫通】の特性を持った攻撃を実現する【戦鬼の叫び】……正直実際に目の当たりにしても信じられるものではない、まさか真田がここまでの怪物だったとはな……」
眼下のバトルフィールド……だったクレーター内にボロボロになって倒れている烈

を見つめて絶は表情を強張らせていた。彼は正直なところ烈が幸斗に負けるとは思ってもみなかつたので内心は酷く動揺している、実力者同士の戦いで相性の悪さがひっくり返る事なんてほぼありえない筈だ、なのに幸斗は相性の不利をひっくり返すどころか粉々に破壊してしまってみせたのだから驚くなど言う方が無理であろう。

誰もが幸斗の本気モードである戦鬼の叫びの理不尽特性に舌を巻いたのだが、そんな中で一人顎に手を添えて納得いかなそうに首を捻っている者がいた・・・ステラである。「どんな異能だろうと現実起こった事象である限り貫いて破壊する・・・ねえリヨウカ？あの朱い鬨気を出した状態のユキトの攻撃って本当にそうなの？それならさつきユキトが放った朱い剣圧を相殺した白い砲撃は何だったっていうのよ？」

「あ、そう言えばそうだったね〜」

「うむ、其も気になっていたところだ、納得のいく説明をしてくれるだろうか、佐野」
「.....」

ステラの疑問に他の皆も相槌を打ち、事の真相を知っているであろう涼花に詰め寄る。

言われてみれば確かにそうだ、先程幸斗が放った【破滅の光】が観客スタンドごと涼花を飲み込もうとした瞬間に白い砲撃が何所からか飛来して来て破滅の光を相殺したという事実は戦鬼の叫びを使用した幸斗の攻撃は本当に【事象貫通】なんてバグ特性を

持っているのか疑問を抱くには十分な証拠であった。そもそも試合中に外から砲撃を撃ち込むなんて非常識な事をしたのはいったい誰なのか？・・・刀華はただ一人無言で砲撃を撃ち込んで来た人物の事が気になって考え込んでいた・・・その時――

「あーあ、幸斗の奴派手にブツ壊しやがって。本気出さねーと勝てなかつたのは分かるけどな、もうちよつと自重しろよ・・・ま、無理だろうな」

「・・・えっ?」

刀華は赤ゲート側から聞こえた聞き覚えのある声に思わず声が漏れてしまった。皆も聞こえて来た声に気が付き赤ゲート側にあるギリギリ崩壊を免れた状態の観客スタンドの最上階に目を向ける・・・そこに霊装を左手に携えて立っていたのは――

「なっ!!?・・・風間・・・重勝!!」

「な・・・何なの、あの姿?!!」

黒き砲剣を手にバトルフィールドだったクレーター内で気を失って倒れ伏している幸斗を見下ろし笑みを浮かべている「裏切り者の序列一位」風間重勝の姿を見て一同は訳が分からず目を丸くしてしまった・・・今見えている重勝の姿と雰囲気あまりにも異様だったからだ。

夜のように黒かった髪は星々の輝きのような銀色に染まり、どこまでも見通すような黒き瞳は闇の中に光るような黄金色に変わっている。その不敵な笑みだけで他を圧倒

する存在感を纏い、万物の理（ことわり）を浄化するような異質さを感じさせている：：
本当に彼はあの風間重勝なのか？そんな疑心をこの場に居る人間に植え付けてしまう
程に彼は変わっていた。

「・・・ふう、まったく元西風（ウチ）の連中はどいつもこいつも規格外を通り越した変
態ばかりで頭が痛いわ：：幸斗の【戦鬼の叫び】とは違う方向性の進化を遂げた【戦
場の叫び（ウォークライ）の先の可能性の一つ】《悪魔の叫び（デモンクライ）》、思った
通り完成させていたのね、重勝」

自分の額を片手で押さえて小さく愚痴を言つて額から手を放し、たつた今下のフィー
ルドに大きく跳躍して行つた銀髪の魔砲剣士を見て小さく笑みを浮かべて呟く涼花。
やはり彼女は今の重勝の姿の変化についての詳細を知っていたのだ・・・いや、予想し
ていたと言つた方が正しいだろう。実際涼花は重勝が破軍学園に入学してから身に付
けたスキルや伐刀絶技についてを本人から聞いたり聞かされたりしたわけではない、先
月の重勝VSカナタの試合の後に重勝から聞いた情報に基づいて彼女は重勝がこの【悪
魔の叫び】というスキルを既に修得している事を予想したのだ。

『・・・光翼ノ帝剣（アストラル・ブレイカー）を身に付けた時からな：：まるで糞堅えー
鎖に縛られたみてーに前に進めなくなつちまつたんだ、どんなに色々やり尽くしても
よ・・・』

光翼ノ帝剣という必殺の伐刀絶技を身に付けてから前に進めなくなった・・・即ちもう重勝は伐刀者としての成長に限界を感じているという事を涼花は察した。ならば学園に入学する以前から重勝は「悪魔の叫び」というスキルを考案していたのだから、成長が限界ならばもう修得にまで至っているであろうとこの戦術家の少女は考察した、そしてその予想は見事に的中したのであった。

——うわあ、見事に孔だらけだな・・・。

幸斗の倒れている近くに降り立った重勝はその場で会場全体を見回し、其処ら中の空間に渦巻いている無数の次元の裂け目を見てこの惨状に呆れていた。

——ただブツ壊れただけの部分なら理事長が直すだろーけど、この孔ポコは「直せねー」からな・・・だけど、コレを放置していたら最終戦に支障が出てあのクソ狸を潰す計画がスムーズに行かなくなる可能性が出てくるしな・・・。

そう思った重勝は常人には理解し難い行動に出る・・・何故か左手に持った「重黒の砲剣」の切っ先をすぐ目の前に在る次元の裂け目の一つに向けたのだ。

「仕方ねーな——」

——【塗り替える】か】

そして意味深に呟くと砲剣の切っ先に「白い重力エネルギー」を収束してそれを撃ち出した。

「嘘・・・白い砲撃が・・・次元の裂け目を覆った・・・」

口を両掌で覆って驚愕する刀華を余所に重勝は次々と他の孔にも白い砲撃を撃ち込んでいく、撃ち込んだ白が光の膜となって直せない筈の次元の裂け目を覆い尽くしていく光景は観客スタンドに残る刀華達に驚愕を齎し、やがて全ての孔が白に覆い尽くされるのだった。

「ふう、これで全部だな・・・それじゃあ、仕上げといくか！」

一仕事を終えた工場の作業員のように一息を吐いた重勝は表情を引き締めてそう言い、「零か無限（ゼロ・オア・インフィニティ）」を発動して宙に浮かび、砲剣を構えて

正面に見える白い膜に覆われた孔に向けて勢いよく飛翔して行く、そして——
「はあっ！」

砲剣を振るい、白を斜め一閃に斬り裂いた。

「え……ええええええっ!!」

「まさか……そんな事が……」

「冗談……でしょう……」

「う、うっそだあ〜！」

「これは流石に魂消たな……」

重勝が斬り裂いた白い膜に覆われた次元の裂け目の跡を目の当たりにしてステラ達は腰を抜かす程に驚愕している、今眼に映っている光景が信じられないと言う様に……何故なら斬り裂いた跡の空間は元の何も無い空間に戻っていたからだ。

「……よしっ、次！」

孔の消滅を確認した重勝は次の標的を目指して飛んで行き、また斬っては次へと縦横無尽に第一訓練場内を飛び回って孔を消滅させる作業を熟して行く……あまりにも衝撃的な事象を目の当たりにしてステラ達は啞然と立ち竦むしかなく、特に刀華と泡沫は宿敵である男の自分達の知らぬチカラを見て息を詰まらせる程に驚愕していた。

「風間さん……貴方は、いったいどれ程のチカラを……」

「……こんなトリックか何かのイカサマに決まっているだろ!? 【次元の裂け目】は世界を傷つけてできる現象なんだから伐刀絶技で直せる筈が無い!!」

泡沫が癩癩を起こすように否定しているが確かにその理屈は正しいと言える、世界そのものに付けられた傷は二度と元には戻らない、現に過去の七星剣武祭で学生時代の黒乃が時空崩壊を使用して生じた次元の裂け目は現在も放置されており、その時に使用されていた試合会場は未だに立ち入り禁止区域に指定されたままであるのだから。

……そんな泡沫の癩癩に応えたのは当然、【悪魔の叫び】の特性を知る涼花であった。「ええその通りよ、一度生じた【次元の裂け目】は二度と元には戻せないわ。重勝は孔を【直した】んじゃない、重力エネルギーの砲撃で【次元の裂け目】という事象を塗り替えた」のよ……」

「……ハア? 【塗り替えた】ってどういう事よ?」

「そのままの意味よ……《事象塗替》、自分の攻撃による事象を他に生じた事象よりも優先して【上から塗り替える】事を可能にする、その他の事象にどんな魔力量が込められていて干渉力が高かろうと、どんなに理不尽な現象だろうと、問答無用で自分の攻撃という事象で塗り替える……それが重勝の【悪魔の叫び】の特性なのよ」

「なんて規格外なスキル……それでは【次元の裂け目】を砲撃で覆い、霊装で斬って消えたのは……」

「【次元の裂け目という事象】を【重力エネルギーの砲撃という事象】で塗り替え、更にもうその上から【斬撃という事象を優先化】させて斬り込み【次元の裂け目を塗り替えた重力エネルギーを切断】、次元の裂け目が消え去った事によって世界がその空間を修復し、元の空間に戻る・・・といったギミックよ、理解できた？」

涼花の説明を聞きステラ達は顔半分をピクピクと若干吊り上がらせて苦笑いをしてしまう。完全に理解できた訳ではないが幸斗の戦鬼の叫びと同様に重勝の悪魔の叫びというスキルはバグ級の性能だという事を認識したからだ。

先程【戦鬼の叫び】使用状態の幸斗が放った【破滅の光】を砲撃で相殺したのも当然【悪魔の叫び】使用状態の重勝がやった事である。世界が理解できなくなる程に上昇した攻撃力で付加される【事象貫通】、【重圧で押し潰す】という重力の異能が極限まで研ぎ澄まされて得られる【事象塗替】、その二つの特性が衝突すると互いの特性が覗ぎ合っただけで対消滅するので、重勝が撃った白い砲撃が幸斗の放った破滅の光を相殺したという結果になったのであった。

ステラ達が顔を引き攣らせている間に重勝は全ての次元の裂け目の処理を済ませ、フィールド上で寝てしまっている幸斗と烈の回収に動いていた。

「・・・ま、とにかくあの烈を相手によくやったな幸斗。想像以上に強くなっていて驚いたぜ、まったく大した元教え子だよお前は」

烈の左腕を自分の左肩にまわして背負い上げ、幸斗を右腕に抱き上げて重勝は再び空へと舞う。そこで彼は涼花達の存在に気が付き、彼女達と言葉を交わせる程の距離まで飛んで近づいて呆れるように声を掛けた。

「何だよお前ら、まだこんなところに残っていたのか？」

斜め前上から見下ろす重勝に対して涼花達は十人十色の顔で一斉に目を向けた。

「アンタが来るのを待っていたのよ、面白いものが見れると思ったからね」

「姫ツチ、お前無謀な事してんじゃねーよ、さっきの俺が助けなかったら細胞一つ残らず消えていたんだぜ」

「あら？西風が誇る名教官様が危険な目に遭っている教え子を見捨てるなんて事をする訳？わたしが逃げなかったのはアンタを信じていたからなのに」

「もしもって時を考えろよ、お前それでも戦術家か？・・・」

「仲間を信じ抜く度胸も戦術家に必要なスキルよ」

「屁理屈だぜそれ・・・」

重勝はまず涼花と他愛の無い会話を交わして彼女の無事を確認する。先程の事もあってやはり心配があつたのだ、だがこの皮肉を聞けば彼女が何ともないという事を十分理解できる、それ故に涼花との会話はこれで切り上げ、次は背負っている烈の弟である絶に目を向けた。

「絶、今回は兄貴の烈が負けて残念だったな。まあこれも勝負の世界の厳しさだから仕方ねーけど、悪いな」

「別に気にしてはいない、その愚兄が実力不足だったただだからな……ただ真田の実力を見縊ってはいた、その事については謝罪させて欲しい……」

「ははっ、それは後でこのお馬鹿に直接言つてやれよ」

それから重勝は他の面々にも目を向ける。

「ヴァーミリオン、黒鉄の奴が心配だからつてあんまり思い詰めるなよ。奴なら大丈夫だ、このお馬鹿に挑戦状を叩き付ける程の気力も有るしな。世間はでつち上げのスキヤンダルを真に受けているけど、お前等は何も間違つた事はしていないぜ、俺が保証する」

「大きなお世話よ。でも心配してくれてありがとうカザマ先輩、そう言つてくれるとなんだか少し気持ちよくなったわ」

「黒鉄の妹も無理して強がらなくてもいいと思うぞ？大切な家族が酷い目に遭つていて悲しく無い訳がない筈だからな。お前の気持ちは解るだなんて無粋な事は言わねーけど、せめてその色男ぐらいには胸を貸してもらつてもいいんじゃないか？」

「別に貴方が気を遣う事じゃないですよ。私は大丈夫です、お兄様が連盟と黒鉄家の陰謀に屈するわけが無いと先程のお兄様の真田さんへのメッセージを聞いて確信しましたから」

「そうか、なら大丈夫だな……隣の色男さんよ、黒鉄が帰って来るまでそいつをしつかりと支えてやれよな！」

「うふふ、色男じゃなくてアリスって呼んでくれると嬉しいわ♪それに言われなくてもそうするつもりよ♪」

「ははは、いらねーお世話だったみてーだな♪なら問題ねーか……さてと……」

重勝は最後に刀華達生徒会の面々の顔を見る……恋々は気まずそうに右の人差し指で蟀谷を掻き、砕城は困ったような鹿目面で両腕を組んでいる、刀華は今は放っておいて欲しいと言っているかのように俯いて覇気が弱く、泡沫に至っては当然いつも重勝に向ける憎悪の目線を向けて威嚇していた。

——コイツ等には……俺が言っても仕方がないか……。

「それじゃ俺はこのお馬鹿と背中の焼肉のタレヤローを医務室に届けに行くからよ、お前達も訓練場の修繕作業の邪魔にならねーようにとっとと撤収しろよな！俺はもう行け」待つて、風間さん!!」……はあ……何だ？俺は今回はお前の気に障るような事をした心当たりはねーぞ……東堂」

言いたい事を言い終えた重勝が幸斗と烈を連れて飛び去ろうとした時、俯いていた刀華が血相を変えて必死の形相で重勝を呼び止めた。空の黒い剣士に向ける真剣な眼差しが場に緊迫した静けさを漂わせ、雷切の名を持つ少女は重い口調で黒い剣士に問う。

「貴方は……知っていたんですか？……低ランクのみんなが、私に何もかもを押し付けて希望を捨てている事に……」

「……………」

重い沈黙が空気を押し潰す。試合の最中、烈に追い詰められていく幸斗を蔑む罵倒に交じって聞こえて来た未来への希望を嘲笑う会話は、学園の希望となり皆の未来を導く事を志す刀華の心に深い傷を刻んだ。そこで彼女は思い出した事があった、去年のあの出来事から重勝は学園の生徒達の不満を煽るような行動をして皆を困らせているのだが、今になってよく考えてみればそれはランク差の弊害や刀華達に頼ってばかりの生徒達の事を否定する内容ばかりであったのだ。その事と聞こえて来た話を照らし合わせると考えると重勝は生徒達の内情を知って失望を覚え、それで皆を見捨てて裏切り行為に及んだとも考えられる。刀華はそれでどうしても真相を知りたく思い、藁にも縋る想いで聞いたのだ、宿敵であり、昔憧れた存在でもあった裏切り者の学園のエースに。

——ふーん、ようやくその事に感付いたのか。一月前の試合の時に貴徳原の奴がこの事に感付いちまったから口止めとして簡単には復帰できないように光翼ノ帝剣まで使つて派手に叩き潰したんだが……こりやあもう隠しておくのは限界かな……。

【「そうだ」……と言つたらどうするんだ?」

「全てを教えて下さい、貴方が学園のみんなを裏切つたあの日から貴方が裏で何かをし

ようと企んでいる事は知っています、いったい何をするつもりでいるのか、全部洗い流し話してください！」

「それを知ってお前は どうするつもりなんだ？ 仮に俺が学園の現状を好転させる為に動いていたとして、お前は俺が昨年学園の連中を裏切った事を納得して、俺に協力してくれるりするのか？」

「それは……」

「する訳ないよな、昨年あの出来事に納得するという事はお前に期待を寄せてくれている連中を裏切るという事だ。連中がどうであれ、助けになりたいと今まで南関東屈指の学生騎士【雷切】として活動してきたお前が学園を裏切る事をやる筈がねーし」

「それでも、知りたいんです……私は去年、Fランクである黒鉄さんがみんなから酷い虐めを受けていた事に気が付きませんでした……みんなが私達高ランク伐刀者に対してどれ程の劣等感を抱いているのかも知っているつもりでしたが、ここまで荒れていたとは思ってもみませんでした……もう、嫌なんです……現実を何も知らずに周りが傷ついていく事が！」

「……はあ」

今にも泣き出しそうな悲しみに満ちた眼で懇願する刀華を空から見下ろす重勝はしようがなさそうに溜息を吐く、東堂刀華という女はこんな弱い姿を見せるような奴

だったのか？と呆れてしまったのだ。でも仕方のない事だろう……。いかに他人の為にチカラを尽くせる強い精神を持った者といえど、その志が揺らげば脆いものなのだから……。

重勝は観念したのか、面倒臭そうに口を開く。

「……なら教えてやっても構わねーけど……。タダで教えてやる訳にはいかねーな」

「……何をすればいいんですか？……」

「いや、胸隠して睨んでこなくつても、そんないかがわしい事なんか要求しねーって（楯無じゃあるまいし……）……んんー、そうだな——」

重勝は首を捻って唸り、刀華に情報を教える条件を何にするかを考えてみる……。気まぐれに幸斗の龍殺剣で天蓋が消滅した為に吹き抜けとなった場所を見上げてみると、崩れかけの吹き抜けの端の上に乗っていた二羽の鳩がその翼を羽ばたかせて蒼穹の大空へと飛び立って行くのが見えた。

「——……なあ東堂……。鳥ってさ、何で空を飛ぶんだ？」

「……え？」

「と言っても鳥類の身体構造とかを説明しろと言ってるんじゃないぞ、鳥自身が何を思つて空を飛ぶのかどうかだ。この問いにちゃんと答えられたら正直に話してやるよ」

【鳥は何故空を飛ぶのか？】……。重勝が刀華に提示した問いの内容は学園で起きている

問題とは全く関連性が見当たらずに適当であった。その為問われた刀華だけでなく聴く耳を立てていたステラ達もが意味不明に思つて戸惑つてゐるようだ。

それでも何とか答えようと刀華は咄嗟に思つた答えを口にして言おうとするが――
「あ、今は答えなくていいぜ。どうせ【木に成つてゐる実を取る為】とか漠然とした事しか思い付かぬーだろうしな」

「……」

刀華は口を閉じた、凶星だつたようだ。

「……明後日の朝七時、お前が幸斗と姫ツチと初体面した休憩所……そこでお前の答えを聞かせてもらうぜ、【雷切】東堂刀華の思う【何で鳥は空を飛ぶのか?】をな」

「……分かりました、約束ですよ」

「おうつ、約束だ!……じゃあ今度こそ俺は行くぜ、あばよ」

二日後の朝に再び刀華と会つて話す約束をした重勝は、ステラ達に様々な感情の目で見送られながら幸斗と烈を連れて飛び去つて行つたのだつた……。

……こうして、七星剣武祭への六つの切符を賭けた選抜戦最後の決戦の舞台に上がる十二人を決める戦いは幕を閉じた……【戦鬼の叫び】を使用した幸斗の攻撃で空いた第一訓練場の次元の裂け目を重勝が処理した為に激戦の末に廃墟と化した第一訓練場の修復が黒乃の能力によつて無事に行われ、最終戦は予定通り破軍学園敷地内の全訓練

場を使った全六試合同時進行を行う運びとなった。

いよいよ選抜戦もクライマックス、重勝達の倫理委員会の企みを潰す計画も実行に移される大一番だ。果たして重勝達は倫理委員会の陰謀を阻止し、傭兵団西風を壊滅に追い遣った黒幕である赤座守を討ち果たす事ができるのか!?そして幸斗の最終戦の対戦相手とはっ!?

・・・なお、破軍学園の理事長である新宮寺黒乃は第一訓練場の修復を終えた後、幸斗が試合で世界中に起こした被害の責任を取る為に各地の被害を修復しに遠出したの

で、最終戦当日まで彼女は破軍学園に戻れないそうなの……責任者とは辛い立場であつた……。

幸斗と重勝の邂逅秘話・・・そして遂に決まった、選抜戦最後の対戦カード!

・・・破軍学園三年〔裏切り者の序列一位(エース・オブ・ビトレイアー)〕、〔傭兵王〕風間星流の息子にして元傭兵団西風戦術教官、過去に〔漆黒の剣聖〕の異名で呼ばれていた実力者——風間重勝。

普段から飄々としていて掴みどころが判らない印象だが、常に身内の事を見守っている兄貴分で、どんな事があるうとも「できる事を全てやり尽くすまでは諦めない」という信条を持ったこの少年も、幼い頃は「才能が無い奴は努力をしても無駄」という一般的な価値観を持っていた・・・。

その当時から風間重勝という少年は既に精神が達観していたらしく、子供の様に泣き喚くという事はしない落ち着いた・・・悪い言い方をすれば「無愛想」な子供であり、生まれもって伐刀者としての能力を含めて全ての才能が総じて高かった為か大抵の事はやれば熟すことができ、たった六歳という幼さにして生まれ持った才能で努力が報われるかどうかとも決まってしまうこの世に退屈と不満を感じていたのだ。

そんな重勝が全ての才能から見捨てられた無才の少年真田幸斗と顔見知りになった

のは彼の父親である星流が下級のテロリスト集団が焼き払ったとある町の生き残りである幸斗を保護してから丁度一ヶ月と一週間後であった。

「……アイツ、またあんな無駄な素振りをしているのか……」

千葉県南部にある港町で西風は数十日ぶりに宿に宿泊して休む事となり、重勝が気分的に海岸を散歩していた時の事だった。海沿いの水辺付近で木刀を持って素振りをしている幸斗を遠目で見掛けた重勝は下らなそうに言葉を洩らしていた。

西風の見習い団員になってからこれまで何をやらせてもまともにはできないでいた幸斗は当時の西風団員の約四分の一を占めていた才能至上主義者達からの印象はもちろん最悪で、そうで無い他の団員達にも「これはさすがに無い」と批判するように呆れられていたのであった。

当然重勝も何の才能の無い幸斗の事を「どうしようもない無能」という評価を下して、幸斗がどんなに努力をしようともどうせ無駄な努力に終わると考えていた。

所詮才能が無い奴は何をやっても無能、生まれもって天分の才に恵まれた人間には敵いやしない……重勝はそんな決まりきった運命で全てが決まるこの世の中が嫌いであり、つまらなかつた……。

「あつーコイツもしかしてこの前団長に拾われて団に入ったダメダメ君じゃん？」

重勝が遠くから哀れな目で幸斗が素振りをする姿を見てしていると暫くして奥の方から

別行動で散歩を楽しんでいた西風の少年伐刀者達数名が歩いて来て、素振りをする幸斗を見るなり難癖を付けてくる。

「うっわ、マジセンス無えスイングウゥ、チャンバラごっこ以下じゃね? 魔力量どころか剣すらダメじゃん!」

「ホントだあ。俺の隊の隊長がコイツの事【見込みの無い団のお荷物、こんな役立たずを入団させて団長は何を考えているのか?】と話していたけれど、実際に見てみるとそう思うのも無理ねーって!」

「これじゃあ幾らやったって無駄な努力だけ、うわあ、あんなに刀身が擦り減って木刀勿体ねー!」

「どうやらこの少年達は団内の才能至上主義の派閥らしく彼等は幸斗の素振りがあまりにも酷すぎて馬鹿にする言葉をやつと幸斗に聞こえるように次々と口に出して言う。黙々と素振りをする幸斗はそれを聞いて心を傷付けられ涙目になるが、耳障りな雑音を振り払うようにスイングを激しくして少年達を無視しようと必死になり、少年達はその幸斗の態度が癪に障ってグループのリーダーっぽい少年が幸斗にズカズカと歩み寄り、幸斗の手に持つ木刀を無理矢理蹴り落としたのだった。

「ダメエ、シカトしてんじゃねえよ! 無能の分際で俺達を舐めてんのか!! ああんっ!」

無視された事で激怒した少年が幸斗の胸ぐらを掴み上げてそのしよぼくれた朱い目

を睨みつける．．．幸斗は悔しさと恐怖で今にも泣きそうだったが、屈するものかと涙目で歯を食い縛って相手の少年を睨み返していた。

「．．．．．はなせよ．．．」

「あん？」

「はなせつて——いつているんだ、こんちくしょうがああああつ!!」

幸斗は左拳を振り上げて、渾身の一発で少年の顔面を殴った。

「ぶがつ!!．．．テメエツ!!」

「がはっ!!」

当時四歳相応の腕力しか無かった幸斗の拳ではDランクの少年伐刀者すらも殴り倒す事はできず、相手の怒りを憤怒に変えるだけであつた。

「ぶざけたマネしやがって!やっちまえ!!」

白い砂浜の上に背中から投げ捨てられて仰向けに倒れた幸斗を数名の少年達が殴る踏みつけるの暴行を続けざまに加えていく．．．重勝は幸斗を袋叩きにする少年達を見て苛立ちを感じ、居ても立っても居られなくなつて脚を前に踏み出していた。

「．．．．．おい．．．」

「ああん?んだよ今は取り込み中だ、後にしr「ふんっ!」ぐがぶつ!!?」

「「「「．．．．へっ?」」」」

少年達の背後に静かに歩み寄った重勝はリーダーっぽい少年の肩を軽く数回叩き、少年が振り向くと同時に顔面に痛恨の鉄拳をくらわせ、地を転がらせた。そんな突然の来訪者に少年達は幸斗への暴行の手を止めてしまい、全ての目線が砂浜に転がった少年に向き、茫然としてしまう。

数秒間時が止まった感覚に陥った後、直ぐに沈黙は素つ頓狂な叫びに変わった。

「「「み・・・みつちやあああああああんっ!!?」」」

リーダーっぽい少年の呼び名は「みつちやん」というらしい・・・少年達は怒りの目を重勝へと向ける。

「てつめええええっ!よくもみつちやんを!!」

「あっ!?!コイツ重勝じゃねえかよ!!」

《西風の四大天才児》の一人が何でこんなところをうろついてやがる!?!」

「まさか、Bランクの天才とあろう者がこの無能を庇うってんじゃねえだろうな!?!」

みつちやんを理不尽に殴り飛ばした重勝を非難する少年達、だが――

「・・・黙れよ」

「「「ひっ!!?」」」

その凍り付くような目線で睨まれた瞬間、少年達は悪魔に爪先を突き付けられたように恐怖し畏縮してしまう・・・全員が硬直して静寂が訪れると重勝は少年達一人一人に

歩み寄り――

「俺はな――」

「ぐげっ！」

「自分より弱い奴を甚振って優越感を得るような――」

「がはっ！」

「性根が腐った奴等を見ていると――」

「ごほっ！」

「虫唾が走るんだよっ!!」

「ひでぶっ！」

齒あ食い縛れと言わんばかりに全員の顔面を容赦なく殴り飛ばした。理想主義者である父親の星流を反面教師にはしているが、こういうところは父親似であった……。

「に……逃げろーっ！」

「みっちゃん！しっかりしてくれーっ!!」

「ダメだ、強い衝撃を受けた所為で脳震盪を起こして意識が無い！急いで応急手当がでないとどこまで運ぶぜ！」

「クソツ、憶えている！このままで済むと、思うなよーっ!!」

一通り殴り飛ばされて砂浜を転がった少年達は怖気づいて捨て台詞を残し、ノックア

ウトされてしまったみっちゃんを連れて一目散に退散して行つたのだった・・・。

「チッ! 親父の眼の無いところでコソコソネチネチと・・・まつ、ああいう奴等はそのうち親父がブン殴つてでも言い聞かせるだろ、あの行動力だけはある親父の事だしn
「あ・・・あのう・・・」・・・・何だ、まだ居たのかよ?」

ボロ雑巾のようにズタボロになった身体の上半身を微妙に起こして声をかけてきた灼眼の少年に重勝は顔を向けずに視線だけを向けると幼い声の主に刺々しい言葉を吐き捨てる。

その氷のように冷たい視線に恐れを生じて幸斗はビクツと怯みはしたものの、直ぐに素早く首を左右に振るつて無理矢理恐怖を引き剥がし、起き上がる事が難しくなったボロボロな身体を四つん這いにしてその灼眼で冷たい視線を焼き切るように重勝の眼を真つ直ぐと見た。

「あ・・・ありがとうよ、たすけてくれて・・・アンタつよいんだな。うらやましいよ、さいのうのないオレはいくらとつくんしてもいつこうによわいままなのにさ・・・」

「・・・」
「でもさいのうのないオレだつてたくさんとつくんすればいつかは「無理だな」ほえっ?」

助けて貰った事の礼を言つて自分も何時かはと儂い希望を口にする幸斗に対して重

勝はその儂い希望を無情にも否定した。幸斗が間の抜けた声を上げる中で重勝は足下に転がっている木刀を拾い上げ、憐れむ目線で見下ろした。

「さつきから見えていたが、さつきの奴等の言う通りお前には戦いの才能が全く無い。生まれ持った才能が高ければ努力をしなくても強くなれる訳じゃねーけど、そういう奴等は飲み込みが早くて努力が実る確率が高けえ．．．だけど反対に才能が全く無い奴は何をやろうが無駄な努力になることが目に見えているぜ。魔力が乏しいか無いんなら持つている奴を超える事なんて一生できねーし、理解能力が鈍いんなら他より得るモノが少ないのは当たり前．．．だからお前がやってる特訓とやらは全くの無駄なんだよ」

地べたを這う無才少年に投げつけた黒髪の少年の言葉はあまりにも辛辣であった．．．非情にも投げつけられた言葉に幸斗は「そんなことねえっ！」と反論しようとするが、重勝は左手に持った木刀の切っ先を一瞬にして幸斗の眼前に突き付けて哀れな無才少年の口を黙らせる。

「ならさつきの素振りは何なんだ？．．．いや、あんなの棒っ切れをテキストに振り回しているだけのガキみたいで素振りと呼べるものじゃねーよ。脚は逆だし重心はズレまくり、スイングも腰と脚を放置して腕だけでブンブン上げ下ろしさせているってだけ．．．正直手旗信号ゴツコかと思っただぜ？剣の基礎すらできてねーのに強くなれるわけがねーだろ．．．」

「.....」

痛いところを指摘されて幸斗は俯いてしまった・・・重勝は「ふう・・・」と溜息を吐き、気怠そうに木刀を正眼に構えた。何をするのかと幸斗は顔を上げてまじまじと重勝の行動を凝視する、そして――

「はっー!」

「っ!!」

少し手本を見せてやると言わんばかりにその木刀を振るったのだった・・・頭上に刀身を振り上げ、真っ直ぐに振り下ろすそれは至ってシンプルな垂直斬りであったのだが、振り下ろされた一刀は六歳児がやったとは思えないくらいに洗練されていて、見ている灼眼の少年は一瞬時が止まったかの様な錯覚に陥ってしまう。

一瞬の静寂が止み、バターののように容易く切り裂かれた空気が風となって灼眼の少年の夕焼け色の髪を撫でて揺らした。

「ふう・・・まつ、こんなもんか・・・」

「す・・・すげえ・・・」

「これが【素振り】ってヤツだ。実を言うと俺は剣を握ってから僅か三十分でこの動作を身に付けている、一応これでも団内で【天才】って呼ばれているからな。伐刀者どころか剣の才能すら無いお前だと一生の年月を使ってようやくこの練度の垂直斬りが出来

るようになるってくらいだろーなあ」

「……………」

「……これで解つただろ？人間の命は有限だ、何事も修得する速度が遅すぎる才能無しヤローが幾ら努力したつて一生の内に身に付けられるのはこの程度、況してや伐刀者の魔力はどんなに鍛えても増える事は無いから、こつちに至つては何兆何京年費やそうがまさに無駄どころか【無意味】つてわけさ」

実に下らなそうに重勝は木刀を左肩に乗せて語っている。口で言う事とは裏腹に彼は生まれ持った才能の有無で一生の運命が決められるこの魔導騎士世界の事を非情に詰まらなくて下らないと感じているからだ。結果が決まりきっているスポーツの試合が面白味も何も無いのと同じように、100%約束された人生など虚しいだけなのだから……。

「だから悪い事は言わねー、強くなる特訓なんて無駄だから止めちまいな。魔力量がカッスカスで異能が使える見込みが0な上に剣の才能も無いんじゃないやどんな努力をしたつて「ふざけんなっ!!!」」

無才の努力なんて何の意味も無いと言おうとした重勝に幸斗はキレた。その灼熱色の瞳から放たれる視線はマグマの様に熱く、現実主義者の黒髪瘦躯の少年の目を真っ直ぐと射貫いている。

「さいのうがないからどりよくなんてむだだ?かつてにきめつけてんじやねえっ!!たといいまはダメダメだろうが、オレは【つきすすみつつけるいし】でぜつたいにつよくなつてやるんだ!!【どうりをたたきつぶしてうんめいをブツとばす】のがにしかぜなんだろ!?!さいのうのなきなんて【きあい】と【こんじよう】でふみこえてやるつてきめたんだ!!」

胸の前に上げた左手で拳を握りしめ、幸斗は重勝に啖呵を切った。それを聞いた重勝は啖呵の内容で誰の影響を受けたのかを悟り、右掌で額を押さえて重い溜息を吐いた。

「・・・ハアア・・・親父に吹き込まれたのかソレ?俺はそういう根拠のねー根性論が嫌いなんだよ。とんだロマンティストだぜ・・・あのさ、ならその【突き進み続ける意志】でどうやって強くなるつもりでいるんだよ?まさかさっきの手旗信号ゴツコを毎日続けていれば強くなれるなんて考えてんじやねーだろーな?」

父親である星流の影響を受けて理想に走ろうとしている幸斗を正す為に重勝は現実的な疑問を幸斗にぶつけてやる。

——— 親父の根性論なんて理想だけで何の根拠もねー無茶苦茶な精神だし、こう現実を突き付けられてやればコイツは何も言えなくだろーよ。

重勝はそう思ったのだが、返ってきた返答は滅多に動揺しない彼を大いに驚愕させる言葉であった———

「それはわかんねえ．．．だからおしえてくれっ!!」

「．．．．．ハアツ!!」

数秒の沈黙の後、黒髪瘦躯の天才六歳児の呆け声が海岸中に響き渡った、この出来損ないは何を言っているんだ？流石の重勝も今幸斗が発した言語は理解不能であった。

「お前何言ってるんだよ!!俺に教える？鍛えてくれっか!!?おいおい、俺に何のメリットが有ってお前みたいな才能無しを鍛えねーといけねーんだよ!!」

「だってさっきのシゲのスイングすごかったぜ!だからおしえてもらうのはアンタがい

いとおもったんだ!!だからおしえてくれよ!!?つよくなるやりかたを!!」

「言っている事無茶苦茶だなお前!!?それに「シゲ」って俺の事か?急に気安く呼ぶなよな!てか離れろって!!」

重勝は鬱陶しがりながら這い蹲りながら自分の足にしがみ付いて懇願してくる幸斗を無理矢理振りほどく。この時の幸斗はまだ大した腕力も無かったので拘束を抜け出すのは然程難しくは無い。シワシワに乱れたズボンを直して重勝は厄介な奴と関わってしまったと面倒な感情を抱きながらその双眸で砂地を這って自分を見上げる幸斗を睨む。

「大体お前、何でそんなに強くなりたいたいんだ?そのザマを見れば自分(テメー)に戦う才能が無い事ぐらい判っているだろ?普通ならその時点で妥協して他の道を探すのが当たり前だ。何故だ?命を救ってもらった親父に恩返しをする為か?両親を殺した三下テロリスト共に復讐をする為か?それともまさか才能が無い事をバカにされたのが悔しいからじゃねーだろーな!」

叩み掛けるように疑問を投げつける重勝、すると幸斗は砂地に着く腕を凍えるように震わせはじめ――

「・・・ああ、そうだぜ・・・」

顔に影を落として立ち上がり出す。その声音は地の底から響くような憤慨に満ちて

いる。

「だんちようにおんをかえしたいというのもそうだけど……それいじょうにくやしいんだ、がまんならねえんだ、ゆるせねえんだ。うまれもったさいのうだけでひとにかつてにランクづけされるのが、チカラがなくてみくだされるのが、よわいオレじしんが！」

「っ!!?」

立ち上がったその灼熱色の眼からは本気の悔しみに満ちた涙が流れていた。溢れ出す感情を向けて来る瞳の中の灼熱は遥か上から見下す大空すらも落としてやるという【渴望】の焰。その視線を今一身に受けている重勝は幸斗が発する果てしない威圧感に圧されて一歩後ろに右脚を下げてしまう。

「さいのうがないだけでなにもできないのがくやしい!さいのうがあるやつらしかどりよくをみとめられないのがくやしい!ちからがなくてひねりつぶされるのがくやしい!がんばるのをわらわれるのがくやしい!あきらめろといわれるのがくやしい!!たにんにまけるのがくやしい!!よわいままのオレがくやしい!!くやしいおもいをするのがくやしいっ!!」

「……お前……」

——なんて眼をしやがるんだ、コイツツ!?一見すると無様な泣きつ面だが、その眼の奥はチカラへの渴望と絶対に上から見下す奴等を自身の手で引きずり下ろしてやる

という野心、そして何よりも運命なんかには屈してやるもんかという底知れない反逆の意志が渦巻いてやがる・・・。

こんな眼をする奴は初めて見たと重勝は内心驚愕する。そしてゆらりと立ち上がった幸斗は強さへの渴望の焰を秘めた眼で重圧に食い縛って耐えている重勝の眼を強く睨みつける。

「だからシゲ、たのむ！オレをつよくしてくれっ!!オレはぜったいにつよくなって、どんなチカラやさいのうをもったやつにも・・・きめられたうんぬいにだってまけないさいきょうのようへいに——

——「うんめいをくつがえすブレイザー」につ!!オレはなってやるっ!!!」

これが全ての才能から見捨てられた無才少年真田幸斗と、幼くして生まれ持った才能で人間の全てが決められる魔導騎士世界を下らなく思っていた天才少年風間重勝の出会いであつた。

この時より風間重勝の見る世界は変わった、真田幸斗という男はこの下らない世界を変えてくれるかもしれないと心の底から感じたのだ。

ハッキリ言つてその根拠は無い、柄にもなく直感で思つた。しかしコイツに懸けてみ

たい、真田幸斗という男の未来（さき）を視てみたいという感情が溢れ出して止まらな
い。

重勝は幸斗の熱意を受け、その直後に「ある約束」と引き換えに彼の教導役を引き受
ける事を承認する。

『いいぜ、そんなに言うんなら全力全開で鍛えてやるよ・・・ただし約束しろ、何年掛かっ
てもいい、一生の内に・・・真田幸斗の人生の内に一回、風間重勝（おれ）を倒してみ
ろ！最強になるだなんて大口叩いたんだ、それぐらいやつてもらわねーとカツコ悪い
ぜ、お前』

『ああ、やくそくするぜ！かならずいつかシゲをたおせるくらいにつよくなってみせる
！そしていつかはだんちようにもかって・・・「うちゅうさいきよう」のせんしになって
やるぜ!!』

そして・・・その約束を果たすのは――

・・・現在（いま）だ!!

『七星剣武祭破軍学園学内代表選抜戦最終戦、第六試合 風間重勝 VS 真田幸斗』

あの第十九戦目の激闘より一日が経過した夕方五時、学内選抜戦最後の戦いの対戦カードを盛大に発表する為に滅多に使われない破軍学園の体育館に全学園生徒が集められ、経った今最終戦の組み合わせの六組全てが壇上に仮設置されたモニターにバアッと表示された。

「マジかって・・・リユウだ・・・」

「・・・悪夢だわ、この学園終わったわね・・・」

周りの生徒達がモニターの一番上の組み合わせに注目して動揺の声が体育館内を包む中、モニターの一番下に表示された対戦カードを見た烈と涼花が絶望に近い青ざめた表情をして呟いている。恐れていた組み合わせが現実になってしまい、途方に暮れているのだ。

幸斗と重勝・・・片や測定不能の最強の攻撃力を誇り、全力を出せば世界を巻き込んだ災厄を引き起こす赤鬼・・・片や大空を重力操作という黒き翼を羽ばたかせて蹂躪し、容赦の無い砲撃と黒い軌跡を描く剣閃をもって相手を圧倒する学園最強の悪魔・・・そして、二人は過去に同じ傭兵団に所属していた仲間であり、教え子と教官という師弟関係・・・。

「オレの選抜戦最後の相手が・・・シゲ?」

五年前に世界最強の剣士【比翼】のエーデルワイスの刃によって一番の憧れであり目標であった【傭兵王】風間星流が倒れた今、幸斗にとって風間重勝という存在はこの世で最も憧れる伐刀者であり尊敬する兄貴分でもある。

【紅蓮の皇女】ステラ・ヴァーミリオン、【城砕き(デストロイヤー)】砕城雷、【深海の魔女(ローレライ)】黒鉄珠雫、【空間土竜(デイメンシヨナルモール)】如月烈・・・七星剣武祭代表候補に名を連ねる猛者達をその天地粉碎級の埒外な攻撃力と絶対に諦め

ない不屈の心をもって次々と撃破して来た幸斗も、重勝には今まで生きてきただけの一度も勝利した事がない、奴は間違いなくこの学内選抜戦で最強の学生騎士だ。

「・・・へ・・・へ・・・へ・・・」

そんな男が七星剣武祭の舞台に立つ為に越えなければならぬ最後の壁となった事を実感すると幸斗は震えだした・・・校内序列一位にして過去に一度も勝った事の無い最強の相手と試合をする事に怖気づいたのかと思われたが――

「最高じゃねえか・・・」

そんな事は全く無かった。この震えは武者震いだ、自分の憧れる最高の伐刀者と五年振りに本気で戦える、傭兵時代から今まで自分を鍛えてくれた教官を超えるチャンスがようやく巡って来たという喜びが身体の底から沸き上がってきて仕方がないのだ。

「伊達や一輝と約束した七星剣武祭の舞台に上がる道への最後の壁に、これ以上相応しい相手は他に居ねえ」

その顔に浮かぶのは無論、空の上から見下ろす奴を引きずり下ろしてやろうという不敵の笑みであつた・・・幸斗は自分に向けられている気配を感じて体育館内の左端の上には架けられている通路の方を見上げる。その視線の先には長身瘦躯の黒髪の少年が両腕を組んで立つており、挑発するような不敵な笑みをして幸斗を見下ろしていた。

『来いよ幸斗、この俺を倒してみろよ！』

その黒き瞳はそう言っているように見え、その挑発に乗った幸斗は更に挑発し返すような不敵の笑みをしてその黒髪の少年の視線に合わせ、左拳をその少年に向けて突き上げ、心の中で高らかに言い放つ!

——勝負だシゲ!今こそオレはテメエに勝つてやる、覚悟しておけよっ!!

その宣戦布告が伝わったのか、重勝は口の端を吊り上げていた・・・学内選抜戦最終戦は五日後、それは間違いなくこれまでの試合で最大の戦いとなるだろう。果たして七星剣武祭の舞台上に上がる破軍学園の代表六名は誰になるのか?そして幸斗と重勝の師弟対決の行方は!?

規格外の新人（ルーキー）である幸斗と学園の裏切り者でありながらも最強の校内序列第一位である重勝という学園崩壊必死の対戦カードは学園の生徒達の注目を大いに集めたのだが、一番注目を集めている対戦カードはそれではなく、モニターの一番上に表示されている組み合わせであった。

『――最終戦、第一試合 東堂刀華 VS 黒鉄一輝』

破軍学園の生徒会長であり昨年の七星剣武祭ベスト4という実績を持つ学園の英雄とFランクという前代未聞の劣等生でありながら達人級の剣技と照魔鏡の如く全てを見通す洞察眼をもつてここまで選抜戦を勝ち抜いて来た脅威のダークホースの少年の対戦・・・先日のスキヤンダルの件もあり、この対戦カードは生徒達の期待を大いに沸き上がらせていた。

「おい見たかよ!?あの東堂会長と落第騎士が試合するんだってよ!」

「マジかよ!?!超面白そうじゃんこの試合!」

「【雷切】と【無冠の剣王（アナザーワン）】のどつちが強いのかというのは前からネット内のスレッドで議題に上げられていたし、これは見物だわ!」

「ねえ、どつちが勝つと思う?」

「そりゃあやつぱり会長だろ?あの人の雷切は最強無敵だぜ!この前の試合で【月花の

錬金術師」に突破されたように見えただけ、結局その後には奴は降参しているし、実質無敗には違いないからな!」

「確かに東堂会長には勝つてほしいけれど相手はあの黒鉄だ、ひよつとしたら奴なら雷切を攻略できるかもしれないぞ?」

「お前それ本気で言ってるの? 幾ら落第騎士が予想外に強いと言っても所詮は魔力量平均以下の落ちこぼれだろ。そんな落第騎士如きが無敵の雷切を攻略できるわけないじゃん!」

「そりゃそうだな・・・」

「結局黒鉄のような落ちこぼれや俺達のような凡人がどんなに頑張っても英雄になるような天才には絶対に敵わないと決まってるんだよなあ、努力なんて時間の無駄無駄! 人生テキトーが一番だってーの!」

「ああ、それが運命って奴だしな!」

「ホントウゼエよな!・・・まっ、そんな選ばれた天才が大活躍してくれるおかげでオレ達は楽できるんだけどな♪」

「将来安泰! 魔導騎士になつて安全な後方に居るだけで高収入! 大して苦労しないでウハウハ! 本当に天才様々だな♪」

「違いねー!」

「「「「アハハハハハハハハッ!!」」」」」

体育館の角で屯っている素行の悪そうな生徒達が下品な笑い声を上げ、それを近くで耳にしていた三つ編み眼鏡の少女——東堂刀華は気分を悪くしたのか、相当辛そうに俯いて立っていた。

「私の対戦相手は黒鉄さんか・・・」

彼女が吐露した重い眩きが押し掛かる不安の大きさを物語っていた。【落第騎士】黒鉄一輝・・・黒鉄という銘家に生まれながら平均の十分の一の魔力量しか持つて生まれず、その所為で実家の人間からも学園の人間からも出来損ないとして蔑まされてきた少年。そのあまりにも劣悪な条件でありながらも自分は強い騎士になれると証明する為に例え他者にどんなに侮蔑されようとひたすら高みを目指し続け、【無冠の剣王】という異名で呼ばれるまでの優秀な伐刀者となった。それは並の精神でできる事では無いだろう。刀華の脳裏に実家の策略によって捕まった後輩の少年の堂々とした立ち姿が浮かび上がる。

——あの男の子は無実の罪を着せられて勾留されている今でも自分に降りかかる理不尽と戦い続けている・・・辛い現実から決して逃げ出さず、自分の願う理想を叶える為に運命に抗い続けているんだ・・・それに比べて今の私は・・・。

【雷切】東堂刀華の双肩には学園の生徒達や【若葉の家】の子供達の期待と憧れ、そして

破軍学園の英雄としての責任が掛かっている。彼女はその重みを誇りに思っているし、それを背負って成し遂げる事が彼女の生き甲斐であり願いでもある・・・だが今は逆にその背負った多くの想いが凄まじく苦痛に感じてしまつて仕方がなく、それが彼女の心に大きな不安を抱かせていた。

『——第三者の為に尽くすのは結構だがそれで傷ついて死んでそいつ等を悲しませたら本末転倒だろ?・・・【若葉の家】だか何だか知らねーけど背負った想いの重みで潰れちまつたら意味・・・ねーだろ・・・俺、何か間違つた事言つたか?』

『「もう少し魔力があれば勝つていた」とか「持つて生まれた才能に助けられたわね」とか見苦しい言い訳をするつもりはないわ、全部わたしが戦術家としてド三流だったのが悪いの・・・じゃ、七星剣武祭の代表入り目指して頑張つてね』

『——アンタは【責任という理性】で戦い、理性で相手を倒そうとしてやがる、そんなの剣の刃を鞘に収めたままなのと一緒だ、そんなんじゃあ地を這う敵は叩き潰せても気が遠くなる程遠い空には届かねえぜ、絶対にな』

自分の想いを代弁するようにぶつかる親友の少女を裏切り者の宿敵の少年が悪魔のようなハイライトの消えた冷たい眼で空から見下ろして言った言葉、自分と限界ギリギリの死闘をして無敗だった自分の伝家の宝刀を攻略したにも係わらず魔力切れという理由で降参をした戦術家の少女が言つてきた皮肉、奥多摩の山中の横穴で雨宿りをして

いる時に突き進み続ける意志を秘めた不屈の少年に断言された現実・・・それらが次々と刀華の脳裏をフラッシュバックするように投影され、彼女の不安を増大させて行く。

みんなに期待を寄せられていると思っていたがそれはBランクの天才である自分への面倒事の押し付けだった・・・誰もを夢見る未来へと導く事は高い才能を持つて生まれた自分には不可能だったのか？自分が育った施設の子供達も結局外に出れば世界の理不尽を知って夢を諦めてしまうのだろうか？押し付けられた責任を背負っているだけでは・・・あの最強の宿敵が居る空には届かないのか？・・・。

そんな不安に押し潰させそうになっている刀華とどんな理不尽にも負けずに前を向いて進むあの落第騎士は違う、違い過ぎる。

『真田幸斗君、この前はありがとう。合宿場の河原で君が教えてくれた「突き進み続ける意志」と「自分だけの剣」は僕に大切な夢を思い出させてくれた、騎士の高みを目指す想いを強くしてくれたんだ。だから僕はその想いを胸に理不尽に抗い続け、こうして選抜戦最後の戦いへと臨みを繋ぐ事ができたんだ。あの話を聞いた時、僕は君が「本物の強さを持った騎士」だと感じさせられたよ。どんなに才能に見放されて上手くいかなくてもできるまで物事に立ち向かい続ける不屈の心、周りから多くの挫折を突き付けられても自分の想いを真つ直ぐ曲げない鋼より固い信念、強さを手に入れる為に想像を絶する努力を毎日積み重ねてきたド根性、そして世界が定めた運命をその「運命を砕く剣」を

もって覆し続け常に前へと突き進み続ける意志・・・それらの君の強さと凄さを僕はあの時に感じた。それで思ったんだ・・・僕はそんな凄い君と七星の頂きを懸ける舞台で戦いたいと!!君に負けされたステラと珠雫の仇討ちというわけじゃない、僕は純粹に君と戦って勝ちたいんだ。君と勝負をする事で僕は更なる高みに行く事ができると思っている。僕と君、どっちが上かお互いの剣を交えて白黒ハッキリ付けよう!だから共に七星剣武祭の舞台に行こう、幸斗君!!』

昨日の幸斗と烈の試合の途中で放送室にやって来た黒乃を通して幸斗に伝えられた一輝のメッセージは刀華の耳にもハッキリと残っている。あれは本当に熱烈で希望に満ち溢れ、それに向かって全力で進んで行くという気概が強く伝わってきた。

そんな確固とした意志を持った強い少年と過去の因縁と理想に縛られ続けている弱い自分・・・その事実はまるで黒い霧のような漠然とした形となって刀華の心に纏わり付く・・・そしてそれは彼女に問いかけた。

・・・君のその刃毀れた剣で、彼を倒す事など出来るのか?・・・と・・・。

未来の保証

．．．最終戦の組み合わせが発表された日から一夜が明けて間もない朝、外の電線に留まる雀の囀りが思い悩む少女を夢の世界より呼び戻した。

「ん．．．」

時刻は午前五時、学生寮の自室のベッドにて桃色のブラジャーとショーツのみという人には見せられないであろうはしたない下着姿で横になって眠っていた刀華はカーテンの隙間から射す日の光に当てられてその眼をゆっくりと開き、上半身を起こして眼を片手で擦る。

「朝．．．か．．．」

完全に意識を覚醒させた彼女は実に憂鬱そうに呟いて顔を俯かせた、爽やかな朝だといふのに暗い雰囲気である。

『．．．明後日の朝七時、お前が幸斗と姫ツチと初体面した休憩所．．．そこでお前の答えを聞かせてもらうぜ、【雷切】東堂刀華の思う【何で鳥は空を飛ぶのか?】をな』

今日は重勝と二人きりで腹を割って話し合う約束をした当日だ。あれから刀華は重勝が裏切った真実を話す条件として提示してきた課題の答えを出そうと考えられる限

り思い悩んでみたのだが結局今日まで答えを出す事ができずにいたのだった。

憂鬱になるのも無理はない、ただでさえ昨日最終戦の対戦相手があゝの無冠の剣王（アザール・ワン）に決まり、迷いを抱えたままの自分が彼に勝てるかどうかと不安になっているのに啖呵を切った約束すら守れないかもしれないという体たらくなのだから。

刀華は枕元にある眼鏡ケースを手に取り中からいつも愛用している眼鏡を取り出してそれを掛け、ベッドから降りて立ち上がり、外の光を遮るカーテンをその手で開いてその窓から朝の日差しが降り注ぐ外を眺めた。空を見上げれば先程から囀っていた雀が小さな翼を羽ばたかせて蒼い空へと飛び立つ姿が目映る。

——「何で鳥は空を飛ぶのか？」……そんなの判らないよ、私は鳥じゃないんだし……。

刀華はその場で眉をハの字にして落胆する……彼女の持つ閃理眼（リバースサイト）は生物の行動を予測する事はできても考えまでは読めない、況してや空を飛ぶ鳥の考えだなんて翼を持たない人間である刀華には全く理解する事ができず、彼女は心の中で若干ながら不貞腐れていた。

……しばらくして彼女は自分が今裸に近い下着姿を外に曝している事に気が付き、急に恥ずかしくなって顔を赤らめ、慌てて外から誰も見ていない事を確認するとカーテンを閉め、再び暗くなった自室に振り返った。

「……とりあえず……着替えよう」

制服に着替えて髪をいつもの三つ編みに整えた刀華はまだ約束の時間まで結構時間が余っているので学園の敷地の外に少し散歩に出る事にしたのだった。

「……はあああ、どうしてこんな約束をしちゃったんだろう……」

彼女らしくない重い溜息が悩みの深さを物語っている。別の条件を要求すればよかったです後悔したところで今更約束の撤回などできはしない、生徒会長の意地（プライ

ド)に懸けて学園の裏切り者が出した課題なんかに屈するわけにはいかないのだ。しかし、幾ら外の風に当たって考えたところで課題の答えは出そうにない……。

「……ねえ? 君達は何を考えて空を飛んでいるのかなあ……」

とうとう道端の木の实を食べている鳩に話し掛ける始末だ(汗)、彼女がそうとう参っているのが解る……そして鳩達は刀華の質問を完全に無視して空へと飛び立って行く……虚しいな、「あ……」と声を詰まらせて飛び行く鳩達に手を伸ばしかけて硬直する刀華の姿がなんともシユールだった。

—— ……はあ……こんな意味が解らない事を私に考えさせてあの人に何のメリットがあるんだろう……まさか私を揶揄って意地悪して楽しんでるだけじゃないのかな……?」

早朝にも拘らず真夏の日差しが眩しく降り注ぐ……そんな蒼い空の上であの黒い剣士が思い悩んで無様な醜態を曝す自分の事をニヤニヤと嘲笑しているような錯覚を覚え、刀華は内心居た堪れないイライラした感情が急に沸々と込み上げて来て、後で課題を出した張本人にその真意を問い質し、返答次第では全力全開の雷切をくらわせてやる事を決意した。

そんな事を額に青筋を浮かべて周囲の人間を恐怖で引かせるような笑顔をしながら歩道を歩いていると歩道沿いにある金網フェンス越しに見える公園内の大きな樹の麓

に幼い子供達が集まって騒がしく樹を見上げているのが彼女の視界に入った。何やら不穏な雰囲気だ、ただ樹を観察しているだけにしてはやけにぎわぎわとしている。

「?・・・あの子達、何をやっているんだろう」

刀華はそう呟いて子供達の視線を集めている樹の上部に見える枝の一部を眼鏡越しに凝視する・・・その枝の上には動けなくなっている子猫の姿が見えた。

——もしかしてあの子猫、樹が高過ぎて降りられなくなったの？

刀華が思考を凝らしていると麓にいる子供達の内の一の幼い少年が樹によじ登り始めてしまった。

——って、えっ?!?あの子何をやっているの?まさか、子猫を助けるつもり!?

刀華がその事態に気付いた時には少年は既に子猫がいる枝まで登り着いていた。その枝はあまり太くはなく、幼い子供でも人間の体重でその上に乗ったら折れてしまうかもしれない・・・案の定少年が枝に身を乗せた瞬間、子猫と少年の荷重に枝が耐えきれず、その枝は根からボキッ!と折れてしまう。

「っ?!?危ないっ!!!」

それを見た刀華は条件反射的に魔力を解放し、身体強化された脚力で瞬時にフェンスを跳び越えて公園内に着地、落下する少年と子猫を見据え数十メートルはある樹との距離を一瞬にして詰めてその勢いそのまま跳躍、空中で少年と猫を抱きかかえるように

キャッチしてそのまま地に着地したのだった。

「君、大丈夫!? 怪我は無い?」

「う、うん……」

「にやー!」

「そう、子猫も無事みたいだね。よかった……」

少年と子猫の無事を確認した刀華は安堵して少年と子猫を地面に優しく下ろす。

「もう、どうしてこんな危ない事をしたの? 子猫を助けようとしたのは偉いけれど、今みたいに落ちて怪我をしたら元も子もないんだからね」

「そんなの平気だもん! だってそうじゃないと強い魔導騎士になれないし!」

「……えっ!」

危険な事をした少年を窘めるように注意をする刀華であったが、強がる少年の言った事を不可思議に思い、思わず驚きの声をあげてしまった、何故なら——

——この子からは魔力を全く感じない、完全に非伐刀者の普通の子だ……。

そう、この少年はどこからどう見ても世界の運命に選ばれなかった魔力0の非伐刀者だったからだ。非伐刀者では魔導騎士になるどころかその資格を得る為の日本に七つ存在する魔導騎士専門学校の門を潜る資格すら最初から存在しない、つまりこの子が魔導騎士になれる事など百パーセント有り得ないのだ。

恐らくこの少年は魔導騎士に強い憧れを抱いているのだろう。通常の人間には使う事のできない異能を行使し、奇跡とも言える超常的なチカラで外敵・・・一般的に言えばテロリストのような悪党共から人々を護る魔導騎士は子供達にとつてヒーローのようなものだ・・・いや、実際そういう思想を抱いているのだろう。

——この子、なんて真つ直ぐな眼をしているんだろう。自分が魔導騎士になれる事を少しも疑っていない・・・。

信じれば何にでもなれると心の底から思い込んでいる、幼いが故に己に与えられた才能の程度と世の残酷さを理解していないからだ。

「うっわー、お姉ちゃんすげー!」

「凄いジャンプだったよ、カッコイイー!」

「ねえ!お姉ちゃん魔導騎士なの?か〇はめ波とか撃てる?」

刀華が助けた少年が向けて来る真つ直ぐな眼差しに目を奪われている間に気が付けば樹の麓に居た子供達が一齐に彼女の周りに駆け寄つて来ていた。

「え、ええっ!?!」

いきなりだったので思わず困惑してしまふ刀華、純粹無垢な尊敬の眼差しが彼女に向けて集まっている。

——こ、こういうのは施設の子共達や学園の皆で慣れているつもりだったけれ

ど……。

刀華は穢れを知らない子供達のパワーにダジダジである、すると何と返せば良いかと冷静に言葉を選ぼうとしたところで先程助けた少年が刀華に問いかけて来た。

「ねえお姉ちゃん？お姉ちゃんってあの【雷切】のお姉ちゃんでしょ？テレビで見た事あるよー！」

「あ、うん、えーつと君は……」

「タケシ、おれの名前はタケシだよー！」

元氣よく自己紹介をしてくれたタケシに刀華は馴れたよう身を屈ませ、タケシとの視線の高さを合わせて彼の眼を見つめて微笑んだ。

「うん、タケシ君だね、ちゃんと覚えたよ。それで何かな？」

「あのさあのさーおれ、将来魔導騎士になる為に剣道やっっているんだ！頑張って努力をすればきつと強い魔導騎士になれるよね！」

「え？……あ、うん、そうだね、えくと……」

ここでその質問はしないで欲しかったと刀華は言葉を詰まらせてしまう。周囲を取り囲む子供達もこの事に興味深々のようにであり、多くの期待の眼差しが重くのしかかかってとても言い辛い雰囲気だ。

——どうしよう、ここはこの子の夢を尊重して「もちろん、頑張ればきつとなれる

よ」と返すべきだろうけれど、それは無責任かもしれない。ちゃんと「ごめん、君には魔力が無いから魔導騎士にはなれないよ」と現実を教えてあげるべきだろうか・・・いや、でもそんな事を言ったらこの子達の夢と気持ちを傷付けてしまうかもしれない、どう答えれば・・・。

以前までの彼女ならば子供達の夢を尊重する事を選んで即答していた事だろう、「雷切」東堂刀華の戦う理由はこのような子供達に希望を与えて未来へと導く架け橋となる為である故に子供達の夢を否定して心を傷付ける事を口にするなど彼女の慈愛の心が許さない・・・しかし、彼女は一年前のあの決闘で完敗した時から今まで多くの現実を思い知らされて来た。どんなに理想を追い求めてもそのチカラが無ければ叶わない事も知っている、その現実が破軍学園の生徒達の諦めと墮落、そして格下の者への蔑みという腐敗を触発させているというのが現状だ。なのでこのまま無責任に答えてもこの子達の為にならないかもしれない・・・刀華の内心は揺れるばかりでどちらを選べば良いのか判らず、言葉を詰まらせるばかりであった・・・その時——

「あつ?!?風船が!!」

彼女の周囲に集まっている子供達の内一人の女の子がうつかり手に持っていたガス風船の尾紐を滑らせてしまい、その風船は女の子の声を振り切って蒼い空へと舞い上がってしまった。

「うう・・・うわああああああん!!」

「ちよっ!? 君、いきなり泣き出してどうしたの!？」

「風船があ! あたしの風船がああああっ!!」

突然の事態にその場は騒然となった。刀華は泣き出してしまった少女に駆け寄り、なんとか泣き止まそうと必死に少女をあやすものの、少女は空に昇って行く風船に届かない手を伸ばしたまま一向に泣き続けるだけだ。

——困ったなあ、あの高度だともう私が魔力を全て使って脚力を強化して跳んでも届かないだろうし・・・本当に高いなあ、あの空は・・・。

少女をあやししながら一緒に風船が昇って飛んで行く蒼い空を見上げて刀華は自分の不甲斐無さを痛感して途方に暮れてしまう。

【雷切】と称されたBランク学生騎士で昨年の七星剣武祭ベスト4の成績を収めた極めて優秀な伐刀者である刀華にだって出来ない事は多く存在している。学園の生徒達の期待に応える事はできていてもあの現状では未来へと導く事が出来ているとはとても言い切れないし、彼女の能力の特性上あの蒼い空を飛んで今も昇り続ける風船を取り戻す事だつてできはしないのだ・・・。

——高い・・・高くて遠すぎるよ、あの空は・・・そうか・・・やっぱ無理なものは無理なのかもしれないよね。人は生まれた時から皆同じじゃない、どんなに望

んで追い求めても叶わない事だつてあるんだ……。

空高く昇つて行く風船は雲の下を抜けようとしている、このまま行けば雲に紛れて消えて行く事だろう……それを眺めて刀華は子供達に何と言うかという選択を決したのだつた。

——……やっぱりこの子達にはここで現実を覚えておいた方がいい。残酷だけど、傷付けるかもしれないけれど、この子達には将来私と同じ苦しみを味わつてほしく無いから……だから——

ちやんと言つてあげよう、「君の夢は叶わない」と……慈愛の心という彼女の強さが砕け、理想を捨てて世を知らぬ無垢な少年の夢を否定して現実を認識してもらふ為に彼女は少年と向き合い、重い口を開く。

「……タケシ君……君は魔導騎士になる事は——」

その時、突然空から飄々とした男の声が聴こえて来た。

「ん？東堂？何やってんだ、そんな辛気臭い顔で？」

「……えっ!？」

自分に呼び掛けて来た声に反応して刀華はハッと顔を上げて再び空を見上げる。聴き覚えのある声だ……いや、彼女が聴き間違える訳がない、何故ならこの声の主は――

「風間……さんっ?!？」

彼女の理想を否定した張本人で、彼女の強さを揺るがす元凶、そして本日彼女と話し合いをする約束をした【裏切り者の序列一位（エース・オブ・ビトレイヤー）】、風間重勝その人なのだから。

「何驚いてんだよ？俺が此処に居ちや悪いのか？」

「そ、そうじゃなくて、また学園の許可無く無断で能力を使用して空を！いい加減にして

くださ……い……って?その風船は……」

「ん?……ああ、これか?今雲の中を飛んでいたらいきなり下から上がって来たんだ。コレ、そのガキ共の内の誰かが手放した物だろ?誰のだよ?」

「うう……ん?……ああっ!あたしの風船!!」

突然空から舞い降りた重勝の右手には先程空に昇って行ってしまった風船の尾紐が握られており、刀華の胸で泣き続けていた少女がその先に縛られて浮いている自分の風船を見て一瞬で泣き止み、パアツと笑顔になって地にゆっくりと降りて来る重勝に駆け寄った。

「ほら、もう放すなよ」

「わああ、ありがとうお兄ちゃん!」

地に降り立った重勝が少女に風船を返すと、刀華の周りを囲んでいた子供達も一斉に重勝の周りへと駆け寄って行く。

「すつげええええつ!!今空を飛んでたよ、このお兄さん!」

「カツコイイ!アニメのヒーローみたい!」

「魔導騎士だよね!?!お兄ちゃん魔導騎士だよね!!」

ワイワイガヤガヤ、重勝の周りに駆け寄った子供達は大はしやぎである。まあ当然だろう、空を飛ぶというものは青少年少女達の大きな理想の一つと言ってもいいものだ、男

の子は飛行機のパイロット、女の子はアニメの空飛ぶ魔法少女にそれぞれ憧れを抱いている事も少なくはない筈だ、なので今現実空を飛んでやって来た重勝に子供達が大きな興味を寄せてしまうのは仕方がないのである。

「おいおい、いったい何なんだ？俺は学生だから魔導騎士になってねーし東堂みたいな有名人でもねーんだからそんなに騒ぐなって！てか身体によじ登って来るなよ！髪引つ張んなって!!」

重勝はハイテンションな子供達に揉みくちやにされて鬱陶しそうにしている、流石の破軍最強も好奇心旺盛で無邪気な子供達のパワーには敵わないようだ。その姿を少し離れた所で眺めていた刀華は少し意外そうに苦笑いをしている。

——・・・ちよつと驚いたな、人を躲すのが上手いあの風間さんが子供達の無邪気さに振り回されるなんてね。

彼女の知っている風間重勝という男性は普段から飄々としていて掴みどころが解らなく、いつも人のペースを乱して場を掻き乱し、人の事なんて気にも留めない風のような人という印象であり、この男が他人に対して取り乱す姿など今まで目撃した事なんてなかった為、今日の前でその重勝が子供達に揉みくちやにされて抵抗できないのが意外に思ったのであった。

事実重勝は精神が達観していて基本的に冷静であり何時も心のどこかに余裕を持つ

ている為、滅多な事では動じないのだが、無邪気な子供達のやんちゃさの前にはそれも意味を成さないのかもしれない。子供とは恐ろしいものだ・・・。

「イテテ！分かった！少しだけなら相手をしてやるから離れろって!!」

そしてしばらく散々子供達に遊び道具にされた重勝はとうとう観念した、破軍学園の序列一位（エース）は見知らぬ子供達にまさかの完敗を喫したのであった。（笑）

「つたく、災難な目にあつたぜ・・・それで？お前達は俺に何が聞きたいの？」

「ハイハイ！じゃあおれからね！」

やっとの思いで解放された重勝は周りからキラキラした視線を向けてきている子供達に要求を聞くと真つ先にタケシが元氣よく飛び跳ねながら手を上げた。

「あのさあのさ！おれ魔導騎士目指してんだ！その為に剣道を頑張っているんだけど、頑張り続ければ魔導騎士になれるかな!？」

「っ!!」

タケシの質問はもちろん先程刀華にした質問内容と同じであり、その質問が発せられた瞬間に彼等を眺めていた刀華はこれは不味いと眼を見開いた。

———いけない！人の気持ちよりも事実を優先する風間さんの事だからあの子がそんな質問をしたら!!

刀華は内心焦燥に駆られていた。風間重勝という男は知つての通り現実を見ない理

想主義者に対して容赦の無い客観的な物言いをするリアリストだ。相手がいくら傷付こうとも氣遣いなどせず、これが現実だと言うかのように平気で残酷な事実を突きつけ、霊装を持って刃向かうものなら無慈悲な斬撃と砲撃をもって黙らせるという悪魔のような伐刀者というのが彼に対する刀華の・・・いや、重勝を憎悪する破軍学園の生徒達の大半の見解なのである。

現に重勝は昨年の七星剣武祭を個人的な理由で無断で棄権して学園中の期待を踏み躪り、一月前のカナタとの試合でも彼女の友人に対する想いと高貴なる者の義務（ノブレスオブリージュ）の魂を「とんだロマンティストだな」と一蹴して慈悲の無い禁技指定級の伐刀絶技で重傷の彼女をオーバークイルし、未だに覚めない眠りの世界（実際にはもう目覚めてはいるが、試合で植え付けられたトラウマが発症した為に再び気絶したまま眼を覚ましていないだけである（笑））へと墮として学園中の生徒達から反感を買ったものの、重勝はその事に関して悪びれる事など一つもしていない。

そんな重勝にたかが剣道をやっているだけの魔力ゼロの非伐刀者の少年が「自分は魔導騎士になれるかな？」と聞いたところで即否定するのは目に見えているだろう。

「うーん、お前がなあ・・・」

その予想通り重勝はタケシの突拍子もない質問を聞いてタケシを訝し気な目で視ながら首を傾げている、重勝が即答しないのは恐らくタケシの魔力を探っているからだろ

う。当然刀華が先程感じた通りタケシは魔力が無い非伐刀者だ、その事実を察すれば重勝はタケシの気持ちを気遣う事無く「無理だな」と幼い無垢な少年に容赦無く現実を突きつける事だろう、そうなれば夢に希望を抱くタケシの心は深く傷付いてしまうのは明白だ。

——止めなきや。やっぱり私は子供達の夢を否定する事なんてできないっ！

どんな理由があろうとも子供が悲しむ事などあつてはならない・・・一度捨てそうになつた想いを拾い上げた刀華は重勝の返答で子供達の心が傷つけられるのを阻止する為に足を前に踏み出そうとする。

見れば重勝は考えるのを止め、タケシの無垢な眼を眺めて何かを言おうとしているようだ。もう黙つてられない、刀華は彼等に向かつて一步を踏み出し、待つたの声を掛けたようとしたその時——

「・・・あのさ、お前人に聞く前にさ、お前自身はどう思っているんだ？魔導騎士になりたいとマジで思っているの？」

——・・・えっ!?

刀華は手を伸ばしかけてその場で硬直し、聞こえて来た重勝の発言に耳を疑つたのだつた。タケシが非伐刀者であると知ればリアリストである重勝はタケシの夢を即否定するかと思つていたので、重勝が質問に質問で返してタケシの気持ちを聞いたのが意

外に思つて内心驚いたからだ。

「うん！どんなに痛くても「へっちゃら、全然大丈夫」と思つて頑張ればきつと強くなれるって信じているからさ!!」

黒い剣士の問いかけに答える少年の笑顔は未来への煌きに満ちた星々の様に明るかった……。

——なんて穢れの無い眩しい笑顔なんだろう……施設の子供達だつてあんな笑顔ができる子はいないかもしれない。眩しくてお陽さまのようで……それでいていつまでも輝き続けるような、そんな笑顔……。

驚きで硬直していた手を下ろした刀華は立ち止まつてタケシの笑顔に見とれてしまつていた……先程はあまりにも無情な現実には打ちのめされ続けた為に自らの強さの源泉たる慈愛の心を捨てそうになつた。しかし、それでも捨てられない、あの未来と夢に煌く希望を信じている少年を見るとその笑顔を絶対に消したくはない、そう思つたのだ。

……そして重勝はそんなタケシの眼差しに合わせる様にしやがみ込み。

「……そうか——なら頑張れ。その想いを捨てねー限り、大丈夫な筈だ……まっ、保証はできねーけどな!」

タケシの頭を撫でながら笑みを浮かべてそう余計な事を付け加えて答えたのだつた。

それを聞いてタケシは拗ねた顔をする。

「なんだよそれー!!?」

「だってそうだろ? 何故なら——」

—— 未来の保証ができねーのはどんな奴でも皆同じなんだからよ」

—— つ!!? ……みんな…同じ?」

タケシの文句に対して重勝がそう発言すると、刀華は先程よりも更に耳を疑う程驚愕して眼を見開き、奇妙な眼差しを重勝に向ける。

「世間は〔魔力の保有量はその人間の運命の量に比例する〕なんてテキトーな事を言つてやがるけどよ、んなもんは昔の人間が偏見で決めつけた言い掛かりに過ぎねーぞ。〔Aランクの伐刀者は一人の例外もなく歴史に名前を残す大英雄になる〕そうだけど、今までがそうだっただけでこれからそのAランクの誰かがその例外になるかもしれないねーし、逆に魔力量がカスイ奴や無い奴が今までの大英雄達を超える英雄になるかもしれないねー、結局のところやつてみねーとわからないんだ、未来なんてモノはよー」

タケシの頭から手を離し、立ち上がつて周りに集まつた子供達を見回した重勝は此処に居る全員に向けて魔導騎士世界の価値観を堂々と否定した。「伐刀者の魔力量はその者の運命の量に比例する」、それは今までの歴史が証明しているとこの世界の世間は言うがそれは憶測に過ぎない、何故ならばこの世界の誰も実際に未来を見た訳ではないからだ。この世界の何処かに未来視の異能を持つ伐刀者ぐらいなら存在するかもしれないが、実際にその未来視で見た未来が事象として起こった訳ではないのならばそれも予測に過ぎない。実際に事象として現実に顕れなければどんなに有力な仮説が有つても運命は証明されないのだ。

「だから、みんな叶えたい事があるんなら有りとあらゆる事をやり尽くして必死にそれを目指してみなよ。どんな奴だつてその未来は保証できねーんだ、だったら世間の声を気にして何もしねーより自分の意志に従つてやつてみた方が百倍人生面白いぜ。それ

なのに実際にやりもしねーで世間の価値観で叶えたい未来を否定して運命を決めつける奴等は「とんだロマンティスト」ってやつだからよ」

「っ!?!・・・その言葉は・・・」

重勝の説明を子供達の少し後ろで聞いていた刀華は重勝が発言した「とんだロマンティスト」という言葉に反応をして眼を見開き、驚愕に近い感情が彼女の心を埋め尽くした。この言葉は自分達生徒会の信念や破軍学園の生徒達の期待や侮蔑に対して今まで重勝が散々投げつけて踏み躪ってきた忌むべき言葉だったからだ。

『なんでだよ?!?!なんで大勢の人達の想いを背負った刀華が負けて、何の覚悟も無いお前が勝っているんだ?!?答えろよ風間重勝!!』

『とんだロマンティストだな御祓、別に難しい事じゃねーだろ?ただ単純に俺が東堂より実力が上だったってだけだろうが、大勢の想いを背負っている奴が勝つとは限らねーんだよ』

『ふざけないで下さい!わたくしはともかく刀華ちゃんは背負った想いで潰れたりしません!皆の為に比類無きチカラを発揮する【善意】こそが刀華ちゃんの強さの源泉であり、魂なのですわ!刀華ちゃんを侮辱するのもいい加減にしてください!刀華ちゃんは自分が負けるということがどれ程多くの人間に悲しみを与えることかを知っています!ですから彼女は負けないし折れないのです!刀華ちゃんの事を何も知らない癖に

知った事を言わないでください!!何も背負っていない貴方に刀華ちゃんは絶対に負けたりしません!!無論わたくしも!!」

『……背負う物が無い奴には負けない?……とんだロマンティストだな』

「……もしかして……あの言葉は……全部……決まってもいない未来を勝手にそうなんだって決めつけたから……」

今までに重勝が自分達に「とんだロマンティスト」と蔑んだ場面を思い出して刀華は遂にその真の意味を悟ったのだ。ランク差別も、上との才能の差による諦めも、責任を背負う強さの絶対視も、考えてみれば全て未来を「そうであって欲しい」という憶測だけで勝手に決めつけたものだ。重勝はそれこそが現実を見ない「理想主義者（ロマンティスト）」だと言うのだ。

「風間さん……貴方は……」

重勝は理想を指摘す事を否定していたわけでは無かった。やりもしないで偏見だけで勝手にできない、或いはそうに決まっていると決めつける理想主義者共を否定したのだ。「やり尽くすまで諦めない」、それが風間重勝の絶対的価値観（アイデンティティー）なのだから。

「でもさあ、僕達は火とか水とか電気とか出したりできないぜ。ホントに僕達も頑張れば強くなれるのかよ?」

だが口で自分の価値観を訴えたところで疑問が出るのは当然の事だ。子供達の内の一人の少年が手を上げてそれを口に作る。

「ん？信じられねーか？・・・よしっ！ならこの場に居る全員に面白れーもんを俺が見せてやるよ・・・なあ、東堂！」

「え・・・な、なんですか？」

感傷に浸っていた刀華は急な重勝の呼びかけによつて意識が呼び戻され挙動不審になりながらもその呼びかけに応答する、今まで自分の事を放置していたのにいきなり何だとキョドリながら要件を求めると、当の重勝は口の端を吊り上げて雷切の名を持つ学園の英雄にこう言うのだった——

「お前にも見せてやるよ。人間自分の意志を信じて頑張ればお前の雷切だつて越えられる可能性があるつて事をよ！」

それは刀華の代名詞たる伐刀絶技、彼女の伝家の宝刀【雷切】を魔力無しで超えるという大胆不敵過ぎる宣言であった。果たして重勝はこれから彼女達に何を見せると言うのだろうか・・・。

鳥は何故空を飛ぶのか？

刀華と子供達を連れて重勝がやって来た場所は破軍学園の敷地から少し離れたところにある林、その中央に大きな穴が開いたみたいに見える円形の湖の南側の畔から数メートルに渡って湖の内側に架けられている栈橋付近であった。

「うわあ〜」

「すごい……大きいね〜」

「それにキレイー！宝石箱みたいにキラキラしてるー♪」

水底が視認できる程水が透き通っていて雄大な湖を前にした子供達が感動のあまりはしゃいでいる。その隣で重勝が少し誇らし気に微笑してから足を前に踏み出して栈橋に向かい歩き出した、その左手には一振りの木刀が握られている。

「ふ〜んふん、ふふふ〜ん、ふ〜ん♪」

「……風間さん、こんな場所に連れて来て一体今から私達に何を見せるというんですか？」

「ん？決まってるんだろ？【水切（みずきり）】をやるんだよ」

木刀を左肩に担いで鼻歌を歌いながら栈橋の上を軽やかな足取りで歩く重勝の背中

を刀華は怪訝な目で見つめて気になって仕方がない事を口にする。

それに対して重勝がこれからやると返答した「水切」とは剣や手刀の一振りを水面に振り下ろし、その風圧をもつて水面を両断するという素振りのトレーニング法である。これはスイングの速さと鋭さと振り下ろす角度の精密さが要求され、水が割れる規模を測る事によつてその一振りの威力が明確に表れる、故に剣による一撃の速度と威力を他者に示すのに「水切」はまさに打つて付けと言えるだろう。

「成程、確かにそれなら【雷切】と比較する事が可能でしょうね・・・ですが風間さん、本当に魔力を使わずに雷切を超えるつもりでいるんですか？」

「ああもちろんだ、俺はできない事は言わねー主義なんでな」

「つまらない冗談ですね。言っておきますが私は【雷切】を完成させた当時、水切をやつてその威力を測つた事がありました」

自分の自慢の必殺技である雷切を軽々しく超えられると言う重勝にムツときた刀華は水切で雷切の威力を試した時の事を語り出す。

「雷切は居合いなので水面の上を薙ぎ払うという正規の水切とは若干異なる方法でやらざるを得ませんでした、その時に発生した衝撃波は水面どころか手前の水底まで削り取り、この湖の約三分の一の水を吹き飛ばしています。驕っているつもりはありませんが、幾ら風間さんでも魔力を使わずに私の雷切を超えられるとは到底思えません。これ

を聞いてもまだ超えると言ひ張るんですか？」

「うるせーな、いいから黙って見ていろよ。やってみれば判るんだからよ」

刀華の言う事を鬱陶しそうに跳ね除けながら重勝は棧橋の最端に立ち湖の先を見定める。

「それじゃ——いくぜ……」

肩に担いでいた木刀を正面に翳し切つ先を向こう岸に向けてそう言うとき重勝の飄々とした雰囲気が真剣なものに変わった。夏なのに木枯らしが吹くような錯覚を感じさせて周囲に緊張が走る、夜空のような黒い瞳で湖の先を見据える重勝の背中を刀華が固唾を呑んで見守っており、先程まではしゃいでいた子供達も今は重勝が何をはじめめるのか興味津々にしていてワクワクとその一挙手一投足を見つめている。

——魔力が発せられる感じはしない……本当に素で雷切を超えるつもりでいるみたいですね……。

超えられる筈がない……そう思う刀華であったが、この「裏切り者の序列一位」風間重勝という男はいつだって何をしてかすか判らない人だ。

【無敵のエース】と呼ばれた時代もその英雄ぶりが気に喰わずに突然挑み掛かってきた上級生全員を一分も掛からずに鎮圧してその全員を「罵ってください」と書かれた看板を付けて校舎の屋上に吊るしたり、突然授業をサボったと思ったら学園敷地内にステル

ス能力を使って潜伏していた伐刀者の野盗を見つけ出して叩きのめしヒヨコの着ぐるみを着せて鶏小屋に放り込んで拘束し見世物にするなど、彼のやる事はいつだって予測不能でブツ飛んでいた。

そんな重勝がハツタリを言うだけ言つて結局ハツタリだけであるなんて事は刀華には考えられなくて「もしかしたら」と一瞬脳裏に過ぎつた瞬間・・・沈黙は破られるのだった。

「ふっ——」

そんな掛け声が小さく聴こえて来た瞬間、刀華は時が止まったかのような感覚に襲われた。

—— なっ!!? 木刀を持つている風間さんの左腕が・・・消えた?

今刀華が立っている位置は重勝の真後ろにいる子供達より少し左側である為、木刀を持った重勝の左腕が斜め後ろからギリギリ視認する事ができる。従つて重勝が技を放つ瞬間を認識する事ができ、刀華が目の当たりにしたのは正面の湖に木刀を翳していた筈の重勝の左上腕部から先が突然複数の残像を残して一瞬木刀ごと消滅するという不可解な現象であつた為に彼女は目を丸くして驚愕と困惑を露わにしたのだった。

・・・そして時は動き出す・・・刹那、重勝の目の前の水面が水飛沫を上げて爆砕され、それが奥に道が伸びるように次々と連鎖的に強烈な水飛沫が吹き上がっていく。

「「「おおおおおおおっ!!!」」」

「「「キヤアアアアアアアッ!!!」」」

爆発的に鮮烈な現象に冒険心の強い男の子達が歓喜の声をあげ、吹き荒れる暴風と降り注ぐ水飛沫に晒されて女の子達が悲鳴をあげる。一直線状に伸びる水飛沫は一秒も掛からずにほぼ一瞬で最奥の対岸まで行き届き、激突すると共に天に達する程の高さの水柱が爆発するように聳え立った。

「———《閃光剣（せんこうけん）》・・・なーんてなっ!」

「あ・・・あ・・・」

若干恰好を付けて技名を明かす重勝の後ろで刀華は開いた口が塞がらなく啞然と対岸まで一直線に割れた湖を直視している。それはまるでモーゼが大海を割ったかのような光景であり、水底の水までもが幻想的な水壁となつて左右に分断され、開通した砂利道の大通りが湖の向こう側にまで伸びていたのだから驚愕するのも無理はない。

そして数秒後には空いた穴を埋めるように元の静寂で豊かな湖へと直り、未だに興奮冷めやらぬ子供達は一齐にワイワイと重勝に詰め寄るのだった。

「すっげえええええええっ!!今のどうやったの!？」

「湖の水がパカッと二つに割れちゃったよお!」

「うん!まるで神様みたいだった!!」

「ねえお兄ちゃん、今の本当に魔力を使わなかったの？」
すると重勝は――

「ん？まあな。お前達には言ってもまだ解んねーかもしれないが、今のは剣を振り出す瞬間に一瞬だけ脳のリミッターを解放してその時に出るチカラを全部集中的に振る腕に使つてその一瞬の剣速を極限まで撥ね上げたんだよ」

と若干ニヤけながら説明をするのだが当然子供達は説明の意味が分からなかったらしく、可愛らしく首を傾げた。

「何それー？全然わからないんだけどー！」

「だよな・・・まあ簡単に言うとな」
「火事場のバカチカラで剣を超速く振つた」
「って訳さ。だから今すぐは無理だけど頑張ればお前達もコレができるようになるかもしれないねーぞ？」

「マジ!？」

「ああ。さつきも言つたように保証はできねーけど、努力次第だな」

【努力を頑張れば将来できるかもしれない】という重勝の言葉に「ヤッホウ！」と飛び跳ねて歓喜を露わにする子供達・・・だがこれは並の努力でできる技ではない。

重勝が今放つた【閃光剣】は本来なら彼の重力操作能力の斥力をもつて得物を振るう腕を極限まで高速化する伐刀絶技なのだが、彼は今言つた通りの方法で魔力を使わずし

てそれと全く同じ速度と威力を再現してみせた。

常人や並の伐刀者どころか一流の魔導騎士にすら剣の振りを視認する事が不可能なそれは黒鉄一輝のオリジナル剣技の一つ、第七の秘剣《雷光（らいこう）》に近い一振りなのだが、この一振りは一瞬の全力を振るう腕だけにチカラを集束し、尚且つ脳のリミッターを瞬間的に解放した事で一瞬だけ極限まで跳ね上がった筋力を完全に制御して真つ直ぐ一閃を放つ事により空気を容易く切り裂き雷すらも超越する閃光の剣を實現する。故に【閃光剣】。

—— 凄い・・・剣速そのものは私の雷切の方がほんの少しだけ速いような気がするけれどその差は殆ど無いかもしれないし、威力に至っては間違いなく雷切を超えていると言っている。それに見た感じだと今の技には構えが無い、それはつまり剣さえ手に持っていればどのような体勢からでも今の技を繰り出せるという事・・・もし私と風間さんが試合をして【雷切】と【閃光剣】で真つ向勝負をした場合、ほんの少しでも剣を抜くタイミングが風間さんの振るう砲剣より遅れてしまったら確実に私は・・・負ける。

大はしやぎの子供達に囲まれてそれに軽く対応をする重勝の姿を刀華は後ろで内心戸惑いを覚えながら見つめていた。彼女は重勝の閃光剣の凄まじさを目の当たりにして咄嗟に想像してしまったのだ、自分の雷切が重勝の閃光剣に敗れて自分が重黒の砲剣

に斬り伏せられる場面を……。

——…やっぱり遠いな……私は風間さんを倒す為にこの一年間必死に修練に励み、彼をこの大空から引き摺り下ろす為の新たな伐刀絶技まで編み出して、先日までその背中はもう手の届くところにあるだろうと思っていたけれど——

実際はその差は全然縮まってなどいなかった……それどころか彼の閃光の一振りを目の当たりにして更に差を広げられてしまったとすら思ってしまった……これでは何の為に自分はこの一年間必死に頑張ってきたのか分からない。刀華はそんな悲愴な感情を噛み締めて前を見た。

「よおしっ！超努力して将来絶対に凄い魔導騎士になるぞおおーっ！！」

「あたしはお花屋さん！」

「おれはパイロットになって飛行機で空を自由に飛び回るんだ！」

「「がんばろーっ！おおーっ！！」」

そこには子供達の笑顔がある。みんなが自分の理想とする未来を目指してこの空に羽ばたこうとしている。

「護りたい……どんなに理想を否定されてもやっぱり私は人が安心して自分の道を進めるような未来を造っていきたい！」

それは思わず声に出ていた……これは刀華が心から抱く本心そのものだ。

破軍学園生徒会長〔雷切〕東堂刀華の慈愛の心はこれから未来（さき）も変わる事はないのだろう、それは揺らぎのない強さだ、失つていいものでは断じてない・・・しかし、それだけではこの大空に手が届く事は無いのもまた事実。

「だけどそれだけじゃ駄目なの、遙か彼方の空に届く為には想いもチカラも不十分。私はそれを満たす為の切っ掛けが欲しい、だから——」

刹那、必死に求めるように空に手を伸ばす刀華の眩きを遮るように、湖の周囲の木々に留まっていた鳥達が一斉に音を立てて空へと羽ばたき出した。

色取りどりの無数の鳥達が蒼穹の空に独特な絵画を描き彼方へと翔けて行く。なんと壮観な光景であろうか、将来の自分を妄想して浮かれ跳び回っていた子供達もその美しさに目を奪われて空を見上げていた。

「うおおー！」

「鳥さんがいーっつばいだあ」

「キヤツキヤツ！ 凄いですごくいい!!」

皆幻想的に彩られていく大空に感動している、あの重勝でさえも「へっ！」という笑みを浮かべて飛んで行く鳥達を眺めてしまう程だ。

「おーおー、よく飛ぶな！ あんなに高くまで飛んでアイツ等いったい何を考えているんだろーな？」

額に手の横を当てて飛んで行く鳥達を見上げる重勝が何気なくそう呟いた。すると彼の横で同じように空を見上げていたタケシがなんの疑問も迷いもなくそれに答える。

「きつと空高くまで飛びたいからだよ！」

「ん？なんでそう思うんだよ？」

「だって飛びたいと思わなかつたら飛ばないでしょ？おれだって魔導騎士になりたいからそれを目指して頑張っているんだし」

——…えっ!?

気付けば刀華は重勝とタケシの会話に耳を傾けていた、その会話の内容がおもいつきり重勝が自分に課した課題と同じもので、しかも自分よりもずっと歳下の少年がアツサリとそれに答えていたからだ。

【鳥は飛びたいから空を飛ぶ】・・・タケシが言った答えはあまりにも短絡的で清々しい程単純だが真つ直ぐ過ぎるくらい純粋な回答であった。

「ふーん、【飛びたいから】な・・・へへっ！」

「あ、笑ったなっ！何が可笑しいんだよ!？」

「いや悪りーな、別に馬鹿にして笑った訳じゃねーんだ。ただ、俺のダチと同じ事を言うもんだからつい・・・な」

「……………」

重勝が嘲笑したと勘違いをして頬をプンプンと膨らませて怒るタケシを重勝が両手で押すようなジエスチャーをして宥める姿を眺めて刀華は気が抜けるようにポカンスする。

「へっ！良いじゃねーか、好きだぜそういうの。単純明快で分かり易い、バカつぽいけど素直な気持ちで前面に押し出されていて【空を飛ぶ】という行動理念がハッキリとしているな」

「バカつぽいって言うくうくうよよ〜！」

「ははっ！別に悪い事じゃねーと思うぜ？こういうのは利口ぶって頭を固くして難しく考えるより、バカみたいに自分の思ったままの事を信じた方がいーんだよ。だって――

—— 偏見や常識に当てはめて考えた事を【決めつける】よりも自分の想いを【信じる】方が人つていうやつはチカラを發揮するもんだからな。そういう人間はいろんな意味で強いんだよ」

「・・・あ・・・」

タケシにポカポカと叩かれている重勝が何気なく放った言い草を耳にした瞬間、こんがらがった糸が解けるような感覚が刀華の脳内に齎された。悩みのあまり強張っていた顔が柔らかになり、凝り固まった考えばかりしていた所為で常に寄り固まってしまっていた眉間のシワも消えていく・・・。

—— そうか・・・私、難しく考え過ぎていたんだ・・・。

重勝とタケシから視線を外して再び空を見上げ、刀華はそう思い耽る。

実は幸斗VS烈の試合が行われたあの日の夜、彼女は副会長である泡沫に重勝が課した課題の解答について相談をしたのだが——

『あんな奴が出してきた課題なんてやる必要のないのに、刀華は真面目だなあ・・・。そもそも鳥が空を飛ぶ理由の答えなんて決まっているだろ？鳥はね、飛ばなくちゃいけないんだよ。何故なら彼等は空を飛ぶ事ができる翼を持っている、だから彼等にとって空

を飛ぶ事とは生まれ持った使命なのさ。映画とかで言ってただろ？「大いなるチカラを持つ者には大いなる責任が伴う」ってさ☆、チカラを持つ者からにはそのチカラを使ってやれるべき事をやる、それが「チカラを持つ者が背負うべき責任」ってものだけ☆」

と、どこまでも刀華の持つ「人の想いを背負う強さ」を絶対視してそれに依存している泡沫は「翼を持つているならば飛ばなければならぬ」という道理的な事を言っていた。それは世の中から見れば正しい答えなのかもしれないが、刀華はどうにもそれは自身が思う答えとは少々ズレている気がしてならなかった・・・人の想いと責任を背負う事は当然大切だと思っではいるがそうではないのだ。

——風間さんは私・・・東堂刀華自身が導き出す答えを求めているんだ。だから「責任」なんて言葉で言い訳しちやいけない、「純粋な本当の気持ち」で答えを導き出さなければいけないんだよね・・・今、やつと解ったよ。合宿場の山奥の横穴で真田君が言っていた「本能」・・・「純粋な本能」で相手にぶつかる事の意味が。

『確かに他人のチカラになるってのも会長さんの本心なんだろうよ、だがそれは周りを見て抱いた「理性的な本心」じゃねえか、オレが言っただけのは自分（テメー）の魂の奥底から湧き出る想い・・・「本能で抱いた本心」の事を言っているんだ』

『オレは自分の教官だった男の剥き出しの本心によつて救われたんだ、内に秘めた自分（テメー）の本心をブチ撒けたら相手を傷つけるかもしれねえ、そうじゃなくともそれを

聞いた第三者に失望されるかもしれねえ、けどそんなものにビビッてたんじゃあ遠い空に剣は届かねえぜ：：生徒会長さん、アンタ有るんだろう？その男にぶつきたい本心つてやつが：：【善意】や【責任感】なんて理性からの本心じゃねえ、魂の奥底に眠る【純粹な本心】つてやつがよ』

——そう、確かに私には風間さんに戦いでぶつきたい本当の想いがある、だけどそれは私が彼の前に剣を持って立った時に言うべき事だから：：だから今はそこを目指してただ進もう——

自分の【本能で抱く想い】をもって：：難しく考えて正しいものを決めつける必要はない、あの子供達のように自分の純粹な想いを信じれば良いのだから：：。

【鳥は何故空を飛ぶのか？】：：彼女の答えはもう、決まっていた。

タケシ等子供達と別れを告げ、重勝と刀華は破軍学園の敷地内に戻って来た。

時刻は丁度午前七時、約束の時間だ。二人は約束の場所である林の休憩所の木の下で互いに面と向かい合っていた。

「それじゃあ聞かせてもらうぜ。お前の思う【鳥が空を飛ぶ理由】をよ」

「・・・はい」

重勝が隠している真実を知る為に、刀華は純粹な想いで答え出す。

「私は最初、鳥が空を飛ぶ事は飛ぶ能力を持った鳥の責任だと思っていました・・・ですが責任というならば親鳥は空を飛ぶ事のできない雛鳥を護る義務がある筈です」

それは弱き者を護る事、チカラを持つ者に生じる義務・・・。

「そこで私は【自分がもし親鳥だったら】と考えました。私は・・・雛鳥達が空を飛べるようになるまで彼等を護りたい、そして見届けたいと思いましたが、彼等が巣から飛び出して大空を舞うその瞬間まで・・・」

だが彼女の言う義務とは人の摂理から来る強制ではない、自分自身で決めた成すべき事である。

「だから私はこう思います——鳥は【雛鳥達が巣立って行くその時まで、彼等を上から見守る為】に空を飛ぶのだと！」

自身の豊満な胸の上に右掌を当て、目の前に立つ裏切り者の少年の瞳を正直な意志を秘めた眼で真つ直ぐと見つめて刀華はチカラ強くその答えを伝えきつた。これが【雷切】東堂刀華が導き出した【鳥が空を飛ぶ理由】であった。

「……成程な。それがお前の答えか……」

「はい……」

「ふーん……まっ、お前らしいくていいんじゃないね？」

ズテッ！何を言われるのか内心で身構えていた刀華は重勝のザツクリとした物言いを書いて思わず足を滑らせてその場で横にコケてしまった（汗）。

制服のスカートが捲れて下半身の恥部を包む桃色のショーツを外部に晒したまま彼女はコケた際に落とした眼鏡を手探りで探し、なんとか眼鏡を探し出した彼女はそれを目に掛け直して不愉快そうに立ち上がって重勝にズンズンと詰め寄った。

「な・ん・で・す・か・そ・の・か・る・さ・はああああつ!!？」

「おいおい何怒ってんだよ？」

「今のは普通私の答えに対して真剣に感想を言ったり指摘をするとこですよね!?何が【お前らしくていいんじゃないね?】ですか!!他に何か言う事は!？」

「ねーよ。お前が自分の考えで答えを出したんならどんな内容だろうがよかったんだ、この課題は一種の心理テストのようなものだったからな」

「き、聞いてないですよそんなの!!」

「ん？言つてなかったか？」

「一言も言つてません！やっぱりを私を揶揄つていたんですね!!もう頭にきた！轟け、鳴か——」

「それよりお前、スカートが服の裾に引つ掛かつてパンツが丸見えだぞ、高三にもなつてピンクとか可愛らしいな」

「つて、キヤアアアアアアアアアアッ!!?どこ見ているんですかっ！ふざけるのもいい加減にしてください!!大体貴方は何時も何時も（クドクド）」

「いいからとつととスカート直せよ・・・」

緑生い茂る静寂な林の休憩所が一瞬で騒がしくなった。なんとも締まらない二人なのだろうか、偶然周囲に誰も居なかつたからよかつたものの、もし誰かがこの休憩所で一休みをしていたら大迷惑だつただろう。

「まったく、散々悩んだのがバカらしくなつたじゃない・・・さあ！私は貴方の課した課題にちゃんと答えましたよ！約束です、貴方が隠している事を洗い浚い全て白状してください!!」

悩みに悩まされた課題は終わりだ。捲れ上がったスカートを直した刀華は当然のように課題の報酬である【重勝が隠している事実】についての開示を本人に求める。（頬を朱らめて怒鳴るように言ったのは穿いているシヨーツを見られた事による恥ずかしさが治まりきっていないからである）

「そうだな、約束は約束だし・・・いいぜ、教えてやるよ」

さすがに自分が出した課題に真剣に取り組んで答えた人に対して約束事を破る程重勝は人でなしではない。無論重勝は刀華の要求に応じたのだった。

「まずはそうだな・・・俺が去年の七星剣武祭をサボツた動機でも話すか」

彼がおもむろに語り始めたのは重勝が裏切ったあの日から今まで刀華が一番知りたかったであろう【無敵のエース】の裏切りの真相であった。

「あれは一年の冬休みの時だったな。新しく身に付けた【光翼ノ帝剣（アストラル・ブレイカー）】を完全にモノにする為に極寒の山奥に短期で修行に行こうと北海道に行った際に俺とはある面白い男と出会ったんだ・・・」

——・・・その男の名前は《壹道歩（いちみち あゆむ）》・・・その当時、緑存学園に所属していた俺より学年が一つ上の学生騎士で《雑魚騎士（ザ・ルーザー）》と呼ばれていたEランク伐刀者だ」

空戦騎士の反逆譚（トリーズナリイ）その1

時は一年と約半年前に遡る。

破軍学園一年、風間重勝十五歳（重勝の誕生日は3月15日なので今年度はまだ誕生日を迎えていない）。禁技指定級の伐刀絶技【光翼ノ帝剣】を完成させる為に日本の極寒の地、北海道にやって来ていた彼は――

「うん、博多も嫌いじゃねーが、やっぱラーメンは北海道に限るな」

札幌市のラーメン屋で味噌バターラーメンと餃子を食っていた。

重勝は今極寒の山奥にあるという厳しい環境で修行が可能な場を紹介してもらおう為に自分が破軍学園に入学したのと同時期に北海道の魔導騎士学校【緑存学園】に入学した元傭兵団西風の仲間の一人と待ち合わせをしているのだが・・・その待ち合わせ人は経った今店の入り口の暖簾を潜りズカズカと入店して来てカウンター席に座っている重勝の隣の席に腰を掛けた。

「重勝・・・テメエ俺をこんな真昼間にこんなニク臭え所に呼び出しやがって、何の嫌がらせだコラ」

「ん？ああ、やっと来やがったのか。久しぶりじゃねーか【千夜】」

「ちよっ!? コラッ! 餃子食いながらこっち向くんじゃねえテメエ! ニンニク臭え!!」

再教育プログラムを修了して以来会っていないなかった昔の仲間にも久闊を叙する重勝であつたが、太陽の光とニンニクが大の苦手であるこの褐色肌白髪頭のグラサン野郎は重勝が餃子を食しながら至近距離で話し掛けてきた為に自身の口を手で塞いで煙たがりながら文句を口に出している。

滲み出る不良感漂うこの男は元傭兵団西風〔夜襲部隊〕の《紅い牙（サングエ・ツァンナ）》—— 現在は緑存学園一年Cランク、《夜天の断罪（ナハト・アハト）》の二つ名を持つ学園でも三本の指に入っている実力者、名を《串崎千夜（くしぎき せんや）》という。

「ハハハ、相変わらずだなお前。能力の特性の所為で弱点多いのは知ってるけど、少しは克服するよう努力したらどうなんだ? 昼間引き籠もってばかりだと周りからネクラ呼ばわりされるぜ」

「余計なお世話だタコ! 日中でも戦闘に支障が無えように鍛えてっから問題ねえよ」

「んじやこれも平気だな。俺の驕りだ食え」

「んぎやああああ!? 俺の口の中に餃子放り込むんじやねえ! 口がニンニク臭くなるがあああアアアッ!!」

「プツハハハハ! 駄目じゃねーかよ」

「デメエ覚えてやがれ．．．何時か目に物を見せて．．．うぷ．．．」

千夜はかなり弄られやすい体質のようだ。重勝に不意を突かれて悪戯に嫌いなニンニクがたつぷり詰まった餃子を口の中に放り込まれ、その匂いで苦しみ悶えながら爆笑する重勝を恨めしい目で睨みつけて眼前のカウンター机に突っ伏してしまっている。

「それよりも千夜、お前この前通信で相談した時良い修行場所を知っているって言うってたな？メシ食い終わったら早速案内してくれよ」

ラーメンを食い終わり、千夜がニンニク地獄から生還した後。勘定を済ませた重勝は

不機嫌に不貞腐れる千夜の案内で北海道最高峰の山群——大雪山連峰の一角に存在する氷結洞の入り口にやって来たのであった。

「この洞窟を抜けた先に緑存が管理しているクソ寒くて広い旧自然訓練場がある」

猛烈な吹雪が吹き荒れる中、千夜が心底面倒臭そうな顔をしながら洞窟の入り口を指さして重勝に概要を簡単に説明をする。

「緑存の創設当時に超武闘派だった初代学園長のジジイが学園の生徒共を千尋の谷に突き落として子を育てるライオンに倣って超過酷な自然環境に放り込む為に造ったイカレた訓練施設なんだとよ。旧自然訓練場までの道中には自然環境を利用した罠（トラップ）が大量に仕掛けられていて野生の人喰い狼《オホーツクヴォルフ》の群れなんていう奴等の縄張りなんてものまで有りやがるし、施設に着いても其処は氷点下80度のこの国じゃ有り得ねえ極寒地獄で、あまりに危険な場所である為に現在では緑存の理事長の許可無しには学園関係者でも立ち入る事は許されねえ危険地帯となってやがるんだよ」

「ふーん、幸斗がいい腕試しができるかと喜びそうな施設だな・・・あのさ、今その旧自然訓練場を使っている奴って居るの？」

「冗談、ここはもうほぼ閉鎖されていると言っても過言じゃねえよ。こんなわざわざ自殺しに行くような施設を使う物好きな奴なんて《鋼鉄の荒熊（パンツァーグリズリー）》

の筋肉ダルマ野郎ぐらいなもんだぜ」

重勝の質問に対して馬鹿馬鹿しく呆れるように千夜は両腕を組んで返す。まあ言いたい事は分らなくもない、死ぬ気で鍛練を積むのと身を弁えずに死地に足を踏み入れるのとは大きな違いがある。例外的な猛者は居るようだが大体はそんな危険地帯に足を踏み入れたくはないであろう。

「へっ、そりゃあ都合だ。俺の新伐刀絶技は幸斗の龍殺劍程じゃねーけど規模がでかいからな、できるだけ人は居ねー方が被害を気にしなくて済む」

「施設の使用許可は事前にとっておいてやったぜ、感謝しろよな」

「グラツツエ。じゃあ俺は行くけどよ、お前はこれからどうするんだ？なんだったら一緒に来るか？」

「パスだ。俺は帰って寝る、あばよ」

千夜は重勝の誘いを断って踵を返した。だが別にそれは旧自然訓練場に入れる実力が無いからではない、重勝と同様に元西風の団員である千夜は旧自然訓練場以上に危険な環境に身を置いた経験など何度もある。

「クソツ！何で吹雪いてんのに陽が雲に隠れてねえんだよ！地面に積もった雪に日光が反射して来て身体がジリジリするぜ。何の嫌がらせだこのクソ天気、マジでムカつくぜ！！」

彼が断つた理由は見ての通り気分が最悪なので誘いに乗る気になれないのだ。大雪山連峰の本日の天候は吹雪、それも顔に猛烈な礫が降りかかって来て痛い程の悪天候だ、にも係わらず天の雲は空を覆い尽くしている訳ではなく途切れ途切れに間からお日様が顔を覗かせて来る。嫌いな真昼の太陽がまるで自分を揶揄って楽しんでいるような気がして腹が立っているようであり、千夜は制服のズボンの脇ポケットに両手を突っ込んで悪態を吐きながら去って行くのだった。

「つれねーな、暗い洞窟とか好きだろアイツ？元西風の同期同士、久しぶりに再会したつてのにさ……」

千夜が去って行った方角を見つめてやれやれと右掌を上向きに肩の上に翳す重勝。久々に会った仲間同士だというのに頼み事が終わるや否や、やけにアツサリと去って行ったので少々寂しく思ったのだろう。

「まっ、気乗りしねーってんなら仕方ねーか……よしっ、んじや行くか」

氷結洞の中に足を踏み入れた重勝が最初に目にしたのは視界いっぱいを埋め尽くす無数のクリスタルの輝きであつた。

「こりやあまた想像を裏切つたメルヘンチックな洞窟じゃねーか・・・」

無数の氷柱が下に伸びる天井に、ゴツゴツとした内壁に、凍り付いた道に其処ら中で鎮座して輝くクリスタルのような氷の塊が外から射す光を反射させて行く道を照らす幻想的な光景に重勝は眼を奪われながらも呆れていた。氷獄への一本道と言う割りには予想に反してファンタジーだったからだ。

「まるでロープレのダンジョンだな、人喰い狼よりも氷の精が住んでいそうだぜ」

そう言つて彼は洞窟中で道を照らす無数のクリスタルを見回しながら奥に向かつて歩き出した。この幻想的な景色を見ていると此処が危険地帯に向かう為の道だとは思えなくなるが、油断は禁物だ。

「っ!?!」

最初の曲がり道に足を踏み出した瞬間、危機感知能力と空間認識能力が鋭い重勝は何か嫌な予感を感じ取って後ろに跳び退く。すると重勝が跳び退く直前に居た場所の真上の天井から伸びていた無数の氷柱が根本から離れ、万有引力の法則に従って落下し、凍り付いた道を刺し穿つ。

「自然環境を利用した罠が大量に仕掛けられている・・・ね・・・さすがはイカレた武闘派のジジイが造った訓練施設、やっぱ一筋縄じゃいかねーか」

粉微塵に砕けて身体に降りかかった氷粉を払いながら氷柱に穿たれて凹凸の路面と化した目の前の曲がり道を目の当たりにして苦笑する重勝。そう簡単に通じ抜けられない道ではないと実感し、周囲に気を張り巡らせて何が起こっても冷静に対処できるように警戒しながら氷結洞の奥へと進んで行く。

道中に仕掛けられた様々な罠が道行く重勝を阻んだ。天井に小さく空いた穴から降り積もったらしき雪を踏めば底に氷の剣山が仕掛けられている落とし穴が空き、坂道を上れば道の先から球状の巨大な氷塊が転がって来て、鏡のように前に立つモノを映し出す氷板が迷路のように複雑に立ち並ぶ空間が視界と方向感覚を狂わせて黒き少年を惑そうとする。

「未来（さき）を指し示せ、重黒の砲剣（グラディウス）」

だが彼は傭兵時代【漆黒の剣聖】と恐れられ現在は破軍学園の無敵の序列一位（エー

ス)と称されている伐刀者、この程度の罨など障害になり得ない。異常なまでに鋭い危険察知能力で落とし穴を回避し、転がって来る氷塊を顕現させた霊装を振るって砕き、行く者を惑わす鏡の迷路は砲撃で氷板を纏めて撃ち抜いて進むという反則技を行使して通過して行くのだった。

そうしながら暫く進むと道が途切れ、その先は厚い氷壁で閉ざされていた。

「おいおい、行き止まりか?・・・いや、風を感じるな」

氷壁の向こう側にはまだ道が続いている・・・壁の僅かな隙間から空気が流れ込んで来る感覚でそう察したその時――

『ハア、ハア・・・まだだ!・・・お前等なんかに・・・やられるかよっ!!』

「ん?」

――なんだ?この壁の向こう側からかなり疲労気味の男の声がしたな。しかも聞こえて来た言葉から察するにかなりヤバそうな状況になつてゐてーじゃねーかよ。

目の前の壁の向こう側で誰かが危険な状況に遭つてゐると判断をした重勝は左手に持つ砲剣の切っ先を行く道を塞いでいる氷壁へと向けた。

「ハアアッ!!」

切っ先から重力エネルギーの砲撃が撃ち放たれ分厚い氷壁を撃ち抜いた。強引に道を開通させた重勝はそのままその先の空間へと駆け出して行く。

「……こりやあまた……なかなか面倒な状況になっているな」

彼が足を踏み入れた空間の真下には奈落の闇が広がっていた。今重勝が立っている場所を含む空間の三方端に存在する出入り口から氷の橋が真っ直ぐに伸びており、空間の中央でY字に交わる分岐点となっている。橋の下は底が見えない程深く、もし足を踏み外して落下でもしたら一般の非伐刀者はもちろん飛行能力を有していない伐刀者も無事では済まないだろう。

奈落の闇の上に架かっている氷の橋の幅は狭いわけではないので普通に歩いて通過する分には余程のドジを踏まない限り落ちる事は無い……しかし、この橋の上で戦闘行為をする場合は話は別だ。

「オレは来年の七星剣武祭で優勝して七星剣王になる（予定の）男、【壱道歩】だあつ！お前等みたいな野良犬なんか敵じゃない！纏めて掛かって来いよっ!!」

中央の分岐点の上ではSFアクション映画に登場しそうなレーザーソード型の霊装を手に数匹の白い逆立った体毛が目につく狼に包囲されている小柄な少年が威嚇するように威勢よく自分を包囲する狼達を挑発するように発破をかけていた。

少年——歩は身体中傷だらけで呼吸も激しく乱れており、かなり追い詰められている戦況であるというのは素人の眼にも明らかだ。栗色の髪に氷粉を被り、見ようによつては少女と間違えそうな童顔を疲労で若干歪ませている姿は痛々しく、かなりの長期戦

を演じていた事が窺える。しかも――

――アイツが着ているあの制服……もしかして禄存の生徒じゃねーか？ おいおい千夜のヤロー、テキトーな事言いやがって、【鋼鉄の荒熊】ぐらいいしか此処に來ないんじゃないのかよ……。

歩がコートの下に身に着けている衣服が禄存学園の制服であるという事から重勝は歩が禄存の生徒だという事に気が付いて嘆息する。記憶が正しければ確か千夜は禄存のエース【鋼鉄の荒熊】レベルの実力者でなければ危険地帯に認定されている旧自然訓練場に足を踏み入れる人間はいないと言っていた筈なのだが……。

「そーいや千夜の奴、この氷結洞の道中に【オホーツクヴォルフ】とかいう名前の喰い狼が縄張りを張っているとも言ってやがったな……となるとあの禄存の奴を襲っている白狼共がそのオホーツクヴォルフってわけか」

「ガウウウーッ」

重勝が両腕を組んで冷静に状況を分析していると数匹のオホーツクヴォルフの内の一匹が鋭い牙を剥いて満身創痍の歩に跳び掛かった。

「はあっ！」

それに即座に反応した歩がレーザーソードを一閃、跳び掛かったオホーツクヴォルフはその牙を獲物に突き立てる事もできずに身体を横一文字に両断されて奈落の底の地

獄へと落ちて行つた。

——へえ、なかなかの反応速度じゃねーか。剣筋も悪くねーし、こりやあ助つ人は必要ねーかもな……。

などと心の中で重勝がフラグを立てたところで歩の足下に亀裂が生じる。

「つてゲツ!!?やべっ!!」

それにいち早く気が付いた重勝は身体に掛かる重力を制御する伐刀絶技「零か無限（ゼロ・オア・インフィニティ）」を発動し橋の下に飛び降りた。それと同時に歩を包围するオホーツクヴォルフ達が一斉に歩に襲い掛かつて行き、歩はそれを迎え撃つ態勢に入るものの、気合い入れに脚にチカラを籠めた瞬間亀裂が生じた足下の氷床を踏み抜いてしまい——

「——えっ!!?」

硝子のように無数の破片となって崩れ落ちる氷の破片と共に歩は奈落の闇へと落下して行く。

「う、うわああああああっ!!!」

「よっ……とっ!」

「……アレ?」

突然の悪夢に眼を閉じて悲鳴を上げる歩であったが、その直後に感じた浮遊感に違和

感を覚えて眼を開いて呆けながら見上げると、視界に映ったのは鼻筋に横一本傷痕のあ
る黒髪の少年の顔であった。・・・そう、歩は水橋の下を飛翔する重勝の右腕で脇に抱え
られ、九死に一生を得たのだ。

これが、破軍学園最強の【無敵のエース】風間重勝と祿存学園最弱の【雑魚騎士】壺
道歩の偶然にして必然なる出会いであった。・・・。

空戦騎士の反逆譚（トリーズナリィ）その2

大雪山連峰の水結洞を抜けた先——緑存学園の旧自然訓練場は連峰の中枢、その吹き抜けた広場にある。

吹き抜けの上に広がる空から降り積もる吹雪は地を深い白銀で埋め尽くし、半径約2 km周囲360度が円形に急斜面の反り立つ岩壁に囲われたこの場はまるで山の一部を巨大なアイスクリームの容器で削り貫いたかの様な全体図。

身体を動かす邪魔にならない程度の間隔で広場の至る所に聳え立っている木々の間を縫うように走る川の水温はマイナス100度を下回り、非伐刀者がそこに身を落とせば忽ち身体の体温が奪い尽くされてしまい凍死してしまう事だろう。広場の中央には天の吹き抜けた先まで高々と聳え立っている巨大な蒼岩が存在し、一面の銀世界の中に輝くその神秘的な存在感は此処の象徴として、この極寒地獄に來た猛者達の目を真っ先に惹き付ける程美しい。

「日本じゃ有り得ねー筈の氷点下80度を常に保ち続けている自然訓練場ね……ふーん、成程な。あのデケー《保温石（ほおんせき）》がこの身が凍る程クソ寒い気温を生み出しているカラクリの正体って訳か」

場に到着し、こうして極寒の寒さで冷え切った身体を宿舍小屋の中で温めているという
あらましで、二人はつい先ほど互いの素性を明かして知り合っただが。

「それにしても歩、お前が俺の一ツコ上だっつてのは驚いたぜ・・・」

身長180cmはある長身瘦躯の重勝に対して歩は160cmちよいの華奢な身体
つきで顔付きも女子に間違えそうな程な童顔・・・これで十七歳（歩の誕生日は七月七
日）の高等部二年生男子だというのだから驚きである。

「フツ、そうだとオレは学生騎士としてのお前の先輩だ。敬え、称えろ、敬意を払え」

「で？いったいお前は人喰い狼の群れに襲われてまで何でこんなところに来ようとして
たんだ？」

「シカトツ!？」

重勝は歩のドヤ顔先輩風をサラツと流して彼に何の用があつてこの旧自然訓練場に
来ようとしていたのかを聞いてみた。

「そりゃあお前、訓練場に行く理由なんて決まってるだろ？自主トレしてもつと強くな
る為だよ」

「まあだろーな・・・だけどお前大丈夫か？此処は並の伐刀者の力量だと正直しんどいぞ」
「モーマンタイだ。なんて言つたつてオレは来年の七星剣武祭で優勝して【七星剣王】に
なる（予定）の男だからな！」

「さつき狼共に襲われていた時にもそんな事言っていたな。お前、緑存の代表選手候補なのか？それにしちやあ魔力が・・・」

両腕を組んでいけしやあしやあと大きく出る歩に対して重勝が怪訝を口にする。簡単に保有魔力量を感じて量ってみたところ歩が保有している魔力量は平均の約五分の一・・・ハッキリ言つてギリギリEランクとして扱われる最低値で、もしあと少しでも足りなかつたら伐刀者として論外のFランクが付けられてしまつていたぐらいに少ない。

この時青森の教育施設でまだ再教育プログラムを受けている最中の元教え子が平均の三分の一の魔力量しか保有していないが故に風間重勝という伐刀者は保有する魔力量だけで相手の実力を判断するような三下みたいなマネは決してしないのだが、それと規定は別問題である。基本、日本の各魔導騎士学園が七星剣武祭の代表選手を選抜する方法は「能力値選抜」であり、伐刀者としての能力値・・・あり大抵に言えば「伐刀者ランク」が高い生徒を選ぶ。剣武祭で毎回優勝者を出している名門の武曲学園は例外的に全学園生徒を対象とした「学内選抜戦」を行つて最も優秀な戦績を収めた上位六名を代表選手とする「実戦選抜」を取り入れているようだが、歩が在籍している緑存学園は例外に漏れず基本に做つた「能力値選抜」、正直歩の魔力量の少なさでは代表選手として選抜されるのは到底難しいだろう。不可能と断じてもいいくらいだ。

「あく、分かっている理解してる皆まで言うなって……」

そんな事は承知の上だと左掌で顔面上半部を覆い隠し、項垂れ気味に言いながら歩は重勝に上下させる右手首の動作を見せて「頼むからこれ以上言わないでくれアピール」を出しているのを見ると、どうやら自分が緑存の代表選手に足る能力値を持つていないという事実を歩はしつかりと自覚しているようだが……。

すぐに項垂れた様子を一変し、歩は真剣な面持ちを上げて話を続けた。

「オレの魔力量は緑存の全学生騎士最低のEー判定だ、【生まれ持った魔力量がその人間が持つ運命力】だと浸透しきっている魔導騎士の世界の中でオレという存在は取るに足らない虫ケラ以下、どんなに身の熟しが優れていようが超常的な伐刀者の異能の前には糞にも劣る塵屑同然で、学園の連中はオレの事を【雑魚騎士（ザ・ルーザー）】なんて呼んで寄って集って見下して馬鹿にしてくるし、オレ自身も自分が身の程知らずの出来損ないの落ちこぼれなんだとちゃんと理解しているさ……」

伐刀者としての自分の適性の無さをやりきれない表情で苦く語る歩。身の周りの人間から能力の低さを理由に見下され、嘲諷の視線を集めて揶揄される毎日は非常に難儀で醜悪なものであり、普通の精神ならば冗談ではなく耐え難いものだ。朝起きれば寮の自室の窓を割る石ころが投げ付けられていて、玄関口の表ドアに『ゴミクズが死ねね！』『雑魚騎士が調子付いてんじゃねえカスが！』『低能の癖に夢見てんじゃねえ殺すぞ！』

などなどの罵詈雑言が落書きされているなんて年がら年中の事で、登校すれば教室の自分の席にはイジメの定番である白の献花（葬儀に用いる花）が無造作に放られていたり酷い場合には席の机が無惨に破壊されていたりもする。自主訓練中に流れ弾を装って陰から故意に放つ悪意に満ちた魔弾などで自主訓練を妨害されるのだから日常茶飯事の事だ。

侮られているが故に実戦授業での集団戦形式の模擬戦で集中的に全員から狙われるなんて当たり前で、憂さ晴らしの快楽を得る目的で集団リンチにされるなんて堪ったものではないが、騎士たる者敵が齎す不条理に文句をつけるなどは三流なのでそこは仕方がない。しかし仮にその全員を返り討ちにしたとて、「マグレに決まっているのに雑魚騎士が調子に乗っているよ、馬鹿だなく」と後で皆から陰口を叩かれる。おまけに学園の教師達もその生徒達には何も注意も言及もせず、寧ろ模擬戦に勝った歩に対して「汚い手を使った卑怯者」と何の根拠も確証も無いにも拘らず糾弾して彼に卑怯者のレッテルを貼り、イジメを抑えるどころか更にエスカレートさせる始末だ。

そんな酷い毎日を送っているにも拘らず歩は夢を諦めない、否、諦めたくないのだ。眼の奥に意志の炎を灯し、「だけだな！」と強い口調でその意志と夢を目の前の窓枠に腰を掛けて自分と向き合っている黒い剣士に語り出した。

「オレは何が何でも学園の連中にオレの実力を認めさせて七星剣武祭に出場して、それ

でもって優勝して全日本学生騎士の頂点——【七星剣王】にオレは成る！あの【サムライ・リヨーマ】のような最高の大英雄に成るのがオレの夢であり最終目標なんだ、たかが生まれ持った才能の無きで学園の規定低度に屈してしまつて七星剣王にくらい成れないようじゃ、到底大英雄になんか成れないからな！」

身の程を知らない子供が抱くようなありふれている夢、しかしどんなに残酷な現実を思い知つても決して夢を諦めない不屈の意志・・面と向かつて伝わつて来る愚直過ぎる想いを受けて、重勝は目の前の雑魚騎士に彼よりも持つて生まれた才能が劣る自分の元教え子にして幼い頃から苦楽を共にしてきたダチの姿を重ねていた。

——へえ、コイツなかなかの大口を叩くじゃねーか。自分の無能さを知ろうが運命に食つて掛かる姿勢と途方もない熱を内包した意志の眼・・へつ、まるで幸斗のお馬鹿が増えたみてーだ。

思い出して少し感傷に浸つてしまったのだろうか、思わずつい口端を若干吊り上げてしまふ重勝。どうやら歩の夢とやらに少し興味が湧いたようだ。

「そうか。叶いそうもない、良い夢だな」

「ぐへえっ！もしもし？」

馬鹿にしているのか褒めているのかが判らないような重勝の返しを聞いてその場にズッコケ、歩は茶化されたような困惑顔で重勝を見上げた。真剣な話で張り詰めていた

空気が緩んだのか、立ち上がる歩の先程まで固まっていた表情がいい感じに解れている。

「それはそうとき、何でそんなに夢を叶えたいと思っているんだ？ 話せるんだったら聞かせてくれよ」

【七星剣王】になつて将来大英雄になるといふ歩の夢。伐刀者の才能が他者よりも劣つていて、それが原因で毎度の如く酷い目に遭わされているというのに【それでも】と大口を叩ける彼の【原点】の事が知りたくなつた重勝は聞く。すると歩はよくぞ聞いてくれましたとニイツと笑みを浮かべた。

「へへへ、聞きたいか？ しようがないなあ、特別に教えてやる。耳の穴かっぽじつてよく聴けよ！」

—— すぐに調子よくなる所まで幸斗に似てるなよ……。

「……オレの母さんはとあるボロくて古い孤児院を経営している」

聴いている重勝が即呆れる程調子よく話し始めた歩だったが、自分の母の事を口にするところで波が退いたかのように淡々となる。

「オレは母さんの実の息子だけど、そんな理由で孤児院暮らしで育ち、緑存の寮に入るまでにその身寄りのない子供達と兄弟同然に生活を共にしてきたんだ。木造建築のボロい孤児院だから汚いは床や天井に穴が空くは夏以外は雪が降る所為で毎日毎日クソ

寒い中屋根の雪下ろしをするのがキツかった。貧しいから当然出るメシは質素でさあ、パン屋で貰ってきた食パンの耳を皆でギヤーギヤーと取り合つては母さんによくガミガミと全員で怒られていたんだよな」

眼を瞑つてしみじみと過去に思い耽る歩。貧しい生活は辛かったけれども兄弟同然に絆を育んだ孤児院の子供達と過ごす毎日とはとても充実していた。

「んで母さんは病弱な身体してる癖にえらく元気だったわけでき、オレや孤児院の連中の前では絶対に弱いところは見せない気丈人だった。子供達の面倒を見るのが大好きで身寄りの無い子供がいれば厳しい財政状況を顧みずに即決で孤児院に受け入れてしまふハチャメチャつぷりで、その分仕事の量も苦も無く増やす。時に厳しく、でも常に優しい、子供達の成長を第一に考えて、子供の笑顔を見るのが何よりも生き甲斐という絵に描いたような聖母。そんな母さんの事がオレも孤児院の連中も大好きだったんだ……だけど——」

過去を語っていくうちに歩の気は段々と沈んでいく。少量だが彼の眼元には涙が浮かんでいた、悲し涙だ……。

「——母さんは……死んだんだ。三年前、病弱な身体で無理をし続けたのが原因で心臓を患つてさ、そのままオレ達を残して逝つてしまったよ」

「……悪い、無理に話さなくてもよかつたんだが……」

普段は飄々としていて無神経な重勝だが、これはさすがに気まづくなつたようでフォロ―を入れる。歩は指で眼元に溜まつた涙を拭き取り「気にするな、オレが話したいと思つた事だからな」と気まづそうにしている重勝を氣遣い、氣持ちを切り替えて大英雄になるといふ夢を抱いた原点の核心についてを語りだした。

「母さんは死ぬ間際ですら自分の事よりもオレや孤児院の連中の事ばかりを心配してくれていた」

『ごめんなさい、私の愛しい子供達。これから先の未来、あなた達は辛い出来事にたくさん苦しむかもしれないけれど、前を向いて未来を進んで行けば、きっと素晴らしい将来に辿り着ける筈だから——』

「最後の言葉は今でも記憶にハッキリと焼き付いている」

『——あなた達は、自分の思うがままに、望む幸せの未来を進みなさい』

「あの人はオレ達にとつての大英雄だった、『サムライ・リョーマ』にも負けないくらいだ。あの人が頑張ってくれたおかげでオレは今此処に居るんだから」

亡き母の最期を思い浮かべながら強い目で語る歩。英雄とは偉業を成し遂げた人物に人々によつて与えられる称号である、ならば子供にとつて母親とは自分を立派になるまで暖かく見守り、大きくなるまで育ててくれるという偉業を遂行する英雄と言えよう。母は偉大なのだ。

「元々オレは英雄に憧れていたけれど、母さんの最後の言葉が「大英雄になる」という成し遂げたい夢をオレに抱かせてくれた。まだあの孤児院にいるオレの義兄弟達は自分の将来を不安がっている、母さんの死を受け入れられずに前を向く事を怖がっているんだ、だから実の息子であるこのオレが母さんの言葉を証明するのさ。アイツ等にオレが七星剣武祭を勝ち抜いて「七星剣王」になる瞬間を見せればきつと前を向いて進む切っ掛けになる筈。たとえ持つて生まれた才能が乏しくても前を向いて進めば母さんが言った【望む幸せの未来】を手に入れられる可能性はあるんだってな」

同じ孤児院で育った義兄弟達が未来へと進む為の架け橋となる・・・それが壱道歩の魔導騎士道。

「だけど来年でオレは最上級生の三年、オレが【七星剣王】になるにはもう次の七星剣武祭がラストチャンスなんだ」

故に強くなって学園に認めさせなければならぬ、壱道歩こそが七星の頂に昇り足り得る騎士であると。

——ふーん、そういう事か。実現がほぼ不可能な目標を掲げて無茶無謀をしてんのは死んだ母親の最後の言葉に影響されて、育ての親の死に意気消沈している義兄弟達を元気づける為に、か・・・成程なあ、立派だ。確か破軍（ウチ）にもいたな、要所は異なっているが似たような事を考えているクソ真面目大王が・・・。

まるで毒の底なし沼に行くような、ほぼ達成不可能な夢を何としても叶えたい。想い抱いたそれを確固たるモノとした歩の原点を聞き終えて伐刀者としての能力が乏しい彼が「七星剣王」を志している理由に納得しつつ、重勝は同時に七星の頂を目指す目的の内容に類似点がある、彼曰く「真面目大王」な同級生の事を思い浮かべて人目に気付かれない程度に苦笑っていた。イメージに出てきた彼女が口うるさい説教顔だったので気が参ったのだろう。すぐに気を取り直してフツと肩を竦める。

「そうか、成程な、そりゃあ何としても実現したい夢だわなあ……でもさ、お前それならどうやって碌存の連中にお前の代表入りを認めさせるつもりなんだ？ 仮に日本の全学生騎士を倒せるくらいに強くなったとしても、「雑魚騎士」なんて呼ばれているようなお前の低能さの認識を改めさせるには騎士としてのお前の強さを学園中に知らしめねーといけないだろ？」

練度の高い修行を完遂して実力を身に付けても「能力値選抜」という学園が定めた規定を覆させるくらいに何かができるならば徒労に終わるだけだ。そうならないようにお前はどうする気にいるのかという重勝の問いかけに、歩は辛気臭い表情を一変させてニヤリと笑って言った。

「ああ、それなら問題無い。実はな、二日前にオレは碌存（ウチ）の理事長に直談判してやったんだ。【模擬試合をして代表選手候補に勝てたらオレを次の七星剣武祭に出して

くれ】ってな！」

「お前、頭おかしいんじゃないの……」

いきなりのもんでも発言が飛び出した事でコイツ何やらかして来ているんだと重勝は眼を細めて目の前でドヤ顔をしている雑魚騎士（おバカ）の脳ミソの造りを疑い呆れた。この単純一直線で無鉄砲すぎる行動力、やっぱりコイツはあのおバカ（幸斗）の同類だと心底で面倒に思いながらもその裏で――

――けど、久しぶりに面白そうな奴を見つけたな。

と、歩の真つ直ぐな人間性を垣間見て少しだけ愉快的気分になっていた。その為か西風の元教官としての感性が擦られたようであり、突き進み続ける強靱な意志を持ったあの元教え子に似たこの雑魚騎士の夢への道を少しだけ導いてみたいと重勝は気紛れを起こす。

――しようがねーなあ、俺の修行は後回しにして少しコイツの自主練に付き合ってみるか。

そしてこのおバカに少し興味が湧いたしなど内心で言い訳をして、重勝は歩の自主練を手助けするべく彼にある提案を持ち掛けるのであった。

いったい重勝は何をやるつもりなのか。禄存学園最弱の【雑魚騎士】こと歩は学園が決めた規定を覆させて次の七星剣武祭に出場する代表選手になる事を学園に認めさせ

る事ができるのであろうか・・・。

空戦騎士の反逆譚（トリーズナリイ）その3

宿舎小屋で冷え切った身体を温め、お互いの身の上を話し合った重勝と歩は防寒機能が整った寒冷地専用トレーニングウェアに着替えて再びマイナス80度の極寒地獄へと身を繰り出していった。

「闇を照らせ、《竹光（たけみつ）》！」

天に空いた吹き抜けより降り積もった雪で真っ白な木々の間に立ち、緑存学園最弱の雑魚騎士はその身に内包している僅かな魔力を用いて己の魂をレーザーソードの形に具現化させて顕現する。それをチカラ強く右手に掴み取り20m前方を横切る川を背に全身黒塗りの砲剣型霊装を左手に携えて自分と相對している破軍学園最強の無敵のエースにその光刃の切っ先を向けて不敵に笑ってみせた。

「重勝、本当にいいんだな？オレの自主トレに付き合ってもらって。お前も自分の実力を高める修行の為に遥々関東から此処に来たんだろうに、わざわざその貴重な時間を削ってまでさ！」

魔力は情弱だが代わりにこの極寒地獄を燃焼させる熱き戦意は泉のように溢れ出している。その熱意を真正面から感じ受けている重勝は吹き抜ける風のような涼し気な

笑みを浮かべ、白き地に足を着けて砲剣を正眼に軽く構えた。

「ああ、いいぜ。死んだ母親と義理の家族の為に身の丈を弁えねーで【七星剣王】なんてモンを目指しているお前がどれ程の意志と実力を持っているのか興味があるし、打ち合う相手が居る方が互いの修行の効率はずっといいだろうーしな。だから遠慮しねーで打ち込んで来いよ」

気軽に何処からでも掛かって来いと歩に促している重勝が先程歩の過去話を聞いた後、持ち掛けた彼の自主練を手助けする気紛れの提案とは「一対一の摸擬戦」の誘いであつたのだ。確かにある程度戦闘技能を磨いた伐刀者が手っ取り早く実力を高めるの
に実戦以上に効率的な修行はないだろう、故に重勝はそういう提案をしたのだろう
が……。

「へっ、そうかい……んじゃあお言葉に甘えて遠慮なくっ!!」

あの風間重勝がこんな単純な考えで摸擬戦をやるうと持ち掛けるのだろうか? という疑問はひとまず置いておくとしよう。重勝の都合を確認した歩は嬉しそうに表情を引き締め、闘志を燃え滾らせて白銀の世界の地を蹴り正面に立つ無敵のエースへと向かつて疾駆した。その疾走は歩自身の残像を幾つも生み出し、追従させて来ている。

「たあああっ!」

常人の目に留まらぬ速さをもって接近し、逆袈裟に斬り上げて来た光刃を重勝は右手

で逆手持ちした漆黒のダガーで受け止める、このダガーは重勝が瞬時に放出した重力エネルギーギーで形成したものだ。

——ふーん、足下のクソ深い積雪に脚を捕られる事もねーでこの速度が出せるのか。

「へっ、魔力量がカスカスな割にはなかなか速えじゃねーか。縮地か何かの歩法かそれ？」

「いんや、ただ全速力で突っ走って来ただけだ。大英雄になる為に昔から色々と鍛えてきたからな！」

光刃と黒刃を交え、鏢競り合いの中重勝は低ランクならざる凄まじい速力を出して距離を詰めて来た歩に関心を含んだ笑みを向けて興味本位で訊いてみると、歩は至近距離で不敵な笑みをし返して応答してみせる。それはこの深い積雪が辺り一面を覆い尽くしている足を捕られやすいフィールドを魔力放出による身体強化を全く使用せずに残像が発生する程の速度で接近したという驚きの内容だったので重勝は軽めに眼を見開いた。

「へえ、そうかよ。七星剣王になって大英雄になるって意志は本物ってわけか、剣の筋も悪くねーし」

「うっわ、そんな小つさいダガーなんかでオレの剣を軽々と受け止めておいてよく言う

なあ。その左手に持った黒光りする大剣の霊装で受けると思いきや・・・何なんだそのダガー、もしかしてそれお前の異能か？でもお前、さつきオレを助けた時は飛行していた気がするんだが・・・」

「ん？言っていないかったか？俺の異能は重力操作、コイツは《斥力の護剣（マインゴージュ）》つつう相手の攻撃を斥力で逸らす効力のある護りに特化した重力ダガーを形成する伐刀絶技で、飛行していたのは重力操作の応用なんだが」

「言つてねえよ、今初めて聞いたわ！」

「ハハツ、それは悪かったなっ!!」

「ちよ——うおあああつ?!」

会話で隙を作り歩の足下に弱めの重力磁場を発生させて彼の体勢を崩させた重勝は斥力の護剣をレーザーソードから引き、それによって前のめりになった歩の顔面に左手の砲剣を振り抜いて追い打ちを掛ける。慌てふためいて咄嗟に腕を傾け上げる事で光刃の根元をガードに使い、なんとかギリギリ砲剣の一振りが顔面に殴打されるのを防いだ歩だったが、体勢を崩された事で足下が覚束ていない事と重勝のスイングがあまりにも重かったという要素が重なった事で歩の身体は後方の木々を薙ぎ倒して行くように吹き飛ばされてしまったのだった。

このまま数メートル先に聳え立っている大木に背中から激突してしまうかと思われ

たのだが――

「ぬおおおおあああーっとうっ！」

「お？」

「おおっと!!」

彼は激突寸前に両脚で積雪が積もった地面を思い切り蹴る事で大木の太い幹に沿うように跳び上がった。その行動を見た重勝が興味深そうに声を漏らしている中で歩は上部から伸び出ている太めの枝に左脚の脛（ひかがみ）を器用に引つ掛けて三度程回る事で勢いを殺し、その枝の上に留まるという鮮やかな受け身を披露してみせた。

「ひいい、あつぶねえ危ねえ。重勝がふざけた事言うもんだから、つい意識を乱しちまつたじゃないか。うお”お”、腕がビリビリ言ってるぅ」

――これは驚いたな。集中力には難が視られるけれど、咄嗟の判断力とそれに付随する瞬発力は西風の連中と比べても遜色が少ない程には優れてやがる。何よりもにあの身のこなしの軽さは相当だ、恐らくは自身が持つ魔力のカスさを補う為に今までかなりの鍛練を積んできたんだろう。

「へっ、足下が御留守で危なっかしいのは減点だけど、その対応の速さとリカバリーはなかなかもんだ。意外にやるじゃねーかよ」

鍛え甲斐がありそうだなと教官の感覚でニヤつく重勝。約80m先に立っている大

木の上部の枝の上に片足を乗せて重勝の剛剣を受け止めた為に痙攣した右腕を左手で抑えてその威力を実感している歩に向けて称賛する言葉を呟いた（本人に堂々と聞かせると調子に乗りそうなので距離的に聴こえない音量で）重勝は次なる一手を打つべく伐刀絶技を行使した。

「ならばコイツだ、〔誘導重力球（グラビディシューター）〕」

重勝はまるで相手を試すかのような口調で行使する伐刀絶技名を言い、いつものように三十二の重力エネルギー球を周囲に展開した。それを見た歩が顔を引き攣らせる。

「ゲツ、遠距離射撃系の伐刀絶技か!？」

「ああ、その反応はやっぱお前思った通り遠距離攻撃に耐性が無いな？ なら対応訓練に丁度いいじゃねーか、この猛吹雪で視界が最悪の中、コイツ等を掻い潜って来てみるよ。行くぜ」

「ちよつ、待て「シューーートツ！」 ああクツソツ!!」

本物の戦場に待ったは無いと言わんばかりに重勝はお構いなく周囲に浮かぶ三十二の重力球を操作して一斉に歩に向かわせて行つた。速度は銃弾より遅いが猛烈に降り付ける吹雪に紛れてそれぞれが不規則な軌道を描いて飛翔する、故にただでさえその動きに合わせて対処するのが難しいというのに天候が最悪な所為で視界が悪く、それが余計に対処の難易度を跳ね上がらせる。

「ええい、やってやるよ！こんな弾幕も突破できないで大英雄になんか成れるかっ!!」

少々ヤケクソ気味だが歩は覚悟を決めて枝の上から跳び出して行く。跳躍の際の踏み出しが大木を大きく揺るがす反動となり、葉や枝に積もっていた積雪がドササツ！という音を立てて振るい落とされていくのを後目に吹雪の中に光刃の軌跡を描き、前方より飛来する三発の重力球がその行く手を阻んだ。

「てりやあー……いッ っ!？」

三発纏めてレーザーソードの一閃で薙ぎ払おうとしたものの、三発の重力球は僅かに軌道を逸らし振るわれた光刃をすり抜けるように避け、歩の目を攪乱するように三方向に別れて迂回の軌道を取る。直後歩の意識が分散した隙を突くように左方を通り過ぎようとした別の四発が急激に方向転換をして彼に押し寄せ、命中する直前でそれ等の強襲に気付いた歩は右に跳んで紙一重で緊急回避する事に成功。空回った四発の重力球が雪原を爆砕する。

——意志を持ったみたいに避けたり連携して来たりすると思ったらコレ全部重勝の奴が制御操作してんのかよ!?!カーツ！これだから高ランクはどいつもこいつも——
——っ!?!

「うおおおつとああっ!!」

跳んだ先には吹き荒れる吹雪に紛れた五発の重力球が待ち伏せていた。吹雪で視界

が悪い為に察知し難く、それ等の接近に直前まで気付けなかった歩だったがその反射神経の鋭さをもって咄嗟にレーザーソードを一閃、五発全てを纏めて斬り落とした。

「吹雪ウツゼエエーッ！危うく被爆するところだったじゃ——つてまた来た!？」

視界の悪さをウザがっている内に複数の重力球が周囲から押し寄せるようにしてあらゆる方角から迫って来ていた為に歩の悪態がうんざりの驚きに変化する。このままではジリ貧だ。

——こうなりやあ正面突破だ！速攻で全部掻い潜ってコイツ等を操作している重勝を強襲してやる!!

「疾（シ）——ッ!!」

雪原を蹴り無数の残像を生み出し追従させ、歩は破軍の無敵のエース目指して疾風（かぜ）となった。斜め左上から飛来して来た二発を加速する事で振り切り、進路を塞ぐように正面から突っ込んで来る三発の内一発をレーザーソードで斬り落として残り二発をフットワークを駆使して掻い潜って行く。直後に真上から雨霞の如く降り注いで来た十発の間隙を縫うように駆け抜け、爆撃で舞い上がった雪礫に身を潜めつつ向かって来た三発を最小限の動きで掠めさせ、すぐさまレーザーソードを振るって斬り落として尚、速度を落とさずに驀進。フィールドを捻じ伏せてゆく。

そんな雑魚騎士の怒濤の疾走を目の当たりにして重勝は呆れ半分に舌を巻いていた。

の振り下ろしで硬直の隙を見せている歩の胴に薙ぎ払いを繰り出した。

「アホ、無駄に大振りし過ぎなんだよっ！」

「ぐぬううっ!？」

空中からの打ち下ろしの反動で全身に負担が掛かっている中で無理に振り上げた光刃と猛烈な踏み込みが掛かった漆黒の剛剣が甲高い金属音を轟かせて激突した。両者が繰り出した体勢から考えて当然重勝の一撃が勝り、歩は大きく後ろに仰け反ってしまった。

それでも大英雄となる為に昔から鍛え貫いてきた足捌きを使って続く数回の剣戟を危な気を受けながら体勢を直し、なんとか鏢競り合いにもっていく。

「跳び上がって強襲する選択も悪手だぜ、あのタイミングで発動させた重力の拘束具を躲したのは上等だったけどまだ甘めーよ、【電撃突撃（ブリッツ）戦術】で重要なのは相手に対処の隙を与えない速攻性だ、あそこは跳び上がらずに身を屈めてやり過ぎし、瞬時に曲げた脚をバネにした突攻で俺に霊装の突き放ちをくらわせていれば逆にお前の方が優勢な攻めに転じれていたかもなあっ!!」

「ぐがあっ!？」

相手の押し込みを巧みに引き付けた重勝が歩の腹部に強烈な蹴り込みを叩き込んだ事で歩の全身が【くの字】に曲がり、彼は呻き声を上げて口の中から少量の胃液を吐き

出しながら後方へと直線状に吹っ飛ばされて行く。

——だけどミスしてからの立て直しの早さにはなかなか目を見張るものがあるな。程度を量る為に少しばかり手を抜いたとはいえ崩された不安定な体勢で俺の剣を危なっかしくも凌ぎきったうえに脚の運びで体勢をコントロールして鏢競り合いにもつていくなんつー高度な体技、今現在の学生騎士でできる奴なんて俺が知っている限りだと西風連中を除けば両手の指で数えるぐらいしか居ねーからな。

「よし、なら次はつとー！」

通過した軌道を覆い尽くすように粉雪を猛烈に巻き上げながら吹っ飛んで行く歩を見遣りつつ新たに見つけた彼の利点を頭の中で整理すると重勝は次の行動に移った。

両脚を曲げて勢いよく跳躍し、破軍学園の無敵のエースお得意の伐刀絶技「零か無限（ゼロ・オア・インフィニティ）」を発動、空に舞い上がる。重勝の次なる一手とは即ち【制空権の奪取】だ。

——当たり前だが遠距離攻撃に耐性が無いつー事は奴は飛べねーうえに飛び道具を持っていないという事だ。ならこの空からの爆撃戦術にはどう対応する？

何度も言うが騎士の道を征くにあたり敵や相手が齎してくる非合法性や理不尽性を批難・糾弾する者は五流以下の三下にも他ならない。重勝は空という翼を持たない生き物の手が届く事のない神聖な領域に身を置く事で歩の器を試すつもりなのだ。

「さて、ここまで上がったければアイツは——ッ!!?」

しかしその企みは地上40m程上がったところで歩が吹っ飛んで行つた方を振り向いてみた瞬間に驚愕と共に崩れ去つたのだ。限界まで弦を引き絞つた弓から勢いよく射出された一本の矢の如く地上の白き地に立つ木々の間から一直線に飛来して来る剣士は紛れもなく緑存学園最弱の雑魚騎士、壹道歩だ。レーザーソード型の霊装「竹光」の柄を両手に持ち、漆黒の翼を持つ空に愛された剣士を墜とさんが為に吹雪を貫く矢となつて空を昇り迫る。

——おいおい、幾らなんでも非常識過ぎるだろーが……。

何でこういう人種はどいつもこいつも世の常識を次元の彼方にポイ捨てするようなイカレた行為を平然とやって来るんだよと団内で「子破王」の異名を持つていた自分の元教え子を下方から向かつて来ている歩の姿と重ねると、重勝はその姿を見下ろしながら右掌で額を押さえて心底呆れるように嘆息していた。勇気が心で燃えたなら翼が無くて飛べるんだ!とでも言いたいのかと……。

翼も飛び道具も持つていない人間が通常届く筈がない空へと歩が翔けている理由の説明は実に簡単だ、先程重勝に蹴り飛ばされた先に幹がよく撓る木が立っていたからだ。身体がその木の幹に激突する前に全身を丸めて一回転、両脚で幹を踏みつけて着地すると反動で幹が撓つて湾曲し、空へと飛び上がって行く重勝に狙いを付けると投石器

の要領で空へと弾き飛んで来たという事だ。

・ ・ ・ うん、無茶苦茶だな。重勝はこの人種はこういうものだと言観するように割った。

「まあでも、そうじゃなくつちなやな！器量は合格だつ！」

空中で近距離（クロスレンジ）に突っ込んで来た歩に重勝が砲剣を振るって薙ぐと――

「ええい、さつきから聞いていれば人の戦い方に駄目出ししたり採点するような事を言ってきたり、お前は――」

歩が右から弧を描いて来た砲剣の動きに沿うように左手でその側面に掌打を打ち、そこを支点に片手倒立の要領で全身を持ち上げて瞬時に支点にしている左腕をバネに重勝の後頭上へと跳び上がる。

「――オレの教官かあああああーっ!!?」

天地逆さの体勢で宙を舞い、吹き荒れる猛吹雪を吹き飛ばす程盛大にツツコミを轟かせて光刃を重勝の後ろ頸に振るった。歩はそれで勝利を確信する。

――取った！お前がどれだけ気配察知に優れているかがこの部位への攻撃には瞬時に対処できるものじゃねえだろつ!!

オレの勝ちだとレーザーソードの光刃が弧を描いた瞬間に歩の顔がほくそ笑む。摸

擬戦のルールに則って互いに霊装を幻想形態にしている故に光刃が人の首を斬り付けても首が刎ねられる事は無いだろうが、人体の急所にダメージが入れば幾ら高ランク伐刀者とて一溜りもない筈だ……だがその確信は重勝の後ろ頸に光刃が接触する直前で鳴り響いた鈍い音により霧散する。

「がっ!!?」

同時に歩が振るった光刃が火花を散らすと何かに阻まれて激突したかのように弧の軌道上から弾き出されてしまっていた。反動を受けて仰け反る歩の目に入ってきた光景は小円形に歪んだ黒い空間、それが重勝の後ろ頸を護るように頭れていた。それはまるで《重力の円盾（ラウンドシールド）》……そこでようやく重勝が首だけを動作させて振り向き、横目でまだまだ余裕そうな視線を動揺を見せている歩の顔へと向けて口を開いた。

「うん、いい体捌きだな。決めに行った斬撃もなかなか悪くなかったが、狙った場所が甘めーよ。首の後ろは生物の最大の死角だ、そんな人間なら誰にでも共通する弱点への攻撃を何の対策もしねーで、戦場に身を投じると思ってたんのか?」

「くっ!」

優し気に窘めるような重勝の問いに歩は光刃の振り下ろしで返した。しかしその一振りには苦し紛れの鈍り気が宿ってしまっており、そんな剣などでは歴戦の傭兵であつ

た重勝に届く筈もなく容易に砲剣で受け止められてしまう。その際に歩の精神状態がこの時点で諦めの色を出しているか否かを視るべく重勝は彼の表情を覗き込んでみた。

——ふーん、決定的な一撃が防がれて相当焦ってるみてーだが、どうやらヤケになってるわけじゃねーみたいだな。うんうん、調子に乗りやすいおバカにしては殊勝な精神力してんじやん。俺が視るようになったばかりの頃の幸斗のおバカなんかは摸擬戦どころか軽い立ち合いくらいで二・三回いなしてやっただけでも直ぐにヤケになつて無茶苦茶な剣を振るって来やがったからその度にOHANASHIして……つてアイツの剣はそもそも正常でも無茶苦茶だな、ははは……ん？

そんな事を思い出していると偶然歩の「ある異質」を発見できた。彼は先程速攻跳び掛かりでレーザーソードを叩き付けた際に爆砕した積雪の中に紛れていた小石を右頬に掠らせて小さな切り傷を作っていた筈のだが、その傷がもう既に何故か塞がっていたのだ。

——幾ら掠り傷だつていつても一分経たずに自然に塞がる訳ねーよな……つて事は——

「実像形態での実戦形式でやる七星剣武祭は一瞬の判断ミスが敗北に繋がるんだ、冷静になれよ、でないと将来魔導騎士の資格を取れたとしても大英雄になる前に戦場で死ぬぜ。大方お前の異能は《高速自己治癒（リジエネート）》だろーけど、魔力量のカスさか

というのは冗談。模擬戦自体は重勝の完勝で終わったが、こんなんで歩の自主トレの手助けになったとは当然重勝だって思っていない。

「——」【すぐ調子付く】【油断多過ぎ】【悪天候で視界が悪い中デカイ声を出しまくって相手に自分の位置情報を知らせる愚行】【戦術選択ミス数回】【遠距離攻撃手段皆無】【魔力量がカスイ所為で異能が実戦で役に立たない】【劣勢時に精神乱し過ぎ】で極めつけは【何の戦術的利点（タクティカルアドバンテージ）もない無駄口】・・・さつきやった模擬戦だけで解った欠点だけ挙げてもキリがねー数だな」

「うるへーよ……」

場所は再び旧自然訓練場の宿舎小屋、手に持ったルーズリーフに淡々と口にした内容をさらさらと書き込む重勝が視線を落とした先のベッドの上に丸まっているフトンダ
ンゴムシ(?)にジト目を向けて呆れると不貞腐れた少年の声が返ってくる。

雪塔の下敷きになってギャグマンガの如く目をぐるぐるにして失神した歩を掘り起こし、宿舎小屋のベッドに運んで目を覚ますのを待つ事二時間後、雑魚騎士はフトンダ
ンゴムシにジョブチェンジしていました。

「そんなに落ち込まなくてもいいだろ。確かにアホかって言いたいくらいにお前の欠点
は多いけれど、なにもどうしようもねー程に何の取り柄も視られなかったわけじゃねー
んだし。寧ろお前本当にEランクか?って驚いたぞ」

「でも一発も入れられずにボロ負けした。オレは弱い……」

さりげない重勝のフォローも効果は無く益々丸くなっていくフトンダンゴムシ、雑魚
騎士はメンタルの方も雑魚であったようだ。その醜態に重勝は眉を顰めて嘆息する。

「……はあ。そうやって負けた事を引き摺って不貞腐れてよく七星剣王になる大英雄に
なるだなんて大口を叩けるよなお前。最初の威勢の良さは何処に行つたんだよ?正直
言つて今のお前、すっげーみつともないぜ」

キツイ言い方だがここで優しく励ましたところで歩の為にはならないだろう、強さを

求める戦士にとってそんなのは甘やかしに他ならない、故に重勝は容赦などしない。

「なんだ、だんまりかよ根性無し。ハッキリ言うけどな、お前そんなだから禄存の連中に馬鹿にされたり虐められりしたんじゃねーの？親を言い訳に夢を語るだけ語つて口先だけの奴なんて所詮そんなもんだよ。うっわ、マジ幻滅したわー。雑魚騎士って異名もあながち間違いじゃねーよなあ」

罵倒に罵倒を重ねて腐った歩の精神を奮い立たせるように煽る重勝だが、下手に芝居掛かったワザとらしさが前面に出ている所為でぶつちやけ言うとヘタクソである。こういうのは同じ元西風の仲間であった毒舌担当の戦術家少女の領分であったので不慣れなのだ。

「……」

——「……こんだけ言っても反応しねーのか。はあ……面白そうな奴だと思ったけれど、どうやら俺の見込み違いだったみたいだな……」

暫くヘタクソな罵倒を続けていた重勝だったが、あまりにも歩がフトンダンゴムシをやめる気配がしないので段々と彼に抱いていた興味が薄れつつあった。前に進む意志や気概の無い弱い人間を風間重勝は認めはしない。これ以上は時間の無駄だ、彼にだつて自分の修行があるのだ。

「……ボロ負けした事に気を落としてイジイジやっていたいんならずとそうしている

よ。俺はもう知らね……ん？」

そしてとうとう本格的に付き合いきれなくなり、もう見捨てようかと思つたその時、重勝はベッドの上のフトンダンゴムシがやけに静かでおとなしいなと何やら違和感を感ずる。

——さつきから気になつてたんだが悪たれ口言い出したあたりから妙に【中に】気が感じられねーな……。

その事を不審に思いフトンダンゴムシが鎮座するベッドに近寄つた瞬間——
「どりゃあああつ！」

タイミングを計つたかのようにベッドの下からの奇襲。意表を突くように飛んで来た拳を涼し気に掌で受け止めた重勝はその奇襲者の顔付きを見た事で消えかけていた導く者の意志を再燃させ、そう来ないとなと口許を綻ばせた。

「なーんだ、やればできんじやねーか」

「へっ、馬鹿にするなよな！誰が何と言おうがオレは七星剣王になつて大英雄になつてやるんだ、布団の中で腐つてなんかいられるかよ!!」

どんなに周りから蔑まれて見下されようが、どんなにチカラ不足で高みの空に及ばなからうが絶対に自分が抱いた夢を諦めない、堂々と前に突き進む！その意志を眼の前に映る壹道歩の不敵な笑みから確かに感じ取ると突き出された拳を放し、重勝はその想い

に応えるかのように不敵に口端を吊り上げてならばと訊ねた。

「ふーん、そつか・・・あのさ、お前さっきの摸擬戦で俺に「お前はオレの教官か？」ってツツコミしてたよな？それでさ、お前俺の教導を本格的に受けてみる気ない？」

その唐突な申し出の内容が漠然としていた為に歩は当然「はあ？」と訳が解らずに呆けたが、これは彼にとって渡りに船だろう。

「ん、そりゃあお前みたいな強い伐刀者に戦い方を習わせてもらえるのは正直言つてこつちが頼みたいくらいだけだよ・・・いいのか？お前、自分の修行があるだろうが」「ああ、そんなものは教導しながらでも十分にできるからな。余計な気遣いはいらねーよ」

重勝が冬休みを利用して北海道にやつて来た目的は新しく修得した禁技指定級の伐刀絶技「光翼ノ帝剣（アストラル・ブレイカー）」の制御技術を完全なモノとする鍛練の為だ、つまり技自体は既に完成している故に修行場所さえ見つけてしまえば他の事と時間を割きながらも問題なく修行の目標を達せられるだろう。それよりも今は此処に来て新たに現れた目の前の「突き進む意志」に興味が惹かれてたまらない。

「決まりだな。今日からお前が言っていた緑存の七星剣武祭代表候補との摸擬試合の日までの間、この俺がお前の臨時教官になってやるよ！」

かくして緑存学園最弱の雑魚騎士を未来の大英雄に相応しい戦士に鍛え上げる為、破

軍学園の無敵の序列一位（エース）にして元世界最強クラスの傭兵団の戦術教官風間重勝は興味本位のまま腰を上げたのだった。果たして彼が雑魚騎士にやる教導とは？そしてその道の果てにいったい何が待ち受けているのだろうか・・・。

空戦騎士の反逆譚（トリーズナリイ）その4

歩と模擬戦をして重勝がまず思つたのは、歩は身体能力、特に並外れて俊敏な速力と雪場という足着きが心許ない事この上ない場においてもその速力を遺憾なく発揮する事のできる優れた体勢制御能力が長所に視られ、吹雪に紛れて飛来してくる弾幕の中を怯まずに突つ切れる度胸も有していれば、視界の悪い中を不規則な軌道で襲い来る重力球を次々と見切り避け斬る動体視力の良さとフットワークの身軽さにも見所がある。相手から吹つ飛ばされる程の手痛い攻撃を貰つた際に素早く体勢を立て直して相手に追撃の隙を与えずに攻勢へと転じるリカバリーの早さに至つては天下一品だと素直に称賛できる程に秀逸な体捌きっぷりで、彼には少なからず身体的にEランクから逸脱して有能なステイタスが多々視られた。

これだけ視ると歩が「雑魚騎士」という不名誉な仇名で呼ばれ、緑存学園の生徒達から蔑視されているのが信じられなく思うだろうが、実際に彼は平均の五分の一の魔力量しか有していない最底辺のEランク伐刀者であるが故に長所の倍以上に短所の多さが際立っている。歩が伐刀者として発現させた異能である「高速自己治癒（リジエネー ト）」は彼が有している魔力量の少なさ故に掠り傷を塞ぐのが精一杯である為、実戦では

殆ど役に立たないだろう。それだけでも伐刀者として戦っていくには致命的だというのに、彼はつい頭を抱えたくなる程のお調子者で、少しでも有利な要素があったならすぐに調子に乗って油断を見せてしまう困った気質が視られ、戦闘中に無意味な無駄口を叩いたりする所為で視界の悪い場において敵に自分の現在地をわざわざ教えるような愚行を犯してしまうマヌケであるが故にそれ等の要素が戦闘の足枷となつて相手に付け入る隙をむぎむぎと与えてしまうという弱点もある。

これ等の短所全ては歩が七星の頂きを目指すにあたつての不安要素であるが故に修正しておくべき弱点であるのは確かなのだが、それ等以上に彼には戦いを勝ち抜いて行くのに最も必要不可欠なものが全く足りていなかったのだ。それは――

「それじゃあお前が修得できそうな【必殺技】教えつから、やってみろよ」

ついさつき自分の臨時教導官になつた重勝が最初に何の特訓を施してくれるのかと期待していたら、再び吹雪く訓練場に出て向き合つた彼が言い出してきた特訓内容が色々とスツ飛ばした意外なものだったので歩はキョトンと表情を呆けさせた。

「……え？何、いきなり必殺技!?!マジで!」

「ああ、マジだ。それがどうしたんだ?」

「だつて普通特訓と言つたら……いや、確かに特訓と言つたら超カツコイイ必殺技を修得する為なのは解るけど!でもお前がオレにやってくれるのつてそもそも【戦術教導】

が前提だよな？それって普通最初は戦闘基礎トレーニングとかから入ったりするんじゃないのか？」

こういうのに憧れていそうな性格をしている歩が狼狽えて疑問を返すのも当然だ。基本的に戦いの【戦術教導】とは伐刀者に限らず指導する者に適した訓練を段階を追って行っていくのが当然であり、【必殺技】の特訓なんて奥義めいたものは教導の最終段階でやらせるのが普通なのだ。どんなに堅牢に造られた城塞も土台が脆ければ忽ち崩れ落ちてしまうように、戦士が強くなるにもまずは厳しい特訓にも耐える事のできる丈夫な身体を鍛えておかなければ分不相応な戦闘スキルを修得できたところで特訓の厳しい負担に耐え切れずに身体を壊してしまう事だろう。使用すれば大半は大きな反動が生じるであろう必殺技を最初から教え子に修得させようとするだなんて教官として論外もいところだが……。

「お前の基礎戦闘能力に関しては一さつきは模擬戦で見て基礎トレは必要ないと判断できた。魔力量のカスを補う為に毎日欠かさず基礎トレを常人の何倍以上の量を積み上げて、模擬戦中に見せてくれた並外れた身体能力スキルの数々を、お前は昔から今まで愚直に鍛え抜いてきたんだというのが想像できたぜ。大したもんじゃねーか」

「そ、そうか？ま、まあ自分で言うのも難けどさ、こんな持っている魔力がシヨボイ生まれながらの負け組野郎が【七星剣武祭で学生騎士の頂点【七星剣王】の称号をブン取っ

て、将来大英雄と呼ばれるまでに騎士の高みへと登り詰めてやる！」なんて大口を叩いてやってんだ。そんな奴が基礎トレすらもまともにできないようじゃあ、恥知らずにも程があるだろ」

「へっ、よく解つてんじゃねーか！だからお前に必要なのはAランク相手でも魔力障壁をブチ破つて沈められる【決定打】の開発——つまりは【必殺技】の修得なんだよ」

歩に限つた話ではなく、低ランク伐刀者達は【例外を除いて】皆、己が保有している魔力の少なさ故の火力不足に頭を悩ませている。常識として伐刀者は常に自らの魔力を、外から来る傷害を弾く障壁として放出し全身に纏つて戦闘を行うのであり、相対する者はそれを突破できる攻撃力がなければ彼等に掠り傷一つ負わせる事ができぬまま一方的に蹂躪されてしまう。Cランク以上なら現代兵器の火力も、最高のAランクに至つては核兵器使用による戦略的破壊力すらをも無傷で跳ね除けてしまふだろう。魔導騎士の辞書にパワーバランスという言葉は無いのだ。

故に歩が緑存の代表選手候補を倒して己の実力を皆に認めさせ、七星剣武祭という舞台に上がつて全国の学生騎士の中の猛者達を相手に戦い抜き、その全てを打ち倒して七星の頂に昇り詰める為には、少なくともAランクの魔力障壁をも突破できる超高威力の一撃……即ち【必殺技】、それも【究極の一】とも言うべきものを修得して繰り出せるようになる事が絶対条件なのだ。それに——

「一応もう一度聞いておくけれど、例の緑存の代表選手候補との模擬試合はあと一週間後なんだろう？」

「ああ。緑存（ウチ）の理事長は確かにその日を指定してきた。冬休みの最終日にな……誰と試合するのは当日に直接対峙するまで秘密にされているけれど、オレのような最低ランク伐刀者が学園側に「能力値選抜」という規則を覆させるとなると、学内序列一位の【鋼鉄の荒熊】か、或いは序列二位の……どちらと戦うにしたってオレは絶対に負けられない。根気強く交渉して【負ければ学園からの強制退去】という条件付きでやっと試合の約束をしてもらえたんだから、オレは夢の為にもう後戻りはできないんだ」

「ふーん、自ら背水の陣に飛び込んだのか。無条件でわざわざ学園最弱と代表選手候補の試合をセッティングする学園側の利点（メリット）なんて何所にもねーし、どーも話が目すぎるだろと思っただぜ」

悠長に基礎から叩き込んでいる時間も無ければ、試合で敗北する事すらも許されない。故に【雑魚騎士】は緑存学園の代表選手候補という北海道最強格の学生騎士達を短期間で打ち破れる可能性を編み出さなければ【大英雄になる】という亡き母に誓った夢への道は完全に断たれてしまう。

「わかっただろ歩？一週間っていう少ない期間をフルに使って七星剣武祭出場クラスの

伐刀者を倒せる可能性をより効率良く上げるには「最強の必殺技」を覚える事なんだつてさ」

「そ、そう簡単に言ってくれるけどさ。オレは魔力を平均の五分の一しか持たない最弱のEランク【雑魚騎士】なんだぜ？ただでさえ低ランクは魔力の少ない所為で皆火力不足に頭を悩ませているつてのに、そんなオレが最強の必殺技なんて覚えられるものなのか？」

歩の不安を漏らすように口にした疑問を聴いて重勝は自身の霊装である重黒の砲剣・・・ではなく一振りの木刀を肩に担ぎ河原の側にある大岩の前に移動すると、木刀を肩から下ろして正眼に構えてみせた。

「まっ、【百聞は一見に如かず】つてやつだ。まあ観てろつて・・・」

そう歩を言い包めると呼吸を一度整えて眼前の大岩を透き通すような眼で見据えた。神経を研ぎ澄ませて目標の中心点を黒真珠のような瞳に映して捉え、剣氣を得物の切っ先に集中。我が振るうは母なる蒼き星をも突き貫く光の牙。四の流星が先陣の矛と成りて、星の核への孔を創り、神速の光の牙を孔へと刺し穿ち、宇宙を走る棘と成りて星を貫き砕く。

剣の軌跡は光をも超えた神速。その刹那に走る四の軌跡を道標とし、夢へと繋げる【朧の道】を通す。

これぞ壱道歩という騎士の理を体现する刹那の光！これぞ世界の理（ルール）をも貫き砕く五連星！！

「——ふッッ！！」

カツ！と重勝の眼が見開かれた刹那、突きを放つ体勢に移行すると同時に四の斬閃がそれぞれ弧を描いて彼が瞳に映した大岩の中心点へと伸びて行き、「その全てが全く同じタイミングで差異無く同じ部位に着弾」する。通常なら有り得る筈もない【瞬間同時並列四連斬】によってその【打点】部分の物理法則が歪められ、其処に世にも奇怪な【蒼点】が顕現・・・するとコンマの間も待たずに重勝が其処へと狙い定めた木刀の切っ先は大型弩砲（バリスタ）の如き凄絶な勢いで射出されて行き、まるで飛来してきた遊星が蒼き惑星を貫き砕くかのように切っ先が【蒼点】を穿った。

「え・・・なな、なあああっ!?嘘だろ?あんなデカイ岩が木刀での突きなんかで粉々にッ!!」

瞬く間に木刀の切っ先によって穿ち砕かれた【蒼点】から一瞬で全体に破壊が拡大し、いかにも頑丈で硬そうな大岩が見るも無残に爆散するという、常識的な物理的価値観を根底から覆すような衝撃的光景を目の当たりにして歩は驚愕するあまりに雪上に尻餅を着いてしまった。経った今彼の目の前で漆黒の魔砲劍士が披露した技は明らかに常軌を逸していたにも拘らず、大岩を突き砕いてみせた軟弱そうな木刀に魔力強化を施す

ような素振りなど視る限りに一瞬たりとも無かった。故に歩はそんな魔導騎士世界における・・・否、通常でも常識外過ぎる荒唐無稽で規格外な剣技をやってみせてくれた風間重勝という男の底知れなさに戦慄した。

「奥義・《蒼星穿壺ノ牙（そうせいいうがついちのきば）》ってな・・・へっ！まあ、お前にできそうなのはこれぐらいだろ？」

だというのにこの破軍のエースときたら、教導している相手の気も知らないでいかにも「この程度の技ぐらい覚えるのなんて楽勝だろ？」と言っているかのような余裕が滲み出た笑みを横目で向けてきて、やれやれと木刀を再び肩に担いでいるときたもんだから、この男には苛立ちを通り越して呆れ果てるしかない。

——こんな尋常じゃなく理解不能な剣技をオレに覚えろと？・・・無理だろ、どう考えても！

「ホラ、さっさと立てよ。模擬戦の日まであと一週間しかねーんだから、時間が勿体ねーぞー」

「む、無茶苦茶言ってくるなお前え!?!そんな達人級の技、一週間や其処らでなんかどうやったって——」

「だからお前が期間内に修得できるように俺が手取り足取り指導してやるんだろーが。大英雄になるつつうんなら、これぐらい根気入れてやってみせろよ。それともやつぱり

口だけか？」

「——ああつ、もう！やればいいんだろ？やつてやるよ、クソツタレエエエエエエエツ!!」

こうして、破軍学園最強の【無敵のエース】にして元世界最強クラスの傭兵団西風の戦術教官【漆黒の剣聖】風間重勝指導の下、祿存学園最弱の【雑魚騎士】壱道歩が七星の頂と大英雄を目指すべく、必殺技【蒼星穿壱ノ牙】を修得する為の特訓の日々が始まった……。

「おりやりやりやりやつ！そしてシメツ!!」

『ガツ！ボキィイツ!!』

「い〃い〃い〃つ!?やつば折れた……」

「おいおい、いきなり瞬間同時並行四連斬を成功させようとりきんだつて出来るわけがねーだろ、しかもターゲットの中心点からは全撃外れるしよ……いいか？まずは技の締めにつつ突きまでの流れの型を無意識にでも出来るようにしてから——」

当然最初はコツすら掴めていない為に技の成功は勿論、剣筋の型すらもまともに振れず、狙ったところにも一撃も当てられずに初日は悲惨な内容となった。重勝はそのあまりにも酷い剣筋の型をまずは安定させるように反復練習させてスイングを修正する。

「うおおおりやああああああつ!!」

「肩にチカラ入れ過ぎだおバカ、全然狙ったところに当たってねーぞ。当てられない内は速度よりも振り放った五撃全てを狙いを付けたところに確実に当てられるようにゆっくりと振ってやれよ。その速度で全撃同じところに完璧に当てられるようになったら少しずつ剣速を上げていって——」

二日目は締めめの突きも含めた技で振るい放つ五連斬を確実にターゲットの中心点に命中させられるようにする為に遅い速度からやらせ、成果が出る度に徐々に振るう速度を上げさせる方法で技の命中率を100%確実に打ち込められるように取り計らってみたところ、約70%の確率だが三秒以内なら狙いを付けた部位に五連斬を命中させられるようになったようだ。しかしまだまだ課題は多い。

「はあああつ!!」

『ガガガッガッ!』

「チカラ任せに剣筋を変えて無理矢理切り返そうとするな。円を描くイメージで勢いを殺さず流すように曲げて連撃を繋げる。腕力に頼らず腰と脚を巧みに使って捌いてやるのがコツだぜ。お前の足捌きとバランスは俺が視ても一級品なんだから、自信持つてやれよ、歩」

「おうっ!」

三日目は特に成果は上がらず、重勝がコツを教えて長所を褒めてみたところ歩はみる

みる内に調子が出てきたようで技の修練に増々精力を注いでいった。その甲斐有つて四日目の夜には遂に一秒以内の五連斬全撃命中を成功させる事ができるようになる。

「よしつ、ここまで出来るようになったらあとは集中力とイメージの問題だ。【正眼からの振り下ろし】【逆袈裟を横切る切り上げ】【下ろしてからの水平斬り】【片足を軸に素早く翻り回つてからの袈裟下ろし】この動作を順に繋げる四連斬を生物の動体視力で認識できる限界を超越した速度でターゲットの同じ【打点】に一ミリのズレもなく全て斬りつけて直ぐさま【突き】の構えに剣を引き絞り、技の締めとなる渾身の【突き】を放つて画竜点睛の如く四連斬で斬り付けた【打点】を貫く——つてのが【蒼屋穿壺ノ牙】の手順だが、この必殺技の極意は【連撃】ではなく最初の四連斬を同じ【打点】に【全く同時のタイミング】で斬り付けるつう、通常ではありえねー物理現象を叩き込んでやる事で【事象改変】を引き起こしその空間そのものを脆く歪ませてやり、其処を最後の一撃で貫き砕く事によってその空間ごとターゲットを粉碎する【絶対防御貫通性】にあるんだ」

「つまりアレか？最初の四連斬を同じところに全くの同時に振り入れろつて事なのか？・・・確かに普通じゃありえない攻撃だな。オレが五人に分身できたとしても互いの物理干渉が邪魔をするから同じ部位に全く同時のタイミングで五の斬撃を加えるだなんて絶対に不可能だからな・・・」

「その通り。でも仮にだ、仮にそれが出来るとしたらどういった現象を起こせばいい？ 常識に囚われて考えるな、自分の心象意識の中に入り込んで【瞬間同時並行四連斬】という事象を可能にする自分の姿を創造して現実に顕してみせろ」

「.....」

「それを不可能だと微塵も思ったりしたら絶対に成功はしないぜ。【蒼星穿壺ノ牙】の修得に最も必要な心構えは「不可能」という運命を覆すイメージを現実にできると信じきる意志の強靱さ」だから——」

【同じ【打点】に全くの同じタイミングで複数の物理攻撃を打ち入れる】や【世界そのものすらも理解できない埒外の膂力で剣を振るう】などの【通常では不可能な事象】を現実に生じさせる事で【現実事象の矛盾】が生じ、現実空間に歪みが発生する現象を【事象改変】という。この時は連盟の再教育プログラムを受けている重勝の元教え子である不撓不屈の意志を持った少年は尋常ではない鍛練の積み重ねと傭兵稼業における厳しい実戦の数々を乗り越えてきた結果、その【事象改変】をも容易に可能とする規格外な膂力を手に入れる事ができた。それは彼の親代わりであり重勝の父の父親でもあり尊敬する傭兵団の団長でもある偉大な男の生き様から学んだ【突き進み続ける意志】と、非常に効率的な鍛練と実戦戦術の教導を施した重勝が教えてくれた【日々積み重ねてきた毎日のチカラを信じきる強さ】を大切にし、ただひたすら勝利の未来を自分のチカラで勝

ち取る為に自分の信じる自分を信じて底なし沼しかない不条理な道に脚を何度も捕られても愚直に突き進み続けてきた「強さ」があったから、そのチカラを手に入れる事ができたのだ。

重勝はその不屈の元教え子と同じように魔力量に乏しく生まれながらも大英雄になるという登破不可能な断崖絶壁を自分の意志で登ろうとしている壺道歩という戦士ならば、その自分の元教え子と同じように「事象改変」の技をきつと修得できると見込んでいる。五日目でその技を放つ秘訣と心構えを教授した事で臨時教官として重勝が教えられる事は何もなくなくなった、あとは歩の大英雄になるという夢への渴望と不可能を可能にしてやるという意志の強さに懸かっている。

・・・そして、歩の将来の夢を賭けた運命の模擬戦があと一日後に迫った昼時。

「・・・・・・・・」

重勝が後方で見守る中、歩は毎日のように旧自然訓練場内の河原の前にドンツと鎮座している大岩の前に木刀を正眼に構えて立ち、静寂に身を委ねて己の心象意識の中で今から現実に解き放つ技のイメージを構築する。

まずは己の宇宙（せかい）に水面を構築し、その中心上に自身の姿を模した精神（アストラル）体を置く。

『闇を照らせ、【竹光】』

それが佇む場を中心として水面に静寂な波紋が広がり、右手に己の魂である光剣を顕現して柄を握り締め、静かに光の刃を正眼へと持つていく。

すると目の前に顕れたのはまるで地球儀のような蒼い球体であった。姿形や大ききこそはまさにそれなのだが、この場合は歩の心象意識、歩の宇宙（せかい）なのだ、故に彼にはこの蒼い球体が本物の地球と同等の耐久度を持つている事など容易に理解できた。

——つまりこれを砕くには星を砕ける破壊力でなければ砕く事はできないという事か・・・普通なら無理と思うべきだろうけど——

そう、普通は無理だ。例え運命に愛されたAランクの伐刀者が己の全魔力を用いて超破壊の伐刀絶技を叩きつけたとしても星を破壊する威力を出すなど到底不可能、故に人間という存在の中に星を砕く事ができる者など・・・いや、居る。たった一人だけ、それを可能とするチカラを生まれながらの敗北者という運命を悉く覆して突き進み続けた末に得た不屈の少年が。

——やってやるよ。世界の常識に囚われて不可能だと思つたら成功しないって重勝が言っていたんだ。七星剣王になって周りにオレが大英雄の器なんだって認めさせてやる為にも、母さんが死んで外の世界に出る勇気を失って今絶賛孤児院に引き籠もり中の義弟達に夢を目指す希望を与えてやる為にも、死んだ母さんとの約束を果たす為

も、オレは……目の前に立ち塞がる理不尽な世界をオレの剣でブツ壊してやる！

カッ！と蒼い球体を瞳に映して捉えた眼を見開いた瞬間、水面に浮かぶ波紋は瞬間的に吹き荒れた剣気の暴風によって吹き飛び掻き消され、歩が立つ宇宙に水滴の着水音一つ響く事の無い静謐が齎された。

『万象心理。身（しん）は幻（げん）にして、剣は五を写す鏡——』

その謳い文句が静謐に放たれた刹那、歩の精神体が佇む四方の水面に映し出されている歩の分け身が輪郭を得て浮き上がり、その四体全てがゆつくりと歩の精神体と重なった。

『——されどもその刃の全ては互いに干渉する事能（あた）わず、されど五の斬は重なりて万象を切り裂く——』

そして重なった四体の分け身はそれぞれが異なる剣筋を放つ構えを取り、彼等の主たる精神体もまた締めめの突き放ちを放つ体勢へと、光刃の切っ先を眼前の蒼い球体に差し向けて構えた。

『——これで、五にして一刀、星を穿つ壺の牙なりッ！——いくぞっ!!』

鮮烈な剣気によって水面を爆ぜた瞬間、主である精神体に身を重ねる四体の歩達が一斉に光刃を振るい放つ。

その四の斬閃の全てがコンマ一秒のズレも見せず同時に蒼い球体の中心点を斬り付

